アイドルな彼氏に猫パンチ@

め〜にゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アイドルな彼氏に猫パンチ@

【Ｎコード】
Ｎ８８０１Ｑ

【作者名】
め～にゃん

【あらすじ】
今をときめくイケメン俳優は私の遠い親戚。猫がきっかけで付き合うことになったけど、私は彼より一回りも年上だった。寄り添うだけで充分幸せな、彼と猫と私の恋物語。猫カメラマンだった私が彼専属カメラマンになり、同じ事務所入りしてなぜか期間限定アーティストになっちゃった！彼氏のイケメン親友と三人で、いろんな事に巻き込まれながらも前に進んで行く私。心が疲れた時には猫に癒されながら…。
仕事がやっと落ち着いてきたので、また毎日更新を目指します！け

どお話の進み方は相変わらず、ちびちびです。早く先に進めよ！と思ってる方、ごめんなさい。ワンシーンずつ大事にしたいのです。

＊某サイトでも同日掲載してます。

イケメン俳優は私の年下彼氏！

今どき　年下の彼氏なんて、珍しくもなんともないだろう。
なんせ世の中、右も左も草食男子で溢れかえってる　このご時世。

女の方がグイグイ腕を引っ張って
「ほら、私についておいで！」ぐらいの勢いがなくちゃ、彼氏のひとりもできやしない。

私も３４のこの年まで恋の一つや二つ、三つや四つはしてきたつもりだが、いつも年上男に惚れていた。
同い年や年下男なんて、コドモみたいで対象外。

なのに、なのに。

浅香雪見　３４才、職業フリーカメラマン。
生まれて初めて年下男と付き合う。
それも　何を血迷ったか、一回りも年下の男。

それだけでも充分に私的には恥ずかしくて、デートもコソコソしたいのだが
それとは別に　コソコソしなければならない理由が私たちにはある。

彼氏、斎藤健人２２才。職業どういうわけか、今をときめくアイドル俳優！

なーんで、こんなめんどくさい恋愛　しちゃったんだろ?私。

私がカメラマンになった訳

私が沖縄に　放浪の撮影旅行へ出かけ、
半年ぶりに東京に帰ってきて
２ヶ月ほどたった、去年の６月。

母からの電話で、ちっちゃいばあちゃんが
亡くなったことを知らされた。

ちっちゃいばあちゃんとは、
十年前に亡くなった私のおばあちゃんの一番下の妹で、
私のことを子供の頃から、自分の孫のように可愛がってくれていた。

「えっ！ちぃばあちゃんが？
いつ？いつ亡くなったの？」

「ちょうどあんたが、沖縄から戻る少し前。４月の始めに亡くなったの。」

「どうして？どうしてすぐに教えてくれなかったの！」

そう　母を責めながら、私の目からはポロポロと
涙が溢れては床を濡らした。

「だって、あんたは忙しそうだったから。沖縄にいても、全然連絡よこさなかったし、
こっちに帰ったら帰ったで、家にも顔出さないし。」

「しょうがないでしょ！私だって必死で仕事してるの！
撮影が終わったら、すぐにあっちこっちに写真を売り込んで、出版
にまでこぎつけないと
食べていけないんだから！」

母を責めながら、本当は自分を責めていた。

なにやってんだろ、私…

大学を出てから、取り敢えずは適当なところに就職したが、そこに
は私の居場所は見つけられなかった。

心の片隅に、ずっと昔から住み着いていたもの。
なにかの拍子にぴょんと顔を出す
記憶の中の　温かな風景。

そうだ。
私はきっと、写真を撮りたいんだ。

あの頃の父さんみたいに
ファインダーをのぞいて、笑顔になりたいんだ。

やっと見つけた光に向かって
私は迷わず専門学校に入り直した。

カメラマンになるために、むさぼるように勉強しては
色々なものを被写体に　シャッターを切り続けた。

専門学校を卒業後、中堅出版社に就職。カメラマンのアシスタント
として仕事をするようになってからも、
ずっと答えを探しながら暮らしていた。
私はいったい、何を撮りたくてカメラマンになったのだろう。

私が小学校四年の時に亡くなった父も
また、カメラマンであった。

父は子供が大好きで、
世界中の子供たちの笑顔を撮って歩いては
日本に帰ってきて写真集を出版した。

決して豊かとはいえない服装をしている子供でさえ
瞳はきらきらとお星様のように輝き、
カメラを通して　父の目を力強く射抜いていた。

今でこそ、写真を通して父の想いがわかるのだが、
あの頃　子供だった私には
その写真の中の子供たちに　父を盗られたような気がして、
素直にそれを眺めることができなかった。

だから、父が撮影旅行から戻ると私は
父を独り占めしたくて
写真をいっぱい撮って！と、駄々をこねる。

本当は、やらなければならない仕事が山ほどあっただろうに父は笑顔で、娘のわがままを聞いてくれた。

そして、本当に幸せそうな満面の笑みを浮かべてたくさんのシャッターを切り、
それを簡単な写真集に編集して
私にプレゼントしてくれるのだった。

今は亡き父の笑顔を思いだし
私もそのあとを辿るようにカメラマンに。

そして、やっと撮りたいと思えるものに出会うことができた。
それは　猫。
しかも　野良猫。

昔から我が家には必ず犬がいて、てっきり自分は犬派だと思い込んでいた。

だが　ある日、弟が拾ってきた子猫に
私は心をわしづかみにされる。

なんだろう、この目。
か弱いけれども　きらきら輝く、お星様みたい…

あ！あの時の父の写真に見た
子供たちの瞳と同じ輝きだ！

それから私は　すっかり野良猫に魅了され、猫を撮って歩くために

フリーのカメラマンになって、
日本中を旅して回った。
そして、それだけでは食べていけないので
旅から戻ると、結婚式場のカメラマンのバイトをし、次の旅の資金を稼いだ。

今回の沖縄でも、たくさんのかわいい猫に出会えた。

だが少しだけ、こんな生活に疲れも感じ始めてる。

そうだ。
ちぃばあちゃんちも、家族みんな猫好きだっけ。
私の撮ってきた猫たちで、少しはみんなを慰めてあげられるかな。

そう思い付いて、私は大急ぎで編集作業を再開した。

「もしもし　母さん？私だけど。
お願いがあるの。
私をちぃばあちゃんちに連れて行ってくれないかな。
どうしてもお線香をあげたくて。
ちぃばあちゃんに見てほしいものがあるから…」

そして私は、そこで彼と運命的な再会をしてしまうのだった。

突然の再会

「おばさん、お久しぶりです！」

「まぁ、ゆきちゃん！よく来てくれたわ！
何年ぶりかしら。立派なお嬢さんになっちゃって。」

「もう、うちのおばあちゃんが亡くなってからだから、十年になるかな？
だから、とっくにお嬢さんじゃなくなりました。」

「なに言ってるの。自分でお仕事して食べてるんだから、立派なお嬢さんでしょ！
つぐみぃ～！ゆき姉ちゃん来てくれたよ！降りておいで。」

とんとんとん　と、階段を下りてくる軽やかな足音。

「え～っ！つぐみちゃんなの？
前に会った時には、こーんなに小さかったのに。
すっかり綺麗な、今どきの女子高生になっちゃって！」

「やだなぁー。だって前に会ったのは
私が小学二年ころでしょ？まだ子供だったもん。
ゆき姉ちゃんは　昔となんにも変わってない！　若いよ！」

「あらまぁ、ありがと。
もう　お世辞も言える、立派な大人ネ。」
そう言って、みんなで大笑いした。

それから私は、仏壇の前に正座をし、
持参した紙袋から　ちぃばあちゃんが大好きだった
芋ようかんの箱詰めと、一冊の写真集を取り出し
そっと仏前にお供えして手を合わせた。

ちぃばあちゃん、ごめんね。
こんなに会いに来るのが遅くなって…。
今までありがとね。
父さんが亡くなってから、
ずーっと私たちのこと、気にかけてくれてたよね。
それなのに、私、なんの恩返しも出来なかった…。

涙が溢れて溢れて　仕方がなかった。

子供のころ、あんなに可愛がってもらったのに
私ときたら、ここ十年　顔も見せずにいて。
最後のお別れさえ　伝えていなかった…。

もう天国で、うちのばあちゃんや父さんと会えたかな。
この写真集ね、みんなの大好きな猫がたくさんいるよ。
私が沖縄で、一生懸命撮してきたの。
父さんにも見せてやってね。

これからも私、仕事頑張るから。
お嫁には行き遅れるけど、まだまだ撮りに行きたい所たくさんある

から。
また新しい写真集作って見せにくるよ。
だからずっと、私たちのこと、見守っててください。

そう　心から合掌し、涙を拭いて
みんなの集まる居間のソファーへと腰掛けた。

すると、今までどこかに隠れていた二匹の猫が静かに近寄ってきて、
なんと私の膝の上に、二匹ともちんまりと収まってしまったではないか。

これには、この家の誰もがびっくり仰天！

「ゆき姉ちゃん、あり得ないよ！
虎太郎もプリンも、初めて会う人の前には出てこないんだから！
しかも膝に乗るなんて、絶対ありえな～い！
お兄ちゃんに早く教えなきゃ！」

そう言いながら、つぐみちゃんはケータイを私に向け、
写メを誰かに送信した。

ここの家族は根っからの猫好き家族で、猫がいなかったためしはないらしい。

しかも、そのほとんどが捨て猫だったり

保健所から引き取ってきた猫たちだ。

昔には、ペットショップから買ってきた純血種も
飼っていた時期があったそうだが、
その猫が天寿を全うしてからは
店から買うことはしなくなったそうだ。

人間の都合で　いいように値段をつけられ、
ブームになれば十何万もの値がつき
ブームが去れば、さっさと保健所へ持って行って
殺処分をする。

みな　同じ重さの尊い命のはずなのに
人間の金儲けのために、命をもてあそばれる
可哀想な生き物たち。
その実態を知ってからは
二度とペットショップへは足が向かなくなったという。

私もまた同じ。

あんなに好きだったペットショップ巡りをしなくなった。
そこにいる犬や猫たちが、哀れで哀れで仕方がなかった。

そんな話をしながら、みんなで私の撮った写真集を見ているとガチャンと玄関ドアが開く音がして
誰かが居間に入ってきた。

「嘘みてぇ！虎太郎とプリンが本当に膝に乗ってるよ！
なんだよ、お前ら。その変わりようは！」

そう言いながら、ケータイ片手に部屋に入ってきた男の顔を見て
私は自分の目を疑った。

うそ！　この人、昨日ドラマで見た人にそっくりなんだけど！

びっくりし過ぎて心臓が、口から出てきそうになった。

普段はニュースと天気予報、交通情報を見るためにしか
テレビはつけない。
ドラマや映画には全く興味が湧かないので
ましてや最近の芸能人なんか
浦島太郎並みに知っているはずはなかった。

だが昨日の夜は、友達三人が我が家に集まって
仮の出版記念パーティーを開いてくれ、飲んでる最中に
どうしても毎週見ているドラマが見たいからと
友達がテレビのスイッチを入れた。

「ちょっとぉ～！私のお祝いに来てくれたんでしょ？
ドラマなんて、録画して帰ってから見なさいよ！」

「もちろん、録画したのも見るよ。
でもファンなら、リアルタイムでも見なくちゃねぇ！」

「そうそう！今どきこのドラマ見てない人なんて、雪見　あんたぐらいなもんだよ。
あんたもここに座って、しっかり見ておきなさい。
明日にはお肌が潤ってるから！」

「なによ、それ！」
「いーから、見ればわかるって！」

そう言われて　無理矢理見せられたドラマには
若い俳優たちがウジャウジャ出てきた。
すでに話は終盤に差し掛かっているらしく
私にはさっぱり話の内容が理解できなかったが、
数いる若手俳優の中に一人だけ、
ひときわ輝く一番星のような人を見つけた。

「ねぇねぇ、この人何て言う人？」

「しーっ！今いいとこなんだから！」

「ねぇ、なんて名前？」

「もぅ！肝心なとこ、聞きそびれちゃったじゃない！
健人！斎藤健人ってゆーの！
今　一番の人気者なんだから。」

斎藤健人？
ちぃばあちゃんちの健人くんと同姓同名だ。
でも、健人くんが俳優になったなんて話
一言も聞いてないし…。まさかね。
大体、こんなイケメンじゃなかったもんね、十年前に会った時は。
まぁ、あの頃は小学生のおちびさんだったけど。

でも　この人、この中で一番輝いた瞳してる。
絶対にこの先、すごい俳優さんになるはず。

こんな整った顔立ちの人なら
ポートレートの苦手な私にだって
きっと上手に撮れるんだろうなぁ。

いつか　この人の写真を撮してみたい。

ねこが取り持つ縁

昨日、テレビの前でそんなふうに思った人と
ほぼ同じような顔立ちの人が、今　目の前に立っている。

昨日の人と違うところと言えば、
この人は大きめな黒縁の眼鏡をかけていた。

誰？と思うのと同時に　その人は

「久しぶりだね、ゆき姉！」と、私の方を向いて言った。

「ゆき姉？って、まさか健人くん？
あの　ちっちゃかった健人くん？」

「ひっでーなぁ！ちっちゃかったって。
俺の唯一の弱点を容赦なく突いてくるんだから！
はいはい、今だって　たいした成長はしてませんよー！」

「いやぁ、びっくりした！本当に健人くんなんだ！
前に会った時は、まだ小学生だったから、今とっさにはわからなかったもん。

昨日ドラマで見た俳優さんにそっくりな人が入ってきたから、めちゃ焦ったよ！」

そう言った途端、まわりのみんながクスクスと笑い出した。

「ねぇ、大丈夫？ゆき姉って、どんだけ世間に疎い生活してるわけ？」

そう言いながら、つぐみが飲み物を運んできた。

「よぅ、つぐみ！元気だったか？夜泣きはしてねーか？」

「お兄ちゃんのぶぁーか！
女子高生なめると、あっという間にファン無くすから！」

「げっ！兄貴を脅迫する気かよ！」

「妹の身にもなってよ！私だって学校で大変なんだから。
シラを切るのも辛いもんだよ。
サイン頼まれてきたら兄ちゃん、怒るしぃー！」

「だってお前、学校って全部で何人いると思ってんの？
一人にサインしたら、あっという間に俺も、私もになっちゃうだろーが！」

「わかってるよ、そんなこと！だから苦労してんじゃない。
お兄ちゃんの評判落とさないために、健気な妹がどんだけの苦労をしてることか！」

「すまないねぇ～、こんな人気者になっちゃって。
この借りは　いつか必ずお返ししますから。」

「いつかじゃなくて、今ちょうだい、現金で！」

そう言って、つぐみは両方の手のひらを重ねて健人の前に差し出した。

その手を健人が、間髪入れずにピシャリと叩いたので、一同バカウケ！

私はと言うと、よく理解のできない二人のやり取りにただただ　ぽけーっとするだけ。

たまらず、隣に座っていた母さんが口を開いた。

「ごめんねぇ、けんちゃん。この子ったら、猫のお尻ばっかり追っかけてるもんだから、ほんと、世間知らずで。」

「いや、いいんです。
変に気を遣われるよりずっといい。
こうやって、たまにふらっと実家に立ち寄るのも、素の自分に戻りたいからで。
ところで　ゆき姉って、今なにやってるの？」

「ねぇ、見て見てお兄ちゃん！この猫の写真集、ゆき姉が撮ったんだよ！スッゴクいい写真ばっかなの。見て、この猫、超かわいい！お兄ちゃん、この写真集、もう一冊買って！」

「あ、あのね。これ、まだ発売前だから売ってないの。ちゃんと発売したら、二人には私からプレゼントするから。」

「やったぁ～！ありがと、ゆき姉！」

「なになに、カメラマンやってんの？いつから？
猫しか撮らないカメラマンなわけ？
じゃあさ、今度うちのコタとプリンの写真集作ってよ！お金払うからさ。俺、それを毎日眺めて仕事してたら、辛い時も頑張れる気がする。」

「なに、お兄ちゃん。そんなに辛いわけ？」

「そりゃ、辛い時だってあるに決まってるだろ！
お前はいつも能天気でいいねぇー。」

「ふーんだ！」

「私でよかったら、今から撮してあげようか？
カメラ、車に積んであるから取ってくるね。」

「ほんとに？やったぁ～！
コタ！プリン！きれいに撮ってもらえよ。

おい、つぐみ！なんでお前まで髪とかしてるわけ？
コタとプリンの写真集に、お前は余計なんだよ！」

「ひっどーい！いいじゃない、私も飼い主なんだから一緒に写ったって。
それにお兄ちゃんばっか写真集出してずるーい！」

「なに、ばかなこと言ってんの。俺のは仕事だろ、仕事。」

そこへ「お待たせ。」と、雪見が戻ってきた。

カメラを手に入ってきた彼女は、明らかに先ほどまでの彼女とは違ってみえてそこにいた誰もが　あっ！と声を出しそうになる。

さっきまでの　ぽあ～んとした雪見とはまるで別人で、
瞳の中に優しさをたたえながらも猫に緊張感を与えず、
しかし一瞬のチャンスも逃さない
ハンターのような鋭い瞳も兼ね備えていた。

撮影が始まると彼女は、まるで空気と同化したかのようにいや、雪見自体が三匹目の猫になったかのようにまわりの者の目には映った。

プロカメラマンの鮮やかな仕事ぶりに
誰もが見とれていた。

見とれていたのは健人も同じだった。

仕事柄、多くのカメラマンに見つめられ
健人もまた　多くのカメラマンを見てきた。
が、彼女ほど被写体に同化しながら仕事をする人は
今まで出会ったことがなかった。

いつも　写真を撮られながら思っていたことがある。

この写真に、俺の心は映っているかな…。

見かけだけじゃなく、本当の俺を撮してくれてるかな…と。

二匹と雪見のセッションを　離れた所から見守っていた健人は
自分の中に、なにかの新しい感情が生まれた瞬間に遭遇して
戸惑いを隠せなかった。

自分が愛してやまない猫たちを、この人も同じ思いで、いや、それ
以上の愛をもって見つめてる。

こんな目をした人と一緒に
いつか　ねこカフェとか行ってみたいな。
きっと俺まで癒されるだろうなぁ。

…と、考えてしまった自分に気付き、ビックリした。

あ、俺、もしかしてヤバいかも！

こういう人って、ツボなんだよなぁ…。

そんな目で見始めた健人の視線にも気付かずに、雪見の即興の撮影会は無事終了。

後日、それなりの写真集に仕上げてプレゼントすることを約束しつぐみ、健人の二人とアドレスを交換して、その日は斎藤家をあとにした。

母を家まで送り届け自分のマンションへ帰る道すがら、
雪見は考えていた。

それにしても健人くん、
昨日テレビで見た俳優さんにそっくりだったなぁー。
今度会ったら、写真撮らせてもらうかな?

そうだ!写真撮って、イケメンおたくの真由子に見せてやろう!
きっと本物だと思ってビックリするぞー!
えへへっ、楽しみ楽しみ。

…って、おいおい!誰も教えなかったわけ?

さっき会った、遠い親戚の健人と
昨日テレビで見た、今をときめくイケメン俳優　斎藤健人は
同一人物だってことを。

て言うか、普通もうそろそろ気がつく頃じゃない?
どこまでもどこまでも、オメデタイ雪見であった。

「ただいまぁ〜!帰ったよ、めめ!いい子にしてた?」

してたにゃ～ん　と言いたげに、
めめは雪見の足にまとわりついては体をすり寄せた。

めめは、四歳ぐらいになるオスの茶とら猫。

生まれて間もない頃、近くの公園に捨てられていて
近所の子供たちが必死に新しい飼い主を探しているところに偶然、
撮影旅行帰りの私が通りかかった。

「おばさん！猫を飼ってもらえませんか？」

お、おばさん！って、私のこと？
どう見ても、私の方を見てるよね。

そりゃ確かに三十歳はおばさんかもしれないけど、
撮影旅行でお肌がボロボロかもしれないけど、
おばさんと呼ばれて「はいはい、なんでしょう」と返事をするわけにはいかないわ。

で、聞こえなかった振りをして、その場をスルーしようかと思ったけれど
ちらっと横目で箱の中を覗いてしまったのが運のつき。

その子猫は、やっと目が開いた頃らしく

箱の中でみぃみぃと、か細く弱く鳴いていた。
きっと、母親のおっぱいを探しているのだろう。
しきりに箱の中をよたよたと歩き回る。

胸がギュッと締め付けられた。
どうしても、その場を立ち去ることができなかった。

そして私の両手は、自然と箱を受け取っていた。

こうして家に連れ帰った子猫は、
みぃみぃ鳴くから「みーくん」と名付けられた。

まだ乳離れもしていないみーくんは、夜中も三時間ごとにミルクを欲しがり、
慢性の寝不足状態ではあったが、子猫のいる生活は、
そんな疲れを吹き飛ばしておつりがくるくらいの
幸せに充ち満ちた毎日だった。

寂しがりやのみーくんは、いつも私の後ろをついて回る。

トイレに入ればドアの前にお座りし、お風呂に入れば開けてくれ！
とガラスを引っ掻く。

やがて大きくなったみーくんは、
マンションのベランダにやって来る鳥を見つけては
「めぇぇぇ　めぇぇぇ」とひげを震わせ、まるで山羊のように鳴く

ようになった。
で、「みーくん」が本名なのだが、私は「めーくん」と呼ぶようになり、
そこからさらに進化して「めめくん」となったわけだ。

「めめ、今日ね。めめとそっくりなお友達に会ってきたよ。
虎太朗くんって言うの。めめより体は小さかったけど、同じ茶とらくんだった。
あとね、プリンちゃんって言う、水色の目をした白猫ちゃんもいた。
今度　会えるといいね。」

めめは、まだ私の膝の上に残る匂いを嗅ぎ付け、しきりに頭を擦り付けた。

でも、なんで虎太朗とプリンは、初対面の私の膝の上から離れなかったんだろう。
めめの匂いがしたから？それとも、今朝焼いた鮭の匂いでも着いてたのかな。

体を二つに折って、くんくんと犬のように嗅いでみたが、よくわからなかった。

「そうだ！早くコタとプリンの写真を選ばなくちゃ。
健人くんとつぐみちゃん、すごく楽しみにしてるみたいだから。」

私はご飯もそこそこに、作業に取りかかった。
いつもの作業と同じはずなのに、なぜかワクワクしながら仕事をしている。

ワクワクというか
ドキドキというか
うきうきというか
そわそわというか。

一日も早く二人に届けたくて、毎晩遅くまで作業を進めた。

そして一ヶ月後。

ついにコタとプリンの写真集が完成！

昔、駆け出しの頃お世話になった小さな出版社に、相当な無理を聞いてもらって、最短期間で十冊を作ってもらった。

普通の出版社なら、そんな話は門前払いだ。

ところが、偶然思い出して恐る恐る交渉に出掛けたその出版社は、幸か不幸か経営が傾いていて（不幸に決まってるだろ！）
どんな仕事でもお引き受けします！と、言わざるを得ない状況になっていた。

私は、そんな状態の時にお金にもならない仕事を発注するのは、人間として間違っている気がして一旦は「やっぱり、やめときます」と、別のところを当たってみることにしたのだが、案の定、他の出

版社には鼻で笑われた。

で、やはりここしか方法はないか…と重い足取りで、最初に行った出版社のドアを開けた。

「あのぉ～。やっぱりお願いできますか？」

ここに頼むことを決め、打ち合わせに取りかかる。

たった十冊であることを平謝りし、次の私の仕事は必ずここにお願いすることを約束した。

私が選び抜いた、コタとプリンの写真を見てもらい、一緒にレイアウトのアイディアを出し合う。

「あ、一番最後のページだけは決めてあるんです。この写真って。」

そう言って、一枚の写真を差し出した。

それは健人とつぐみがソファに座り、健人がコタを、つぐみがプリンを膝に抱き、愛しそうに頬ずりしている写真だった。

つぐみにせがまれて、最後に撮した一枚。

それはそれは二人とも、幸せそうな最高の笑顔で
この本の最後を飾るにふさわしい、我ながら見とれてしまうほどの
ベストショットだ。

だが、この一枚を差し出したことによって、まさかこんな騒ぎになる
とは夢にも思わず…。

ドキドキの始まり

健人とつぐみの写真を見せた次の瞬間

私の両隣にいた若い女性スタッフが、ほぼ同時に大絶叫！
他の男性社員からも「おおっ！！」と声が上がり、小さな社内は蜂の巣をつついたような騒ぎになった。

私は、みんなが突然騒ぎ出した理由が解らず、ただ唖然とするばかり。

みんなが口々に聞いてくる。

「ねぇねぇ！なんでここに斎藤健人がいるの！？
どこで撮したの？一緒に写ってる女は誰？」

はぁ？なんでいきなりタメグチなわけ？

「おい！どうしたんだ、この写真！」

え？私、怒られるようなこと　した？

知り合いなのか？
どういう関係？
いつの写真だ？

どういうことなんだ！

次々に浴びせられる言葉の意味が理解できず
もはや、私の頭は思考回路停止寸前の赤ランプが点滅していた。
ただ、「斎藤健人」「斎藤健人」という声だけは、耳に入ってきた。

あれ？まてよ？
なんでみんな、健人くんのこと知ってんだろ？

一切の声を無視して、隣の人に聞いてみる。

「ねぇ、なんで健人くんのこと、知ってるの？」

「知ってるに決まってるじゃないですか！
あの斎藤健人ですよ！！」

「俺でも知ってるよ！」
と、かなりくたびれたネクタイをしたおじさんが言った。

そうなの？健人くんって　そんなに有名人なの？
なんかスポーツとか、やってたっけ？

甲子園かなんかで活躍でもしたのかな…。

雪見の頭には、健人＝遠い親戚　以外の発想は生まれなかった。

だが、やっとピンときた！

「あぁ、わかった！似てますよねぇ～、今人気のイケメン俳優さんに。
私も似てるなぁと思いましたもん。
しかも同姓同名なんて、あり得ないですよね。

世の中には、自分のそっくりさんが三人いるっていうけど、
顔も似てて名前も同じだと、怖くないですか？
なんか、たとえば、私はここにいるのに、瓜二つの誰かが銀行強盗して、何にもしてないのに私が逮捕されちゃったり、とか。」

みんななぜか、ぽか～んとした顔して
辺りが静まりかえった。

へ？例えが悪かった？

一瞬の静寂のあと、またざわめき出した。

「え？本物じゃないの？ただのそっくりさん？」

「でも、こんなに似てて、しかも同姓同名って、そんなこと本当にあるか？」

「親戚なら、知らないはず　なくない？」

「そうだな。しかも本物だとしたら、妹の写真　出すか？妹も大変な騒ぎに巻き込まれるぞ。」

ざわめきを終了させるため、雪見が立ち上がった。

「あのぉ～、もうそろそろ次に進みません？一日も早くこれを完成させたいんです。じゃないと、私の本当の仕事に戻れない。」

この言葉を合図に、みんな魔法から覚めたかのように我に返り、またそれぞれの作業を再開させた。

そして一ヶ月後。

出来上がったとの連絡を受けて、出版社へと駆けつけた。

机の上には、完成したばかりの、インクの匂いが立ち上るような写真集が十冊、積まれている。

私はいつも以上にドキドキしながら、そっと一冊に手を伸ばした。
スーッと深呼吸をしてから表紙をめくる。
そこには、たった二匹の写真集とは思われないほどの
さまざまな表情をした、コタとプリンが満載だった。

ものの一時間ほどで撮った写真が、
一ヶ月以上かけて撮った写真よりも上手く撮れてる気がして、
ちょっとだけ複雑な心境…。

でも、これならきっと健人くん、喜んでくれるはず！

嬉しかった。
なぜか初めて出した写真集の時よりも、嬉しい気がした。

早く健人くんに見せてあげたい！
メールしなくちゃ！

私は、お世話になったスタッフの一人一人にお礼を言い、ずっしり
と重い十冊を抱えて足早に車に乗り込んだ。
そして、エンジンをかける前に、健人に初メール。

なぜかドキドキして、思うように指先が動かない。
なんとか打ち終えて、送信ボタンを押す。

元気にしてる？
約束のコタとプリンの
写真集、無事完成！
かなりのいい仕上がり
だよ、自信作です。
早く見せたいんだけど
どっかで会える？

送信した文を読み返して、また一つも絵文字を入れてないことに気が付いた。
しまったぁ～！またやっちゃった！

よくメールし合う飲み仲間の香織に、
「あんたのメールは字ばっかりで読みにくい！」
と、いつも叱られる。

「だって、面倒くさいんだからしょうがないでしょ！
あんたのメールこそ、絵文字ばっかで解読するのに疲れるわ！」と反撃するのだが、
「そんなメールじゃ、男も寄り付かない！」と逆襲されて、あえなく撃沈…

まったく可愛げのない、仕事のメールみたいのを打つ女は
男にパスされて当然！　とか、平気で言ってくる。

なんとなく、解らないでもないが、ほんとかな…

健人に送ったメールを見ては、かなり後悔していた。

できることなら、さっきのメールは無かったことにして、改めて、
女の子らしい絵文字たっぷりのメールを送信し直したかった。

女の子らしい？

なに考えてんだろ、私。
ただ写真集を渡すだけなんだから、要件だけでいいじゃない。
さっきのメールで充分、充分。

と、自分に言い聞かせてはみたが
なかなか返信がこないので、正直あせった。

健人くんって、大学生だっけ？
それとも社会人？
なにやってるのか、聞きそびれちゃったな。

まぁ、サラリーマンってかっこはしてなかったから
大学生だよね。
まだ授業中かな？

と、ケータイの時計をながめた。

ふぅ……

ため息を吐き終わった瞬間、
手の中のケータイがブルブルと震え出した。

健人くんからだ！

あなたを待つ時間

恐る恐るケータイを開くと
それはやっぱり健人からのメールだった。

やっほ～ぃ！
ゆき姉、ありがとう
（＾３＾）－☆Ｃｈｕ！！
めっちゃ楽しみぃ
今すぐ飛んで行きたいけど
いま台湾なもんで。
あさって帰るから待っててや！
お土産買ってくよん☆
ではでは…

ｂｙ　ＫＥＮＴＯ

台湾かぁ。じゃ、無理だね。

え？台湾？なんで台湾？
友達と旅行？それとも大学のゼミのなんか？

待っててや！だって。
なんか彼氏からのメールっぽくない？
（＾３＾）－☆Ｃｈｕ！！だって。
それに健人くんのメールも、わりとシンプルだよね。

もっとデコメとかだらけかと思った。

あさってか…。どこで渡そう。
そうだ！車で空港まで迎えに行っちゃう？
きっと荷物もあるだろうし。
内緒で行ったら、健人くんビックリするだろうなぁー。
楽しみ、楽しみ！

それから私は、街へと車を走らせ
久しぶりに洋服をあれこれ買い込んだ。

ついでに美容室にも寄って、髪を切った。

それはまるで、初デートの二日前といった光景である。

そしていよいよ、健人が帰ってくる日。

朝早くに目覚めたので、そのままベッドから飛び起き
熱いシャワーを浴びてお化粧をした。

ちゃちゃっとサンドイッチを作り、コーヒーをポットに入れ
カメラバッグを肩に担いで早々に家を出発する。

もちろん、コタとプリンの写真集も持った。

道路が混んでる時間帯はいやだし
何時の便で到着するかわからないし。

家を早くに出た理由を、自分自身に言い訳してた。

本当は、ドキドキして家にいられなかっただけなのに。

待ち時間は、飛行機でも撮って遊んでよう。
昔お金がない頃、よく空港に行って
飛行機やら鳥やらを撮して遊んだっけ。
懐かしいな。

運転しながら　ふと考えた。

健人くんと私って、一回り違うんだよね。
私が３３才だから、健人くんは２１才？

なんか、おばさんと若者って感じ。

だって私が大学生の頃、三十過ぎた女の人って
「おばさん」だと思ってたもん。

健人くんも私のこと、「おばさん」って思ってるかな…

そう考えると、嬉々として今日のために洋服を買い、
髪を切った自分が恥ずかしくてたまらなくなり
いっそ、このままUターンして帰ろうかと本気で考えた。

いや、だめだ！
やっぱり、今日渡す約束してるんだから。
健人くん、あんなに楽しみにしてくれてるんだもの。
どうしても早く　渡さなきゃ。

そう。私は親戚のお姉ちゃんとして届けるだけ。

もう、デート前のようなルンルン気分はどこかへ行ってしまった。
今はただ、早く写真集を渡してしまいたい。それだけ。

羽田空港に到着。

台湾からの第一便が着くまでには、まだ時間がある。

私は到着ロビーの片隅で、今朝作ってきたサンドイッチとコーヒー

の、遅い朝食を楽しむことにした。
サンドイッチをつまみながら、しばしの人間ウォッチング。

朝っぱらから若い女の子が、ずいぶんといるもんだなぁ。
今日って　何曜日だっけ？

あぁ、土曜日か。みんな、学校休みなのね。

それにしても、みんな遠距離恋愛でもしてるのかな。
彼氏待ちって感じ。

第一便が到着。
よく見てたけど、健人くんらしき人は降りてこなかった。

第二便の到着まで、お土産屋さん巡りをすることにする。

わぁ、美味しそうな新作スィーツが勢揃い！
今日のデザートに、なんか買って帰ろう。

第二便が到着。
なんかさっきより、若いコが増えてる感じ。

みんな、誰を迎えに来てるんだろ。
この便にも健人くんはいないみたい。
次の便まで、ちょっと外の空気を吸ってこよう。

私はカメラを片手に、送迎デッキに足を延ばした。
ここへ出るのは本当に久しぶり。
一年に何度もこの空港を利用するが、
仕事とあっては　ただの中継地点に過ぎない。

仕事抜きでの～んびり旅行でも行きたいな。

カメラのファインダー越しに、これから飛び立つであろう翼を見つめて、
気持ちだけは一緒に飛び立とうと思った。

プライベートで旅行するなら、どこがいいかな。
海外は気持ちが休まらないから、沖縄の離島がいいな。
竹富島の民宿にでも泊まって、一ヶ月ぐらい
ぽけ～っと　海だけ眺めて暮らしたい。

そう言うの、命の洗濯っていうんだよね。
私もそろそろ、一回目の洗濯が必要な年頃かもな。

第三便の到着時間が近づいたので、

私は慌ててロビーへと荷物を持って移動した。

そこには、私の知らぬ間に
溢れんばかりの人だかりができていて
私の立つスペースなど、どこにも空いていなかった。

なんなの！？この人達。
一体誰の出迎えに来てるわけ？
誰か、人気アイドルでも降りてくるのかな。

みんな、カメラを構え出したんだけど…
こうなったらプロとして、黙って見てる訳にはいかないな。

こんな所で、予定外のプロ魂がメラメラと燃え上がり
私は足元のカメラバッグから、一番の望遠レンズを取り出した。

まわりのコたちが、ちょっと引いてる気がする。

冷静に観察すると、みんな私より十以上は年下か。
いや、中学生ぐらいの子もたくさんいる。

またしても私は、自分の年齢を意識し出した。

くっそー！負けるもんか！

私はプロのカメラマンに徹することで、

自分の意識にバリアを張ろうと心に決めた。

車から三脚持ってくればよかったな。
どこか、ちょっと後ろでもいいから登れるとこないかな?

私はあえて後ろに下がって植栽スペースの角に立ち、
望遠レンズで被写体を捜した。

と、次の瞬間、「キャーッ!!」という悲鳴と共に
まわりをたくさんの人にガードされた男の人が
揉みくちゃにされながら足早に目の前を立ち去った。

えっ!?　今のって…

これってデートのお誘い？

ほんのわずかな時間ではあったが、プロの動物カメラマンにとって、動く被写体を捕らえてシャッターを切るには充分過ぎる時間であった。

だが、ファインダー越しに見えたものは…

帽子を目深にかぶり、顔の半分以上をマスクが隠し
そして黒縁の大きな眼鏡をかけた小柄な男性。

服装からして、今どきの若い男性だとは一目で判ったが
なんせ顔がほとんど隠れていた。

でも、あの黒縁眼鏡とその奥の瞳…

見たことがある、絶対に。

それも、つい一ヶ月前。

ちぃばあちゃんちで…

いや、テレビの画面の中で？

望遠レンズの先の被写体が、ほんの一瞬

私のことを見つめた気がした。

あの人はいったい…

気がつけば、あんなに出来てた人だかりが、跡形もなく消えていた。

私は慌てて、まだ残って余韻に浸っていた女子高生二人組に、さっきの人は誰だったのかを聞いてみた。

彼女らは、未だ興奮覚めやらずといった感じで

「健人！俳優の斎藤健人！」

と叫んだかと思うと、また二人でキャーキャー言い始めた。

やっぱり「斎藤健人」だ…

でも…

心のもやもやは、いつまでたっても消えることはなく、

それどころか、さらに勢いを増して覆い被さってきた。

どうしよう…

母さんに聞いてみようかな…

「けんちゃんって、俳優さんなの？」って。

でも、違ってたら笑われるよな。

メールして聞こうかどうしようか、うじうじと悩んでいると、
お尻のポケットに入れてたケータイが震え出した。

メールだ。誰からだろ？

開けてみて驚いた。それは健人からのメールであった。

ただいま、ゆき姉！
今、成田に到着です
（＾－＾）ｖ
台湾はウマイ国だったぁ～！
でも、やっぱ日本飯が恋しくて
仕方ないので、俺おごるから
晩飯付き合って下さいです★
あ、コタとプリンの写真集
忘れないで持ってきてね。
では、次の指令を待て！

ｂｙ　ＫＥＮＴＯ

次の指令を待て！って…

ええっ！成田ぁ？

羽田便じゃなかったの?? あたしったら、なんで勝手に羽田だと思い込んでたんだろ。

せっかく迎えに行って、驚かそうと思ってたのに！
なんて　そそっかしいんだろ、あたし。

健人からの、突然の誘いに舞い上がり
雪見は、ついさっきまで抱いていた疑惑など
とうにどこかへ飛んでしまっていた。

しょうがない。一旦、家に戻るか…

カメラをバッグにしまい、雪見は小走りにロビーを後にした。

マンションへ戻り、めめにエサをあげてから
散らかった部屋を片付ける。

今朝、バタバタと出掛けて行った痕跡が
あちこちに散らばっていた。

はぁーっ。
なんだか一日分のエネルギーを使い果たしちゃった感じ。

疲れたぁ～。

そうつぶやいて、めめの寝ていたソファーにごろんと横になる。

目を閉じると、地中に吸い込まれるように深い眠りに落ちていった。

雪見は夢を見ていた。
お気に入りの猫カフェに、健人を連れて行った夢だ。

二人で向かい合わせにコーヒーを飲みながら、飽きずに猫たちを眺めている。

時折近づいてくる子猫に、
健人は猫じゃらしを上手に操って
実に楽しそうに、幸せそうに相手をしてやっている。

そんな健人の横顔を、私は頬づえつきながらうっとりと眺めていた。

……雪見！

…雪見！！

誰かが私を呼んでいる。

…雪見ってば！起きなさいよ！

え？　なに？？

肩を叩かれ、びっくりして跳ね起きた！
目の前には真由子が立っている。

「え？真由子？なんでここにいるの？」

「なんでじゃないわよ！
朝から何回も電話してるのに、イエ電にもケータイにも出やしないから、
家でぶっ倒れてるかと心配になって、様子見に来たんじゃない！
呼んでも起きないから、本当に死んでるかと思ってこっちが倒れそうになったわよ！」

仲の良い真由子と香織には、ここの合鍵を渡してあり
私が仕事で長く家を空けるときには、
二人が代わる代わる、めめの面倒をみにここへやって来てくれるのだった。

「ごめんごめん！

朝早くからバタバタと出かけちゃったもんだから、
留守電にしてくの、忘れてた。私、爆睡してた？
で、なんか用事？」

「いや、別にたいした用事はなかったけど…。」

「ありがと！こんなに私の事を思ってくれてる友達がいて、
いつ　ぶっ倒れても安心だ！」

と言いながら、ギューッと真由子に抱きついた。

「ねぇねぇ、来たついでだから、どっか飲みに行こうよ！
明日は日曜だし、久しぶりに朝までカラオケなんかどう？」

そう言われて、ハッ！と健人との約束を思い出した。

「ごめーん！今日は先約があるんだ。また誘って！」

と、両手を合わせて謝る。

「なに？誰よ、誰？」

「別に。友達にご飯誘われてるだけ。」

「さては男ぉ？ねぇ、そうでしょ！絶対そうだ！顔が一瞬にやけたもん！ねぇ、誰？誰？」

「遠い親戚の大学生だよ、親戚の！」

「親戚ったって、男なんでしょ、ぴちぴちの！」

「なによ、それ！変な言い方やめてよ！」

「なんで親戚の男の子とご飯なんか行くわけ？ねぇ、そのコ、イケメン？写真とかないの？」

「写真？あ、あるわ。これ見て！先月、その子んちで撮った猫で写真集作って、一昨日出来上がったから、今日はこれを渡すために会って、ついでにご飯食べるだけ。」

「ふーん…」と言いながら、真由子はパラパラとコタとプリンの写真集をめくっていた。

が、突然、耳をつんざく大絶叫！！

「ぎゃーっっ!!なに、これ!
なんで健人が最後のページに写ってんのよぉ〜!!」

鼓膜が破れたかと思った。
まだ耳の奥がキーンとしてる。

「ちょっとぉ！どんだけ大声出すのよ！
耳が聴こえなくなったら　どうしてくれるのさ！」

「あ、あんた！怒らないから正直に言って。
斎藤健人と　どーいう関係！？」

真由子の声が、心なしか震えて聞こえる。
やっぱ、鼓膜がいっちゃった？

「どーいう関係って、ばあちゃん同士が姉妹だから、はとこっていうやつ？
埼玉に住んでるんだけど、健人くんが生まれた頃から、よくうちのばあちゃんに連れられて、遊びに行ってた。
ばあちゃんが死んでからは、ぜんぜん会う機会が無かったんだけど、先月十年ぶりに会って、今日会うのが二回目。
あ、大人になってから　ね。」

「あんた！今まで隠してたわけ？斎藤健人と親戚だってこと。
あたしがこんだけアイドルおたくだって知っててての事？」

「ねぇ、なんか勘違いしてるでしょ？前にもあった。
これ作ってもらった出版社の人達も、勘違いして大騒ぎになったんだから！
知ってるよ。同姓同名のイケメン俳優がいるんでしょ？
残念ながら、うちの健人くんは俳優なんかじゃありません！」

「じゃ、なにやってる人？
こんなに瓜二つでイケメンなのに。」

「うーんと…。たぶん大学生、かな。」

「どこの大学？絶対に街歩いてたら、スカウトの嵐だと思うんだけど。
今までテレビのそっくりさん番組に、出たことないのかな？
ぜーったいに優勝して、賞金がっぽりもらえると思うんだけど。」

「なに言ってんの！人の親戚で金儲け企んでるわけ？」

「だって雪見！これって凄いことなんだよ！わかってる？
こんなにそっくりってことは、あんたがこのコとご飯でもしてたら、ホンモノの斎藤健人と間違えられて、フライデーとかに写真売られたらどうすんの！？」

「ちょっと！ホンモノってなによ、本物って！
うちの健人くんだって、本物の斎藤健人なんだから！」

いつの間にか「うちの健人くん」になってる。

「ねぇねぇ、一回冷静になって考えてみよう。
瓜二つのそっくりさんであっても、名前まで一緒なんだよ？
今日の二人のご飯風景をシミュレーションしてみて。

周りの誰もが本物の…いや、俳優の斎藤健人だと思うでしょ？
で、ちょっとちょっと！斎藤健人が年上のおば…じゃない、女とご飯食べてるよ！って店中が騒然とするわけ。」

「今、おばさんって言おうとした！」

「どうでもいいの、そんなこと！
いい？そうなった場合、あんたたちはいいとして、濡れ衣を被せられる俳優の斎藤健人の立場はどうなるのよ！」

「濡れ衣って、人聞きの悪い…。
だって私達、何にも悪いことしてないのに、ご飯も食べに行けないわけ？
そんなのおかしいでしょ！」

「あんたは世の中に疎くて、斎藤健人がどんだけ凄い俳優か、知らないでしょ。
写真集を出せばバカ売れ、ブログの閲覧数なんか、ずーっと一位なんだから！ドラマに映画に引っ張りだこだし、コマーシャルもたくさん！
こんな人気者、そうそういないわよ！」

「ふ〜ん。そんなに凄い人なんだ…。
けど、じゃあ　どうすればいいのよ。
今日のご飯、キャンセルしなさいってこと？」

「まぁまぁ、そんなにアツくならないでよ。
で、今日の約束は何時？どこで待ち合わせ？」

「それがさぁ…。まだ時間も場所も、連絡こないの。」

「なんで？今日の夜ご飯を食べに行く約束なんでしょ？もう夕方じゃないの！
なんで連絡こないのさ。こっちからメールしてみなよ！」

「だって、連絡を待て！って書いてあったし…。」

「待つにしたって、いつまで待たせるのよ！これだから若いもんは
なってない！大人の女をなめてるわよっ！」

「なんで真由子が怒ってるのさ。きっと、さっき台湾から帰って、
疲れて私みたく一眠りでもしてるんだと思う。
いいの、いいの。どうせ明日は日曜だし、夜は長いんだから。」

「はぁ〜っ。そんなペースだから、いつも男に逃げられるんだわ。」

「ちょっと！なによ、逃げられるって！
誰が男に逃げられたってのよ！」

「あんたね、今までの経験を全部思い出してごらんよ。
あんたから男にメールしないから、それをいいことに浮気されて、
挙げ句の果てにケータイの番号替えられてても気がつかないなんて、
お笑い以外の何物でもないわよ！」

「あんた、なにもそんな古い話　持ち出さなくても…。ご親切は
感謝しますけど、そろそろお引き取り願います。
写真集ラッピングしたり、カード書いたり、出かける前にやりたい
ことがたくさんあるのよ。」

「はいはい！これ以上何を言っても無駄なようだから、私はここら
で退散するわ。デート終わったら連絡ちょうだい！」

「デートなんかじゃないから！」

「わかった、わかった。じゃ、帰る。
今度、イケメンの親戚くんを紹介してね。」

「ふふふっ、今度ね。今日はありがとね！また香織も誘って飲みに
行こう。じゃ！」

嵐が通り過ぎたあとのような静寂さを取り戻し、雪見は買ってきた
ラッピングペーパーで写真集を、一冊ずつ丁寧に包装し始めた。

健人の喜ぶ顔を想像しながら、心をこめてゆっくりと…。

これから健人に会えるんだと思うと、不思議と穏やかな安らぎを覚えた。

それが、すでに心に芽生え始めた恋心だとは気づかずに…。

彼の正体

だが、いくら待っても健人からの連絡はこなかった。

どうしたんだろう…

何かあったのかな…

待ってる時間が永遠にさえ感じていた。

そこに突然、どこからかケータイのバイブ音が聞こえてきた。

が、肝心のケータイが見当たらない。

え？　私のケータイは？

しまった！！

ケータイの行方に、なんとなく心当たりがあった。

犯人はたぶん、めめ！

めめはよく、私が寝てる間に悪さする。

本人的にはただの一人遊びなのだが、起きて物がなくなってると、かなりアセる。

その手口はこうだ。

ベッドやソファー横のサイドテーブルに手を伸ばし、その日の遊び道具を物色する。

コンタクトレンズのケースであったり、眼鏡であったり。
ケータイをやられた時も、何度かあった。

めめは、それら　程よい大きさの物をテーブルから床に落とし、右へ左へ　猫パンチを繰り広げながら、アイスホッケーさながら部屋中を駆け回るのだ。
フローリングの床は物がよく滑る。

そして最後は大体、冷蔵庫の下かソファーの下にシュートして、手が届かなくなり試合終了！となる。

これをドタバタとやるのだから、私も目を覚ましそうなもんだが、なんせ私は超熟睡タイプ。
それごときのうるささでは、目覚めないのだ。

どこどこ？私のケータイ！

音の在りかを探っていって、やっとソファーの後ろから無事救出！
急いで開くと、それは待ちに待った健人からのメールであった。

ゆき姉へ、第二の指令
7時からの番組に注目！
次に第三の指令を待て

ｂｙ　ＫＥＮＴＯ

ええーっ！たったこれだけ？

ご飯の時間は？待ち合わせの場所は？
これって名探偵コナンの見過ぎじゃない？

やっときたメールがわからんちんだったので、私はどうすれば良いのか思案していた。

取りあえず、指令通りにしてみよう。

七時まであと十分。
私は小腹が空いたので、昼間　羽田のお土産屋さんから買ってきた、お店で一番美味しそうだったフルーツタルトをお皿にのせ紅茶を入れて、テレビの前でその時を待った。

約束の七時。

私は順番にチャンネルを替えていき、それらしい番組を急いで探した。

と、その時。

「本日の生ゲストは今大人気の俳優、斎藤健人さんです！

どうぞ〜！」

と言う、アナウンサーの声が耳に飛び込んできた。

あっ！　斎藤健人だ！

私は、画面の前に釘付けになった。

なんてきれいな瞳なんだろ。
大きいけれど切れ長で、まるでいたずらっ子の猫の目だ。
スラッと通った鼻筋。
薄くて上品な唇。
目元と口元のほくろが、私的にはかなりポイント高いな。

あれだけ真由子が興奮してた訳が、やっとわかった。
初めてじっくり観察したが、本当に綺麗な顔立ちをしている。
きれいというか、可愛いというか。

こりゃ、あの羽田の騒ぎももっともだわ。
でも、待って。
健人くんも同じような顔立ちなら、きっと大学でもモテモテなんだろうな。
こんな人が同じ大学にいたら、みんながほっとく訳がない。
と言うことは、彼女もいて当然か…。
もしかして、台湾も彼女との旅行だったりして…。

どうして私、そんなこと思いつかなかったんだろ。
空港だって、ちゃんと彼女が迎えに来てたんだよね。
それなのに私って…。とんだ一人芝居だ、笑っちゃう…。

もうそれ以上、「俳優の斎藤健人」を見ているのは辛かった。
好きになりかけてた「親戚の健人くん」を思い出し、辛かった。

もうテレビを消してしまおうかと考えていた時、画面いっぱいにきれいな石垣島の海が映し出された。

どうやら、明日から公開される、健人主演の映画のコマーシャルらしい。

そこで泳ぐ健人の上半身は、しなやかに鍛え上げられ、まるでギリシャの彫刻かと見まがう美しさであった。

すごいな。完璧すぎる。なんか近寄りがたい感じ。

そう思いながら、ただなんとなく画面の向こう側を眺めていたとき、アナウンサーの一言が耳に入った。

「これからのご予定は？」

「えっと、今日台湾の撮影から戻ったばかりで、まだ日本食を食べてないんで、これから親戚のお姉さんとご飯に行きます。

ゆき姉、待っててね！」

と、「俳優の斎藤健人」が、こっちに向かって手を振った。

ええーっ！今のなに？
私のことを呼んだ？
私に向かって手を振った？

「俳優の斎藤健人」が…。

あなたはやっぱり…。

「今日の予定じゃなくて、俳優としての予定は？って聞いたつもりなんですけど…」
と言ったアナウンサーの言葉に、会場は大爆笑だったけど、もう私の耳には一切の声も聞こえてはいなかった。

あと少しでたどり着く、謎解きの答え…

私は、その答えを前にして

ただ震えながらケータイを見つめていた。

初デート？

健人が出演した、生放送の情報番組が終わったあとも、
雪見はしばらく　テレビの前を動くことができなかった。

やっと疑問が解消したはずなのに
まだその状況を呑み込めないでいる。

と言うか、これは夢の続きなのではないかと、８０％ぐらいは思っている。

俳優の斎藤健人が
ちっちゃいばあちゃんちの健人くんだなんて。

私が昔よく遊んだ健人くんが
俳優の斎藤健人になっていたなんて。

確かに見た目は同じなのだが（同一人物なのだから当たり前の話だが）
あの恥ずかしがりやの健人くんが。
学芸会の劇で、恥ずかしさのあまり、舞台上から逃走したという逸話さえもつ健人くんが、
俳優という職業についていることに、とても違和感を感じている。

その違和感こそが、今まで疑問を感じながらも
それを心の中で否定してきた根拠なのに…。

まだまだ心の整理がつかないでいるのに、
健人から第三の指令が送信されてきた。

ゆき姉、見ててくれた？
まぁ、そおいうことです
（＾―＾）ｖ
さすがのゆき姉でも薄々
は気付いてたと思うけど

こんなとこで話してても
なんだから、飯食いながら
ゆっくり話そう。
と言うことで第三の指令

恵比寿ガーデンプレイス
時計台広場　午前一時

…な訳なくて
その近くの「グランデ」
っちゅう創作和食の店に
予約入れといたから先に
行って食いたいもの注文
しといて。
この店、ヤバいから（＊―＊）
俺化粧落としてから行く

んじゃ、あとで☆

by KENTO

んじゃ、あとで…って、どんな顔して会えばいいんだろう。
メチャクチャ緊張してきた！
なんで、ちぃばあちゃんちの健人くんに会うのに
こんなに緊張しなきゃダメなの？

私はただ、親戚の健人くんに会って
コチとプリンの写真集を渡したいだけなのに…。

いくらたっても、心の整理がつきそうもないので私は、
取りあえずはお店の場所を検索し、行ってみることにした。

そのお店は、雪見が想像していた和食屋さんとは大違いで、
元フレンチレストランのオーナーシェフが
新しい分野の和食屋さんを創りたい、と始めた店だった。

ビルの十八階にある、のれんをくぐる。

が、そののれんだけが和を表しているだけで、
一歩店内に足を踏み入れると、
そこには今どきのお洒落な空間が広がっていた。

店員さんに案内されて、店の一番奥にある窓際の席についた。
バーカウンターのように、窓に向かって横並びに席があり、
目の前にはキラキラ光る、東京の夜景が広がっている。
綺麗な夜景！でも、こんなところで食事なんて…
誰かに見られたらどうするの？
個室に替えてもらおうかな…。

そんなことを考えていると、健人が案内されて来た。
先月会った時と同じに、黒縁の眼鏡をかけている。
ほんの一時間前にテレビの中で見た健人とは、
別人のようにも見えた。

「お待たせ！なんか注文しといてくれた？」

「ううん、まだ。私もちょっと前に来たところ。」

店員が「お飲み物は？」と聞いてきた。

「俺はやっぱ、取りあえずはビール！ゆき姉は？」

「私も最初はビールください。」

かしこまりました、と店員が下がると同時に健人はメニューを開き、
これとこれと、あっ、こっちも食いたいんだよなぁ～と、
次から次へとメニューを指差す。

二人の前に、きれいに注がれたビールが運ばれ、
健人おすすめの料理をあれこれ注文し終えて、やっと乾杯。

「お疲れ～！くーっ、ウマイ！！仕事帰りのビールは最高！」

「なんか変なの。ついこの前まで小学生だった健人くんと、お酒一緒に飲んでるなんて。」

「またぁ！小学生だったのは十年も前でしょ？
俺、もう二十一だよ！立派なお・と・な！」

「だよね。立派に仕事してるし…。」

「ごめんごめん！でも俺、隠してたわけじゃないからね！
ゆき姉が勝手に思い込んでただけで…。
先月会わなかったら、ずっと知らないままだったかも。
まぁ、ゆき姉らしいと言えば　らしいけど。」

「ねぇ、どうして芸能界に入ったの？
何年前から？どうやって入ったの？」

「まぁまぁ。腹減って死にそうだから、食いながら話そ！」

そう言って健人は、運ばれてきた料理を嬉しそうに、幸せそうに頬張った。

そんな健人の横顔を眺めているうちに、

雪見はいつの間にか心が落ち着いて
いつもの雪見らしさを取り戻していることに気がついた。

窓の向こうの景色は相変わらず
いや時間と共にさらにキラキラ感が増し、
この景色を眺めている二人は、誰の目から見ても
恋人同士にしか見えなかった。

夢と現実のあいだ

一杯目のビールを飲み干し、少しお腹も落ち着いた頃
健人が雪見に質問してきた。

「ねぇ、ゆき姉はなんでカメラマンになったの？
しかも、猫専門になったのは　なんで？」

「ちょっとぉ！私の方が先に質問したんだから、
まずは健人くんが先に答えてよ。
いつから俳優さん、やってるの？」

「高校二年の終わり頃かな。友達と原宿に遊びに行って、
今の事務所にスカウトされた。」

「じゃあ、もう四年になるんだ。全然知らなかった。」

「ねぇ、ゆき姉って、どっか　アマゾンとかの奥地にでも行ってた？
もしかして、テレビのない生活してんの　？

あ、すいませーん！ビールふたつ！
ほら、ゆき姉も早く飲んじゃって！」

健人の声に反応した人が何人か、こっちの方をちらっと見た。

「しーっ！健人くん、大声出しちゃだめだよ！
しかも、なんで個室を予約しなかったの？
ここじゃあ、みんなにバレバレじゃない！」

「ゆき姉に、ここからの夜景を見せたかったから…。

それに俺さぁ、こそこそするのって嫌いなんだよね。
なんか、悪いこともしてないのに、なんで隠れながら
飯食わなきゃならないの？って感じ。」

ちょっと不機嫌にさせてしまった…

「で、でもさぁ。
私はいいんだけど、健人くんは一応アイドルなわけだから。
私なんかといて、変な噂とか立てられたら困るでしょ。
今はツィッターとかがあるから…。」

「だからさっき、わざとテレビで言ったんだよ。
親戚のお姉さんとご飯に行くって。

ねぇ、もうやめよう、こんなつまらない話。
せっかくゆき姉とご飯食べるの、楽しみに来たのに…。」

健人の顔から、少しずつ笑顔が消えていくのに気づき、私は慌てた。

「ごめんごめん！そうだね。
よし！今日は健人くんとの初飲みなんだから、とことん飲むぞぉー！」

と、一気にビールを喉に流し込んだら
健人が申し訳なさそうに

「あっ、ごめん！
明日、映画の舞台挨拶で、朝イチで大阪なんだ。
だから今日は　ほどほどに。
その代わり来週の木曜日、俺、ひっさしぶりのオフだから
実家に泊まってのんびりしようと思ってんだけど、
良かったら　ゆき姉も来ない？
あそこでだったらゆき姉も、まわりを気にせず飲めるでしょ？」

突然の誘いに驚いた。

「えーっ！でも…。
せっかくの家族団らんにお邪魔するのもなんだから…。」

「いいじゃん、いいじゃん！さっき母さんからメールきて、
ゆきちゃんに会うなら、来週一緒に連れて来いって。
なんか母さん、自慢のキムチでチゲ鍋パーティーするとか言って
張り切ってんだけど。」

「ほんとに！？おばさんのキムチ、食べた～い！

メチャクチャ美味しいもんね！
実は私、おばさんみたく美味しいキムチが漬けたくて、
うちのばあちゃんのお葬式の時、こっそりレシピを聞いたんだけど、
どうも今イチ、おばさんの味には近づけないんだよね。
あれから十年、毎年漬けてんだけど…。」

「うっそ！ゆき姉もキムチ漬けれんの！？すっげー！！
俺、うちの母さんだけかと思ってた！
自分ちでキムチなんて漬けるの。韓国人でもないのにさ。」

「おばさんは　なんでも料理、上手だもんね。
初めておばさんちで料理ご馳走になったとき、
あー私も、こんな美味しいご飯が作れる女になりたーい！
って思ったもん。
で、そのあと、料理学校に通ったりして私、
調理師の免許も取ったんだから！」

「うそみてぇ！ゆき姉、料理作れんの？イメージ違う！」

「ひっどいなぁー！私のイメージって、どんなのよ。」

「なんとなく、そおいうの苦手にしてる感じ？」

「それって、あんまり女らしくないってこと？ひっどいなぁ！」

「あ、でも今日でぜんぜんイメージ変わったよ！
意外と女らしいし、努力家なんだなぁーって。
今までのゆき姉って、体育会系！って感じだったから。」

「それって昔の、自転車と鉄棒の特訓のこと、言ってる？」

「まぁ、あれは一生忘れないと思うよ。
子供心に、こいつは鬼だ！と思ったもん。」

「そっかぁ、やっぱりね。薄々は感じてたけど。

なんか懐かしいな。
昔は夏休みとか、よく健人くんちに泊まりに行ってたもんね。

そうだなぁ。来週久しぶりに、健人くんちにお泊まりしちゃおかな？
おばさんにもう一度、キムチのコツ教わりたいし。」

「やった！ほんと？ほんとに来てくれるの？家にメールしよ！」

そう言って、健人はすぐに携帯を開き、誰かにメールした。

雪見はそのあいだ、冷めてしまった料理に箸をつけ
残りのビールを飲み干した。

自分でも、思いがけない展開に驚いている。

だが、だんだんと近づきつつある健人との距離に
正直に喜びを感じ、幸せを感じた。

肩の触れあうほど　すぐ隣にいるのは
アイドルの斎藤健人ではなく
子供の頃によく遊んだ　斎藤健人。

私にとっては、彼がアイドルであろうがなかろうが、
そんなことはもう、どうでもいい話であった。

２１才という年齢と、かわいい寄りの綺麗な顔。
身長も１７０ｃｍぐらいと、今どきの若者にしては小柄だから
私から見れば、どうしても子供っぽく目に映っていた。

そりゃそうだ。
今まで年下の男の子なんて、眼中になかったから。
いつも、頼れる年上の大人の男にしか心を開けなかったから。

だけど　今は違う。

なにも飾らない、自分の心に真っ直ぐな健人が
今はとても男らしく、頼もしく思える。

横顔が幼くて無邪気なんだけど、
それさえも愛しくて、いつまでも眺めていたくなる。

目の前に広がる宝石のような夜景は、
健人からもらった初めてのプレゼントに思えて
いつまでも大事に大事に

心の引き出しに入れておこうと思った。

コタとプリンの写真集は、未だ忘れられたまま
じっとテーブルの足元で　その出番を待っている。

嵐の前の静けさ

ビール三杯とおしゃれな和食、
そしてなにより健人の笑顔を間近で眺めて
雪見は上機嫌でマンションへと戻ってきた。

「めめ、ただいまぁ～！」

めめはすでに、雪見のベッドの上で眠りについている。
ちらっと目を開けたが、雪見が帰って来たのを確認し
安心したように、また可愛い寝顔を見せた。

「今日ねぇ、健人くんにご馳走になっちゃった。
ほんとは私がお姉さんだから、おごってあげようと思ってたのに
写真集のお礼だから、って。
危うく肝心の写真集、渡すの忘れそうになったけど、
健人くん、大事そうに抱えて持って行ってくれたよ。よかったね！」

めめを相手に、いつもの独り言。

でも、嬉しくて嬉しくて、
猫以外の誰かにも聞いてほしかった。

そうだ！真由子に電話しちゃお！

まだ、起きてる時間だよね。

一秒でも早く今夜の出来事を、誰かに話したくて仕方なかった。

ケータイの呼び出し音は鳴るけれど、すぐ留守電に切り替わる。

なんだぁ…。どっかに飲みに行っちゃったのかなぁ。

せっかく健人くんとのこと、教えてあげようと思ったのに。

今夜は眠れないや…。

そう思いながらベッドへ潜り込んだのに、

今日の出来事を反すうする間もなく、深い眠りに落ちていった。

次の日の朝。メールの着信音に起こされた。

誰よ、こんな朝っぱらから…。

まだ開ききれない目をうっすらあけて、ケータイを見る。

健人くんからだ！

がばっ！と身体を起こし、ベッドの上に正座し直してケータイを開く。

朝からドキドキが全開になった。

おっはよ！ゆき姉！
もしかしてまだ寝てた？
俺はこれから大阪行って
朝ごはんにお好み焼き
食ってきます！
うそ、仕事です（＾＾）ｖ
昨日はコタとプリンの
写真集、ありがとね！
嬉しくてずっとながめて
たら朝になってた（；｜；）
つぐみも母さんも、今週
ゆき姉が来るの楽しみに
してる。もちろん俺も。
今度は朝まで飲みましょ
んじゃ、行ってきます★

ｂｙ　ＫＥＮＴＯ

息を詰めていたので、ふぅーっと肩の力を抜いた。
昨夜のひとときは夢かと思ったが、
このメールを読んで、現実なんだと嬉しさが倍増した。
こうしちゃいられない！

木曜日、健人くんの実家にお呼ばれするんだから
何か、気の利いた手土産を用意しなくちゃ！

なにがいいかな…。

私はパジャマのまま、パソコンの前に座り
あれこれネットで検索してから
日曜日の人混む街へと出かけて行った。

前から気になっていたスイーツのお店がある。
まずは自分の舌で確かめてからじゃないと
人にあげられない性分だ。

お店に併設されたカフェで、エスプレッソと共に
十時のおやつを楽しむ。

街行く人が、みんな幸せそうに歩いている。
なんだか私も幸せだ。

健人くんちのお土産は、これに決めた！

木曜日の開店時刻に取りに来ることで予約を入れ、
私はまた人混みの中に歩き出した。

さーて、お次は虎太郎とプリンのお土産だ。

あ、うちのめめにも買わなきゃヤキモチ妬いちゃう！
猫じゃらしがいいかな？それとも高級缶詰め？
でも、猫缶って好きずきあるしなぁ…。

デパートの上階のペットコーナーに、本当に久しぶりに足を運んだ。

あれ？犬のサークルの前に、見覚えのある……真由子だ！

「えーっ！雪見？こんな所で会うなんて！
あんた、ペットショップ嫌いじゃなかったっけ？」

「あ・あぁ、そうなんだけど…。真由子は何しに来たの？」

「ジローくんのカット！トイプードルって、結構お金かかるわ。
ねぇ、まだ時間かかりそうだから、お茶でもしない？
昨日のイケメンくんとのご飯の話も聞きたいし！」

すっかりわすれてた！どうしよう！
昨日は少し酔っぱらってて、真由子に電話しようと思ったけど
よくよく考えたら、やっぱマズイよね。

親戚はやっぱり、俳優の斎藤健人だった！なんて…言えないな。
とにかく、健人くんにだけは迷惑かけられない。
昨日のテレビも見てなさそうだし、ここは真由子に悪いけど
ただの親戚ってことで押し通すしかないな。

短い時間にあれこれ判断し、私は真由子の後をついて
デパートのさらに上の、お洒落なカフェに腰をおろした。

大丈夫、大丈夫。親戚ってのは嘘じゃないんだから…。

私は、少しの後ろめたさも手伝って、声がワントーン
違っていたらしい。

そこにすかさず真由子が攻撃を仕掛ける。

「ねぇねぇ、それで昨日はどうだったわけ?
あ、昨日の夜、私に電話したでしょ?
彼とカラオケしてて気がつかなかったの。ごめんね!」

私は、昨夜の電話が繋がらなかったことに感謝していた。
もし、あの電話で私が本当のことを、
たとえお酒の勢いだったにしても、話していたら…。

間違いなく、大変な事態に陥っていただろう。

真由子は姉御肌で世話好きで、とっても気の合ういいやつなんだけど
ただひとつの欠点は、おしゃべり!だと言うこと。

私は、これから真由子にされるであろう質問の答えを、頭をフル回転させて、素早く用意した。

それから、心を落ち着かせるためにコーヒーをひとくち。

真由子と私の、駆け引きのゴングがいま鳴った。

第一ラウンド

「で、どうだったの？イケメンくんとのご飯は。
あのあと、すぐに連絡きた？」

「うん、まあね。すごいお洒落なお店を予約しといてくれた。」

「どこどこ？なんてお店？どこにあるの？」

真由子が身を乗り出して、矢継ぎ早に聞いてくる。

今までパターンからいくと、この先
お店の名前から始まって、何をたべた？何を飲んだ？
何を話した？店を出た後どうしたこうした
と、話は続いていくはず。

で、最後の締めは「彼と付き合うの？」と聞いてくる。

たとえそれが、ただの仕事仲間であっても、古くからの知人であっても、
飲んだ相手が男とわかれば、最後の質問は「付き合うの？」で決まりだ。

私は、夜景が綺麗に見えるお店だったことや
料理がとても斬新でお洒落で美味しかったこと。
今度、香織も誘って三人で行きたいね！などと

差し障りのない話題を長く引っ張って、
少しでも核心から遠ざけようと試みた。

だが真由子には、そんなちゃちな小細工は通用しなかった。

そんなことはどうでもいい！と言わんばかりに
いきなりショートカットで
「で、イケメンくんとは付き合うの？」と聞いてきた。

「ちょっと待ってよ！私、一言でも健人くんのこと、
好きだって言ったっけ？」

「言わなくても、顔見ればわかるに決まってんでしょ？
いったい、何年の付き合いだと思ってんの！私たち。」

確かにおっしゃる通りです。

今までの男との付き合いも、一回目の食事のあとに
すぐに心を見破られた。

真由子いわく、「あんたがその男と付き合うかどうかは、
大体一回目のご飯のあとに、すぐわかるわね。
何にも言わなくても、そういう顔になってるもん。」

そういう顔　とは、どんな顔だろう。

私、今、どんな顔してる？

鏡を見たくて仕方ない。

「付き合うもなにも、健人くんとはそんな仲じゃないし、親戚だよ！
それに年だって、一回りも違うんだから！」

「でも、好きになっちゃった！よね？」

「だからぁ！私が今まで、年下を好きになったためしがある？」

「無いけど、今回が初めての年下男！でしょ？
だって、あんなにイケメンでアイドルの斎藤健人にそっくりなんだよ！
そんなコと知り合いで、アドレスも知ってて、
しかも今週、実家にお泊まりするって？
そんな羨ましい状況にいて、好きじゃない！
なんて言ったら、親友と言えども　ぶん殴る！」

しまった！裏目に出ちゃったよ。
真由子を怒らせちゃった。

好きになっちゃった！と素直に言った方が良かったわけ？
私的には、アイドルおたくの真由子に
これでも配慮したつもりだったんだけど…。

え？待って！

私ってやっぱり、健人くんのことが好きになっちゃったの？

薄々は気がついていた。自分の気持ちに。

でも、彼が生まれたとき　私は十二歳で、
彼が十二歳のとき　私は二十四歳で…。
今は彼が二十一歳になり、私はすでに三十三歳にもなってしまった。

どこまでいっても縮まらない二人の年齢は、
自分の気持ちよりも何よりも、最優先で心にブレーキをかけていた。

アイドルには興味がない。
それは「偶像」だとわかっているから。
だから、健人がアイドルだと判って好きになったのでは
断じてなかった。

私は、子供の頃から知っている親戚の健人を、
十二歳も年下の健人を、事もあろうに好きになってしまったのだ。

「だって、おばあちゃん同士が姉妹だっていうだけでしょ？
そんなの別に関係ないじゃない。
日本の法律じゃ、いとこ同士だって結婚できるんだから。」

「そういう問題じゃなくて！
しかも、なんで話が結婚にまで飛躍しちゃうのよ。」

「じゃあ、何が問題なの？
好きなら付き合っちゃえばいいでしょ？」

「相手が私のこと、どう思ってるのかさっぱり判らないのに、付き合うもなにも、ないでしょ！
大体、二十一の男から見れば三十三の女なんて、おばさんに見えるに決まってるじゃない！」

声を荒げて言っている自分が、悲しかった。

自分の口から出た言葉に、自分が傷つけられた。

どうしてもっと早く、健人くんは生まれてくれなかったの…

本当は、健人があのアイドルの斎藤健人なんだということをとりあえず今は、真由子に隠しておきたかっただけなのに、話が思わぬ方向を向いて、自分自身を追い詰めた。

「ねぇ。私これからどうすればいい？」

もう自分では、自分の心の行き先を決めることができずにいた。
目の前にいる真由子に教えを請うしか、今は方法を知らなかった。

「自分の気持ちに正直になりなさい。」

穏やかな声で、そう真由子は答えた。

「年のことを取っ払ったとして、雪見がもし二十代だったとしたら、
なんの迷いもなく、彼を好きになってたでしょ？
年齢なんて、ただのナンバリングみたいなものだよ。

たとえ四十年生きてたとしても、その人の人生に中身がなければ、
それは二十年しか生きてない人と、大差のない人生でしょ？

それとは反対に、二十年そこそこしか生きてなくても、
人に揉まれて競争を勝ち抜いて、自分自身の力で生きてきた二十一歳は、
見た目よりもずっと大人だと思うけど。

特にあんたの親戚で、アイドルの斎藤健人なんかはね。」

「ええっ！知ってたの？健人くんのこと！」

「あんたねぇ。
私がいったい何年、アイドルおたくをやってると思ってんの！
あの猫の写真集見たときに、一目で判ったわよ！

だいたい同姓同名で、しかも顔にある五つのホクロの位置も
全部同じなんて人、この世にいるわけないでしょ？
ほんとにあんたはもぅ！」

「ごめん…。騙してたわけじゃないから。
この前真由子に会った時は、本当にまだ知らなかったの。
私だって昨日の夜、知ったんだから。」

「呆れた！どこまであんたはニブいんだか…。

まぁ、あんたのことだから、そんなことだろうとは思ったけど。」

「ほんと、ごめん！許してくれる？」

「許すもなにも、これから作戦会議だよ！
今日は、うちにあんた泊まりだから！さぁ、行くよ！」

そう言って真由子は、さっと席を立って歩き出した。

私も慌てて席を立ち、その後を歩く。

真由子に押してもらった背中が、じんわりと温かい気がした。

第二ラウンド

きれいにカットを終えた愛犬ジローを受け取り、
真由子は颯爽と歩き出した。

なぜか生き生きと、楽しそうに見えるのは気のせいか。

その後ろ姿を眺めながら歩いている雪見の両手には、
先程デパ地下であれこれ買った、美味しそうなお惣菜と
赤と白のワインがずっしりと持たされていた。

「ちょっとぉ～！重たいんだけど！」

「あんたの作戦会議用の食料なんだから、文句言わない！」

そう言って、真由子はジローだけを連れて、とっとと歩く。

真由子は、このデパートから徒歩圏内の高級マンションに住んでいる、
私と同い年で、外資系の商社に勤めるエリートＯＬだ。

私がフリーのカメラマンになった頃、
女性だけの異業種交流会のような飲み会で出会った。

お互い、動物好きでお酒好き。
まったく異なる世界の仕事の話が面白くて、すぐに意気投合した。

片や、三か国語を操り世界を相手に仕事する、
バリバリのキャリアウーマン。
片や、ひたすら野良猫の姿だけを追い求め
日本中を旅する、さすらいのカメラマン。

同じ年月生きてきたのに、人間にはいろんな道があるものだ。

それに比べて猫たちには、飼い猫か野良猫かの
二つの選択肢しか与えられない。

幸運にも人間の家で生まれたり、ペットショップで買われたり、
あるいは拾われて連れて来られた猫たちは
ぬくぬくと温かい部屋の中で毎日を過ごし、
餌にも水の確保にも困らない。
日がな一日、のんびりお昼寝三昧の幸せな日々。

それに対して、生まれながらの野良猫や、
家飼いされていたのに、飼い主の突然の心変わりで
ある日ぽーんと外に放り出されてしまった　可哀想な猫たちは、
外敵からの恐怖に怯えながらも、その日を生きるために
必死で食料を探し、水を求めてさすらう。

この、天と地ほどの差がある猫の話に、真由子はとても興味を示した。

「ねぇ、このあと私の家で飲み直さない？
あなたの話、もっとたくさん聞きたいから。」

そうして雪見は真由子の家に招待され、
一晩中ワインを飲みながら、お互いの話を熱く語り合った。

あれから五年。
私たちは、結婚適齢期と世間で呼ばれる年頃を軽くかわし、
こうやって今も、しょっちゅう会っては
お酒を飲み、いろんな事を語り合って夜を明かす。

「あー重たかったぁ～！
もう、タクシーに乗れば良かったのに！」

「なに言ってんの！こんな距離でタクシー使ったら
運転手さんに悪いでしょ！
これから一晩　飲み食いするんだから、
少しでも先にカロリー消費しとかないと、太っちゃう。」

「ねぇ、一晩中って、まだ三時前だよ。おやつの時間じゃん。
さっき買ってきたケーキ、早く食べよ！コーヒー、コーヒー！」

そう言いながら、雪見がふかふかのソファーに、どかっと腰を下ろした。
解き放たれたジローが、嬉しそうに足元に駆け寄る。

「ジローくん！また一段と男前になって良かったねぇ。」

と、雪見がジローの頭をよしよしすると
ジローは可愛い尾っぽをぶんぶん振り回し、
ぴょんと雪見の膝に飛び乗った。

「さすが雪見だよね。どんな動物でも、一度で雪見を好きになる。
ジローとあんたが初めてご対面したとき、
ご主人様の私を差し置いて、あんたにべったりだったのを
今でも腹立つくらい思い出すわ。」

「あははっ！しょーがないでしょ。
私はこの能力だけで、ご飯食べてってるんだから。
じゃないと、どこにいるかもわかんない、警戒心だらけの野良猫を
探して安心させて、空気になって写真を撮るなんてこと、出来ないよ。」

「だよねぇ。唯一尊敬するのが、その待つ姿勢！
私にはとてもじゃないけど、無理！」

「ちょっと！唯一ってなに？唯一って！」

「あんたはねぇ、仕事に待ちは必要だけど、
恋愛に待ちは必要ないから！さ、とっとと作戦会議！」

もう一度最初から、知りうる限りの健人に関する情報を
真由子に話した。

健人が生まれてから、行き来のあった小学生までの話。

一ヶ月前に十年ぶりに再会して、それから今日までの事。
健人からのメールも私からの返信も、容赦なく提出させられた。

「やだなぁー、メール。なんか恥ずかしいじゃん。」

「なに言ってんの！あんたのこの段階では、
メールこそが相手の気持ちを読み解く、重要な鍵なんじゃない！
私があんたたちの側でご飯でも食べてたら、
聞き耳立てて顔色うかがって、少しでも健人の気持ちを
探ることが出来たんだけど…。」

「やめてよ、そんなこと！
なんか、真由子だったらやりかねないから恐ろしいわ。」

「じゃ、つべこべ言わずにメール見せなさい！」

おずおずと真由子に、今までの健人からのメールを見せる。

「ふーん。これだけ？」

「そう、これだけ。」

「たったこれだけの文で、気持ちを読み解くのは難しいな。
だって、ほぼ連絡事項のみじゃん。
ま、最初の方は　（＾３＾）－☆Ｃｈｕ！！とか入ってるけど、
こんなのただの男友達でも、社交辞令的に入れてくるし。」

「えっ？そうなの？ちょっと嬉しかったのに…。」

「はあ～っ、ダメだこりゃ。あんたは年下の男に免疫ないから、
この程度ですぐにだまされる。
それにしても健人のメールって、意外と地味だね。
もっとデコメだらけかと思った。

しかも、あんた！いっつも言ってるでしょ、香織が！
こんな字だけのメールじゃ、男が寄り付かないって。
なんでもっと、可愛くしなかったの！」

「だってぇ…。私だって送信したあと、後悔したわよ。
でも、送っちゃったものはしょうがないでしょ。」

「ほんと、しょうがないなぁー。
でも、よく考えたら信じられない！
今、あの斎藤健人の生メールを見てるなんて！」

「ちょっとちょっと！絶対に内緒だからね！メール見たのは。
真由子を信じて相談してるんだから、間違っても
アイドルおたく仲間に自慢話とか、しないでよ！」

「わかってるって！こんな事、もったいなくて話せません！
私が斎藤健人の親戚と、友達なんだよ？
言いたくて言いたくて仕方ないけど、これがバレたら
大変なことになるって！
しかも、もしかして、あんたが健人の恋人にでもなったら！」

「まだ早いよ！健人くんが私の事、どう思ってるのかもわからないのに…。」

「だからの作戦会議でしょ！
まぁ、この真由子様に任せなさい！いい考えがあるんだから。」

そう言って真由子は、昼間っから白ワインの栓を抜いた。

作戦会議

真由子は、自分が思い付いた戦略の大まかな内容を
ワイングラス片手に、雪見に話し始めた。

「まずはメール作戦ね。
ベタな方法だけど、あんたの場合はここからスタートが妥当だわ。
まぁ、中学生並みのアプローチだけど仕方ない。

とにかく一日一回は　メールすること。あ、適度な絵文字を忘れずに！
本当はもっとたくさん送りたいとこだけど、
超忙しい健人の邪魔をしたんじゃ、マイナス効果だから
ここはグッと耐えて、取りあえずは一日一回。

返信はいらないよ！って気遣いをみせて
今日もお仕事がんばってね的な事や、お疲れ様みたいな
相手に負担の掛からない程度から始めよう。

で、何回に一回かは返信がくるとして、
そしたら次は徐々に自分の近況報告や、健人のドラマの感想とか…」

「ねぇ！それじゃあ、ただの健人ファンが健人のブログに
書き込む内容と変わりないじゃない！」

「あれ？健人のブログ、見てみたんだ。」

「そりゃ見るよ。気になるもん。
すごいコメント数で、びっくりしちゃった。
あんなにみんな、健人のこと好きなんだ！って、ちょっとへこんだ。」

「そうだよ！あそこに書き込む人数の百倍は、ファンがいると思ってなくちゃ。いや、百倍じゃきかないかな？
それだけライバルがいるってこと。」

「それって、無理じゃない？どう考えたって無理。
だって、みんな若いんだよ！健人より年下か同年代。
私なんか、お呼びじゃないって感じ。あのブログ読んでそう思った。」

「また始まったぁ。だから、年なんか関係ないって何回言わせるの！
私、毎月アイドル雑誌は全部買って読んでるけど、
健人は『恋愛に年齢は関係ない』って、今月号でも話してたよ！」

「でも……。どこからも自信が湧いてこない…。」

そう言って、雪見はワインを一気に飲み干した。

真由子は、「しょうがないなぁ。」とつぶやきながら
ソファーから立ち上がり、壁一面にある本棚の中から、
健人が載っている雑誌を、すべて取り出した。

どさっ！

テーブルの上に何十冊もの雑誌が積まれる。
健人の写真集も中にはあった。

「これ、全部持ってっていいから、健人のページをすべて読みなさい！
あんたは、大人になってからの健人を知らなさすぎる！
今の時点では、他のファンに大幅に遅れをとってるんだから、
早く健人のことを勉強して、みんなに並ばないと！」

それだけ言うと、真由子はキッチンに向かい
少し早い夕食の準備に取りかかった。

真由子が退いたあとのソファーに、すかさずジローが飛び乗る。
隣で雪見はジローの頭をなでながら、テーブルの雑誌に手を伸ばした。

何冊か、目次から健人のページをひろい、読んでみる。
だが　どこか上の空で、活字は目の中には見えているが
頭の中には入ってこない。

ふと、健人の写真集が目に留まった。

「これは…。」

表紙をめくった一頁目に、真っ青な海が飛び込んできた。
３６０度の青い空と青い海。
その真ん中に、膝下まで海に浸かる健人が
眩しそうな顔をして空を見上げていた。

竹富島の海だ！
私の大好きな、あの竹富島の海だ！

雪見は急いで他のページをめくった。

そこには、海ではしゃぐ健人、真剣に星砂を探す健人、
木陰でうたた寝する健人、満天の星空を見上げる健人…

雪見の見たことのない表情をした、たくさんの健人がいた。

でも、なにかが心に引っかかる。

確かにどの写真も、いいアングルばかり。
健人のいろんな表情を撮してる。

でも…。健人の心が感じられない…。

表面上の美しさだけに囚われて、
本当の健人の内側は、なにも映し出されていないように思えた。

だめ！こんな写真じゃ、健人がかわいそう！！
心の無い、ただのお人形みたい。
いくら『偶像』のアイドルだって、ちゃんと心があるんだ！
私が撮ってあげる！本当の健人を。
見る人すべてが、まるごとの健人を好きになるような
心が映った写真を、私が撮る！

そう思い立ったら、ここにはいられなかった。

「ごめん、真由子！私、帰る。
やらなきゃならないことを思いついたの！」

「えーっ！なによ、いきなり！
まだ作戦会議は始まったばかりだよ！
しかも、どうすんの、このパスタ！せっかく今、出来上がったとこなのに。」

「ごめんごめん！私の分も食べて。
どうしても早く、仕事したいんだ！じゃ、また連絡するから。」

呆気にとられる真由子の前から、あっという間に雪見は姿を消した。

久しぶりに心が沸き立つのを覚えた。

何を撮ればいいのか解らないで悩んでいた時に、
運命的に出会った野良猫。

あの時の出会いと同じような、ひらめきと使命を感じていた。

絶対に誰にも負けない！
健人の魂が乗り移った写真集を、私が作る！

真由子のマンションを出て街に飛び出した雪見の顔は、
すでに力強いカメラマンの目になっていた。

火照った頬に、夕方の風が心地よい。

さぁ、まずは健人の事務所と交渉だ！

踏み出した第一歩

雪見は、思い立ったら行動が早い。

普段はのんびり、おっとり型に見られるが
一度ひらめいたら猪突猛進、後先考えずに先ずは行動に移す。
で、失敗するかと思いきや、大体は結果オーライ。
直感が鋭いのだ。

真由子のマンションを出て、近くのドーナツショップに入る。
ここは雪見の、第二の仕事場だ。
写真集の原稿書きは、大抵この店の一番奥の席で行われる。

甘いドーナツと香ばしいコーヒーの香りが大好きで、
出来ることならここで、二十四時間生活したいと真剣に思っている。

雪見はチラッと、いつもの席が空いていることを確認し、
カウンターでカフェオレとオールドファッションを受け取って
指定席へと着いた。

まずはカフェオレをひとくち。心が落ち着いた。

昨夜、健人からもらった名刺をテーブルの上に置き、
事務所の住所を確認する。

本来ならば、電話でアポを取ってから出向くのが筋なのだが、

なぜかこの時は、すぐに行かなければならない気がした。

よし！大丈夫！今なら絶対うまくいく！

自分にそう言い聞かせ、急いでカフェオレでドーナツを流し込み、席を立った。

タクシーを拾い名刺を握りしめて、事務所のある高層ビルへと到着。

見上げると空はすでに薄墨色に変わっていた。

八階にある、オフィスの受付前。

「あの、お忙しいところを申し訳ございません。
わたくし、フリーカメラマンの浅香雪見と申します。
恐れ入りますが、そちらに所属していらっしゃいます
斎藤健人さんの担当者の方にお会いしたいのですが、
お約束を取れるでしょうか？」

そう言いながら、自分の名刺を差し出す。

「失礼ですが、どのようなご用件でしょう。」

「はい、斎藤健人さんの新しい写真集の件で、ご相談がございまして…。」

昨日、健人と食事をした時に、
健人が近々また写真集を出す計画が上がっていると、話していた。

「ねぇ、ゆき姉って、猫ばっかで人は撮らないの？
今まで人の写真集って、作ったことないの？」

「私ね、どういう訳か人物って、昔から苦手でさ。
今も、猫だけじゃ食べてけないから、
半分仕方なく結婚式場でカメラマンのバイトしてるけど、
新郎新婦さんに心の中で、ごめんなさい！
って言いながら仕事してるもん、私。」

「やっぱカメラマンにも、得意不得意ってあるんだ。」

「そうだね。本当はプロなんだから、何でも出来なきゃいけないんだろうけど。
私は猫の心はわかるけど、
人間の心を読むのは得意じゃないのかもしれない。
私、心の映ってない写真ってダメだと思ってるから。
大体が、会ってすぐの人を撮るからね。
その人を深く知ってからだと、うまく撮れる気もするけど。」

「ふーん。そんなもんなんだ。
俺もさ、今までたっくさん写真撮ってもらってるけど、
いっつも思うんだよね。
この人は俺のこと、どんだけわかってシャッター切ってるんだろって。
自分の写真見た時、あ、これは俺じゃない！
って思う時がよくある。

うまく言えないけど、俺の魂がそこに見えないって言うか…。」

「健人くんも、そう思う時があるんだ。同じだね、私と。」

こんな会話を、ビールを飲みながらしたのを思い出していた。

「担当の者はただいま席を外しておりまして……
あ！いま戻りました！今野さん！
ご面会のお客様です。」

そう言いながら受付嬢は、私の名刺をその人に差し出した。

「突然お伺いして申し訳ございません！
わたくし、フリーカメラマンの浅香雪見と申します。
本日は、斎藤健人さんの新しい写真集の件で
お話をさせていただきたく、お約束もないのに来てしまいました。」

「浅香雪見さん、ですか。どこかで聞いたような…。
まぁ、こんな所じゃなんだから、こちらへどうぞ。
きみ！応接室にお茶頼む。」

良かった！第一関門、突破だ！

今野さんのあとをついて、事務所の中を進む。

「どうぞ、こちらへお座り下さい。

浅香さん、ですか。以前どちらかで、お仕事ご一緒しましたかね？」

「いいえ、お伺いするのは今日が初めてです。」

「そうですか。で、お話と言うのは？」

「あのぉ。斎藤健人さんに、新しい写真集の出版のお話があるそうで、
できればそのカメラマンを、私にやらせていただけないかと…。」

「どこでその話を？まだ企画段階なのに…。」

うわっ、まずかったかな？
すごい、疑いの目で見てるよ、私のこと。

「い、いえ。ちょっと小耳に挟んだものですから…。
で、まだカメラマンが決定してないのであれば、
是非とも私も選考の中に加えていただけないか、と。」

「失礼ですが、普段はどのようなお仕事を？」

「あ、失礼しました！こちらをご覧いただけますか？」

そう言いながら、私は鞄の中から、いつも大事に持ち歩いている
コタとプリンの写真集を取り出し、テーブルの上に置いた。

今野さんは、すぐさまそれを手に取り

「ほぅ、猫ですか。人物のほうは……

ええっ！健人ぉ？
うちの斎藤健人が、どうしてここに！」

最後のページに写っている健人とつぐみの写真を見て、
チーフマネージャーの今野さんは、えらく驚いている。

その時、ドアの向こうで「お疲れ様でした！」と言う声が聞こえた。

「失礼します。」　ガチャッ。

開けて入ってきたのは、なんと、健人であった！

「ゆき姉ぇ！なんでここにいんの？？」

思わぬ再会に、訳のわからぬ健人は、目をまん丸にして驚いている。

雪見は、やっぱり私の直感は正しかったと微笑み返した。

運命の扉をまたひとつ、自分の力で押し開けたのを感じていた。

「よぅ、来たか健人！こっちに座れ。」

「はい。」

健人が今野さんの隣に、慌てて腰を下ろした。

まだこの状況を飲み込めず、ただでさえ大きな目を更に大きくして、私のことを見つめている。

「なんで、ゆき姉がここにいるわけ？」

健人が私に向かって、ささやくように小声で言った。

「健人、紹介しろ！お前の知り合いなんだろ？」

「あ、はい。遠い親戚の浅香雪見さんです。」

「遠い親戚って？」

「えっと、ばあちゃん同士が姉妹だから、はとこって言うやつです。あ、今朝、新幹線の中で話したでしょ。親戚のお姉さんに、うちの猫の写真集を作ってもらったって。その人が雪見さんです。」

「あぁ、それでなんとなく聞き覚えのある名前だったのか。
で、今日お前とここで会う約束をしてたんだ。」

「いや…。」

健人が言葉に詰まったので、慌てて雪見が口を挟んだ。

「あ、すみません！健人くんは何も知らないんです。
私が勝手に、アポも取らずに押しかけてしまって。
申し訳ありませんでした！」

「そうでしたか。まぁ、大阪で映画の舞台挨拶があって、
事務所に寄ってから帰ろうという話になって、ちょうど良かった。
いいタイミングでした。」

「恐れ入ります。」

「で、今日のご用件は、写真集の話ということですが、
どこからその話を？」

「あ、俺です、俺！昨日、ゆき姉と…じゃなくて、雪見さんと
ご飯一緒に行ったんです。で、そんな話になっちゃって…。」

内密だった話をしてしまった事に小さくなってる健人を、
隣の今野さんが、しょうがねぇなぁーという顔で見ている。

雪見は、健人が怒られるかと焦って

「あの、違うんです！健人くんは何も悪くなくて…。」

「大丈夫です。ご親戚ということでしたら、どうぞまだご内密に。」

「わかりました！ありがとうございます。」

「それであなたが、健人の写真集のカメラマンをやりたいと？」

「はい！そうです！まだ決まっていないのであれば
その仕事、是非私にやらせて下さい！」

「ええっ！ゆき姉ぇ！？　うそだろ？
そんな話、昨日してなかったじゃん！」

健人の驚きようといったら、ハンパなかった。

「ごめん！だってついさっき、思いついたんだもん。
絶対私が撮らなくちゃ！って。」

「だって、人撮るの苦手だって、昨日言ってたよね！
だから俺だって、それ以上は何も言わなかったのに。」

「そうなんだけど、さっき、ひらめいちゃったの。
友達んちで健人くんの、前の写真集を見せてもらって。

そのカメラマンさんには申し訳ないけど、
この写真には健人くんの心が映ってないなって…。
健人くんが、可哀想だなって思ったの。」

「ゆき姉…。」

雪見が真っ直ぐ前を見つめて、力強い声で言った。

「今野さん！私、自信があるんです！
絶対に誰よりも、本物の斎藤健人を撮せる自信が！
ただのアイドル写真集じゃない、斎藤健人の魂が宿った写真集を
私なら必ず作って見せます！」

雪見の迫力に今野も健人も、すぐには声が出なかった。

少しの沈黙のあと、健人が今野の方を向いて頭を下げた。

「俺からも、お願いします！
ゆき姉…いや雪見さんに撮してもらいたいです！
俺のこと、生まれた時から見てきてる雪見さんなら、
絶対に今までで一番の写真を撮ってくれるはずです。
腕は俺が保証します！だからお願いしま……」

最後まで言い終わらないうちに、今野が

「わかった、わかった！負けたよ。」と、笑って言った。

「健人。良かったな、親戚に腕のいいカメラマンがいて。
しかも、かなりの美人さんだ。

こいつ、たまに言ってたことがあるんですよ。
写真って、あんまり好きになれない。
表面しか見てもらえないから、ってね。

まぁ、アイドルなんだからしょうがないだろと
言い聞かせてはいたんだけど、
どうもそう思って撮られてるから、あんまりカメラマンに
心を開かなくて…。結構大変なんです、こいつの写真集。」

「えーっ！そんなこと、ないっすよ！
これでも一生懸命、撮られてるつもりなんだけど…。

でも、ゆき姉が撮ってくれたら、俺、今までで一番頑張る！
ぜーったいに一番いい写真集にする！
だから、お願いします！」

今度は健人が、雪見の方を向いて頭を下げた。

雪見は嬉しかった。

健人が私のためにマネージャーさんに頭を下げて、
必死でお願いしてくれた。
そして、健人も私と仕事がしたいと言ってくれた。
あの時、写真集を見せてくれた真由子にも感謝だ。

「じゃあ、さっそく契約を交わしましょう。
今、書類を用意しますから、しばらくお待ちを…。」
そう言いながら、今野さんは応接室を出て行った。

健人と二人きりになった雪見。
急に我に返って、恥ずかしさが込み上げた。

「ごめんね、健人くん。なんか、思いつきで行動しちゃって、
迷惑かけちゃったよね。
友達んちで写真集見た時、パチンってスイッチ入っちゃって、
気がついたらここにいたって感じで…。
でも、本当にいいの?私がカメラマンで。嫌じゃない?」

「こっちこそ、本当に俺のこと、撮ってくれるの?
ほんとは、前から思ってたんだ。

ゆき姉が、俺の専属カメラマンならいいのに、って。」

「えっ！そうなの？知らなかった。」

「だって、俺の心の声だから、言ってないもん。」

健人が笑って言った。

その笑顔を見て、やっと雪見も笑顔になった。

「これから、よろしく！美人カメラマンさん！」

そう茶目っ気たっぷりに健人が言って、右手を差し出す。

雪見は、初めて握る健人の温かな手のひらを
そっと両手で包み込み、
これから始まるであろう二人の関係に
自分自身を祝福した。

しばらくして、今野が書類と写真集を手にして戻ってきた。

「この契約約款に目を通して頂けますか？
それと、健人が今までに出したすべての写真集が、ここにあります。
差し上げますので、次の写真集の参考になさって下さい。」

「わかりました。お心遣いありがとうございます。」

雪見はざっと、すべての写真集を開いて見てみた。

「浅香さんの方から、何かご質問やご提案はありますか？」

「あのぉ、今までの写真集は、どこかに何日間かロケに行って、
そこで撮った写真だけで構成されてるようにお見受けしましたが。」

「はい。大体がそうなってしまいます。
映画やドラマの撮影が途切れないものですから、
どうしても写真集だけに長い時間、割くわけにはいかなくて…。」

ちょっと考えてから雪見が口を開いた。

「私にしばらくの間、健人くんを追わせていただけませんか？
三ヶ月、いや二ヶ月でいいです。

どこか知らない場所に立つ斎藤健人ではなく、
今日も明日も、いつもの場所で生きている斎藤健人を撮ってみたい。
私がファンだったら、よそゆきの顔した健人ばかりではなく　日常の、
普段着姿の健人も見てみたいと思うはずです。

今が八月の終わりだから、これから二ヶ月撮ったとして
十月下旬に撮影終了。そこから編集作業に取りかかって、
クリスマスに刊行でどうでしょう？」

「ふーむ。なるほどねぇ。
確かに今までの写真集は、その為だけに撮影したものだった。よそゆきの顔と言われれば、そうだったかもしれない。普段着の斎藤健人か…。

よし！今回はそれで行きましょう！あなたの案を採用します。
健人も、あなたにだったら付いて回られても　素の自分でいられるでしょう。

こいつ、こう見えても結構人見知りなとこがあるんですよ。
心を開くまでに時間がかかる。
けど、あなただったら大丈夫だ。
なんせ、赤ん坊の時から知ってるんだから。

な、健人！いい企画じゃないか？どう思う？」

今まで、口を挟めるような場の雰囲気ではなかったので
ただじっと、今野と雪見のやり取りを見守るしかなかったが、

やっと健人に発言の機会が回ってきて
慌てて声を出した。

「良いです！そういうの、やりたかった！
もっと、普通の俺を知ってもらいたいと、ずっと思ってたから
そういうの嬉しいです！ありがとう、ゆき姉！！」

「おいおい、これからは仕事の大事なパートナーなんだから、
ゆき姉はないだろ。浅香さん、とか雪見さんとか。」

雪見が笑いながら、今野の方を向いて言った。

「あ、いいんです、ゆき姉で。
健人くんには、ガンガン素の自分をさらけ出してもらわないと困るから、
今野さんはやりずらいかもしれませんが、
私と健人くんとの関係は今まで通り、はとこ同士でいきたいんです。
今までのカメラマンさんが撮れなかった写真を狙うんですから、
他人より近い関係でいたい。
そういう点では私たち、近いですから。」

そう言って雪見は健人に顔を向け、にっこりと微笑んだ。

それを見て健人も、雪見の目を見て微笑み返した。

健人は嬉しかった。

やっと、今まで思ってきた事がひとつ実現する。
やっと、本当の自分をみんなに解ってもらえる。

だがそれ以上に、これから二ヶ月間
雪見と毎日一緒にいられることが、なによりも嬉しかった。

あれ？俺、なんかドキドキしてんだけど。

ドキドキの正体がまだ何者なのか、深く考えもせず
健人はこれからの毎日に思いを馳せた。

所属事務所との契約を無事済ませ、晴れて二ヶ月間の
健人専属カメラマンになった雪見は、
明日からの健人のスケジュールを打ち合わせし
今野、健人の二人と固い握手を交わして、事務所を後にした。

さぁ、明日から忙しくなるぞ！
しばらくは猫ちゃんともお別れだけど、この仕事が終わったら
また会いに行くから待っててね、猫ちゃん！

すっかり暮れた夜の街は、昼間の蒸し暑さを拭い去り、
高揚した心をスッと鎮めてくれる、穏やかな風が流れていた。

そうだな。まずは真由子にメールしておくか。
さっき、せっかく作ってくれたパスタも食べずに
飛び出して来ちゃったから…。
真由子、びっくりするだろうな、この展開に。

真由子の驚く顔を想像したら、嬉しくなってきた。

さっきまで、一日一回のメールでどうのこうのと言ってたのが、
一足飛びに健人専属カメラマンになっちゃったなんて、
真由子、信じてくれるかな?

雪見は、街角に立ち止まって真由子にメールしている間、
自分がとんでもなく、にやついていることに気が付き
慌てて表情を取り替えた。

真由子さま。
さっきは突然帰ってしまい、ゴメンナサイ。
あの後、とんでもない展開になっちゃった!

なんと、この私が健人専属カメラマンになっちまったのです!凄い!

自分でも信じられない！
真由子には何が起こった
か、訳解らんと思うので
後からゆっくり話すね。
じゃあ、これから明日の
準備があるので帰ります
またね。

送信ボタンを押してから、またやっちゃった！
と、がっくりきた。真由子に叱られる。

また、絵文字を忘れた。せっかちなのかな？
絵文字を探してる時間が、もったいなくて…。

自分に言い訳をし、まぁいいや！とケータイを閉じて歩き出す。
すると、すぐにケータイの着メロが鳴り出した。

さては、真由子だな！あの人もせっかちなんだから！

どれどれ、とケータイを開くと、それは健人からの電話であった。

ええっ！健人くんからだ！
どうしよう！

どうしようも何もないのだが、雪見はドキドキして
なかなか電話に出る勇気がなかった。

深呼吸を一度して、恐る恐るボタンを押して出る。

「もしもし、健人くん？」

「あ、ゆき姉？さっきはありがとね！
俺のために、頑張ってくれたんだよね。
俺、めっちゃ感激した！すっげー嬉しかった！！
ねぇ、まだ　その辺にいるの？もう、帰っちゃった？」

健人が電話越しに、早口でまくし立てる。

「いや、まだ事務所の近くを歩いてるとこ。
角を曲がった交差点の前にいる。
友達にメールしてたから…。」

「じゃあ、飯食いに行かない？俺、おごるから。
なんかゆき姉に、お礼がしたい！
明日の打ち合わせも、ちゃんとしておきたいし。」

「お礼だなんて。こっちこそ、凄い仕事をもらえたんだから
健人くんには感謝してる。だから今日は、私がおごるよ。
昨日は健人くんに、おごってもらっちゃったから。」

「俺、今めちゃくちゃ腹減ってるから、すっげー食うと思うけど
ゆき姉、お金持ってんの？」

「失礼だなぁー！健人くんにおごるくらいのお金は
持ち合わせてますよーだ！
けど、どんだけ食べる気してるの？」

「あはは！冗談、冗談！そんなに食わないから安心して。
じゃあさ、俺、そっちに行くから、そこで待ってて。
絶対、待っててよ！じゃ！」

うそ！健人くんが来る！
どうしよう！こんな人混みの中なのに。
こんな所に斎藤健人がいたら、街中パニックだ！
どうしよ、どうしよ！

雪見がどうしていいのかわからずに、一人で焦っていると
後ろの方から大きな声で
「ゆきねぇ～！」と　呼ぶ声がした。

ええっ！嘘でしょ？
なんでそんな大声で…

慌てて後ろを振り返ると、
黒縁眼鏡に大きなマスク、黒い帽子を目深にかぶった健人が、
息せき切って人混みをかき分けながら、走ってくるのが見えた。

「お待たせ！あー、走った走った！
ゆき姉がどっか行っちゃったら困るから、
事務所から全力疾走してきたよ。あー、疲れた！」

雪見は、自分のために息を切らして駆けてきた健人が

愛しくて愛しくて、思わずギュッと抱き締めたい衝動にかられた。

いかんいかん！なに考えてんの、雪見！
こんな街中で。
とにかく早く、どこかのお店に入らなくちゃ。
こんな所で健人くんだってバレたら、大変！

雪見はとりあえず、歩き出した。
健人の腕を引っ張りながら。

歩きながら、素早く
二、三軒のお店のリストを頭の中から引き出し、
一番近くで健人の気に入りそうな店を、一軒決めた。

「ねぇ、ゆき姉！どこまで歩くのさ。」

「もうちょっと！」

「俺、喉乾いた！腹減った！」

駄々っ子のような幼い顔を見せる健人に、
雪見はクスッと笑いながら

「もうちょっとだから、頑張って歩いて！」

と、お母さんのように手を引いて先を歩いた。

「ほら、到着！この辺りでは、ここが一番の私のお薦め。
たぶん、健人くんも気に入ってくれると思うけど。」

「居酒屋どんべい？ずいぶん渋い名前だね。
おじさんの集まってそうなお店だけど…。」

予想通り、健人が躊躇したので可笑しかった。

「いいから、いいから。さ、入って！」

ビルの地下一階にあるその店は、
一歩中へ入ると店名からは想像のつかない、お洒落な店だった。
お洒落なんだけれども、どこか懐かしい
居心地のよさそうなブースが、いくつにも分かれている。

雪見はここの常連らしく、カウンターの中にいたマスターに
一声かけてから、店の奥へと進んだ。

そこは四人も入れば一杯になる、掘りごたつになった
小さな個室であった。

「ごめん！ちょっと狭いかな？
でも、この微妙な狭さが、段々と落ち着いてくるんだよね。
ここの料理は、なんでも絶品なの！
マスターがアイディアマンで、いつも帰りにレシピ聞いて帰るんだ。
ま、酔っぱらって、聞いても忘れることの方が多いんだけど…。」

その時、「入るよ」と、さっきのマスターが自ら注文を聞きに来た。

「いらっしゃい、雪見ちゃん。
雪見ちゃんが、初めて男の人を連れてきたから、
挨拶しとかないとと思って。

どうも。ここのマスターの中居です。
雪見ちゃんには、しょっちゅう来てもらって…。」

「やだな、マスター！
私がとんでもない酒飲みに聞こえるでしょ！
嘘だからね、健人くん。」

「お、健人くんって言うんだ。よろしく、健人くん！」

そう言って、マスターは握手を求めた。

健人は、握手を求める相手にマスク姿は失礼かと、
急いでマスクを外した。

「あっ！！」　マスターが大声をあげて、手を引っ込める。
目を白黒させるマスターの顔が面白かった。

「も、もしかして、斎藤健人？」

「ども。斎藤健人です。」

ぺこんと健人が頭を下げる。

「ちょっと、雪見ちゃん！
なんで、雪見ちゃんが斎藤健人と一緒にいるわけ？」

さっきの大声から一転、いきなり蚊の鳴くような声で言った。

「ごめんごめん、驚かせちゃった？私たち、遠い親戚なの。
明日から一緒に仕事することになって、今日はその打ち合わせ。

ねぇねぇ、詳しい話は後でするから、先にビール持ってきてよ！
もう、喉がカラカラなんだから。
あ、健人くんも最初はビールでいいんだよね？
じゃ、ビール二つ、大至急お願い！
あと、お腹もペコペコだから、すぐできる美味しい物をお任せで。
あと、ここに健人が居ることは、もちろん……」

「内緒でしょ？わかってるって。信用第一だからね。
急いでなんか、作ってくる！」

「ビールが先だからねー！」

バタバタとマスターが部屋を出て行ったあと、雪見が健人に謝った。

「ごめんね、健人くん！
あのマスターは、絶対に悪い人じゃないから安心して。
まぁ、びっくりするのは無理ないもん。それも最初だけだから。

このお店は、きっと健人くんも気に入ってくれると思う。
お料理も美味しいし、安いし、なによりここの常連さんは
あのマスターに、元気をもらいに集まってくるんだよ。
私も今まで、ずいぶんと助けられた…。」

そう話していると、「開けるよー」と言って
マスターがビール二杯と、たくさんの料理を運んできた。

「取りあえず、これ食べといて！
すぐ、もっとうまいもん、作ってくるから！」

「すっげー、うまそう！いただきま～す！」

健人が美味しそうに食べる横顔が、雪見は大好きになっていた。

寄り添う心

「めっちゃ、美味いです！この唐揚げ！こっちのポテトグラタンも、すっげー美味すぎる！」

ビールのお代わりを運んできたマスターに、健人が興奮ぎみに叫んでいる。

そんな無邪気な健人を見て、マスターも私も満足していた。

「ねぇ、気に入ってくれた？このお店。」

「うん！めちゃ気に入った！みんなにも教えてあげたい！今度、俺の友達、連れてきてもいい？」

「もちろん！マスターも喜ぶよ。」

「やった！今度、当麻を連れてこよ！」

「当麻、って、三ッ橋当麻くんのこと？」

「そう。同じ事務所で仲いいんだ！俺より一個下だけど、すごく気が合う。芸能界で一番の友達。」

「そうなんだ。良かった！
ちゃんと近くに、親友がいるんだね。安心したよ。

私ね、健人くんが俳優さんやってるって聞いて、
本当はすごく心配だったんだ。
私の知ってる健人くんは、
人見知りで恥ずかしがりやさんだったから。
競争の激しい世界で、うまくやっていけるのか心配だった。
けど、昨日と今日で、少し安心できたかな。
私の知らない間に、立派な大人になったんだね。」

「まただ。いっつもゆき姉は俺のこと、子供扱いするんだから！
俺、こう見えても酒だって、結構強いんだよ！」

「あーら！私だって、お酒なら負けないよ！キャリアが違うんだから。
お酒歴一年生に負ける気は全くありません！」

「じゃあ、明日の晩飯賭けて、勝負ってのはどう？」

「望むところよ！負けないからね！」

それから二人はビールを片手に、まずは明日からの打ち合わせをした。

「明日の撮影は、取りあえずドラマの撮影現場からスタートするね。

二ヶ月の間には、寝起きの顔だったり、お風呂に入ってるとこだったりも、
徐々に撮ってくけど…。」

「えーっ！そんなとこも撮すの！？」

「もちろん！ファンが知りたいのは、そういう日常の健人なんだから。
私はファンを代表して、みんなの知りたいを叶えてあげるの。」

「ゆき姉って、俺のファンなの？」

「え？も、もちろん親戚一同、みんな健人くんのファンに決まってるじゃない！」

「なんだ、それだけ…。」

「それだけ、ってなによ。それじゃ、ご不満？」

「俺はさぁ、ゆき姉が俺の専属カメラマンになってくれて、めちゃくちゃ嬉しかったんだよ！
俺のこと、本当にわかってくれた人は、ゆき姉が初めてだから…。

俺さぁ、今日ゆき姉が今野さんに言ってくれたセリフ、一生忘れないと思う。
俺、この人のために、明日から一生懸命働こうと思った…。」

「結構、お酒回ってきたでしょ？やっぱ、私の勝ちかな？」

「まだまだ！」

それから二人で赤ワインを開け、改めて明日からよろしく！と、乾杯をした。

「俺、最近ワインが好きになってさ。
飲みながら、俺って大人だなぁとか思うわけ。」

「そんなこと、思いながら飲んでるうちは、まだ子供！」

「子供はお酒、飲んじゃいかんでしょ！だから、大人！」

「はいはい！健人くんは大人です！」

そんなくだらない話やお互いの猫の話、家族の話や
これからの夢の話など、夜が更けるのも忘れて語り合う。

二人とも、自分が何も飾らずに素の自分でいられることを
居心地良く思っていた。

いつまでも、こうして二人でいたいとお互いが感じていた。

「あ、そうだ！聞きたかったことがあるんだ！

ねぇ、昨日健人くん、台湾から帰って来たとき、
成田から私にメールくれたよね？
でも私あの時、羽田に健人くん迎えに行って、
確かに健人くんが到着ロビーに出てくるの、見たんだよね。

あれって、私にくれたメール、嘘だったの？」

「いや、本当に俺は成田で降りたよ。
ゆき姉が羽田で見た俺は、実は俺の影武者！
パニックが予想される時は、事務所がそっくりさんを用意すんの。」

「えーっ！そうなの？背格好もそっくりだったから、
てっきり健人くんかと…。
健人くんが私に嘘をついたのかと、ずっと気になってて…。」

「俺、ゆき姉に嘘なんて、一生つかないよ！
好きな人に嘘つく男は最低だと思う。」

「えっ？好きな人、って。」

「い、いや、これは一般論であって、俺が、って意味じゃなくて…。
」

二人とも、ビール五杯ずつに赤ワインを一本空けたところで、
急に酔いが回ってきた。

今日一日の、いや、ここ六時間ばかりの間に
二人の距離は一気に縮まった。
明日からは二人、いつも一緒にいれる。

そう思うと、心に安らぎが訪れて、
昨日からの疲れも訪れて、眠気も訪れて…。
いつしか二人は、寄り添うようにして
畳の上で深い眠りに落ちて行ってしまった。

……雪見ちゃん！

…雪見ちゃん！起きろー！雪見ちゃん！

「ええっ！ここ、どこ？　え？マスター？
うっっそ！私たち、ここで寝ちゃったの？？
なんで起こしてくれなかったの！」

「あんまり、二人が気持ち良さそうに寝てたから、
もう少しだけ寝かしてやろうと思ってるうちに、
俺もカウンターで寝ちゃった！」

「で、いま何時？」　「朝の五時。」

「ええーっ！五時なの？大変！
健人くん、起きて！大変だよ、早く帰って準備しなきゃ！」

「いってぇ！頭がぐらぐらする。なんか、気持ち悪いし…。」

「そんなこと、言ってる場合じゃない！早く！早く！
帰ってシャワーする時間あるかな？服もシワシワだし。
カメラの点検もしてないよ！
やばい！初日から遅刻はやだ～！！」

しーん　と静まり返った街の中に
二人のドタバタと騒ぐ声だけが響き渡り、
一足早く起こされた街路樹が、さわさわと朝の運動を始めた。

今日からの二人を祝福するかのように、
オレンジ色の光がビルの谷間に降り注いでいる。

さぁ、ここからが私たちの、記念すべき第一歩。
もう、迷うことはなにもない。

初仕事

朝の五時過ぎ。まだ動き出す前の街に、
慌てふためく二人の姿があった。

タクシーをひろい、急いで二人で乗り込む。

健人と雪見のマンションは、同じ沿線上にあり
先に健人が降りなければならない。
なのに、先に乗り込んでしまったのは健人だった。

「なんで先に乗っちゃったの？最初に降りるのは健人くんなのに！」

「しょーがないじゃん！後ろから押したのはゆき姉でしょ！」

タクシーの運転手さんが、チラッとミラー越しに後ろを見る。

「やばっ！もう早、来ちゃったよ。」

そう言いながら、健人が鞄の中からマスクを取り出し、慌ててつけた。

「今日の花粉はヤバいかも！
俺のレーダーが、マックスに反応してるよ。」

「健人くん、花粉症なんだ。大変だね、この時期。」

「ゆき姉は平気なの？」

「今のところは大丈夫そう。
でもあれって、ある日突然なるんでしょ？健人くんも？」

「そう。ほんとにある日突然！前の自分に戻りたい！」

「なんか、目もすごい充血してるけど大丈夫？
これからドラマの撮影だけど…。
私は、ありのままの健人くんを撮すのが仕事だから平気だけど、
ドラマはそうはいかないでしょ？」

「大丈夫、大丈夫！こう見えても一応プロだと自覚してるから。
当麻と朝まで飲んで、一睡もしないで仕事行ってもわりと普通に仕事できる。俺、若いから！」

「あっ、そう！若くて良かったですねぇ。どうせ私なんか…。」

「ゆき姉って、いくつだっけ？」

「ね？それ嫌み？
一回り違うんだから、健人くんの年プラス十二でしょ。」

「ゆき姉は三十代になんか、絶対に見えないよ！」

「じゃあ、四十代に見える？」

「なに言ってんの！もっと自分に自信を持ちなよ！
ゆき姉は昔から綺麗で頭が良くて、俺の自慢の姉ちゃんだったんだ

から！
今だって、昔と何にも変わらないよ。」

「姉ちゃんかぁ…。そうだよね。
健人くんにとって私はお姉ちゃんだよね、親戚の…。」

なんだか、夢から覚めた思いがした。

急に現実に引き戻され、一気に酔いも醒めた。

そう、これから一緒に仕事をしていくのなら、「親戚のお姉さん」のスタンスがちょうど良い。
健人くんがそう思っているのなら、それでいいんだ…。

自分で自分を納得させると、少しは踏ん切りがついた。

よし、今日から仕事、頑張らなくちゃ！

そうこうしているうちに、健人のマンションに到着。
一度、雪見が降りてから健人を降ろす。

「じゃあ、また後で。急いで支度してね。
スタジオで待ってるから。じゃ！」

そう言って、雪見は再びタクシーに乗り込み、

急いで自宅を目指す。

着いたらまず、めめにご飯をあげて、お水を取り替えて、
シャワーをして、カメラの準備をして…

降りてからの手はずを順番に頭に叩き込み、
一分たりとも無駄にはできない、仕事前の時間に備える。

「お客さん、着きましたよ！」

よし、スタートダッシュだ！

大急ぎで部屋の鍵を開け中へ入ると、まだ寝ぼけ眼のめめが
ご主人様のいなかったベッドから飛び降りて、
私の足元にすり寄ってきた。

「ごめんねぇ、またすぐに出掛けなくちゃならないの。
今、ご飯あげるから、ちょっと待ってて！」

いつもよりスピードアップして、めめのご飯と水を整えた。

お次はシャワーだ！

初日から、ぼけっとした顔して行くわけにはいかない。
なんせ私は、今をときめくイケメン俳優　斎藤健人の
専属カメラマンなのだから！

お化粧も抜かりなく。健人くんの親戚でもあるわけで、
健人くんが恥ずかしくないように、
「綺麗なお姉さん」でいつもいなくちゃ！

服もこんな感じが初日はいいだろう。
第一印象って、めちゃくちゃ大事！
特に女のカメラマンは、男に比べて甘く見られる。

いつもは猫が相手だから、地面に腹這いになったり
草っ原に寝転んだり、汚してもいい格好で仕事をするが、
今日からの私は、そうはいかない。
仕事のできる女に見られたいから、真由子の真似を少ししてみた。
いい感じ。

さぁ、カメラのチェックも終わったし、準備完了！
いざ、斎藤健人の撮影現場へ。

初めて目にするドラマのセット。へぇ、こうなってるんだ。

それは健人演じる主人公、高嶋隼人の自宅マンションのセットで、
まるで本当に、ここが健人の部屋かと錯覚するような
生活感溢れる造りになっていた。

感心しながら、あちこちキョロキョロ見渡しているとスタジオの入り口方面から「斎藤健人さん、入りまーす！」という声がして健人がスタジオに入ってきた。

振り返って見てみると、そこにはさっきまで一緒に飲んでいた無邪気で柔らかで、少し子供っぽい親戚の健人ではなく、身体中からオレンジ色のオーラが見えるようなキリッとした表情で堂々とした、俳優の斎藤健人が立っていた。

すごい！私の知っている健人くんと、俳優の斎藤健人とは全くの別人なんだ！こんな健人くんのオーラは感じたことがない。

スタジオ入りの瞬間から、シャッターを押そうと思っていたのにその存在感に圧倒されて、すっかりタイミングを逃してしまった。

いけない！これは私も真剣勝負で挑まないと。

俳優　斎藤健人の顔があってこそ、素の斎藤健人が存在するんだ。どれも本当の健人くんなのだから、どんな顔も撮り逃してはならない！よし、じゃ始めるか！

雪見にもスイッチが入り、一瞬で鋭いカメラマンの目に豹変した。

本番中は、シャッター音が入ってはいけないので撮せない。
打ち合わせやリハーサル、休憩時間などを狙って撮すことにする。

なるべく本人の集中が途切れないよう、
望遠レンズで離れた場所から狙うことにした。
それはまるで、なかなか草むらから出てこない子猫を、
木の陰からそっとのぞく、いつもの自分のようだ。

結構、これ得意なの。

なんだかファインダーの中に映るのは、
いたずらっ子の可愛い目をした子猫のような気がした。

「本日の撮影はすべて終了です！お疲れ様でした！」

そう声があがると、やっと健人の表情が緩み笑顔が見えた。
私はその瞬間を逃さずにシャッターを切り、
こっちに向かって歩いてくる健人に、最後までカメラを向けた。

私が守ってあげる

「お疲れ、ゆき姉！俺、どうだった？」

ゆき姉！と健人に呼ばれて、パチンと私のカメラマンスイッチがＯＦＦになり、
静かにカメラを持つ手を下に下ろした。

「お疲れ様、健人くん！
かっこよくて、惚れ惚れしながらカメラ覗いてたよ。
すごい役者さんだなぁーって。初めて尊敬した！」

「初めてかよ！まぁ、そうだね。
普段の俺に、尊敬ポイントは確かにないわ。
で、写真はうまく撮れた？
スタジオの中って、結構制限があるから大変だったんじゃない？」

「大丈夫！いい表情撮れたよ。
私の方こそ、お芝居の邪魔しなかった？
あんまり視界に入らないように、撮ったつもりなんだけど。」

「ぜんぜん、ゆき姉がどこにいるのか解らなかった！
二日酔いで、途中で帰っちゃったのかと思ったよ。」

「そんな訳ないでしょう！健人くんこそ、二日酔いでしょ？」

「ぜーんぜん！まだまだ飲めたよ！」

「じゃあ、昨日の賭けは引き分けかぁ。
せっかく今日は、健人くんのおごりだと思ったんだけどな。」

「まぁ、負けてないけど、おごってあげる。
今日は、写真集撮影スタート記念日だから！
けど、このあとの雑誌のインタビューが終わってからね。
このままセットの中で取材受けるから、そこで待ってて。」

二人の親しげな様子に、周りにいた人達がざわめいた。

それに気付いた健人が、慌てて雪見を紹介する。

「あ、こちらはフリーカメラマンの浅香雪見さんです。
今日から二ヶ月ばかり、僕の写真集の専属カメラマンとして
同行するので、よろしくお願いします！」

周りのスタッフに向かって、ぺこんと頭を下げた。

それを見て、雪見も慌てて自己紹介をする。

「ご挨拶が遅れまして失礼いたしました。
わたくし、本日から斎藤健人さんに同行させていただく
浅香雪見と申します。
現場の皆様にご迷惑にならないよう配慮いたしますので、
どうぞよろしくお願いいたします。」

大人な挨拶をする雪見を、健人は誇らしげに見守っていた。
かっこいい、大人の女性だなぁーと思いながら
改めて雪見の姿を見直した。

ゆき姉ってよく見ると、今野さんの言う通り
美人の部類に入るよなぁ。
美人って言葉はなんか、ニュアンスが違う気もするけど、綺麗だよね。
こういう女優さんがいても、おかしくないのに。

健人の視線に気付いた雪見が、笑いかけた。

「あのね。みんな、私と健人くんの仲を疑ってたんだから！
あんまり親しそうに話してるから、年上の彼女かと思ったって！
で、赤ちゃんの時から知っている、遠い親戚だって言ったら、みんな驚いてたよ。
今度、健人くんの赤ちゃんの時の写真見せて！だって。」

雪見が嬉しそうにしていて、健人は安心した。
この雰囲気に馴染めるか、少し心配だったから。
でも、雪見は明るくて、ぱっと咲いたひまわりのような人だから、
自然と周りに人が集まってくるのも不思議ではなかった。

健人は笑いながら、

「そう！でもチンチン丸出しの写真だけはやめてね。
あ、この際だから、猫の写真集とか売り込んじゃえば？
結構ここのスタッフさんって、猫好きな人多いよ！
俺もこの前、コタとプリンの写真集、みんなに回し読みされたもん。
欲しい！とか言われたけど、ダメ！って言った。」

「そうなの？なんか嬉しいな。
コタとプリンの写真集、私の周りでも評判良くって、
ちゃんと出版すればいいのにって、よく言われる。
そうだ！健人くんの写真集が終わったら、
今度はコタとプリンの写真集、ちゃんと編集し直そうかな？」

とても上機嫌な雪見を、健人は微笑ましく眺めていた。

とりあえず、初日は無事終了だ！

そこへ、「斎藤さーん！取材の準備が整ったので、
セットの方へお願いしまーす！」と、声がかかる。

「じゃあ、ゆき姉！もうひと仕事してくるから待っててね！」

そう言い残し、健人が再びセットの中へと入って行った。

雪見はもう一度、カメラバッグを開けてカメラを取り出し、
健人に気付かれない角度からファインダーを覗いた。

お芝居をしてる健人くんは、もちろん別人に見えるけど、
取材を受けてても、やっぱりアイドルの斎藤健人なんだ。
ずっとアイドルで居続けるのって、大変なんだろうな。
すでに出来上がったイメージから、外れるわけにはいかないし、
寝る時に素の自分に戻ったとしても、
また朝になれば、アイドルの顔をして仕事に行かなきゃならない。
なんだか、ちょっとかわいそう…。

私がそばにいたら、少しは素に戻れる時間が増えるかな。
忙しい毎日でも、ほんのちょっとの空き時間に
心を休めさせてあげられるかな。
なにか健人くんの、助けになりたい…。

そう思いながら、ファインダーの奥の健人を見つめていた。

今日は月曜日か。
今週の木曜日には、久しぶりに実家でのんびりできるんだね。
あと、明日とあさって、頑張って仕事しようね！

その時、「どーも、お疲れ様でした！ありがとうございます！」
と、チーフマネージャーの今野さんの声がした。

どうやら取材が終了したようだ。

ぱたぱたと健人が雪見の前に、駆け寄ってくる。

「腹減ったぁ～！ゆき姉！早くご飯に行こ！！　俺、死んじゃう！」

と、また昨日の夜と同じ、駄々っ子の健人が立っていた。

雪見は、「しょーがないなぁ！じゃあ、とっておきのお店第二弾を紹介するか！」と、わざとお姉さんぶって言った。

健人は、「やった！今日もゆき姉のおごりになった！」と無邪気に笑い、一瞬で素の斎藤健人に戻ってくれた。

この二ヶ月間は、私が守ってあげる。

健人くんの疲れた心を、私が癒してあげる。

そのためだけに、私はあなたのそばにいる。

休日前夜

健人とスタジオを出て、長い廊下を歩き出した時
後ろから「浅香さん！」と呼ぶ声がした。

振り返ってみると、健人のチーフマネージャーの今野さんが、
二人に向かって歩いて来る。

二人同時に、「お疲れ様でした！」と今野さんに声をかけると
「いや、こちらこそお疲れ様でした。どうでしたか？初日の撮影は。」
と、雪見に向かって話しかけた。

「ええ、無事に終わらせていただきました。
昨日、急に決まったお話でしたから、ここに来るまでは
正直、少し不安だったのですが、
今野さんが話を通しておいてくださったお陰で
スムーズに仕事を進めることができました。ありがとうございます。」

そう言って雪見は、今野さんに頭を下げた。

「健人も、今日はやたらと調子良さそうなんですよ。
こいつ、朝に弱いから、いつも早朝の仕事はテンション上がらずに
こっちも苦労するんですけど、今日はスタジオ入りした時から
顔つきが全然違ってました。
これも、雪見さんのお陰かな？」

「とんでもないです！私のお陰だなんて。
私はただ、健人くんが少しでもリラックスしてくれて、
仕事の合間に素の表情を見せてくれたらいいなと思って。
じゃないと、私が撮らせてもらう意味がなくなっちゃいます。」

「いやぁ、あなたにお願いして本当に良かった！
いい写真集になりそうで、期待してます。
明日から、結構タイトなスケジュールになりますが、
またよろしくお願いしますね！

じゃ、僕はこれから事務所に戻りますので、あとは健人をよろしく。
健人、お疲れ！今日もあんまり飲み過ぎるなよ！また明日な。」

そう言い残し、今野さんは二人を追い越して出口の方へと
足早に去って行った。

「あんまり飲み過ぎるなよ！だって。
今日も、ってことは、いつも飲み過ぎってこと？」

雪見が健人に聞く。

「そんなに飲んでないから！まぁ、大体毎日は飲んでるけど…。
けど仕事終わったら、ふぅ～って、肩の力抜きたくなるでしょ！
毎日抜かないと、肩こっちゃうよ。」

「そうだね。私も同じ。
一日の終わりには美味しいご飯を食べて、美味しいお酒を飲んで

あー今日も幸せだなぁ～と思いながら眠りたいもん。」

「わかるわかる、その気持ち！
俺とゆき姉って、結構似てるよね。やっぱ、はとこだからかな？」

「まぁ、ばあちゃんが姉妹だから、同じ遺伝子は受け継いでるけど、
はとこが似てるかどうかはわからない。
けど、私と健人くんって、思うツボが一緒だよね。
だから、全然気を使わなくて済む。」

「ほら！俺も今、同じことを思ってた！
ゆき姉には全然気を使わなくて済むから、一緒にいて楽だなぁって。
俺たち、すごくない？」

「すごいすごい！だから早くご飯食べに行こう！お腹ぺっこぺこ！」

「俺も思った！」

「きりがないって！」

漫才のようなやり取りが楽しくて、二人は笑い転げながら
スタジオをあとにした。

「今日は、どこに連れてってくれんの？」

「えーとね。時間がもったいないから、この近くにしようと思う。
頭に浮かんでるお店が二軒あるんだけど、

健人くんは中華とイタリアン、どっちの気分？」

「えー！その二択はまずいなぁ。どっちも食いたいに決まってんじゃん！」

「うーん、どうしよう。私も決められないや。
じゃあさ、じゃんけんして私が勝ったら中華で
健人くんが勝ったらイタリアンっていうのはどう？」

「うん、どっちが勝ってもいいや！じゃあ、じゃんけん、ぐー！
やった、俺の勝ち！ワインが飲める！」

「よし、じゃあ今日はイタリアンってことで、レッツゴー！」

夜の街を、黒い帽子に黒い眼鏡、大きなマスク姿の怪しい男と、
それに寄り添う年上女が、楽しげに通り過ぎた。

この男が、イケメン俳優　斎藤健人と気づくものは誰もいない。

人目を気にしなくて済む夜が、二人は大好きだった。

二日後の水曜日。

この日も朝早くから、健人のスケジュールはぎっしりだ。

ドラマに取材、ラジオの生放送にテレビの収録。

朝六時の撮影に始まって、すべて終わったのは夜の十一時を回っていた。

「はぁ〜っ。やっと終わった。さすがに今日はしんどかった！」

健人の目は赤く充血し、目の下にはくまができていた。

「お疲れ様。大丈夫？健人くん。」

「うん、大丈夫だけど、早くコンタクトを外したい！
ちょっと待ってて。」

そう言って控え室に戻り、コンタクトを外してメイクを落とした。

いつもの黒縁眼鏡をかけて帽子をかぶり、さぁ帰ろう！
と、雪見とテレビ局の裏口を一歩出たとたん

「キャーッ！健人だぁー！！」

出待ちをしていた多くのファンに、一瞬で取り囲まれてしまった。

キャーキャー言いながら健人を囲んだ、何重もの女の子の輪から
あっという間に弾き出された雪見は、
それを遠巻きに見ながら、改めて健人の人気を思い知らされた。

そうだよね。今一番人気の斎藤健人だもんな。
みんなだって、少しでもそばに近づきたいよね。
いいよ。せっかく会えたんだから、握手してもらいなさい。

雪見はなぜか、少しの嫉妬心も覚えず、
ただこの状況が落ち着くのを、じっと見守るだけだった。

だが、健人は違った。
一刻も早くこの場を立ち去り、雪見とご飯に行きたかった。

健人が、自分を取り囲む女の子たちにお願いしてる。

「ごめんね！これから急いで行かなきゃならない所があるんだ！
悪いけど行かせてね！遅れると困るから！」

そう健人が言うと、好きな人を困らせてはいけないと思ったのか、
一人二人と健人のそばから離れていった。

「ごめん！またね！」

最後は、健人が女の子たちの間をすり抜けるようにして、
離れた場所にいた雪見の所まで走って行き、雪見の手を取って
近くに停まっていたタクシーに飛び乗った。

「はぁ～っ。最後に余計疲れた！」

「だって、今日に限ってマスク忘れてんだもん。
見つからない方がおかしいって！
で、急いで行かなきゃならない所って？」

「もちろん、ゆき姉とのご飯！間違ってないだろ？」

「ま、いっか！明日はやっと休みだもんね。
おばさんの手料理、すっごい楽しみにしてるんだ！
私、明日十時に寄るとこあるから、健人くん迎えに行くの
十時半頃でいい？着いたら電話するね。」

二人は明日の休みに思いを馳せて、幸せな気分に浸っている。
それはまるで、実家に里帰りする新婚カップルのように見えなくも
なかった。

待ちに待った休日！

今日は木曜日。
本当に久しぶりの、健人の完全休養日である。

ここ何ヵ月間か、全くのオフというのは無かったので
とにかくこの日を心待ちにしていた。
十時半頃、雪見が車で迎えに来るというので健人は、朝はのんびり
とベッドの中で、最近の睡眠不足を解消していた。

あぁ。今日はゆき姉が、俺んちに泊まってくれるんだ！
昼飯食ったらゆき姉を、昔よく遊びに行った河原の公園にでも
連れてってあげよう！俺も東京出てから行ってないや。
もう変わっちゃったかな。懐かしいだろうな。

色々、実家に着いてからの事に思いを巡らすと、ワクワクしてきて
それ以上は寝ていられなくなった。

ベッドからぴょんと飛び起き、ブラインドを上げる。

夏の終わりのギラギラした太陽が、すでに健人の姿を捕らえていた。

うわぁーっ！今日も暑くなりそうだ！

健人は大きく伸びを一度して、バスルームへと歩き出した。

一方、雪見は朝早くから起きて、真由子にパソコンからメールを送っている。

朝のメールチェックをしていると、真由子からのメールが届いていた。

開いて見ると、急な出張で今、ニューヨークにいるという。
あのあと、どうなったのか！と相当なおかんむりだ。

雪見は、しまった！と頭を抱えた。

日曜日、真由子の家で作戦会議中に突然家を飛び出してから
一度メールをしただけで、その後の忙しさにかまけて
まだ詳しい話をしてはいなかったのだ。

あー、またやっちゃった！
連絡しようしようとは思ってたんだけど…。

雪見は大急ぎで、あれからのことをメールした。

真由子の家を出てから、健人の事務所へ行ったこと。
健人の写真集のカメラマンにしてほしいと、自分を売り込んだこと。
そして今は健人専属カメラマンとして、毎日一緒に仕事してること。
今日はこれから健人と一緒に、健人の実家へ行ってくること。

それらの詳しい話を打ち込みながら、雪見は不思議な気持ちになった。

こんな凄い出来事が、たった五日ばかりの間に起こっていたなんて。
あの時真由子んちで、健人くんの写真集を見ていなかったら
今の私はいなかった。

そう思うと、真由子に感謝こそすれ、こんな仕打ちはなかろうと
ひどく申し訳ない気持ちで一杯になった。

真由子に非情を詫び、帰ったらお礼をすると約束した。

すると、すぐに真由子からの返信が…。

健人に会わせてくれたら、すべてを水に流す！
もう、実家にも連れてく仲なら、健人もそれぐらい
文句は言わないでしょう。
約束したからね！ちゃんと私を紹介してよ！

案の定というか、ほらきた！というか、そうなることは目に見えていたが
いつまでも内緒にしておく訳にはいかないので、仕方ないかと諦めた。

パソコンを閉じ、そろそろ出かける準備を始める。

簡単に朝食を取り、シャワーをする。
お化粧をしてから化粧道具を鞄に詰め、着替えも用意した。
めめに多目の餌を二ヶ所置き、水もたくさん入れてやった。

「めめ。明日帰るから、それまでいい子にしててね。
こういう時、もう一匹お友達がいると寂しくないのかなぁ。
そのうち考えておくね。」

めめの頭をなぜてやり、しばしの別れを惜しんだ。

よし、出かけるとするか！
まずは、この前予約してきたケーキを取りに行かなくちゃ。

雪見は、戸締まりを確認してからマンションを出発した。

十時の開店ちょうどに店の中へ入り
頼んでおいた品を受け取って、代金を支払う。
思ったよりもスムーズに済んだ。

うーん、これから健人くんちに迎えに行っても少し早いな。
途中のコンビニに寄って、車の中で食べる
おやつと飲み物を買って行こう。

車で少し走って、駐車場の空いているコンビニに入った。

ええと、健人くんのいつも飲んでる野菜ジュースと私の缶コーヒー。
サンドイッチも買っておくかな。
おやつはこれが好きそうだな。まぁ、私が食べたい物だけど。
隣で退屈だったら困るから、雑誌でも買って行こう。

ちょうど今日発売の、健人が表紙になった雑誌が二冊あったので、
それもカゴに入れてレジへと急ぐ。

よし、準備ＯＫ！健人くんを迎えに行こう！

健人のマンション前に到着。車の中から電話を入れる。

「もしもし、健人くん？おはよう！準備できてる？
もう下に着いたから、用意できたら降りてきて。」

これから健人を乗せて、埼玉の健人の実家までドライブだ。

電話を切った途端、なんだか急にドキドキしてきた。

どうしよう、緊張してきちゃった！
あんなに毎日、お酒を飲みに行ってご飯を食べる間柄になったのに
なんで今頃…

そんな事を考えているうちに、健人がマンションから出てきた。

「おはよう！ゆき姉。なんか朝から、めっちゃ暑くね？
エアコン効いてる？ゆき姉の車。
俺、朝飯食ってないから、どっかコンビニ寄って行きたい！」

車に乗り込んできた健人は、やたらとテンションが高い。
まるで遠足のバスに乗っている、小学生のようだ。

「そんな事かと思って、ちゃんと朝御飯買ってきたよ！」

「うわ、さすがゆき姉！俺のこと、わかってる！
なになに、サンドイッチ？俺、コンビニで買おうと思ってた！
いつもの野菜ジュースもある！すごいね、ゆき姉って！」

いつまでたってもハイテンションな健人は、
そのあともひたすらしゃべり続け
結局二冊の雑誌は、一度もページを開かれることもなく
レジ袋の中で眠ったままだった。

さぁ、みんなが待っている家へと急ごう！

さまよう健人

「おかーさーん！お兄ちゃん達、帰ってきたよー！」

ちょうど玄関先で、花に水やりをしていたつぐみが
雪見の車が到着したのに気が付き、
キッチンにいる母に向かって大声で叫んだ。

「よっ！ただいま！」

「早かったね、お兄ちゃん！」

「ゆき姉が、結構飛ばし屋だったから。」

「誰が飛ばし屋だって？こんにちは、つぐみちゃん！
今日はお世話になります。」

そう言って、雪見がつぐみに頭を下げた。

「ゆき姉がうちに泊まるのなんて、何年ぶり？」

「いつ以来だろ？十年以上前なことは確かだわ。」
健人と雪見が話しながら家に入って行った。

「おじゃまします、おばさん！お言葉に甘えて来ちゃいました。」

「いらっしゃい、雪見ちゃん！よく来てくれたわ。
いつも健人がお世話になって、ありがとうね！」

「いいえ、こちらこそ、健人くんのお陰で
こんな大きな仕事をさせてもらって。本当に感謝してます。」

ここの家族には、雪見の仕事が決まってすぐに
健人からのメールが入ったそうだ。

「もう、お兄ちゃんのメール、めちゃくちゃだったんだから！
どんだけ嬉しかったのかは知らないけど、
意味理解するのにみんなで悩んだんだよ！
専属カメラマンってことだけは、理解できたけど。」

「俺、そんな変なメール、送った？
自分じゃ、ちゃんと打ったつもりなんだけど。」

「だいたいお兄ちゃんのメール、字ばっかりで読みにくいの！」

「おめーのメールこそ、絵文字ばっかで読みにくいわ！」

雪見は可笑しかった。

私といる時の健人くんは、甘えん坊の弟みたいなのに
ここに帰った健人くんは、ちゃんとお兄ちゃんの顔になるんだ。
つぐみちゃんも、自慢のお兄ちゃんなんだろうな。

「さぁさ、お腹すいたでしょ？お昼ご飯用意したから食べなさい。」

「えーっ、俺ずっとお菓子食ってたから、あんまり腹減ってない。」

「なに言ってるの！あんたはいいけど、雪見ちゃんは運転してたんだから
お腹すいてるでしょ！」

「ゆき姉も、なんだかんだ言って、食ってたよ！」

「あ、いただきます。でもその前に、お仏壇お参りしていいですか？
ちいばあちゃんにお線香上げさせて下さい。

あ、つぐみちゃん。美味しいケーキ買ってきたから、みんなで食べて。
それと、お待ちかねのコタとプリンの写真集！
ごめんね、遅くなって。送ってあげようと思ったのに
健人くんが、行った時でいいからって。」

「そして自分だけ先にもらってんでしょ！いっつもズルいんだから！
わーい！ありがとう、ゆき姉！

キャーッ！かわいい表紙！うそみたい、コタとプリンだ！」

わいわいみんなで言ってると、二階から虎太郎とプリンが降りてきた。
その二匹を捕まえて、健人はそれはそれは嬉しそうに抱きしめる。

「コタ！プリン！いい子にしてたか？会いたかったぞぉ！」

「コタとプリン！こっちにおいで！ゆき姉があんた達の写真集、作って持ってきてくれたよ！見て見て！」

健人とつぐみで、二匹の取り合いが始まった。
そんな二人を、雪見は温かな気持ちで笑って見てた。

軽く昼食をご馳走になり、雪見と健人は腹ごなしに近所の河原へ散歩に出かけることにした。

昔この家に遊びに来たときには、必ず出かけた思い出の場所だ。

「あ、そんなに遅くならないで戻ります。
夕食の準備、手伝わせて下さいね。
おばさんにキムチの美味しい漬け方、もう一度教えてもらうために来たんだから、先に準備しちゃわないで下さいよ。
じゃあ、ちょっと行ってきます。」

雪見は、まだ強い日差しを避けるため大きなつばの帽子をかぶり、健人はバレないように、サングラスと帽子をかぶった。

「お兄ちゃん、マスクはいいの？」

「あっつくて、さすがに無理！まぁ、大丈夫でしょう。」

久しぶりに歩く、懐かしい河原。

あの頃より河川敷の木々は生い茂っているけれど、
風の匂いは何も変わらず、二人の間に涼しげな記憶を蘇らせた。

「きっもちいいー！最高だね！やっぱ、ここ来て良かった！」

「ほんと、懐かしいね！あの頃はここでドッジボールとかしたよね。
よく、健人くんにボールぶつけて泣かせてた！」

「そう！めっちゃ早いボール投げてくるんだもん。
今考えると、大人げないよなー！」

そう言いながら、健人は芝生の上にゴロンと横になった。

「見て、ゆき姉！すっごい青空。きっもちいいー！」

健人はサングラスを外し、天を仰いだ。

「俺さぁ、子供の頃、ずっとお姉ちゃんが欲しくてさ。
幼稚園ぐらいまでよく母さんに、お姉ちゃん産んで！ってせがんでたんだって！
で、産んだら妹だったって、がっかりしてたらしい。」

「それ、おばさんに聞いたことある！面白いよね、子供の発想って。」

「今、やっと夢が叶った感じ。ゆき姉が本当の姉貴みたい。」

心の中では解っていたが、実際に健人の口からそう言われると胸の奥で涙がこぼれた。そうだよね…。

努めて明るく健人に聞いた。

「ねぇ、どうしてお姉ちゃんが欲しかったの？」

「お姉ちゃんだと、優しく宿題とか教えてくれるんじゃん。弟のわがままも、全部聞いてくれそうだし。」

「ええっ！そんな理由？そんなの完璧に妄想だよ！残念ながら私、雅彦に宿題教えたことないし、雅彦のわがままも、聞いたことない！」

「えーっ、そうなの？俺、雅彦兄ちゃんがずっと羨ましかったのに！」

「現実なんて、そんなもんだよ。私は反対に、健人くんとつぐみちゃんの関係が羨ましいな。だって、自分のお兄ちゃんが、あの今一番人気の斎藤健人なんだよ？絶対に自慢のお兄ちゃんなんだから！」

「そんなに斎藤健人って、すごいのかな。

俺、最近、自分で自分のことがよく解らなくなってきた。
ゆき姉。俺って、一体何者なんだろう…。」

健人が見せた憂いの表情が、いつまでも頭の中から離れない。

いったい自分は何者なのか。

雪見の知らない健人が、道しるべを探してる。

霧に包まれた深い森をさまよう健人の手を取って

雪見はなんとしてでも、そこから脱出しなければと思っていた。

懐かしい記憶

川の淵を歩きながら家へ戻る途中
向こうから歩いてきた、小学二、三年生ぐらいの男の子
四人組とすれ違った。
手にはバケツと網を持っている。

すれ違いざまバケツを覗くと、
中には何匹かの小魚と小さな川蟹が入っていた。

「うわっ、まだいるんだ、蟹！もういなくなったかと思ったのに！」

健人が突然大声を出したので、
その四人組はびっくりして立ち止まってしまった。

「ねぇ、これ、どの辺で捕ったの？」

健人がサングラスを外しながら、バケツの中をじっと見る。

「あっちの石がたくさんあるところ。
水溜まりみたいになってるから、捕りやすいんだ！」

「へぇー。お兄ちゃんも昔、毎日友達と蟹捕りに来てたんだ。
でもその時、俺たちが全部捕り尽くして、
もういなくなっちゃったかと思った！」

四人組は、「そんなこと、あるわけないじゃん！」と大笑い！
雪見も一緒になって笑っていた。

「ここは何にも変わってないんだなぁ…。」健人が小さく呟いた。

その時、ひとりの男の子が、「あれ？もしかして、斎藤健人？」
と、健人の顔を下から覗き込んだ。

私は、『しまった！サングラス外してるじゃん！』と内心焦り、
「あれぇ？やっぱり間違えた？そっくりでしょ、このお兄ちゃん。」
と、慌ててその場をしのごうとした。

が、健人がその声を遮るように
「そうだよ、斎藤健人。俺のこと、知ってる？」
と、子供たちに向かって話しかけた。

「知ってる！知ってる！俺、ドラマ見てる！」

「うちのお母さんもお姉ちゃんも、キャーキャー言いながら見てる！
うるさくてしょーがない！」

「ねぇねぇ、なんで斎藤健人がここにいるの？」

みんなが口々に聞いてくる。

「俺んち、この近くだから。たぶん、みんなの小学校の先輩。」

「へぇーっ！そうなの？すげーや！俺たちの先輩だって！
こんなすごい先輩いたなんて、知らなかった！」「俺も！」

「自慢できるよな！斎藤健人は俺たちの学校、卒業したんだぞ！って。」

みんなが笑顔で嬉しそうに話すのを見て、健人も微笑んでいた。

「じゃあ、握手！ちゃんと家に帰ったら、宿題やんだぞ！」

「もう全部、終わってるもん！健人こそ、ドラマ、頑張れよ！」

「よっしゃ、頑張る！じゃ、またな！お母さんによろしく！」

そう言いながら一人一人と握手をし、手を振って別れを告げた。

「ねぇねぇ。お母さんによろしく！は、まずいんじゃない？
絶対健人くんち、捜されるって！」

「いいよ、別に。指名手配されてる訳じゃないし。」

「そうかなぁ…。」

そんなことを話ながら歩いていると、
後ろの方から、「けんとー！」と大声で呼ぶ声がした。

二人同時に振り返って見ると、さっきの子供たちが駆け寄って来る。

そして、手にしたバケツを健人の前に差し出し
「これ、あげる！握手のお礼！」と言った。

「え？せっかく捕ったのに、俺にくれんの？」

「うん、いいよ！懐かしいんでしょ？
俺たち毎日、捕りに来れるから。」

「やった！じゃあ、もらっとく！ありがとな！
絶滅しないように、ほどほどに捕っとけよ！」

健人が笑顔でバケツを受け取り、また子供たちは戻って行った。

「もらっちゃった！」健人がニヤッと笑いながら雪見に言った。

「なんか、物欲しそうな顔してたんじゃない？」

「そうかなぁ。よし！昔みたいに、つぐみを驚かせてやるか！」

何かを企んだ健人の顔は、まるで悪ガキの小学生のようだった。

「ただいまぁー！あー、暑かった！汗びっしょりだ！
俺、シャワーしてくる。　あ、つぐみ！おみやげ。」

「なになに、お兄ちゃん！」

「ほら、リアルバッチ！」

そう言いながら健人が、手の中に隠していたさっきの蟹を
つぐみの胸にしがみつかせたその瞬間、

「いやぁーっっ！やだやだ！早く取って、取って！」

つぐみの大絶叫が家中に響き渡った。

健人は笑いながら、そのまま浴室へと消えるし、
おばさんもキッチンで大笑いしてるだけで
誰も取ってあげる様子がなかったので、雪見が蟹を外してやった。

「もう！お兄ちゃんのばか！あとで、ぶん殴ってやる！！」

「珍しいね。まだ、蟹っていたんだ！」

おばさんがキッチンから、冷たい飲み物を運んできた。

「懐かしいね。昔あんた今と同じこと、しょっちゅう兄ちゃんにされて、
よく泣いてたもんね。」

「ほんと！兄貴のくせに、いつまでもガキなんだから！」

遠い昔の健人を思い出し、なんだかあれから二十年ほども経ってしまったかのような錯覚に陥った。

「じゃあそろそろ、パーティーの準備を始めようか。
雪見ちゃん、手伝ってくれる？」

「もちろん！今日はめちゃくちゃ期待して来ました。
健人くんからチゲ鍋するって聞いた時から、楽しみで楽しみで！
おばさん。私にもう一度、キムチの美味しくなるコツ教えて下さい。」

「あら、雪見ちゃんもキムチ漬けるの？若いのに偉いわ！」

「でも、おばさんの味にはなかなか近づけなくて。
だから今日は、秘密を伝授してもらいに来たんです。
キムチって、パワーが出るでしょ？疲労回復にもいいし。
おばさんと同じ味が出せたら、
健人くんにいつでも食べさせてあげられる。」

「ありがとね。健人のこと、気遣ってくれて。
忙しそうだから、身体のことがいつも心配なんだけど、
なかなか帰って来れないし、私もしょっちゅうは行ってやれないし。
だから雪見ちゃんが今、健人のそばにいてくれてる事が
とても嬉しくて。
お父さんも、雪見ちゃんによろしく伝えてくれって、
さっき電話がきたのよ。」

「おじさんもお元気ですか？単身赴任からはいつ戻るの？
おじさんにこそ、ご無沙汰しちゃって。」

「ええ、元気元気！あと二ヶ月は戻って来れないけど、
一人暮らしを満喫してそうよ。じゃあ、始めようか！」

雪見と健人の母は、二人仲良く並んでキッチンに立ち
次々に手際よく、その夜の宴の準備を進めていった。

その後ろ姿は、まるで親子か嫁姑の間柄に見えると、
シャワーから上がってキッチンで牛乳を飲みながら
健人は眺めていた。

さぁ、楽しいチゲ鍋パーティーの始まり始まり！

深い愛

午後七時。
みんなが食卓について、チゲ鍋パーティーが始まった。
八月の終わりのチゲ鍋は、ただひたすら暑い！
エアコンをガンガンにしても、次から次へと汗が噴き出す。

「うちってさ。昔からこの時期、必ずこれやるよね。
前から疑問に思ってたんだけど、なんで？」

健人がビールを流し込みながら、母に尋ねた。

「暑い時期に熱いものを食べるっていうのが、いいんじゃない！
インド人だって、暑い所で辛いカレーたべてるでしょ？」

「なんじゃ、その理由！」

「違うよ。おばさんはこの時期、夏バテする家族のために
何かお箸が進んでスタミナのつく物を、って考えてるんだから。
ねっ、おばさん！」

「まぁね。でも、みんなでまぁるくなってお鍋囲むのって、
なんだか幸せだなぁ～って思わない？
見てるだけで充分幸せになれる。」

「いいから見てないで食えよ！」

「だって、辛いんだもん！」

「自分で作ったんだろーが！」

雪見は、自分もこの家族の一員になった気分で嬉しかった。

健人もまた、雪見がここにいることが嬉しかった。

お腹いっぱいご馳走を食べ、みんな満足して後片付けにかかる。

雪見が皿を洗い、つぐみが隣でそれを拭き、健人が棚にしまう。

その様子を母は、ニコニコしながら見守った。

「ねぇ。お兄ちゃんたちって、付き合ってんの？」

突然のつぐみの発言に、健人と雪見は慌てた。

「なにバカなこと言ってんの！そんなわけないだろーが！」

「ほんとにもう！なんでそんなこと思うの？」

「だって、自分たちじゃ気がついてないかもしれないけど、
二人って、ラブラブオーラが全開だよ！
普通の関係には見えないって！」

「てめー！ぶん殴るぞ！」

逃げるつぐみを健人が追いかけて行った。

それと入れ替わりに、健人の母が雪見の隣に立つ。

「ありがとね、雪見ちゃん。いつも健人のことを思っていてくれて。
あの子ああ見えて、結構傷つきやすいところがあったり、
頑張り過ぎちゃうことがあるから私、心配なの。

お陰様で、今は皆さんにとても応援して頂いてるけど、
こんな人気がいつまでも続くとは思っていない。
でもね、私は健人の母として、あの子のここまでの努力は
全部見てきたから、その過程をうんと誉めてあげたい。」

「私もそう思います。健人くんは本当によくやってますよ。
カメラマンとして毎日見てて、思うんです。
私にできることで、健人くんの助けになれたらいいなって。」

「お願いね。健人をよろしく。」

そう言い残し、母はキッチンを出て行った。

つぐみと母が、「もう二階へ上がるから。おやすみ。」
と雪見に言って、居間を出た。

それとすれ違いに健人が風呂から上がり、
冷蔵庫から「寝酒、寝酒！」と言いながら、冷えた白ワインを出す。

「ゆき姉も、飲む？」

「あ、いいねぇ！じゃ、二人で二次会といきますか！
ちょっと待ってて。今なんか、おつまみ作る。」

雪見は、キッチンにあった先ほどの残り物をアレンジして、
手早く簡単なおつまみを作った。

「お待たせ！じゃあ、改めてカンパーイ！」

「おつかれー！あーうまいっ！このつまみも旨そう！
ゆき姉って、ほんと、料理うまいよね。」

「いいお嫁さんになれそう？」

「なれる、なれる！俺もこんなうまい飯、毎日食って暮らしたい！」

「えっ？」

「あっ！お、男なら誰でもそう思ってるってことだから。」

そう言って、健人はワインを飲み干した。

「なんか、やっと疲れが抜けてった気がする。
ここんところ、めちゃ忙しくて俺、かなり弱ってたから。」

「そうだね。カメラ覗いてて私も思った。大丈夫かなぁ、って。
だからね、本当はこのお休みも、
今野さんから写真を撮ってくるようにって言われてたんだけど、
それじゃ完全休養日にならないから、撮影は止めることにした。
ま、帰ったら叱られるだろうけど。」

「そうだったんだ。どうしてカメラ出さないのか不思議だった。
俺のこと、そんなに思ってくれてたんだ。ありがとね！ゆき姉。」

「だって健人くん、カメラ向けるとすぐかっこいい顔するし、
カメラなんてあったら、気が休まらないもんね。
私はただ、少しでも健人くんが、健人くんらしくいられるように
お手伝いしたいだけ。」

雪見もワインを飲み干す。

「俺さぁ。なんか最近、俺が俺でなくなってきた感覚なんだよね。
ほんとの俺って、どんなのだっけ?って感じ。

よくわからなくなってきた。」

「そう。」

「みんながかっこいい、かっこいいって言ってくれるのは嬉しいけど、
カッコ悪いとこだって、いっぱいあるのが俺なのに…。」

「そうだね。本当はカッコ悪いとこだっていっぱいある。
でも、わかってくれてる人は絶対にいるよ。
健人くんが気がついてないだけで、ちゃんといる。
少なくとも、私は健人くんの強いとこも弱いとこも
ぜーんぶ知ってる。

だから大丈夫だよ。健人くんは今のままで大丈夫。
このまま進んでいいんだよ。
私がいつも、後ろで見てるから。
もしも道に迷ったら、後ろを振り返って私を見て。
健人くんの行く道を、私が教えてあげる。」

「ゆき姉…。」

「さ、寝ようかな。なんだか最後のワインが効いてきた。
健人くんも、また明日から忙しくなるんだから、
今日は早くに寝てね。明日は、朝七時半出発だから。
じゃあ、おやすみ。」

雪見が客間へ戻ったあとも、健人は一人でワインを飲んでいた。

さっき雪見が言ったことの意味を、じっと噛み締めてみる。

それは確かに、自分への愛情を感じる言葉だった。

だが、それが「愛」なのか、「身内の愛情」なのか

健人にはまだ解りかねていた。

たったひとつ解ったことは、今、自分が雪見に対して、

深い「愛」を感じているということだけだ。

記念写真

早朝五時。
今日一日の暑さがすでに想像できるような、朝の光。

昨夜は健人と飲み明かそうと思っていたが、
なんだか急に、二人きりでいることが恥ずかしくなって
雪見は早々にベッドへ入ることにした。

そのお陰で飲み過ぎることもなく、爽やかに目覚めた朝だった。

まだ、みんなが目覚めるには早い時間だったので、
そっと顔を洗い化粧をして、朝の澄んだ空気を吸いに
少し散歩でもしてこようと思っていた。

部屋を出て玄関先に向かうと、そこにはバケツをのぞき込む　健人の姿が。

一瞬、どう声をかけようか迷ってしまう。

「あ、おはよう。ずいぶん早起きだね。
いっつもは朝なかなか起きられないのに。」

「なんか、寝てるのがもったいなくて、勝手に目が開いた。」

「なにしてたの?蟹、まだ生きてる?」

「うん。三匹死んじゃったけど、二匹はまだ生きてる。かわいそうだから、昨日の場所に返してこようと思って。」

「そうだね。それがいい。私も今、散歩に行こうと思ったとこ。一緒に行ってもいい？」

「もちろん！じゃ、ちょっと着替えてくる。」

スウェット姿の健人が、二階の自分の部屋へと戻って行く。

「お待たせ。じゃあ、出かけようか。」「うん。」

二人は青いバケツを手に、昨日の河川敷へと歩き出した。

夏の早い朝には、結構な人達がそこを散歩している。

健人は、サングラスでこの景色の色が変わって見えるのが嫌で、いつもの黒縁眼鏡だけでここに来た。

だが、歩いているのは年配の人ばかりで、誰も健人に気づく人はいなかった。

「すっげー気持ちいい！最高！」

「ほんと、いい朝だね！やっぱ、早起きってお得な感じ！」

「俺も明日から、毎日早起きするかな！」

「うそだ！帰ったら無理だから！
ここの、この空気だから早起きできるんだよ。
それに、またしばらく帰って来れないと思うと
もったいないから起きただけでしょ？」

「なんでわかったの？俺のこと、お見通しで怖いわ。」

健人が笑って雪見を見た。

雪見はその笑顔の健人を見て、どこか踏ん切りのついたような
吹っ切れた様子を感じ取り、ホッと胸をなで下ろした。

昨日の子供たちが話していた、大きな石がたくさんある河原に着く。

確かにそこは、川の流れからは少し外れていて、
大きな石が囲った、いくつもの水溜まりができていた。

「うわぁ！水が気持ちいい！」

川に手を浸した雪見が、眩しい顔で健人を見上げる。

「じゃあ、離してやるか。」

バケツの中に手を入れて、健人が一匹目の蟹を指でつまんだ。
その蟹に言って聞かすように、「もう捕まるなよ。」と呟く。

そっと水の中に離してやったら、蟹は急いで石の隙間に隠れた。

続いて二匹目の蟹を捕まえ、これにも言って聞かす。

「きっと今日もお前達のこと、捕まえにくるやつがいるから
石の下でじっとしてろよ。」

そう言いながら、石に近いところへ離してやった。

「昔はさ、蟹なんて捕るのが面白いだけで、
次の日バケツの中で死んでても、なんにも思わなかったけど
今はさ、かわいそうだと思う。
やっぱりこいつらは、ここにいるからいいんであって、
バケツの中にいたんじゃ意味がないんだよ。
大人になってから初めてわかることって、色々あるんだね。」

バケツの中の水を全部川に空けながら、健人が納得したようにそう
雪見に話した。

「ほんとだね！
大人にならなきゃわからない事って、いっぱいあるよね。
それに一つずつ気がついていくのが、大人になる！
ってことなんじゃないのかな。」

雪見の言ったことがよくわかる、というように健人がうなずいた。

名残惜しそうに、じっと川面を見つめる健人。

と、その横顔に突然、カメラのシャッター音が聞こえて
慌てて健人が横を向くと、
そこにはデジカメを構えた雪見が立っていた。

「えっ？ゆき姉！休みだから撮影は無しじゃなかったの？」

「残念！お休みは昨日でおしまい！
今日からはまたお仕事三昧の毎日だからね。
いきなりアイドルの斎藤健人には戻れないだろうから、
ここから少しずつ、ウォーミングアップしておかないと。

それに、なんにもオフの写真撮って行かないで
今野さんに叱られるの嫌だし。」

そう言って、雪見が笑いながら健人にカメラを向けた。

「ねぇねぇ、オフの写真なんだから、アイドルの顔しないでよ！
カメラの方、向かないで！」

「それって、偽装工作じゃないの？」

「いいの！だって、スタジオに戻るまでは一応オフなんだから。」

それから何枚か、蟹をいじっている健人などを自然な感じで撮り、
もうそろそろ家に戻ろうかと健人が立ち上がった。

「そうだ！ねぇ、イケメン俳優の斎藤健人さん！
私、あなたの大ファンなんですけど、
一緒に写真撮ってもらっていいですか？」雪見が健人に聞く。

「は？なにそれ？　　ああ、いいですよ、一緒に撮っても。」

健人が笑って答える。

そう言えば、まだ一度も健人と並んでツーショットを
撮ったことが無かったことを思い出し、
雪見はこの休みの記念に、ここで健人と写真に収まりたいと思った。

雪見がデジカメを、こっちの方に向けて腕を伸ばして準備する。

「ねぇ。アイドル斎藤健人の一番かっこいい、キメ顔で写って！」

「なんで？アイドルの顔は、あんまり好きじゃないんじゃなかった？」

「そんなことないよ。どんな健人くんも好きだよ！
でも、今欲しい写真はアイドルの写真！」

どんな健人も好き！と言われて、健人は素直に嬉しかった。

「変なの。まぁ、いっか！
じゃあゆき姉も、俺にお似合いの女優顔して写って！」

「やだ！そんな顔できないよ！だって私、女優さんじゃないもん！」

「冗談だよ！ゆき姉はそのままで充分綺麗だから大丈夫！
ねぇ、せっかくだから、誰かにシャッター押してもらおうよ！
あ、すいませーん！ちょっとシャッター押してもらえますか？」

そう言って、散歩途中のおじさんに声をかける。

「じゃ、写しますよ！はい、チーズ！」

シャッターが切れる直前、健人が雪見の肩を抱いて引き寄せた。

「ありがとうございました！」
健人を知っていそうもないおじさんに頭を下げ、後ろ姿を見送る。

写してもらった写真を確認すると、
そこにはグラビアみたいな一番のキメ顔をした健人と、
笑顔半分ビックリ半分の、中途半端な顔をした雪見が写っている。

その後ろには、青いバケツが柵にぶら下がって子供達を待っていた。

告白

「おばさん！本当に楽しかったです。ご馳走さまでした！
帰ったら早速昨日聞いた材料買って、キムチに加えてみますね！」

「そう！是非やってみて！
あとは完璧だから、それで斎藤家の味にほとんどなるはず。
完成したら健人にも食べさせてやってね！」

「わかりました。健人くんのことは心配しないで。
ちゃーんと私が監視してますから！」

「げっ！俺って、要注意人物かよ！」

健人が口をとがらせる。

「ある意味そうでしょ！お兄ちゃんのこと、全国の人が見てるんだよ！
お兄ちゃんがなんかしでかしたら、私、お嫁に行けなくなっちゃう！」

つぐみが眉間にシワを寄せて訴えた。

「なんかしでかす、って何しでかすんだよ！
お前はそれ以前に、その口をどうにかしないと嫁になんか行けんわ！
そんなこと考えてないで、勉強すれっつーの！」

ほーら、また始まった！と健人の母が笑った。

雪見は、兄妹喧嘩をする時の健人の兄貴ぶった、
雪見には見せない顔を見るのが好きで、
知らぬ間に健人の方を見つめていたらしい。

すると、それを見逃さなかったつぐみが雪見の手を取り、
「ゆき姉！ふつつかな兄ですが、どうかお願いしますね！」
と母親気取りの顔して言ったので、雪見はびっくりした。

すかさず健人が、「ばっかじゃねーの！」と反撃したが、
つぐみが何もかもお見通しのような気がして
それ以上は何も言えなかった。

「さぁ、行きなさい！仕事に遅れちゃうよ！
また休みになったら二人でおいで。美味しい物作って待ってるから。
」

健人の母が、名残惜しさを断ち切るように言う。

「じゃあ、行こうか。」　「うん。」

健人と雪見は二人に見送られ、楽しかった故郷をあとにした。

二人きりの車の中。

さっきまでとは違って、なぜか二人ともぎこちない。

このたった一日の休みの中で、確実にお互いの意識が
変わったことだけは間違いなかった。

「あのさ。」

沈黙を破るように話し出したのは健人だった。

「コタとプリンって、ほんと、ゆき姉のこと好きだよね。
俺のとこより、絶対ゆき姉のとこ行く回数の方が多かったもん。
ちょっと悲しい…。」

「えーっ！そんなに悲しい顔しないでよ！
ただ私は仕事柄、猫の扱いがうまいだけで、
本当にコタとプリンが好きなのは、健人くんの方に決まってんでしょ！」

雪見が慌ててそう言うと、健人が「うっそぴょーん！」と舌を出し

た。

「なにそれ？健人くんを悲しませちゃったって、
こっちの方が悲しくなったのに！」

「ごめん、ごめん！
でもゆき姉って、いつも俺のこと考えてくれてるんだね。
俺が悲しまないように、苦しまないようにって。
それって、どうして？」

突然の問いかけに、雪見は戸惑った。

その答えを口にするのが怖くて、今まで心が逃げ回っていたのに…。

でも今、答えを出さないと、ずっと後悔するような気がした。

「好き、だから？」

雪見が言おうかどうしようか迷っている言葉を
勝手に健人が口にした。

「俺のこと、好き？」

好きか?と聞かれて嫌い!とは言えない。

「ずるいよ、健人くん。そんな風に聞かれたら
嫌い、なんて言えるわけがない。ずるいよ。」

「だったら、好き、って言って。」

健人が、ハンドルを握る雪見の方を向き、
笑顔にもならずに真剣な顔をして、そう言った。

「…好き。…大好き!私は斎藤健人が大好き!」

半分ヤケクソ気味に言う。大きな声で叫んでやった。
どう?これで文句ある?という風に…。

「ありがとう。嬉しいよ…。

って、やったぁ!ほんとに?ほんとに俺のこと好き?好きなの?」

健人の喜びようは予想外だった。
さっきまでの静寂さが嘘のように、一気に騒がしい車内になる。

雪見は、しまった！やられた！と、今頃気がついた。

俳優の顔した演技にまんまと引っかかり、
自分からは決して言うまいと思っていた言葉を、口にしてしまった。

「ずるいよ、健人くん！私にそんなこと言わせるなんて！
今、お芝居したでしょ？俳優の斎藤健人になってたでしょ？」

「だってゆき姉が、今日から仕事だからウォーミングアップしないと
って言ったんだよ！」

「私は真剣に告白したのに！
絶対に自分からは言わない、って決めてたのに！」

雪見が怒ってそう言うと、

「俺もゆき姉のこと、好きだから。」

と、さらっと健人が口にした。

「えっ?私のこと、好きって言った?」

「言った!俺もゆき姉が、ずっと好きだった!
たぶん、俺の初恋の人はゆき姉だと思う。
でも、今までそれが恋なのか、身内に対しての愛なのか、
自分でよく解らなかった。」

今までに見たこともない真剣な顔をして、健人が語る。

「けど、一ヶ月前に再会してからは、確実に毎日好きになっていくのが
自分でよくわかったよ。

ごめん。俺から言い出せなくて。
自信がなかったから…。
俺は好きだけど、ゆき姉が俺のことを弟みたいに好きなのかと思って。
ずっと不安だった…。」

「健人くん…。」

「ねぇ、もう一度聞いてもいい?
本当に俺のこと、好き?
弟みたいにじゃなくて、男として好き?愛してる?」

小さい子供が母親に、自分への愛情を確かめるように、

「僕のこと、好き?」と聞くかのように、
健人は何度も何度も自分への愛を、雪見に確認した。

「大丈夫。本当に好きだから。誰にも負けないくらい愛してる。
健人くんが私のこと、お姉ちゃんみたいって思ってたとしても、
私は健人くんを愛してる。」

「良かった!ほんとに嬉しい!俺も愛してる!」

やっとお互いの愛を確認し合い、健人は安心したように
雪見の隣で目を閉じた。

雪見は、その彫刻のように美しい寝顔を横目で見て、
本当にこの人が私の彼氏になったの?と
夢を見てるかのような、不思議な気持ちになっていた。

これからの時間は、健人と一緒に歩いて行くんだ。

もう、自分の心をだまして暮らさなくてもいいんだ。

そう思うと、雪見は心を決め
これから待ち受けているであろう幾多の困難にも、

必ず私が健人を守ってみせる！と
決意を新たにしたのであった。

「起きて、健人くん。着いたよ！
健人くんってば！
あと三十分で今野さんが迎えに来ちゃうよ！
起きろ！健人！」

雪見が、男のような低い声で怒鳴ったので
健人が慌てて飛び起きた。

「ビックリした！今野さんかと思った！
もう着いたの？早いなぁ。」

「完璧、熟睡モードだったもんね。
でも、これでだいぶ睡眠不足が解消されたでしょ？
また今日から忙しくなるけど、頑張れるよね？」

なんだか健人がぼーっとしている。

「ねぇ。さっきのは夢じゃないんだよね。
俺とゆき姉って、今日から恋人同士になったんだよね？」

「大丈夫。夢なんかじゃないから。
私は健人くんが大好きだよ。健人くんは？」

「俺ももちろん、ゆき姉が大好き！」

「じゃ、夢じゃないよ。
今日からよろしくね。アイドルな彼氏さん！」

健人の顔が、一瞬でパッと明るくなった。

「俺の方こそ、よろしく！雪見！…って
あれぇ？なんかしっくりこないなぁ…。
彼女なんだから、『ゆき姉』はないだろ！と思ったんだけど。」

雪見が笑って言う。

「あははっ！ゆき姉でいいよ、ゆき姉で。
『雪見』なんて呼ばれても、健人くんに呼ばれてる気がしないよ。
私も当分は『健人くん』だな。
そのうち『健人』になるかもしれないけど。
ニ十年以上も『健人くん』って呼んでるんだから
いきなりは変えられない。それじゃダメ？」

「いいよ、別に。じゃ、今まで通りということで…。
げっ！やばい！もうこんな時間じゃん！今野さんが来ちゃう！
じゃあ、ゆき姉、またあとで！」

健人がバタバタと荷物を手に、マンションへ入って行った。
雪見はその後ろ姿を眺めながら、幸せな余韻に浸っている。

「よし！私も帰って仕事の準備を急がなくちゃ！」

雪見は、今までに感じたことのない
内から溢れ出す仕事への意欲に急かされるように、車を発進させた。

ドラマ撮影スタジオに到着。

雪見が、「おはようございます！今日もよろしくお願いします！」
と、大声で言いながらスタジオ入りをする。

と、そこへ、健人専属カメラマン仕事初日に
このスタジオで雪見に話しかけてきた若い女性スタッフが、
また雪見の隣に近づいて来た。

「浅香さん、おはようございます！」

「あ、おはようございます。」

「今日も健人くんの撮影ですか？」

「ええ。二ヶ月間で撮影を終わらせないと、写真集の印刷が
間に合わなくなっちゃうんで。
私が撮らないことにはスタートしないプロジェクトなもんで、
結構プレッシャーです。」

そう言いながら雪見は、この人がなんとなく健人を好きそうな
そんな気配を感じていた。

まぁ、健人は今や日本中のアイドルなのだから、
こんなに身近で健人を見てるスタッフが、
好きにならない方がおかしな話だ、と雪見は自分に言って聞かせた。

「あぁそうだ。この前話してた、健人くんの赤ちゃんの時の写真、
持ってきましたよ！あとで撮影が終わったら見せますね。」

その女性スタッフは、小さな悲鳴を上げながら
手を叩いて大喜びした。

「やだぁー！早く見たい！よし、仕事頑張るぞ！
じゃ、あとで楽しみにしてますから！絶対ですよ！」

そう言いながら、また持ち場へと戻って行った。

ふぅぅ…。雪見はため息をつく。

この先、こんな思いを何回もするんだろうな…。
なんだか、ここにいる全員が健人くんのこと、
好きに見えちゃう。

でも、仕方ないよね。
私の健人くんは、みんなの健人くんなんだから…。
日本中の人が好きな人なんだから、しょうがない。

雪見はそう自分を納得させるより、今は方法がなかった。

人気アイドルを好きになったと言うことは、そう言うことなんだ！
と、自分の気持ちに言い聞かせた。

「斎藤健人さん、スタジオ入りまーす！」

そう告げる男性スタッフの大声で我に返り、
雪見は気を引き締めてカメラを構えた。

今はカメラに集中しよう。
この仕事は、私だけが健人くんに許された仕事。
私だけに特別に与えられたものなんだ！
他の誰にも邪魔されない、二人だけの仕事なんだ！

雪見の中で、「私は健人の彼女なんだから！」という自信はまだ生まれてはいなかった。

彼女だから大丈夫、と思えるほど、二人は愛を重ねてはいなかった。

なんせ、ついさっき恋人同士になったばかりなのだから…。

スタジオに入る瞬間の健人の表情を狙う。

隅々に聞こえるくらいの声で、「おはようございまーす！」と言ったあと、セットに向かって歩きながら健人は、雪見のカメラを見つけて、一瞬舌をペロッと出した。

は？なにそれ？

雪見は、誰かに見られてはいないかと、カメラを下ろし周りをキョロキョロと伺った。

あんまり変なことをしないでよ！疑われるでしょ。

そのあとも、健人はちょいちょい小技を挟んできた。

その度に、雪見がギョッとした顔をしてカメラを下ろす。

が、どうも健人がそれを面白がって、調子づいてる様子だったのであえて雪見は、平然とした顔をしてカメラを構え続けた。

健人のブーたれた顔！悪ふざけが通用しなくなったとみて、やっとおとなしく仕事する気になったようだ。まるで子供！

「お疲れ様でしたぁ！休憩挟みまーす！」

その声を合図に、さっきの女性スタッフが雪見の元へ駆けてくる。

「浅香さん！約束の写真、見せて下さい！」

「あ、いいですよ。ほら、これ！かわいいでしょ、健人くん。」

雪見は、自宅にあった古いアルバムから何枚かをチョイスして
ポケットアルバムに移し替え、スタジオに持ってきていた。

「えーっ！これも健人くん？なんかイメージがちょっと違う！」

「そうでしょ？だから私も、親戚の健人くんが俳優さんになったって
ずっと気がつかなかったの！」

「嘘でしょ？こんなに人気者なのに！
私なら、みんなに自慢しまくりだけどな！親戚だったら。」

「なに、盛り上がってんの？」

そう言いながら、健人が雪見の隣にやって来た。

「あ、お疲れ様でしたぁ！
今、浅香さんに写真を見せてもらってたんですぅ！
浅香さん、最近まで斎藤さんのこと
俳優さんだって知らなかったって、本当ですかぁ？」

そう言って、その女は健人の腕を両手でつかむ。

その瞬間、雪見の中で炎が点火した。

よし！見てなさい！

「え？ゆき姉が俺のこと知らなかったって、本当かって？
あぁ、ほんとほんと！
ゆき姉は昔っから、ちょっとぽけーっとしたとこがあって、
そんな勘違いはしょっちゅうだよ。」

健人が雪見の方を見て、笑いながらそう話す。

隣の女は、まだ健人の腕にしがみついたままだった。

「やだぁ！浅香さんって、見た目はしっかりしてそうなお姉さまなのにぃ、
そんなに抜けてるんですかぁ？」

お姉さまなのに抜けてるだとぉ？
ほんとは、おばさんなのに！って言いたいんじゃないの？
それに、なに？そのしゃべり方！
健人くんが来た途端、声が変わったじゃないの！

この女、完全に私にケンカ仕掛けてるわけね。
上等じゃないの！宣戦布告よ！受けて立つわ。

雪見は、この若いスタッフが私をライバルとして認識し、
ケンカを吹っ掛けてきてるのがすぐにわかったので、

早々に次の一手を打つことに決めた。

「あ、そうだ、健人くん！
昨日の写真、さっき大至急焼いてきたの。見て！見て！」

そう言って、ポケットアルバムの後ろのページに二重に入っていた
写真を引き抜き、空いているポケットに差し込んだ。

「ほら、見て！みんないい顔して写ってるでしょ？
お母さんもつぐみちゃんも、すごく嬉しそう！」

それは昨日の夜、チゲ鍋パーティーの途中でつぐみに頼まれ、
三脚を立てて自動タイマーで撮った、四人のスナップ写真であった。

記念写真のようにかしこまっている写真ではなく、
食卓でそれぞれが思い思いにポーズを取っているのだが、
そこにいる誰もが最高の笑顔で写っていた。

もちろん健人と雪見も、二人並んで写っている。

結構ビールが進んだあとだったので、いい感じに酔いが回り、
健人がふざけて雪見の口に、母特製のキムチピザを押し込んでたり、
雪見が健人の顔を引き寄せて、無理矢理ビールを飲ませてたり。

今、酔いが醒めて見返すと、かなり恥ずかしくなるような

バカをやってる二人が、そこには写し出されていた。

「ちょっと、ゆき姉！こんな写真、他には見せられないだろ！
俺のイメージってもんがあるんだから！」

「ごめんごめん！でも、こんなバカな斎藤健人もいるんだってわかるような写真で、
私は好きなんだけどなぁー！」

「そりゃそうなんだけど…。
でも、これ見ると俺たち、結構飲んでたんだね！
楽しかったから、全然気がつかなかった！」

健人と雪見のやり取りに、まったく中に入っていけないその若いスタッフは、スッと健人の腕から手を離し、何も言わずに静かにその場を立ち去った。

第一ラウンドは、雪見の勝ち！

「ねぇ、けさ河川敷でおじさんに写してもらった写真は？」

「あぁ、あれ？あれは恥ずかしいから置いてきた。」

「えーっ！あの写真、俺、楽しみにしてたのに！
明日必ず持ってきてよ！」

「まぁ、忘れなかったらね！」

あの写真だけは、人には見せずに大事にしておきたかった。
雪見と健人が恋人同士になった、記念の日の一枚。

その日の最後の仕事。
新しいコマーシャルのポスター撮りの現場。
雪見はここではカメラを構えず、ただ撮影の様子を見守っていた。

同業者の仕事ぶりは、見ていて大変勉強になる。
そこにいるのは、人物撮りのスペシャリスト達で
みなそれぞれの役割をきっちりと手際よくこなしている。

今まで人物撮りに、苦手意識が働いていた雪見にとって、
天下の斎藤健人を任されたということは
大変な名誉であると共に、とてつもないプレッシャーでもあった。
だが、これをきっかけに、少しずつ苦手意識が薄らいでいるのを感じ始めていた。

すべては健人くんのお陰だな。
健人くんが私を変えてくれたんだ。

そう思うと、さらに健人に対する愛情が湧き起こり、
早く健人に自分の感謝の気持ちを伝えたくて、
ウズウズしてきた。

やっと撮影がすべて終わり、本日の仕事はこれにて終了！

「お疲れ様でしたぁ！ありがとうございました！」

健人の声に、周りのスタッフが拍手で労をねぎらった。
雪見も一緒に拍手した。

「ゆき姉、腹減った！早く飯食いに行こう！」

健人は、明日の迎えの時間を今野さんに聞いてから
足早に控え室に戻り、メイクを落としてコンタクトを外した。

「あー、目が痒くて辛かった！さ、飯食いに行こう！」

そう言いながら、雪見のところへ戻ってきた健人は、
眼鏡をかけてすっぴんで、今朝の健人と同じになっている。

やっと健人が、私のところに戻ってきた！

そんな気がして、雪見は心から嬉しかった。

「ねぇ、また『どんべい』に行きたい！
俺、あそこのポテトピザが食べたい気分。あと、つくねも！」

「そうだね。ここからタクシーでわりと近いか。
じゃあ決まり！さぁ、行こう！」

二人はタクシーに乗り込み、店を目指した。

「マスター、こんばんは！また来ちゃった！」

雪見が挨拶したあと健人が店の中に入り、ぺこっと頭を下げた。

「おおっ、健人くん！よく来たね！今、仕事帰り？
また美味いもん食わせるから、楽しみにしててよ！
最初はビールだね？すぐ持ってくから、いつもの部屋に入んな！」

カウンター席にいた若いカップルが、一瞬こっちを振り向いたが
大きなマスクに眼鏡姿の男が、よもや斎藤健人だとは思いもせずに、
また二人見つめあって、楽しそうにおしゃべりを再開した。

初めて健人をこの店に連れて来たときと同じ部屋に入り、

すぐに運ばれてきたビールで、二人は乾杯をした。

「今日も一日、お疲れ様でした！カンパーイ！」

雪見がそう言いながら、ジョッキを合わせようとすると健人が、

「ええっ、それだけ？もっと他にあるでしょ？」　「えっ？」

「今日は俺たちの、記念日だよ！恋人記念日！」

「健人くん…。そうだね、健人くんと私の恋人記念日だ！
じゃあ改めまして、二人の恋人記念日にカンパーイ！」

ジョッキを合わせながら、二人は目を見て少しはにかんだ。

お互いの気持ちを告白し合った今朝から、
すぐに仕事が忙しくなってそれどころではなかったが、
今あらためて二人きりになり、もう一度健人は確かめたかった。

「ゆき姉。本当に俺のこと、好き？」

「だーい好きだよ！ずっと愛してる。
私はいつでも健人くんのそばにいて、健人くんのこと見守ってるから。」

「俺もゆき姉のこと、愛してる。ゆき姉は俺が守ってみせる！」

二人はお互いの愛情を確認し合い、安心して食事を楽しんだ。

これからの未来を夢見て……。

祝杯

大好きな人と食べるご飯って、なんて幸せなんだろう。
身体の隅々にまで美味しさが行き渡る感じ。

健人と雪見は、昨日までの食事と今日の食事の違いを
心から実感していた。

そしてまぁ、なんてお酒の美味しいこと！

「健人くんは明日もたくさんお仕事あるんだから、
あんまり飲みすぎないでよね！」

「俺が忙しいってことは、ゆき姉も忙しいってことなんだから、
ゆき姉の方こそ飲み過ぎるなよ！」

「私は、楽しいお酒では二日酔いにならないの。
仕事の付き合いとかで、大して親しくもない人と義務的に飲むと
なぜかビール一杯でも頭痛くなっちゃう！」

「じゃ俺となら、いくらでも飲めるってわけね！
俺ね。二十歳になってお酒飲めるようになって飲んでみたら、
これが結構飲めたわけ。で、これから俺の彼女になる人は、
俺につきあえるぐらい飲める人が理想だったの。
その点、ゆき姉は大合格！」

「合格の前に大がついてるのが気になるけど、まっいいか！
私も、健人くんと飲むお酒が一番美味しい！

ってことで、次はワインでもいっちゃう？」

「いいねぇー！お祝いだから、赤ワインを頼もう！」

しばらくすると、「雪見ちゃん、開けるよー！」と
マスターが赤ワインとグラスを三つ持ってきた。

「やだ！マスターも一緒に飲む気してんの？まぁいいや！
私がご馳走してあげる。今日はお祝いだから！
その代わり一杯だけね。マスターに飲まれたら、
私たちの分まで全部飲まれちゃう！」

「なに言ってんの！これは俺から二人へのプレゼント。お祝いだよ！」

健人と雪見は訳がわからず、顔を見合わせた。

「お二人さん、付き合い出したでしょ？恋人同士になったでしょ？
だから、そのお祝いのワインをお持ちしました。
あ、もちろん俺のおごり。二人へのプレゼントだよ！
だから俺も一緒に乾杯させて。」

二人の驚いた顔！

「なんで知ってんの？誰から聞いたの？
って、まだ誰にも言ってない気がするけど…。」
雪見が大慌てでマスターを問いただした。

「え？誰かに聞くわけないでしょ！
そんなこと、二人の様子を見てたらすぐわかるわい！
まぁ、店に入って来た時から、この前とはなんか違うぞ！とは
思ったけど。一体この俺様を誰だと心得る！」

また健人と雪見が、顔を見合わせた。
そして二人でクスッと笑い、観念した様子で

「マスターにはほんと、かなわないなぁ！
さすが、恋愛マスターだ！お見それしました。」

雪見がそう言って、マスターに頭を下げる。

すると、マスターが落ち着いた声で

「本当におめでとう！俺ね、初めて二人がこの店に来てくれた時、
この二人、付き合えばすごくいいカップルになれるのに！って思っ
たんだ。
それは何故かと言うと、姉弟みたいだったから。
あ、気を悪くしないでよ！二人はそこを気にしてると思うけど。

でもね。普通恋愛って、まったく育った環境も考え方も違う二人が出会って、
何かにひかれて付き合い出すんだけれど、
でも所詮他人同士なわけ。
付き合い出してすぐは、お互いの何もかもが大好きで
すべてを受け入れられるんだけど、段々と嫌な部分とかが見えてくると
少しずつ、相手に対する思いやりの気持ちが減ってきちゃうんだよね。

でも、お互いに姉弟みたいな感情を持っていると、
どこまで行っても、相手を思いやる気持ちは減ってはいかないの。
本当の親子や兄弟って、そういうもんでしょ？
ケンカはするけど、最後は思いやりでつながってる。

だからね、雪見ちゃんと健人くんはきっと、
相手を思いやれる気持ちがずっと続く、いいカップルになると思うよ。
俺が保証する！」

二人はマスターの言葉が嬉しかった。
なによりものお祝いの言葉だった。

雪見の目には、うっすらと涙が浮かんでいた。

「おいおい、雪見ちゃんを泣かすために言ったんじゃないからな！
俺は自分の体験で、心からそう思ってるからアドバイスしただけで。

」

「え？マスターも年の差カップルなんすか？」

「そうそう！マスターんとこは、なんと十九も年下のお嫁さんなんだよ！
下手したら娘だ！」

雪見が笑いながらそう言うと、
マスターが鼻の下を伸ばして、嬉しそうに話す。

「そう！もう娘みたいに可愛くてねぇ。幸せな毎日よ！」

「はいはい、わかりました！どうでもいいけど、早くワイン飲もう！」

三人はワイングラスを手にし、乾杯！と大きな声で
カチンとお互いにグラスを合わせた。

「あぁ、うまいっ！クゥーッ！
おめでたいお酒って、どうしてこうも美味いんだろ！

雪見ちゃん、健人くん。
ここの部屋は二人のために、他のお客さんを入れないで
いつでも空けておくから、好きなだけ使っていいからね。
これだけの人気者を彼氏に持つと、これから色々大変なこともある

と思うけど、
俺はいつでも二人の味方だから。
なんかあったら、いつでもここに逃げ込んでおいで。
俺に出来ることがあったら何でもする。
だから、いつまでも仲良くいろよ！

ってことで、おじさんは退散します。
ラブラブな二人の邪魔は野暮だからね。
あ、このあとのワインは自腹でお願いしまーす！
じゃ、なんかあったら呼んでね。」

健人と雪見は深い感動に包まれて、幸せな想いが倍増していた。

「本当にいい人だよね、マスターって。」

「うん。俺たちの味方でいてくれて、心強いよね。」

「有り難いことだよ。いつでもこの部屋を使っていいって！
じゃあ、お礼にもう一本、ワイン頼んじゃう？」

「いいねぇ！じゃ、お次は白ワインに鯛のカルパッチョなんてどう？」

「賛成！お祝いにはやっぱり鯛だよね！」

こうして二人のお祝いの会は、まだまだ終わりそうもなかった。

その夜は、いつまでもこの部屋から笑い声が聞こえていた。

明日待ち受けている困難など、想像もしないで…。

悲しい嘘

二人で恋人記念日の祝杯をあげた翌日。

「あ痛ぁ…。さすがに今日は俺、ヤバいかも。
頭ん中がぐわんぐわん鳴ってる。」

「私も同じ。完璧にマスターにしてやられたって感じ。」

「お祝いしてくれるのは嬉しいけど、朝の四時までワインはきついわ。
結局、全部で何本空けたんだろ？」

「わかんない。まぁ、かなり空けたことだけは確かだわ。
もっと早くに帰れば良かったね。
閉店時間までいたから、マスターに捕まっちゃった。

今日は撮影、無理だ！ファインダー覗いても焦点が定まらない。
今野さんに叱られるから、一応撮ってる振りはするけど、今日の写真は無しね。
健人くんのその目はまずいでしょ、写真に残したら。」

「俺って寝不足とかすると、すぐ目にきちゃうから困るんだよなぁ。
しかも花粉症も相当きてる。目薬差さないとヤバい！」

二人でドラマ撮影スタジオの片隅で、こそこそ話をしていると、

健人のチーフマネージャーの今野さんがやって来た。
そして、険しい顔をして二人に
「今日の仕事はこの撮影だけにしたから、これが終わったら
二人で事務所に来るように。」
と、それだけを伝えて、また足早にどこかへと行ってしまった。

「やっぱー！二人して二日酔いなのがバレちゃった！
今野さん、相当怒ってるんじゃない？
だってこのあと、新聞と雑誌の取材も入ってたんだよ！
それをキャンセルしちゃうなんて、かなり怒ってる証拠だ！」
そう健人が言ったが、雪見は何かがおかしいと思っていた。

「ねぇ。今日のみんなの様子、なんか変じゃない？
昨日までと全然空気が違う気がする。
だいたい、いつも健人くんの周りにはたくさんの人が集まってるのに、
なんで今日は誰も寄ってこないの？おかしいと思わない？」

「そう言われてみれば、なんか雰囲気が違う気もする…。」

二人は、正体の掴めない不安に周りを包囲されていた。

なにがこの先待っているのだろう…。

健人は演技に集中することで、その闇からの脱出を試みた。
だが、もがけばもがくほど深みにはまっていき、
足が着くことは結局なかった。

その日の撮影が終わり、その場から逃げるように
事務所へのタクシーに乗り込む二人。

しばらくは沈黙が続いた。

「なんだろうね。絶対にみんなおかしかった。
誰も私の近くに来ないし、話しかけてもこない。
なんか、みんなに無視されてた気がする…。」

雪見がうつむきながらそう言った。

健人もまったく同じことを思っていた。
だが、返事ができなかった。

「今野さんは私たちに、何を言おうとしてるんだろ…。
私、事務所に行くのが怖い…。」

雪見が、膝に乗せたカメラバッグをぎゅっと抱え込むと、
健人はゆっくりと雪見の肩を抱き寄せた。

「大丈夫。俺が必ずゆき姉を守るから。
どんなことがあっても、必ず守ってあげるから。
大丈夫だよ、大丈夫…。」

健人は自分に言い聞かせるように、前を見据えた。

雪見は、健人の温もりを肩に感じながら、
これから待ち受けているであろう困難に、
私自身も立ち向かわなければならないと、冷静さを取り戻していった。

健人の盾になるのは私でなければならない、と…。

健人の所属事務所に到着。
ビルの足元に立って、上を見上げる二人。

「よし、行こうか。」　「うん。」

八階までのエレベーターの中。
二人は固く手をつなぎ合っていた。お互いの心を確かめるように…。

八階到着の合図が鳴ると、二人はスッと手を離し表情を引き締めた。

健人が先頭を切って事務所の中を進む。
なぜかみんな、顔を上げようとしない。やっぱり変だ。

覚悟を決めて、今野の待つ応接室のドアを開けた。

「失礼します。」

「おぅ、お疲れ！どうだった、今日の撮影は。
まぁ、二人とも中に入れや。どうぞ、浅香さん。」

「はい、失礼します。」

雪見と健人は、二人並んで今野の前に腰を下ろした。

「今日ここに呼ばれた理由は解るか？」

心の準備が整わないうちに、いきなり本題に入られて
二人は内心焦っていた。

だが、平静を装って健人が「いいえ」と答える。

本当は、「二日酔いの件ですか？」と聞こうと思っていたのだが、
どう考えてもそんな雰囲気ではなかったので、やめにした。

雪見も真っ直ぐに今野の目を見つめていた。

「実はな。昨日の夜、週刊誌数社から問い合わせのメールが来てな。それが、『斎藤健人と健人の専属カメラマンが恋愛関係にある、という情報が入ってきたが、それは事実か』という内容だったんだ。」

「えっ！誰がそんなことを！」

健人と雪見は心臓が止まりそうなくらい、驚いた。
すぐには次の声が出てこなかった。

「でな。まずは本人に事実確認をしてからじゃないと答えられないと、とりあえずは返信しておいた。」

今野は健人から視線を外さずに、表情一つ変えないでそう言った。

「健人の専属カメラマン、とは浅香さん、あなたのことですよね。」

今野はまばたきもせずに、じっと雪見の目を見て話す。

雪見は、ここで視線を外したら私の負けだと思い、
今野の瞳を見つめ続けた。

「はい。昨夜その話が出たと言うのであれば、たぶん私のことで間違いないと思います。」

雪見も、ひたすら平静さを装って、落ち着いて話すことに努めた。

「それでは、君たちが恋愛関係にある、と言う噂は本当なのか、あるいはまったくのデマなのか。それを君たちの口から教えてくれ。事実…なのか？」

雪見は、心臓の鼓動が辺りに聞こえるのではないかと思うほどの緊張感に包まれていた。

健人もまた、追い詰められて崖っぷちに立たされているような、絶体絶命感を覚えていた。

黙りこくる三人。

誰もお互いの視線を外そうとはしなかった。

しばらくの無音のあと、健人が雪見の隣で小さく

「ふぅぅ」と息を吐き出したのが聞こえた。

そして、意を決してこの沈黙を打ち破るように健人が

「それは、事実で…」と言いかけると

その声を打ち消すほどの大声で、

「事実ではありません！」と、雪見がソファーから立ち上がって叫んだのだ。

「事実ではありません。ただのデマです。
私と健人くんは、ただの親戚以外の何者でもありません…。」
冷たく雪見が言い放った。

隣で話す雪見の声が、健人には遥か遠くに聞こえる気がした。

仕返し

「事実ではない…と言うんですね。それは本当ですか？」

今野が雪見をにらみつけるように言う。

雪見は、声を出したことによって少し心が落ち着いていた。

ソファーに座り直し、

大丈夫、うまくやれる。大丈夫…。

自分におまじないをかけてから、毅然とした態度で話し出す。

冷静に、冷酷に、まるで女優のように…。

「今野さん。今回の件、大変ご迷惑ご心配をお掛けしまして申し訳ありませんでした。

事務所にもご迷惑をかけたとしたなら、それはすべて私の責任です。

たとえ健人くんと親戚関係にあったとしても、

私が事務所と仕事の契約を交わしたのであれば、

もっと俳優の斎藤健人に対し、配慮すべきだったと反省しています。

素顔の斎藤健人を撮ろうとするあまり、私が公私混同して健人くんに近づきすぎました。

端から見ると、それが今回の噂に繋がったのだと思います。

これからは、これだけ世間に影響力のある斎藤健人の

専属カメラマンなのだという自覚をもって、
仕事に臨みたいと思います。
本当に申し訳ありませんでした！」

そう一気に言って雪見は立ち上がり、今野に対して深々と頭を下げた。

それまで雪見の突然の謝罪を、夢のなかで聞いているかのようだった健人も、
ハッと我に返り慌てて立ち上がって頭を下げる。

「俺も軽率でした！ゆき姉が…いや雪見さんが俺の写真集を撮ってくれることになって、ちょっとはしゃいでました。
もっと仕事の現場なんだと言うことを、意識しなきゃいけなかった。
本当に申し訳ありませんでした！」

二人の様子を、今野はじっと観察するように見入っていた。

そして、心に区切りをつけたかのように
やっと柔和ないつもの顔に戻って、穏やかに言った。

「まぁ、座って下さい。お茶でもどうぞ。
二人の言い分はきちんと受けとめました。
今回のことは、私にも責任があると思っています。
健人のチーフマネージャーでありながら
周りへの配慮が少し足りなかった。

健人と浅香さんが、仲の良い姉弟のようだということは
最初から思っていたことです。それを知っていながら、周りへの配
慮を促さなかった私にも
落ち度がありました。申し訳ありません。」

「いえ、今野さんに謝っていただくことは何もありません！
私たちの方こそ、ご迷惑をおかけしました！」

雪見は再度頭を下げながら、なんとかこの場を収めることができそ
うで
心底ホッとしていた。

それと同時に心に余裕が出てくると、今回の噂がいったい
どこから流れて来たものなのかが知りたくなった。
雪見には、黒幕にピンとくる者があった。

「あのぅ、今野さん。今回の噂の出所に心当たりはありませんか？」

「いや、出版社からのメールには詳しいことは何も無かったが…。
浅香さんには何か心当たりでもあるんですか？」

「健人くんに専属カメラマンがついたと言う話は、
まだ一部の人にしか伝わってないと思うんです。
写真集のコンセプトや出版自体が、まだ発表されてないんですから。
それに、私が健人くんと仕事をするようになって
まだたったの一週間足らずです。

その間に、私が専属カメラマンであると紹介された場所は、ごくわずかなはず。
例えば、毎日行ってるドラマの撮影現場だとか…。」

健人が隣で、あっ！という顔をしたのがわかった。

もしかして昨日、俺の腕にしがみついてたあの子…。
確か、プロデューサーの姪っ子とか言ってたような…。
あとは思い当たる節がない。
あの子が俺に気があるのは前々から感じていたけど、
まさかこんな行動に出るとは…。
明日から気を付けないと、これだけじゃ済まなくなる。

健人が考えていた事と同じことを、雪見もまた考えていた。

まさかこんな仕返しをしてくるとは…。
甘く見てたわ、あの女のこと。
でも、私と健人くんとの関係を、本能的に感じ取ってるのは間違いない。
週刊誌に流れた話は、嘘ではないのだから…。
これからは気を付けて行動しないと。
今、二人の関係が公になるのは、誰にとってもメリットがない。
健人くんの人気にマイナスになることだけはしたくない。

「浅香さん、健人。今回のことは、私がうまく収めておきます。
だから二人は毅然とした態度で、今まで通りに仕事を進めて下さい。
ただ…。
仕事の現場でだけはもう少し、仲の良さを引っ込めてもらわないと。
またあらぬ誤解を招いても、仕事に支障をきたしますからね。
お願いしますね、その辺は。」

実は今野は、全てをお見通しのような気が雪見にはしていた。
その上で、暗黙のうちに二人の関係を認めてくれ、
フォローしてくれてる気がしてならなかった。
それを確かめる勇気はまだないが…。

「本当に今回はすみませんでした！
また明日から仕事頑張るんで、よろしくお願いします！」

そう言って健斗は深く頭を下げ、雪見もまた
今野にお礼の気持ちも込めて、丁寧にお辞儀をしてから
二人は応接室のドアを出て行った。

ビルの外に出ると、すでに辺りは夕暮れの街へと変貌している。
やっと酸素が体の中に入ってきた気がして、大きく深呼吸してみる

健人。

「大事にいたらなそうで良かったね！どうなるかと思ったよ！」

健人が疲れきった表情でそう言った。

「ほんとだね。ごめんね、健人くん！
私が昨日あの子にやきもち妬いて、ちょっと意地悪しちゃったのがいけなかったんだ。ほんとにごめん。」

「いいよ、そんなこと。ゆき姉のせいなんかじゃないから。
こんなとこで話してて、また写真とか撮られたら困るから、どっかで飯食いながら話そ！」

「今日はおとなしく帰った方がいいんじゃない？」

「やだ！このまま帰れるわけがない！
ゆき姉と一緒にご飯食べなきゃ、一日が終わらないよ！」

また、駄々っ子みたいな幼い顔を健人が見せた。

「しょうがないなぁ…。じゃあ、一緒にお店入るのはまずいから、二人別々に時間差でお店に行こう。昨日行ったけど…」

「どんべいでしょ？
こんなに早く、あそこに逃げ込む日が来るなんてね。

でもあそこなら、何かの時はマスターが上手くやってくれそうだし、あそこの飯なら毎日でもいいや！
じゃ俺、先に行ってるからね。後で絶対に来てよ！あとでね。」

そう言い残し、健人は人混みに紛れて消えて行った。

雪見は何故か、店の方角とは違う方へ歩き出し、タクシーに飛び乗った。

第二回作戦会議

雪見は一人、タクシーの中で考えていた。

今回のことは、本当に週刊誌にだけ流された話なんだろうか。
もしかしたらほかのメディアにも、すでに流されてるかもしれない。
話が大きくなる前に調べて、なんとか収めないと…。

雪見はそう思いながら、ポケットからケータイを取り出し電話をかけた。

「あ、もしもし、真由子？
ごめんね、出張から戻ったばかりで疲れてるとこ。寝てた？
あのね、真由子にお願いがあるの。
力を貸して欲しいんだ、私と健人くんに。」

電話の向こうから、悲鳴にも似た声が聞こえた。

「勘弁してよ、真由子！
あんたのせいで私最近、耳の調子がおかしいよ！
とにかく、これから真由子んちに行くから、相談に乗ってくれる？
うん、じゃあ詳しいことはあとでね。もうちょっとで着くから。」

雪見は、何としてでも健人を守りたいと思っていた。
健人と付き合うことで、健人に迷惑をかけたくはなかった。

いわゆるアイドルの仕事ってやつは、ファンにいかに擬似恋愛をしてもらい、
応援してもらうかにかかっている。
それは半ば妄想の世界にさえなるのだが、ファンが健人に恋愛感情を持ち、
究極のゴールは健人が自分を選んでくれて、彼女になる！
と言うのが、ファンそれぞれの密かな願いだ。

だから健人に、本当の彼女の存在が見え隠れするとなるとそれは人気に大きな影を落とすことになる。

アイドルというのは因果な商売だ。

アイドルである前に、みんなと同じ一人の人間なのにその職業のせいで、自由な恋愛さえも許されない。
人間として、誰かを愛するのは当たり前なことなのに恋愛をしたところで、それを隠し続ける生活を強いられる。

『偶像』という意味を持つアイドル。

一人の人間として生命を持つ『アイドル』は、
完全なる『偶像』には成り得ない。

タクシーが真由子のマンション前に到着。

中に入りインターホンを押す。

「　はい。」

「あ、雪見だけど。ごめんね、来ちゃった。」

「今、開けるから。」

オートロックを解除してもらい、広いエントランスホールを通り
エレベーターに乗り込む。

ピンポーン。「どうぞ！入って。」

トイプードルのジローが、短い尻尾をクルクル回し
全速力で雪見の元へ駆けつける。

「ジローくん久しぶり！元気にしてた？よしよし！
ごめんね、真由子。ニューヨークから戻ったばかりで疲れてるよね。
お願いだけ伝えたら、すぐに帰るから。」

「なに言ってんの！帰すわけないでしょ！
健人とあんたの力になってほしいって、一体どういう事？
一体、あんたたちの関係はどうなってるわけ？」

凄い勢いで真由子がまくし立てる。まぁそれも無理のない話だが…。

「時間が無いなら単刀直入に聞くわ。あんたたち、付き合ってんの？」

「うん、まぁ…。」

「うん、まぁだと！なにそれ！
あんた、付き合い出してから私に連絡よこした？
専属カメラマンになって、健人の実家にも行ったまでは知ってるけど、
あんたが健人の彼女になったなんて、ただの一言も聞いてないよ！
それって、あんまりじゃないの？」

「ごめん…。だって真由子はニューヨーク行ってて忙しいかと…。」

「仕事と健人と、どっちが大事だと思ってんの！」

「えっ？健人…なの？」

真由子はまだ健人のことを好きなんだ、と複雑な思いがした。

「当たり前でしょ！健人と雪見が大事に決まってるじゃない！
おめでとう！雪見。良かったね。本当に良かったね！」

「真由子…。ありがとう。
真由子になんて言おうか迷ってたんだ。
あんなに好きだった健人くんを、私が取っちゃったみたいで…。」

「なに言ってんの！

私はアイドルおたくであって、健人おたくじゃないんだから！
他にもかっこいい人は山ほどいるよ。
まぁ、健人が一、ニを争うアイドルだったことは確かだけどね。
そんなことより、相談ってなに？あんた達に何が起きてるの？」

雪見は今日、今野から呼び出された一部始終を話して聞かせた。
そして真由子に一つのお願いをした。

「ねぇ、真由子のお父さんって、確か大手出版社の編集長さんだよね？違ったっけ？」

「よく覚えてたね！そうだけど、それがどうかした？」

「私をお父さんに紹介してもらえないかな？」

「えっ？なんで？週刊誌の方は、そのマネージャーさんがなんとかしてくれるんでしょ？」

「うん、そっちの方はもういいの。多分、今野さんがうまく収めてくれると思う。
そうじゃなくて、真由子のお父さんの所から健人くんの写真集を出版出来ないかなと思って。」

「えっ！嘘でしょ？父さんの所に健人の写真集を頼みたいわけ？

もうどこから出すか、決まってるんじゃないの？
あー、ちょっと待って！興奮して喉が渇いちゃった！」

そう言いながら、真由子は冷蔵庫から缶ビールを二本取り出し、
その一本を雪見に渡した。

「ありがとう。あー美味しい！生き返った！
今ごろ健人くん、一人で待ちくたびれてるだろうなぁ…。」

「なに、あんた！健人に待ちぼうけ食わして、ここに来たわけ？
健人が可哀想でしょ！メールぐらい入れなさいよ！心配してるよ。」

「うん、わかった。じゃ、ちょっと電話する。」

「うっそー！？　健人に、あの斎藤健人に生電話するのぉ？
やだぁ！緊張する！」

「なんで真由子が緊張するのさ。電話するのは私だよ。」

「もう、なんでもいいから早く電話して！いやぁ、ドキドキする！」

「変なの！」と言いながら、雪見が健人のケータイに電話した。

「あ、もしもし、健人くん？ごめんね、待たせちゃって。
あのさぁ、今、急用を思い出して友達んちにいるんだけど、
もう少しかかりそうだから、悪いけどご飯食べたら先に帰ってて。

ほんと、ごめんね！明日は私がご馳走するから！
じゃあまた明日。お疲れ様！」

「ちょっとぉ！なんでもう早、切っちゃうわけ？
私に一言くらい、挨拶させなさいよ！ほんとにもう！」

「あ、出たかった？また今度、会わせてあげるから。
それより今日は、緊急作戦会議第二弾ということで、このままいい？
取りあえず私、お腹空いちゃったんだけど…。」

健人との食事をキャンセルしてまで、雪見はなにを企んでいるのか。

真由子には、まだ想像がつかなかった。

腹が減っては戦は出来ぬ！とばかりに、作戦会議の前に真由子があり合わせの材料で、美味しそうなパスタを作ってくれた。

「うわっ、美味しそう！いっただきまーす！
うーん、美味しい！真由子、また腕上げたね。さすがだわ。」

「そりゃそうよ。男をつなぎ止めるには、胃袋を掴むのが一番！でしょ？
そのためには日々精進しないと。
あんたが食べないで行っちゃった、この前のパスタも
相当美味しかったんだから！」

「ごめんごめん！あれは謝る。
けど、あの時パスタを食べないで飛び出したお陰で、
私と健人くんが一緒に仕事することになったんだから、
本当に真由子には感謝してる。」

「パスタをゆっくり食べてたら、チャンスを逃してたかも？って事ね。
それなら、食べきれずに捨てられたパスタも浮かばれるわ。
じゃ今日は、第二回作戦会議兼雪見のお祝いってことで、
とっておきのワインを開けちゃおう！
これからうちの商社で輸入を開始する、私が買い付けた中で
一押しのワインだよ。飲んでみて！」

「やった！ワイン輸入のプロが選んだワインなんだから、楽しみ！」

こうしてまた、お酒を飲みながらの作戦会議が始まった。

「ねぇ、うちの父さんの所から写真集を出版したいって、話は健人の事務所に通してんの？」

「いや、まだ何も。」

「また始まった！お得意の直感で行動ってやつね。どうでもいいけど、あんたのシナリオは？」

「私ね。今回の仕事に命を賭けようと思ってるの。健人くんの写真集に。
健人くんの事務所も同じ。
これでまた一気に、健人くんの人気をアップさせようと考えてる。
だから、どんなことをしてでも成功させなくちゃならない。

でも今のままでは、また次に同じような噂を流されたら多分私は専属カメラマンを降ろされて、誰か他の人が撮ることになる。
それだけは絶対に嫌！私が撮らなきゃ意味がない！

健人くんと約束したの。
私が必ず、本物の斎藤健人を撮してあげるって。
健人くんの魂が感じられる、一番の写真集に私がしてみせる！って。
だから、この写真集が完成するまでは、誰にも邪魔されたくない。

これ以上、余計な気を配って写真を撮りたくないの。
少しでも私たちの後ろ楯になってくれるような
大手出版社と契約して、この写真集を成功させたい！」

雪見は、珍しくワインに口も付けないまま熱く語った。

「そう。そんなに大事な仕事なんだ、雪見にとって…。
よし、わかった！
雪見が命を張って挑む仕事なら、私も全力で力になるよ！
でも、父さんに頼むのは簡単だけど、向こうも仕事だからね。
もっときちんとした戦略でプレゼンしないと。
いくら編集長と言えども、父さんの一存では決められないと思うから。
まぁ、ちゃんとした提案ができれば、その先は大丈夫だと思うよ。
なんせ、今をときめく斎藤健人の写真集だもん！
きっとどこの出版社だって、喉から手が出るほど欲しい仕事に決まってる！」

「そうだといいんだけど…。でも、一つだけ不安があるの。
今までの健人くんの写真集は全部、名だたるカメラマンが撮してるんだ。
そのカメラマンと健人くんとのコラボって形で、
二倍の話題性があったわけ。その分、売れ方も大きかった。
でも私ときたら、無名のフリーカメラマンなわけだし、
これまで猫ばっかりで、人物の写真集なんて出したこともない。
あ、健人くんを撮ることに関しては、誰にも負けない自信はあるよ！

けど、カメラマンの私が話題になることは一つもない。
本当に、写真だけで勝負しなきゃならないのがプレッシャーで…。」

ワインを飲みながら聞いていた真由子が、ニコッと笑った。

「じゃあ、あんたも話題になればいいんだ！」

「えっ？どういう事？」

「いいから、この真由子様に任せて！いい考えがある！」

何を思いついたのか、真由子がクローゼットへ行き、
たくさんの洋服と化粧道具を持って戻って来た。

「何をしようってわけ？ねぇ、教えてよ！」

「あんたを売り出すのよ！健人の親戚の、美人カメラマンとして！」

「えーっ！なによ、それ！
猫の写真集しか出してないカメラマンを、どうやって売るわけ？」

「この際、写真集の実績なんてどうでもいいのよ！
私が狙ってるのは、今流行の美人カメラマンって分野。
まぁ、あんたを美人カメラマンと呼ぶには
私的には少し抵抗があるけど、悔しいかな、あんたはその線でいけるよ。

あとはいかにビジュアル的に話題性を呼ぶか。

あ、一番の売りは、もちろんあんたが健人の親戚だって事！
これほど強力な売りは、誰も持ってないよ！
みんなが欲しくたって、努力で手に入れられるものじゃない。
それを生かさない手はないでしょう！」

「でも…。今野さんは今回の写真集で、
私と健人くんが親戚だってことは、全面には押し出さないって。」

「なに言ってんだろうね、まったく！それを押さないでどうすんの！
いい？それを敢えてアピールすることで、
あんた達が仲良くやってても、誰も怪しまなくなるでしょ？
十二歳も健人と年が離れてて、赤ちゃんの時からお姉さん代わりだった、
ってメディアに公表すれば、みんな仲の良さに納得するでしょ？
と言うことは、次の噂に先手を打って封じ込められるってわけ。

しかも、あんた達も堂々としてられる。
だって、本当にはとこ同士なんだから嘘じゃないもんね。
まぁ、恋人同士ってことだけはトップシークレットだけど。」

「そんなにうまく行くかなぁ。
誰にも邪魔されないで、撮影を続けられるなら嬉しいけど…。」

「ま、この真由子様に任せなさいって！
私があんたを美人カメラマンに仕立てて見せるから！」

そう言って真由子は、たくさんの服の中から幾つかをチョイスして、雪見を売り出すためのイメージ作りを開始した。

雪見プロジェクトのスタートだ。

真由子プロデュース

真由子は、自分の持ってるワードローブの中から
雪見に似合いそうなものを引っ張り出し、
次から次へと雪見に着替えさせた。

「うーん…。どうもしっくりこないなぁ。なんか違うんだよね。」

真由子はバリバリの商社ウーマン。
仕事着はスーツだし、私服も性格的に気崩した格好が出来なくて
いつも、パリッと糊のきいた白いシャツにパンツスタイルが多い。

それは真由子自身を象徴していてとても良く似合い、
雪見はそのかっこよさに惚れ惚れとするのだが、
どうも雪見が着てみても、そのかっこよさは表現しきれない。

「だって、真由子と私じゃタイプが違いすぎるもん。」

確かにそうだ。何でもテキパキ、性格きっちり、
竹を割ったような姉御肌タイプの真由子と、
どちらかというとおっとり、のんびり、ぽわ〜んとした性格の
雪見とじゃ、あまりにもタイプが違いすぎる。

雪見が真由子タイプの服を着ても、いかにも借り物を着せられてる
感じがして、
いつまで着ていても身体に馴染まない。

「仕事初日に真由子の格好を真似して行って
出来る女の第一印象をもらいたかったんだけど、
それに見合った行動をしなくちゃと思ったら、くたびれちゃった。
やっぱりこの格好は、真由子だから似合うんだよ。
私が着ても、私らしくない気がする。」

「そうだね。私もそう思った。
うーん。バリバリの美人カメラマンって言う路線はアウトか…。
じゃあ、次はどんなイメージで行こうかな。
やっぱり、むやみやたらと服を着てもダメだね。
もっとしっかりしたイメージを作ってからじゃないと。
どんなタイプの美人カメラマンでいくか、コンセプトから決めるか。
」

二人はファッションショーを中断し、またソファーに座り直して
ワイン片手に戦略を練り直した。

「やっぱ、雪見から離れすぎたタイプじゃダメだね。
最初は取り繕えても、次第にボロが出てくるようじゃマイナスだ。
会見を開いた直後から、あんたは日本中の注目を集めるんだから、
どこから見られても自然でないと。」

「ち、ちょっと待ってよ!なに、その会見って!
私が日本中の注目を集めるって、どういう事?何を考えてるのよ!」

「もちろん、写真集を成功させるための戦略よ!それ以外に何がある
の。

まず早いうちに健人とあんたで、写真集の制作発表会を開かなきゃ。
あ、もちろんそれは出版社主催でね。
うちの出版社から、クリスマスに斎藤健人の写真集を刊行します！
って宣言してもらうの。
で、その発表会に健人とあんたが登場して、今回の写真集のコンセプトや狙い、
あんたと健人の間柄も説明するわけ。

そこで重要な事が一つあって、あんたが次の日のスポーツ紙に
『斎藤健人と美人カメラマンの夢のコラボ写真集！』とかって言う見出しをつけてもらえるぐらいの、美人にならなきゃなんないわけよ！
だって、自分から『美人カメラマンの浅香雪見です。』なんて、自己紹介できないでしょ？
ましてや『天然カメラマンとのコラボ写真集』なんて見出しでも付けられてごらんよ！
印象ガタ落ちだから！
だからあんたを一目見て、誰もがすぐに美人カメラマン！って言葉が頭に浮かぶようでなくちゃダメなの。」

はーっ…。雪見が深くため息をつく。

「これからどうなっちゃうの、私…。
しかもさ、よく考えたらそれって、ただ真由子が頭の中で考えてるだけのことで、
何一つ現実のものにはなってないんだよ！
健人くんの事務所にはもちろん、真由子のお父さんの出版社にだって

まだ一言も交渉していない！」

「じゃあ、交渉すればいい。」

「そんなに簡単な話じゃないから！」

「意志が固まってるなら、あとは実現に向けて進んでいくしかないんだよ。
どうしよう、どうしようってオロオロしてても、何一つ夢は叶わない。
あんたはこの仕事に命を賭けるんでしょ？
だったら一つずつ、問題をクリアしていかないと！

ねぇ。私の作戦、もし実現したとしたらどう思う？
こんな売り方じゃ嫌？何か他に雪見が考えてる事はある？」

「別に、考えてる事はないけど…。本当に真由子のシナリオ通りになれば
仕事もやり易くなるだろうし、励みにもなると思うけど…。」

「よし！じゃあ決まりだ！
どんなスタイルの美人カメラマンにするかは、後で考えるとしてまずは具体的に話を進めるね！」

そう言いながら、真由子はどこかへ電話し始めた。

「あ、もしもし、パパ？元気だったぁ？
うん、真由も元気にしてるよ！昨日までニューヨークだったの。

相変わらず忙しいけど、仕事は楽しんでるから大丈夫！安心して。
それより真由ねぇ、パパにお願いがあるんだ。
今、俳優の斎藤健人が写真集を企画してるらしいんだけど、
その出版を、パパの会社で受注できないかなと思って。
まだどこの出版社から出すかは、決まってないらしいんだけど、
それをなんとかパパの所で採って欲しいんだ。
他社に決まったら困るから、明日にでも交渉して欲しいの！
え？理由？そうだね、それが解らないと交渉のしようがないか。
わかった。じゃあこれから家に説明しに帰るわ！
友達一人連れて行くから、ママにも伝えといてね。
じゃ、これからタクシー乗るからまた後で！

さ、雪見！出かけるから用意して！」

雪見は呆気にとられていた。
真由子の行動力は、さすがに商社ウーマンの真骨頂だが、
それ以上に衝撃的だったのは、真由子が父親と話す時の変わりよう！
今まで聞いたこともないような甘え声で、「パパ」と呼んでいた。

一気に真由子に対する印象が変わった。
なんだか、見てはいけないものを見てしまったようで、
どんな顔で真由子と話せばいいのか、わからなくなった。

それに気付いた真由子が一言、

「あ、私、ファザコンなの。」と言った。

雪見は、「あぁ、そうなんだ…。」としか返事ができなかった。

突然に真由子の実家へ、連れて行かれることになった雪見。

一体、自分で蒔いた種は、この先どうなってしまうのか。

あのまま、健人とご飯に行ってれば良かったかな、と少し後悔し始めた。

思いもしなかった展開で、突然真由子の実家へ行くことになり
雪見の頭の中は、これ以上無いと言うぐらいに混乱していた。

「ちょっと待ってね、真由子。今、一つずつ考えを整理するから。」

タクシーの中で、雪見がため息をつきながらそう言った。

「あんまりのんびりと考えてる時間はないよ!この時間帯なら二十分ぐらいで着くから。
まず、これだけは約束!
父さんには、雪見と健人の本当の関係は絶対に言わないこと!」

意外な真由子の提案であった。
大好きなお父さんぐらいには、本当の事を話しちゃうのかと思った。

「あ、はとこ同士って話じゃないからね。恋人同士だって事を。
自分の親を信用しない訳じゃないけど、
ビジネスにおいてはたとえ親子であろうとも、秘密厳守は当たり前。
だから、父さんに話す内容はそれ以外の事ね。
まぁ私がすべて話を進めるから、雪見は聞かれた事だけ話して。

あとは…。実家に帰ったら、私は怪しまれないように
いつもの調子に戻るから、それを見てあんたは笑わないように!」

一体、どんな調子になっちゃうんだろ？
笑わないように！なんて最初に釘をさされたら、
かえって笑っちゃいそうで、なんだか自信がない。
取りあえず、「うん、わかった。」とだけ返事をしておいた。

「さぁ、もうすぐ着くよ！いい？必ず今日で決めちゃうからね！
交渉なんてもんは、明日があると思ってたら必ずどこかに
話を持って行かれるものなんだ。
タッチの差で契約を取れない事だって、しょっちゅうなんだよ。
だから、最初のプレゼンが肝心なの。
いかに相手の心を掴んで離さないか！ここにかかってる。
まぁ、私のいつもの仕事ぶりを雪見に見せてあげる。
あ、運転手さん。その信号の手前でいいです。」

「ここだよ。」と言われて見上げた家は、夜の暗闇でも充分に
その存在感を漂わせる、いわゆる豪邸であった。

「この場所にこの豪邸？真由子んちって、どんだけお金持ちなの？」

「ぜんぜんお金持ちなんかじゃないって。」

「こういう家に住んでる人を、世間ではお金持ちって呼ぶんだよ！」

深呼吸をして自分を落ち着かせる。
隣で真由子が、大丈夫、大丈夫って言うけれど、
ちっとも大丈夫なんかじゃない！
自信がないから、健人の事務所に初めて行った時より緊張してる。
もうここまで来たら、あとは全面的に真由子にすがるしかないと
自分に言い聞かせた。

「ただいまぁー！あ、ママ！久しぶりだね、元気だった？」

「ほんとに久しぶりね！こんなに突然帰ってくるなんて！
あら、ごめんなさい。お友達も一緒なのに立ち話なんてね。
ようこそいらっしゃいました！いつも真由子がお世話になって。」

「こんなに遅い時間にお邪魔しまして、申し訳ございません！
わたくし、浅香雪見と申します。
こちらこそ、真由子さんにはいつも大変お世話になってます。」

雪見は夜分の突然の訪問を詫び、恐縮しながら居間へと足を運んだ。
やはり、想像通りのお金持ちらしい。
キョロキョロするのは、はしたないと思いつつも
インテリアの高級感に目を奪われ、高そうな絵画に見入ってしまう。
そこへ真由子の父が居間に入ってきた。

真由子と母は、キッチンに入ったままだ。早く戻ってきてよ！

「あの、真由子さんの友人の浅香雪見と申します。
今日はこんな時間からお伺いしまして、申し訳ございません。」

雪見がソファーから立ち上がり、深く頭を下げた。

すると真由子の父は、にっこりと笑いながら、

「あぁ、斎藤健人の専属カメラマンの浅香さんですか。
お噂は聞いてます。色々大変ですね。まぁ、お掛けください。」

というではないか！心臓の鼓動がこれまでにないほど高鳴った。

「あ、いえ、違うんです！あれは嘘です！
私と斎藤健人は祖母同士が姉妹で、はとこの関係にあるんです！」

とっさに弁解したが、うろたえているのは誰の目から見ても明らかだった。

どうしよう！何から話せばいいんだろう。
やっぱり、噂がリークされた出版社には
すべての部署に話が広まっているんだ！
真由子のお父さんは、二十代向けファッション誌の編集長だって聞いてたけど、
これじゃ、飛んで火に入る夏の虫。
真由子、早く助けて！

雪見と真由子の父との間に、気まずい沈黙が流れ出したその時、
やっと真由子と母がキッチンから戻ってきた。
二人はトレーにワインとグラス、おつまみを三皿乗せて運んできた。

「よう、お帰り！元気そうな顔を見て安心したぞ！」

「パパも元気そうね！良かった！」

そう言って真由子は父の隣に座り、外国人並みのハグをした。

「もう自己紹介ぐらいは済んだ？じゃあ取りあえずは乾杯しよう！」

母がワインの栓を抜き、四つのグラスに注ぎながら

「パパ！このワイン、真由ちゃんが買い付けて今度日本に輸入される
美味しいワインなんですって！
真由ちゃんもお仕事、頑張ってるみたいよ。」

「ほう、そうか！それは楽しみだな。どれどれ早速いただくか。
真由ちゃん、お帰り！それと浅香さん、ようこそ。じゃ、乾杯！」

四人は軽くグラスを合わせ、ワインを一口飲み込んだ。

「おお！美味いじゃないか！これは日本で飲める日が待ち遠しいな。」

真由子の父は、先ほどとはうって変わって上機嫌だ。
久しぶりに会った一人娘と一緒に、お酒が飲めるとあって大層嬉しそう。
真由子は自分の事をファザコンだと言っていたが、
この父もまた、一人娘を溺愛してる様子が随所に見られた。

「お前がパパにお願いがあるって言うから、
ベッドの中で本を読んでたけど、飛び起きたぞ！
こんな時間に何事かと思ってね。」

「あ、済みません！お休み中のところを遅い時間に。」

雪見が再度、真由子の父に詫びを入れる。
時計はすでに、十一時半を回っていた。

「いいんですよ、そんなにお気になさらないで！
真由子はいつも忙しく仕事をしているものですから、
帰ってくるとなったら、大体がこんな時間なんです。
それも、本当に突然に。でも、顔を見れるだけで嬉しいんですよ。」

真由子の母が、目を細めて心から嬉しそうにそう言った。
とても穏やかで、優しそうな母だ。

「じゃあ、そろそろ本題に入るとしようか。
で、斎藤健人の写真集を、うちの社で受注してほしい、と…。」

いよいよ勝負のときがやって来た。

真剣勝負

真由子の父が、手にしていたワイングラスをテーブルに置き、姿勢を正して私の方を向いた。

そして私に向かって鋭い視線を浴びせ、
私は一気にここから逃走したいほどの、恐怖心に襲われていた。

真由子には私の隣に座って欲しかったのに、
父の隣に座ったまま、移動する気配はない。

私の隣には真由子の母、という商談にしては変わった形でスタートした。

「まず、今回の話の概要を聞かせてもらおうか。」

さっきまでの笑顔はどこかへ消え去り、あたかもここが
会社の応接室であるかのように、淡々と商談を進める構えだ。

いや、取引を決めると言うことは、どんな場合でも
真剣勝負をする！と言うことに他ならない。
その相手がたとえ可愛い愛娘であろうとも。

その証拠に、真由子の顔つきも先ほどまでとは全く違う。
そこにいるのは父親ではなく、一人の商談相手と捉えているのだろう。

いよいよここから、真由子と父との駆け引きがスタートだ！

「今、斎藤健人の事務所では、今年のクリスマス刊行を目指して
新しい写真集の制作に取りかかってるの。
今までの健人の写真集とは異なって、素顔の斎藤健人だけを狙った
違う視線からの写真で構成される予定。
それで、ここにいる私の親友の浅香雪見が、
健人の専属カメラマンとして仕事やプライベートに同行して今、
一生懸命に撮影を進めているところ。

だけど昨日の夜、何者かによって出版社数社に
『俳優の斎藤健人と専属カメラマンが、恋愛関係にある。』
という嘘の情報を流されて、仕事に支障をきたしてるわけ。

パパはもちろん、その情報は耳に入ってたよね？」

真由子には、すべてがお見通しだったようだ。
向かい側に座った私ではなく、隣に座った娘からの
理路整然とした説明に、父は少し表情がゆらいできた。
一言だけ、「あぁ、知ってたよ。」と…。

私はといえば、恋愛関係を嘘と言わなければならないことに
チクチクと心が痛んだ。

「健人と雪見はおばあちゃん同士が姉妹で、健人が生まれた時から
雪見はおばあちゃんに連れられて、よく健人んちに遊びに行ってた

の。
年も一回りも違うから、健人は雪見を姉貴代わりに育ち、
雪見は健人を弟みたいに可愛がってたわけ。」

「ほぅ。あの今、若者に一番人気の斎藤健人と親戚関係ですか。
それはさぞかし鼻が高いでしょう?」

真由子の父が、テーブルのワイングラスに手を伸ばした。

「鼻が高いなんて、そんな!
私、つい最近まで健人くんが、あの俳優の斎藤健人だって
知らなかったんです。真由子さんに教えてもらったぐらいで…。
だから私にとって健人くん、いや俳優の斎藤健人は
いつまで経っても子供の頃のイメージで、
ちっとも人気アイドルなんだと言う実感が無いんです。」

「それなのになぜ、あなたと斎藤健人に恋愛の噂が?」

第一の核心に迫ってこられ、雪見は平静を装うのに苦心した。

「多分、私たちの仲の良さを羨んでのことでしょう。
私たちも悪かったんです。
十年ぶりに再会し、その上一緒に仕事が出来ることになったので、
二人とも少しはしゃいでしまって…。
みんなが真剣に仕事をしている現場で、確かに私たちはけじめが無
かった。

プライベートな関係を持ち込み過ぎてしまった。

だけど、そういう関係だからこそ、今回の写真集は成り立つんです！
他のカメラマンには見せられない、素の斎藤健人を
私にだったら見せてくれるんです！撮らせてくれるんです！

私、健人くんと約束しました。
私が誰にも負けない写真集を作ってあげる。
本当の斎藤健人の魂を撮してあげる！って。
だから、なんとしてでもこの仕事は成功させなければならない。
誰にもこの仕事を邪魔されたくはないんです！」

いつの間にか雪見は、緊張からも恐怖心からも解き放たれていた。
ただ熱い思いだけが細胞の隅々から溢れ出し、
真由子の父さえも圧倒するエネルギーを放出していた。

そのエネルギーは真由子の父はもちろんのこと、
真由子の母にも、最大の理解者である真由子自身にも深く心を貫いた。

真由子は、雪見がどれだけ健人を愛しているかを思い知らされた。
そして、好きな人のために命を賭けて仕事が出来る雪見を
心から応援したい気持ちで一杯になった。

「パパ！雪見はね、今回の噂話で仕事から降ろされるのを恐れているの。
次にまた同じような話が流れたら、
確実に事務所は雪見を専属カメラマンから降ろすでしょう。

だからなんとしてでも仕事を遂行できる、強力な後ろ楯が欲しいの！

パパの会社なら、もしこの写真集の契約を結んだら、何が何でもバックアップしてくれるよね？」

「それはまぁ、斎藤健人の写真集なら売り上げが見込めるし、出版社のクリスマス商戦には願ったり叶ったりの話だと思う。確か去年の写真集売り上げランキングの二位が、斎藤健人だったはず。

そんなドル箱はきっとどこの出版社でも、喉から手が出るほど欲しがるはず。

まだどこの社とも、契約してないのかい？」

真由子の父が、初めて身を乗り出して聞いてきた。

「ええ、今日の時点では、まだどことも契約を結んでないようです。私としては一日も早く落ち着いて、仕事を再開したいのですが…。」

しばらくの間、真由子の父は何かを考えている様子だった。

そして長い沈黙のあと、雪見に向かってにっこりと笑い

「その仕事、うちでやらせてもらえるよう明日にでも僕が芸能部に掛け合ってみよう。

多分、拒否される理由は何もないはず。

真由子がお世話になってる浅香さんのために、一肌脱ぎましょう。

きっとうまく行きますよ！」

そう力強く真由子の父は宣言した。

「本当？本当に力を貸してくれるの？
嬉しい！やっぱり真由のだーい好きなパパだわ！ありがとう！」

そう言いながら、真由子は隣の父に抱きついた。
いつもお姉さんみたいな真由子が見せた、可愛い女の子のような笑顔だった。

「ありがとうございます！本当に感謝します！
どうかよろしくお願いいたします！」

そう言いながら、雪見は立ち上がり深々と最敬礼した。

やっと第一の関門を突破できることに安堵したら、急に喉の渇きを感じ
雪見は残りのワインを一気に飲み干す。

その時、おもむろに真由子の父が口を開いた。

「ただし、一つだけ条件があります。
今、この場に斎藤健人を呼び出してくれたら、という条件です。」

父が何を思ってそんなことを言い出したのか、娘の真由子でさえ解

らなかった。

交換条件

健人を今ここに呼び出すことが、交渉仲介の条件？
雪見は我が耳を疑った。

「失礼ですが、おっしゃる意味がよく解りません！
これは、私が真由子さんにお願いして、ここまで進めてもらった話で、
健人くんはまだ何も知らない事です！
健人くんを呼び出して、一体何をしようとなさっているのですか？」

雪見は、おかしな事に健人が巻き込まれるのではないかと
必死になって、その条件を撤回してくれるよう懇願した。

「パパ！何を言い出すの！この交渉に今の時点で健人は関係ない！
それにこの家に理由もなく、あんなアイドルを呼び出すなんて、
そんな勝手なことが健人の事務所にでもバレたら
この話は全てがご破算になってしまうわ！」

真由子も必死に父の説得を試みる。

「ねぇ、少しお酒に酔って、そんな意地悪を言ってるんでしょ？
いつものパパの悪い冗談よね？」

「いや、冗談なんかじゃないさ。ただ気が変わっただけだ。」

「気が変わったって、どういう事！
まさか、この話を進める気が無くなったとでも言うんじゃないでしょうね！」

「違うよ。それは違う。
ただこの話を、他の部署に引き渡すのが惜しくなっただけさ。
パパの編集部でやってみようと思う。」

「えっ！」

雪見と真由子、それと真由子の母の三人が、同時に驚きの声を上げた。

「どういう事？パパの所はファッション誌の編集部でしょ？
アイドルの写真集は、他の部署が担当なんじゃないの？」

「確かに今まではそうだった。きっちり分担が決まってたからな。
だけど、この春からコラボ企画っていうのが
各部署で推進されることになってね。
うちのファッション誌とコラボできそうな事を、ずっと探してたのさ。」

真由子の父は、すごく良い物を見つけた！というような
満足げな顔をしていた。

私と真由子は、考えてもみなかった展開に、しばし唖然としていた。

「コラボ企画って言ったって、今回の写真集のコンセプトを変えるわけにはいかないのよ？雪見が撮る斎藤健人の素顔、って言うのがコンセプトなんだから、一番重要な事を変えたんじゃ、意味がない！」

「誰も、コンセプトを変えようなんて思っちゃいないよ。写真集の狙いはそれでいいと思う。読者の望んでいる事を企画するのが、一番売れる方法だからね。」

「じゃあ、健人とファッション誌の何がコラボするって言うの？」

真由子も雪見も、父の意図するところが全く解らなかった。

「斎藤健人とのコラボじゃなく、浅香さん！あなたとのコラボです！」

「ええっ！私とのコラボっていったい…。どういう事でしょうか？」

「あなたを、うちの誌面で連載するんです！斎藤健人に密着してる女性カメラマンを、今度は僕らが密着して写真集が出来上がるまでの過程を、毎月連載する。知ってましたか？斎藤健人は毎号、うちのグラビアに出てるんですよ。」

「あっ！ごめんなさい！私、二十代のファッション誌は読まなくて…。」

「私だって読まないわよ！だって私たち三十代だもん！」

真由子が父に対して、少しムッとした顔をする。

「別にそんな意味で言ってるんじゃないさ。
斎藤健人が載るのと載らないのとでは、売り上げに物凄い差が出るんだ。
これからクリスマスの写真集刊行までの間、毎号君たちを連載すればうちのファッション誌も売れるし、その読者が健人の写真集も買う。なんせ、写真集の出来る過程を毎月見ていくわけだから、だんだんと写真集の発売日が楽しみになっていく。
お互いが連動するって訳だよ！
どうだい、いい考えだと思わないか？」

確かに真由子の父の言う通り、一番健人のファン層が厚い二十代向けファッション誌で、十二月まで連載を持たせてもらったら、
写真集の前宣伝にもなるし、買ってくれる確率も高くなる。

それだけの事で、この先何の心配もなく撮影を続けられるのであれば
悪い話ではないのかも知れない。

他の部署に仲介してもらって、一から交渉するより
このまま真由子の父に頼んだ方が、健人の事務所との契約交渉も

スムーズに進められる気がした。

「なんせ、迷ってる時間はないんだ！
斎藤健人の事務所との交渉が一日遅れただけで、
他に決まってしまう可能性が高い！
そうならないためにも今すぐ決断して、明日の朝一番で健人の事務所に
交渉に出向きたい。

だがその前に、斎藤健人本人に直接会って、話を聞きたいんだ。
ここに呼び出してくれますね？」

雪見も真由子も、迷ってる時間はないことを、重々承知していた。

ここに健人さえ来てくれたら、それで全てはいい方向に動き出す。
あとは真由子の父に任せれば、きっと明日には契約が締結される。
そうしたら私も健人も、この先悩むことなく仕事に没頭できる。

「わかりました。健人くんに連絡してみます。
たぶんまだ飲んでるか、家に帰ったかのどちらかだと思うので。
ちょっと、席を外します。」

そう言って雪見は玄関の外に出て、健人のケータイに電話をかけた。

「もう帰って寝ちゃったかなぁ…。あ！もしもし、健人くん？」

雪見は今、健人の声を聞けて心から嬉しいと思った。
何時間か前に別れたばかりなのに、ずっと声が聞きたかった。
声を聞いたら、今度は早く会いたくなった。

「健人くん、今どこにいるの？まだ、どんべい？
だいぶお酒、飲んじゃった？」

「いや、そうでもない。
ゆき姉が来ないって言うから、やけ酒しようかと思ったのに
マスターがなんか気を使って、メチャクチャ面白い話をしてくるから、
笑ってばっかりで酔いも醒めちゃった。
なに、まだ友達んちにいるの？まだ帰れない？」

「あのね、今すぐ健人くんに来てほしいんだけど、来れるかな。
私たちの写真集のことで、力になってくれる人の家にいるんだけど、
その人が、どうしても健人くんに会いたいって。
健人くんが来てくれることが、交渉を進めるための条件だって…。」

健人はしばらく黙っていた。
よく事態が飲み込めなかったが、短い沈黙のあと
明るい声で雪見に言った。

「ゆき姉が俺のために、一番良い方法を考えてくれたんでしょ？
だったらきっと、そうする事が必要なんだね？
わかったよ！これからそっちに行くよ。どうやって行けばいい？」

雪見は、健人が詳しい事情も聞かずに雪見を信じて、
ここに来てくれることが何よりも嬉しかった。
一分でも早く、健人に会いたくて仕方なかった。

雪見は真由子たちの待つ居間へと戻り、満面の笑みで

「これから健人くんを迎えに行ってきます！」

と言ったその顔は、ここに来て初めての
輝いたひまわりのような笑顔だった。

優しい抱擁

健人は、店の中で待ってるから着いたら電話して！と言っていた。
ここからなら十五分もあれば着くだろう。
十五分後には健人に会える！
ただそう思っただけで、雪見の胸はときめいた。

健人を迎えに行くタクシーの中で、ひとり健人を想う。
こんなにも強く、会いたいと願ったことがあっただろうか。
たった十五分の道のりが、永遠に思えるほど長く感じた。

帰りのタクシーの中では、健人に理由を説明しなければならない。
時間が無いので、今から要点を簡潔に考えておこうと思っているのだが、
頭の中が健人ですぐに一杯になり、他の事を考える余裕は無かった。

「あ、その辺でいいです！」

わざと曲がり角の少し手前でタクシーを降り、走って角を曲がった瞬間
視界に健人の姿が飛び込んできた。

店の中で待ってると言っていたのに、すでにビルの外に立って待っていた。

夜十二時半を過ぎ、昼間の人通りは無いにしても
飲んで上機嫌な人達が、何人も行き交う。

雪見は、健人が誰かに見つかるのではないかと、焦って駆け寄る。

「健人くん！誰かに見られ……。」

話してる途中で涙が溢れてきた。ポロポロと大粒の涙がこぼれては落ちる。

健人の姿を見て、今まで張りつめていた心が一気に解き放たれ、涙となって身体の外に溢れ出る。

それを見て、健人は慌てていた。

「何かあったの？どうしたの？ね、話してよ！」

雪見の肩に手を置いて、顔をのぞき込む。

大好きな健人が、私のために心配そうな顔をしている。

健人の優しさが心に染みて、雪見はさらに泣けてきた。

「ううん、なんでもない！ただ健人くんに会いたかっただけ。顔見たら嬉しくなって、勝手に涙が出てきちゃった。」

いつまでたっても泣きやまない雪見を、健人はそっと抱きしめた。

「ごめん。ゆき姉ひとりに辛い思いをさせたんだね…。
もう、ゆき姉を泣かせたりはしないから。
大丈夫。俺が必ず守るから…。」

両手で雪見を抱きしめながら、健人はこれから待ち受けている
『敵』との戦いに、思いを巡らせた。

まだ敵の正体がわからない。
だが、そいつが雪見を泣かしたことだけは間違いない。
絶対に許さない！ゆき姉を泣かす奴は、この俺が許さない！

そう思いながら、抱きしめた雪見の頭をなぜていると、
いきなり突然、雪見に突き飛ばされた！

その反動で健人は、ビルの壁に思いっきり肘をぶつけてしまった。

「いってぇ～！なにすんだよぉ！肘から電気が流れただろーが！」

「だって、誰かに見られたらどうするの！」

「泣いてるゆき姉を抱きしめてやることも出来ないなら、
俺、俳優なんて辞めてもいいから！」

思ってもみなかった健人の言葉に、雪見は声が出なかった。

そんなにも自分の事を想ってくれてるなんて、知らなかった。

「ごめん…。ありがとう、健人くん。
今の言葉、かなり心に効いた。元気が出てきた。
ダメだなぁ～、私って！
健人くんに心配かけないようにって、いつも想ってるのにまったく演技ができないや。
これじゃあ、女優さんにはなれないね。」

雪見が涙を拭きながら、笑ってそう言った。

「あれ？ゆき姉って、女優になりたかったわけ？
無理だよ！すぐ顔に出るから。
泣いたり笑ったり怒ったり、くるくる顔が変わって面白いけどね。」

健人が笑いながら、おどけて見せた。

だーれもいない場所だったらもう一度、
今度は雪見が健人をギュッと抱きしめたかった。
ありがとうね、って言いながら…。

「さぁ、行こうか！みんなが健人くんのこと、待ってるよ！」

真由子の家へ戻るタクシーの中。
二人はずっと手をつないだまま、話をしていた。

健人との食事をすっぽかし、真由子の家へ行った理由。
そこから真由子の父の所へ行き、写真集の仲介を頼んだこと。
それなのになぜか真由子の父が、写真集を自分のとこでやりたいと言い出したこと。
明日、健人の事務所と交渉する前に、どうしても健人に会いたがってること。

「本当にごめんね。
健人くんに一言の相談もしないで、勝手に話を進めちゃって…。
健人くんの事務所に、写真集のカメラマンにしてくれ！って乗り込んだ時も、今回も、どうも健人くんの事が頭に浮かぶと勝手に身体が動き出しちゃうんだよね。
頭で考えるよりも先に、足が歩き出しちゃうんだ。
これって、病気だね。健人病だ！」

雪見がおかしそうに笑った。

健人は、いつでも自分のために、後先考えずに行動する雪見をとても愛しく思ってじっと見つめていた。

「え？なに？なんか顔に付いてる？
あ、さっき泣いちゃったから、お化粧が落ちちゃった？
やっぱー！お化粧直ししてから行った方がいいかな？」

そう言いながら、鞄の化粧ポーチから鏡を出そうと下を向いたその時、
突然健人の顔が近づき、雪見の頬にそっとキスをした。

びっくりした顔をして、雪見は健人の顔を見た。

健人は優しく微笑みながら、「大好きだよ！」とだけ伝えた。
そしてもう一度、雪見のことをしっかりと抱きしめ
耳元で、「愛してる。」と小さな声でささやいた。

雪見は胸がいっぱいになり、また泣きそうになってしまった。

運転手さんが見てようが何しようが、もういいや！と思ってしばらくの時間、健人に身体を預けていた。
心の奥まで暖かくなる温もりだった。

必ずこの人のために、いい写真集を作ってみせる！
もう、周りの妨害なんかに負けはしない！
私は宇宙一、健人のことを想ってるんだから。

自分の心を確認し、いよいよ大詰めを迎える交渉に気合いを入れた。

「健人くんのことは私が守るから。絶対に守ってみせるから！
だからこの写真集のために、少しの間我慢してね。
きっと私たちの味方になってくれる人達のはず。」

「大丈夫だよ！俺のことなら心配しないで。
今日はもう、ゆき姉に会えないと思ってたのに、一緒にいれるんだもん。
呼んでくれてありがとう！って、お礼を言わなくちゃね。」

「あ、私の親友の真由子って言うんだけど、大のアイドル好きでねぇ。
健人くんに会わせろ、会わせろって前から言ってたから、きっと健人くんに会った途端に絶叫すると思うけど、ほんとはいい奴だから。
私たちのことをちゃんと解ってて、いつも応援してくれてる。
お父さんとお母さんは私たちの関係、はとこ同士ってことしか知らないからそのつもりでね。」

「ＯＫ！わかったよ。そんじゃあ、乗り込みますか！」

健人は、俳優の斎藤健人の顔になり、タクシーを降りて行った。
その後ろに続く雪見の顔も、カメラマンの鋭い瞳に変わっている。

二人はもう一度手をつなぎ、真由子の家を見上げていた。

「でっけぇ家！こんな都心にこんな家？一体何者なの？」

健人は真由子の実家を見上げながら、雪見が来た時と同じようなセリフを呟いた。

「あはは！やっぱり私と同じこと言った！
私たちって似た者同士だね。」

「この家は、きっと誰が見ても同じセリフしか出てこないでしょ！」

「なんだ、そうなの？つまんないの。」

雪見と健人は、インターホンを押す前につないだ手を離し、一呼吸置いてから健人がボタンを押した。

「はい。」

「斎藤です。」

健人がそう名乗った途端、インターホンの向こうから真由子の絶叫が聞こえてきた。

「ほらね！言った通りでしょ。」

「今の声、近所に響き渡ったと思うんだけど。
事件かと思われたらヤバいから、早く中に入ろう！」

そう急かされて、雪見は健人と共に玄関の内にと飛び込んだ。

玄関先に真由子の母が出迎える。

「ようこそいらっしゃいました！お待ちしてましたのよ！
ごめんなさいね、こんな時間にうちの主人がお呼び立てして。」

「いえ、いいんです。
こちらこそ、僕の写真集のことでお力になって頂けるそうで、ありがとうございます！」

「あら、ごめんなさい！こんなところで立ち話なんて。さぁ、中に入って。」

居間では、緊張気味の真由子と、堂々とした父とが待ち構えていた。

「ようこそ、健人くん！よく来てくれたね。
『ヴィーナス』編集長の吉川です。
いつもうちの編集部がお世話になって、ありがとうございます！」

そう言いながら、真由子の父は握手を求め、右手を差し出す。

「いえ、こちらこそ、いつもお世話になってます。
今日は僕の写真集のことで、色々と雪見さんがお世話になりました。
」

健人は握手を交わしながら、隣にいる雪見のために礼を言った。

「お父さん、私を紹介して！」

小声で真由子が、隣の父に催促する。

「おぉ、そうだったな。健人くん、うちの娘の真由子だ。
さっき初めて聞いたんだが、なんでも健人くんの大ファンらしい。
すまないが、娘と握手してやってくれないか？」

「あ、いいですよ。ども！斎藤健人です。
いつもドジなゆき姉が、大変お世話になってます！」

「ドジな！って失礼ね。」

隣で雪見がふくれてる。

健人は笑いながらグラビア向けのアイドルスマイルで、
真由子に右手を差し出した。

真由子は顔を赤らめながら、おずおずと手を伸ばす。

その右手を健人が両手で包み込み、握手しながら真由子の目を見て仕上げににっこりと笑顔を送った。

真由子の、今にも卒倒しそうな表情を向かいで見ていて、雪見は笑いをこらえるのに必死だった。

その時、真由子の母が、また例の赤ワインとグラスを持ってきて、

「さぁ、どうぞお座りになって！
まずはお近づきの印しに乾杯しましょう。」

と、みんなのグラスにワインを注いだ。

「じゃあ、健人くんの写真集の成功を祈って、カンパーイ！」

お互いにグラスを合わせたあと、一口ワインを飲んだ健人が、

「うまい！このワイン、凄く美味しいですね！
どこのワインですか？僕、最近ワインが凄く好きになって…。」

と話すと、すかさず真由子が勢いよくソファーから立ち上がり、

「あ、あの、私がカリフォルニアから買い付けたワインなんです！
これから日本で販売されるんですが、
良かったら家にたくさんあるんで、今度雪見に持たせます！

是非飲んで下さい！」

と、健人に頭を下げた。

私はさっきタクシーの中で健人に、ちらっと真由子のワインの話をした事を思いだし、
お主、やるなぁ！と感心していた。

「さぁ、もう時間も遅いことだし、ここからは本題に入るとしよう。
真由子と母さんは、先に休んでいなさい。
真由子は泊まっていけるんだろう？」

「ええ、明日はお休みだから。
でも、雪見の話がまだ終わってないし…。」

真由子が私の、『美人カメラマン計画』の事を言ってるのがわかったが、
私は今イチ乗り気じゃなかったので
真由子には悪いが、その話しはスルーしようと思った。

「真由子、ありがとね！真由子のお陰でうまく仕事が出来そうよ！
私のことならもう大丈夫。健人くんが来てくれたから…。」

そう言いながら、隣の健人と目を合わせた。

「そっか。そうだよね。じゃ、あとは二人で頑張って交渉して。お父さん！明日は絶対に健人くんの事務所との契約、採ってきてよ！

採れなきゃ私、怒るからね！

それじゃ雪見、またね。お休みなさい。」

健人が笑顔で「お休みなさい。」と返したら、

真由子はぎこちない笑顔を健人に見せて、そそくさと居間を退散した。

いつもは姉御肌のバリバリ真由子なのに、

今日は十代の少女のような、ふわふわ真由子であった。

次に会った時になんて言ってやろうかと、とても楽しみになった。

「さてと。健人くんは今回の雪見さんの話、聞きましたか？」

「ええ、ざっとはタクシーの中で。」

「今回のお話、うまくお宅の事務所と契約が結べればお互いにとって、大変に有益な話だと思うんですよ。

私としては、何としてでも採りたい仕事だ。

すでに頭の中には、契約後の戦略さえはっきり見えている。

こんな時間に、無理を承知で健人くんに来てもらったのは、やはり本人の意志をきちんと確認しておきたかったからです。

どうも最初の話だと、真由子と雪見さんが勝手に暴走してるような印象を受けたので、肝心の本人はどう思っているのかと…。」

「この人はいつもそうなんです。
僕の事となると、後先考えずに突っ走ってしまう。
写真集の専属カメラマンになった時も、そうでした。
けれど、すべては僕の最善のアシストをするためであって、
決して自分のためなんかじゃない。

僕は雪見さんに感謝してます。今は仕事が楽しくて仕方ない！
たぶん、今までで一番いい顔して毎日仕事してると思います。
だからきっと写真集も、これまでにない素晴らしい物になると確信してます。
もし吉川さんの所で、この写真集を作ってもらえたら
絶対に売れる自信があります！
でもその前に、誰にも邪魔されずに仕事がしたいんです！

もしもゆき姉…、いや雪見さんが写真集から降ろされた場合には、
僕は今回の出版を、無かったことにしてもらうつもりです。」

雪見は、初めて聞く健人の考えにびっくりしていた。

私がカメラマンを降ろされたら、写真集も中止になっちゃう！
それはとんでもない話だ！

雪見と健人は、真由子の父に対して深く頭を垂れた。

「お願いします！僕たちの力になって下さい！」

健人と雪見が深く下げた頭を、真由子の父はじっと見ていた。
何かを考えながら…。

頭を垂れた二人にとっては、それが何十分にも思えるほどの
長く静かな時間だった。

コトン、とワイングラスをテーブルに置く音がして、二人は顔を上げてみる。

そこには健人と雪見を見つめる、吉川編集長の笑顔があった。

「君たちは、本当に正直な人たちだ！
いや、ばか正直と言ったほうが正しいかも知れない。
これじゃあ、これからの噂封じ対策を真っ先にとるのが
最初の仕事になりそうだな。」

真由子の父が、いや吉川編集長が笑いながらそう言った。

「噂封じ対策？ですか…。」　けげんそうな顔で健人が聞く。

「そう。今回の写真集では、これが一番の大仕事かも知れんな。」

「はぁ…。」

二人は未だ、吉川が何を言おうとしてるのか、訳が解らなかった。

「真由子が必死になって、二人をカバーする訳がよくわかったよ。
これじゃあ最初の噂話も、流れて当然と言えば当然だ。
君たちは、分かりやすすぎる！
そんなんじゃ、付き合ってるのがバレバレだよ。」

「ええっ！」

健人と雪見は同時に絶句した。

「何をおっしゃってるんですか！私と健人くんとは親戚同士で…。」

「恋人同士でもある！だろ？」

「そんな…。」

雪見は、なんと答えたら良いのか、必死に頭の中で模範回答を探した。
真由子とも、二人の関係はトップシークレットと言うことで、
大好きな父にも絶対内緒！と約束してたのに…。

あとに続ける言葉をあれこれ探している時、
隣から健人の声が、さらっと流れるように聞こえてきた。

「その通りです。おっしゃる通り、僕たちは付き合ってます。」

「ちょっと、健人くん！」

雪見は慌てて健人の言葉を遮った。

だが健人は、雪見の目を見て首を横に振る。

雪見も健人を見つめ、その大きな瞳から健人の答えを読み取った。

真っ直ぐに、吉川の目から視線をそらさずに話し出す健人。

「俺、失礼ですが、ここに来てからしばらくは吉川さんの事、色々観察してました。

雪見さん、いやゆき姉が俺を迎えに来た時、突然泣き出したからそんな奴は許せないと思ったんです。

でも、それは俺の誤解でした。

あなたには、きちんと二人のことを解ってもらえると感じたんです。

解ってもらった上で、この話を引き受けてもらいたいな、と。」

健人の、吉川を見つめる真剣な眼差しに

雪見は言葉を発するのがためらわれた。

「俺はゆき姉のことを、本当に大事に思ってます。

ゆき姉が、俺の写真集のカメラマンをやらせてくれ！って

事務所に乗り込んで来たときは、メチャクチャ嬉しかった！」

そう言いながら、健人は隣に寄り添う雪見のことを愛しそうに見つめる。

「俺は、絶対に二人でいい写真集を作ろう、と心に決めました。
だから、吉川さんには嘘を突き通したくはなかったんです。
いい写真集を作りたいのに、いつも心に後ろめたさを感じてるのは嫌だった。
でも、さすがに公にはできません。
俺の肩には、たくさんの関係者の生活がかかっている。
何度自分の職業を恨んだことか…。」

健人が視線を落とす。雪見は胸がぎゅっと締め付けられた。

自分が健人と付き合うという事は、そういうことなんだ…と、
改めて思い知らされた。
そして自分は今、大変な立場にいるんだと思うと身体が震えて、
膝の上にぽたぽたと涙が落ちてきた。

「なになに！また泣いてんの？いつからそんな泣き虫になったのさ！
昔は俺のこと、泣き虫だとか弱虫だとか言ってたくせに。」

健人が雪見の背中をそっと撫でながら、わざとおどけて話す。

「いつも言ってるよね。俺は全力でゆき姉を守るからって。
俺の言葉、信じてないの？」

「そんなわけないじゃない！
でも、私が健人くんと付き合うことで、たくさんの人に迷惑かけたり
ファンが離れて行ったりするんじゃないかと思うと、
心が痛くなって胸が苦しくなるのよ！」

雪見の涙は、まだ止まりそうもなかった。

そこで初めて、二人の様子をじっと見つめていた吉川が口を開いた。

「大丈夫ですよ。お二人の秘密は必ずこの僕が守ってみせます。
せっかくのビッグビジネスを、逃したくはないですからね。
それに実は、個人的に二人のことを応援したい気持ちが湧いてきた。
なんでですかね？
今まで僕に対して、こんなに心をぶつけてきた人たちがいなかったからかな？
それとも、可愛い娘の親友のため、かな？
いや、どっちもだな。

とにかく、僕に任せて下さい！決して悪いようにはしません。
僕は早く、お二人の写真集が見てみたい！
こんなにお互いを思いやる二人が作るのだから、
きっと素晴らしい作品に仕上がるに決まってます。」

吉川の脳裏には、すでに完成予想図が見えていた。
クリスマスの書店から、飛ぶように売れて行く写真集と
出版記者会見の様子さえ、今この目の前に見えるかのようだった。

「さぁ、今日から僕たちは運命共同体です。
まずは明日、何としてでも健人くんの事務所と
契約を取り交わさなければならない。
それが出来なければ、何も始まらないのですから。

今回、雪見さんからこの話が私にもたらされたという事は、
一切伏せておいた方がいいと思います。
内部情報を漏らしたと言われかねませんからね。

幸いにも、週刊誌各誌に流された噂が
『斎藤健人の写真集の女性専属カメラマン』と言う話だったと思うので、
そこから調べて写真集の出版を嗅ぎ付けた、
ということで僕が話を進めましょう。
だからお二人も、今日僕に会ったことは内密に。
まぁ、どこかでバレたとしても、親友の実家に招待されたとでも答えておいて下さい。
そういう意味では、今回は隠れ蓑がたくさんあるから案外やりやすいかもしれない。
健人くんと雪見さんは本当の親戚同士だし、
うちの娘と雪見さんは親友同士だし…。
きっとうまくいきますよ！明日はいい報告を待っていて下さい。」

「ありがとうございます！よろしくお願いします！」

そう言って三人は立ち上がり、お互いにガッチリと握手を交わしあって、
明日の健闘を祈った。

真由子の家を出て見上げた暗闇の空には、
東京都心には珍しく、たくさんの星が輝いて見えた。

二人はいつまでも手をつなぎながら、上を向いて歩いて行く。

明日からの希望の星を、一個一個心にしまってゆくように
ゆっくりと二人足並みを揃えながら…。

真夜中のデート

「ねぇ。ここから歩いて帰ったら、どれぐらい時間かかるかなぁ？」
雪見が、健人とつないだ手をブラブラ揺らしながら聞いてきた。

「うーん、一時間もあったら着くんじゃない？」

「健人くん、疲れてる？もう眠たい？」

「いいよ、歩いて帰ろ！このまま歩いて帰りたいんでしょ？」

「やった！あと一時間、健人くんとおしゃべりができる！」

夜中の二時過ぎ。
人目を気にすることなく堂々と健人と手をつなぎ、
あれこれおしゃべり出来ることが雪見は嬉しかった。

健人は、子供みたいにはしゃぐ雪見を見て、可愛い人だよな！と思う。
そして、自分と一緒にいられる事をこんなに喜んでくれてる雪見の手を、
いつまでも離したくはなかった。

「ねぇねぇ、明日…あ、もう二時だから今日か。
今日、真由子のお父さん、うまく契約採ってくれるかなぁ。」

「きっと採ってくれるさ！俺、あの人は信用できるから。
それにしてもさ、よくポンポンと思い付くよね、ゆき姉は。
だってさ、その直前まで俺と飯食いに行くはずだったんだぜ！
それをすっぽかされて俺、かなりへこんだもん。」

「ごめんごめん！私だって健人くんとご飯行くつもりだったよ！
けど、その何十秒後にまた思い付いちゃったんだもん。
勝手に足が、どんべいとは反対の方向に歩き出しちゃったの。
恨むなら、この足を恨んで！」

「いやいや、今じゃその勝手に歩き出す魔法の足に感謝してるよ。
そのお陰でゆき姉と一緒に仕事が出来るんだから…。
なんかさ、運命の道に導いてくれる足なんじゃない？
俺もそんな足が欲しい！」

健人が羨ましそうに雪見にそう言う。

すると、雪見が突然立ち止まって健人と向かい合い、笑顔で言った。

「健人くんはこんな足なんて、持ってなくていいの。
私が導かれる方向は、すべて健人くんに繋がってるんだから、
私がちゃんと連れてってあげるよ。
いつまでも健人くんのこと、見守ってるから。」

雪見の言葉と笑顔に健人は胸がキュンとなり、
思わずぐっと雪見を引き寄せて、強く抱きしめた。

その隣を、二人のおじさんがこっちを見ながら通り過ぎてゆく。
今どきの若いもんは！と言うような顔をしながら…。

「ちょっと、健人くん！おじさんが見てるってば！」

「いいよ、別に見られたって。
ゆき姉が、抱きしめたくなるようなこと言うから悪いんだ。」

健人が耳元でささやく。

「あっそう。私のせいなんだ。じゃあこのまま抱かれてよ。
健人くんっていい匂い。ねぇ、なんて香水付けてんの？」

もう少し、いい香りに包まれていたかったのに
健人が身体を離してしまった。

「あぁ、これ？これは健人オリジナル。
俺、人と匂いかぶるの嫌だから、青山にある香水の専門店で
俺だけの香水を創ってもらったの。いい匂いでしょ！」

「うん、すっごくいい匂い！私の好きな系統の香りだ。
ねぇ、今度私の香水も創ってもらいたいから連れてって！」

「うん、いいよ。俺も一緒に選んであげる。
ゆき姉に似合う匂いって言ったら、やっぱ猫の匂い？」

「ひっどーい！どんな匂いの香水よ、それ！
でも、それ付けたら猫がたくさん寄ってきて、撮影がやり易くなるかも！」

「グッドアイディアだった？」

「んなわけ、ないでしょ！」

深夜の街に、二人の笑い声だけがいつまでもこだましていた。

このまま二時間でも三時間でも、歩いていたいと思う健人と雪見だった。

その日のちょうどお昼頃。

健人は、一時から始まるグラビア撮影前の準備でヘアメイク室の椅子に座っていた。

ふぁ～ああ！とひとつ大あくび。

髪をセットしていた男のヘアメイクさんが健人に聞いた。

「あれぇ、すでにお疲れモードだね。仕事、忙しそうだからなぁ。」

「あ、すいません！

いや、昨日の夜中、一時間かけて歩いて帰ったんすよ。
しばらくそんなに歩いたことなかったから、家に着いたらクタクタで。
歩いてる時はまったく疲れなんて感じなかったのに、
朝起きたら足がつりそうになってた！」

「なんでそんなに歩いたの！しかも夜中に！」

「この鏡に映ってる、後ろでカメラ構えてる人が歩こう、歩こう！ってうるさいから…。
今日一発目の仕事がこれで、良かったぁ～！」

雪見がカメラを下ろし、鏡越しに健人のことをにらみ付けた。

その時、健人の手の中でケータイが鳴った！
思わず振り返って雪見を見る。

「もしもし、斎藤です。あ、吉川さん？昨日はどうもです！
え？契約採れました？本当ですか！ありがとうございます！
はい、ゆき姉もここにいます！あー良かった！
はい…、はい…、わかりました。じゃあ明日お伺いします。
本当にありがとうございました！失礼します。」

健人が弾けるような笑顔で、後ろを振り向いた。

「吉川さん、採れたって！やっと本格始動だよ、ゆき姉！」

「良かったぁ！やったね、健人くん！」

二人とも大騒ぎだった。
ヘアメイクさんが訳を聞いて祝福してくれる。

「へぇ、凄いじゃない！『ヴィーナス』とのコラボ写真集なんて！
絶対ヒットでしょ！ヘアメイクは、ちゃんと俺を指名してよ！」

「わかってますって！俺、宮越さんのヘアメイクが一番好きだから、
その節はよろしくお願いします！
けどね、今回の写真集は、素顔の斎藤健人がコンセプトだから、
あんまり出番は無いかも。
ゆき姉がわざと、寝癖だらけの頭を狙ってたりするから、
せっかく宮越さんにかっこよくしてもらっても、
ゆき姉にボツにされる可能性が高い！」

「えーっ！そうなの？
雪見ちゃん。変な健人ばっかじゃなくて、
たまには超かっこいいのも撮してやんないと、ファンが怒るよ！」

「そう？じゃあ今撮してあげる。」

そう言いながらカメラを向けた先の健人は、
完璧なヘアメイクは完成していたが、まだ首にケープを巻いていた。

「ちょっと、ゆき姉！そうじゃないだろ！
これ首から取ってからにしろよな！」

ケープを外し、椅子から立ち上がった健人は、確かに完璧だった。
普段の黒縁眼鏡にマスク姿の健人とは、まるで別人のようで
これこそがあのイケメン俳優、斎藤健人ここに降臨！といった風情
である。

雪見はカメラのファインダーを覗きながら、
『本当にこの人が私の彼氏なの？』と、今更ながら思うのであった。

さぁ、いよいよ二人のプロジェクトの発信だ！

写真集プロジェクト発進

健人の所属事務所と『ヴィーナス』編集部が、十二月刊行予定の斎藤健人写真集の出版契約を結んだ翌日。

健人と雪見、そして健人のチーフマネージャーの今野は『ヴィーナス』編集部にて行われる、最初の会議に呼ばれていた。

「じゃあ、皆さん揃ったようなので始めます。」

真由子の父、編集長の吉川が口火を切った。

「まず始めに紹介しよう。毎月うちのグラビアを飾ってくれてる今回の主役、俳優の斎藤健人くんだ！」

「どうも、いつもお世話になってます、斎藤健人です。あの、今回はこちらの編集部さんのお力をお借りして、僕の新しい写真集を創ることになりました。今まで、こういう形でのコラボはなかったので、とても楽しみにしています。どうぞよろしくお願いします。」

健人が深々とお辞儀をする。

みんな、間近で見る健人に緊張ぎみだ。

それを見て、次に挨拶の順番が回ってくるであろう雪見も、緊張し出した。

こういう場って、苦手なんだよなぁ…。

「次に、今回の影の主役、カメラマンの浅香雪見さんだ！
彼女は健人くんの親戚にあたる。おばあちゃん同士が姉妹だそうだ。
今回、写真集のコンセプトが『素顔の斎藤健人』と言うことで、
健人くんを生まれた時から見てきてる雪見さんに
カメラマンをお願いすることになったそうだ。
すでに雪見さんは、健人くんの専属カメラマンとして
毎日行動を共にして撮影をスタートしている。
じゃ、浅香さん。一言自己紹介をお願いします。」

雪見は、みんなの視線を痛いほど感じ、極限の緊張状態の中にいる。
隣に座る健人をチラッと見ると、健人はにっこり笑って
『だ・い・じょ・う・ぶ』と唇を動かしたのが読み取れた。

ふぅーっ。ひとつ深呼吸をしてから話し出す。

「皆さん、初めまして。フリーカメラマンの浅香雪見と申します。
今回初めて、人間の写真集を撮らせてもらうことになりました。」

皆がざわめく。

「私、普段は猫の写真を撮ってるんです。野良猫の…。
あ、お近づきのしるしに、皆さんに一冊ずつプレゼントしたいと思
って持って来ました。

健人くんの家の猫を撮した本です。」

「ええっ！コタとプリンの写真集？十冊しか作らなかったはずじゃ…。
あれ？しかも小さいサイズになってる！どうしたの？これ。」

健人が不思議そうに聞き返す。

ここの編集部のメンバーは、コタとプリンの写真集を見て、
一様に沸き立っていた。あちこちから歓声が上がっている。

取りあえず、お近づきプレゼント作戦は成功のようだ。

「私が、人物写真集を初めて手掛けるという事に、
みなさん一抹の不安を感じていらっしゃると思います。
けれど、ご安心下さい。
健人くんを撮すことに関しては、誰にも負けるつもりはありません。
他の人には撮しきれない素の健人くんを、
心の中まで引っくるめて
写真で表現してみせます。
たぶん私にとっては、これが最初で最後の人物写真集になるでしょう。
なので、全身全霊をかけて取り組みたいと思います。
どうぞ、皆さんのお力を私たちに貸して下さい！
よろしくお願い致します。」

隣で雪見の言葉を聞いていた健人は、

「これが最初で最後の人物写真集」と言った雪見にショックを受けた。

それは前々から聞いていたことなのだが、
今回の写真集が出版された後には
雪見はまた、野良猫を探し求める旅に出発すると言っていた。

撮影で毎日一緒にいられるのは、たったの二ヶ月だけ。
その後、雪見は編集作業に入り、健人はまた一人で仕事場に通う。
つい最近までは、それが当たり前の毎日だったのに、
今となっては雪見のいない仕事場なんて、考えられない。

なのに、少なくともあと四ヶ月後には、雪見の姿が見えなくなる…。

改めて突きつけられた現実に、健人はただ茫然と視線を泳がせていた。
雪見がいなくなる…。いなくなる…。
頭の中にその言葉だけが堂々巡りして、どこまでも脱け出せない。
もはや健人の耳には、雪見のあとの話なんか聞こえてこなかった。

「……でいいですよね？健人くん。健人くん？」

「え？あ、はい！あぁ、ごめんなさい！ちょっと考え事しちゃってて…。
もう一度お願いできますか？すいません！」

「明日の一時から、記者会見です！雪見さんと二人で。」

「ええっ！明日ぁ？もう早ですかぁ？まだ何も決まってないのに！」

健人は、自分がボーッとしてる間に何が話し合われて
そんなに早い記者会見へと繋がったのか、知りたかった。

「あの、記者会見って言ったって、まだ何も決まってないし…。」

健人の様子に吉川が、困ったもんだ！と言う顔をして説明し直した。

「昨日この契約を結んだ後、すぐにうちの精鋭達四人からなる
プロジェクトチームを結成しました。ここにいるメンバーです。」

改めて健人が見直すと、二十代向けファッション誌の編集部にしては年齢層が上の四人だ。
みんな、三十代後半から四十代前半か…。
しかも、男が二人に女が二人。
健人が想像していたメンバーとは大きく違う。

「ここにいる奴らはみんな戦略のプロで、販売計画から宣伝方法、
マスコミ対策まで
出版に関してのあらゆる事態に対応できる、スペシャリストです。
それプラス、女性二人はスタイリスト、ヘアメイク。
男性二人はカメラマン、マネジメント業務のプロでもあります。」

健人は、四人の方を向いて頭を下げた。

「で、昨日の会議の結果、なるべく早い時点で制作発表会を行って、まずは二人の間柄を周知してもらおう、と言う事になりました。
それで今後の仕事が格段とやり易くなるはずだし、
先手のマスコミ対策と言う兼ね合いもあります。

あとは、今回の写真集は『ヴィーナス』とのコラボ企画と言うことで、
何とか一回目の連載を、今月二十日発売号に間に合わせたい！
九月発売号から連載をスタートさせるのと、十月発売号からのスタートとでは、
大きく写真集の売り上げにも関わってくると考えます。
なんせ写真集は、今年のクリスマス発売予定だ。
短期決戦で勝負を賭けなければならないので、皆さんそのつもりで。

と言うことで、この後は早速、一回目の連載写真の撮影に入ります。
このまま、十二階の撮影スタジオに移動をお願いします！」

雪見と健人は、何が何だかよく事態を把握しないまま
流されるようにエレベーターに押し込まれた。

チーム雪見

「ねぇねぇ、ゆき姉。
『ヴィーナス』の連載って、このまえ真由子さんちで話してたやつ？
俺を撮影してるゆき姉を、ここのカメラマンが撮るっていう…。」

十二階までのエレベーターの中で、健人が雪見にささやいた。

一緒に乗り込んだ四人のスタッフは、打ち合わせに余念がなく
健人と雪見のこそこそ話など、聞いちゃいなかった。

「そうみたいだよ。誰も反対する人はいなかったらしい。」

「そりゃそうでしょ！編集長の提案だよ！誰が反対できるの？」

「なんか私、やりにくいなぁ…。
他の人にカメラ向けられながら、私が健人くんを撮すんだよ？
そっちが気になって、上手く健人くんのこと撮せないと思う。」

「まぁ、毎日密着する訳じゃないから、その時は適当でいいよ。
それより、今日は何時に終わるのかなぁ。
せっかく今野さんが、この後のスケジュール空けてくれたんだから、
早く終わったら久しぶりに服買いに行きたい。
あ、猫カフェも行きたかったんだ！
あのね、この前、当麻からメールきて、秘密の猫カフェ見つけたんだって！
なんか、本屋の地下にあるらしいんだけど、
誰かの紹介でしか入れない、会員制のカフェなんだって。

当麻がめちゃめちゃ気に入ったらしいから、俺も行ってみたい！」

話の途中で、十二階への到着を知らせる音声が鳴った。

スタッフの後に付いて、長い廊下を進む。

ここの撮影スタジオは、毎月『ヴィーナス』のグラビア撮影で訪れる、
健人にとっては見慣れたスタジオである。

だが雪見にとっては何もかもが初めての経験で、不安がいっぱいであった。
なんせ、撮られることに関しては全くの素人だ。
もうここは、健人や周りの人の言った通りにするしかない。
これをクリアしなければ先には進めないんだ！
そう自分に言い聞かせ、腹を決めてスタジオの中へと入って行った。

「まず、メイクルームで衣装合わせをして下さい。
それから衣装に合ったヘアメイクをしてもらい、撮影になります。
健人くんはいつも通りでお願いします。いいですね？」

「あ、は、はい！わかりました。」

もう、わかっても解らなくても、そう返事するしかなかった。

「じゃあ雪見さん、こちらへ。」

先ほどの女性スタッフ二人が、雪見の緊張を解きほぐすように
笑顔で手招きをする。
促されて入った部屋には、大きな鏡が有りたくさんの衣装が掛かっ
ていた。

「さて、始めますか！」

スタイリストの牧田が気合いを入れた。
雪見が思うに、二人とも推定年齢３８歳ぐらいか。いや、もう少し
上？
気にはなっても、この年頃に年齢は聞けやしない。

自分も三十を過ぎた頃から、とみに年齢を避けて生きている。
堂々と自分の年齢を、偽ることなく恥じることなく
大きな声で言えたのは、二十代半ばまでだった気がする。
それからたったの七、八年しか経ってないのに、もはや年齢とは
年々積み重なる、重りの付いた足かせにしか過ぎなかった。
この足かせが、軽くなる日は来るのだろうか…。
どう考えても、重りが増えていくことはあっても軽くなってゆくな
んて、
あるはずは無いと思ってしまう。

健人のことも…。
自分は真由子ほど大人な性格ではないから、健人と一緒にいても
素直に甘えることができるし、同じ話題で笑い合える。
話していて大きなギャップは、今のところ感じることはないが、
数字で見るところの１２歳差というのは、いつも自分を現実に引き
戻し、
永遠に縮まることのない『１２』という数字に

恐怖さえ感じてしまうことがあるのだ。

見た目だって、どんどん差が広がってゆくに決まってる。
健人は二十一歳の今でも、高校生役になんの違和感もないほど
実年齢よりは若く見えるし、どちらかと言うと童顔だ。
高校生役がハマるというのは、俳優としての才能でもあるとは思うのだが、
オフの日の健人もそれなりに幼い。

雪見も、実年齢よりは若く見られることが多いのだが…。

「雪見さんは普段、どんな格好が多いですか？色は何色の服が多い？」

スタイリストの牧田が、ハンガーに掛かったたくさんの服をあれこれ見ながら雪見に聞いた。

「猫を撮しに行く時は、汚れの目立たないカーキ色のカーゴパンツかジーンズに、
夏なら上はTシャツなんかが定番ですけど、
仕事のない時は大体ジーンズに、白や生成のナチュラルなシャツが多いかな？
最近はプルオーバーのシャツが好きです。」

「なるほどね。
じゃ、家のインテリアなんかはフレンチカントリーとか好きじゃない？」

「えーっ！どうしてわかるんですか？大好きです、フレンチカントリー！
この頃はアンティークの家具や雑貨も大好きで、
お休みにはよくショップ巡りをしたりします。」

雪見は、自分の部屋を覗かれたかのように、ズバリ言い当てられたのでびっくりしていた。

「うんうん。段々とイメージが出来てきたぞ！
ねぇ、進藤ちゃんもどう？髪とメイクのイメージ。
いけそうじゃない？私はその路線でいいと思うんだけど…。」

ヘアメイクの進藤に意見を求める。

「うん、私もいいと思う。
雪見さんの場合、あんまりこのイメージから外れたとこに持って行きたくないよね。
全然違う服着せちゃうと、せっかくの雰囲気が台無しになっちゃう！
それに本人も、それを維持するのにストレスになるし…。」

「よし。じゃあ決まり！私、昨日雪見さんの写真見せてもらった時から
大体の見当は付けてたから、いい服借りてきてあるんだ！
雪見さん、まずこの衣装に着替えてもらえます？そこの更衣室で。
それでＯＫなら、次にヘアメイクを決めますから。」

服を持たされ、更衣室で着替えて外に出た。

「やっぱり、ドンピシャ！どう？進藤ちゃん。」

「うん、良い良い！さっすが、牧田さん！今更ながら恐れ入ります！

どうですか、雪見さん。こんな感じで…。」

「すっごく好きです！この服、欲しい！どこに売ってます？」

「あ、買い取りでもいいですよ！気に入ってくれて嬉しいです。
じゃあ、お次は進藤ちゃんにバトンタッチ！
ヘアメイクをしてもらって下さい。あそこに座って！」

進藤は、すでに頭の中にイメージが完成しているらしく、
雪見の雰囲気と洋服に合わせたヘアメイクを
実に手際よく、さっさと仕上げていった。

「こんなんで、どうでしょう。可愛いでしょ？」

「うん、バッチリ！雪見さん、このままモデルになればいいのに！
絶対いけると思うよ！編集長の言ってた通りだ。さすが編集長！
じゃ、健人くんがお待ちかねだと思うから、スタジオに移動しよう。」

雪見は健人に会うのに、なんだかドキドキしていた。

私を見て、なんて言うだろう…。

メイクルームを出て、進藤と牧田に促されるように
恐る恐るスタジオに足を踏み入れた雪見。

「完成したよ！いいでしょ！」

牧田の声にみんなが一斉に振り返り、大きなどよめきが起こった。

「すっげーや！さすが、進牧ペアだ！想像以上だよ。
こりゃ、撮るのが楽しみだ！」

カメラマンの阿部が、嬉しそうに笑った。

健人のマネージャーの今野は、思わず拍手をしている。

「私たちの腕じゃないのよ！土台がいいの。
昨日見せてもらった写真は、雪見さんの上半身しか写ってなかったから
身長もわからなかったし、バランスがどうか少し心配だったんだけど、
実際会ってみたらモデルさん並みのスタイルだったから、
これはいけるぞ！と思って。
ただ、身長が１５６？だって言うから、軽やかさだけは心掛けたの。
服の好みも、想像通りだったからやり易かった。ね、進藤ちゃん！」

「うん！お肌も手入れがきちんとしてあって綺麗だし、
髪の毛の長さ的にもちょうど良かった。
あ、前髪だけは少し切らせてもらったけど。
何より造りがいい！
綺麗可愛いって言うの？大人なんだけど少女っぽさも残ってる、みたいな。
絶対、うちの雑誌でいけるよね？」

「いける、いける！こんなモデルさんいたら、絶対人気出るって！
あ、編集長を呼んでこなくちゃ！」

牧田が走ってスタジオから出て行った。

肝心の健人は、と言うと…。

声も出せずに、ただ雪見を見つめるばかりだった。

あまりにも綺麗すぎて可愛いすぎて、なんて雪見に声をかけたらいいのか
わからずにいた。

雪見は、なにも言ってくれない健人に少し腹が立って、
ツカツカと健人の前に歩み寄った。
さっきまでは、健人に会うのが恥ずかしいと思っていたのに…。

「ねぇ、なんで何にも言ってくれないの？私、変？似合ってない？」

健人に向かって大きな声で問い詰めた。

スタジオの中は、雪見の緊張を解きほぐすための、ノリのいい曲が結構な音量で流れ始め、耳元で話さないとなかなか聞こえない。

健人が何かをぼそっとつぶやいたが、この音量の中にあってはさっぱり雪見の耳には届かなかった。

「なに？聞こえない！ちゃんと言ってよ！」

「俺、泣きそうかもしれない。」健人が雪見の耳元でつぶやいた。

「えっ！」

雪見が健人から一歩離れ、健人の目を見ると
確かにその大きな瞳がウルウルと揺らいでいる。

「なんで泣くのよ！そこは泣く場面じゃないでしょ！
泣けるほど変ってことなの？」

雪見が半分笑いながら健人を叱る。

すると健人は、雪見に近寄り耳元で

「すっげー可愛いよ！俺の彼女だから！って、みんなに叫びたいくらい。

叫んで自慢しちゃってもいい？」

健人が真顔で言うので、雪見は慌てた。本当に言うかと思った。

「なに言ってんの！やめてよ、こんなとこで。言ったら怒るからね！それより私、このあと、どうすればいいの？」

雪見は急に我に返り、また不安な気持ちに襲われ始めた。

「大丈夫だよ。俺が一緒にいるんだから。
カメラさんの言う通りに動けばいいだけさ。心配ないって！」

「そりゃ、健人くんにとってはいつもの仕事かもしれないけど、私にとっては、どんな顔してればいいかも解らない、未知の世界なんだよ！
もう、帰りたいよ…。」

怒ったかと思えば急に弱気になる雪見を見て、
健人は、どうにかしなくちゃと思案した。

「ゆき姉、両手を出して。ほら、早く！」

「なんで？」

「いいから、早く！」

健人が、何をしようとしてるのか解らなかったので、
雪見は恐る恐る両手を前に差し出した。

「おまじないしてあげる！
俺が事務所のイベントでステージに出る時に、
いっつも当麻と二人で必ずやるおまじない！
俺も当麻も俳優だから、ドラマとかは全然緊張しないんだけど、
イベントとかで歌を歌わなきゃならない時は、めちゃ緊張するんだ！
で、当麻と二人で編み出したのが、この儀式。
すっごく落ち着けるから、ゆき姉にもやってあげる！」

そう言いながら健人は、雪見の両手を向かい合って握った。

「目をつぶって！いい？俺が言う事を繰り返し言って。
じゃ、始めるよ！」

健人と雪見は向い合わせで手を取り合い、目をつぶっている。

「これが終わったら、何が食べたい？」

「何が食べたい？　え？なに、これ？」

「シーッ！余計な事は言わない！もう一度やり直し！
これが終わったら、何が食べたい？」

「何が食べたい？」　渋々雪見が繰り返す。
「中華が食べたい！」「中華が食べたい！」
「ビールが飲みたい！」「ビールが飲みたい！」
「餃子も食いたい！」「餃子も食いたい！」
「うまい飯のために、仕事を頑張ろう！」「頑張ろう！」
「よっしゃ！」「よっしゃ！」

健人は目を開けて、雪見に聞いた。
「どう？気合いが入らなかった？」

雪見も目を開いて健人を見た。
「うーん、微妙。でも、緊張は少し解けたかな？」

「よし！なら、成功！
初めて俺のグラビアにゆき姉が登場するんだから、一番の笑顔でねっ！」

「ええっ！なにそれ！嘘でしょ？
まさかこの写真、大きく載るわけじゃないでしょうね？
そんな話、私、聞いてないけど！」

「あれ?聞いてなかった?俺はさっき、聞いたけど。
一回目だけ、見開きで大々的に載せてくれるって!
すっごい宣伝効果だよ、きっと。喜ばなきゃ!
あとで吉川さんに、お礼言っといてね!」

雪見がさっきにも増して緊張し、バタバタとしていた時、
スタジオのドアを開けて、編集長の吉川が入って来た。

「あのぅ、吉川さん!私、聞いてな…」

「いやぁ~、やっぱり思った通りだ!僕の目に狂いはなかったよ!」

吉川が雪見の手を取って、大喜びしている。

「これで、『斎藤健人ｖｓ美人カメラマン』の見出しが実現するよ!
いやぁ、次の号は増刷間違いなしだな、こりゃ!」

えっ?もしかして、私がボツにしたかった
真由子の『美人カメラマン計画』って、まだ生きてたのぉ!?

雪見は、まんまと真由子父娘にシテヤラレタ!と、半ば呆れた。

そして、ええぃ!どうにでもなれ!と、さっきまでの緊張感はどこへやら、

開き直ってモデルごっこを楽しむことに決め込んだ。

開き直った三十女は、最強につよい！

撮影の準備が整い、健人と雪見に声がかかる。

「じゃ始めますので健人くんと雪見さんは、まず中央にお願いします。
あ、その辺でいいです！最初は二人とも、こっちに目線下さい！」

カメラマンの阿部が、早速撮影を開始した。

雪見はみんなの注目を浴びて、心臓が爆発しそうな状態だった。
まったくもって、地に足が着いている感覚が無く、
ふわふわと宙に浮いているかのようである。

顔にしたって、どんな顔をすればいいのか、はたまた今自分は、一体どんな表情をしているのかさえ、全く解らなかった。

「雪見さーん！普通でいいですよ、作らなくていいです。
最初は無表情のカットが撮りたいんで、目線だけこっちにください！」

「あ、すみません！わかりました！」

阿部の注文に、雪見が慌てて顔を作り直す。

「ゆき姉！どうせなら俺と二人で、最高にかっこいいグラビアに仕

上げようよ！
もっと自信を持って大丈夫だから。
今日のゆき姉は、俺が今まで見た中で一番綺麗なゆき姉だよ！」

健人が前を向いたまま、雪見に話しかける。

「今までで一番綺麗でも、明日になったらまた元通りで、がっかりさせちゃうね。
ま、一生に一度のことだろうから、
この変身ごっこを思いっきり楽しまなきゃ損か！
よーし！じゃあ世界で一番綺麗でかっこいいカメラマンに変身！」

そう笑いながら雪見が言った瞬間から、まったく違う雪見が現れた。

カメラのファインダーを覗いていた阿部は、
女優のように表情が一瞬で変化した雪見に驚いていた。

どんな注文にもすぐに反応し、健人と共に息の合ったポーズを決める。

後ろで見守っていた吉川を始め今野、牧野、進藤も
その変化にすぐに気付き、息を飲んで雪見の姿を見つめた。

さっきまでの視線が定まらなく、おどおどとした雪見とは別人で、
まるで女優かトップモデルかのような、堂々とした振る舞いである。

見ていた全員が、雪見は女優の経験があるのではないか？
と思いながら見ていた。

その時、吉川が動き出した。

「悪いが大至急、『シャロン』の編集長を呼んできてくれないか？
吉川が、どうしても見せたいものがある、と言ってると伝えてくれ！
大至急来い！とな。」

吉川が牧野に伝言を託す。
牧野は「はい！」と答えて、急いでスタジオから飛び出した。

「これは、大変な宝石を掘り当てたかも知れないぞ…。」

吉川が、誰に言うともなくつぶやく。

程なくして牧野が、三十代向けファッション誌『シャロン』の編集長、
北村を連れて戻ってきた。

吉川が、「お疲れ！悪いな、忙しい時に。まぁ彼女を見てくれないか？
とんでもない大発見をしたかもしれんぞ、俺は！」
と、興奮ぎみに北村に声をかけた。

北村も、一目雪見を見たあとに「誰なんだ、彼女は！」と色めき立つ。

スタジオの真ん中だけが健人と雪見によって、
オレンジ色の太陽のような、熱いエネルギーと光を放っていた。

北村が、雪見の隅々を観察する。

身長１５６ｃｍ、体重４７?ぐらいか。
胸まである髪には、ゆるやかにウェーブがかかり
ふんわりと顎の下あたりで二つに結ばれている。

生成り色のオーバーワンピースに、下から白いアンティークレースの
ペチコートがのぞいていた。

足元は、生成のくしゅくしゅなルーズソックスに
焦げ茶色のサボを履いている。
手にはコサージュの付いた、大きめなカゴバック。

すべて雪見の好きなテイストでまとめられていて、
それを着こなす雪見はとてもナチュラルだった。
可愛い大人の少女といった雰囲気で、健人のニ、三歳年上の彼女、
といった印象を受ける。

着こなしもさることながら、みんなが注目したのはその豊かな表現力。

お互い小声で、「雪見さんって元女優さんだったのかな?」とヒソヒソ。

カメラマンの阿部も、イケメン俳優とアイドル女優の撮影をしているのかと
錯覚を起こすような二人であった。

健人と雪見は、違うカットを撮るために、一旦セットから離れた。
その間にアシスタントの二人が、大急ぎでセットを転換する。
今度はカフェテーブルと椅子が用意され
小粋なパリのカフェテラスがスタジオに再現された。

二人にカフェオレが用意され、再びセットの中へ。

今度は健人と雪見に、いつものように自由なおしゃべりをしてもらう。
写真だけを使うので、話の内容は関係ない。

撮影中と言えども、大好きなカフェオレを飲みながらの
大好きな健人とのおしゃべりは、やっと雪見を元の雪見に戻し、
無我夢中でこなしてきた撮影に、ホッと一息入れることのできる貴重な時間であった。

「どう？疲れてない？」健人が雪見を真っ先に気遣う。

「私なら大丈夫。健人くんこそ、ここんとこ忙しいから疲れたでしょ？

今日はなんか美味しい物、食べに行こうか。」

「うん！さっき餃子が食べたい！っておまじないしたじゃん。
ホントに餃子が食べたい！どっか、美味しいとこ知ってる？」

「知ってる知ってる！前に本で見て行ってみたんだけど、
そこにね、クロたんって言う看板猫がいるんだよ！
餃子はもちろん美味しかったし、あんかけ炒飯も絶品だった！」

「絶対そこ行きたい！俺、疲れてきた時って何故か無性に
餃子が食いたくなるんだよね。それに、猫にも会いたくなる。
コタとプリン、元気にしてるかなぁ…。
あ！そうだ！さっきみんなに配ったコタとプリンの写真集、
なんで小さかったの？また作ったの？」

健人が、口にしかけたカフェオレカップをテーブルに下ろし、
ずっと雪見に聞きたかった事を思い出したように聞いた。

「あぁ、あれね。
健人くんが毎日大事そうに、コタとプリンの写真集持ち歩いてるけど、
なんか大きいサイズで作ったから、持ち運ぶには不便かなと思って。
鞄に入れやすい大きさにして作り直してみたの。
あとで健人くんにもあげるね！」

「やった！さすが、ゆき姉だね！
あの写真集のお陰で、あっという間にみんなとも打ち解けたし…。
やっぱ、俺の自慢の彼女だよ、ゆき姉は。」

健人がほおづえを付きながら、雪見の目を見て言った。

「ありがと！もちろん健人くんも、自慢の彼氏だよ！
本当に自慢出来ないのが悔しいけど。」

雪見も健人を見つめながら、ほおづえをついた。

二人の様子は誰の目にも、パリのカフェテラスで愛を語らう
恋人同士にしか映らなかった。

グラビアの撮影は、最後に衣装を変えてもうワンシーン行われた。

「はい！じゃあまた、一番最初に撮したのと同じ立ち位置でお願いします。
表情的には笑顔で！」

カメラマン阿部の指示で、健人と雪見はセットの中へと入る。

最後の衣装は、実際にお互いが仕事場へ着ていく服に近い衣装が用意された。

健人は、黒の細身なパンツに黒のエンジニアブーツ、
上は白いロングTシャツに、黒とグレーの大きなギンガムチェックの、
サテン地のジレ。
首には薄茶色のストールを巻いた。

雪見は、明るめなモスグリーンのカーゴパンツに、ベージュのワークブーツ。
上は、グリーンと茶のチェックのボタンダウンシャツを、腕まくりして着る。
手には愛用のカメラを持って。
髪は、先ほどの少女チックな二つ縛りから一転、
いつも雪見が野良猫の撮影に出かける時と同じ、
高い位置でのアップスタイルにした。

「まったくこんな格好です、いつもの仕事着は。
野良猫を撮しながら、結構ヨレヨレになっちゃうんで、服装だけは多少ヨレても、そこそこかっちりした格好で出かけます。
まぁ、草の上に腹這いになったりするから、
さすがに真っ白いシャツは着て行かないですけど。

それにしても、凄いですね！スタイリストさんって。
ほんの少しの情報から、その人にぴったりの服を選んでくれる。
ヘアメイクさんだって、一瞬の判断力でその人に似合うメイクや、
ヘアスタイルを決めちゃうんだから！
私にはとっても無理な職業。進藤さんと牧田さんを尊敬します！」

ヘアメイク室の鏡の前で、雪見は髪をアップにしてもらいながら、
進藤に話しかける。

「雪見さんだって、凄いじゃないの！
野良猫を追って、一人であっちこっちに撮影に行くんでしょ？
三、四人でなら行けるかもしれないけど、一人でなんて無理！
私こそ雪見さんを尊敬しちゃう！」

進藤が笑いながら雪見にそう言う。

「なに言ってんですか！
私なんて、独り身だから勝手気ままに暮らしていけるけど、
進藤さんも牧田さんも、お子さんがいてのこの仕事でしょ？
時間も不規則そうだし、家庭との両立って大変じゃないですか？」

「うーん、大変と言えば大変かもしれないけど…。でも、そもそも『大変』って基準は、人それぞれの価値観から来てると思うのね。その人が今まで体験してきたことを基準にして、その人の感じる大変さ加減が決まる、と言うか…。

私、下積み時代に、もっと大変な思いをいっぱいしてきたから、今、子供がいてダンナがいて、それで好きな仕事ができるのはたとえ時間のやり繰りとかが大変だったとしても、私の中では、これは大変な部類には入らないの。

だから、『大変な思いをする』って、とても大事だと思うんだ。今日、これが大変だと思ってた事が、明日それ以上の事を体験すると、

もうその前日の大変さは上書きされて、『大変』ではなくなってる。人生その積み重ねで、人は強くたくましくなって行くんだなぁって。」

「やっぱり、母は強し！ですね。

私も早く、たくましいお母さんになりたいなぁー。」

「雪見さん、３３歳だっけ？子供を産むにはちょうどいい年頃ね。人生経験がしっかりあると、多少のことでは動じない母になれるよ！誰か相手はいないの？お父さんになってくれる…。」

進藤は、わざと意地悪な質問をしてみる。

実は、このプロジェクトメンバー四人は、すでに吉川から健人と雪見が恋人同士であることを聞かされていた。

吉川と今野の判断で、この四人にだけは話しておいた方が
不測のトラブルにも対応できるだろうと言うことで、
昨日の時点で話し合われていた。

プロジェクトの人選も、そこを考慮して行われている。

『ヴィーナス』編集部には、たくさんの二十代女性が働いていて、
そのみんなが健人のファンなので、大勢の立候補があったのだが、
その人達をメンバーに加えると、必ず雪見に嫉妬する人が出てきて
前の噂の二の舞になってしまう。

なので、あえて二十代は外し、全員三十代後半の既婚者で揃えた。
その方が、何かと二人にアドバイスもできるだろう。

もちろん健人と雪見は、二人の関係を知っているのは吉川だけ、
と思い込んでいる。今野さえ知らないと思っていた。

「えーっ！結婚相手ですかぁ？いませんよ、そんな人！
いたらいつまでも、放浪の旅はしてませんって。」

「雪見さんだったら、男の人がほっとかないでしょ？
こんなに可愛い人が彼女だったら、毎日一緒に居たいと絶対思うよ
！
でも、そんな彼氏がいたら、健人くんが焼きもち妬いちゃうかな？」

雪見はドキッとした。

なんて答えようか、迷った。

「うーん、どうだろう？健人くんはあんなに人気者だし、
彼女だってきっと、選り取りみどりでしょ？
私なんて、健人くんの年の離れた、お姉ちゃんみたいなもんだもの。
焼きもちなんて妬きませんって！」

自分で声に出して言って、自分で『あぁ、そうだよね。』と思う。

健人は、選り取りみどりの中から、なぜ私を選んだのだろう…。
今まで浮かれていて、そんなこと深くは考えてもみなかった。

健人の彼女は、本当に私でいいの？

もっと私なんかよりふさわしい人が、この世にはいくらでもいるんじゃないの？

私と一緒にいて、健人は幸せになれるの？

頭の片隅に出かかっている答えを、今は無視しなければならない。

まだ撮影は続いているのだから…。

セットの中央に立つ雪見は、もはやプロのモデルであった。
スタート時の雪見は、もうどこにもいない。
写真を撮られ慣れてる健人と、同等の仕事ぶりだった。
見守るスタッフ達も、安心して二人を見ている。

「はい！じゃあ次は、『イケメン俳優ｖｓ美人カメラマン』の対決！
みたいな表情でお願いします！」
カメラマン阿部の注文に、すかさず二人が反応する。

「えーっ！まさか本当に、そんな恥ずかしいタイトルが付くんじゃ
ないですよねぇ？
そんなの載ったら恥ずかしくて、友達に合わせる顔がない！」
雪見が叫ぶと、阿部はスタジオの後方を指差し、
「それは吉川さんに言って！」と、笑っていた。
健人も吉川に向かって、
「俺も恥ずかしいっすよ！親戚中の笑い者になっちゃう！」

と言うと、雪見が口をとがらせ健人に、

「ちょっとぉ！それはあんまりでしょ？言い過ぎだから！」

と、怒ってみせたあとに大笑いした。

「ほんと、うちの母さん、なんて言うかな？

健人くんちのおばさんや、つぐみちゃんもビックリだよね！」

雪見がそう言うと、

「俺は、早く見せてやりたいな。

きっと、お似合いだよ！って、言ってくれると思う。」と、健人。

「お似合い！って、まさか、おばさんに話しちゃったの？」

雪見が声をひそめて健人に問いただす。

「いや、話してはないさ。でも、前から気づいてると思う。」

「ええっ！そうなの？しばらく顔を合わせられないや。

どんな顔してればいいのか、わかんない…。」

雪見は、急に憂鬱になり笑顔が消えた。

さっきメイク室で思い悩んでいた事を、思い出していた。

お互いの親が、二人の関係をどう思うのか…。

それこそ、一番考えたくはない事項であった。

「はーい！あと少しだから頑張って！
二人とも正面向いて、対抗心むき出し！って顔して。」

阿部の声に雪見は我に返り、とにかく今は何も考えずに
この仕事に集中しようと、気合いを入れ直した。

「じゃあ今度は、雪見さんがカメラを構えて健人くんを撮して！
いつもやってるのと同じようにね。自由に動いていいよ！」

その声を合図に健人と雪見は、また違う表情を見せ始めた。

雪見が構えるカメラに対して健人は、
阿部に見せる表情とはまったく違う顔を見せる。

そこで撮影の様子を見ていた誰もが、
目の前にいる健人は、先程までの健人と瓜二つではあるが、
別人に刷り変わっているのではないか、と思うほどだった。

雪見にしても同じである。

水を得た魚のように、実に生き生きと伸びやかに、
阿部とは正反対の撮影スタイルで健人を写し出していく。

みんなの目にはその光景が、いたずら子猫を撮す雪見の姿に重なった。

愛に溢れる瞳で被写体をのぞく。
柔らかに包み込むように…。両手を広げて抱きしめるように…。

二人のお互いを想う気持ちが、周りの誰にも伝わってきた。

「あの二人、うまくいくといいね。」

誰からともなく、そんな声が漏れてくる。

「ほんとだね。でも、私たちがしっかりとガードしてやらなくちゃ。これが掲載されてからが本当の正念場だよ。」

「気を引き締めていこうね！」

プロジェクトメンバー達が、お互いのミッションを確認し合う。
みんなが健人と雪見の幸せを祈っていた。

「はーい！お疲れさまでしたぁ！撮影終了でーす！」

阿部の宣言に周りから拍手がおこり、二人の頑張りをねぎらった。

スタジオの後ろから吉川が、北村と共に二人の前に駆け寄る。

「いやぁ、素晴らしかったよ！先にお礼を言っておかなくちゃ！
次の『ヴィーナス』は、二人のお陰で大反響間違いなしだ！」

吉川が顔をくしゃくしゃにしながら、大きな声で笑った。

その隣で北村が、「おい、俺を紹介しろ！」と背中を叩く。

「あぁ、失礼！こちらは『シャロン』編集長、北村君だ！」

「初めまして。北村と言います。」名刺を雪見に差し出した。

「あ！私、毎月『シャロン』買ってます！
グラビアの背景がいつも凝っていて、凄く楽しみにしてます！」

「いやぁ、それは嬉しい！あなたみたいな人が、うちの読者だなんて！
しかも、うちの編集部のこだわりを、ちゃんと見ていてくれるなんて、
さすがにカメラマンさんは目の付け所が違う！」

北村が手放しで喜ぶ。

そして雪見と健人に向かって、『シャロン』にも二人で出てくれないか
と聞いてきた。もちろん、健人の写真集の告知も約束した。

「えぇ、まぁ…。僕はかまわないですけど、
仕事の話はマネージャーにお願いできますか？」

健人が北村に、微笑みながらそう告げる。

「あぁ、失敬！そうだね、二人に頼んだって仕方なかった。
でも、是非うちにも出ていただきたい！
特に雪見さん！あなたには、うちの専属モデルになって欲しいくらいだ！
どうでしょう？考えていただけませんか？」

北村の突然の話に、健人も雪見も驚いた。

「ちょっと待って下さい！それは無理です！
私は、健人くんの写真集が終わったら、
またフリーのカメラマンに戻るつもりですから！」

また言っている、と健人は急に寂しくなった。

楽しかった撮影から一転して、心の中が不安でいっぱいになり、
雪見のいない一人きりの仕事場を思うだけで、気持ちがふさいだ。

どうしたら、雪見とずっと一緒にいられるのだろう…。

この二人の時間が途切れる十二月までに、
なんとしてでも答えを探さなくてはならないと、健人は雪見を見ながら思っていた。

「まぁ仕事の依頼は、健人くんの事務所を通してお願いするとして、今日はお近づきのしるしに、みんなでこのあと食事でもどうですか？」

北村が、どうしても雪見との縁を紡ぎたくて、そう提案したが、その言葉に雪見はキッパリと答えた。

「せっかくのお誘いですが、ごめんなさい！
今日はこの仕事が終わったあと、大事な人との約束が入っているので。」

そう言いながら、視線を健人に移す。

健人は、まだ先程の雪見の言葉を引きずり、
下を向いたまま、雪見の視線など気が付きもしなかった。

雪見はなぜ健人が、そんな寂しげな横顔を見せているのか、
なぜ私の声が耳に届かないのかわからずに、
正体の見えない不安に襲われ始めた。

今は健人の心が読めない…。

雪見自身も自分の心が読めなくて、霧の中を手探りしている。

二人の心は、奥深い樹海の入り口にたたずんでいた。

グラビア撮影終了後。
雪見は元気のない健人のために、あることを思いついた。

「あ、牧田さーん！お疲れ様でした！
今日は本当にお世話になって、ありがとうございました！
皆さんのお陰で私、なんとかなったでしょうか？」

雪見が、スタジオを出て行く途中のスタイリスト、牧田を見つけて駆け寄った。

「何とか、なんてもんじゃなかったよ！プロ並みだったから！
みんなで感心して見てたの。ねぇ、女優さんの経験なんてあった？」

「えーっ！女優さん？あるわけ無いじゃないですか！
学芸会でだって、お芝居なんてしたことないのに…。
それより、あの一番最初に着た服！
すっごく欲しいんで、私、一式買い取らせてもらってもいいですか？」

「ほんと？そんなに気に入ってくれたの？嬉しいなぁー！
もちろんＯＫだよ。昨日一生懸命、選んできた甲斐があった！
じゃ、メイク室に掛けてあるから、あとから取りに来て。」

「あ、私、それ着て帰りたいんですけど、いいですか？」

雪見の言葉に、牧田はおっ？と思った。

さては健人と、このあとデート？ならば、手を貸してあげなくちゃ！

「なになに？あれ着て、どっか出掛けるの？
まぁ雪見さんのお陰で、撮影がスムーズに終わったもんね。
よし！あのオーバーワンピースは、私がプレゼントしちゃう！
これからもよろしく！って意味をこめて。
あ、その代わり、ペチコートとかはお代を頂くけどね。」

「いや、それは悪いです！ちゃんと全部買わせて下さい！」

「いいの、いいの！実はあれ、私の知り合いの店から
新商品のサンプルにってタダでもらった物なんだ。
雪見さんが着て来月号に登場した途端、きっと凄い売れると思うよ
！
知り合いにも、大量に仕入れておけって伝えなくちゃ！
それも雪見さんのお陰なんだから、遠慮しないで受け取って。
あ、そうだ。
今だったらまだメイク室に、進藤ちゃんも片付けして残ってると思
う。
どうせなら、髪もさっきみたいにしてもらいなよ！
私が頼んであげるから。」

牧田が笑顔で雪見に言った。

「本当ですか？ありがとうございます！

じゃあ、あれ着て街歩いて、宣伝してきますね！」

「あ！でも、相当注目浴びると思うから気をつけてね！
なんせ、あの格好の雪見さん、可愛くて目立つから！
服はナチュラルテイストだから、目立たないはずなのにね。
もう帰れるなら、一緒にメイク室に行こう。」

「はいっ！」

雪見は牧田と一緒にメイク室に戻り、最初に着た衣装に着替えてから
ヘアメイクの進藤に、アップの髪を下ろして二つにしばりなおしてもらう。

「はい、完成！やっぱ可愛いよ、雪見さん！
とても三十代には見えない！この髪型のせいかなぁ。
ジーンズにも似合うと思うから、今度やってみてね。」

「ありがとうございます、進藤さん！
牧田さんも、また来月お世話になります。
今日は本当にありがとうございましたっ！」

雪見が、二人に向かって丁寧にお辞儀をした。

「さぁ、準備が出来たら早く行って！お連れ様が待ってるよ！」

牧田の言葉に雪見は小さく首をすくめ、照れ笑いをしながらメイク

室を出て行った。

「でもさぁ、あの二人がこんな明るい時間に、あの格好で出歩いたらどうなると思う？」

牧田がコーヒーを飲みながら、進藤に聞く。

「そりゃ相当、ヤバいでしょ？
まぁ、健人くんはいつも通りの変装をしてるだろうけど、
雪見さんが目立つよね、きっと。
なんであんなナチュラルスタイルなのに、目立っちゃうんだろ。
やっぱ素がいい人って、なにを着ても目立つんだね。
服のせいじゃないんだわ。
私なんて、どんな派手なかっこしても目立たないもん！」

「ほんとだ！私もいくら派手なかっこしても、
街で囲まれたためしは無い！すべては素材の良し悪しってわけだ！」

そう言って、二人は大笑いした。

健人と雪見の無事を祈って…。

「お待たせっ！へへっ。これ買っちゃった！」

健人の目の前に、さっきの感動的に可愛い雪見が現れ、

またしても健人の瞳はうるんで来はじめた。

「ねぇねぇ、どうしちゃったの？なんか今日は変だよ！嫌なことでもあった？」

雪見が心配そうに、健人に聞いた。
撮影の終わったあとに見せた、うつむいた横顔も気がかりだった。

「いや、なんにもないよ。ただ、ゆき姉の可愛さに感動してるだけ。」

「だったらいいけど…。」

「おいおい！否定はしないのかい！」

「だって、本当に可愛いって思ってくれてるんでしょ？この格好なら、健人くんといくつ違いに見える？」

「うーん、五つ違いぐらい？」

「えーっ！たったのそれだけ？七歳しかサバ読めないか…。」

「どんだけ年ごまかしたいのさ！いいんだって、そのままで！」

健人が久しぶりの笑顔でそう言う。

「だって…。お姉ちゃんじゃなくて、彼女に見られたいから…。

健人くんが、おばさんと歩いてるなんて、思われたくないから…。」

雪見の言葉に、健人の胸はぐいっと痛んだ。

「いっつも、そんなこと考えてるの？
俺、ゆき姉と付き合い出してから、一度だってそんなこと考えたことないよ！
俺が好きになったのは、十二歳年上のゆき姉なんだから！」

思わず声が大きくなってしまい、当の健人も慌てた！
ここはまだ、出版社の社内。

「もう！健人くん、声が大きい！とにかく、早くここを出よう！」

二人はそそくさと逃げるように、その場を立ち去った。

外に出ると、まだまだ陽は高い。
久しぶりに明るいうちに仕事が終わった。

「ゆき姉が頑張ったお陰だね。
じゃあ今日はご褒美に、ゆき姉が行きたい所に全部連れてってあげる！
まず、どこに行きたい？」

健人が雪見の顔をのぞき込む。

「ほんと？全部付き合ってくれるの？やったぁ！
なんか、デートみたいだね！」

「俺たち、付き合ってるんだからデートでしょ！
さ、いいから早く決めて！こんなとこにいても時間がもったいないよ。
どこに行きたいの？」

「じゃ、最初は原宿！健人くんが、スカウトされた現場を見てみたい！」

「なんで？そんなとこ、見て楽しいか？」

「私の知らなかったあいだの健人くんを、埋めていきたいの。
俳優になってからの健人くんは、すべて知っておきたい！」

「ふーん。ま、いいや。
ゆき姉がそんなに言うんなら、久々に行ってみますか、原宿へ！」

「レッツゴー！」

雪見は嬉しくて仕方なかった。
大好きな健人との、久しぶりのデート！ウキウキしている。

だがこの先は、すんなりとデートが進むはずはなかった。

秘密の猫かふぇ

平日の原宿、午後三時。
すでに学校帰りの学生たちに占拠され、ごった返している。

「ちょっと、ヤバくね？
俺、このかっこでも見つかる可能性大だ！
俺のスカウトされた場所見たら、とっとと退散した方がいいよ。
買い物は違うとこでしよ！」

「そうだね、時間的にまずかった！早いとこ、移動しよう。
で、どのあたり？健人くんがスカウトされたのは。」

「こっちこっち！高二の夏休みに初めて原宿に買い物に来て、
ここの角で信号待ちしてたら、うちの事務所にスカウトされたんだ。
」

「へぇーっ、そうなんだ！凄いね、こんな人混みの中から
健人くんを見つけ出したスカウトさんって！
その時、一歩早く信号を渡ってたら、今の斎藤健人はいなかったよね。
絶対に運命だったんだ。私、そういう運命って信じてる！」

「…っつーか、ほんとにヤバいよ！
あそこにうちのスカウトさんがいる！見つかったらヤバいって！
早く逃げよう！」

健人が雪見の手を取って走り出す。

健人と雪見は、指名手配犯が警察の張り込みから逃れるように、人混みの中に紛れてその場を脱出した。

「ひゃあーっ！なんとか見つからないで済んだ！よかったぁ！もし、あの人がこっち向いてたら、一発でバレてたと思う。」

「そうだね、この人混みじゃ、反対に健人くんの変装が目立っちゃう！」

健人と雪見は、取りあえずタクシーに飛び乗った。

「いくら花粉症と言えども、おっきいマスクと黒縁眼鏡に黒の帽子は、
この暑さの中じゃ確かに目立つわ。」

「俺、走ったから余計暑くなったよ！もう、やだ！マスクなんて！」

「でも、マスク外して歩いたら、絶対すぐ見つかるって！
どっか、見つからないとこなんて、ある？」

その時、タクシーの運転手さんが一言。

「あのぅ、行き先はどちらでしょう？」

「は？　あっ、まだ言ってなかった！すみません！
どこにしよう…。そうだ、いいとこがある！
運転手さん、南青山までお願いします。」

健人がどこか思いついた様子で、やっと行き先を告げた。

「どこ行くの？健人くん。南青山だって、今の時間は凄い人だよ！」

「予定変更！買い物はまた今度でいい？」

「うん、別にいいけど、どこ行くのか教えてよ！」

「当麻に教えてもらった、秘密の猫カフェ！
会員制で紹介状がないと入会出来ないんだって。
この前、事務所で当麻に紹介状書いてもらったから、行ってみようよ。
なんかね、本屋の地下に洞窟みたいなのがあって、
その入り口は、会員以外はわからないとこにあるらしい。」

「なんか、外国のスパイ映画かなんかみたい！
本当に日本にそんなとこ、あるの？」

雪見はどうも、健人の話を半信半疑で聞いている。

健人にしたって、行ったことがないから想像がつかないが、
当麻から「絶対に行ってみろ！ハマるから。」と再三力説されて、
まぁ当麻が言うくらいだから、取りあえずは

怪しい場所ではないだろうと、行ってみたい気持ちになっていた。

「ペア会員ってのがあるらしくて、その方がお得だから、
ゆき姉と一緒に行けって当麻に言われてたんだ。」

「えっ！当麻くんに私のこと話したの？」

「俺の一番の親友だよ？
付き合う前のゆき姉の話も、全部聞いてもらってる。」

「なんか恥ずかしいな！あんな有名人が私のことを知ってるなんて。」

「もしもし？今ゆき姉と手をつないでる隣の人も、
一応負けないくらいの有名人なんですけど。」

健人が雪見の顔をのぞき込むが、マスクと眼鏡が怪しくて
雪見は思わず笑ってしまった。

「で、ペアでお得って、一体いくらなの？」

雪見の質問に、健人はさらっと「十万。」と答えた。

「じゅうまん？嘘でしょ！そんなに高い猫カフェって、有り？
絶対、怪しいでしょ！猫カフェだよ？猫カフェ！なに、その会費！」

「だからぁ。普通の猫カフェじゃないんだって！
会則の一条が、『絶対に他人に干渉するべからず。店内での他人の様子を口外した者は、罰金一千万に処す』だって。」

「なにそれ！普通じゃないでしょ、どう考えたって！
変なとこには近寄らない方がいいんじゃない？やめといた方が…。」

「大丈夫！ちゃんと当麻に話は聞いてるから！
そこね、名前は伏せてるけど、芸能界の大物がオーナーらしくて、会員は芸能人とか有名人とか、顔の知れてる人ばっかりみたい。
まぁ、中にはお金持ちの社長さんみたいな人も、いるみたいだけど。
ほら、有名人って、どこに行っても周りの目が気になって、自分ち以外では、くつろぐ場所がなかったりするでしょ？
で、それを身をもって体験してるオーナーが、街の中でもくつろげる場所を作りたい！って始めたのが、そこってわけ。
猫が大好きだから、『秘密の猫かふぇ』って名前にしよう！って。」

「えっ？それって店名だったの？そのまんまじゃん！
でもさ、そんな所に、芸能界とは何の関係もない私が入れるの？」

「片方が芸能人なら、一緒にペア会員になれるんだ。
ただし、誰でもいいわけじゃなくて、夫婦か恋人に限定されてるけど。
だから、ゆき姉は大丈夫！俺の彼女だもん！」

俺の彼女！と言う響きは、何度聞いてもくすぐったい言葉だったが、健人の口から直接言われると、安心してその日一日を過ごせる気が

した。

「ねぇ、でも今日、そんなにお金持ってないや。カードは使える？」

「いや、現金払いだって。いいよ、俺が払うから。
今日は、ゆき姉が行きたい場所に付き合う約束だったのに、
大幅に予定変更になっちゃったから。
十万で三ヶ月間使い放題、何時間でも居ていいなら、
そんなに高くもないでしょ。
飲み物もソフトドリンク飲み放題だし、持ち込みもＯＫらしいから、
当麻はこの前、ワインをいっぱい持ってって、パーティーしたって
言ってた。」

「へぇーっ。なんか、そう言うのも面白そうだね！」

雪見が初めて食いついてきた。

「でしょ？やっと信用してくれた？
俺、早くゆき姉と行ってみたくて、仕方なかったんだ！
今日行けて良かったよ！
最初だけはペアでしか入れないけど、二回目からは一人ででも入れ
るから、
ここで待ち合わせとかも、いいんじゃない？

あ、運転手さん、その角の本屋で止めてください。ゆき姉、着いた
よ！」

タクシーを降りて見ると、そこは何の変哲もない本屋のビルだった。

雪見と健人は、誰かに見つからないうちに、
サッとビルの中へと駆け込んだ。

そこは、夢と希望のアミューズメントパークの入り口にも
二人の目には見えてきた。

秘密の入り口

このビルは、一階から七階までが書店で、八階にはオフィスがある。
健人と雪見は、一階奥にあるオフィス直結のエレベーターに向かった。

気を付けなければならないのは、このエレベーターまでの間だ。

書店の一階部分は、大半が週刊誌雑誌コーナーが占めていて
みんな、立ち読みに余念がないのだが、
気づかれるとまずいので、慎重に足早に、さっさと奥まで進む。

オフィス直結エレベーターにさえ乗り込んでしまえば、一安心。
八階までノンストップで、オフィスのあるフロアへ。

当麻からのメモを片手に、「ＨＮＫ」という部屋のドアを開ける。
すぐのカウンターは無人で、呼び鈴が付いているので押してみた。

「なに？『ＨＮＫ』って。『ＮＨＫ』じゃなくて？」

雪見が小声で健人に質問する。

「『秘密の猫かふぇ』の頭文字だって。紛らわしいのがかえって良いみたい。」

健人も小声で答える。

程なくして奥から、黒の執事服を着た初老の男性が出てきた。
二人とも、本物の執事らしき人に驚いた。

健人も、何年か前にドラマで執事役をやったことがあったが、
本物はまだ見たことがなかった。

二人の間に、少しの緊張感が走る。

「入会の申し込みに来た、斎藤健人です。」

「お待ちしておりました、斎藤様。
先ほど、三ッ橋様よりご連絡を頂いておりました。
三ッ橋様からの紹介状はお持ちですか？」

健人は、タクシーの中から当麻にメールをしていた。

当麻くん、お疲れです！
俺これからゆき姉と一緒
に、例の猫かふぇ行って
くるから！ゆき姉のお陰
で早くに仕事が終わった
んだも～ん　（＾ｏ＾）ｖ

楽しみだけど、ドキドキ
です。（＾＾；
んじゃ、撮影頑張れよ！
またね。

ｂｙ　ＫＥＮＴＯ

このメールを見て、当麻が電話を入れておいてくれたかと思うと、
やっぱり当麻はいい奴だ！と、改めて親友を見直すのであった。

健人が当麻からの紹介状を差し出す。
初老の執事がそれに目を通した。

「では、入会手続きに入ります。どうぞこちらへお入り下さい。」

健人と雪見は、第一ゲートを無事クリアし、ホッと一息ついた。

重厚なドアの向こうには、広い応接室があった。

二人はふかふかのソファーに腰掛け、執事からの諸注意を聞き、
同意書にサインをした。

「当店は、非日常空間をお楽しみ頂くと共に、
お客様方の日頃のストレスや、疲れを癒して頂くことを

第一の目的として造られました。

店内に入られるとお分かりいただけるかと存じますが、
たくさんの芸能界の方もお見えです。

ですが、ここでは他人に一切干渉しないのが、一番のルールになっておりますので、
たとえすれ違ったのが大先輩であろうとも、
ご挨拶はせずに素通りして頂いて結構です。

最初お若い方ですと、なかなかこれを実行するのが心苦しくて、
つい上の方にご挨拶してしまいがちですが、
これは後ほど、必ず相手の方から苦情が入りますので
くれぐれもご注意をお願い致します。

要は、その空間には自分たちしかいない、と考えるのが正解です。
周りの人達は、見えていないことにするのです。

そうすることによって、初めて心身の解放が得られ、
深い安らぎを覚えることができるでしょう。

あとは、当店でお客様のお相手をさせて頂く
可愛い猫たちに心の癒しを与えてもらい、
お帰りの際には、また明日への活力が生まれていることを、
従業員一同願っております。

それでは、店内へとご案内させて頂きます。
何かご質問がございましたら、店内の従業員になんなりとお申し付け下さい。

では、どうぞこちらへ！」

穏やかに話す黒服の執事の後について、健人と雪見は長い通路を歩く。

すでに始まっている非日常の世界に、二人の胸は高鳴った。
アミューズメントパークのアトラクションに並ぶのと同じ、高揚感。
どんな世界が広がっているのか、ワクワクドキドキの二人である。

「次回からは、真っ直ぐこの店内直結エレベーターにお乗り下さい。
先ほどお渡しした会員証をかざしませんと、
エレベーターは動きませんのでお忘れなく。では、どうぞ。」

二人は執事と共にエレベーターに乗り込み、会員証をかざした。
すると静かにドアが閉まり、すーっと地下二階まで降りていく。

エレベーターのドアが開くと、そこはすでに『秘密の猫かふぇ』店内で、
足元には三匹の子猫が健人と雪見を出迎えた。

「うわっ！めっちゃ可愛いよ、こいつ！
こっちの黒は、すっげー人懐っこい！おいで、おいで！」

いきなりの可愛い出迎えに、健人のテンションはすでにマックスに達している。

雪見も久しぶりに触れる子猫たちに、やっぱり猫はいいなぁと思っていた。

八階から先導してくれた執事は、ここでフロントのスタッフに、健人と雪見が新規の客であることを告げ、二人に一礼してまたエレベーターに乗り、八階の持ち場へと戻って行った。

今度は若い黒服のスタッフが、人気俳優　斎藤健人の顔を見ても、顔色ひとつ変えずに店内の説明をする。

「ここから先は、お客様のお好きな場所にておくつろぎ下さい。場所さえ空いていれば、途中で別の場所に移動されても結構です。お飲み物のご注文は、備え付けのインターホンにてどうぞ。夜十二時から翌朝六時までは、店内メンテナンス及び猫の自由時間として、一時閉店させて頂きます。

それから、繰り返しになりますが、どうか他のお客様の前を通られる時は空気になったおつもりで。ここのシステムは、お互いの信頼の元に成り立っております。それさえお守り頂ければ、当店はお客様にとって、かけがえのない安らぎの空間になることでしょう。何かご用がございましたら、なんなりとお申し付け下さい。では、どうぞごゆっくりと、おくつろぎ下さいませ。」

若い黒服に丁寧にお辞儀され、健人と雪見も思わず深々とお辞儀した。

さぁ、ここから先は、二人手を取り合って、まずは店内探検へと出掛けよう！

これから初めて乗るアトラクションへの期待のように、
二人のワクワク感はさらに高まった。

誰の目も気にすることなく、変装もしなくていい健人と雪見のデートは、
今やっと始まったばかりだ！

くつろぎデート

『秘密な猫かふぇ』というだけあって、
店内は地下の洞窟にある、秘密基地といった雰囲気を演出していた。
健人と雪見が、手をつないで秘密の通路へと足を踏み入れる。
そこは薄暗く、狭い洞窟に掘ったトンネルといった感じで、
所々にたいまつを模した間接照明がある以外は何もない、
先の見えない曲がりくねったトンネルだった。

「俺、ちょー楽しい！こういうの大好きだもん。
なんかＴＤＬみたいじゃない？
俺、ゆき姉とディズニーランド行きてぇ！」

健人はすでに、頭の中ではアトラクションの中のお客になりきり、
このワクワク感を存分に楽しんでいる。

雪見はと言うと、こういう所は健人と同じで大好きなのだが、
さっき牧田から買い取ったばかりの、履き慣れないサボのお陰で
どうも足元がおぼつかなく、健人にしがみつくようにして歩いていた。

「ねぇ、今度の休みにでも、二人でディズニーランドに行かない？」
健人が隣の雪見に、目を合わせて聞いてみた。

「今度の休みなんて、いつあるの？
今日のスケジュールだって今野さんが、しばらく休みはないからって
あの撮影だけにしてあとは空けてくれたのに。」

「あ～あ、そうだよねぇ…。このあとのスケジュール、見た？
俺、死んじゃうかも！」

「確かにあれは辛いよね。体調管理だけはしっかりして、
なんとか年末に向けて頑張らないと！
あ、そうだ！今度、キムチ持ってってあげようか？
健人くんのおばさんに聞き直したレシピで作ったやつ。
もうちょっと漬けた方が美味しいから、まだ先になるけど
スタミナつけるにはいいと思うよ！免疫力もアップするし。
まぁ、おばさんのキムチって、結構にんにく効かせたレシピだから、
ドラマのキスシーン前はＮＧだけどね。」

「キスシーンなんて当分無いから！っつーか、平気なの？ゆき姉。」

「そりゃ仕事だもん。そんな、子供じゃありませんって！」

ワイワイ言いながら歩いていると、やっと先が明るくなってきた。
パッとひらけた視界には、三つのブースに分かれたくつろぎスペース
が
健人と雪見を待っていた。
一番手前の左側は、雰囲気の良いバーカウンター。

ここでは別料金で、お酒が飲めるらしい。

右側の手前に、大きな応接セットと映画を見るためのスクリーン。
その奥のスペースには暖炉があって、その前には大きなふかふかの
ムートンのラグが敷いてあった。

この三つのスペースは、それぞれに程よい距離感があり、
お互いのスペースからは視線を遮るように、観葉植物が置かれたり
家具で目隠しされていたり、パーティションで区切られてたりする。

照明は全てが間接照明で、洞窟の中という設定に合わせ
かなり薄暗くはあるが、それがかえって心を静め、
外の喧騒など忘れさせてくれる効果がある。

だが、ここにいると時間の流れが穏やかな上に
外の景色がまったくわからないので、時間に余裕がない時はかなり
注意が必要だ。

壁には時計も無いし、くつろぎ過ぎて次の予定に大遅刻!
なんてことにもなりかねない。

健人と雪見は、最初のくつろぎスペースを通り過ぎ、
まだ先にある次のくつろぎスペースを目指して、
第二のトンネルをくぐることにした。

ここまでの間に、まだ他の客とは出会わなかった。
みんな、人目につきやすい手前のスペースを避け、
奥へ奥へと進んで行ったに違いない。

「ねぇ、どこまで続いてるんだろうね、このトンネル。
さっきのとこより天井が低い気がする。」

曲がりくねったトンネルは、先の明かりが見えない。
天井にしても、決して頭がぶつかるような高さではないのだが、
視覚的に天井が低くて狭い感じを演出しているので、
１７０ｃｍと１５６ｃｍの二人でも、思わず頭を低くして通り抜ける。

「あっ！明かりが見えた！」

次に待っていたのは左側手前が、大きな本棚にたくさんの本が詰まった書斎風のスペースで、
よく見ると本棚には、世界中の猫の写真集が数多く収められていた。

雪見は思わず嬉しくなり、そのうちの何冊かを棚から抜き取って
座り心地の良さそうな、黒い革張りの重厚な椅子に腰掛ける。

健人はと言うと、その右側に広がる、大きなベッドを備え付けた
パーティースペースに目が行っていた。

そこは奥の方に大きなベッドが三つあり、
手前には毛足の長いムートンのラグが床一面に敷き詰められ
その上に丸い大きなローテーブルが置かれている。

たぶんここが、当麻がこの前ワインを持ち込んで、
『秘密の猫かふぇ』会員仲間とパーティーを開いたと言う

スペースなのではないかな?と思って健人は見ていた。

当麻は、大きなウォーターベッドがめちゃめちゃ気持ち良かった!
と言っていた。
ワインを飲みながらみんなでトランプをしたり、本を読んだり、
良い気分になったらベッドで一眠りしたり…。
凄く疲れが取れてリフレッシュし、次の日からのハードスケジュール
も
難なくこなせたと言う。

「ねぇ、こっちにしよう!ベッドのあるとこに!」

健人が、猫の写真集を見ていた雪見に言った。

雪見は驚き慌てて、「なに言ってんの!こんなところで!」
と、健人をたしなめた。

が、健人は

「あれぇ?なに勘違いしてんの、ゆき姉!
俺は別に、変な意味で言ったんじゃないから!
当麻が、『すっげーリラックスできるウォーターベッドがあるから、
一度寝てこい!
疲れが取れて元気になるから!』って話してたから
横になってみたかっただけなのに。」

と雪見に笑って言った。

「でも、こんな広いスペースに私たち二人だけって言うのは悪いでしょ？
やっぱりこっちでいいよ。」

「だって、さっき説明してくれた人は、空いてればどのスペースでも
使っていいって言ってたじゃん！
誰か、ここを使いたい人たちが来たら移動するから、それまではいいでしょ？
どうしてもこっちがいい！」

健人の強力なお願い目線にやられて、雪見は渋々ＯＫした。

「じゃあ、誰か来るまでだよ！
この猫の写真集もっと見たいから、そっちに運ぶの手伝って。」

「よっしゃ！何冊でも運んじゃうよ！じゃ、飲み物も頼もう！」

そう言って、健人はベッド脇のインターホンを取った。

「あ、すいません！別料金でビール二つお願いします！」

二人だけのパーティーは、今やっと始まろうとしている。

健人と雪見は、ふかふかのラグの上にぺたっと座り、運ばれてきたビールでまずは乾杯をした。

「お疲れ～！はぁ～っ。仕事のあとのビールって、なんでこんなに美味いんだろ！生き返るぅ～！」

「ほんとだね！さすがに私も今日は疲れたなぁ…。やっぱり、やり慣れない事をするって大変な事だよね。そう考えると、健人くんって凄いよなぁ！毎日毎日、違う仕事の連続でしょ？それを難なくこなして行くんだから、尊敬してます！」

雪見が健人に向かって頭をぺこんと下げた。

「えっ？俺ってゆき姉に尊敬されてんの？マジで？だったら、すっげー嬉しいんだけど！」

「いっつも尊敬の眼差しでカメラ覗いてるのに、気が付かなかった？」

「カメラ覗いてたら、目なんか見えないっつーの！」

「なんだ、残念！」

いつものように、バカ言って笑い合える時間が愛しかった。

撮影の終わりに見せた健人の憂いの表情は、一体何だったのか…。
影も形も見えなくなった今となっては、その原因を探る方法がない。
私の勘違いだったの？だとしたら、それで良かった。
今はただ、明日からの忙しさに備えてエネルギーの充電だけを心がけよう。

明日はいよいよ一時から、写真集の制作発表だ。
きっとそこから劇的に、物事が動き出すに違いない。
その先の変化は、雪見にはまだ想像すらつかずにいた。

「ねぇ、明日の制作発表会、どんな格好で行けばいいんだろ？
テレビで日本中の人が見るんでしょ？
やだな、考えただけで震えがきちゃう！」

雪見は、初めてのグラビア撮影にだけ、全神経を集中させていたので、
今やっと明日の会見を思い出し、段々と不安な気持ちが募っていった。

「大丈夫だよ！服なんて向こうで衣装を用意してるから。
明日はいつも通りに会場に行けばいいだけさ。
また牧田さんと進藤さんが、ちゃんとやってくれるって！」

健人は、何度も何度もこんな不安を乗り越えて、
今の堂々とした健人が出来上がったに違いない、と雪見は思った。

「まだ、たったの２１歳なのに、いっぱい苦労も辛い思いもしてきたんだよね。
歯を食いしばって頑張ってきたから、今の人気者の斎藤健人がいるんだよね。
健人くん、頑張ったね…。」

健人のここまでの道のりを思うと、簡単ではなかったことが容易に想像できて、
雪見の瞳からは涙が突然溢れてきた。

「な、なんで泣いてんの！？　俺、なんか嫌なこと言ったぁ？」

「ごめんごめん！なんでもない。なんで最近すぐ涙が出ちゃうんだろ。おかしいなぁ。」

そんな泣くような話の流れではなかったのに、なぜ今涙が溢れたのか、
自分でも解らずに雪見は戸惑った。

「大丈夫？無理してない？」健人が心配そうに雪見の肩に手を置く。

その時、どこからともなく一匹の黒い子猫が忍び足で現れて、
雪見のそばにやって来た。

生後二ヶ月ほどであろうか。一番子猫らしい時期の子猫である。

「うわぁ！可愛い黒ちゃんだ！いい子だね、こっちにおいで！」

子猫の出現に二人は一気に盛り上がり、つい何十秒前の涙の事なんか
きれいさっぱりと洗い流してくれた。

「すっげーツヤツヤしてる。いいもん食わせてもらってんな！
お前良かったなぁ、ここに拾われて…。」

そう言いながら、健人が黒い子猫の頭を撫でた。

「えっ？この子、捨て猫だったの？」

「そう。ここの猫は全部、保健所から引き取ってきた猫なんだって。
ここに慣れさせるためには、子猫しか引き取れないんだけど、
それでもかなりの数がここにもらわれて来てるみたいだよ。
これだけ広い店の中を自由に歩き回れて、ご飯がもらえて、
猫が好きな人達に可愛がられて…。
こいつらは、ラッキーな星の下に生まれたんだ。」

良かったな、良かったなと言いながら子猫の頭を撫でる健人の瞳にも、
うっすらと涙が滲んでいた。

「そうだったんだ、知らなかった。いいお店だね、ここって！
教えてくれた当麻くんに感謝だね！」

「そう！あいつ、すっごくゆき姉に会いたがってんだけど！
会うたびにゆき姉を紹介しろ、紹介しろ！ってうるさくて。」

「やだぁ！当麻くんに会ったって、何話せばいいのかわかんない！
また健人くんったら、当麻くんに私のこと誇大広告してない？
会ってがっかりした！とか言われたら私、立ち直れないから。」

「当麻はそんな奴じゃないよ。すっげーいい奴！
優しいし年下なのに頼りになるし、けど俺と一緒で優柔不断！」

「うん、わかる気がする！健人くんも、結構優柔不断なとこあるよね。
お互い似てるとこがあると、すごく近くに感じて嬉しいよね。
けど、優柔不断男が二人でいたら、何かを決める時に大変そう！」

「当たりっ！飯食いに行こうって時に決められない！
誰か決めて～！って感じになる！」

当麻の話をする健人は本当に嬉しそうで、大事な親友なんだと言うことが
ひしひしと伝わってくる。
そんな健人の笑顔は、雪見の心をも温かくした。

『当麻くん。健人くんのことを、これからもよろしくね！』

まだ見ぬ当麻に向かって、雪見は心の中でそんな事をお願いした。

そのあとも、いろんな猫たちが入れ替わり立ち替わり、二人の元へ挨拶にくる。

健人と雪見は、時間も忘れて猫たちと戯れた。

ベッドの上で猫と遊んでは二人でおしゃべりしたり、写真集をのぞいたり。

当麻から聞いていた通りの気持ち良いウォーターベッドは、二人の疲れた身体を包み込み、目を閉じると一瞬で夢の中へと落ちて行きそうだった。

「まだ時間はあるから、健人くんは少し寝て！
このベッドなら短時間でも熟睡できそうじゃない。
ここんとこ寝不足が続いてるんだから、少しでも休まなきゃ。
私はまだまだ読みたい本があるから、一時間ぐらいしたら起こしてあげる。
それからご飯食べに行こう！」

「いいの？じゃあ、少しだけ寝ていい？
さっきまでは全然眠くなかったのに、このベッドに横になったら急に眠気がきちゃった。ごめん、じゃ少しだけ…。」

そう言ったかと思うと、スッと健人は眠りに落ちた。
まるで催眠術にかけられたかのように…。

「何にも言わないけど、疲れてるんだね…。おやすみ。」

健人の寝顔を横に見ながら、雪見はそっとベッドの上から降り、傍らに寄りかかりながら、また違う写真集のページを開いた。

静かに静かに、二人の幸せな時間が流れていった。

幸せな時間の余韻

雪見は、写真集も読み疲れたので本を閉じ、
そっとまたベッドの上に上がって、健人の隣に寝そべった。
健人の足元には、さっきの黒猫が丸くなって寝ている。

気持ち良さそうに熟睡している健人の寝顔を、じっと見てみる。

前にも思ったことがあるけれど、ギリシャ彫刻を見ているかのように
美しい寝顔であった。

『寝ててもこんなに綺麗な顔の人って、ほんとにいるんだ。
やっぱり俳優さんって、３６０度　どこから見ても整ってなくちゃダメなんだろうな。
だって、健人くんに変に見える角度なんてある？』

雪見は色々見る方向を変えて、健人を眺めてみた。
だが、どの角度から見ても健人の顔は完璧であった。

『あ、そうだ！写真集用に寝顔撮しちゃお！
今まで、目を閉じてる寝顔風の写真はあっただろうけど
本物の寝顔なんて、まだ誰も撮してないよね！

ファンのみんな！お宝写真見せてあげるからね！
クリスマスを楽しみにしててよ！』

心の中で、全国の斎藤健人ファンに声をかけ
雪見は、健人を起こさないようにそっとベッドを降りた。

端に置いてあったカメラバッグの中からカメラを取り出し、
少し離れた場所から健人の寝顔を狙う。
場所が特定されないように背景に気をつけて、一枚シャッターを切ってみた。

「カシャッ！」

静寂の中では、一眼レフカメラのシャッター音はかなり大きい。
一瞬、健人がうーん！と言いながら寝返りを打った。

『やばっ！起こしちゃったら大変！やっぱりデジカメにしとこうか。
それに照明がかなり暗いなぁ。なんとか明かりを採らないと。』

雪見はカメラを一眼レフからデジカメに持ち替え、
更にベッドサイドの電気スタンドを移動させて、
健人の顔に影ができないように気を配った。

「カシャッ！カシャッ！」

『お、いい感じ！そのままそのまま！まだ起きないでね、健人くん！』

シャッターを切りながら、健人の寝顔に惚れ惚れしていた。
なんて綺麗なんだろ！いつまでもずっと眺めていたくなる。

雪見はカメラを下ろし、またじっと健人の顔を見つめた。

『あれ？真由子は健人くんのほくろは五つだって言ってたけど、
ここにも薄いの、みーっけた！
好きだなぁ、健人くんのほくろ。これが無かったら、魅力半減だな。
』

小さく独り言を言いながら、雪見は健人の顔のほくろを指でそっと
隠してみた。

右目の下と唇の上に二つ。それから左の頬と…。
四つ目のほくろを指で隠したその時！
健人がパッチリと大きな目を見開いて、目の前の雪見を見た。

「なに、人の顔で遊んでんの！」

「あ！ごめん！起こしちゃった？」

「そりゃ、耳元でホクロがどーのこーの言われて、顔を指でつつかれたら
いくら何でもそりゃ起きるでしょ！で、ホクロがどうしたって？」

健人が上半身を起こしながら雪見に聞いた。
黒猫はまだ足元で寝ている。

「いやぁ、健人くんのほくろ、好きだなぁーと思って。

顔の中で一番好きかも。」

「ええーっ！ほくろが一番って、そりゃないでしょ？
俺的には六個もなくていいんだけど…。」

「いいや、全部なくちゃダメ！一個でも欠けたら斎藤健人じゃない！」

「そんな、大げさな！でも、まぁいいや。ゆき姉が好きならそれで。
俺も好きだよ、ゆき姉の左目の下にあるほくろ。
きっと泣きぼくろだと思うけど、最近ずいぶん威力を発揮してるよね。」

そう言いながら、健人が雪見の眼下のほくろを指で押す。

「ほんとだね。でも昔っからあるのに最近だよ、威力を見せ出したのは。
健人くんと付き合い出してからじゃないかな。
色んなことに関して、心の琴線に触れることが多くなってすぐポロッときちゃう。
だから映画なんて行ったら大変よ！顔がボロボロになる。
健人くんとは行かないからね、映画！」

「えーっ！今度ゆき姉と二人で、見に行こうと思ってたのがあるのに！」

「そーいうのはＤＶＤになってからにして！
そしたらあたしんちで、お酒でも飲みながらゆっくり見よう！」

「ほんと？絶対？約束だからね！やった、楽しみ！」

健人は子供のようにはしゃいでいた。それはそれは嬉しそうに…。

「ねぇ、そろそろお腹空かない？ご飯食べに行こうか。」

「今、何時？え？もう七時になるの？どーりでお腹ぺこぺこなはずだ！
じゃ、『どんべい』に行こう！」

「え、また？今日は餃子が食べたかったんじゃないの？」

「いや、予定変更！さっきのグラビア撮影の時、
俺、このゆき姉を『どんべい』のマスターにも見せてやりたい！
って思ったのを今、思い出した！
絶対、マスターびっくりするって！
今日しか見せらんないから今日は『どんべい』の日！」

「優柔不断な健人くんにしては珍しい、速攻攻撃だね。
えーっ、でも絶対マスターに笑われる自信ある！
普段の私を知ってるだけに、なんだか恥ずかしいな。」

雪見が肩をすくめながら、健人の方を見る。

「いや、絶対見せたい！俺が最高に可愛いって思うんだから、
マスターも『かわいいっ！』って叫ぶに決まってる！」

「いや、甘い甘い！その前に、『どうしちゃったの？雪見ちゃん！』

って言うに決まってる。もう見えてるもん、マスターの顔が。」

「じゃ、なんて言うか行ってみよう！腹減って死にそうだから。」

「あんまり気が進まないけど、この二人でどっか違うとこ行くのは無理だね。
仕方ない！マスターに笑われに行くとするか！」

健人と雪見は、まだ寝ている黒猫の子供を起こさないようにそっとベッドを降り、来た通路を静かに戻って行った。
また会いに来るからね！と、子猫に小声で言い残して…。

またひとつ、健人との大事な場所が増えた。

そんな温かい気持ちで雪見は、『秘密の猫かふぇ』が入るビルを立ち止まって振り返り、健人に「また絶対来ようね！」と約束してタクシーに乗り込んだ。

「今度、あそこの猫ちゃんたちの写真集作ろうかな？
みんな捨て猫だったってとこが、気持ちに響いて…。
あの子たちは辛い体験のあとに、幸せが待ってたんだね。
それにしても、あんな凄いカフェ思い付いて作った大物芸能人って一体誰なんだろ？
会ってお礼が言いたいくらい。」

「ほんとだね。俺は当麻に感謝してるよ。
当麻に聞かなかったら、あんな秘密組織みたいなとこ、

一生知らないで過ごしてたと思うもん。」

「そうだね。私も当麻くんに感謝だ！
今度会ったら、私の分もお礼言っといてね。」

二人は幸せな時間の余韻に浸りながら、タクシーの中で寄り添った。

今日一日の目まぐるしかった出来事を振り返りながら…。

お揃いの待ち受け

『どんべい』の入り口前。

いつもなら何も考えずに、いい匂いにつられて駆け込む雪見だが、今日は足がなかなか店内へと、進んではくれなかった。

「ゆき姉！こんなとこに突っ立ってたら、俺、誰かに見つかるって！早く入ってよ！」

大きなマスクに眼鏡姿の健人が、雪見を急かす。

「やっぱり今日はやめとかない？だって健人くん、今週ここ何回目？もうそろそろ飽きてきたでしょ？違う店にした方が…。」

「いいから、つべこべ言わずに入んなさいって！俺が一番に可愛いゆき姉だって言ってるのに、もしマスターがなんか言ったら、俺が怒ってやるから！もう腹減って死にそうだから、どこにも動けないよ。さ、入って入って！」

健人に手を引っ張られて、雪見は重い足取りで店の暖簾をくぐった。

こんな女の子チックな服着てる私を見て、マスターは何と言うだろう。

いつもジーンズかパンツばかりで、スカートなんて冠婚葬祭ぐらいにしか今は履かない。
そんな私がワンピースにペチコートだなんて…。

ていうか、３３歳の私がこんなかっこしても罪ではないのか？
撮影の時はみんなに乗せられて、その気になってしまったが
今、真由子にばったり会ったとしたら彼女はなんて言うだろう。

しかも、お化粧だっていつもと全く違う。
ワンピースに合わせて、ふんわりとした少女っぽいお化粧だ。
そのお陰で、健人との見た目年齢が、ぐっと縮まったことは確かである。

何が嬉しいって、綺麗だの可愛いだの、そんな誉め言葉よりも何よりも
健人と年が近く見えること、つまりは若く見えることが雪見は一番嬉しかった。

マスターの反応に怯えながらも、雪見は健人に連れられておずおずとマスターの立つカウンター前までやって来た。

「マスター！また来たよ！」健人が先に声をかけた。
開店直後だけあって、まだカウンター席には誰も座ってはいなかった。

「おぅ、健人くん！いらっしゃい！
おとついは雪見ちゃんを怒ってやったかい？約束をすっぽかすなん

て。
あ…、今日は初めてのお友達を連れてきてくれたんだ…。
雪見ちゃんには内緒かなぁ？」
マスターが健人に向かって小声でささやいた。
健人と雪見が思わず顔を見合わせる。
そして一瞬の間を置いて、二人で大爆笑！
「マスター！そう来る？マジで？めっちゃウケるんだけど！」
健人がお腹を抱えて笑ってる理由が、マスターには理解できなかった。
「健人くん！怒ってくれるって言ったじゃない！
一番うけてんのは健人くんでしょ？ほんとにもう！」
「ごめんごめん！だって判らないなんて事、想像してなかったから！
そこまでいつもと違うかなぁ？まぁ、めっちゃ可愛いのは可愛いけど。
マスター！これ、ゆき姉なんだけど！わかんなかった？」
「ええっ！雪見ちゃん？雪見ちゃんなの？
いやぁ、声は似てたんだけど雰囲気が別人だったから、
またてっきり健人くんが、違うお友達でも連れて来たのかと思って
内心ヒヤヒヤもんだったんだぜ！早く言ってくれよ！」

マスターは目をひん剥いて、雪見を凝視した。

「早く言ってくれはないでしょ！こっちこそ、早く気づいてよ！
ひっどいなぁ、マスター！私、何年ここに通ってると思ってんの？
だから今日はここに来たくなかったのに、
健人くんがどうしてもマスターに見せたい！って言うから…。
グラビア撮影の後だからこんな格好だけど、今日だけだからね！」

「なーんだ、そういうこと！おじさんをからかわないでよ！」

「誰も、からかってなんかいないでしょ！
もういい！マスター、早くビール持ってきて！」

雪見はプンプンしながら、一人でさっさといつもの小上がりに消えてった。

「健人くん。俺、なんかまずかった？
いや、めちゃくちゃ可愛い人を健人くんが連れて来ちゃった！
って思って、焦ってよく顔を見れなかったもんだから…。
絶対雪見ちゃん、怒ってるよね。健人くん、上手くなだめといて！
俺は大至急、雪見ちゃんの好物をありったけ作るから！
ビール二つ入れるから、悪いけど持ってってくれる？」

マスターが健人に苦笑いを見せながら、ビールを注いで二つ渡した。

「どうしても、って引っ張って来たのは俺だから。
でも、マジでめちゃ可愛いでしょ？俺、みんなに自慢したいもん！

なんだけど、ゆき姉は今イチ自信なさげで…。
マスター！あとで一緒に怒られよう！じゃ、美味いもん、よろしく！」

健人がぺこっと頭を下げて両手にビールを受け取り、
こぼさぬようにそろそろと、小上がり方面に歩いて行った。

「ゆき姉、お待たせっ！ビールもらってきたよ、開けてー！」

健人が、障子の向こうの雪見に声をかけた。
ご機嫌斜めかどうか、少しドキドキする。
すーっと開いて立っていたのは、予想外に笑顔の雪見であった。

「遅いっ！ねぇ、マスターなんか言ってた？」

いつもの調子に戻ってる雪見に、健人はホッと胸を撫で下ろす。

「めちゃくちゃ可愛いかったから、顔を合わせられなかった！って言ってたよ！謝ってた。
俺もまさかマスターが、ゆき姉だって気が付かないなんて考えてもなかったから、焦ったよ！」

健人はそう言いながら雪見とジョッキを合わせ、お疲れ！と、お互い一気に半分近くを喉に流し込んだ。

「ほーんと、マスターだったら失礼しちゃうよね！

私のことを判らないなんて。
そこまでいつもは可愛くないってこと?どっちにしても失礼だ!」
雪見が笑い半分、マジ半分といった顔して健人に訴える。

「まぁまぁ。そんだけ今日のゆき姉は可愛いってことなんだから、もっと自信を持ちなよ!
明日の会見だって、また牧野さんと進藤さんが可愛くしてくれるって。
そうだ!今日のゆき姉を待ち受けにしたい!一緒に写メしよ!」

「えーっ!やだ、待ち受けなんて!
普段の私に戻ったら、ケータイ見るたびにがっかりするじゃない!」

「そんなこと絶対ないから!俺、そんなやな奴に見える?
じゃ、待ち受けにはしないから写メしよ!ほら、早く隣に来て!
さっきの撮影みたく、可愛い顔してよ!はい、チーズ!」

「見せて見せて!あ、結構いい感じ!私にも送って、これ。」

「ねっ!だから言っただろ?やっぱ、待ち受けにしよーっと!
ほい、送信!っと。ゆき姉も待ち受けにしなよ。絶対いいって!」

健人と雪見のケータイには、今ここにいる美男美人カップルが
幸せそうな顔をして、新しい待ち受け画面になっていた。

マスターからのエール

一杯目のビールを飲み干す頃、やっとマスターが料理を運んできた。

「ごめんごめん！お待たせっ！はい、まずはビール！
それから雪見ちゃんの好きな、ポテトグラタンとシーザーサラダ、
海老の生春巻きに軟骨つくねに石焼きビビンバ！」

そう言いながら、マスターはテーブルの上いっぱいに雪見の好物を並べた。

「すっげ！全部ゆき姉の好きなもんばっかじゃん！
で、俺の好きな唐揚げは？」

「あー、後でね！まずは雪見ちゃんのお腹と心を満たさないと。」

「それを言うなら、ご機嫌を取らないと！でしょ？」

健人が、唐揚げを後回しにされた腹いせに、憎まれ口を叩く。

「雪見ちゃーん、さっきはごめんね！
いやぁ、雪見ちゃんは元がいいから何着ても似合うわ！
ほんと、可愛いよ！健人くんの自慢の彼女だな、こりゃ！」

「もういいよ、マスター。今日のことはどうでもいい…。」

おだて作戦に反撃するどころか、何の反応もない雪見を

マスターは急に心配になって、健人に向かって聞いてみる。

「どうしちゃったの？雪見ちゃん。なんかあったの？」

「いや、明日の一時から、写真集の制作発表があって、
初めて二人で記者会見をするもんだから、段々緊張してきちゃって
て。
ゆき姉にとっては何もかもが初めての事だから…。」

そう言いながら健人は、表情の硬くなった雪見を心配そうに眺めた。

マスターも、今までに見たことのないくらい沈んでいる雪見を、
どうにかしてあげたいと思っていた。

「そうなんだ。凄いね、雪見ちゃん！
やっとプロのカメラマンとして、メジャーデビューするんだ！
おめでとう！俺、自分の妹が有名カメラマンになるみたいで
めちゃくちゃ嬉しいよ！」

「えっ？嬉しい？」

「当たり前だろ！雪見ちゃんの周りの人は、みんな嬉しいに決まっ
てるさ！
だって、雪見ちゃんは夢に一歩近づいたんだから。」

「夢…って。私の夢…。」

雪見は、しばらく思い出すことのなかった自分の夢を

もう一度、心の引き出しから出して確かめてみようとした。

「そう。雪見ちゃんの夢さ！昔よく雪見ちゃんがカウンターの前に座って、
お互いの夢を語り合ったじゃん！」

「うん。」

「俺はいつか、石垣島のきれいな海のそばで、
こじんまりとした焼き鳥屋のオヤジになりたい！って。」

「うん。そんな話してたね。けど今はダメ！って引き留めた。
私の居場所がなくなっちゃう！って…。」

段々と雪見は記憶を蘇らせていた。

健人との関わりが出来たここ何ヵ月間かのあいだに、劇的に生活が変化して
ゆったりと自分のペースで生活していた事なんて
遥か昔のことのように感じていた。

気の向くままに猫を撮して旅を繰り返していた頃は、
確かに夢を抱いて仕事をしていたと、今やっと思い出してきた。

「そう…。私、昔は夢に向かって歩いていたよね…。」

「なぁに？ゆき姉の夢って。」　健人が聞いた。

「フフッ。私ね、たーっくさんの捨て猫の、お母さんになりたかったの。
野良猫として外で生きる猫は、捕らわれない限りは自由に生きられる。
そりゃ餌の確保は大変だよ。でも自分で生きてく時間は与えられてる。
けど、保健所に連れて来られた猫たちには、たったの五日間しか生きる時間を与えてもらえないの。たったの五日間よ！
私はその子たちを、みんな生かしてあげたい…。」

そう言いながら、雪見は涙をこぼした。

「ごめん。いっつもこの話して泣いちゃうんだよね、マスターと。
私ね、そんな猫たちを保健所から引き取って、猫村に放したいんだ。」

「ねこむら？なに、それ？」　健人が不思議そうに聞く。

「猫が自由に暮らせる無人島！まぁ、人も住んでかまわないんだけど。
小さな島を買って、そこに猫が住むための大きな家を建てて…。
家の中には餌と水がきちんとあって、猫は自由に島の中で遊んで疲れたら家に帰ってご飯を食べて寝る、みたいな。
もちろん全部の猫に避妊手術を受けさせてからじゃないと、島の中で大繁殖しちゃっても困るからね。
で、私はそんな猫たちのお世話をする、お母さんになりたいの。
そう…。この前まで、そう思って働いてたんだ、私…。」

雪見は今、はっきりと思い出した。

実現出来るか出来ないかは別として、
それを目標に一生懸命仕事してきたことを…。
頑張ってお金を貯めてきたことを…。

「雪見ちゃん。これって、凄いチャンスなんじゃないの？
雪見ちゃんの夢を叶える最大のチャンスだと、俺は思うけど。
よく言ってたよね。もっとカメラマンとして売れて、
この仕事で夢を叶えたいって。
今、そのチャンスが目の前にあるんじゃないの？」

マスターが微笑んでいる。健人と雪見に向かって。

「雪見ちゃんが自分で動かしたんだよね、人生を。
自分から健人くんの事務所に飛び込んで、自分から出版社に売り込んだ。
それはすべて、健人くんのためにだけ動いた事なんだけど、
実は自分の夢にも繋がっているとは思わないかい？」

「自分の夢にも繋がっている…。明日の制作発表が、夢に繋がってる…。
…うん。そうだね。そうかもしれない。
すっかり忙しくなって、夢のことなんか忘れてた。
ありがとう、マスター！大事なことを思い出させてくれて。
これで明日からの仕事の意味をちゃんと心に留めて、
頑張って乗り越えていける気になったよ。

明日から私、頑張るからね！ちゃんとサポートしてよ、健人くん！」

雪見の顔がパッと明るくなり、やっといつもの元気が戻ってくる。
その表情を見て健人とマスターは、心から安堵していた。

健人には、明日記者会見をしてから大きく流れが変わる、
雪見を取り巻く環境の変化が、自分の経験から容易に想像できた。

それは雪見にとって、良いことばかりではないだろう。
辛いことも大変なことも、逃げ出したくなることもあるはずだ。
だが心に目標さえあれば、なんとか乗り越えていける。
それも健人は経験から知っていた。

「俺がちゃんとついてるから！
写真集が出るまでは、俺とゆき姉は一心同体だろ？
二人でいれば何だって乗り越えられるさ！だから安心して明日を迎えよう。
ってことで、明日からの俺たちにカンパーイ！って、
なんかもう、ビールの気が抜けちゃってる！
マスター、唐揚げと新しいビール、お願い！」

「はいよ！大至急ねっ！」　マスターがキッチンに駆けていく。

雪見と健人は、取りあえずは気の抜けたビールで
明日からの自分たちにエールを送った。

お酒が進むにつれ、またしても雪見のため息が多くなってきた。

「はぁっ…。本当に私、明日大丈夫だと思う？
心配で心配で、ぜんぜんお酒が効いてこないよ。
今日は酔わないと寝れそうもないのに…。」

「あのねぇ。ゆき姉は、新人女優として記者会見するわけじゃないよね？
プロのカメラマンとして、俺の専属カメラマンとして出るんでしょ？
だったら、もっと自信を持って出てもいいんじゃないの？
何を質問されたって、カメラマンとして思ってることを話せばいいし、
堂々としてればいいさ。
なんか、ゆき姉らしくないよ、そういうの。」

今日ばかりは健人の方が、年上のようなアドバイスをする。

「あ～あぁ！今日は『秘密の猫かふぇ』のベッドで寝たかったぁー！
絶対家じゃ寝れないよぉ！」

「十二時から朝の六時までは閉店だって、言ってたでしょ！
ビールじゃ、いくら飲んでも酔わなさそうだから、
マスターにワインもらってくるね。
けど、あんまり飲んだら明日の朝また後悔するんだから、

今日はほどほどにして帰るよ！わかった？」
そう言い残して、健人は部屋を出て行った。

「あ～、早く明日が終わればいいのにぃ～！」
大きな独り言を言ってから、バタッ！と雪見は畳の上に寝転んだ。
目を閉じて、明日のシミュレーションをしてみる…はずだったが、
一日の疲れがドッと出て、そのまま夢の中へと吸い込まれていった。

『どれぐらいの時間が経ったのかな。
なんか耳の奥で声が聞こえる。でも目が開かないや…。』

「あれ？ゆき姉、こんなとこで寝ちゃってるよ！」

「ほんとだ！しょうがないなぁ。
さっきまで、明日が心配で寝れそうもない！とか叫んでたのに。」

「でも、可愛いじゃん！写メで見たまんまの人だ。
いいなー、健人！俺もこんな彼女欲しいっ！」

「ダメーっ！ゆき姉は俺の彼女！」

『なんか、二人分の会話が聞こえてくるんだけど…。えっ！二人分

？』

雪見はいきなりガバッと跳ね起きた！

「うわっ！びっくりしたっ！ごめん、起こしちゃった？寝れそうもないとか言って、俺が部屋出たあと、秒殺で寝たでしょ？ワインはいらなかったね。」

「いや、三人で乾杯しなきゃ！」

「三人…って、その人…もしかしてぇ！？」

雪見が、さっきまでこの部屋にはいなかった、目の前の人を指差した。

「どーも！初めまして。健人の友人の三ッ橋…」

「とうまくん！？うっそ！なんで当麻くんがここにいるのぉ？」

雪見がとんでもなく声を張り上げて叫んだ！

「シーッ！ゆき姉、声がデカい！」　健人が慌てる。

「はい、当麻です！いつも健人からゆき姉の話ばっかり聞いてます！」

当麻が笑いながら健人の方を見た。

「なにが、ばっかりだよ！おめーが聞いてくるから教えてるだけだろーが！」

健人も笑って言い返す。

「ちょっと健人くん！この状況が理解できないんだけど…。
やだ、当麻くんが来るなら言ってくれればいいのに！
あ、ごめんなさい！浅香雪見です！
健人くんがいつもお世話になってます。」

「別にお世話になんかなってないから！俺がお世話してるの！」

「うそだー！絶対俺の方が世話やいてるから！
雪見さん！健人って、まったく家事ができない奴でしょ？
だから俺んち遊びに来たときは、俺が飯作って食べさせてるんですよ！」

「おーいっ！そこんところを恩にきせるわけぇ？
俺だって、玉ねぎの皮ぐらい剥いてやんだろ！」

健人と当麻は、本当に仲が良さそうだ。
二人の掛け合い漫才のような会話は、止めない限りどこまでも続く。

「ねぇ、どうして当麻くんがここに？」　一番の疑問を健人に聞く。

「あぁ、さっきここで撮したツーショット、当麻にも送ったの。
そしたら勝手に来ちゃった！俺もマスターと立ち話してて、
こいつが店に入ってきた時、マジびっくりしたもん！」

「ごめんごめん！だって健人のメールの件名が『激カワ！ゆき姉』
なんだよ！
こりゃ実際に会いに行かなきゃ！って、飛んできた。」

「やだ！健人くん、そんなメールしたのぉ？恥ずかしすぎる！」

雪見は、まともに当麻の顔を見れなくなった。
しかも初対面で、畳の上に大の字になって寝てるとこを見られるとは。

「でも、俺の思ってた通りの人でした、ゆき姉は。
健人から聞いてた通りの可愛い人だった。」

「いや、この格好は撮影のあとだからこんなんだけど、
いつもはまったく違いますから！」

「知ってます。いつものゆき姉も写メで送ってくるから、こいつ！
どんだけ好きなんだよー！って感じ。」

当麻が笑ってる。

「おめぇー！俺を冷やかしにわざわざ来たわけ？早く帰って寝ろや！
明日も朝からドラマの撮影だろ？どーぞどーぞ、お帰り下さい！」

「なに言ってんの！今日はやっとゆき姉に会えたんだから、お祝いしなきゃ！
早くそのワイン開けて、乾杯しよ！」

「なに、当麻も飲むわけ？俺たち、明日大事な会見があるんだから、あんまり遅くならないうちに帰るからな！」

「はいはい、わかってるって！今日は特別！
俺の親友の彼女と初めて会えたんだから、少しぐらいいいじゃん！
じゃ、お近づきのしるしに、カンパーイ！」

三人でグラスをチン！と軽く合わせた。

なんだか不思議な光景。
目の前に、若手イケメン俳優のツートップが並んで、楽しそうに笑ってる。
テレビ画面の向こうを見てるのか？いや、違う。
今、テーブルを挟んで真向かいに座っているのは間違いなく芸能界のトップアイドル、斎藤健人と三ッ橋当麻である。
同じ事務所で一つだけ健人が年上、ライバルだけど大親友。
こんな豪華な飲み会、真由子が聞いたら卒倒するだろうな。

でも、本当に健人と当麻は仲が良い。
二人のリラックスした笑顔は、見ていてこっちまで嬉しくなってくる。
競争の激しいこの世界において、本来だったら一番にお互いを牽制し合うポジションにいるはずなのに、そうはならずに親友同士になれたことは、ちょっとしたキセキではないだろうか。

二人の楽しそうな顔を見て、雪見はとても心が穏やかになるのを感じた。

健人は当麻と友達でいる限り、何の心配もないと思った。

私のわからない世界での悩み事も、きっと当麻が健人の力になって二人で解決してくれることだろう。

今日は当麻に会えて良かった！

明日のことなどすっかり忘れて、三人の楽しい宴会は続いて行った。

仲良し三人組

健人も当麻も、お酒歴が短い割には結構強い。
もちろん雪見だって負けてはいないけど。

お酒というのは不思議な力を持っていて、初対面の人とも
ほんの一時間もあれば、充分に「ずっと前から友達」レベルまで
持って行くことができる。

すでに二時間飲んでる三人は、遥か時空を飛び越えて
もう何年も前から一緒につるんで遊んでいる、
男の子二人に年上の彼女の、仲良し三人組になっていた。

「ねぇねぇ。当麻くんの彼女ってどんな人?」

雪見が興味津々、当麻に聞く。

「ゆき姉、その質問はヤバいって!当麻、今に泣き出すから!」

健人が慌てて止めに入ったが、すでに遅かった。
当麻はみるみるその綺麗な瞳に涙を溜め、辛うじて瞳の表面張力のみで
その涙の流出を阻止していた。

「ごめん!悪いこと聞いちゃった?今の質問は削除して!
じゃあ、当麻くんの好きな食べ物は?」

焦って当麻に質問し直す雪見だったが、時すでに遅し！
当麻はポロポロと大粒の涙をこぼしていた。

「あ～あぁ！ゆき姉が泣かしたー！
当麻は普段でも涙もろいのに、お酒が入ると益々泣き虫になっちゃうんだから
気をつけてよね、ゆき姉！
あのねぇ、当麻くんは最近彼女に振られたばっかなの！
今は、どん底から一生懸命這い上がってる時期なのに、
またゆき姉に突き落とされたんじゃない？」

健人が、『どうしてくれるのさ、この状況！』みたいな顔して
雪見のことを恨めしそうに見た。

「だってぇー。知らなかったんだもん！
健人くんだって、一言、前情報入れといてくれたら私も聞かなかったのに！」

「俺、例え彼女にだって親友のトップシークレットはしゃべんないよ！
ゆき姉だって、そうでしょ？
話さなきゃならない場面がきたら、そりゃ今みたいに話すけど、
あえて自分からは教えない。それが親友だと思ってるから。」

健人の言葉に雪見は、また違う一面の健人を知って嬉しかった。

人によっては、彼女より親友の方が大事なの？
みたいに捉えるかもしれないが、雪見は違っていた。

『彼女の代わりは、見つけようと思えばいくらでも見つかるけど、
心からの親友っていうのは一生のうち、
たったの一人か二人しか見つからないんだよ。
だからこれからも、私なんかより当麻くんを大切に思っててね。』

そう思いながら、当麻を慰める健人を見つめていた。

でも、さすがに当麻を泣かせてしまった責任を感じ始め、
どうにかして当麻を、失恋の痛手から救う方法はないものかと考える。

「そうだ！ねぇ、みんなでカラオケ行かない？
当麻くんも歌うの好きでしょ？前にミュージカル見たことあるよ！
友達に誘われてなんとなく付いてったんだけど、
当麻くんの歌、ダントツに上手かった！」

「えっ！俺の舞台、見たことあるの？嬉しいなぁ！」

「ねっ、だからカラオケ行こ！歌うって凄い元気が出るよね！
私も健人くんの歌が聴いてみたいし…。」

「え？健人とゆき姉って、一緒にカラオケ行ったこと無いの？」

当麻が、意外！って顔して二人を見る。

「私たち、まだそんな関係じゃないもんね！飲み友達って感じ？」

雪見がニヤッと笑いながら健人を見た。

「えーっ！それはないだろ、ゆき姉！俺たち、ただの飲み友達なわけ？

だったらすっげーショック！俺、立ち直れないかも。」

健人が口を尖らせて言う。

すると当麻が、健人の背中をバシッ！と叩いた。

「んなわけないだろ！健人は自分に自信が無いの？

ゆき姉に愛されてるって自信が。

俺、今日二人を見てて思ったんだけど、恋人同士プラス親戚同士の愛情って、最強だなって。

なんか、絶対的な愛の絆が見えた気がする。

お互いを思いやる気持ちが強いよね。他人だとそうはいかないと思う。

どこまで行っても切れない、一本のロープで繋がってるって言うか…。」

「ロープで繋がっちゃってるの？私たち。」　雪見が笑って健人を見る。

「例えでしょ、例え！でも、それと同じようなこと、

前にも誰かに言われたような気がする。誰だっけ？」

「ここのマスターでしょ！マスターもそんなこと言ってた。

血の繋がりがあるから、本当の姉弟みたいに
どこまで行っても、お互いを思いやる気持ちが途絶えない、って。
絶対にいいカップルになる！って力説してた。」

あの時のマスターの顔を思い出し、雪見はクスッと小さく笑った。

「俺もマスターの意見に賛成！まったく健人が羨ましいよ。
こんなに綺麗で可愛くて、頭が良くてかっこ良くて、
優しくて思いやりがあってお酒の強い、腕のいいカメラマンが
専属で付いてるなんて！
俺も毎日そんな人に写真撮ってもらいたい！」

「ガクッ！落ちは『写真撮ってもらいたい！』なわけ？
そんなに散々歯の浮くような言葉並べといて…。
いいよ！今度、当麻くんの写真も撮ってあげる。
健人くんを撮してて、やっとポートレートにも自信を持てるようになったから。
まぁ、専属にはなれないけど、たまには撮してあげる。」

「ホントに？やったぁ！じゃあ今撮して！俺と健人を。
カメラ、いつでも持って歩いてるんでしょ？」

当麻は、さっきまで泣いていたとは思えないテンションで健人と肩を組み、
二人でピースサインをして雪見がカメラを構えるのを待っていた。

「ねぇ。じゃあさ、今撮る二人の写真、健人くんの写真集用にしてもいいかな？

今なら、すっごくいい感じの二人を撮れる自信があるの！
同じ事務所なんだから、当麻くんサイドも固いこと言わないよね？」

雪見が当麻に聞いてみる。

「大丈夫でしょう！俺も健人の写真集に登場したい！
俳優　三ッ橋当麻としてじゃなく、ただの健人の親友として。」

「俺も、当麻といる写真を載せて欲しい！
だって、こいつといる時が一番すっぴんだもん。心も顔も。
『素の斎藤健人』の写真集なんだから、これは外せないでしょ！」

「そうだね。私もそう思う。
あ！いいこと思いついちゃった！
『素の健人の休日』を撮る名目で、当麻くんとスケジュールを合わせてもらって、
半日くらい三人でどっかに撮影旅行に出掛けるの！
で、撮影はさっさと終わらせて、あとはのんびり！ってどう？
二人とも最近忙しくて、お疲れモードでしょ？
そんな仕事でもないと、休めそうもないみたいだし…。」

「それ、乗った！ゆき姉、いいアイディア！三人でどっかに遊びに行きたい！」

健人が、もう決まったかのようにはしゃぐ。

「当麻くんも、いい？」　「もちろん！」

「じゃあ、早速明日にでも、今野さんに交渉してみるね。
よし！今日の記念撮影をして、カラオケに移動しよう！

はい、撮るよー！はい、チーズ！もう一枚！」

すっかり仲の良い三人組になり、みんな笑顔が絶えなかった。

居心地のいい時間が、どこまでも流れていった。

魔法の歌声

健人と当麻と雪見は、すでにいい感じに酔いが回り
楽しそうにじゃれあいながら、カラオケボックスへと移動した。

『どんべい』の入ってるビルの五階。
マスターが店を抜け出し、三人の為に部屋を予約しておいてくれた。

「雪見ちゃん！明日は記者会見だって覚えてるよねぇ？
俺、テレビの前に正座して雪見ちゃんたちを待つんだから、
二人で二日酔いの顔して出て来ないでよ！
もう十二時を回ってんだから、お肌のためにも今日は早めに切り上げて
さっさと寝るんだよ！」

マスターが、店を後にする雪見に向かって声をかける。

「大丈夫、大丈夫！これぐらいのお酒でどうにかなる雪見さんじゃありませんからぁ！
マスター、どうもねーっ！今日も美味しかったよぉ！また来ま～す！」

明らかに、酔っぱらいオヤジと大層変わりのない足取りで、
雪見は『どんべい』の暖簾から出て行った。

カラオケボックスは超満員！

マスターの口利きがなけりゃ、入ることは難しかった。

健人と当麻は二人とも目が悪いので、仕事以外ではコンタクトを外し
眼鏡をかけているのだが、これだけではすぐにバレてしまう。
そこで二人してマスクをかけ、帽子を目深にかぶるのだが、
人混みの中ではこれが異様に目立ってしまう。
かと言って眼鏡だけだと、一瞬でみんなに取り囲まれてしまうのは
目に見えてるので、
奇異の瞳にさらされながらも足早に、待ち客の前を通り過ぎた。

だが、三人の後ろから何人かの客の声で、
「ちょっと！あれって当麻と健人に似てなかった？背も同じくらいだよ！」
と言う、結構大きな声が聞こえてきた。

「やばっ！早く部屋に入って！」　健人が雪見の背中を押す。

「バレちゃった？大丈夫だよね？」　当麻が心配そうに言う。

「なんとかセーフ！って感じ？出る時も気をつけないと。」

健人と当麻は一気に酔いが引き、冷静になっていた。
それに引き換え雪見は、相変わらずの上機嫌で二人の間に挟まり、
健人と当麻と腕を組んでいる。

「ねぇねぇ！早く歌おうよぉ！健人くんはミスチルだっけ？
当麻くんはいっつも何歌うの？」

ハイテンションな雪見を間にして、健人と当麻は顔を見合わせた。

「今日はほんと、ほどほどにして帰ろう！
このままじゃ明日のゆき姉は散々だよ、きっと。」

当麻が心配そうに健人に言う。

「そうだな。カラオケは当麻を慰めるためだったらしいけど、
『どんべい』だけで、今日は解散しときゃ良かったかな？
でも珍しいよ、ゆき姉がここまで酔ったのは。
いっつもは俺の方が酔っぱらって、ゆき姉に怒られるのに…。」

健人が隣の雪見を見ながらつぶやく。

雪見はと言うと、さっさと勝手に、健人が好きだと言っていたミスチルの曲を、
三曲も連続で入れていた。

「おーい！なんでいきなり三曲も入れちゃうの！
ゲッ！始まっちゃったよ！仕方ない。
斎藤健人ミニコンサートへようこそ～！
みんな、今日は楽しんで行ってねーっ！」

さすが、エンターテイナー健人！切り換えが早い。
本当にここが健人のコンサート会場に見えてきた。
歌はまぁ、そこそこ上手い。が、歌手デビューはないな、って感じ。
ただし、ノリだけは最高だった。

きっと、毎年所属事務所の若手仲間でやっているステージも、
こんな風にみんなを乗せて盛り上がるんだろうな。

三曲続けて歌わされた健人は、さすがにヘロヘロだった。

「あー、汗かいちゃったよ！喉が渇いた！」

そう言いながら、最初に注文しておいた梅サワーを一気飲みした。

「あー、生き返ったぁ！もう、ぶっ倒れるかと思ったよ！
もうやめてね、連続で入れるのは。じゃあ、次は当麻行く？」

「いや、俺は後でいい。ゆき姉、先に歌って！
ゆき姉の歌が聞いてみたい！いっつも誰の歌、歌うの？」

当麻が隣の雪見に聞いた。

「うーん、だいたい何でも歌えるけど、一番多いのは今井美樹かな？
あ、でも最初に歌うのはいっつもこの曲！私のテーマソング！」

そう言いながらかけたのは、中島美嘉の『雪の華』だった。

雪見はマイクを持って立ち上がり、テーブルの横に空いている
広いスペースまで出てきた。
そして、「雪見の華、歌いま～す！」と高らかに宣言！
だがさっきまで、あんなに酔ってはしゃいでいたのが嘘のように、
前奏が鳴り出した途端、落ち着いた表情の雪見に変わっていった。

まるで、「本番！」と声がかかった女優のように、精神を統一して。

「のびた人陰（かげ）を…」　と、スッと歌い出した瞬間、
健人と当麻はお互い顔を見合わせた。

「なんか、超上手くね？俺、ゆき姉の歌初めて聞いたけどビックリ！」
健人が当麻に言うと、当麻も興奮した様子で

「俺、今一瞬で鳥肌立ったんだけど！見て、この腕！」
当麻が健人に腕を差し出す。

「ねぇ、ゆき姉って前に歌手かなんかやってたの？」

「いや、そんな話は聞いたことない。あ、小学校と中学校の時は
合唱団にいたっていうのは、前に言ってた気がする…。」

間奏中も雪見は歌の世界に入り込み、ただそこに一人だけがいるように
健人と当麻の存在など、全く気にも留めていない様子だ。

二番の頭の小節を歌い出した時、すでに健人と当麻は
何も言葉を発することが出来なくなっていた。
それはまるで、魔法にでもかかったかのような瞬間であった。

健人は、この歌は俺の事をうたってるんじゃないか、と思いながら
聞いている。

『雪見がいると、どんなことでも乗り切れる気がする。
だから俺は、こんな毎日がずっと続いて行って欲しいと願ってる。』

自分がまさに今思っていることを、この曲は歌っていると思った。

今まで、何度も聞いたことのある曲だったが、
こんなにも深く心の中に染み込んできたことはない。胸が熱くなっていた。
雪見の声質は、聴く者の心を捕らえて離さない、不思議な何かがあった。

心を捕らえられたのは、隣で聞いていた当麻もその一人であった。
目は雪見だけを一点に見据えていた。なぜだか、ドキドキが止まらない。
酒のせいか？いや、違う。じゃ、なんで…。
自問自答してみるが、答えを問い詰めていくのが怖くなった。
そのうち段々と、また視界がぼやけてきて…。

雪見が歌い終わった時には健人も当麻も、二人で涙を浮かべていた。
それを見た雪見はハッと我に返り、目の前の二人の状況が理解できずに慌てふためいた。

「ちょっとぉー！なんで二人して泣いてんのぉ？
そんなに私の歌、へたくそだったぁ？やだ、もう！
アイドル二人を泣かした私って、一体どうすりゃいいのよー！！」

涙をポロポロこぼすイケメン二人を前にして、すっかり酔いも醒め
途方に暮れる雪見であった。

決戦の時！

いよいよ、写真集制作発表記者会見の当日。
雪見はそんな大事な日の朝だと言うのに、案の定最悪な気分でいた。

昨日は二時間ほど三人でカラオケを楽しんで、また来ようね！と
健人と当麻と別れ、それから真っ直ぐ帰ったまでは記憶にあるが、
どうやら家に着いた途端、ベッドに倒れ込んで寝てしまったらしい。

化粧は落とさずそのまま寝たので顔がヨレヨレ、
お気に入りの買い取ったばかりの服はシワシワ、
ふわふわにカールしてあった髪はグチャグチャ。
しかも、相当に頭が痛い！

「はぁーっ…。なにやってんだろ、私。３３にもなって…。
こんなことじゃイカンよねぇ。しっかりしろよ、雪見！」

そう言いながら自分の頬を両手でパン！と叩き、
よっしゃ！と気合いを入れてベッドから飛び降りた。

『一時からの記者会見に間に合うように、最高の私を作らなくちゃ！』

まずはお風呂に入りながら、顔のマッサージを念入りに。
深酒のせいで浮腫んだ顔を、何とか元に戻しホッとする。
あとは爪の手入れと、まだ少し腫れぼったい目をどうにかして、と。

十一時にはまた、会見場でもある『ヴィーナス』出版社での
事前打ち合わせと着替えがあるので、十時半には家を出たい。

まだ一時間半はあるか。健人くんはどうしてるかなぁ…。
そんなことを考えてた時、ケータイにメールが届いた。

健人くんからかな?ちょっと期待して開いてみると、
それは真由子からのメールであった。

元気?いよいよだね。
私も珍しくドキドキ!
仕事が手につかない!
どーしよう(ー_ー;)
とにかく落ち着いて、
堂々と雪見らしく凛と
して会見に臨んで。
私も一時には会見場に
行くから!パパにお願い
しちゃった。(^^)v
じゃ、またあとで!

mayuko

えぇーっ!会見場に来るのぉ?嘘でしょ?
あ痛たっ!また頭痛がしてきた。勘弁してよ!
真由子に見られてると思ったら、益々緊張してきた!
まぁ、真由子の目的は、私じゃなくなくて、健人が目的だろうけど…。

はぁーっ、と深くため息をつぎ、真由子に返信をした。

来るのはいいけど恥ずかしいから、あんまりこっち見ないでね！
まぁ、恥をかかないように祈ってて。
最大の難関に挑む私にパワーを送ってよ！
では、また後で。

ｂｙ　ｙｕｋｉｍｉ

真由子の父にも、娘の前で恥をかかせる訳にはいかなくなった。
よし！気合いが入ったぞ！頑張らなくちゃ。

雪見は飼い猫めめに餌をやり、水を取り替えて頭を撫でてやる。
めめにもパワーをもらって行かなきゃね。

そして準備を整えて、少し早めに家を出た。

いつものドーナツショップに立ち寄り、いつもの席でカフェオレとオールドファッションの軽い朝食。
段々と、心が落ち着いてきた。
こういう時こそ、いつもと変わらない行動が心を静める。
大丈夫、大丈夫。きっと上手くいく。自分に暗示をかけた。
そしていよいよ会見場へと出向く。

一方健人は、朝の八時からすでに雑誌のインタビューに答えていた。

昨日の酒と涙と花粉症のせいで、少し腫れた目をしながら…。

「今度、新しい写真集を出すんです。今、撮影の真っ最中なんですけど、
カメラマンが親戚のお姉さんなもんで、リラックスして撮ってます。
素顔の斎藤健人をお見せできると思いますよ！
是非、今年のクリスマスプレゼントにどうぞ！（笑）」

やっと今日からこの話題が解禁になったので、健人は嬉しそうにインタビューに答えていた。
その後も立て続けに二つの取材をこなし、急いで出版社へと向かう。

会見場となる出版社の大ホールでは、粛々と準備が進められていた。
このビルの最上階には、ワンフロアを使った大ホールがあり、
この出版社から出す本の制作発表や、受賞記念パーティーなどはすべてここで行われている。

打ち合わせの行われる会議室に行く前に、チラッと会場を見ようと雪見がドアを少し開けてホールをのぞいた。

『えーっ！？こんな広い会場でやるの？うそだぁー！』

雪見は、見なきゃ良かったと後悔したが後の祭り。
一気にドキドキが加速して、せっかく取り戻した平常心をまたしても失ってしまった。

ため息をつきながら会議室に入ると、すでにプロジェクトメンバーは

先に打ち合わせ中であった。
程なくして真由子の父である編集長の吉川と健人、
マネージャーの今野が会議室に入ってきた。
健人は雪見の姿を見つけて、ニコッと笑って席に着く。

「それではみんな揃ったようなので、予定時刻より早いが打ち合わせを始めよう。
いよいよ今日の記者会見から全てがスタートする。
みんなには気を引き締めて臨んでもらいたい。
今回の会見は、いつもの斎藤健人一人の会見とは大きく訳が違う。
ほとんど無名に近い雪見さんが隣にいるからだ。
記者の注目は、今回ばかりは全て雪見さんに集中すると言ってもいいだろう。
そこで、手っ取り早く雪見さんを理解してもらうために、
会場でこれを配ることにした。
進藤くん、みんなにも配ってくれたまえ。」

それは、手のひらサイズの健人の写真集であった。

「今まで撮した中から何枚かを選んで、こんなのを作ってみたがどうだろう。
いいと思わないか？本編を期待させる出来だと思うが。」

こういうのを作りたいから写真を送ってくれ、と言われ
デジカメで撮った中からお気に入りを何十枚かパソコンから送信したが、
実際出来上がった実物を見ると、自分で撮った写真とは思われないほど
お洒落なレイアウトが施され、完成度が高かった。
きっとこれをそのまま売っても売れるだろう。そんな写真集だった。

健人と今野も、初めて見る雪見が撮した健人の写真に目を見張った。

『俺のことを、こんな風に撮してくれたのはゆき姉が初めてだ。まったく今までの写真とは違う。本当の俺がここにいる！』

健人は嬉しかった。

『やっぱり思ってた通りだ。ゆき姉にしか本当の俺は撮せない。ずっとずっと、ゆき姉にだけ俺を撮してて欲しい！』

そんな気持ちで胸がいっぱいになった。

でも雪見の気持ちは変わらない。

これが完成したら、また猫の元に帰ろう。そう思って打ち合わせを聞いていた。

「じゃあ、あとはまた進藤くんと牧田くんに任せたよ！最初の印象が肝心だからね。よろしく頼むわ！」

そう吉川が言って先に会議室を出て行った。

「じゃ、私たちもメイク室に移動しようか。雪見さん、頑張ろうねっ！」

進藤と牧田の心強い応援に雪見は、「はいっ！」と笑顔で答えた。

いよいよ、人生最大の大舞台に立つ時がきた！

高潮した頬の雪見を、横で健人が少し寂しげに見つめていた。

試練の会見前

メイク室で今日の衣装を渡され、雪見が着替えをして出てきた。

今日の衣装は、昨日の女の子チックなワンピースから一転、
真っ白なシャツに、カーキ色の細身のカーゴパンツというスタイルだ。

雪見のいつものスタイルに近く、だがキリッとして仕事のできる女性カメラマンを演出した。

靴は、本当なら記者会見なのでお洒落にハイヒールを合わせたいところだったが、健人との背のバランスを考えて、Ｄｒ．マーチンのベージュ色のワークブーツに。

これは雪見も、まったく同じ物を仕事で履いている。

なるべく普段の雪見に近い物をチョイスした。

「うん、いいね！今日のキーワードは『腕利き美人カメラマン』だからね。
そのつもりでいてねっ！」

スタイリストの牧野が雪見に笑顔で言う。

「えーっ！またそれですかぁ？」　雪見は不満そうだ。

「我慢して！編集長のどうしても外せないこだわりだから。
多分、ずっと『美人カメラマン』路線で行くと思うよ。諦めて！」

メイクの進藤も、笑いながら雪見を促した。

「ほら、次はデキる女のヘアメイクをするから、そこに座って。」

「はーい。」

今日の髪はダウンスタイルで、大きめなカーラーでゆるく巻き髪を作り、
またふんわり感を出していた。

「服がわりとボーイッシュだから、髪の毛はあえて女性っぽくね。
みんなが憧れる、仕事のできる綺麗なお姉さんがイメージかな？
でも、女っぽすぎても同性の反感を買いやすいから、ほどほどに。
いくら健人くんの親戚だって言っても、あまりに女を感じさせるとファンの嫉妬の対象になっちゃう。」

「そうだよ。今回一番気をつけなくちゃいけないのが、
健人くんのファンの目だからね。
だからあえて女性らしさより、私はカメラマンです！っていうのを全面に押し出した格好にしたの。
あとは、小道具としてカメラを持って出るのをお忘れなく！」

そう牧田が念を押した。

進藤が雪見にメイクをしながら聞いてくる。

「ねぇ、なんだか昨日より目が腫れぼったいけど、
もしかして昨日飲み過ぎた？健人くんと。」

「え？私昨日、健人くんと飲みに行くって言いましたっけ？」

「あ！いや、なんとなーくそうかなー、と思って…。」

「いやぁ、実は飲み過ぎちゃったみたいで。今朝は最悪でした！
途中から当麻くんも来て、居酒屋で飲んだあとにカラオケ行って…。
」

「えーっ！当麻くんって、あの三ッ橋当麻くん？
なんて豪華な飲み会なのぉー！羨ましすぎるよ、雪見さん！
イケメン二人に囲まれて飲んでたんでしょ？そりゃお酒も進むわ！」

横から牧田が興奮して口を挟んだ。

「ねぇねぇ、当麻くんってどんな感じ？
あの子も綺麗だよねぇー！肌が透き通るように白くて、セクシーで。
健人くんは可愛い系のイケメンだけど、当麻くんは綺麗系だよね。」

「えーっ！当麻くんってセクシーですかぁ？全然違いましたよ！
私には、泣き虫って印象しか残ってないなぁー。」

「うそぉ！当麻くん、泣いたの？雪見さんの前で？どうして！」

「なんか二回とも私が泣かしたって、健人くんが人聞きの悪いこと
言うんだけど…。
彼女のこと聞いた時と、私の歌聞いて泣いたんです。
だから泣き虫だと思う、彼は。
健人くんも割とよくウルウルしちゃう方だから、泣き虫仲良しコン
ビなんです、
健人くんと当麻くんは。」

そう話していた時、鏡の前の雪見のケータイが、メールの着信を伝
えた。

「あれ？誰からだろ！うそ！当麻くんからだ！噂話してたのバレた？」

元気？ゆき姉！
昨日は楽しかったね！
すぐに俺を仲間に入れてくれてありがとう！
さすが親友の彼女だけあるわ。
俺もすっかりゆき姉のファンになりました。
また一緒にカラオケ行って下さいｍ（＿＿）ｍ
今日は俺もテレビで見てるからね！頑張れ！
あ、俺がメールした事健人には内緒ね。
あいつ心配性だから。
じゃ、また会える日を楽しみに！

ｂｙ　ＴＯＵＭＡ

メールを読んで雪見はドキッとした。
どういう意味でこのメールを送ってきたのか…。
健人の前で普通にアドレス交換したのに、健人に内緒ってどういう

事？
それとも私の考えすぎで、単純に親友の彼女に昨日のお礼を言いたかっただけ？
そうだよね！私ったらバカみたい。仲良しに送る普通のメールじゃん！
それだけ三人は、昨日で仲良くなったって言うことだよね。
うん、そうだ！別にやましいメールなんかじゃないよ！

自分の中でそう決着をつけた。
ただひとつ、このメールを健人に内緒という事だけが心に引っかかるが。

「なになに！当麻くんからのメールなのぉ？
いいなぁー！羨ましすぎる！で、なんて？」

「もしかして牧田さんって、当麻くんのファンだったりします？」

「えー！バレちゃった？私、ああいう綺麗な顔に弱いんだよねえー。」

「じゃあ今度、当麻くんを撮して、写真を牧田さんにプレゼントしますね！」

「ほんと？！やだ、嬉しい！ありがとう、雪見さん！」

牧田が少女のように喜ぶ姿が微笑ましかった。

準備の済んだ雪見と健人が、編集長吉川に大ホール横の控え室に呼ばれた。
部屋には他に誰もいない。

「最後に念を押しておきたいのだが、くれぐれも君たちの関係は親戚同士ということを忘れずに。
多分、この前の噂を質問してくる記者が必ずいるだろう。
でも終始毅然とした態度で堂々と、二人は親戚関係以外の何者でもない事を
宣言するんだ。まぁ、二人にとっては辛い宣言だがな…。
だが、ここをクリアしない限り、次には進んで行けないんだ。
わかってくれるよな？」

吉川の言葉に、二人は黙ってうなずいた。

「よし！その後のことは全部俺たちに任せろ！
必ずこの写真集をヒットさせてみせるから。
発売までいろんな企画を仕掛けるつもりだから、
益々忙しくなるのを覚悟しといてくれ。じゃ、健闘を祈る！」

吉川の言葉が胸にずっしりと重くのし掛かった。
だが健人も雪見も、吉川の言うことは今の時点ではそれが一番正しいと
わかっていたので、他に何も言うことはなかった。

この控え室を出た瞬間から、私と健人は以前のように
ただの遠い親戚同士に戻らなくてはならない。

こんなにも好きになってしまった今、
とても辛いことを宣言しなくてはならない会見が待っているけれど、
二人の絆さえしっかりと結ばれていれば、何も心配はいらない。
そう自分の心に言い聞かせ、雪見は健人と最後に握手をした。

どんなことにも負けない、二人の愛を約束して…

吉川が気を利かせて、会見の前に健人と雪見二人だけにしてくれた。

「なんだか凄い緊張しちゃう。どうしよう。上手く話せるかな…。」

雪見が大きくため息をついた。

「大丈夫だよ。ゆき姉一人じゃないんだから。俺が隣にいるよ。
もし言葉に詰まることがあっても、俺がちゃんとフォローするから
心配しないで。
ゆき姉はプロのカメラマンとして、自信を持ってみんなの前に出れ
ばいい。
俺も俳優　斎藤健人として、いつも通りにキメるから。」

そう言って健人はすでに人気俳優の顔になり、にっこりと微笑んだ。

「健人くん。私、もしかしたら会見で、凄い冷たい事言うかもしれ
ない。
でも、それは本心では無いって事、覚えておいてね。」

「わかってるよ。全ては二人の写真集のため、だよね。
ねぇ、今日の仕事が全部終わったら、また猫かふぇ行かない？
当麻も、仕事が終わったら行くって言ってたからさぁ。」

「え？当麻くんも行くの…。うーん、でも私たち、会見終わったあと
取材が八本も入ってるんだよ、八本も！一体何時に終わるわけ？」

「八本だって、そんなには掛からないさ。今日の取材は全部写真集関連の話だし、
ここの場所で受ける取材だから、次々に終わらせられるよ。
じゃ、俺、当麻にメール入れとくね！ゆき姉の芸能界デビューを祝うワインを持ってこい！って。」

「芸能界デビューって、そんな大げさな！」

「あれ？まさかゆき姉、今野さんからまだ話聞いてない？
今日からゆき姉は、うちの事務所の所属タレントだって！」

健人がビックリした顔して言う。
が、それ以上に驚いているのは、もちろん当の本人の雪見であった。

「なにそれ！！そんな話、私ひとつも聞いてないよ！
どういう事？私が健人くんの事務所の所属タレントって！」

雪見が大声を張り上げて健人に詰め寄る。

「ちょっと落ち着いて！昨日のグラビア撮影のあと、
吉川さんがうちの事務所に来て、これからの戦略を話し合ったらしい。
で、いろんな企画をやる上で、ゆき姉がただのフリーカメラマンでいるよりも、
うちの事務所所属のタレント兼カメラマンでいた方が
仕事をやり易いってことになったみたい。
俺は今朝の仕事前に、今野さんから話を聞いた。」

「本人が何も知らされて無いって、どういう事！
私、今野さんに聞いて来る！」

雪見が興奮して控え室を出て行こうとしたその時、
健人が「待てよ！」と、雪見の腕をつかんで引き留めた。

「落ち着けって！落ち着いてよく考えてみて。
これから十二月の発売まで、いろんな企画を仕掛けるって、
さっき吉川さんが言ってただろ？
多分ゆき姉は、カメラマンとはかけ離れた仕事までやることになるよね。
そうなった時、やっぱりマネジメントする人がいないと無理だと思う。
で、来年の四月まではうちの事務所所属ということにして、
当分の間は今野さんがマネジメントするらしい。」

「そんな大事なこと、私に一言の相談もなく…。」

雪見の不快感があらわになった顔を見て、健人が慌てた。

「きっと今野さん、早くにゆき姉に話すとまた緊張すると思って、
ギリギリまで黙ってようとしたんだと思う。」

そこにタイミング良く、控え室をノックして今野が入ってきた。

「もうそろそろ時間だから、出る準備してね！」

「今野さん！私、今聞いたんですけど、どういう事ですか！

当の本人に何の説明も無いって！それにまだ契約もしてませんけど！」

相当な勢いで今野に詰め寄る雪見。

「あぁ、ごめんごめん！はい、契約書！話は健人から聞いたでしょ？そういう事で、今日から俺が二人のマネージャーだからよろしくね！」

「よろしくねっ！って、それだけですか？何にも了承してないのに！」

すると今野が穏やかに雪見に話して聞かせた。

「みんなが二人の事を考えて、一番いい方法を選んでくれてるんだよ。

本当は、この記者会見のサプライズとして、会見中に雪見さんに発表して、

壇上で契約書にサインをしてもらう予定だったんだけど、それは取り止めにした。

雪見さんの反応が予想できなかったから。

やっぱり嫌かい？芸能事務所なんか…。」

今野が静かに聞いた。

「嫌っていうか…。本当にそれでいいのか、わかりません…。」

雪見は、そうすることによって、これから自分はどうなっていくのか、

想像もつかずに頭が混乱していた。

ただ、みんなが私たちに一生懸命、力を貸してくれていることだけはよく伝わってきた。

黙って健人の方を見てみる。

すると健人はにっこりと微笑んで、こくんと一つうなずいた。
大丈夫だよ！いつもの笑顔で、そう雪見に言ってる気がした。

「今野さん。本当にそれが一番いい方法なんですよね？
……わかりました。今日からよろしくお願いします！」

「よかった！どうなることかと思ってヒヤヒヤしたよ！
こちらこそよろしく、新人タレントさん！
じゃ、この契約書に目を通してサインを。」

今野が額の汗を手で拭った。ホッとした表情に安堵感が伺える。

健人もまた、喜びを爆発させたいのを押し殺して、
ただ黙ってニコニコと、契約の様子を見守るだけだった。

「よし！これで決まりだ！あと十分で控え室を出て、ステージ横に移動してて。
俺は契約完了を吉川さんに伝えてくる！」

そう言って今野は、控え室を勢いよく飛び出して行った。

今野がドアをガチャンと閉めた瞬間、
健人が「やったぁ～！」と叫びながら、雪見に抱きついた！

「やった！ゆき姉が俺の後輩になった！サイコ～！！
ってことは、当麻もゆき姉の先輩になったってわけだ！
あいつ、ビックリするだろうなぁー！早くメールしなきゃ。」

そう言いながら健人は、当麻にビッグニュースの報告をした。

すぐさま返ってきたメールには、当麻の喜びの言葉が。

嘘みたいな話だけど！
マジ！？だとしたら俺、
超嬉しい！今日から
ゆき姉が俺の後輩！？
めっちゃ今日の仕事、
張り切って早く終わら
せるから、健人たちも
猛スピードで終了して
猫かふぇ集合！
お祝いのワイン買って
待ってるよ～（＾―＾）ｖ
んじゃ、この後の会見
頑張れって、ゆき姉に
伝えて。見てるよー！

ＢＹ　ＴＯＵＭＡ

一気に序列が逆転し、雪見は新人として二人の先輩に教えを請う立場になってしまった。

果たしてこれで本当に良かったのか、未だに明確な答えは出せないが、
とにかく動き出してしまった船から今、飛び降りることはできない。

心にもやがかかったまま、雪見は健人と控え室を後にした。

笑顔の記者会見

「本日は、お忙しいところを当出版社にお集まりいただき、誠にありがとうございます。
本日司会を務めさせて頂きます『ヴィーナス』編集部、藤原と申します。
どうぞよろしくお願い致します。
それではただ今より、『ヴィーナス』プレゼンツ斎藤健人写真集の制作発表会を行わせていただきます。
まずは本日の主役、俳優の斎藤健人さんの登場です！どうぞ！」

健人はステージ脇から出る時に、雪見に小さくVサインをし「お先にっ！」と笑顔で言い残して颯爽と登場して行った。

一人になった雪見は急に緊張感が増し、全身からドキドキとした音が聞こえるのではないかと思うほどだったが、一緒にステージ脇に待機していたヘアメイクの進藤がすぐに雪見の隣に駆け寄り、手を握って「大丈夫よ！」とはげました。

「次に、本日はもう一人、素敵な主役をお呼びしております。今回の写真集のカメラマンであり、斎藤さんとは親戚同士でもある浅香雪見さんです！どうぞこちらへ！」

司会者に促され、とうとう雪見の出番がやって来た！

進藤が「いってらっしゃい！」と微笑んで背中を押した。
その声を合図に雪見は頭を切り換え、ふぅーっと大きく息を吐いたあと
背筋を伸ばして笑顔で「行ってきます！」と、健人の待つステージへと歩いて行った。

その姿は、つい先ほどまでのガタガタと震えていた雪見とは別人で、
一瞬誰かが乗り移ったのではないか、と見ていた誰もが思うほどに
堂々とした後ろ姿であった。
ステージ上では、健人に負けないぐらいのフラッシュを浴びている。

「やっぱり、彼女はただ者じゃないな…。これからが楽しみだ。
きっと何をやらせても上手くこなすだろう。
ただのカメラマンにしておくなんてもったいない！」

横で見ていた編集長の吉川が、腕組みをしながら進藤に言った。

「ええ。彼女はこれから一気にブレイクする気がします。
編集長！これから私たちも忙しくなりそうですよ！感張らなくちゃ。」

自分自身に気合いを入れるように進藤が、雪見を見ながらそう言った。

「では、本日の主役お二人が揃ったところで、改めてご紹介致します。
皆様もご存じの、今、日本を代表する若手人気俳優として
各方面でご活躍中の斎藤健人さんです！ご挨拶をどうぞ！」

「皆さん、こんにちは。斎藤健人です。今日はお忙しいところ、
こんなにもたくさんの方にお集まりいただいて感謝してます。
そして、今皆さんが、僕のことより気になさっていると思われる隣
の女性を、
僕の方から紹介させて下さい。
今回の写真集のカメラマンを務める、浅香雪見さんです！」

まだまだ健人の挨拶が続くと思って聞いていたのに、
いきなり健人に振られ、慌てて雪見が頭を下げて挨拶をした。

「皆さん、初めまして！フリーカメラマンの浅香雪見です。
今回生まれて初めて、このような場所に立つので、とても緊張して
います。
上手くお話できるかわかりませんが、どうぞよろしくお願い致しま
す。」

雪見は笑みを絶やさず、緊張していると言いながらも落ち着いて話
した。
そして健人は、続けて雪見と自分との関係を説明する。
この前の噂を封じ込めるように…。

「雪見さんと僕とは、おばあちゃん同士が姉妹と言う、はとこ同士
の関係です。
彼女は僕より一回りも年上で、僕の生まれた時からを全部知ってい
る、
ちょっとお母さん的な存在です。」

健人が雪見の方を見ながら笑って「お母さん的な存在」と言ったの

で、
会場の記者たちの間から笑いが漏れた。
健人はあえて「お姉さん的」ではなく「お母さん的」と言った。
それは、そう言った方が「彼女？」という疑いの眼差しから
少しでも遠ざかるかと咄嗟に判断して言った言葉だった。
まぁ、隣の雪見は相当渋い顔をしていたが…。

司会の藤原が、健人の言葉のあとを継いだ。

「浅香さんは今まで、数多くの猫の写真集を出版なさっている
フリーカメラマンでいらっしゃいます。
今回、写真集のコンセプトが『素の斎藤健人』である事を受け、
一番斎藤さんが素顔をさらけ出せるカメラマンである浅香さんに
撮影をお願い致しました。
先ほど受付でお渡ししました小さな写真集は、もうご覧になって頂
けたでしょうか？
本編の出来を楽しみになさって頂けるかと思います。
では、ここからはお二人にマイクを明け渡して、
自由にフリートークをお願いしたいと思います！」

二人は、聞かされていなかった突然の展開に驚き、顔を見合わせた。

「えっ！俺たちだけでしゃべんのぉ？そんな会見って有りぃ？」

思わず健人が、司会の藤原に向かって言う。

だが、これはすべて編集長吉川が仕掛けた作戦でもあった。
親戚同士だが、とても仲が良い姉弟のようだと言うことを

あえてみんなの前でアピールしてもらい、この先の行動が不自然に映らないように、
という先手を打った作戦であった。

でも、当の二人は戸惑っていた。
何から話し始めればいいんだろう…。そうだ！あの話をしよう！
健人は何を思ったか、とんでもない話からトークを開始した。

「なんか、突然二人で話せって、これムチャ振りだよね！
でもさ、今日はゆき姉が俺の事務所の後輩になった記念日だから、藤原さんを許してあげよう。藤原さーん！あとでジュースおごってね！」

健人の言葉に会場がドッと沸き、藤原は苦笑いをしながらうなずく。
雪見も一緒に笑ったら、すっかり緊張の糸が切れて身体が軽くなった。
健人の雪見に対する気遣いが嬉しかった。

「皆さん！ついさっき、雪見さん…いや変だな。
あの、いつも通り呼ばせてもらってもいいですか？
俺、いつもは『ゆきねぇ』って呼んでるもんで。トークが弾まないと困るから。
あ、そうそう、ゆき姉がですね、さっき俺の事務所と契約して、なんと俺の後輩になっちゃったわけですよ！お母さんみたいなのに！」

「さっきから失礼だよ！お母さんみたい、お母さんみたい！って。
お姉さんみたい！の間違いでしょ！いっつもこうなんですよ、健人くんって。」

記者たちの方を向いて言った雪見の言葉にも、会場から笑い声が上がる。
たったこれだけの時間でこの二人は、すっかりその場の記者たちを自分たちのペースに巻き込んだ。

それを会場の一番後ろに移動して立っていた吉川は、微笑んで見ていた。
この二人には、無限のビジネスチャンスが転がっている！と。

その時、真由子が会場のドアをそっと開け、「パパ、遅くなっちゃった。
二人の様子はどう？」と、父である吉川の隣に立った。

「今のところは上手くやってるよ！雪見さんも、何の心配もない。これはこの先、パパも忙しくなりそうだよ。真由子にも感謝だな。二人を連れて来てくれたのはお前だから…。」

真由子が来たことなど気づきもせずに、健人と雪見のおもしろトークは
まだまだ続くのであった。

圧倒的な愛

記者会見会場は、なぜか笑い声に包まれていた。
健人と雪見は話が脱線してばかりで、さっぱり写真集の話に戻らない。

司会の藤原は、もう充分二人の姉弟のような仲の良さはアピールできたし、
時間も押してきたので、そろそろ切り上げて次に進めなきゃ、
とフリートークの終了を二人に告げた。

「えーっ！もう終わっちゃうの？まだまだいっぱい、ゆき姉の面白い話を
しようと思ってたのに！ま、次回のお楽しみに取っておこうか。」

「まだ話し足りないってわけ？じゃ私も、とっておきの健人くんの話、
次回に取っておこうっと！」

二人の会話に藤原が割って入った。

「あのー、お言葉ですが、これに次回はありません！
それと、さっぱり写真集のアピールが無かったので、
改めて一人三分間でお願いします。」

「え？俺たち写真集のこと、話してなかった？全然気が付かなかった！
そりゃヤバい！えー、じゃあここからは真面目にお話しますね。
今回の写真集は、今までの本とは全く異なる、日常の僕が満載です。

心も身体も、素の自分がそっくりそこに詰まった作品になるはずです。
それも、この雪見さんがカメラマンだからこそ、さらけ出せる姿でこの写真集は、雪見さんがいなければ実現しませんでした。
今はまだ撮影の途中なんで、あまり詳しい内容はお話できませんが写真集の中には、僕の親友でもある三ッ橋当麻とのプライベート旅行の
写真なんかも載せる予定なんで、当麻ファンにも是非買って欲しい！」

健人のおちゃめな顔に、会場がドッと盛り上がる。
だが、ステージ脇にいたマネージャーの今野は、びっくりしていた。

「当麻とのプライベート旅行って、一体どっから出た話だよ！
俺、何にも知らないんだけど。そんなの行く時間、当麻にだって無いだろ！
まったく健人の奴め！勝手にそんな事言って、休みを作らせるつもりだな。
お前の作戦なんか、すべてお見通しだよ！」

そう言いながら、今野は苦笑いをしていた。

「とにかく、今年のクリスマスを楽しみにしていて下さい。
今年一番のプレゼントを、僕から皆さんへお届けします。
あ、それから大事なことを忘れてた！
皆さん、『ヴィーナス』も毎月見て下さいね！
写真集の撮影の裏側を、十二月まで連載させてもらいます。
ここにもオフショット写真が満載になる予定で、今月号は連載一回目

と言うことで、ゆき姉のめちゃめちゃ可愛いグラビアが載ります！
これを見たら多分みんな、ゆき姉ファンになると思う！
まさかのファンクラブなんて出来ちゃったりして？」

隣で雪見が「ないない！」と、笑いながら首を横に振る。

「とにかく、そう言うことなんで皆さん！今度は写真集が出た後にまたお会いしましょう。今日はありがとうございました！」

健人が会場の記者に向かって、深々と頭を下げた。

「では、浅香さんも一言お願い致します。」

司会者に促され、雪見が姿勢を正してスッと前を見据えた。

「今回、私はとても大きく重たい仕事をいただきました。
日本の次世代を必ずや背負って立つ、斎藤健人という偉大な若き俳優を
この私ごときが、果たして撮しても良いのだろうか…。
そう随分と悩みました。ですが撮影を進めて行くうちに、やはり私が
一番最初に思っていたことは間違いでは無かったと、確信致しました。

本当の斎藤健人を丸ごと撮しきれるのは、世界中で私しかいない！
そう思ったんです。それからは迷いが無くなりました。

今私は、全力でこの仕事に取り組んでいます。
命を賭けて撮してると言ってもいいかも知れません。

それは、一人でも多くの人に、この素晴らしい俳優の全てをお伝えして
一人でも多くの人に、彼を好きになってもらいたいからです。

どうぞ今年のクリスマスには、ご家族揃ってこの写真集を手に取って見て下さい。
必ずや私が、素敵な夢を皆様にプレゼント致します。
また明日から、一生懸命撮影に取り組みたいと思いますので、
どうか温かいご声援を、よろしくお願いいたします。」

そう言って雪見は立ち上がり、深く一礼をした。

その姿に、会場からは割れんばかりの拍手が鳴り響いた。
写真集の制作発表会では異例の出来事に、後ろで見守っていた
吉川と真由子も驚いて、思わず辺りを見回した。

横にいる健人も、思わず目頭が熱くなる。
自分の事をこんなにも思ってくれる人が、すぐそばにいてくれる喜び。

「ありがとう、ゆき姉！」

鳴り止まない拍手にかき消されて、雪見にその声は届いただろうか。

会見は、この前の噂に関する質問は一切無く、無事に終了した。
すぐその場で写真撮影会が行われ、次の日のスポーツ紙は一斉に
この日の会見の様子を大きな写真と共に報じた。

八本の取材を次々とこなし、やっと本日の仕事は全て終了！
と同時に、吉川と真由子が駆け寄る。

「いやぁ、お疲れ様でした！素晴らしい会見だったよ。
僕も今までいろんな人の会見を見てきたけど、こんなのは初めてだ。
益々君たちとの仕事が楽しみになったよ！今日はありがとう！」

吉川の言葉に二人で照れる。

「いや、こちらこそありがとうございました！
自由に喋らせてもらえたから、良かったんだと思います。
あ！藤原さんにジュースおごってもらわなきゃ！」

笑いながら健人が言うと、雪見も吉川に向かって頭を下げた。

「吉川さんのお陰で、心配していた二人の関係も聞かれずに
無事終わることができました。本当にありがとうございました！」

「いやいや、あなたの心を打つお話のお陰ですよ。
明日から、多分とんでもない反響が編集部にも届くでしょう。
カメラマン以外の仕事も、どんどん入ってくるかと思いますが、
どうか写真集の仕事を第一にお願いしますよ！
なんせ、日本中の人が期待してクリスマスを待ってるんだから。」

「はいっ！明日から気合いを入れ直して頑張ります！
健人くん！容赦なくビシバシ行くから覚悟しといてね！」

「おう！望むところだ！どっからでも、かかってこい！」

輪の中に笑いが広がった。

「雪見。私感動したよ！健人くんを思う気持ちの大きさに圧倒された。
今まで見てきた雪見の中で、一番かっこいい雪見だった！」

真由子が雪見の手を握り締めながら、そう言った。

「今までの私はカッコ悪かったってこと？
でもね、私、自分でも少し変わったかな？と思った。
昔はこんなとこで喋るなんて、考えただけでも逃げ出したくなったのに
今は、自分の口からきちんと伝えることが大切なんだ、って解ったの。
心の中でだけ思ってたって、何にも伝わらないんだな、って。
少し忙しくなると思うけど、また一緒に飲みに行こうねっ！」

笑顔で真由子をハグした雪見を、遠くの物陰から覗く、一人の女がいた。

それは、あの噂を流した張本人、健人のドラマスタッフのあの女だった！

突然の刺客

一足先に私服に着替えた雪見は、健人が出てくるのを廊下で待っていた。
この後二人で『秘密の猫かふぇ』へ行き、雪見の事務所入りを当麻と三人で祝う約束をしている。

廊下のベンチに腰掛け、ここ最近の一番の心配事だった記者会見が何事もなく無事に終わり、深い安堵感と心地よい疲労感の中に雪見はいた。

そこに、コツコツとヒールの音を響かせて誰かが歩いてくる。

うつろなまどろみの中にいた雪見がふと顔を上げると、そこにはなんと、あの噂を流した犯人であろうあの女が、雪見の前に立ちはだかっていた。
びっくりして思わず立ち上がると、彼女はわざとらしくにっこりと微笑んだ。

「あれぇ?雪見さんじゃないですか。どうしてここに?」

「あなたこそ、どうしてこんな所にいるの?」

「私ですかぁ?私、『ヴィーナス』のモデルもやってるんですよ!知りませんでしたぁ?
あ、雪見さんは三十代だから『ヴィーナス』なんて読みませんよねぇ。
だってあれって、二十代の雑誌だもん。
私の場合、ドラマスタッフって言っても、プロデューサーの叔父さ

んのコネで入ったから、
別に毎日行かなくてもいいんです。
で、モデルと二つ掛け持ちしてて、今日は近くまで来たんで
ちょっと編集部に顔を出しておこうかなぁーって思って。」

雪見は心臓が、ぎゅんと縮まるのがよくわかった。
頭の中が真っ白になり、何から考えたらよいのか判断できなかった。

「雪見さんは、どうしてここにいるんですかぁ?」

不敵な笑みを浮かべて聞いてくる相手に、雪見は言葉を選んで話した。

「私?私は健人くんの写真集の記者会見があって、今日はここで一緒に
お仕事だったの。でも、もう帰るところ。じゃ、お先に。」

とっさに、この場を早く立ち去った方がいいと思い、歩きながら健人に
緊急事態をメールで知らせる事にした。
が、エレベーターに向かう途中後ろから大声で、
「あれ?ゆき姉!どこ行くの?」と健人の声が。

健人がメイク室から、進藤、牧野、藤原と出てきた所だった。
メールは間に合わなかった。

「あれ?カレンちゃん?久しぶりだね!元気だった?」

健人の後ろにいた牧野の声に健人が振り向くと、そこにはあの女がこっちに目線をやりつつも、牧野と親しげに話をしていた。

「えっ！」

健人が一瞬あげてしまった声と視線に進藤も気付き、牧田と話し込んでいる彼女を指差して聞いてきた。

「健斗くんもカレンちゃんのこと、知ってるの？」

「あ、あぁ。俺のドラマのスタッフさん、だよね？カレンって言うの？名前は知らなかった。」

「そう、霧島可恋ちゃん。『ヴィーナス』のモデルさんだよ。そう言えば前に、ドラマの現場でもバイトしてるって言ってたっけ。」

カレンの事を聞いた健人の顔から、さっきまでの笑顔は消えていた。離れた場所に立ち尽くす雪見と見つめ合い、二人の間に沈黙が流れる。

その表情の変化を進藤は見逃さなかった。

『健人くんと雪見さんの反応がおかしい。一体何があるの？とにかく今は、カレンちゃんと健人くん達を離した方が良さそう。』

そう判断して、進藤は一芝居打つことにした。

「カレンちゃん！そう言えば、前に欲しいって言ってたチーク、やっと手に入ったよ！

あれ、めっちゃ人気があって、私でも手に入れるの苦労したんだか

ら！
早く渡したかったんだ。メイク室に来て！」

進藤の誘いにカレンは、「え？あのチーク、手に入ったんですかぁ！？」
と、一瞬目を輝かせはしたが、二つ返事でついて来る訳では無かった。

進藤の様子と、表情の曇っている健人と雪見を見た牧田は、
これは何かおかしいぞ！とやっと気が付いた。

「あれっ、もうこんな時間？大変、健人くん！
早く行かなきゃ次の仕事に遅れるよ！
今野さんが下で待ってるから、雪見さんも急いで！」

機転を利かせた牧田が、早くここから立ち去るよう二人を促した。

「あ、藤原くんも一緒に今野さんの所に行って、明日の予定を確認してきてね！
ほら、急いで！」

この場の雰囲気が漂わせる非常事態宣言に、藤原も素早く反応し、
牧田の芝居に合わせて、慌てて健人と雪見をエレベーターに押し込む。

下降するエレベーターの中で健人は、やっと口を開いた。

「ありがとう、藤原さん…。どうなるかと思った…。」

「何があったんだい？君たちと霧島可恋との間で。
進藤さんと牧田さんが早く気付いてくれたから良かったけど、
こっちこそどうなるかと思ったよ！」

「ごめんなさい、みんなに迷惑かけて…。
彼女だと思うんです。私と健人くんとの噂を出版社に流したのは。
確かな証拠があるわけでは無いんですけど…。」

雪見の言葉に藤原が驚いていた。

「ええっ！彼女が？そんなことする子には見えなかったけどな…。
それにしたって、どうしてまたそんな事に？」

「私がいけなかったんです。健人くんの専属カメラマンになってすぐに、
ドラマの撮影現場で彼女に、ほんの少し意地悪しちゃったんです。
彼女が私を挑発してきたから、私もそれに乗っちゃって…。
今思うと軽率でした。健人くんにも迷惑かけたし…。」

「俺のことなんか、どうでもいいんだって！
こんなこと、この世界にいて気にしてたらやっていけない。
ただ俺は、ゆき姉が何かに怯えながら暮らしていくのが嫌なんだよ！」

健人が珍しく感情的になって声を荒げた。

「ごめん。大きな声だしちゃって…。
でも、ゆき姉はずっとこの事を心配しながら暮らしてきただろ？
だから、その心配を少しでも減らす為に、吉川さんに写真集の話を持ちかけた。」

「そうだったんだ！そこまでは知らなかった。
なのにあろう事か、その心配の爆弾が、駆け込んだ先にすでに存在してたって訳か…。
そりゃ、びっくりするよな。
きっと進藤さんと牧田さんも驚くよ。まさかそんな事とは…。」

藤原が、どうしたらよいのか思案している。

「とにかく、今日は様子を伺うしかないな。
俺はすぐ戻って、この話を編集長に報告する。
多分、カレンは進藤さん達が引き留めて、あれこれ探りを入れてるはずだから、
あとからメールで知らせるよ。
こっちの事は俺たちに任せて、健人くん達は早くこのビルから離れた方がいい。
じゃ、次の仕事は明後日、カメラマンの阿部が二人を撮しにドラマの現場に行くから。
カレンのこともちゃんと伝えておく。」

そう言って健人と雪見を一階で降ろし、藤原はそのままエレベーターで
上に上がって行った。

エレベーターホールに放り出された二人は
まだ先ほどの現実を受け止め切れなくて、
ただ空間に視線を泳がせ、何かしがみつける物を探していた。

癒しの空間

健人と雪見は無言のまま、タクシーに乗り込んだ。
行き先は、当麻と待ち合わせている『秘密の猫かふぇ』

本当だったら行くのが楽しみで、ウキウキしながらタクシーに
乗り込んでたはずなのに、予想もしなかったカレンの出現で
二人の心は、鉛の塊を抱え込んだかのように、身動きが取れなくな
っていた。

「どうしたらいいんだろう…。」　雪見がうつむいてつぶやく。

「この先、何も無いとは思わない方が良さそうだ。」
健人がそう言いながら、雪見の手をギユッと握り締めた。

『秘密の猫かふぇ』店内は、初めて来た時よりも混んでいた。
ここでは、お互いが秘密を守り合うのが鉄則なので、
例え顔見知りが誰と一緒にいようが、一切無視しなければならない。
なので健人と雪見も、顔を隠さず堂々としていられるはずなのに、
この日に限っては、またどこからか、カレンが現れるのではないか
という妄想に取り憑かれ、うつむいていた。

薄暗い店内を、二人は固く手をつなぎ顔を伏せて歩いている。
今日は、入り口近くにあるバーカウンターが満席であった。
見るつもりは無かったが、大御所俳優と若い女性が
二人でワインを傾けているのが目に入った。

だが、見なかった事にして足早に通り過ぎる。

当麻と、先に着いた方が場所を確保しておく約束だったので、
健人と雪見は店の奥へ奥へと進んで行った。
第一希望の場所は、もちろんあの気持ちいいウォーターベッドのある
パーティースペースである。
ラッキーなことに、そこには誰もいなかった。

「良かった！空いてるよ！」　やっと少しだけ雪見が笑顔になった。

その笑顔を見て健人も、「やった！当麻が来るまで昼寝しよう！」
と、笑って言えた。

その時、白い子猫が一匹、二人が来るのを待っていたかのようにスッと現れた。
雪見が、いい子だねぇと言いながら子猫を抱き上げる。
なんて心が嬉しくなる生き物なんだろう、猫って。
癒されるとは、こういう事を言うのだろう。
この一匹のか弱い子猫が、傷付いた神経や細胞を一つ一つ
ゆっくりと修復してくれるかのようであった。

「白ちゃんも良かったね！ここにもらわれて来て。
みんなに可愛がってもらうんだよ。」
そう言いながら雪見は、白い子猫を手の中からそっと下に降ろした。
その瞬間、自分の心が少し元通りになっていることに気が付く。

『私って今まで、ずっとこうやって猫に心を助けてもらいながら生きてきたんだ、きっと…。

もしかしたら、自分が傷付くのが嫌で猫ばかり撮してるのかも知れない。
人は人を傷付けやすいから…。』

そう自分の一面を理解した時、またしても人を撮す事に対しての微かな恐怖心にも似た感情が湧き出してしまった。

『いけない！今そんなことを思っては、ゴールまで辿り着けなくなる。
とにかく今は、健人くんの写真集にだけ意識を集中させなければ…。』

頭の片隅から出て来ようとした、『猫の写真家に戻りたい』という今思ってはいけない感情を払いのけ、雪見は現実を見ることにした。

「あれぇ？ほんとに健人くん、寝ちゃったの？」

雪見が自分自身と対話していたわずかな時間にすでに健人はすやすやと寝息をたてて夢の中にいた。
そのいつ見ても綺麗な寝顔は、猫と同じくらいの癒し効果があると、雪見は思っている。
『いつまで見てても飽きないのは、猫と一緒だな。』
そう思いつつ、ただじーっとベッドの上で頬杖をつきながら、健人の寝顔だけを見つめて時間が流れた。

「見〜ちゃった！ゆき姉、健人にキスしてただろー！」

突然後ろから声がしてビックリして振り向くと、

そこには両手に袋を下げた当麻が、ニヤニヤしながら立っていた。

「当麻くん！違うって！私なんにもしてないからねっ！
ただ健人くんの寝顔を覗き込んでただけでしょ！」

雪見の慌てた大声に、健人がやっと目覚めた。

「おぅ、当麻！お疲れ！思ったより早かったじゃん。
あれ？俺またいつの間にか寝てた？このベッド、やっぱりいいわ！
お金貯めて買おう！」

「俺も欲しいんだ！今度、どこに売ってんのか聞いてみよう。
あ、ご注文通りにお買い物して来ましたよ！」

そう言いながら当麻は、両手の袋をぐんっと前に突き出した。

テーブルの上があっという間にパーティー会場へと変身した。
紅白のワインにロゼのシャンパン。
三種のチーズ盛合せに、その他美味しそうなデリがいっぱい！
最後に出てきたのは、物陰に隠してあった大きなケーキの箱と
真っ赤な薔薇の花束だった。

「見て！こんなの書いてもらっちゃった！」

当麻が箱を開け、中から大きなデコレーションケーキを取り出した。

『大好きなゆき姉へ　　先輩二人の言うことはよく聞くこと！』
と、チョコレートのプレートには書いてある。

「こんなこと、ケーキ屋さんに書いてもらったのぉ？」

「そう！これは俺と健人からのプレゼント。可愛い後輩にねっ！」

そう言いながら当麻は、雪見に小さくウィンクしながら花束を渡した。

「なんか笑える！どんな顔して当麻くんがこれ書いてもらったのか。でも嬉しいよ！ありがとね、二人とも。そしてこれからもよろしく！」

雪見がちょっと照れながら、二人に頭を下げた。

みんなの顔にパッと笑顔が弾ける。

その空間だけが甘いケーキと薔薇の香りに包まれて、嫌な事など無かったことにしてくれた。

それから三人は、お祝いのシャンパンを開けて乾杯をし、飲んだり食べたりしながらいろんな事を語り合った。

「今日の健人のプライベート旅行発言、うちのマネージャーに散々怒られたよ！

一緒にワンセグで記者会見見てたんだけど、

お前ら勝手に決めんなよー！とか言って騒いでた！」

当麻が口を尖らせて言う。

「俺も今野さんに怒られた！お前の作戦には乗らないぞ！だって。けどこの話って、本当はゆき姉が今野さんに交渉してくれる約束じゃなかったっけ？」

健人と当麻の視線が雪見に注がれた。

「えっ、私？そんな約束したっけ？全然記憶に無いんだけど…。」

「うそだろーっ！あんなに三人で盛り上がった話なのに、忘れたのお？」

「あー、かもしれない！」

「じゃ、今日の記念日は忘れられたら困るから、あんまりゆき姉には飲ませないでおこう！」

そう言いながら当麻が、雪見のグラスを取り上げた。

「うわーっ！この先輩、意地悪なんだぁ！社長に言いつけてやる！」

いつまでもこの空間には、笑い声が響いていた。

日々の心の痛みを、三人はお互いに癒し合っている。

当麻の中ですでに雪見は、なくてはならない存在にまで成長してしまっていた…。

何者？

結構店が込み出したと見えて、健人たちのいるスペースを通り越して
さらに奥へと進む人が多くなってきた。
ここから先は、健人と雪見は行ったことが無かったが、
店の端まで探検したという当麻によれば、まだまだ先にたくさんの
お洒落なスペースが用意されていると言う。

賑やかにお酒を楽しんでいる三人の横を、何人かの人がチラッと横目で見ながら通り過ぎる。
大体の人は、あ、斎藤健人と三ッ橋当麻だ！と思いながら通るだろう。
だが、まったく芸能界に興味の無い人達の目には
三人は、どんな関係に映るのだろうか。
仲の良い姉弟と、その弟の親友ってところが妥当か。
その弟の親友が、徐々に親友の姉に淡い恋心を抱いて…なんて言う
少女漫画に有りがちなストーリーには、なるはずは無かった。

だってゆき姉は健人の姉ではなく、彼女なのだから…。

当麻は目の前の雪見を見ながら、そう自分に確認した。
大事な親友の彼女を、好きになれるはずはない。
だが、すでに心の何割かを占める雪見への感情は、一体なんなのだろう。
会うと嬉しい、楽しい、テンション上がる。
綺麗だと思うし、可愛いと思うし、頭がいいと思う。
話してると勉強になるし、退屈しないし、元気をもらえる。
こういう感情を一般的には、何と呼ぶのだろうか。

当麻は、自分の感情に名称を付けたかったのだが、
いい答えが見つからなかった。

「ねぇ、当麻くんってば！何、人の顔見てボーッとしてんのよ！
今、ぜんぜん人の話、聞いてなかったでしょ？」
雪見の声に、当麻は我に返った。

「ごめんごめん！あんまりゆき姉が可愛いかったから、ボーッとしてた。
で、なんだっけ？」

「ほーんと、当麻くんって口が上手いよねぇ！
今、どこに撮影旅行行こうかって話になってたでしょ！
当麻くんはどこに行きたい？」

「え、俺？俺はこの三人で行けるなら、どこでもいいよ。
健人はどっか行きたいとこ、あんの？」

「俺も、当麻とゆき姉と一緒に行けるなら、どこでもいい。」

「出たぁーっ！優柔不断コンビのどこでもいい発言！
いっつもご飯行く時とかお互い、どこでもいい！って言って、
二人じゃぜんぜん決められないでしょ？」

「なんでわかるの？俺たち、行き先決めるのに一時間はかかる！」
健人の言葉に雪見は呆れていた。

その時突然、健人のケータイにメールが届く。
『ヴィーナス』編集部の藤原からであった。

一瞬、メールを開くのをためらうが、恐る恐る開いて見た。

お疲れ様です。
霧島可恋の件の報告。
編集部に顔を出して、
色々と二人の事を聞いて回ってたそうです。
まぁ、プロジェクトメンバー以外はたいした情報は持ってないから取りあえず今日の所は大丈夫だと思います。
ただ、今後の二人のスケジュールを聞いて行ったらしいので、くれぐれも油断せぬよう。
では、また何か情報が入り次第知らせます。

藤原より

「ゆき姉！こんなのが来たよ、藤原さんから。今日の所は大丈夫そう、だって。よかった！」
健人が胸を撫で下ろす。

メールを読んだ雪見も、多少は安堵の表情を見せはしたが、まだまだどこから攻撃を仕掛けてくるかわからぬ敵に、身震いした。

「ねぇ、なんか今日あったの？」

当麻が、ただならぬ二人の様子に心配そうに聞いてきた。

「え？霧島可恋？俺、知ってる！てゆーか、今一緒に仕事してる！」

予想外の当麻の声に、二人は驚いた。

「えっ！あの子と一緒に仕事してるって、何の仕事？」

雪見が当麻を問い詰める。

「俺も今、『ヴィーナス』で四月からコーナー持たせてもらってて、それを一緒にやってんのがカレンなんだけど…。」

三人の間に重たい沈黙が広がった。

一気に敵が、陣地に踏み込んできたような気がした。

いくら考えても、今は敵が動き出さない限り、こちらも打つ手はない。

ただむやみに時間だけが過ぎるばかりで、今どうする事も出来ないのであれば

何も考えずに心を無にして、次に素早く一歩目が踏み出せるように心の準備を整えておくしかないのではないか…。

「ねぇ！カラオケ行こう、カラオケ！この先のトンネルくぐったとこに

確かカラオケのブースがあったはず。またゆき姉の歌、聞きたい！」

当麻が沈黙を破るように、わざと明るい声で言うのがわかった。

「えーっ！また当麻くん達泣いたら困るもん。

目撃した人に、私がいじめて泣かしたかと思われちゃう！」

「今日は絶対泣かないから！なっ、健人！」

「そうだな。こんな時は、大声出して発散するのが一番かな？
よし！みんなで移動しよう！」

三人は、飲みかけのワインとおつまみを持って、カラオケブースへと大移動した。
雪見は、足元にいた白い子猫をひょいと抱き上げ、一緒に連れて行く。

「おーっ！いいね、ここも！なんか自分んちでカラオケするみたい。」

そこはちょっとだけ健人の家の居間に似ているらしく、当麻も
「こんな色の絨毯、健人んちも敷いてるよね！なんか落ち着く。」
と、このスペースが気に入った様子。

「よーし！じゃあ最初は、健人くんのミスチルからスタートして！」

「よっしゃ！斎藤健人、歌いまーす！」
そう言って、あえて明るい歌をチョイスし、楽しそうに歌った。

「あー、やっぱ歌うって元気が出るわ！次はゆき姉の番だよ！
また『雪の華』が聴きたい。」

「あれは止めといた方がいいんじゃない？
通りがかりの人も聞くわけだし…。今井美樹とか、どう？」

「いや、最初は絶対『雪の華』がいい！
あの歌ね、一曲丸ごと俺の気持ちを歌ってる気がするんだ…。
だから、どうしてもあの曲が聴きたい！」
健人の強い要望に、雪見は答えることにした。

「でも、お願いだから絶対泣かないでね！恥ずかしいから。」
そう言いながら雪見は心を落ち着けて、歌の世界へと入り込んでいった。

通りがかりの人が、一人二人と足を止めて雪見の歌に聞き入る。
一人二人が三人四人になり、歌の一番が終わる頃には大勢の人が立ち尽くしていた。

そのブースの一番後ろに、この店に入って来た時、入り口近くのバーカウンターで
ワインを飲んでいた、大御所俳優と若い女性の姿があった。
二人も雪見の歌にじっと聴き入っている。

雪見が歌い終わった時、期せずして大きな拍手が鳴り響いた。
我に返り周りを見渡した雪見は、驚きと恥ずかしさでいっぱいになり、
健人と当麻と共に、急いでその場を立ち去ろうとした。

が、その時、一人の男が歩みより雪見に声をかけてきた。

あの、テレビでよく見かける大御所俳優であった！

「きみ！ちょっと話をしてもいいかな？」

そそくさと退散しようとしていた三人の背中に、いきなり聞き覚えのある声がして、
びっくりした三人は足が止まった。
ほぼ同時に振り向き、同時に驚きの声を上げる。

「あっ！津山泰三！」

「あ、ごめんなさい！失礼しました！
あまりにもびっくりしてしまって。本当にごめんなさい！」

雪見がペコペコと何度も頭を下げて無礼を詫びた。
健人と当麻は、まだ共演などしたこともなかったが、
偉大なる大先輩を目の前にして、直立不動で緊張しまくっていた。

「何も、君たちを驚かせるために声をかけた訳じゃないよ。
そんなにかしこまられたら、こっちの方が困るじゃないか。
いや、素晴らしい歌に、一言お礼が言いたくなってね。
君はどこの事務所の歌手なんだい？名前を聞かせてくれないか。」

健人と当麻には目もくれず、雪見の目を優しく見つめて聞いてきた。

「あの、ごめんなさい！私、歌手なんかじゃないんです。
ただのフリーカメラマンで…。」　申し訳なさそうに小さく答える。

「歌い手さんじゃないのかい！そんなに上手いのに！
わしゃ、てっきり有名な歌手なのかと思って聴いてたよ！
若い人の歌はさっぱり聴かないから、わしだけ知らないのかと思った。
どうだい？歌手としてデビューしたいなら、わしがどこでも紹介してやるんだが。
こんなとこだけで歌ってるのは、もったいないよ。」

健人と当麻は、びっくりして顔を見合わせる。

その時、後ろから「ダメよ！おじいちゃん！」と声がした。
振り向いた健人と当麻が、二人揃って大声を上げる。

「華浦みずきぃ？」

それは先ほどバーカウンターで、津山とワインを飲んでいた若い女性だったのだが、
薄暗い照明の下で、チラッと横目で見ただけでは誰なのかまったく解らなかった。

華浦みずき、２２歳。
今、女子がもっとも憧れる超人気実力派女優。
アカデミー賞新人女優賞を取ってから、活躍の場を世界にも拡げた今や国際派女優の一人である。
健人と当麻とは、二人がまだ新人だった頃に学園ドラマで共演して以来の、
気が合う数少ない女優でもあった。

「久しぶりだね、健人くんに当麻くん！
あんた達、相変わらず仲良さそうにつるんでるんだね～！元気だった？」

賞を取ってからみずきは、海外と日本を行ったり来たりの生活で、
しばらくぶりに会った三人である。

「びっくりしたよ！こんなとこで会うなんて。
そっちこそ、忙しそうだけど元気じゃん！いつも当麻と密かに応援してるよ。
今は向こうにいる方が長いんだろ？なのにこっちでも超人気なんだから、
凄い役者になったよなぁ、みずきも。」

健人が感心しながら、大女優に成長した友達を眩しげに見つめた。

「けど、さっき健人くん達がお店に入って来たときは、
私だって気がつかなかったでしょ？私はすぐにわかったのに。
ねぇ！この歌の上手い人、健人くんの彼女でしょ？私にも紹介して！」

みずきが雪見に向かってにっこりと微笑んだその時、
津山が横から口を挟んできた。

「おい、みずき！お前こそ、わしにこの若者達を紹介せんか！
孫が世話になったなら、一言礼ぐらい言わんとな。」

健人と当麻は、またしても緊張で身体がこわばり、顔も引きつっていた。

「やだぁ、二人とも！何そんなに緊張しちゃってんの！
おじいちゃん、この二人は斎藤健人くんと三ッ橋当麻くん。
二人とも、今日本で一番人気の若手俳優さんなのよ！」

「どっちが一番で、どっちが二番なんじゃ？まぁ冗談だが。
わしと一緒に仕事をしたことはあったかな？」

「いや、まだまだご一緒できるほどの実力はありません。
早く一人前になれるよう、これからも努力します！」

直立不動のまま健人が答えた。当麻は隣で黙ってうなずくだけである。

「よし！楽しみにしてるぞ、共演できる日をな。
それより君たち！こちらのお嬢さんをわしらにも紹介してくれんか？
まぁ、こんな所で立ち話もなんだから、この先にあるわし専用の場所に行って、
話の続きをしようじゃないか。
みずき。三人を案内してあげなさい。酒の準備もしといてくれ。
わしはオーナー室に顔を出してから行くから。」

雪見が白い子猫を抱いたままなのに気が付き、津山が笑顔で言った。

「お嬢さん、その猫ちゃんも一緒にどうぞ。
なんだったら、連れて帰ってもかまわんのだが。」

え？もしかして、この人がここのオーナー？

健人たち三人は、みずきの後ろをついて次のトンネルをくぐり、
またその先のトンネルもくぐって、やっと津山専用だと言う
超豪華なＶＩＰルームにたどり着いた。

「スッゲー！なにこの部屋！こんなとこがあったなんて知らなかった。
もしかして、みずきのじいちゃんって、この店のオーナーなの？」

雪見も思ってた疑問を、当麻が質問してくれた。

「あははっ！違う違う！でもさっきの言い方ならそう思っちゃうよね。
お店をオープンした時に、いくらかは出資したらしいけど、オーナーは別の人。
おじいちゃんの同期で、昔からの大親友なの。
そう、健人くんと当麻くんみたいな関係かな？
私にとっては第二のおじいちゃん！
小さい頃から、本当の孫みたいに可愛がってもらってた。
私がアカデミー賞を取った時なんて、うちのおじいちゃんよりも先に
お祝いの電話をくれたんだから。

でもね。今は病気で入院中なんだ。
で、私とおじいちゃんに、見舞いはいいから出来るだけこの店にいてやって欲しい、って。
お店の事が心配で猫の事が心配で、お見舞いに行った時もそんなことばかり言ってる。
私はこんな生活だから毎日は来れないけど、日本にいる時はなるべくここにいるようにしてるんだ。
おじいちゃんはほぼ毎日来てるかな。すでに自分ちになってるみた

い。」

そう言ってみずきは、少し悲しげに微笑んだ。
きっと口には出さないが、あまり容体は良くないのかも知れない。
健人と当麻もそう感じたらしく、二人はみずきを慰めた。

「きっと良くなるって！
俺たちだって、この店があるから仕事頑張れるんだよなっ！」

「ほんと、こんな凄い店を作ってくれてありがとう！って、お礼が
言いたいくらい。
大丈夫だよ。そんなにお店の事が気掛かりなら、
どんなことをしても
病気を克服して帰って来るって！」

みずきは、容体が心配なのと二人の思いやりが嬉しいのとで
一気に感情が溢れ出て、ポロポロと大粒の涙を流して泣いていた。

健人と当麻はおろおろとするばかり。
雪見がそっと背中をさすりながら、「きっと大丈夫と信じよう！」
と小さく耳元でささやいた。

そこへ部屋に津山が入ってきて、みずきの涙を見てびっくり！
みんながみずきを泣かしたと思って勘違いして
三人はいきなり津山に怒られたのだった。

三角関係？

「おじいちゃん、違うの！私が勝手に泣いただけ！
みんなは私のこと慰めてくれてたのに、そんなに怒らないでよ！」

みずきが津山の誤解をみんなに詫びた。

「みんな、ごめんね！おじいちゃんの勘違いだから！
何にも悪いことしてないのに怒鳴られるって、ないよね。
でも、おじいちゃんにも悪気は無かったと思うから許してあげてね。
私のこととなると、とにかく熱くなっちゃう人だから…。」

「いやぁー、すまんすまん！どうも年寄りはこれだからいかんなぁ。
まぁ許しておくれ。お詫びにこれをご馳走しよう。」

そう言って差し出したのは、最高級シャンパンのドンペリであった。
五つのグラスに注がれたシャンパンからは、綺麗な気泡が上がり
酒好きな健人たち三人のテンションまでも上げてくれる。

「じゃ、若き三人の役者達と、一人の才能あるお嬢さんの未来に乾杯！」

津山の乾杯の音頭で、思いもしなかった祝宴が始まった。

今日この店に来た時に、こんな展開になるとは誰が想像しただろう。
目の前に、雲の上の人だと思っていた天才役者がいる。
たとえここで見かけたとしても、店のルールに従い
決して自分達から声を掛けるなんてことはしなかった。

ここでは、見て見ぬ振りが鉄則だから。
なのに今、ここで、このメンバーでお酒を酌み交わしていることが
夢の中の出来事なんじゃないかと、健人たちは思っていた。

しかし緊張し過ぎて、せっかくの高級シャンパンの味もわからない。
津山やみずきの話し声さえも、遠くに聞こえる気がした。

「ちょっと、三人！いつまで緊張してれば気が済むの？
せっかく美味しいお酒を飲んでいるのに、それじゃ味がわからなくて
もったいないでしょ！もっと、この出会いを楽しんでよ！」

「みずきぃ！それは無理だって！」　当麻が情けない声を出した。

「どうやら酒が足りないようだな。みずき、三人に注いでやりなさい。」

さっきカラオケに移動するまでは、三人ともいい感じに酔っていた。
だが今は、いくら飲んでも酔える気がしない。
そう思って注がれるままに飲んでいたら、結構酔いが回ってきた。
みずきも津山も、すっかり上機嫌である。

「雪見さん、でしたっけ？
あなたはさっき、歌手ではなくてフリーカメラマンだと言っていたが、
どんな写真を撮ってるんだい？」

「主に野良猫の写真です。日本中を旅して猫の写真を撮ってます！
今は、健人くんの写真集の専属カメラマンなので、

この仕事が終わるまでは、猫を撮す旅はお預けなんですけど…。
でも、いずれは戻るつもりです。
私、このお店に来るようになってから、益々猫が好きになって…。
猫が私に元気をくれて、猫によって生かされてるんだな、って！」

「そのようですな。さっきまでのあなたとは別人のようだ。
猫の話をしている顔が、今までで一番輝いてるよ。」

雪見は照れくさかった。自分でも、それがよくわかったから…。
照れ隠しにいいことを思いついた。

「あ！もし良かったら、これを受け取って頂けますか？
私が撮した猫の写真集なんですけど…。」

そう言って、鞄の中からコタとプリンの写真集の小型サイズ版を二冊取り出し、
みずきと津山に一冊ずつ手渡した。
二人とも大の猫好きとあって、一枚ずつ嬉しそうにページをめくる。
すると最後のページを見たみずきが、「あっ！健人くん！」と驚いた。

「そう！この二匹は健人くんちの飼い猫なんです。可愛いでしょ？」

猫の話ですっかり雪見は、みずきと津山に打ち解けた。

「私、ひとつ大きな夢を持ってるんです！
一生懸命お仕事してお金を貯めて、南の島の小さな無人島を買って、
そこに猫の島を造るのが夢なんです。
保健所に収容されて殺処分を待つだけの猫たちを、
みーんな引き取ってそこに放してやりたい。

で、私はそこで猫のお世話をしながら幸せに暮らす、
島のお母さんになりたいの！」

キラキラと夢見る少女のように話をする雪見を、
みずきと津山は、なんて可愛い人なんだろう、と微笑みながら見ていた。

「いいねぇー、雪見さんの夢！なんだかこの店の始まりと似てない？
ここのオーナーも、雪見さんと同じような夢を持って、この店を開いたんだから！
まぁ、無人島って発想は無かっただろうけどねっ。」

そうみずきが笑って話す。隣で津山もニコニコと話を聞いていた。

「きみは本当に猫が好きなんだね。
それにきみの歌も写真も、とても心を引き付けられるよ。
そして何より魅力的だ！
どうだね、わしの事務所に入らないか？
みずきの後輩として、きみの才能をもっと引き出してみたい！」

突然の津山の誘いに、話を聞いていた当麻と健人も驚いた。

「あの、ダメです！彼女は今朝、うちの事務所と契約して、
俺たちの後輩になったばっかりなんだから！」

当麻が慌てて津山の提案を阻止しようとする。

その慌てっぷりに、みずきは何かを感じ取った。

『この三人って、もしかして三角関係？
でも、雪見さんと健人くんから、そんな空気は漂って来ないけど…。
』

みずきは、この三人の関係に俄然興味が湧いてきて、
お酒の勢いもあり、少し意地悪く探りを入れてみることにした。

「ねぇねぇ！健人くんと雪見さんって、いつから付き合ってるの？
遠い親戚だって言ってたっけ？一回りも年上の彼女ってどんな感じ？」

しらふの時なら不躾で聞けない質問も、お酒に酔ってることにすれば
ストレートに聞くことができる。
そして、健人と雪見のやり取りを見る当麻に、みずきは注目していた。

「一回り年上って、今まで意識したことないなぁー。
そりゃ子供の頃の十二歳年上は、とんでもなくお姉さんだなぁと思ったけど、
お互いが大人になっちゃうと、別にそんなに意識はしない。
ゆき姉はどう？俺のこと、十二歳も年下だって意識してる？」

「うーん、全く意識しないわけじゃないけど、十二歳差とは思ってないかな？
健人くんって、高校生の時にこの世界に入って
やっぱりそれなりに苦労してきてるから、同年代に比べると全然大人！
私の方が教えられることもたくさんあるし、結構頼れる彼氏です！」

「へーっ！俺のこと、そんな風に思っててくれたの？めちゃめちゃ嬉しい！
やっぱりゆき姉、だ～い好きっ！」

そう言いながら酔った健人は、雪見のほっぺたにチュッとキスをした。

「やだぁ、健人くん！みんなの見てる前で！」
はしゃぐ二人のやり取りを、笑顔の消えた当麻が見つめていた。

『ふーん、そういうことね。この三人の関係は…。』
みずきが納得したかのようにうなずいた。

すっかり出来上がった健人の、雪見への愛情表現は可愛らしくてみずきと津山の目には微笑ましく映ったが、
当の当麻には、何もかもが心を傷つける、真っ赤な薔薇の棘でしかなかった…。

当麻の想い

「今日はすっかりご馳走になってしまって、ありがとうございました！
本当に楽しかったです！お会いできて光栄でした。」

雪見が部屋を後にする間際、津山とみずきに礼を言った。

「こちらこそ、楽しかったわ！雪見さんとお友達になれて良かった！
私、明後日にはまたロスに戻らなくちゃならないけど、
今度会う時まで、健人くんと当麻くんをよろしくねっ！」

みずきが雪見の手を両手で握りながら、笑顔で言った。

「任せておいて下さい！みずきさんも身体に気をつけて、頑張ってね！
日本からみんなで応援してます。またここでお会いできるのを楽しみに
私も仕事頑張りますから！」

「今日はいい一日じゃったよ、楽しかった！
若者たちから生きるエネルギーをもらったようだ。
わしもまだまだ頑張らんといかんな。
おい、二人とも！わしが元気なうちに、早く天辺まで登ってこい！
わしら三人で、日本中がアッと驚くような映画でも作ろう！」

津山が、健人と当麻に向かって檄を飛ばした。

「おじいちゃん！その中に私は入れてくれないの？
私、おじいちゃんと日本一の映画で共演したくて、
頑張ってここまで登ってきたんだけど！」

みずきが口をとがらせて、津山に抗議する。

「おぉ、お前がおったな！じゃあ、凄い映画が出来上がるじゃないか！
日本一の女優と日本一の俳優三人の、夢の共演じゃ！
お前たち二人が日本一の役者になるには、もう少しかかりそうだが、
手の届かん夢ではないぞ！これからの努力が肝心じゃ。
わしの年頃になると、一年先の約束は出来ないもんだ。
だから一刻も早く、わしの所まで登ってきておくれ。
お前たちのこれからの活躍に期待してるよ！」

そう言いながら津山は、健人と当麻に握手を求めた。

身に余る光栄な言葉に、健人と当麻は、ほぼ泣き出す寸前である。
必死に奥歯を噛み締め、涙をこらえていたのだが
先に当麻の瞳から涙がこぼれ落ちた。

「えーっ！当麻くん、泣いてんのぉ？嘘！健人くんもぉ？」

みずきの素っ頓狂な声に、雪見が隣の二人の顔を覗くと、
確かに二人とも、大きな瞳からポロポロと涙を落としている。

「もう、泣き虫コンビなんだからぁ！本当によく泣くんですよ、この二人。
いっつも私が泣かしてるみたいで、困っちゃう！
でも津山さんのお言葉が、本当に身に染みて嬉しいんだと思います。

きっとこの先、今までのお言葉を忘れずに努力していくと思いますよ。
どうぞ、二人のことを見守っていて下さいね。」

雪見が、二人の我が子を愛しそうに見つめるような瞳で
健人と当麻を見ていたのを、津山もみずきも知っていた。
この三人の仲がいつまでも続いていくことを、みずき達は祈っている。

『秘密の猫かふぇ』を出た時には、閉店時間の十二時を過ぎていた。
雪見と当麻は、健人に比べるとそんなにも酔ってはいない。
最初に酔った人を見てしまうと、その人の介抱をしなくてはという意識が働き、
後からは酔えない性分の二人であった。

足元のおぼつかない健人を両脇から支え、ゆっくりと夜の街を歩く。
タクシーを拾える通りまでは、ほんのわずかな距離なのだが
身体を預けた健人を支えながらでは、亀のような歩みである。

夜の十二時では、まだ結構な人が歩いている。
途中何人かの人が、健人と当麻に気がつき声を上げる。

「あれぇ?斎藤健人と三ッ橋当麻じゃねーの?」

「あ、ほんとだ!じゃあ、あの女って、さっきツィッターで見た
雪見とかって言うカメラマン?」

「あの三人が三角関係になっちまってるわけ？
そんなにあの女、いい女か？よっぽどお前の方が綺麗だけど。」
若いカップルが笑いながら通り過ぎた。

突然耳に飛び込んできた話に、雪見と当麻の足が止まる。
全身が凍りついたように、冷たくなっていくのがわかった。
そのうち雪見がガタガタと震え出す。

「どうしよう…。どうしよう…。」

うわごとのように雪見はつぶやくだけで、他の言葉が出てこない。
涙が溢れてきた。もう、だめだ…。

「とにかく、早くタクシーに乗ろう！」

当麻が雪見を励まし、なんとか三人でその場を立ち去った。

健人、当麻、雪見の順でタクシーに乗り込み、雪見のマンションを行き先に決める。
一刻も早く、誰の目も届かない所へ避難したかった。
健人は酔い潰れて眠ってしまったようだ。

「どうしよう…。どうしたらいいんだろう…。」

下を向いたまま繰り返す雪見の手を、隣の当麻がギュッと握った。
しばらくは無言のまま、手を握り締めていた。

その温もりが心に染み込んで、またしても雪見の目から涙が溢れる。

「大丈夫だよ、大丈夫！ゆき姉のことは、俺と健人が絶対守るから。
だからもう泣かないで。」

当麻は雪見を安心させるために、わざと笑顔を作って頭を撫でる。
その優しい瞳に、雪見は少し胸がキュンとした。

「いよいよ敵が、戦いを仕掛けてきたな。どうしようか。
まずはマネージャーに連絡して、今野さんにも伝えてもらおう。
それから『ヴィーナス』の吉川さんにも連絡を入れた方がいい。
ゆき姉、ケータイの番号知ってる？」

「うん、この前聞いておいた。また吉川さんに迷惑かけちゃうな…。
」

「そのための吉川さんだろ？ちゃんとその辺は準備してあるさ。
でもこんなに早く、次の攻撃を仕掛けてくるとは思わなかったけど。
」

「ごめん、当麻くん。結局当麻くんまで巻き込んじゃったね…。
全てはあの時、大人の対応をしなかった私が悪いんだ。
あの時、彼女にあんな態度さえとらなければ、当麻くんや健人くんを
こんな目に遇わせなくて済んだのに…。」

そう雪見は自分を責めて、また泣いた。

「ほーんと、なんだかんだ言っても、ゆき姉だって泣き虫じゃない

か！
さっきは、俺たちだけが泣き虫みたいに言ってたけどさ。
ほらほら、もう泣かない！化粧が落ちて、ほぼ素っぴんだよ！」

「えっ？うそぉ！やだ、どんな顔してるの？」

そう言いながら鞄から鏡を取り出し、顔を覗いていた時
ふいに当麻が頬に軽くキスをした。

「えっ！」

驚いて当麻を見たが、彼は雪見をただ見つめるだけで何も言わない。
雪見もそれ以上、何も言えなかった。

二人が見つめ合う隣で、健人はすやすやと寝息を立てている。

デジャヴュ？

雪見は当麻を見つめ、これはデジャヴュなのではないかと思っていた。

以前にも、これと同じようなシチュエーションで頬にキスされた事がある。

あの時も、タクシーの中で泣いた後、鞄の中から鏡を取り出し顔を覗いていたときに、不意に頬にキスされた。

それは彼氏である健人からの、愛あるキス…。

だが雪見は、当麻のキスの意味がわからなかった。

酔った上での、何の意味も持たないキスなのか。

それとも、泣いている私を慰めるため、心優しい友としてのキスなのか。

その真意を知りたいと思った。

「どういう意味？」　雪見はあえて冷めた声で当麻に聞いた。

「えっ？」

当麻は、雪見の冷たい声で我に返り、自分の衝動的な行動を後悔した。

自分でも、自分の行動の意味がよく解らなかった。

お酒に酔った勢いでの事か…。

それとも、確かに愛情という意味を持つキスだったのか…。

後者だと答えた場合、雪見はなんて答えるだろう。

自問自答しながら当麻は、やっと自分の真意を見つけてしまった。

『確かに俺は、ゆき姉を愛してる…。』

だがそれを、雪見からの質問の答えにしてもいいのか?
いいや、ダメに決まってる。
雪見は親友の彼女なのだから…。
健人から雪見を奪うなんて出来やしない。
健人との関係を壊してまで奪おうなんて、思ってもいない。
ただ俺は、あの時泣いていたゆき姉が愛しくなって、単純にキスがしたかっただけ。

今、それ以上の答えを出す時間は無かった。
もう少し他の答えがあるのは解っていたが、そんな時間の余裕は無い。
タクシーを降りる前に、健人が目を覚ます前に決着をつけなければ…。

長い沈黙のあと、当麻がおどけた声で雪見に答えた。

「あー、ごめんごめん!俺、酔って変なことしちゃった?
ショック療法みたいなやつ?
ビックリしてた間は、嫌なこと忘れられたでしょ?」

かなりキビシイ言い訳だったと、言ったそばから少し後悔したが取りあえず、これで愛情の隠れ蓑にはなったかな?とホッとした。
が、相変わらず雪見は、表情ひとつ変えずに当麻を見つめている。
まるで当麻の腹の内を探るかのように…。

「本当にそうなんだね？別に意味なんて無かったんだよね？
……じゃ、安心した。意味がないなら、今のは忘れる！」

忘れる…。そう言われると当麻は、『悲しい』という感情が新たに出現した。
だが今はどうすることも出来ない。
もう、このやり取りを早くに終わらせなければ、雪見のマンションが近づいてくる。
キス以前の自分に戻ろう。雪見を姉のように慕う、健人の親友に…。

「そうそう、忘れちゃって！あ、この辺だっけ？ゆき姉んち。
健人！起きろ！ゆき姉んちに着くぞ！」

「え？ゆき姉んち？なんでゆき姉んちなの？」

まだ酔っている健人には、なぜ三人で雪見の家に向かっているのかまったく意味が解らなかった。
先ほどのツィッターの話も記憶には無いし、
もちろん、タクシーの中で当麻が雪見の頬にキスしたことも…。

「どうぞ！早く入って！また誰かに見つかると厄介だから。」
雪見が玄関の鍵を開け、当麻と健人を中へと促す。

「へぇーっ！なんかお洒落じゃん！ゆき姉んち。」
当麻が健人を支えながら、玄関ホールを見回す。

雪見はナチュラルインテリアが大好きで、アンティーク雑貨を多く

取り入れた
部屋作りを楽しんでいる。
それは玄関先から始まって居間から寝室、トイレに至るまで
トータルでコーディネートされていた。

「健人くん、大丈夫？取りあえず、ここのソファに座って！
今、冷たい飲み物持って来るから。」

雪見がキッチンに入ってる間、健人はソファにごろんと横になり、
当麻は興味深げに部屋のあちこちを見て歩いた。

居間の壁の一角に、いろんな写真を小さなパネルにして飾ってある
コーナーがあった。
その前に立ち止まり、一枚ずつ眺めて見る。
ほとんどが猫の写真なのだが、その中の一枚に目が奪われた。
健人が雪見の肩を抱いて、満面の笑みで映っている写真であった。

それは雪見が健人の実家に泊まりに行った時に近くの河川敷で撮した
初めてのツーショット写真であった。
これを撮した時は、まだ恋人同士になる何時間か前。
シャッターが切れる寸前に、健人が雪見の肩を抱き寄せたので、
健人のイケメンスマイルに対して雪見は、ビックリ顔をしている。
最初雪見は気に入らない写真だったのに、今は大好きな一枚だ。

当麻が身じろぎもせず、ただじっとその写真の前で立ち尽くす。
健人のこんな嬉しそうな顔を、今まで見たことがあっただろうか…。

「その写真、いいだろ？」

突然、後ろから声がしてびっくりして振り向くと、
当麻のすぐ後ろに健人が立っていた。

「それね、ゆき姉と初めて二人で撮した、思い出の写真なんだ。
ゆき姉は、自分が変に写ってるからって嫌がってたけど、
俺にとっては大事な一枚。
この日の帰りにゆき姉が、好きだって言ってくれた一番大事な思い出の写真。
ゆき姉も飾ってくれてたんだね…。」

健人はその写真を、いつまでも愛しそうに眺めている。
その横で当麻も、複雑な思いで同じ写真を見つめていた。

『健人には、どうやっても勝てないのかな、俺…。
ゆき姉が俺を選んでくれるってことは、あり得ないのかな…。』

しばらくの静けさのあと、当麻は自分の思いを吐き出したい衝動に駆られていた。
でも、言っちゃいけない。言ったらすべてが終わる。
でも…。

「あのさ、健人。俺ね…。」
当麻が何かを言い出そうとするのを阻止するかのように、健人が話しかけた。

「当麻、俺ね。ゆき姉が一緒にいないと、生きていけないんだ。
俺にとってゆき姉は、もうそんな存在になっちゃったんだよ…。」

健人の言葉に、当麻は声を失った。
『健人は、俺のゆき姉への気持ちに気付いてる！』
当麻が衝撃を受けている時、二人の元に雪見が飲み物と果物を運んで来た。

「ねぇ！お酒の後にはフルーツがいいんだって！
いろんなの切ってきたから、こっちに座って食べよ！」

雪見の声に、健人と当麻の間の空気がシャッフルされた。
二人の男からの愛情を、雪見はどう受け止めるのだろうか。

三人で真夜中のフルーツを食べていると、一体何故自分たちがここ、雪見の部屋に駆け込んだのか、一瞬解らなくなる。
ただ、飲み会の後に立ち寄った訳ではなく、敵からの攻撃から逃れて
タクシーに飛び乗ったことを、当麻と雪見は思い出していた。

だが健人だけは、未だなぜ自分が当麻と一緒に雪見の部屋にいるのか、
腑に落ちないでいる。
今まで、まだ一度も雪見の家には訪れたことが無かったのに。

「ねぇ！なんでゆき姉んちに来ることになったのさ。
俺の記憶、どっかに落として歩いたみたい。
猫かふぇ出てからの記憶が飛んでるんだけど…。なんかあったの？」

雪見が切って盛り付けたフルーツバスケットの中から、
大好きな桃をフォークに刺し、幸せそうに頬張りながら健人が聞いた。
が、当麻も雪見も表情を固くし、すぐには返事をしなかった。

その瞬間の沈黙を健人が感じないわけはなく、
即座に「何があったんだよ！」と二人を問いただす。

いつまでも隠しておく訳にはいかないだろう…。
当麻が、健人の動揺を予想して、努めて淡々と話し始めた。

「猫かふぇ出て歩いてたら、すれ違った奴らが言ってたんだ。
『あの三人が三角関係だって、さっきツィッターで見た！』って…。
」

「嘘だろ！誰がそんなこと…。」

そう言いながら健人の頭の中には、すぐにあの女の顔がちらついた。

「カレン、か…。」

「何も証拠がないから確かな事は言えないけど、これまでの流れからすると、
霧島可恋ってとこだろう…。次の攻撃って訳だ。」

健人は、当麻の『次の攻撃』と言う言葉に、頭の半分が恐怖を感じつつ、
もう半分の頭は『三角関係って？』という、新たに襲ってきた驚異に
恐れおののいていた。

ここにいる誰もが、『三角関係』について突き詰めていくことを、
心の奥で拒んでいる。
でも、そこをはっきりさせないと、次に進んで行けないこともよくわかっていた。

三人の間に、今までには無かった様々な心の葛藤が生じた。
疑心暗鬼、失望、落胆…。
誤解？ただのデマ？犯人の作戦にまんまと引っ掛かってる？
でも、火のない所に煙は立たず…。

色々な考えが湧いてきて、頭の中がグチャグチャになる。

健人は、これ以上あれこれ考えてもらちが明かないと思い、
面倒な所をショートカットして強引に沈黙を打ち破り、次に進めた。

「ねぇ。で、この事を誰かに伝えた？」

雪見と当麻は、まだ『三角関係』という言葉の上で足踏みしてたので、
健人のこの質問に少し面食らった。

「え？あ、あぁ。さっきうちのマネージャーと吉川さんに連絡した。
今野さんには、うちのマネージャーから連絡してもらってる。」

当麻が答えたあと、すぐにケータイが鳴った。吉川からであった。

「あ、吉川さん？当麻です。済みません、こんな夜中に。
はい、ええ、そうなんです。ええ…事実ではありません。はい、はい。
二人に伝えます。ご面倒をおかけしますがよろしくお願いします！」

『事実ではありません。』と、確かに当麻は言ったと二人は思った。
当麻と吉川の会話の内容を、早く他の二人は知りたかった。

「なに？なんて言ってた？吉川さん。」
待ちきれずに、当麻が電話を切ったあとすぐに、間髪入れず健人が聞く。

「ツィッターで発信される情報は、デマも多く含まれてると
読む方もわかって読んでるから、デマだということで押し通せ、って。」

健人は、聞かずに済むなら聞かないでおこうと思っていた事を、当麻に聞いてみた。

「『事実ではありません。』って、当麻答えてたよね…。
あれって、本当に信じていいんだよね…。」

同じ質問を、雪見にするつもりはない。自分への愛は疑ったことがないから。
雪見のことを信じているから…。

当麻は、自分が答えるべき言葉はこのひとつしかない、と思い
穏やかな笑みを浮かべ、健人の瞳を真っ直ぐに見つめて答えた。

「信じていいよ！俺を信じて。
だって、ゆき姉は健人の彼女だよ？親友の彼女を、俺が好きになると思う？
そんなのあり得ないでしょ！
あ、でも誤解されてるとしたら俺のせいだね、ごめん！」

当麻は精一杯明るく、いつも通りの当麻を見事に演じた。
心の中で溢れそうな涙をこらえて…。

健人も、自分の中にあった当麻への疑惑を、封印することにした。
それで三人の関係が元通りになるのなら…。

健人のマネージャーも、当麻のマネージャーも、見解は吉川と一緒だ。
これを無視することによって、益々敵の攻撃は激しくなることが予想されるが、
一切を無視する方向で意見がまとまったらしい。

明日から本格的に写真集のプロジェクトが動き出すので、
一生懸命仕事をすること！
それだけを伝えて今野は、何一つ健人達を叱ることもせず電話を切った。

ホッとする三人の前に、どこかで寝ていた雪見の飼い猫、
茶トラ猫のめめが、そろりそろりと近寄ってくる。

「うわぁ！めめだよな、お前？初めまして、俺、健人。よろしくなっ！
なんか、うちの虎太郎にそっくりなんだけど！
コタとプリンに会いてぇ～！」

そう言いながら健人と当麻は、代わるがわるめめの頭を撫でてやった。
普段人見知りのめめも、何故かこの二人にだけは
気持ち良さそうに身体を撫でらせる。

「ふーん！やっぱりめめも、ちゃんと一瞬で見分けるんだ。
猫が苦手な友達の前には、絶対に出て来ないもん、この子。
健人くんと当麻くんは合格だって！

あなた達には、今日からこの部屋の出入りが許可されました！」

「うそ？いいの？これからもゆき姉んちに遊びに来ても。」

健人が目を真ん丸にして雪見に聞いた。

「うん、いいよ。コタとプリンには、なかなか会いに行けないけど、ここにならいつでも会いに来れるでしょ？コタもどきのめめに。それと、はい！これ健人くんにあげる！」

そう言いながら雪見がポケットから取り出したのは、一本の鍵であった。

「これ、ここの合鍵！いつでも好きな時に使っていいよ、この部屋。当麻くんも、健人くんと一緒に来てもいいからね。その代わり、めめのトイレだけは汚れてたら掃除してやってねっ！」

雪見からの突然のプレゼントに、健人と当麻は顔を見合わせた。

「ホントにいいの？」

健人が半信半疑で雪見の顔を伺うが、雪見はニコニコとしたままだ。

その時、当麻のケータイが着信を伝える。マネージャーからだ。

「もしもし！お疲れ様です！また何かありました？」

一瞬、三人の間に緊張が走る。

「え？うそ！ほんとですかぁ？やったぁ！ありがとうございます！

今、まだ三人一緒にいるんで、二人に伝えます！はい、わかりました！」

電話を切った当麻が、喜びを爆発させた！

「三人で沖縄に、健人の写真集のロケに行く、だって！」

やはりの犯人

当麻のマネージャーからの電話で、雪見の部屋は真夜中のとんでもないお祭り騒ぎとなった。

一週間後に二泊三日の予定で、沖縄の石垣島へ健人の写真集の撮影に行く、という話だった。
しかも、当麻とのプライベート旅行という設定なので、健人と当麻、プラスカメラマンの雪見の三人旅行が実現するのである。

「ほんとにホント？この三人で旅行に行けるの？うそみてぇ！！やったじゃん！記者会見で言った事が、本当になった！マジ嬉しい！」

健人の喜びようと言ったらなかった。
さっきは雪見からもらった鍵に大喜びし、今度は雪見と当麻との旅行である。嬉しいに決まってた。

もちろん雪見も当麻も、念願叶って喜んでいた。

「マネージャーさん達、会見の後は怒ってたのにね！
健人が勝手な発言した！って。なんでそれが急にＯＫになったの？」

「吉川さんが事務所に掛け合ってくれたらしいよ！
『ヴィーナス』で、俺と健人二人の特集を組みたい、って。
で、そのグラビア撮影を沖縄で、って話みたいだよ。」

当麻がそう言うと、健人は「なーんだ、仕事かよ！」と渋い顔！

「俺はてっきり三人だけで沖縄旅行して、ゆき姉に写真集の写真、撮してもらえって話かと思った！」

「そんなウマイ話はないでしょ！まぁ、完全なプライベート旅行の撮影は幻になったけど、仕事絡みででも三人で沖縄行けるんだから吉川さんに感謝しなくっちゃ！

まぁ、私は二人が仕事中は、のんびり沖縄を楽しませてもらうけど。私の仕事は、二人のプライベートな時間を撮すとこからがスタートだから。」

雪見の言葉を当麻が否定する。

「え？ゆき姉も俺たちと一緒に仕事だよ！

『ヴィーナス』で写真集の連載が始まるんでしょ？

健人を撮すゆき姉の姿を追う！みたいなやつ。

あれの撮影も同時にやるから、『ヴィーナス』からはカメラマンが二人同行するって。」

「えーっ！そうなのぉ？少しのんびりしようと思ったのに！」

「自分だけ遊んでようなんて、考えがあまーい！」

三人の間には、幸せな笑い声がいつまでもこだましていた。

すっかり彼女のことなど、この浮かれ気分の中では忘れ去っている。

攻撃を仕掛けてきた、霧島可恋のことなんか…。

それから五日後、健人のドラマがクランクアップした。
スタジオで撮影スタッフからねぎらいの言葉をかけられ、
出演者一人一人に大きな花束が手渡される。

最後に主演である健人に花束を持って歩いて来たのは、
なんとカレンであった。

彼女は微笑みながら近づき、少し小首を傾げて健人の前に立ち止まると
「お疲れ様でしたぁ！色々大変な事もありましたよねぇ！
私はとっても楽しかったですけど。
これからもどこかでお会い出来る日を、楽しみにしています！」
と、スタッフを代表して挨拶をしてから花束を手渡した。

カレンは、健人の瞳からギリギリまで視線を外さない。
笑顔でありながら瞳は笑ってはいないことが、すぐにわかった。

健人はもちろん、スタジオの片隅で見守る雪見と今野も
カレンの不敵な笑みと意味深な挨拶に、背筋が一瞬ゾクッとする。

健人は努めて平静を装い、主演俳優としての最後の挨拶を
しっかりとこなすことに全神経を集中させた。

三ヶ月お世話になったスタジオを健人が出ようとした時、
後ろから肩をたたかれ振り向くと、なんとカレンが立っている！

「おまえっ！」　思わず健人はカレンをそう呼んでしまった。

「あら、嬉しいわ！私のこと、そんなに親しげに呼んでくれるなんて。
もっと早くに親しくしてたら、こんな目に遭わないで済んだのにね。
あ、そうだ！あさって、当麻くん達と沖縄に撮影に行くんですって？
いいお天気だといいですね。いいなー、沖縄！私も行きたい！
じゃあ、良い旅行を。」

カレンは笑顔で一方的にそれだけ健人に伝えると、堂々とスタジオから
出て行ってしまった。

『これではっきりした。やっぱりすべての犯人はあいつだ！』

カレンからの宣戦布告に健人は、明後日の沖縄行きが急に不安になる。
あんなに楽しみにしてきた三人の旅行が、突然恐怖の対象になった。
漠然と、いや確信的にあいつがまた何か仕掛けてくると身構えた。

スタジオの外では、出て来るのが遅い健人を雪見が心配している。
健人の姿を見つけると、雪見の表情がパッと明るくなった。

「遅かったね！みんなに挨拶は済んだ？
少し急がないと次の取材に遅れちゃうよ！今野さんは車に乗ってる。
」

「わかった。急ごう！」

足早にそこを立ち去り、雪見と二人で車へと向かう。
先ほどのカレンとのやり取りを、雪見に話そうかどうしようか迷い

ながら…。

その日、すべての仕事が終わったのは夜の十一時過ぎだった。
ほとんどが新しい写真集関連の取材だったので、
健人と雪見、二人揃っての仕事であった。

雪見も同じ事務所に入ったので、仕事の送り迎えは今野がしてくれる。
行きは健人を乗せてから雪見を拾い、帰りは雪見が降りてから
健人を送り届ける。

「疲れたでしょ？ゆき姉にとっては初めての事ばっかだもんね。
慣れるまでは大変かもしれない。」

「うん。さすがにこの年になると、体力の低下は隠せないわ。
でも、精神的には全然平気！健人くんが隣りにいてくれるんだもん。
私一人じゃあり得ないけど、健人くんと一緒なら取材も楽しい！」

車の後部座席に二人は身体を沈めながら、今野に見つからないように
そっと手をつなぐ。
健人は、これ以上雪見を心配させたくはなかったので、
スタジオでカレンに言われた言葉は黙っていることにした。

『でも、当麻には伝えておかないと…。
二人でゆき姉を守る約束をしたんだから。』

「今日は帰ったら、沖縄へ行く準備をしないと！
あさって、お天気だといいなぁー。
あ！日焼け止めも忘れないで持っていかなくちゃ！」

雪見の嬉しそうな顔！そんな笑顔を消したくはなかった。

「じゃ、お疲れ様でした！明日もよろしくお願いします！
健人くん、また明日ねっ！」

そう言って雪見が車を降りたあと、健人は今野に伝えた。

「今野さん。悪いけど当麻んちに寄ってもらえますか？
ちょっと話があるんで…。帰りはタクシーを呼びますから。」

今野はUターンをし、当麻のマンションへと向かう。

健人が降りる間際、「ちゃんと話し合えよ！」と、含みを持たせた
言葉で健人を送り出した。

当麻との約束

当麻は今日、9時過ぎには家にいるから、と言っていた。
仕事帰りに寄ってもいいよ、と。
マンションの下から電話を入れる。

「もしもし、当麻？俺だけど。今、下まで来てるんだけど、少しだけ寄ってもいいかな？話があるんだ。」

当麻にオートロックを解錠してもらい、12階までうつむき加減でエレベーターに乗る。

「よぅ！お疲れ！あれ？ゆき姉は一緒じゃなかったの？
まぁいいや。はいんなよ！」

「おじゃましまーす！」

当麻の部屋は、いついかなる時に来ても整理整頓されていて汚い状態なのを見たことがない。
一方健人の部屋はと言うと、親友の当麻を部屋に呼ぶ時でさえ大掃除をしてからでないと入れられない。
掃除に料理、家事一切が得意な当麻に対して健人は、掃除が苦手だし、料理に至ってはリンゴの皮さえむけやしなかった。

「なんでお前んちって、いつ来ても綺麗なの？
忙しいのに掃除してる暇なんてある？
あ、もしかして、誰か掃除してくれる人でも見つかった？」

そう言ったあと健人は、少し意地悪な質問だったかな、と後悔した。

「そんな人、すぐに見つかる訳ないだろーが！もし見つかったらちゃんと真っ先に報告するよ、健人には。で、そんな話をしに来たわけじゃないよな？なんかあったの？」

意地悪な質問をサラッと流してくれたので、取りあえずはホッとする。

「今日、ドラマのクランクアップだったんだけど…。」

「え、そうなの？おめでとう！三ヶ月間お疲れ様でした！で、打ち上げはいつやんの？」

「俺が沖縄から帰ってきてから。そんな事はどうでもいいんだけど…。クランクアップの花束を俺にくれたのが、カレンだった。『色々大変なことも有りましたよね。』って。」

「まぁ、ドラマの主役を張るのは確かに大変なことだから…。でも、そういう意味には捉えなかったんだろ？健人は。」

「まぁね。そのあと、スタジオを出ようとしたら後ろに立ってて、『もっと早くに親しくなってたら、こんな目に遭わなかったのに。』って…。しかも、俺たちが沖縄に行くことも知ってたよ。『私も行きたい！』って言ってた。」

「嘘だろ！それって、完全な犯人宣言だよな！なんか嫌な予感がする。まさか沖縄まで行く気してんじゃないだろ

な。
で、この事はゆき姉には話したの？」
当麻はなんせ雪見の事が心配でならなかった。
そんなことを聞いたら雪見は…。
「ゆき姉には言ってない。余計な心配させたくないから、言わない。」
当麻はホッとした。
「そう。俺も言わない方がいいと思う。
もしかしたら何もなく、平和に旅行が進むかもしれないし、
カレンが何か仕掛けて来るかも知れない。
どっちか解らないのなら、ゆき姉には何も知らずに旅行を楽しんで欲しい。」
「俺もそう思う。ゆき姉、本当に楽しみにしてるんだ。
俺と当麻と三人で行けるって事が…。
だから何かが起こるまでは内緒にしておこう。
当麻。俺と一緒にゆき姉を守ってくれるよね？」
「当たり前じゃん！守るに決まってる！前に話しただろ？
俺にとってゆき姉は姉貴みたいな存在だって。
あ、俺が健人の彼女を姉貴みたいって思うの、健人は迷惑かな…。」
今まで一度も聞いたことがなかった大事な事を、急に聞いてみたくなった。
本当は『姉貴みたいな存在』では、今はもう無いのだけれど…。

「俺、当麻がゆき姉のことをそう思ってくれるの、凄く嬉しいよ。
当麻は初めてゆき姉に会った時から、ちゃんと受け入れてくれたよね。
俺ね、こんな関係がずーっと続いてくれたら毎日が楽しいだろうな、って思うんだ。
いつまでも三人で一緒に、いろんな事を楽しみたい。
ゆき姉も、きっと同じ事を思ってると思うよ！」

「そう。だったら良かった！
俺も思ってる。この関係がいつまでも続くといいな、って。」

二人はお互いの雪見に対する思いを確認し合い、
全力で雪見を敵から守ることを約束した。

「じゃあ、俺帰るわ。悪かったな、遅い時間に。
俺も帰ったら荷作りしなきゃ！当麻も忘れ物するなよ！」

そう言って健人は当麻のマンションを後にした。

タクシーでの帰り道。

「あ、ここで止めて下さい！済みません、降ります。」
降りて見上げたのは、雪見のマンションであった。

無意識にここへ来てしまった。
つい一時間ほど前に別れたばかりなのに、もう顔を見たくて仕方ない。

一目会ってからじゃないと、帰れない気がした。

電話をかけてみる。

「もしもし、ゆき姉？」　健人の顔がパッと花開いた。

「今、少しだけでいいから会えない？いや、ゆき姉んちには寄らない。

近くの公園で待ってるから。肌寒いから温かくして来てね。」

健人は電話を切り、ひとり公園へと歩き出す。

そこの公園は雪見がめめを拾って来た公園で、今も捨て猫が絶えないと、雪見は話してたことがある。

こんな真夜中に遊んでる奴なんて、さすがに一人もいなかった。

程なくして、雪見が息せき切って走ってくるのが遠くに見えた。

「おおーい！ゆきねぇーっ！」　健人が両腕を頭の上で大きく振る。

ハァハァ肩で息をしながら、雪見が健人の元へ走って来た。

その瞬間、健人は「ゆきねぇ！」と言いながら思いきり抱き締める。

「ちょっとぉ、健人くん！どうしたの？なんかあったの？」

こんな真夜中にいきなり呼び出され、突然抱き締められて

雪見は健人の身に何かあったのではないかと、心配になった。

いつまでも離れない健人にドキドキしながらも雪見は、

「ねぇ、何があったのか教えて！」と、健人の事だけを案じていた。

健人は雪見をギュッと抱いたまま、

「なんにもないよ！ただゆき姉に会いたくて仕方なかっただけ。
ずっと会いたかった…。」

「変なの！さっきまで一緒にいたのに。でも嬉しいよ。
私も健人くん、どうしてるかなぁーと思いながら、荷作りしてたから。
私も会いたかったよ。」

今度は、雪見が健人の身体をギュッと強く抱き締めた。
いつまでもいつまでも、まん丸お月様だけが二人を見守る。

その時だった！

どこからか、微かに「にゃぁ」という声が聞こえた気がした。
が、気のせいか。それっきり声は聞こえない。

二人は身体を離し、声が聞こえたであろう方向に目を凝らす。
するともう一度、小さな声で「にゃっ」とだけ鳴いた。

慌てて二人で駆け寄る。すると木の根元に段ボール箱が！

「子猫だっ！！」

新しい家族と一緒

段ボール箱を覗いた二人は、顔を見合わせる。
箱の中には白い子猫が一匹、小さく丸くなって闇夜に紛れていた。

健人は、子猫を驚かせないよう静かに箱の中に手を入れて
その小さくか弱い生き物を、そっと両手で持ち上げ話しかける。

「お前、いつからここにいたんだよ！こんなに冷たくなって…。
ゆき姉、どうしよう！こいつ、体温下がってるから弱ってると思う。」

健人の瞳は何かを雪見に訴えていた。

その日の夜はやけに空気が冷たく、気温が低いことが伺える。
健人も雪見も、家で飼ってる猫はすべて捨て猫なので
経験的にその子猫が、今どういう状況にあるのかは大体判断がついた。

雪見も子猫の頭を撫でながら、
「そうだね、このままじゃまずいな。早く家に連れて行って、
湯たんぽを入れてあげよう。健人くん！箱ごとうちに運んでくれる？」
と、健人を促した。

すると健人は、びっくりしたような嬉しいような顔をして雪見を見た。

「えっ！ゆき姉んちに連れて行ってもいいの？こいつ！」

「当たり前でしょ！このまま箱に戻して知らん顔して帰れると思う？」

「いや…。でもいいの？ゆき姉んち。」健人が心配そうに雪見に聞く。

「大丈夫！最近ね、めめが一匹じゃ寂しいかな？と思ってたとこなの。
次に私が出会った子猫をうちの家族にしよう、って
心のどこかで考えてたんだ。
だから大丈夫。この子はうちで飼ってあげるから。」

「ほんとに？やったぁー！
よかったな、お前！ゆき姉んちの家族になれるって！
俺たちに拾ってもらってラッキーだったな。
じゃあ、早く連れてって温めてあげなきゃ。」

嬉しそうに健人は子猫を箱に戻し、そっと箱のふたを閉めて
両手で大事そうに抱えた。
その瞳は喜びに満ちていて、見ている雪見の心も嬉しくなった。

「さぁ、うちに帰ろう！」

「ただいまぁー、めめ！お友達を連れて来たよー！」
「え？俺のこと、お友達ってめめに言ってんの？」
「なにバカな事言ってんの！この子の事に決まってんでしょ！」
「あー、ビックリしたぁ！彼氏から格下げされたかと思った！」

雪見んちの玄関先が真夜中に、楽しそうな声で賑やかになった。
突然出掛けて行ったご主人様が、何やら同じ匂いのする箱と共に帰ってきたかと思うと、バタバタと歩き回るのを見てめめは、何事かと静かに健人に近寄ってきた。

「よぅ！めめ！ゆき姉がお前に友達を連れて来てくれたぞ！仲良くしてやってくれよな。」

そう言いながら健人は、箱のふたを開けてめめに新入りを紹介する。
めめは一瞬驚いてピョンと体を翻したが、すぐにまた近寄って箱の中の小さな同類を確認し出した。

程なく雪見が、小さな湯たんぽにお湯を入れて持って来る。
薄汚れた箱はそのままに、中にバスタオルを二枚敷いてやりそこにタオルでくるんだ湯たんぽを置いて、子猫を近くに寄せた。

子猫は、母親の体温にも似た温もりに安心したかのようにしばらくすると目を閉じて、眠りについた。

「朝になったら猫缶あげてみるね。多分もう離乳はすんだ頃だと思うから。
ちょっと待っててね、今コーヒー入れて来る。」

雪見が子猫の様子を見て、一安心したようにキッチンに戻る。
健人もやっと一息ついて、ソファーに腰を下ろす。
めめはいつまでも、箱の中の白い小さな友達を見守っていた。

「健人くん。カフェオレだけど良かった？」
雪見が、お揃いのマグカップを二つ持って、ひとつを健人に手渡し
自分も健人の隣りに座った。

「うん、ありがとう！あれ？このカップ、お揃い？」

「そう！健人くんと私用に買って来たの。
あ、当麻くんのも買ってあるよ！色違いのカップ。」

雪見が自分を、この部屋に迎える準備をしてくれていた！
健人は嬉しくて、隣りに座る雪見の肩を抱き寄せた。
雪見は、マグカップを片手に健人の肩に頭を傾け、静かに語りかけ
る。

「ねぇ。この子の名前、なにがいい？健人くんが付けてあげて。」

「えっ、俺が？いいの？俺が名前付けても。」

「もちろん！だってこの子は健人くんが救った命だもん。
健人くんが、今日この時間にあの公園へ行かなかったら
この子の命はどうなってたか解らないもの。どうしてここに来たの
？」

「ゆき姉と別れた後、当麻に用事を思い出して今野さんに、当麻んちへ
送ってもらったんだ。
で、帰って来る途中で、どうしてもゆき姉に会わないと帰れない
気がしてきて、気が付いたらここでタクシーを降りてた。」

「そうだったの…。じゃあやっぱり健人くんがこの子を拾うのは

運命だったんだ。この子が健人くんを呼んでたんだよ、きっと。
ここにいるから迎えに来て！って…。
私ね、そういう運命ってよく感じるの。
あ、今ここに来てこの人に出会ったのは偶然じゃなくて
必然だったんだ！って思う事がよくあるんだ。」

「俺に会った時も？」　健人が雪見の顔を覗き込んで聞いてみる。

「そう！じゃなかったら、ただのはとこでしかなかったよ。
健人くんが私を呼んでいた。俺を救いに来て！って。」

雪見は真剣な顔をしてそう言った。健人の瞳をじっと見つめて…。

「俺もゆき姉に救ってもらいたかった…。」

二人は初めて唇を合わせ、運命の出会いに感謝した。
そして……。

いつの間にか二人はソファーで眠ってしまったらしい。
朝陽を顔に浴び眩しくて目を覚す雪見。時計を見ると六時であった。
そっと健人の腕枕から身体を起こし、顔を洗って身支度を整え
キッチンに入って朝食の準備をする。

健人の今日の仕事は九時からだから、八時に家に戻れば充分間に合う。
すやすやと気持ちよさそうに眠る、健人の綺麗な寝顔を眺めながら
雪見はひとり、この上ない幸せな時間を過ごしていた。

と、その時、子猫の入った段ボールのふたがぽこりと動いたかと思うと
ぴょん！と勢いよく白い子猫が箱の外に飛び出した！
そばにいたためめがビックリして、５０？位は飛び退いた。

「健人くん、起きて！子猫が元気になったよ！猫缶あげなきゃ！」

雪見の声に目を覚した健人は、一瞬ここがどこであるのか理解できずキョロキョロと辺りを見回した。
そして子猫を見つけて昨日の出来事を思い出す。

「うぁあ！お前、凄い元気になったな！良かったぁー！
ゆき姉、こいつ元気になったよ！」

昨夜の事を思い出し、少しお互い照れくさかったが
白い子猫とめめを間にして幸せを噛み締めていた。

「そうだ！この子の名前はラッキーにしよう！
ゆき姉んちの家族になれてラッキーな奴だから。」

夏の終わりの朝陽は、幸せそうな二人の元に優しく届いていた。

沖縄旅行出発の朝

雪見の家に、子猫のラッキーが来てから二日目。
いよいよ今日は、待ちに待った沖縄旅行出発の朝だ！
東京は快晴。沖縄も今日は暑いでしょう、とテレビのお天気ニュースが
伝えていた。

「うーん、いい天気！こりゃ紫外線対策は万全にして行かないと
帰って来てからひどい目に遭いそうだな！」

窓の外の太陽は朝の六時だというのに、すでに容赦なくギラついてる。
東京でこんなんだから、沖縄はどんな事になってるんだろう。暑さを想像し少しビビッていると、めめが伸びをしながら足元に来た。

「めめ、おはよう！ラッキーはまだ寝てるの？
今日から三日間またお留守番だけど、ラッキーといい子にしててね！」

そう言いながらめめの頭を撫でて、餌と水をあげる。
トイレの砂も綺麗にしてラッキーの餌を準備してると、
玄関のインターホンが鳴った。

「え？もう早、真由子が来ちゃったのぉ？早すぎるから！」

バタバタと玄関に向かい「はーい！」とドアを開けると
なんとそこには健人が立っているではないか！

「ええっ！健人くん？どうしたの、こんな朝から！」

雪見はまだ化粧もしていなかったし髪も整えていない、
ほぼ寝起きの状態だったので、突然の健人の訪問に焦りまくった。
恥ずかしくて、このままドアを閉めてしまおうかとさえ思っていた。

「おはよう！ゆき姉。ラッキーは元気？ちょっと上がってもいい？」

いいよ、と言う前にすでに健人は靴を脱いでしまった。
そして一目散に玄関を上がり、ラッキーがまだ眠っている居間の
薄汚れた段ボール箱の前にペタンと座り込んだ。

「ねぇ、こんな朝っぱらからラッキーに会いに来たの？」

「だって、今日から三日間は会えないじゃん！
沖縄行く前にどうしても会いたかったから！迷惑だった？」

健人は、雪見のすっぴん顔やボサボサ頭など眼中に無いらしく、
ただひたすら箱の中の小さな命を見つめていた。
雪見はそんな健人が微笑ましく、本当にこの人も猫が好きなんだなぁ
と、優しい気持ちになって一緒に箱の中を覗く。

「あ！起きた！ラッキー、おはよう！元気だったか？」

そう言いながら、健人は箱の中から白い子猫を取り出し頬ずりした。
猫砂の入ったトイレの中にそっと降ろして排泄を待つ。
すると子猫は、肉球に砂の感触を確かめたかと思うと
誰に教わったでもなく、きちんとおしっこをした。

「えらいえらい！ちゃんとおしっこも出来るじゃん！
じゃあ次はご飯を食べなさい。お水も飲むんだぞ！」

健人は付きっきりで子猫の面倒を見ている。まるでお母さんのように。
雪見はそのすきに化粧をし髪をセットして、何食わぬ顔をしていた。

「健人くん、旅行の準備は出来てるの？七時半には迎えの車が来るんだよ！」
「大丈夫！もう準備は終わってる。もう少ししたら帰るから。
それより、留守中のこいつらの世話は、誰かに頼めたの？」
健人が急に心配そうに聞いてきた。

「真由子に頼んだら二つ返事でＯＫしたよ。
健人くんの拾った猫のお世話をお願い、って言ったら速攻、
有給三日間取ったから！って電話が来た！
七時には来ると思うから、その前に帰らないとまた大変な騒ぎになっちゃうよ！」

笑いながら雪見は健人の方を見る。
健人は、それは大変だ！とばかりに腰を上げ、「じゃ、帰る！」と最後にめめとラッキーの頭を撫でて玄関に向かった。

「じゃあ、またあとでね。あ、そうだ！健人くん、カメラ持ってる？」

雪見が突然思い出したように健人に聞いた。

「え？カメラ？家にあるよ。今やってるカメラのコマーシャル撮りの時

スポンサーさんからもらった最新のデジカメ！それがどうかした？」

「それ、沖縄に持って来て！当麻くんには私のを貸してあげるから。」

「何しようとしてんのさ。」　訝しげに健人が雪見に聞く。

「どうせなら思い出に残るロケにしたいなと思って。
ちょっとした事を計画中だから、帰ったら忘れないで鞄に入れてね、カメラ！」

「えーっ！今教えてくれないのぉ？気になるじゃん、そういうの！」

「いいからいいから。向こうに行ってのお楽しみ！
じゃ、真由子が来ちゃうから早く帰って！またあとでね。」

健人を追い立てるようにして玄関から押し出した雪見は、
急いで出掛ける準備を始める。
猫の餌を三日分出して置き、真由子のためにコーヒーを落とす。
パソコンでメールをチェックし、植物に水をやった。

そうこうしてるとまたインターホンが鳴って、今度こそ真由子がやって来た。

「おはよー！しばらくだね！元気だった？」

いつもの真由子の朝より、遙かにテンションが高い。
しかも約束の時間まで、まだ三十分もあるというのに…。

「ずいぶん早かったね！休む前だから昨日は残業したんでしょ？

もっとゆっくりで良かったのに。」

「健人の猫にお目にかかるのに、ゆっくりなんてしてられないよ！うわぁーっ！これが健人の猫ちゃん？かっわいいー！！なんて名前にしたの？」

「ラッキーだよ。健人くんが付けてくれたの。」

「ラッキー？なんでそんな犬みたいな名前つけたんだろ？あんまりセンスないね、健人って。」

「相変わらず容赦ないね、あんたって。別にいいでしょ！猫にラッキーって付けたって。健人くんが付けてくれたんだから、何だっていいの！」

雪見がプンプンと怒り出したので真由子は可笑しかった。

「はいはい、ラッキーちゃんでいいですよ！ラッキーちゃんで。そんなことはどうでもいいけど、あんた、霧島可恋には充分気をつけなさいよ！」

「えっ！何かわかったの？」　雪見は急にドキドキしてきた。

「パパにも頼まれたから、いろんな方法で彼女の事調べてみたけど、かなり手強そうな女ね。あんな頭悪そうに見えるけど、実はハーバード大学出身だった。編集部にある履歴書やなんかは、すべて改ざんされてる。」

「秀才じゃない！なんでプロフィール隠してんだろ？」

「判っただけでも二人、彼女に潰されたアイドルがいたよ。
みんな似たような手口ね。かなり嫉妬深い性格らしい。
しかも頭いいから、上手く情報を操作してる。
あんた達も細心の注意を払った方がいい。沖縄でも気をつけなよ！」

真由子の話を聞いて、雪見の不安は本格的なものになってきた。
沖縄での三日間、何も起こらないで！と祈るような気持ちだ。

そろそろ迎えの車がやって来る。出発の時から気は抜けない。

だけど絶対にこの写真集の完成までは、何人たりとも邪魔はさせない！

旅の始まり

「そろそろ下に降りてなきゃ！あとの事はお願いねっ！
冷蔵庫の中は全部真由子用に買った食料だから、好きに食べていいよ。
じゃ、なんかあったら連絡して！いってきます！」

「めめ達の事は心配しなくていいから。
お土産は請福の一番高い泡盛でいいよ！あと、ミミガージャーキーね。
三日間、一生懸命仕事して一生懸命楽しんでおいで！
じゃ、行ってらっしゃい！」
真由子に見送られ、雪見はマンションのエレベーターを降りる。
さぁ、ここから二泊三日の沖縄石垣島旅行の始まりだ！
仕事とは言え、健人と行く初めての旅行に胸が高鳴る。
しかも健人の親友当麻も、すっかり仲良くなった『ヴィーナス』編集部
プロジェクトメンバー四人も一緒の旅だ。
今から楽しい三日間が想像できる。ワクワクした。

だが、常に忘れてはならない事があった。霧島可恋の存在を…。

マンションの下で待っていると、程なく今野と健人が乗ったワゴン車が
到着した。運転手は、こっちに残るサブマネージャーの及川だ。

「おはようございまーす！三日間、よろしくお願いします！」
そう言いながら雪見は、カメラの機材やら自分の旅行バッグやらを

急いで車の後部に乗せ、健人の横に座って出発進行！

「ラッキーはどうしてる？」　開口一番、健人が聞いてくる。

「真由子がいるから大丈夫だよ！三日間、家に泊まってくれるから。」

「そう！良かった！助かるよね、そういう友達がいると。真由子さんになんかお土産買って帰ろう。」

「すでにリクエストされてるから。石垣島の高い泡盛！あ、『どんべい』のマスターにも泡盛買って帰ろう！安いやつ。忘れないよう私に言ってね。」

なんだか新婚旅行に出掛けるところのカップルのようだ。朝から二人の世界に浸る健人と雪見に、すかさず今野が釘を刺した。

「お前達。くれぐれも気を付けてくれよな！他人の目を。常に見られてると思って意識しろよ！親戚同士であって、カメラマンと俳優の関係なんだから。まぁ、こないだの記者会見で仲の良さをアピールしといたから多少は多めに見るけど…。」

健人と雪見は、今野が面と向かっては言わないが、二人の仲を認めてくれてると感じ、嬉しくなった。

健人が今野に、三日間の予定を聞く。

「飛行機は、羽田９時５５分発那覇行に乗って、石垣行に乗り換え

到着は１４時３０分予定。
石垣に着いたら真っ直ぐマエサトビーチに行って、
まずは来月号の『ヴィーナス』のグラビア撮影。
特別グラビアで、健人と当麻、それと雪見さんの三人の特集だ！」

「えーっ！うそでしょ？なんで私まで！」
初耳な話に、雪見はもちろん健人も驚いた。

「そうだよ！なんでゆき姉まで！」

「こないだの記者会見の問い合わせが『ヴィーナス』編集部に殺到してるそうだ。
斎藤健人と一緒に出てた浅香雪見って何者だ。
もっと知りたいから、特集をやってくれ！ってね。
で、吉川さんが、当麻との三角関係騒ぎの後すぐにうちの事務所に連絡してきて、これも逆手に取って、三人一緒に特集を組もう！って話になった。写真集の宣伝も兼ねてな。

吉川さんのお陰で、この旅行が実現したんだぞ！
じゃなかったら、健人が会見で勝手に言った当麻とのプライベート旅行
なんて、今のお前達のスケジュールじゃ絶対に無理だったんだから！
あんだけ大々的にテレビで言っといて、もし行けなかったらとか考えなかったの？お前。」

今更な今野の説教に返す言葉もなく、健人は「済みませんでした。以後気を付けます…。」と言うしかなかった。

雪見はまさか、こんな事態になるとは予想もしてなく、
カレンの事も忘れて、ただ自分の仕事に集中しようと思っていた。

なのに、またしても本職以外のやり慣れない事をやらされる。
健人の事務所に所属してしまった以上、事務所の決めたことに
文句を言える立場ではないが、多少の憤りは感じていた。

しかし、すべては健人の写真集のため。事務所も『ヴィーナス』編
集部も、
あらゆる手段で健人と雪見の写真集を売ろうとしてくれている。
そのことに対しては、最大限の感謝を表さなくてはならない。
ならば、雪見に与えられた役目はどんなことでも受け入れて、
持てる力のすべてを出し切って答えるのが礼儀ではなかろうか。

そう思った瞬間、雪見は「よし！やってやろうじゃないの！」
と、背中のスイッチがＯＮになった。

「私、頑張ってやってみます！」

隣で健人が、雪見のいきなりの変りように目が点になってる。
今野は嬉しそうに「健人のために頑張ってくれ！」とだけ言った。

明日は石垣島から船で竹富島へ渡り、丸一日健人の写真集の撮影だ。
当麻とのプライベート旅行でのスナップ、という設定なので
終日二人に島を遊び回ってもらい、素顔の二人に迫る。
いよいよ雪見の本領発揮だ！が、同時にもう一つの仕事も進行され
る。

『ヴィーナス』での連載コーナーの撮影だ。
健人の写真集の完成までを追うコーナーで、健人を撮す雪見を
『ヴィーナス』のカメラマンが撮すと言う二重構造だ。
雪見はこの仕事が憂鬱だった。

果たして自分の仕事に集中出来るのか。邪魔されないのか。
これぱかりはやってみないと判らないので、考えないことにする。

「竹富島はね、私の一番好きな島なんだ。去年も半年間民宿に泊まって
猫を撮して歩いたの。カイジ浜って言う星砂の浜に猫が集ってて、
ほんとにゆったりした気持ちで撮影が出来るんだ。
健人くんも前に竹富島で写真集撮ったことあるでしょ？
カイジ浜は行かなかった？」

「うん、行ったことない。早くそこに行ってみたい！」
健人は猫が集る浜辺と聞いて、目を輝かせた。

「私たちってほんと、猫好きだよねぇ！」

ワイワイ二人でやってるうちに、どうやら羽田に到着したようだ。
今野が現実に引き戻すように、健人と雪見に言った。

「車から一歩降りたら周りには敵が潜んでいると思え！油断するな。」

二人は顔を引き締め、サングラスと帽子を目深にかぶり車から降りる。
荷物を持って、当麻たちが待つ集合場所へと急いだ。

さぁ、いよいよみんなの旅のスタートだ！

新たな敵？

待ち合わせ場所の出発ロビーには、すでにみんな集っていた。

「よぅ、健人！お疲れ！ゆき姉も、三日間よろしく！」

当麻が健人と雪見を出迎えた。
健人が当麻とハイタッチして嬉しそうに笑っている。

「雪見ちゃん、おはよう！今日からよろしくね。
私、沖縄でロケするって編集長に言われて、もう嬉しくって！
すっごいこの日を楽しみにしてたんだ。」

スタイリストの牧田が、ニコニコして雪見に歩み寄る。

「それって、当麻くんが一緒だからじゃないですか？
今回の当麻くんのベストショット、約束通り牧田さんにプレゼントしますから、楽しみにしてて下さいねっ！
みなさんも、三日間よろしくお願いします！」

雪見がその場にいた同行者たちにぺこりと頭を下げた。
が、頭を上げてよく見ると、一人だけ知らない女性が混じっている。

当麻とマネージャー、健人に今野、『ヴィーナス』編集部からはスタイリストの牧田にヘアメイクの進藤、マネジメント担当の藤原、カメラマンの阿部に雪見の、総勢九人のご一行様だと思っていたのだが
一人、二十代半ばの綺麗な女性がその場にいた。

「牧田さん。彼女は…？」

「あ、ごめんごめん！編集長に紹介するように頼まれてたんだった！愛穂ちゃん、ちょっとこっち来て！」

牧田は、進藤と談笑していた彼女を手招きして雪見の前に呼んだ。

「彼女、新しく入ったカメラマンの霧島愛穂さん！今回はあなた達三人のグラビアを担当するのよ！」

「初めまして。今回カメラマンを務めさせていただきます、霧島と申します。いつも妹の可恋がお世話になっております。」

雪見の表情が一秒で凍り付いた。

少し離れた場所にいた健人と当麻も、カレンという言葉に反応してすぐさま雪見の側に走り寄る。

一体、どういうこと…。なぜ、牧田は平然としてるの？

「彼女ね、こんなに若いのに、今までハリウッド映画のスター達の撮影にも携わってきた凄腕カメラマンなの。編集長の大抜擢で、今回のグラビアを担当することになったわけ。で、阿部ちゃんはグラビアを降ろされて、雪見ちゃんの連載コーナー専属になっちゃったんだよねっ！」

牧田がニヤニヤしながら阿部の顔を見る。

すると阿部の反撃が始まった。

「ひっどいねぇー、牧田さん！悪いけど、降ろされたんじゃなくて譲ったの！」

阿部が目を剥いて牧田を睨み付けた。

「いや、編集長にね、霧島をお前のアシスタントに付けるから
一緒に沖縄へ連れてってくれ！って言われてさ。
うちの編集部に来て初めての仕事だし、技量も判らなかったから
まずは前に霧島がやった仕事を調べさせてもらったんだけど、
これが結構凄くてさ。ビックリしたわけ。
で、取りあえずは、グラビア担当するだけの技量は持ち合わせてると
思ったんで、今回はこいつの腕試しで仕事ぶりを拝見しよう！って。
少しやらせてダメそうだったら、すぐに俺とチェンジするから
悪いけど三人とも、こいつに付き合ってやってくれる？すんません
！」

阿部が大きな体を二つに折って、健人たちに懇願するので
三人は顔を見合わせた。

理由は解ったが、カレンの姉を送り込んだ吉川の本意が理解できない。
＜牧田も阿部も、別にどうという顔はしていなかった。
＜健人と当麻のマネージャーも、何事もなかったように平然としている。

一体これから、何が起こると言うのだろう…。
健人たち三人は、もしかしたら周りの誰もが敵の仲間なのでは？
という疑いの目と疑問、恐怖に囲まれてしまった。

ここにいるのは、七人の敵対三人の仲間。
だとしたらこの沖縄の旅は、とても大きな仕掛けの罠だと言える。
すでに罠の中に飛び込んでしまったからには、そう易々と脱出する
事は

出来ないだろう。

ずっと楽しみにしていた三人揃っての旅行のスタート地点は、
一瞬にして足元も見えない、お化け屋敷の入り口へと化してしまった。

定刻通りに羽田を飛び立った那覇行きの便は、まだまだ真夏の太陽を求める人々の楽しげな声で賑やかだった。
しかし、ここに横並びで座ってる三人に、笑顔はひとつも生まれない。
帽子を目深にかぶり、下を向いたまま身じろぎもしなかった。
本当だったら今頃三人で、くだらない冗談でも言って笑い合ってたはずなのに…。

席に着いてどれくらい経っただろう。やっと健人が最初に口を開く。

「ねぇ。どういう事だと思う?」
真ん中に座る健人が、両隣の当麻と雪見に聞いた。

「解らない…。カレンが敵と知ってて、その姉を送り込んだ吉川さんは
一体敵なのか味方なのか…。」

当麻が、後ろに座るマネージャー達に聞こえないように、
最小限の声で二人に話す。
雪見はまだうつむいて、黙りこくったままだった。

霧島愛穂…。彼女は何者なのか。

私と同業者のカメラマン。年はカレンと三つ違いの２６歳だと言った。
妹はハーバード大学を出てすぐに帰国。『ヴィーナス』のモデルをしながら、叔父のコネでテレビ局でもバイト。
姉は日本でカメラマンになった後、すぐにハリウッドへ転居。
少しの下積みだけでメキメキと頭角を現し、日本の若くて可愛い女性が
ハリウッド映画のスター達を撮す！と、かなりの評判だったらしい。
そんな彼女が、なぜ帰国してすぐに『ヴィーナス』のカメラマンに…。

この姉妹には幾つかの共通点があるが、それをすぐさま敵の片割れと決めつけるのは、少し乱暴すぎやしないか。
牧田や進藤たち、健人と当麻のマネージャーも、なぜ平然としているのか。
考えても考えても、今の時点で答えは見い出せない。
ならば、考えるのやーめた！となるのが雪見であった。

「ねぇ、当麻くん！昨日の夜にね、健人くんと私とで白い子猫を拾って来たんだよ！」

突然雪見が笑顔で話し始めたんで、当麻と健人はびっくりして窓際に座る雪見の顔をまじまじと眺めてしまった。

「なんて名前を付けたと思う？
健人くんが、『ゆき姉に拾われてラッキーだからラッキーにしよう！』
だって。どう思う？その名前。」

いきなり雪見に振られて、当麻は慌てて答えた。

「あ、あぁ、そうなの？なんかラッキーって、犬みたいな名前だね。」

「はぁ？犬みたいだって？俺が心を込めて付けた名前に、おめぇは文句たれるわけ？じゃ、どんな名前が良かったか言ってみろよ！」

「しろたん、とかミニーとか…。」

「それじゃ別にラッキーでも大差ないだろーが！」

いつもの二人らしいやり取りに、雪見はいつまでもクスクスと笑いが止まらず、ほんの少しだけ心の霧も晴れ間を見せた気がした。

石垣島の青空

飛行機を乗り継いで降り立った石垣空港の空は、
青い海がそのまま空にも繋がっているかと錯覚するような
素晴らしい青空が広がっていた。

羽田を発って四時間半。午後二時半の沖縄の晴天は、間違いなく暑い！

「最高っ！いいねぇー、沖縄らしくて！」
当麻が眩しそうに空を見上げる。

「そうそう！沖縄の暑さはこうでなくっちゃ！」
健人も当麻に賛同する。

が、若者二人以外の三十代チームは、すでに少々げんなりしてた。

「この暑さのビーチ撮影って、どんなことになっちゃうの？
こまめに水分補給しないと、みんなぶっ倒れるぞ！
どっかで水を多めに仕入れてから行こう！」

カメラマンの阿部は、学生時代アメフトをやってたらしい体格をしてはいるが、四十代手前になった今は、かなり全体的にぽてっとした
大男になってしまってる。
だからなのか、この暑さで尋常ではない汗をかき出した。

「ヤバイわ！早くマイクロバスに乗ろう！」

そう振り向いて健人たちを見ると、すでに当麻と二人で大勢の人に囲まれ、サインをねだられていた。
いくらサングラスをかけてたところで、この二人が一緒にいたらみんな気が付かないはずはない。
二人揃って放つオーラの大きさは、それだけ半端じゃなかった。

「おい、藤原ちゃん！夕方まで時間がないから、そろそろお開きにしてやれ！準備してる間にせっかくの夕日が沈んだら、台無しだ！」

阿部の指示でマネジメント担当の藤原が、ファンの輪の中に割って入る。

「すみませーん！ちょっと時間が無いもんで、これで終わりにしてくださーい！ごめんなさい！」
そう言いながら健人と当麻に、バスを指差す。

「みんな、ごめんね！写真集のロケがあるんだ。クリスマスに出るから
みんなで買ってねっ！お友達にも宣伝しといてよ！」
健人がちゃっかりとコマーシャルした。

すると当麻も負けじと、「俺も出てるから！健人の写真集だけど、当麻ファンも買ってくださーい！じゃ、またねっ！」

二人が大きく手を振りながらバスに乗り込んでも、まだ窓の外からキャーキャーと黄色い声が聞こえる。
やっと出発したバスの車内は、エアコンが効いてることも手伝って一同ホッとした表情を浮かべていた。

「それにしてもこの二人、一緒にいると目立ち過ぎだよね！
なんか、先が思いやられる。」
進藤が、後ろに座る二人に振り向きながら話した。

が、その隣りに座る可恋の姉　愛穂は、何も関心が無さそうに
窓の外の景色をじっと見つめる。
ハリウッドスター達を撮してきた彼女にとって、健人と当麻ぐらいの
騒がれ方など、別に取るに足らない風景なのだろう。

彼女は２６歳という年齢よりも、遙かに落ち着いて見えた。
自分より七つも年下の彼女が、二十歳そこそこで単身米国へ渡り
わずかな期間で第一線のカメラマンになる腕前。
雪見は同じカメラマンとして、彼女への興味がむくむくと湧いてく
る。
その頃にはすっかりと、彼女に対する恐怖心は無くなって
好奇心へと心の中が入れ替わっていた。

「さぁ、着いたよー！マエサトビーチ！急いで準備開始してね。」

石垣空港から車でわずか五分の距離に、日本とは思えないほどの
真っ白な砂浜が広がっていた。
その後方には、石垣島で一番大きなリゾートホテルが建っている。

「ヤッホー！今日はここに泊まれんの？先にチェックインして部屋に
荷物置いてきたら？」
健人が子供のようにはしゃぎ回る。

が、すかさず今野が「残念でした！泊まりはここじゃありません！」
と告知すると、健人と当麻は二人揃ってブーたれた。

「えーっ！なんでさぁ。こんなそばにいいホテルがあるのに！」

「お前達二人が、こんなでっかいホテルに現れてみろ！
満員のお客が大騒ぎして、ホテルをつまみ出されるから。
俺たちの泊まるとこは、吉川さんのご厚意で小さなリゾートホテルを丸ごと借り切ってもらったぞ！ここから車で三十分位かな。」

今野の言葉に、みんなから一斉に歓声が上がった。
「スッゲーや！吉川さん、ありがとー！！」当麻が空に向かって叫ぶ。

「さぁ、気合いを入れて撮影を始めるぞ！」
阿部の一声で、全員それぞれの準備に取りかかった。

健人、当麻そして雪見の三人は、バスの中で撮影用の衣装に着替え順にビーチの前へと集った。
衣装を着ると健人と当麻はスイッチが入るらしく、すでにオーラ全開の
イケメン俳優二人組になっている。
最後の雪見が準備を終えて出て来るのを、談笑しながら待っていた。

バスのドアが開き、雪見が進藤、牧田と共に降りてくる。
その姿に男性陣から一斉に「おおーっ！」と言う声が上がった。

恥ずかしいのと眩しいのとでうつむき加減の雪見は、
真っ白なリゾートドレスを着て、大きなつばの白い帽子を被っている。
大胆に背中の開いたドレスは、首の後ろでリボンが結ばれており

すらっと細くて長い腕は、ドレスの裾を軽くつまんで持ち上げていた。

見とれる健人と当麻に歩み寄って雪見は、
「お願いだから、あんまり見ないで！」と後ろを向く。
が、背中が丸見えだったことに気づき、慌てて前を向き直した。

「凄く綺麗だから自信を持ちなって！
なんか、俺たち二人が地味に見えちゃうのは気のせい？」
当麻が、前で見ている牧田に向かって自分の衣装を指差す。

「違うって！当麻くん達の衣装が悪い訳じゃないよ！
予想以上に雪見ちゃんが凄かっただけ。今まで着せた衣装とは全く正反対だから、ここまで似合うとは想像してなかった！」

ベテランスタイリストの牧田でさえ考えていなかった、雪見の持つ不思議な力。
彼女もまた着替えてメイクをした途端、健人たちと同じく圧倒的なオーラを放ってくるのであった。

それをじっと観察していた愛穂は、なんだか久しぶりに胸が高鳴るのを
感じた。

『ハリウッドで初めて大スターを撮した時のドキドキ感に似てる。
この雪見って人、カメラマンだって言うけど、ほんとにそうなの？
さっきまでは冴えない人だと思ってたけど、着替えたら別人になった。
大層な仕事じゃないなって、適当に片付けようと考えてたけど

なんだか急にカメラマン魂に火がついたよ！』

プロカメラマンの鋭い目になった愛穂は、大きな声で撮影のスタートを告げた。

「じゃ、みなさん、よろしくお願いします！」

女性カメラマン同士の火花

『ヴィーナス』来月号の巻頭グラビアを飾ることになった三人。
雪見は、不思議な気持ちでカメラの前に立っていた。

『なぜカメラマンの私が、こっちに立っているんだろう。
本当は向こう側の人間なのに…。これでいいの?私。』
いつも、何度も繰り返される自問自答。
頭の中では解ってるつもりなのに、その場に立つとやはり迷いが出る。

すべては健人の写真集のため。答えはただ一つしかない。
それは充分解っているのに…。

そんな雪見を見透かすように、愛穂が注意する。
「雪見さん!もっとカメラに集中して下さい!
心がここにありませんけど!そんなもんですか?あなたって。」

雪見はカチンときた!『そんなもんですか?』だって?
年下の同業者に言われたことが、なおさら雪見に火を付けた。

「そう。じゃ、お手並み拝見といこうかしら。
今日はあなたがカメラマン。明日は私がカメラマン。
どっちがファンの心を掴む、健人くんと当麻くんを撮せるかしらね。」

愛穂の言葉を引き金に、女性カメラマン同士のライバル心が露わになった。

「ちょっと、ゆき姉！落ち着きなよ！
なんでこんなとこで張り合ってんの。勝負したとこで何になるのさ
！」

「そうだよ！それよりも夕日の撮影までに、他のショットは
撮り終わらないといけないんだから、三人で頑張ろうよ！」

健人と当麻が、なんとか雪見をなだめようと必死になる。
だが愛穂は、してやったり！と心の中でニヤリとしていた。
思った通り雪見は挑発に乗ってきた！
これは、今イチ撮影に乗り気でない被写体に対して、ハリウッドでも
よく使っていた手である。
まぁ、雪見とのカメラマン対決なんていう、馬鹿臭くてやるだけ無
駄な
ことは適当に流しておくが…。

「霧島も雪見ちゃんも、対決しにわざわざ沖縄まで来た訳じゃ
ないんだからさぁ！みんなで協力していい写真を撮ろうよ。
仕事が終わったら、美味い料理と酒が待ってるよ！
汗して仕事したあとのオリオンビール、旨いだろうなぁー！」
見かねて中に割って入った阿部の言葉に、みんなの喉がゴクリと鳴
った気がした。

「よーし、ここからは真剣勝負な！
霧島！暑いからこまめに休憩入れながらやれよ。
サポートするから、どんどん俺に指示を出せ。遠慮はしなくていい。
」

阿部の声を合図に、やっと撮影が再開される。
それからの健人たち三人とカメラマン愛穂は、それぞれが高いプロ意識のなかで
順調に予定されていたカットを撮り終え、残すは沖縄の綺麗な夕日をバックにした撮影のみとなった。

丁度良いアングルになるまでにはまだ陽が高い。
夕暮れ時に差し掛かったとは言え、この時間でもまだ充分に暑かった。
健人たち三人は一度クールダウンするために、エアコンの効いたマイクロバスの中に逃げ込んだ。

中にはすでに進藤と牧田がスタンバイしていて、汗で崩れた三人の化粧を一人ずつ直していき髪を整え、最後に着る衣装を手渡した。

「この時期の沖縄は台風が心配だったけど、いいお天気で良かったね！
これだけ晴天だと、夕日も綺麗に撮れるだろうなぁー。」

雪見の髪を直しながら、そう進藤が言う。

「たぶんグラビア的には最高の写真になると思うけど、さすがに炎天下の沖縄の日差しはきっついわぁ！
俺、日焼け止めいっぱい塗ったはずなのに、すでに顔がヒリヒリだ！」

「ほんとだ！健人くん、早くにケアしないとまずいわ！
取りあえず応急処置でこれ塗っておいて！あとでメイクし直すから。」

雪見は髪をセットしてもらいながら、真由子にメールした。
『めめとラッキーはどうしてる?。こっちはいい天気で暑いよ。
ところで、大至急調べて欲しい事があるの。』と…。

どうしても吉川が愛穂を、この撮影に参加させた真意を知りたかった。
今のところ愛穂は、何一つカレンの存在を匂わす事はない。
ただ黙々と自分に与えられた仕事をこなすだけだ。
しかもかなりの凄腕カメラマンであることが、同業の雪見にはよくわかった。
彼女は本当に、カレンが送り込んだ刺客なのか…?

もうそろそろ撮影を再開する、とバスの中にいた人達に声がかかり
健人たち三人はバスを降りたが、あまりにも見事な夕日にしばし
立ち止まって見とれていた。

「うっわぁ!すっげーきれいな夕焼け!やべぇ、俺泣けるかも。」

「俺もヤバイ!こういうのって東京じゃ絶対に味わえない感動だよね。
この写真、部屋に飾っておきたい!」
相変わらずの感動屋さん二人組である。

「おーい、始めるぞー!早くスタンバイしてくれ!
ベストショットを撮れる時間は限られてるんだから!」

阿部の大声に慌てて三人は、また海と夕日をバックにして浜辺に立

つ。
背中に感じる夕焼けは、健人たちの心も熱くした。
雪見を真ん中に両側に立つ健人と当麻は、すでに明日へと思いを馳せている。

明日は竹富島に渡って健人の写真集の撮影だ。
午前中は阿部も同行しての『ヴィーナス』連載ページの撮影で、健人たちを撮影中の雪見を撮る企画だ。
だが午後からは、本当のプライベート旅行を撮るために三人だけにしてもらい、島を気ままに移動しながら撮影をすることになっていた。
これは雪見が、健人と当麻のマネージャーに懇願して実現することに。
三人はその時が楽しみでならなかった。

自然と健人たちに笑みがこぼれる。
大宇宙のエネルギーを身体中に浴びて、今日の撮影で一番のいい顔だ。
ファインダーを覗く愛穂にも、この三人の夕日にも負けていない巨大なオーラがよく見えた。と同時に三人の関係が気になり出す。

愛穂は、まったくこの三人の噂など知らなかった。
と言うか帰国して間もないので、健人と当麻がどれほどの人気者であるのかさえ知らない。
以前にカレンから聞いていた『ヴィーナス』という名前を頼りにここの編集部を探しだし、飛び込みでカメラマンを志願したのだった。
そういうバイタリティーは子供の頃からで、誰かの加護を受けてないと
生きてはいけない妹とは、昔から反発し合って育ってきた。

だから吉川も、愛穂がカレンの味方であるとは考えず、逆にこちら側の味方に付ければ、カレンをどうにか封じ込めることが出来るのではないか、との思惑があったらしい。

先ほどあった真由子からの返信メールは、そう伝えている。

雪見は、やっと心からの笑顔でカメラの前に立っていた。

明日の仕事に胸を躍らせて…。

一日目無事終了

夕日が海に潜り、ジュッと音が聞こえそうな瞬間を見届けて
石垣島一日目の撮影がすべて終了した。
スタッフ一同お互いに「お疲れ様！」と労をねぎらう。

健人と当麻、雪見の三人も真っ先に、今日のカメラマンである愛穂に向かって「お疲れ様でした！ありがとうございます！」と頭を下げ、
『ヴィーナス』初仕事の無事完了を祝うように、拍手をした。

仕事中は強気で押し通した愛穂も、撮影が終了すると同時にホッとした
表情を見せ、２６歳らしい一人の女性に戻っていた。
愛穂が三人の元に歩み寄る。

「絶対にいい写真が撮れてる自信があるから、楽しみにしててねっ！
それと雪見さん。撮影中はごめんなさい、生意気な事ばかり言って。
先輩に対して取るべき態度じゃないことは、わかっていました。
でも私、撮影中はああやって自分も追い込まないと、うまく撮れないんです。
米国じゃ、自分に負けた者は去って行くしかないですから…。」

そう言った愛穂が、かすかに作り笑いをしたのが雪見にはわかった。
それは、自分で自分のことを笑ったかのようにも見えた。

雪見は愛穂のそんな表情が、いつまでも心に引っかかる。

「ねぇ、愛穂さん！今日は私もとても勉強させてもらったわ。
たまには撮られてみるのも、良いものねっ！

反対側に立ってみて、初めて気づくこともたくさんあった。
ホテルの部屋一緒だって言ってたから、あとで色んなお話聞かせてね。
あ！愛穂さんはお酒飲める人？」

「え？あぁ、あんまり強くはないですけど、お酒は好きです。」

「そう、良かった！私ね、お酒は人と人とを結ぶものって思ってるの。
じゃあ今晩は愛穂さんと、もっと親しくなれそうねっ！楽しみ！」

雪見が嬉しそうにそう言うと、横から健人と当麻が口を出した。

「愛穂さん！ゆき姉には気をつけた方がいいですよ。
この人、かなーり飲みますから！」

「そうそう！俺たちも今までどんだけ飲まされたことか！
俺なんて、ゆき姉と知り合ってから確実に二日酔い率上がったもん。」

「ちょっと、当麻くん！私がいつ無理矢理飲ませたって言うのよ！
人聞きの悪い。あんた達の修行が足りないだけでしょ！」

そばで愛穂がクスクスと笑ってる。

「本当に三人とも、仲がいいんですね！
ファインダー覗いてても、それは凄くよくわかったけど。
いったい三人って、どういう関係なんですか？」

愛穂に質問され、健人たちは顔を見合わせた。本当のことは話せな

い。

「あぁ、私たち?私と健人くんが、おばあちゃん同士が姉妹のはとこっていう関係で、健人くんと当麻くんは同じ事務所で親友同士。
どういう訳かつい最近、私まで同じ事務所に入っちゃったから二人は私の先輩でもあるの。」

それが公式に発表されてる三人の関係だ。

愛穂とは、どこか似た性格を感じ仲良くできそうな気がしたが、やっぱり本当のことは話せない。
どうしてもあなたは、霧島可恋の姉だから…。

バスに乗り、三十分程で今回の旅の宿に着く。
そこは石垣島随一の景勝地、川平湾を望む全8室オーシャンビューのプチリゾートホテルで、吉川編集長の知人が支配人を務めていた。

その支配人自らが健人たち一行を出迎える。
「ようこそ!お待ちしておりました。吉川さんにはいつもお世話になっております。本日は全館貸し切りとさせていただきましたので、どうぞごゆっくりとおくつろぎ下さいませ!」

全8室のホテルと言うから、随分と小さな所を想像していたが、案内された館内に一歩入って驚いた!ロビーの広くて開放的なこと!広いラウンジの正面は、一面の大きなガラス張りになっており日中はそこが一枚の絵のように、窓の外に青い海と白い砂浜が広がっていると言う。

館内はベージュを基調に、アジアンテイストのインテリアでまとめられ
その空間一つ一つがとてもゆったりとした造りになっていた。

それぞれ部屋の鍵を受け取り、まずは一息つくことに。
進藤、牧田のペアと雪見、愛穂のペアはデラックスツインの部屋で、
その他の男性陣は各一人ずつ、シングルとツインの部屋が
藤原によって割り振られた。

雪見が愛穂と共に部屋に入る。二人同時に歓声を上げた。

「うわぁーっ!こんなに広い部屋、私たちが使っていいの?
すっごいおしゃれなインテリア!アジアのリゾートだね、完璧に!」
雪見のテンションが相当高い。

愛穂もニコニコと嬉しそうだ。
「連れてきてもらって良かったぁー!私、沖縄は初めてなんです。
雪見さんは?」

「私?私は沖縄が日本で一番好きな場所だから、一年に一度は来るよ。
最後に来たのは去年の十月から今年の四月までかな?半年間いた。」

「え?ええーっ!半年間も?何やってたんですか?」

「あ、話してなかったっけ?私、普段は猫だけを撮して歩くカメラマン
なの。だから一年の半分くらいは放浪の旅に出てるかな?」

愛穂のびっくりした顔!そんなカメラマンがさっきの撮影で、あん

なに
凄いオーラを見せたの？今はちっとも何も感じないのに…。

「知りませんでした！雪見さんが動物写真家だなんて。」

「動物写真家じゃないよ！猫カメラマン！」

雪見が、ふかふかなソファーにすとんと腰を下ろしながら笑う。
愛穂は雪見を、初めて出会った人種のように好奇心を持って見た。

「雪見さんの話をいっぱい聞きたい！今日はたくさんお話しましょうねっ！」

「いいわよ！お酒を飲みながらじっくりとね。
じゃ、そろそろ下に降りてレストランに行こうか。食事の時間だよ！
もう、お腹がぺっこぺこ！」

そう言いながら、二人揃って一階にあるレストランへ行くと
みんなはもう席に着いていた。

「遅いよ、ゆき姉！俺、腹減って死にそうなんだから！
喉もカラカラ。早く乾杯しよう！」　健人が雪見を急かす。

「ごめんごめん！皆さんもお待たせしました。」雪見と愛穂が急いで席に着く。

「じゃあ全員揃ったようなので、これから沖縄ロケ一日目の反省会をしたいと思います。なーんて、堅苦しいことは抜きにして、今日は思いっきり食べて飲んで、お互いの親睦をはかりましょう！

吉川編集長からも、先ほどワインの差し入れが届きました。
みんなで感謝して飲もうではありませんか！では、カンパーイ！！」

阿部の音頭で、今夜の楽しい宴がスタートした。
みんなが笑顔の食事会は、お酒もどんどん進んでいく。

ここにいる誰もが幸せな時間を満喫していた。

新たな敵　生まれる

ホテルの中には、健人たち一行の他は従業員しかいない。
それのいかに快適なことか！

健人や当麻は、いつもはロケに行ってホテルで食事をしても、
必ず大勢の人に取り囲まれてしまい、食事を味わうどころか
周りのお客さんから白い目で見られることさえある。
ところが今日はホテル丸ごと貸し切りなので、誰の目を気にすることもなく
食事やおしゃべりを楽しむことができた。
健人たちに配慮してくれた吉川編集長には、心から感謝だ。

そんな旅先の開放感と、身内だけしかいないという安心感も手伝って
みんなの酒のピッチはかなり速い。

「いやぁー、命の洗濯って感じだな！
こういうロケ、これからもちょいちょいやりたいね！」

日焼けのせいなのか酒のせいなのか、すでに顔が真っ赤の今野が
そう言うと、すかさずお調子者の健人が得意顔で言い返した。

「でしょー？今回は俺のお陰だから、今野さん俺に感謝してねー！
だって記者会見で、当麻と旅行行った！って話さなかったら
無かったでしょ、このロケは。」

「バカ野郎！おめぇのお陰でうちの事務所も吉川さんとこも、
みんなが慌てて調整にかかったんだぞぉ！
たまたまこの三日間だけ、奇跡的に当麻とお前のスケジュールが

なんとかなりそうだったから良かったものの、次のドラマが始まる時期
なら完全アウトだよ！っとにもう、みんなに迷惑かけやがって！」

お酒が入ってることもあって、今野の口調はかなりきつかった。
健人も調子に乗って今まで何度同じ事を言って、何度叱られた事か！
まったく懲りない男だ。

「まぁまぁ！今野さん今野さん！今回は俺たちも健人のお陰で
楽しませてもらってるから、許してやりましょうよ。
それよりまた明日からのために、エネルギーを補給しとかないと！
さ、飲んで飲んで！」

今野の隣りに座る大酒飲みの阿部が、今野のワイングラスに
吉川の差し入れワインをなみなみと注いだ。

「ちょっと阿部ちゃん！ダメだよ、阿部ちゃんのペースで飲ませちゃ！
今野さん！阿部ちゃんに合わせてたら、すぐ潰れちゃいますからね。
気をつけて下さいよ！」

進藤が心配そうに今野を気遣う。

叱られた張本人の健人はと言うと、すでにどこ吹く風といった様子で
向かい合わせに座った雪見や愛穂、隣りに座る当麻に猫自慢をしてた。

「昨日の夜拾った子猫、めっちゃ可愛いんだよ、真っ白で小さくて。」

「えーっ！昨日拾ったばかりなのに、家に一匹で留守番させて来ちゃったんですかぁ？可哀想に。」　愛穂が顔をしかめて言う。

「違うよ、ゆき姉んちに吉川さんの娘さんが来てくれて面倒見てくれるんだ。
朝早くに見に行ったけど、元気になってて安心したよ！
この人の髪がボサボサだったのが笑えたけど！」

「なによ！健人くんがあんな朝っぱらから、いきなり来るからでしょ！
しかも、見てなかった振りしてちゃんと見てるしぃ！」
雪見は今朝の自分を思い出し、恥ずかしかった。

健人と雪見の楽しそうなやり取りを、お酒を飲みながら当麻は黙って聞いている。ほんの少し、寂しげな笑顔を浮かべて。

今日一日当麻を観察してきた愛穂には、その寂しげな横顔の理由が何となくわかってしまった。
きっとこの人は、雪見さんに片思いしてるんだ。
雪見さんは気づいてないのかなぁ…。

そんな愛穂は、自分が少しずつ健人に興味を持ち始めてることに薄々気が付いていた。
健人も当麻も、撮影中は女子のハートを鷲づかみするような視線をカメラに向かってガンガン投げかける。
最初のうちは、この二人の人気って、屈託のない笑顔と目力にあるんだ
と思ってファインダーを覗いていたが、段々と健人の視線にドキドキする自分がいた。

そうわかると、黙ってはいられない性分の愛穂だった。
恋は積極的に攻めるのが信条で、言葉に出さなきゃ何事も伝わらない！
が座右の銘である。
お酒の勢いも借りて、いきなりの健人アタックが始まった。

「ねぇ、健人くんって、誰か付き合ってる人いるの？彼女は？
私みたいな年上の女って、どう思う？」

急に健人たち三人の、場の空気が変った。
雪見は結構飲んではいたが、愛穂の言葉に一気に酔いが醒め、
胸がドキドキと鼓動が激しくなった。
健人が何と答えるのか、当麻も雪見も注目する。
一瞬の静けさ…。

健人はあんなに酔っていたはずなのに、今はすっきりした顔をしてる。
そしてテーブルの上にほおづえを付き、少し愛穂の方に身を乗り出して
「いるよ、彼女。」と目を見て伝えた。

雪見のドキドキは、アルコールのせいでかなりスピードを上げている。
健人は、愛穂から視線をそらさずに、その隣りに座る雪見を視界の中に
入れながら話を続ける。

「彼女はいる。年上の人だけど、別に年上が好きだって訳でもない。
上か下かは関係なくて、その人そのものが好きなんだ。」

「そうなの…。で、どんな人？健人くんを射止めたラッキーな人は。」
愛穂が少し苦笑いをする。
健人は、少しも雪見には目を合わせず、微笑みながらはっきりと言った。
「綺麗で可愛くて、料理が抜群に美味くて家庭的で。
泣かせるような感動的な歌が歌えて、生きてる全ての者に優しくて。
なにより俺の事を全力で守ってくれようとする人。
たぶん、その人以上に俺が好きになる人は、もう現れないと思う。」
聞いていて、雪見は胸が熱くなった。
当麻は、胸が痛くなった…。
「そんな完璧な人、いるわけないじゃない！」
愛穂の大声に、進藤と牧田も気が付き耳をそばだてる。
健人はにっこりと笑って愛穂に告げた。
「ぜんぜん完璧なんかじゃないよ！すぐ怒るし泣くしわがままも言う。
そばかすも目尻のシワもいっぱいあるし、運転すると人が変って暴走するし。
人にお酒をガンガン飲ませて潰すのに、自分は平然としてる。
だけどね、ぜーんぶ引っくるめての彼女が好きなんだからしょうがない。」
「私の割り込む隙間はない、ってこと？」

「ないよ…。」

「そう。わかった。」

最後に愛穂の瞳が、キッと健人をにらんだかのように見えたのが当麻には気にかかった。

雪見は隣りにいる愛穂を見ることができず、ただ健人を見つめる。

別の敵がすぐ隣りに生まれてしまったことにも気づかずに…。

最悪な朝

石垣島二日目の朝。
部屋のカーテンを開けると目に飛び込む、窓の外一面に広がる青い海と
それにつながる青空に白い砂。
その沖縄らしい晴天の朝に感動する健人たち一行…のはずだったが、
進藤と牧田、愛穂と当麻のマネージャーの四人を除いては
感動する胸ではなく、ムカムカする胸を抱えている。

前夜、宴の途中で支配人から差し入れられた泡盛を、うまいうまい！と
調子に乗って飲んでた六人が、二日酔いの洗礼を受けていた。
まぁ、泡盛には何の罪もない。
大量のオリオンビールから始まって、吉川差し入れの赤と白のワインを
八本、その後の泡盛一升なのだから当然と言えば当然の結果である。

二日酔いを免れた四人は、何のことはないお酒のあまり飲めない四人だ。
結論として、お酒は程ほどに飲むのが丁度良い！と言う事。

「やばいよ…。これでフェリーに乗るの？どうなると思う？」

まったく朝食など食べる状況にはないが、今日一日のスケジュール確認のため、
とぼとぼと集まったレストランで健人が当麻に聞いた。

「沖縄の綺麗な海を汚すだろうね、きっと…。」

その横で進藤と牧田が、美味しそうにサラダを頬張っていた。

「ちょっと、お二人さん！せっかくの朝食が不味くなるような話、隣でするのやめてくれる？

大体なにその顔？どうやっていつものイケメンに修正すればいいのよ！

雪見ちゃんもまずいよ。目が死んでる！」

ヘアメイクの進藤が、さてどうしたものかと、仕事の手間を増やした三人を交互に見ながら思案している。

が、今日ばかりはこの三人だけを責めるのは可哀想。

一番しっかりしていなくてはならない、マネジメント担当の藤原を始め

カメラマンの阿部、健人のマネージャー今野の三人はさらに重症だ。

今野に代り当麻のマネージャーが、みんなにスケジュールを確認する。

だが冷静に考えても、このあとすぐにフェリーに乗るのは無理に思う。

石垣島から今日の撮影地、竹富島までは高速船で十分ほど。

普段ならあっという間に着く距離だが、今日の十分間の船旅はこの六人にとって、二十四時間地獄旅行並みの辛さであろう。

「どうします？」

当麻のマネージャー豊田が、隣でうなだれる今野に聞く。

「みんなには本当に申し訳ないが、予定を変更してもらえないか？阿部さん、どうだろう。午前中の連載の撮影は、ホテルの前の川平湾で
という訳にはいきませんか？」

今野の提案に、これまた肩で息するほど重症な阿部は、二つ返事でOKした。
「ええ、そうして下さい！ここの前の背景で充分です！で、予定より開始時刻を二時間繰り下げましょう。
今日の天気なら、十時スタートで大丈夫です。
だからそれまで各自体調を整えて、九時半に集合と言うことで…。
午後は健人たちに好きに撮らせて、俺たちはホテルで待機と。」

全員一致で予定が変更された。

爽やかな顔をした進藤と牧田は、そのままティーラウンジに移動して窓の外の絶景を眺めながら、モーニングコーヒーを楽しむ。
当麻のマネージャーは今野から雑事を引き継ぎ、
二日酔い六人組は速攻部屋に戻って、再びベッドへと倒れ込んだ。

愛穂は、と言うと…。
雪見をそっと寝かしてやるために、ひとり海岸線を散歩しに外へ出た。
朝七時の海辺の空気は凛と澄んでいて、身も心も浄化してくれる気がする。

なぜ私は昨夜、健人に敵意を抱いたのだろう。
一目惚れしてすぐに振られるなんてことはよくある事なのに。
朝の潮風に当たっていると、すごく冷静に物事を考えられた。
あんなにも健人が愛す年上の人って、どんな人なのか見てみたい。

雪見がその年上の人だとは、思ってもいなかった。

集合時間の午前九時半。
まだ酒は抜けきりはしないが、二時間ほど眠ったお陰で今朝よりはみんな少しはましになった。

「よーし！ここからは私たちの出番ね！大至急、元のイケメンに戻さなくちゃ！牧田さんも愛穂ちゃんも手伝ってね！」

そう言いながらメイクの進藤が、ホテルから借りてきたホットタオルを
三人の顔に乗せ、次々と手際よくリンパマッサージをしていく。
これでかなり顔のむくみは取れるはず。
あとはなんとかメイクでカバーするしかない。進藤の腕の見せ所だ。

撮影開始予定時間から十分遅れで、どうにか三人を元通りに見えるよう
応急措置が完了。さすが、進藤！お見事であった。

「さーてと、始めますか！じゃあ雪見ちゃん、撮影開始して！
ここからは雪見ちゃんがカメラマンだから、ご自由にどうぞ。
俺のことは気にしないで、ガンガンやってね。
俺は適当なとこから撮影開始するから。じゃ、お願いしまーす！」

阿部の大声が、頭に響く。
雪見は気合いを入れて、自分の仕事に集中した。
健人と当麻もプロ意識を発揮し、平然とした顔をして雪見のカメラの

前に立つ。
が、この撮影はどちらかというと、雪見が主役で健人達は脇役だ。
健人の写真集を撮影中の雪見にスポットを当てるという連載なので、
健人も当麻も、適当に撮られてればいいさと高をくくっていた。
その時である。雪見から二人に檄が飛んだ！
「ちょっと、二人とも！私との真剣勝負から逃げる気？
こっちは命がけで撮ってるんだから、あんた達もそれに答えなさいよ！
そんな顔で写真集に載りたいの？」
離れて見ていたスタッフが、雪見の怒声にビックリした。
一番驚いたのは、叱られた当の本人たちだが…。
なんだか阿部も、自分が怒鳴られたような気がして気を引き締める。
阿部のアシスタントとして付いていた愛穂は、雪見の中に
自分と同じような匂いを感じていた。
『この人もカメラを手にすると人格が変るんだ。
昨日モデルとして私に見せた表情とは、全くの別人みたい。
それに写すスタイルが私とは違う。まるで猫を追いかけてるみたい。』
愛穂は同じ女性カメラマンとして、とても雪見に興味が湧いた。
と同時に、この三人の関係にも何かがあるような気がしている。
愛穂は、あとで妹の可恋に、何か知っていないかメールで聞いてみようと思っていた。

念願の三人旅

午前中の撮影は、阿部のテキパキとしたさすがの仕事ぶりで一時間ほどで終わった。
テキパキというか、さっさと終わらせて早く二日酔いの身体を休ませたかったというか…。
だが、この暑さで大汗をかいたお陰か、二日酔い六人組はみな酒が抜けてきた様子で、段々と調子が戻ってきた。

「ふぅーっ、暑かった！早く中に入って冷たいビールを飲もう！」

今朝は肩で息するほど具合が悪かったのに、大酒飲みの大男　阿部は性懲りもなくそんなことを言いながら、ホテルの中へと入って行った。

健人たち三人以外は、これで今回の仕事はすべて終了だ。
あとは夕食まで自由行動となる。
観光に出掛けてもよし、ショッピングしても昼寝をしてもよしだ。
夜にはまた打ち上げと称して、大宴会が繰り広げられるはずだからそれまでしばしの間、体力の回復を図るのが二日酔い組の使命だろう。

「健人くん達も気をつけて行って来てね。日焼け止めだけはこまめに塗り直してよ！帰ってきて変に焼けてたら明日からが大変だからね。」

ヘアメイクの進藤が、これから竹富島へ撮影に出掛ける健人たち三人に忠告した。

健人は昔から野球をやってきたので日焼けには強いが、色白の当麻はへたに焼くと肌が真っ赤になって大変な事になる。
だから日焼け止めは欠かせないのだ。
雪見だってそれは鉄則である。三十代の肌は、間違っても焼いてはいけない。
回復力が十代二十代の頃に比べると、恐ろしく遅いしあとでシミ、しわという
大きなお土産も付いてくる。
その上雪見の顔には子供の頃からそばかすがあって、一年中必死に防衛している。
が、猫写真家は一年の内ほとんどを外で仕事するので、攻防空しく年々
そばかすは増える一方。雪見の永遠の悩みであった。

健人達は一度部屋に戻りシャワーを浴びて、日焼け止めを塗り直した。
それからカメラとケータイ、財布だけを持って、念願の三人旅にいざ、出発！

ホテルからタクシーで離島桟橋へ。
そこから高速船に乗って十分ほどで、周囲十？にも満たない沖縄の離島竹富島に到着だ。

健人らは、注意深くタクシーを降り高速船に乗り換える。
この時点でファンの子にでも見つかったら、小さな島に人が殺到してプライベート旅行でもなんでも無くなってしまう。
船の中では三人バラバラになり、到着まで息を潜めた。

程なくして竹富島に上陸！

海が穏やかだったので具合も悪くならず、一安心。
さぁ、いよいよ半日間の休暇の始まりだ！

港から集落の中心までは、船の到着に合わせて停まっている
マイクロバスに乗る。まぁ、三分ほどの距離なので歩いても二十分。
時間のある時には歩いたってかまわない。
ちなみに島内には、タクシーもレンタカーも無いので悪しからず。

バスを降りてすぐの所に、雪見が定宿にしている民宿があった。

「ここ、ここ！いつもこの島に来たらここを拠点にして仕事するの。
おじさん、いるかなぁ。あ、おじさんは健人くん達のこと、絶対に
知らないと思うから安心して！
夜は三線弾きながら泡盛飲んでばっかで、テレビ見てる姿は今まで
見たことないもん。」

「へーっ！やっぱ、そういう人もいるんだ！ゆき姉みたいだね。」
と、健人が笑いながら雪見を見る。

「なんで私みたいなのよ！私そんなに毎晩は酔っぱらってません！」

「違うよ。ゆき姉もテレビあんまり見ないから、俺のこと知らなかった
じゃん！この島にいたせいなんだ！」

「また昔の話を蒸し返す！あの時は大変失礼致しましたっ！」

入り口付近でごちゃごちゃと騒いでた声を聞きつけて、中から色黒の
おじさんが顔を出した。
「あれぇ？雪見ちゃんでないさぁ！どうしたの、突然！また撮影？」

おじさんがビックリした顔で三人を見た。

「おじさん、元気だったぁ？撮影は撮影なんだけど、今回は猫じゃないんだ。モデルさんを撮しに来たの。」

いきなりモデルと紹介された二人は、取りあえずそれらしく挨拶する。

「こんちはー！」「どうもでーす！」

「いらっしゃい！ようこそ、竹富島へ。また二人とも色男だなぁ！雪見ちゃんが男連れで来る日が来たなんて、感無量ださぁ！」

ひょうきんなおじさんが泣きまねをした。

「だから、仕事だって！そんなことはどうでもいいや。おじさんに頼みがあるの。カイジ浜まで乗せてってもらえないかな？」

「おぉ、いいさぁ。どうせ客なんて来ないし。」

この民宿の一階部分はレンタサイクル屋になっていた。タクシーもレンタカーもない島では、自転車が旅行客の足代わりだ。だが、雪見はいつもこのおじさんに撮影地まで、車で送り迎えしてもらっている。

「ゆきねぇ！せっかくなんだから自転車借りて行こうよ！その方があっちこっち回れるし。なっ、当麻！」

「そうだよ。もったいないよ、いいお天気なんだから。おじさん、自転車三台貸して下さい！」

そう言われて、なぜかおじさんは困り顔で雪見を見た。
「どうする？雪見ちゃん。」
「どうするもなにも、無理！絶対無理！」
健人と当麻は、雪見が何を言ってるのか理解できなかった。
「無理、ってなにが？」　健人の問いに雪見が小声で答える。
「自転車…。」
「はぁぁ？」
雪見がヤケクソ気味に大声で叫ぶ。
「ダメなの！自転車が乗れないのっ！！」
「うそだろーっ！！」　健人と当麻が同時に叫んだ！目を見開いて。
「嘘だよね？冗談でしょ？そんな人、いる？」
当麻の半信半疑な言葉に雪見が、「ここにいるっ！」と自分を指差す。
「ゆき姉、昔俺に自転車の鬼特訓したよね？俺が半べそかいても乗れる
まで許してくれなくて。
あれって、自分が乗れないのにあんな鬼みたいな事してたわけ？」
健人が雪見を白い目で見る。
「でも、そのお陰で健人くんは今、自転車に乗れるでしょ？
もしあの特訓が無かったら、今頃自転車乗れなくて笑われるアイドルに
なってたかもよ！」

雪見の屁理屈に、「んなわけ、ないだろっ！」と健人が突っこんだ。

「いいよ、俺が後ろに乗せてやるから。おじさん、二人乗りＯＫ？」

「ＯＫ！気をつけて乗りなさい。クーラーバッグに冷たい飲み物持って
いかんと。今、準備するから。」

二台の自転車は青い空の下、青い海を目指して勢いよく出発した。

「おもーい！ゆきねぇ！」

「うるさい！当麻くんに置いてかれるよ！がんばれ～！」

健人の背中がいつもよりたくましく見えた雪見だった。

竹富島の青空

竹富島はすべての日常を忘れさせるほどの、緩やかな時間と空気が流れる島だ。
サンゴの砂を敷いた白い道と石垣。家々の庭に咲き誇るハイビスカスや
ブーゲンビリア。
赤い瓦屋根の上ではユーモラスなシーサーが、全員こっちを向いて健人たち三人を「ようこそ！」と出迎えた。

「ゆきねぇ！どこまで行けばいいのさぁ！」
前を自転車で走る当麻が、後ろを振り返りながら叫ぶ。

「もっと真っ直ぐ！危ないから前を向いて走りなよ！曲がるとこに来たら、ちゃんと教えるからぁ！」
ママチャリに二人乗りした健人の後ろから、雪見が大声で当麻に伝えた。

「地図見なくてもわかるの？」　健人が後ろの雪見に聞く。

「わかるよ！だって迷いようが無いくらい小さな島だもん。それに今まで全部合わせたら、ここに何ヶ月いたことか…。ここに住みたいくらいに大好きな島なの。」

「俺も前に写真集の撮影で一度だけ来たことあるけど、あの時はこんな風に、自転車なんて乗る暇も無かったなぁ。けど、青くて綺麗な海はよく覚えてる。今度来る時はプライベートで彼女とでも来たいなぁー！って思ったのを思い出したよ。」

健人がチラッと後ろを見ながら、そう言う。

「じゃあ、願いが叶った？」

雪見の問いかけに健人は「もちろん！」と、元気よく答えた。

「ゆきねぇ！海だよ、海！」

かなり前を走る当麻が、遠くから叫ぶ声がする。

「あれぇ…？」　やっと追いついた雪見たち。

しかしそこは、目指していた浜辺ではなかった。

「カイジ浜じゃなくて、コンドイビーチに出ちゃった！」

「ゆき姉、地図見なくてもわかるって言ってなかったっけ？」

自転車から降りた雪見に向かって健人が、ニヤニヤしながら聞く。

「おっかしいなぁ。健人くんとおしゃべりしてるうちに、曲がり角間違えたんだ、きっと！」

「俺のせいかよっ！けど、ここって俺が前に写真集撮ったとこだ！もう一度来たかったんだ！いいじゃん、ここでも。ここにしよ！」

健人と当麻はすでに自転車を置き、海に向かって走り出していた。

コンドイビーチは島の西側にある遠浅のビーチだ。

まるで絵はがきのように綺麗な、イメージ通りの沖縄の海が広がる。

だが有名なビーチゆえ、シーズン中は結構な人で賑わう。

雪見は人目を避けて撮影したかったので、あえて今回はここを省く

つもりだった。

「仕方ない。人の居なさそうなビーチの端っこで撮影するか。ちょっとぉ～！二人ともぉ～！あっちに行って、あっちに！」

雪見が大声で遠くを指差すと、二人は競うようにして白い砂の上を駆けて行った。

しばらく歩いてやっと雪見が追いつく。

健人と当麻はすでにパンツの裾をめくり上げ、裸足で海に立っている。

「おっそーい！何やってたの？早く撮影始めないと。」

当麻が雪見を急かした。雪見はハァハァと肩で息をしながら汗を拭う。

「ちょっと一休みさせて！カメラバッグって重いんだから！あー、なんか飲み物飲もうっと！」

さっき民宿のおじさんが持たせてくれたクーラーバッグの中には、冷たく冷えたジュースやお茶、カチカチに凍らせた保冷剤にタオル、大きなブルーシートまでが折り畳んで入れてあった。

雪見はそのシートを砂浜手前の木陰に敷き、腰を降ろして冷えたコーラを一気に飲む。

「はぁ～っ。生き返ったぁ…。なんか半分、脱水状態だったよ。」

雪見は独り言を言いながら、シートの上にごろんと横になった。

視界に広がるのは、ただただ青い空。

サングラス無しでは目を開けていられないほどの眩しい太陽が、

木陰の隙をぬってはちりちりと肌を刺す。

しばし目を閉じた後、雪見はガバッ！と起きあがった。

「よっしゃ！一丁始めますかっ！！」

健人と当麻のプライベートショットを狙うので、二人には近づかずに望遠レンズを付けて、離れた木陰からファインダーを覗く。

こうすれば遠目にも、撮影をしてるとはすぐに気づかれないだろう。

健人と当麻も、カメラの方を向く気はない。

だって今は、二人のプライベート休暇の真っ最中なのだから。

こっそりと撮影している自分に気が付き、雪見は可笑しくてクスクスと

笑いながらシャッターを切った。

これって、いつもの猫の撮影と同じだよねっ！

「あー、暑かったぁ！なんか飲み物！」

健人と当麻が汗を流しながら木陰に逃げ込む。

「はい、どうぞ！」

雪見が、シートに腰を降ろした二人に飲み物とタオルを手渡した。

「うっめーっっ！生き返るぅ！」

そう言いながら健人はタオルで汗を拭い、バタンと大の字に寝ころんだ。

「いいねぇ、こういうの。なんか、すべてがリセットされる感じ。」

当麻も隣りに寝ころんで目を閉じる。

静かにざわめく波の音と、頬を撫でる心地よい風。

昨夜の飲み疲れも手伝って、いつしか二人はすやすやと眠りに入っ

た。

「まぁいいか。プライベートな旅なんだから…。」
雪見は、二つ並んだ美しい顔を交互に眺めながら、自分も最高の贅沢を
味わっているなぁと、青い海に目を移した。

カシャッ！カシャッ！
シャッターの切れる音で健人が目を覚す。すぐに当麻も起きあがった。

「あー、スッキリした！めちゃ気持ち良かった！」
うーん！と伸びをしながら健人が言う。当麻も晴れやかな顔をしてた。

「いい写真撮れてる？」当麻の問いに雪見はファインダーを覗いたまま
「撮れてる撮れてる！この写真、健人くんの写真集だけに使うの、もったいないなぁ！いっそのこと、当麻くんも写真集出しちゃえば？」
と、当麻をけしかける。

すると健人が、「ダメーっ！当麻は愛穂さんに撮ってもらえば？密かに愛穂さん、好みのタイプでしょ？年上だし、綺麗だし。どことなーく、前の彼女に似てるよね？」と、当麻を覗き込んだ。

「まぁ、似てるっちゃ似てる気もするけど、あんまりピンと来なかったなぁ。
それに彼女はどう見ても、健人に惚れちゃった気がするけど…。

あ！ごめん、ゆき姉！別にどうって事じゃないから。
健人とゆき姉の間に割って入れる奴なんて、この世にいないだろ？」

当麻は余計な事を言ってしまった自分を後悔した。
一瞬で曇った雪見の横顔を見ながら、健人にも「ごめん！」と詫びる。

少し置いて雪見が、自分の心を励ますように海に向かって大声で叫ぶ。

「頑張れ、ゆきみぃ～！！
よしっ！次行こ次！今度こそカイジ浜！荷物まとめてねっ。」

三人はまた二台の自転車にまたがって本来の目的地を目指し、
来た道を少し戻って右に曲がり、猫の集うカイジ浜に向かって走り出した。

沖縄のギラギラした太陽は、どこまでも三人の背中を追いかけて来た。

思い出作り

三人の目指すカイジ浜は、コンドイビーチの南側にある星砂の浜だ。
砂に手を押しつけてよく見ると、手のひらにたくさんの星砂や太陽砂が
くっついてくる。
土産物屋では小瓶に入れられ売っていた。

「ねぇねぇ、健人くん！帰りにお土産屋さんに寄ってくの忘れないでよ！
真由子とマスターの泡盛は、重たいから空港で買うとして、
つぐみちゃんと健人くんのお母さんに、うちの母さん。
あ！吉川さんは忘れたら大変！こんな素敵な旅を私たちみんなにプレゼントしてくれたんだから。うーん、何がいいかなぁ。」

雪見は健人の背中にしがみつきながら、何にしようか考えてる。
すると健人は、「初めての旅の思い出に、俺たちもなんか記念に残る物
買おうよ！」と、雪見に提案した。
「賛成！なんか素敵な物、健人先輩に買ってもらっちゃお！」
「なに都合いい時ばっか、後輩の振りしてんの！」

デコボコ道をしばらく走ってカイジ浜に到着。
ここの海中は、変化に富んだ遠浅の岩場なので、シュノーケリングが初心者でも楽しめる。
当麻が、やっぱり海パンとゴーグルを持って来れば良かった！と悔しがった。

「うーん、お宝ショットが撮れたかもしれないのにね。
そうだ。ねぇ！上脱いで、上！せっかく海のショットなんだから、
上半身裸くらい撮っておかないと！
それぐらいファンサービスしたってバチは当たらないでしょ？早く、
早く！」

雪見に急かされ健人と当麻は、よっしゃ！とTシャツを脱ぎ捨てる。
二人とも、よく引き締まった筋肉質の身体で、忙しい合間を縫ってのトレーニングを欠かさない事がうかがえた。

幸い健人たちに気づく観光客もなく、遠くの浜辺にも、しゃがみこんで
星砂を真剣に探す親子と、二組のカップルらしき人しか見当たらない。
雪見がお目当ての猫は、まだ暑い時間帯だからなのか一匹もいなかった。

「きっと、もう少し涼しくなったら猫が集まって来ると思う。
だから今の内に撮影しちゃおう！
また適当なとこで撮し始めるから、私は無視して二人で戯れて！」

「ＯＫ！当麻、岩場で蟹取りしよう！俺、結構得意なんだ！」

健人と当麻はパンツの裾を思いきりたくし上げ、岩場に隠れる蟹を真剣に探し始めた。
午後二時半の太陽は、今日一番の頑張りようで照りつける。
健人たちはすっかり蟹探しに夢中で、自分たちの背中がいったいどんなことになってきたのか、まったく気にする素振りはなかった。
が、ファインダーを覗いていた雪見がその変化に気が付いた。

「ちょっと！大変なことになってきたよ、あんた達の背中！まずいって！一旦日陰に入って！」
慌てて海から上がったものの時すでに遅し！で、二人の背中、特に当麻の背中はかなり困った事態に陥っていた。

「あーあ、やっちゃった！やっぱ上半身全部に塗らなきゃダメだった！
顔と肩までしか塗らなかったもんね、日焼け止め。
取りあえずは大至急冷やさなくちゃ！」
そう言いながら雪見は、クーラーバッグの中から半解凍になった保冷剤を取り出して、
二人の背中に押し当てた。

「冷てっ！けど気持ちいいや。ねぇ、どうする？このあと。撮影がいいとこ済んだんなら、俺、何か食いに行きたい！腹減った。」
健人が背中越しに雪見に訴える。

「そうだね！私もお腹空いてきた。やっと二日酔いから解放されたって
感じ。じゃあ、ここからすぐの所に美味しいカレーが食べられる喫茶店
があるから、そこに行こうか。フルーツジュースも美味しいよ！」

「行く行く！そこでしばらく休憩して、涼しくなったら戻ってこよう。
俺、どうしても猫が見たいから。ラッキー、元気にしてるかなぁ。」
当麻も異議無し！だったので、また自転車に乗って移動することに。
しかし、日焼けした背中がTシャツに擦れて、自転車の運転も至難

の業だった。

「ゆき姉！お願いだから、あんまりくっつかないで！
てゆうか、Ｔシャツさえも掴んで欲しくないんだけど！」
走り出す前に健人が顔をしかめながら、後ろに乗る雪見に懇願する。

「えーっ！じゃあ手放しで乗れってゆーのぉ？この運動音痴の私に！
それってたぶん、五秒で落ちて頭ぶっつけるけど？
私がそうなってもいいならやりますけど、どうします？」

「いい、いい！やらなくていい！じゃ、ここ掴んで、ベルト通し。
なら痛くないと思う。じゃ、走るよ！ちゃんと掴まっててね！」

今度は雪見たちが先頭を走って、目指す喫茶店まで当麻を先導した。

「ふーっ、到着！喉乾いたぁ！俺、カレーとマンゴージュース！」
当麻がテラス席に座り込んで、真っ先に注文する。

「健人くんも同じでいいでしょ？じゃ、カレーとマンゴージュース、
三人分お願いします！」
店のおばさんに注文し終わって、ホッと一息つく。

「ねぇねぇ、背中大丈夫？ホテルに戻ったら、進藤さんに薬もらって
塗らないと！怒られちゃうね、出掛ける時に注意されてたのに。
もしかして、今晩痛くて寝れなかったりして！」
雪見が二人をおどかした。

「だったら最悪！ねぇ、このあとの予定は？」
健人が冷たい水を一気飲みして雪見に聞く。

「あと？あとはカイジ浜に戻って、猫がいたらちょっとだけ撮影したいんだけど。
その後は、健人くんと当麻くんに、この島で私が一番見せたかった風景
を見せてあげる。それで今回の撮影はすべて終了！
本当はもっとのんびり気の向くまま、あっちこっち見せてあげたかった
んだけど、半日じゃこんなもんかな。
あ、せっかくカメラ持って来たんだから、自分たちで撮してみて！
最後に見せてあげる景色は、自分で撮すときっと一生忘れないから。」

午後四時の遅い昼食というか早い夕食の、野菜たっぷり美味しいカレー
で腹ごしらえをし、冷えたマンゴージュースで喉を潤したあと、
三人はまたカイジ浜へと戻って行った。
するとさっきの炎天下には一匹もいなかった猫が、少し涼しくなった
海風に誘われるようにして、どこからともなく集まって来る。

「うわぁーっ！猫だ！いち、にぃ、さん…。全部で八匹もいる！
俺も写真撮っていい？」　健人が嬉しそうにカメラを取り出した。

「当麻くんには、私のカメラ貸してあげる。これ、シャッター押すだけでも結構いい写真が撮れるんだよ！帰るまで貸しておくから、好きに使っていいからね。じゃ、私に少しだけ時間を頂戴ねっ！」
そう言って雪見は、さっそく猫を撮影し出した。

健人も自分の感覚のまま、すべての猫を一匹ずつ撮して回る。

当麻はと言うと、猫カメラマンに戻って仕事をする雪見がとても綺麗で自信に溢れ
輝いて見えたので、思わず雪見にカメラを向けシャッターを切り続けた。

雪見が言ってた最後に見る風景は、健人と当麻の瞳にどう映るのだろうか。

感動のち雪見のドジ！

カイジ浜で存分に猫を撮影し、満足した顔の雪見と健人。
この二人は本当に猫が好きなんだな、と当麻は二人の顔を交互に見た。

「健人くんが撮した今の写真、次に出す猫の写真集に載せてあげる！」
雪見がニコニコしながらそう言うと、健人は大喜びした。

「やった！ほんとに載せてくれるの？ほんとに？スッゲー嬉しい！俺、そしたら本屋にある写真集ぜーんぶ買い占めて、みんなに配って歩こうっと！あ、当麻はちゃんと自分の金で買ってね！」

「なんでだよ！俺にはくれないわけ？
ねぇねぇ！俺も今、密かにいい写真が撮れたと自分で思ってんだけど、
もし使えそうだったら俺のも入れて欲しい！ダメ？」
当麻がそう言いながら、雪見に借りた一眼レフのデジタルカメラを雪見に手渡した。

「ちょっと見てくれる？」
当麻が撮してた事に全く気づいて無かった雪見は、てっきり当麻も猫を撮したんだと思いながら、デジカメのデータを再生して見た。

「えっ！？私？私を撮ったの？」
雪見が、いきなり写し出された自分にビックリする。
しかもよく見ると、カメラの基本をしっかり押さえたかなり高度なテクニックを使って雪見を撮したことがわかった。

「もしかして、当麻くんってカメラやってたことある？」

「ちょっとだけね。高校の時、実は写真部だった。
これは俺の中では暗い過去だと思ったから、今まで誰にも話した事なかったんだけど…。さすが、プロの目はごまかせないんだね。」
関心したように当麻がうなずいた。

「そうだったの。もったいないよ！せっかくいい腕持ってるのに。
私から見て、当麻くんはカメラのセンスがあると思う。
もうやる気はないの？写真。やる気があるなら色々教えてあげるよ。」
当麻と雪見が共通の話題を持ってるとわかって、健人は少々面白くない
顔をする。
それに気づいた雪見が慌てて、
「じゃ、そろそろ本日のメイン会場に移動しよう！」と話題を替えた。

三人は来た道をずっと戻って、西桟橋という所にやって来た。
ここは島一番のサンセットスポットで、真っ青な海に突き出た桟橋が印象的な場所だった。目の前には西表島やカヤマ島が見える。
夕方ともなると、海に沈む夕日と赤く染まる空を見に来る島の人も多く
地元民も自慢のスポットであった。

今日の日没予定時刻は午後６時４３分。あと三十分ほどでその時刻を迎える。

健人たちは、チラホラ集まり出した人のあいだを、バレないようにうつむき加減で前へ進み、突き出た桟橋の一番先頭に腰を降ろした。

すでに空と海は茜色に染まり始めている。

二人は海に足を投げ出し、膝の上にカメラを置いてその様子をじっと見守った。

雪見はどうしても二人のシルエットを、写真集に見開きで載せたいと思ったので、健人たちの後方でカメラを構えている。

いよいよその時がやって来た！

この風景こそが健人と当麻にどうしても見せたかった、雪見が日本一綺麗だと思う夕焼けだ。本当にお天気に恵まれたからこその完璧な茜空である。

雪見は一番美しいタイミングを逃してたまるものか！と、無我夢中でシャッターを切る。

健人も当麻も、その夕日の圧倒的な美しさに言葉を失い無言のままだ。

言葉にした途端色あせてしまう気がして、そこにいた誰もが息を詰めて

自分を赤の中に溶け込ませて立ちすくんでいた。

泣き虫なこの二人が涙を浮かべるまでに、そう時間はかからなかった。

お互い泣いているであろう事は気配から感知できたので、ただただ真っ直ぐ前を向いて座ってる。

もし万が一にもこんな顔を誰かに見られて、写真でも撮られた日にゃ大変だ！と思っていたので、早く陽が落ちて夕闇にならないかな、とさえ思い始めていた。

「あ！忘れてた！写真とらなきゃ！」

当麻が突然思い出し、慌てて膝の上のカメラを構えシャッターを切り出す。

健人も「そうだった！」とあとに続いてシャッターを切り始めた。

そうして二人はさり気なく涙を拭い、後ろを振り向いて雪見に笑顔で言った。

「凄くいい写真が撮れたよ！」

「そう！良かった！」

たったこれだけの言葉と笑顔で、心の中のすべてが通じた。

それだけで充分！あとは二人の心に、いつまでも今日の日が刻まれてくれることを雪見は願う。

辺りが赤から黒へと変った時、雪見が「さぁ、帰ろうか。」と二人を促した。

「みんなが待ってる石垣島に戻ろう！」

薄闇の中を自転車のヘッドライトだけを頼りに、まずは自転車を借りた
民宿を目指す。

が、昼間とはまったく見える景色が違い、わずかな距離のはずなのになかなかたどり着くことができない。

やっとの思いで民宿の明かりを見た時には、心底ホッとした。

おじさんが、帰りの遅い三人を心配して店先に立っている。

「ごめんねー、おじさん！すっかり遅くなっちゃった！」

「いやぁ、雪見ちゃんのことだから、今日みたいな天気の日は絶対に西桟橋だなと思ってたさぁ！でも、迷子にならないかは心配だったよ。
いっつもは車だからぁ。」
おじさんが笑いながら三人に言う。するとすかさず当麻が
「なりました！迷子に。ゆき姉のナビはあんまり当てにしちゃいけない
って事が、今回の旅でよーくわかりました！」
と、おどけて答えた。

おじさんは優しい目をして健人と当麻に伝える。
「また雪見ちゃんと一緒に、この島へ戻って来るといいさぁ！
今度は半日なんて忙しいこと言わないで、ここに泊まってのんびりするといい。
普段はテレビとか映画とか、よくわからんけど忙しくしてんだろ？」

「ええっ？！おじさん、この二人を知ってたの？」
雪見がビックリして大声で言った。

「いやぁ、俺は知らんかったが、さっき向かいのおばぁがこの二人を窓から見てて、雪見ちゃんたちが出掛けたあと、家に転がり込んで来て
そんなことをわめいてったからぁ！
えらい有名人だって言うんでしょ？悪いけどここにサインもらえる？」

おじさんは何を思ったか、側らにあった愛用の大事な三線を手に取り、
ここにサインして！と黒マジックも持ってきた。

スッと健人が手を伸ばし、マジックと三線を受け取る。
「ここでいいですか？」
「あぁ、いい、いい！これって、客に自慢してもいいかい？」
「どうぞ！また今度、必ず来ますから。はい、当麻も。」

当麻が三線を受け取り、健人のサインの横に自分のサインを入れた。
「俺も必ず来ますから、それまでこれ、大事にしてて下さいね！」
そう言いながら、三線をおじさんの手に返す。

「じゃ、おじさん。悪いけど東港まで乗せてってもらえる？
もう石垣に戻らなきゃ！　私もまた来るからね。それまで元気でねっ！」

「へ？もう最終は出ちゃった時間だよ！」

「うそだろーっ！！」

竹富島の夜

雪見は一瞬で頭の中が真っ白になり、フリーズしてた。

「お、おじさん。今、もしかして最終の船は出ちゃったって言った？」

雪見は心臓をバクバクさせながら、そこに平然とした顔をして立つおじさんに聞き直した。

「あぁ、もうとっくに出たさぁ！今の時期の最終は六時半前だから。いやぁ、遅くなったしぃ有名人二人連れだから、ここじゃなくてってっきりどこかいい旅館にでも泊まるんだとばっかり思ってたのに。まーさか船に乗り遅れたとは、さすが雪見ちゃんだなぁ！」

別に慌てる様子もなく、にこにこ顔しておじさんは答える。

だが雪見には、にこにこ顔にこにこ顔で返す余裕など有るはずもなく

鬼のような形相でおじさんの腕に取りすがった。

「おじさん！知り合いの漁船でも何でもいいから紹介して！どうしても帰らなきゃならないの、石垣に！お願い！助けて！」

雪見が手を合わせて懇願する。だが、おじさんは首を横に振った。

「無理だよぉ！今の時間はもうどの船も沖に出ちゃってるわ。諦めて今日はうちに泊まんなよ！そんで朝一番の船で石垣戻るしかないねぇ。」

どうしたって今日中に戻る事が叶わないと知った雪見は、プツンと緊張の糸が切れ、ポロポロと涙をこぼし始めた。

「ゆき姉、泣くなって！仕方ないよ。おじさんの言う通りにしか方法がないなら、そうするしかないんだから。」
当麻が雪見の肩に手を置いて慰める。

「そうだな。帰りの飛行機に間に合えばいいんだから、朝イチに石垣戻れば大丈夫でしょう。
おじさん、船の朝一便って何時ですか？」　健人が聞いた。

「石垣行きの始発は7時４５分だよ。十分で着くんだから、飛行機は間に合うでしょ？泊まりなさい、泊まりなさい！」
なんだかおじさんが嬉しそうだ。

「だって、泊まるにしたってお財布とケータイとカメラしか持ってないんだよ！着替えも無いし化粧道具も無いし、替えのコンタクトも無い！
たった十分で着くなら、泳いで渡れそうなのにぃ…。」
いつまでも諦めきれずにいる雪見が、泣きながらそう言う。

「えっ！ゆき姉って、そんなに泳げるの？昔、競泳選手だったとか？」
健人がビックリした顔で雪見に聞いた。

「自転車も乗れない運動音痴の私が、泳げるわけないでしょう！泳げたとしたってこんな夜に泳がないでしょ、普通。例えよ、例え！」

雪見は少しずつ事態を理解し、自分の中で納得し始めていた。

これはもう、答えはたった一つしか無いのだな、と…。
そう頭の中で整理がつくと、潔く気持ちを切り替えられるのが雪見の良いところで、いつまでもうじうじと悩んではいない。

「はぁぁ…。よしっ！仕方ない、今日は泊まろう！
おじさん、もちろん部屋は空いてるよね？」
いきなりの変りようにおじさんは多少ビビッたが、すぐににんまりと笑って答えた。

「もちろん、全室空いてるよっ！」

「ぜ、全室ぅ？」　今度は健人と当麻がビビッた！
この観光シーズンに全室空いてる民宿っていったい…。

「そうと決まれば、早く今野さんに連絡しなくちゃ！
きっとみんな私たちの帰りを、お腹空かして待ってるんだろうなぁ。
あー、なんて言い出そう！絶対に怒られる！けど早く電話しなきゃ！」
雪見は自分を奮い立たせて意を決し、今野に電話を入れる。

「あ、今野さん！雪見です。あのぅ…、申し訳ありません！！
帰りの船に乗り損ねてしまいましたっ！ごめんなさい！すべて私の責任です！
どうやっても帰る手段が無いので、今日はこっちに泊まって朝一番の船で石垣に戻ります！
八時半過ぎにはホテルに戻れると思うので、大急ぎで帰り支度をしますから…。
本当に申し訳ございませんでしたっ！あの、皆さんにも申し訳ないと伝えて下さい。あ、健人くんと当麻くんは元気にしてますから！

はい！撮影も無事終わりました！お陰様で良い写真が撮れたと思います。
はいっ、はいっ、わかりましたっ！
じゃあ、そういう事でよろしくお願いします。失礼します！」
はぁーっ、と雪見はため息をついた。一気にまくし立て一気に気が抜ける。

「今野さん、なんて言ってた？」
恐る恐る健人が雪見に聞く。当麻も心配そうに顔を覗き込んだ。

「めちゃくちゃビックリしてたけど、明日は帰るだけだから、飛行機に
間に合えばいいって。仕方ないから一晩のんびりしてこい！だって。」

「やったぁーっ！ほんとに？今野さん、怒ってなかった？」
健人が歓声を上げたあと、ちょっとだけ心配そうに聞いた。

「怒るというよりも、呆れてたかな？なんでそうなるの？みたいな。」
雪見の答えになぜか健人も当麻も納得顔をする。

「まぁ、今野さんも俺たちと同じ事を思った訳だ。
普通はそう思うよね。なんでやねんっ！って。俺も思ったもん！」
健人がここぞとばかりに言う。

「まぁまぁ！ゆき姉にすべてお任せだった俺たちにも責任はあるんだから。ゆき姉だけ責めるのは可哀想だよ。
それより、せっかく本当のプライベート旅行になったんだから、時

間を
有効に使わなきゃもったいないよ！
なんかお腹空いたから、飯でも食いに行かない？ぶらぶら歩いて。
おじさん、近くになんか美味いもん食えるとこ、ありますか？」
当麻がおじさんに聞いてみた。

「あぁ、あるさ。ここから真っ直ぐ行ったとこに、美味い沖縄料理を
出す店があるよ。夜十一時までやってるはずだから、そこでご飯食
べて
戻っておいで。それまでに部屋の準備をしておいてやるから。」

おじさんの言う通りにすることにした。
部屋に置いてくる荷物もないし、そのまま健人たちは外に出て
涼しい風に吹かれ月明かりの下を歩き出す。

外には人っ子一人もいなかった。
健人がきょろきょろと辺りを見回す。何をしてるのかと思ったら
どうやら道を覚えているらしい。
雪見を当てにしててはいけないぞ！というように…。
当麻も、それが正解！と言わんばかりに一緒にキョロキョロし出す。

どこまでも続く白いさんごの道に三つ並んだ影は
いつしかつないだ手によって、一つの長い影へと変化している。

足元を見ながら三人は、このひとつになった影がいつまでもどこま
でも
後ろから付いてくることを祈りながら歩いていた。

竹富島の静かな夜がやってくる…はずだった。

お揃いの思い出

「あのね、最初に言っとくけど、ここのママさん夜は相当テンションが
高いからそのつもりで。多分もういい感じで酔ってる時間だから。
あ、料理はめちゃめちゃ美味しいから期待していいよ！
でも、きっと健人くん達の事知ってると思うから、大騒ぎするはず。
ご飯食べて一杯飲んだら、さっさと民宿戻ろうね！」

その店は、昼は食事のできる喫茶店で、夜には沖縄の家庭料理を出すスナックに早変わりの、五十代のママさんがやってる店だった。
雪見はこの店に何度も足を運んでいるらしく、店に入る前に二人に予め
説明をした。
本当は、二人の事を知らなさそうな老夫婦がやっている沖縄そば屋に連れて行きたかったのだが…。

「ちょっと中を覗いてくるから、ここで待ってて！」
雪見がドアを少し開けて顔だけ中に入れた途端、店の外まで大声が響き渡った。

「いやぁ、雪見ちゃんじゃないの！またこっちに来てたの？
なにそんなとこに突っ立ってんのさ！早く入りな！」
相変わらず元気いっぱいのママさんに雪見は、やっぱりね！と思う。
だが、ラッキーなことに他に客は誰もいなかった。

「あれ？今日はお客さん、誰もいないんだね。じゃあ、あと二人連れてるんだけど、
お腹ペコペコだから大至急美味しい物作ってもらえる？」

「もちろん！なに？外に待たせてんの？早く入りなさいって！」

ママに急かされて、意を決して健人と当麻を店の中に押し込み、急いで
ドアを閉める。と同時に、島中に聞こえたのではないかと思うほどの
大絶叫が、狭い店内にこだました。

「ちょっとぉ！斎藤健人と三ツ橋当麻でしょ！！
なんでこの二人が雪見ちゃんの連れなの？いや、まず座って！ここに。
やだ！ちゃんとお化粧してくれば良かった！
何飲む？ビール？泡盛？いや、信じられない！一緒に飲めるなんて！」

ママの興奮はいつまで経っても収まらないのだが、手だけはせわしなく動かし、
あっという間に三人の目の前に五品もの沖縄料理が出てきた。
健人たちはもう二日酔いは当分御免だったので、酒はオリオンビールを
注文し、一杯飲んでお腹を満たしたら宿に戻ろうと思っていた。

「うわぁ、ゴーヤチャンプルーだ！こっちの料理も美味そう！」
健人と当麻が嬉しそうに言うのを聞いて、ママも益々テンションが上がる。

「さぁさ、たくさん食べなさい！足りなかったらまだ作るよ！
ビールもガンガン飲んで！」
カウンター席に座ったのは失敗であった。
飲むそばからママが向こう側から手を伸ばして、ビールを注いでく

る。
健人たちは程ほどに飲みたかったのに…。
お疲れ！と乾杯したあと、雪見が二人に今日の事態を改めて詫びる。
「本当に今日はごめんね！ほんとだったら今頃、ホテルで打ち上げの真っ最中だったのに。スタッフさんにも悪いことしちゃったな。主役の二人抜きの打ち上げなんて…。明日帰ったら謝らなくちゃ。」
雪見の落ち込むさまを見て、健人が笑って言った。
「俺、不思議だったんだ！せっかくの夕日を最後まで見ないで帰っちゃう人が結構いたでしょ？なんでこんなに綺麗なのに最後まで見届けないんだ！って、少しイラッと来たんだけど、あぁ、こういう事だったのね！って。」
「そう！俺も思った！この人達この感動がわからないんだ、可哀想に！
とか思ったもん。ごめんねー、みんな！」
当麻もおどけて言った。だが、すぐに優しく雪見を見つめて、
「でもね…。」と言葉をつなぐ。
「でも、船の時間を気にしなかったからこそ、俺たちはあの夕日を見る
ことが出来たんだよね。だから今はゆき姉に感謝してるよ！
凄いものを見せてくれてありがとう！感動をありがとう！って。
きっと今日の景色は一生忘れないと思う。」
「俺も。三人揃って同じ景色を見て、同じ感動の涙を流して…。
絶対にずっと忘れない。いい旅だったよな！来て本当に良かった。」
健人たちの思いやりある言葉に救われた雪見は、いつもの雪見に戻

ることができた。

「やーっぱり、泣いてたでしょ！二人とも。ほんと泣き虫なんだから！

でもね、私も二人にあの夕日を見せてあげられて、本当に良かった。台風シーズンなのに雨にも当たんなかったし、きっと日頃の私の行いが
いいんだな！きっと。」

「ほーら、調子に乗って来ちゃったよ！絶対この人プラス思考だから、
明日になったらきっと、私のお陰！って話だけになってるよ。怖い！」
健人が肩をすくめ、みんなで大笑いしてビールを飲み干した。

お腹が一杯になったので、健人たちは会計をして帰ろうとレジ前へ。
すると近くの棚に、綺麗なガラスのアクセサリーが並んでいるのが目に
留まった。それは工芸家でもある、この店のママが作った作品だった。

「うわぁ、綺麗！これって全部ママさんが作ったの？売ってるんですか？」　健人が聞いた。

「そう！私、こう見えても、こんなもん作れちゃうんだよ！
どう？三人でお揃いのブレスレットなんか、旅の思い出にいいよ！」
商売上手のママに言われて、当麻はその気になった。

「ねぇ、これ沖縄の海みたいな色で綺麗だよ！買おうよ、お揃いで

！」

健人も雪見も、同じ物に目が行ってたのですぐに意見がまとまった。

帰り道、三人の手首には、同じ沖縄ブルーのガラスのブレスレットが月夜に照らされキラキラと輝いていた。

「えへへっ、綺麗だね。ぜーったい無くさないでね、みんな！」

雪見が二人に向かってそう言うと、健人と当麻は顔を見合わせた。

「これ見るたびに思い出すよな、きっと。ゆき姉の、船に乗り損ねた！
って時の顔。今思い出しても笑える！」

三人はじゃれ合う子犬のようにして、宿までの道のりをてくてく歩く。

夜の十時に人と出会わないなんて、東京では考えられない。

周りの目から解放され、健人も当麻も素の自分に戻って癒やされた。

「おじさん、ただいまぁ！私たちの部屋、どこ？」

勝手知ったる他人の家なので、雪見はさっさと中に入り二階に上がる。

健人たちも慌てて雪見の後について二階へ上がった。

「あぁ、雪見ちゃんがいつも使ってる部屋だよ！」

階段の下からおじさんが叫ぶので、取りあえずはいつもの部屋のドアを
開けてみた。

「なにこれっ！！」　雪見の大声に後ろの二人が部屋を覗く。

そこには、横一列になぜか三枚の布団が敷いてあった。

健人の不安

「ちょっと、おじさん！なんで一部屋なの？！普通、二部屋でしょ！二部屋！隣の部屋だって空いてんでしょーが！他にお客さんいないんだから。」

雪見は、六畳ほどの部屋にぎっしり敷き詰められた、三枚並んだ布団を
見た途端、バタンと勢いよく部屋のドアを閉めた。
そして階下にいるおじさんに向かって、悪い冗談はよしてよ！と
二階から凄い勢いで食ってかかる。
健人と当麻は、顔を見合わせ何やらひそひそ話。
ところが階段の下から上を見上げたおじさんは、真面目な顔をして
言った。

「悪いけど、今日はその部屋しか空いてないんだわ！
他の部屋は午前中にペンキ塗っちゃったから、臭くて今日は入れない。
雪見ちゃんの部屋だけ、他の部屋の荷物を移して置いといたから
まだペンキ塗って無かったの！済まないけど、一晩我慢してよぉ！」

「我慢って、そういう問題じゃないでしょ、おじさん！
私たちに何か問題でも起きたらどうするの？」
雪見の剣幕に健人たちは、速攻「ない、ない！」と首を振る。

「仕方ないじゃん！そういう事情なら。どうせ俺たち、背中が痛くて寝れそうもないし、このまま朝まで起きてたって平気だよ。
だからゆき姉は安心して寝ていいから。」
健人が雪見をなだめるように言った。当麻も笑っている。

「そうだよ！こんなとこで俺たちがなんかするように見える？
いいじゃん！修学旅行みたいに三人で語り明かしても。
俺、いっぱいゆき姉に聞きたいことあるし！」

「なに、聞きたいことって？なんか怖いんだけど！
うーん、しょうがないかぁ…。今からよそに行くのもなんだし、
突然泊まらせてもらう原因を作ったのは私だもんね。
いいや。じゃあ、おじさん！ここ一晩借りるね！
朝はまた悪いけど、港まで送ってくれる？」

「あぁ、いいさぁ！７時４５分の船なら７時半出発で間に合うね。
七時前には朝飯の準備しておくから、下の食堂に降りといで。
じゃ、おやすみ！また明日。」

雪見たちが部屋に入ってみると、よその部屋の荷物は綺麗に片付けられ
敷いてある布団の上には、民宿のサービスには無い歯ブラシとタオル、
それに袋に入った真新しいＴシャツが三枚置いてあった。

「おじさん、私たちが何も持ってないから用意してくれたんだ！
明日お礼を言わなくちゃ。ここの突き当たりに共同のシャワー室がある
から、シャワー浴びてこのＴシャツに着替えさせてもらおう。
潮風と汗でベタベタだもん！」

雪見に促されて最初に健人がシャワーを浴びに行った。
が、戻ってきた健人のＴシャツを見てびっくり！

白いTシャツの胸に青い文字でデカデカと「海人」と書いてある。

「あ！そのTシャツ見たことある！うみんちゅTシャツだ！」

当麻の言う通り、それは石垣島のショップオリジナルの有名Tシャツだった。

「どう？結構似合ってるでしょ！」

さすが、イケメンという人達は何を着てもさまになる。

健人に続いて着替えた当麻も、そのままグラビア撮影してもいいほどに

着こなしていた。

シャワーを浴びてさっぱりした三人は、一階にあるビールの自販機から

ビールを買ってきて部屋に戻り、布団の上に丸く座って乾杯をした。

「なんか笑えるね！三人お揃いのTシャツにブレスレットだよ！

私たちって『チームうみんちゅ』のメンバーって感じ？」

雪見が、改めて自分たちの姿を見て笑い出す。

「そうだ！これも写真に撮っておこうっと！こんな姿の斎藤健人と

三ツ橋当麻は、もう拝めそうもないしねっ！」

雪見がカメラを構えようとすると、健人が待ったをかけた。

「ずるいよ、俺たちだけ！『チームうみんちゅ』なんだから、ゆき姉も

一緒に写らないと！」

雪見は、ほとんど剥げた化粧で写真に写るのは気が進まなかったが、

渋々三脚を立て、二人の真ん中に収まって記念撮影をする。

本当にこの三人だけしか知らない、秘密の記念写真だ。

それから三人は、それぞれ自分のカメラを取り出し、今日一日の作品を
披露し合った。お互いのカメラを交換し、データを再生して見る。
健人は猫の写真が一番多く、一匹ずつ色んな角度から猫の様々な表情を
切り取っては写真に収めていた。本当に猫を愛する目で見た、優しい優しい写真である。
当麻の写真は、さすが元写真部員！と思わせるカットが何枚もあった。

「この写真、凄くいいじゃない！こっちのアングルも、プロっぽいね。
なんかもったいないなぁー。こんないい写真撮れるのにカメラ持たない
なんて。写真って、やれば結構ハマる人多いんだよ、最近。
当麻くんも、またカメラ持って歩けばいいのに。」

当麻は、プロの雪見が評価してくれたことが、とても嬉しかった。
と言うよりも、好きな人に褒められたことが嬉しくて嬉しくて仕方ない
といった顔で、ニコニコと笑って話を聞いている。

「俺ね、写真ってやっぱりおもしろいなぁ！と思いながら撮ってた。
また初めてもいいかなぁ、って。そしたらゆき姉、教えてくれる？」

「もちろん！当麻くんがカメラ再開するなら私は全面的に応援するよ！
時間のあるときに撮したデータを送ってくれたら、一枚ずつ評価して

指導してあげる。」

「ほんとに？ありがとう、ゆき姉！俺、また頑張ってみるよ！」

当麻と雪見のあいだに、健人には入っていけない別の空間が生まれる。

つないでは欲しくなかった一本の糸が結ばれたのを、そのとき健人は感じ取ってしまった。

ふとした瞬間に襲われる、言いようのない不安。

そんな健人に気づかぬまま、当麻は雪見との写真談義に盛り上がる。

そのあとも三人は、布団の上に寝ころびながら、子供の頃の話や初めて
付き合った人の話、仕事の話など、いくら話しても話し尽きる事がない
と言うように、色んな事を語り合い笑い合って夜を明かした。

東の空が白々と明ける頃、雪見がいつの間にかすやすやと眠ってしまった。

健人はそっとタオルケットを掛けてやり、当麻と二人でその寝顔を眺める。

「なんか、ちっとも年上になんか思えないよね。俺と一回りも違うって
ほんとかなって思う。俺がもっと早く生まれて、この世界に入らないで
サラリーマンにでもなってたら、今すぐゆき姉と結婚するのに…。」

健人はわざと「結婚」と言う言葉を当麻に聞かせた。

当麻は、「そうだね…。」と答えるのがやっとであとは黙り込んだ。

初めて「結婚」と言う単語を口にした健人自身、その言葉の意味と自分の本当の思いを考え込み、それ以上は何も言えなかった。

関係が新たになった三人の、また新しい一日が始まろうとしている。

結局健人と当麻は一睡もせずに夜を明かした。
話が尽きなかった事もあるが、なんせ日焼けした背中がヒリヒリ痛くて
とても寝れるような状態ではなかった。

「あーあぁ、とうとう朝になっちゃった。もう今日は東京に帰らなきゃ
ならないんだね。もうちょっと、ここにいたかったなぁ…。」
健人の言葉に当麻も同意した。

「ほんとだね。なんか東京帰るのが嫌になっちゃう。また明日から時間
と人に追われる生活に戻るんだよ!考えただけでも気が滅入る。」
当麻が深いため息をついた。

沖縄に来ると、帰りは誰しもそう思う。
せわしなく生きる毎日から逃れ、心と身体の癒しを求めにやって来て、
ゆったりと流れる沖縄時間に身をゆだねるうちに、いつしか心身共に
再生し、また日常へと戻る日がやって来る。
その時には皆が思うのだ。「あーあぁ、帰らなきゃならないのか…。」と。

「でも、楽しかったね!今度はまったくの仕事抜きで、時間を気にせず
この島に泊まりたい。また三人で来れたらいいよな、夕日を見に。」

「今度はちゃんと荷物を持って泊まろう！この状態で俺ら、誰にも見つからないでホテルまで戻れるといいけど…。」
健人と当麻は、二人の間で熟睡している雪見のボサボサの髪と、ほぼすっぴんにまで剥げた化粧の顔を眺めながら、そうつぶやく。

と、その時、雪見がパッチリと目を覚ました。
「あれぇ？私もしかして寝ちゃってた？二人ともずっと起きてたの？」

「起きてたよ。当麻と二人でゆき姉の寝顔、ずっと見てた！結構寝言いうんだね、ゆき姉って。面白かったよ！」

「やだ！変なこと言わなかった？」

「大丈夫だよ！それより、その頭は大丈夫じゃないと思うけど。」
健人が雪見の頭を指差す。

鏡で自分の姿を見た雪見は「最悪！」と一言叫んで、大急ぎで顔を洗い
ボサボサな髪を取りあえずの三つ編みにして輪ゴムで留めた。
それからさっと布団をたたんで、三人で朝食を摂りに下へ降りる。
食堂にはすでにおじさん手作りの、美味しそうな食事が並んでいた。

「うわっ！朝からご馳走！いっただっきまーす！」
三人は、「美味いっ！」と叫びながら、心づくしの朝食を平らげた。

「おじさん、本当にありがとうね！ご飯も美味しかったよ。このＴシャツもありがとう。着替えが無かったから助かった！」
と、雪見が頭を下げる。

するとおじさんは、真っ黒い顔から白い歯を覗かせ、笑って言った。
「十年位も前に、店にTシャツ置いてたなぁーと思い出してさぁ！
袋にほこりかぶってたけど、中は大丈夫そうだったから。
色男は何を着ても似合うもんだなぁ！」
そう言われて健人と当麻は、お互いの姿を眺めてうんうん！とうなずく。

そろそろ、この町を出発する時間がやって来た。
支払いを済ませ、三人は名残惜しそうにおじさんの車に乗り込む。
窓を全開にして、当分味わうことのできない竹富島の風を、顔全体で感じてみる。
たった一日しかいなかったのに、なんだか故郷を離れる時のように胸がきゅんと痛くなった。

高速船乗り場前で車を降り、おじさんに再度お礼を言い別れを告げる。
「おじさん！おばさんが入院中でも、あんまりお酒ばっかり飲んでちゃ
ダメだよ！ちゃんとご飯も食べて、一人でも頑張ってお店続けなきゃ！
今年はもう来れないと思うけど、来年になってまた猫の仕事に戻ったら
必ず来るからね。それまで元気でいてよ！」

実の娘のように心配する雪見の優しさに、おじさんは涙ぐんでいた。
「あぁ、待ってるさぁ！今じゃ雪見ちゃんだけがうちのお客みたいなもんだからな。あんなボロい店でも、かあちゃんが生きてるうちは潰す

わけにはいかんし。少しずつ手直しして、今度雪見ちゃんが来る時まで
もうちょっと綺麗にしておくよ！その時には二部屋とは言わず、三部屋
でも四部屋でも使っていいから、またあんた達も一緒に来ればいいさぁ！」
おじさんは少し寂しげに笑って言った。
健人と当麻は、その場では詳しい事情は聞かなかったが、あまり良いことは想像していなかった。

石垣島行き始発の高速船が、すぅーっと岸壁を離れる。
いつまでもおじさんは、三人に向かって手を振り続けていた。
「おばさん、もうあまり長くはないみたい…。」
船のデッキに立ち、青い海を眺めながらぽつんと言った雪見の言葉に、
健人と当麻はやはり…と胸を痛めた。

十分で石垣港に接岸。急いで降りて逃げ込むようにタクシーに乗る。
三十分ほどでホテルに到着した。

タクシーを降りた健人たちが最初に出会ったのは、ホテルのロビーで新聞を読んでいたスタイリストの牧田だ。
牧田は一目三人を見るなり、「なに、その格好！」と絶句した。
すっかりこの『チームうみんちゅ』姿が身体に馴染んだ三人は、牧田に
向かって「なにか？」という顔をする。
が、髪は洗いっぱなし、顔は日焼けして真っ赤、パンツはヨレヨレで、
どこからどう見ても昨日までのイケメン二人組とは思えない格好に、

「早く部屋に戻って着替えなさーい！」と牧田が叫んだ。

「雪見ちゃん。あなたも相当ひどい事になってるよ！話は後で聞くから
まずは部屋行って、シャワー浴びておいで！」
牧田の少し呆れたような顔に雪見は、「ごめんなさーい！取りあえず部屋にもどりますっ！」と、すっ飛んで行った。

雪見が部屋の鍵を開けると、そこに愛穂の姿は無かった。
「あれぇ？どこか散歩にでも行ったのかな？」

シャワーを浴び着替えて化粧をする。やっと普段の姿に戻りホッとした。
荷物をまとめていても、愛穂が戻って来る様子は無い。
ホテルを出る時間になったのでロビーに降り、まずは集まってた皆に三人が詫びを入れ頭を下げた。みんな、笑って許してくれて一安心。
「あのぉ、愛穂さんは？」と雪見が進藤に聞いてみる。

「あぁ、彼女なら昨日の夜、健人くん達が戻らないとわかると、急用ができた！とか言って、最終で東京に戻っちゃったの！ありゃ、いかにも面白くない！って顔だったわね。」
進藤の言葉に雪見たちは、益々東京に戻る気が重くなった。

石垣空港でみんなにお土産を買っていた時、すーっと当麻が雪見の隣りに来て、小さな袋を手渡した。
「なに？これ。」　雪見が袋を覗き手のひらに中身を受けてみると、

それは沖縄ブルーをしたガラスのピアスであった。

「ゆき姉、いっつもピアスしてるもんね？これ俺からのカメラのお礼。

ゆき姉のお陰でまた写真始める気になった。これからよろしく！先生！

あ、このプレゼントの事、健人には内緒ねっ！」

それだけ言って、また当麻は離れた所へ移動した。

手のひらの青いピアスが、一瞬妖しい光を放ったように見える。

雪見は遠くに当麻の後ろ姿をじっと眺めた。

緊急事態！

石垣空港から那覇空港へ、そこで羽田行きに乗り換えて到着予定時刻は
午後四時過ぎである。

窓の外の雲海を見ながら、さっきから雪見は考え事をしていた。
この左手首のブレスレットとお揃いの、青いピアス。
当麻は、借りたカメラのお礼だと言って雪見にそれをくれた。
なのに、なぜか健人には内緒だと言う。どうして？
ただのお礼なら、別に隠す必要なんてないじゃない。
健人だって、当麻がカメラを借りた事ぐらい知っている。なのになぜ？
ちょっぴり雪見に関して心配性の健人に、余計な心配をかけたくなかったから？
それとも…。考え事の途中で隣の牧田が雪見に話しかけた。

「ねぇねぇ！当麻くんたちと一晩、同じ部屋だったって本当？」

「え？あ、まぁ…。色々と事情があってね。あ！でもやましい事は一切
ないから！あれ？でもこの話、誰に聞いたの？」

「さっき空港でお土産見てる時に愛穂さんからメールが来て、昨日は先に帰ってごめんなさい！のあとに書いてあったよ。
雪見ちゃんが教えたんじゃなかったの？」
牧田の思いもよらぬ言葉に、雪見は背筋がゾッとするのを覚えた。

「私、愛穂さんとアドレス交換してないもの！

竹富から戻って打ち上げの時に聞こうと思ってたから。一体愛穂さんは
誰から聞いたの!?」

雪見と牧田は顔を見合わせた。お互いの表情はすでに凍っている。
忘れかけていた新たなる攻撃が仕掛けられた予感を、二人とも同時に感じ取ってしまった。やはり愛穂は敵であったのか…。
二人はただ無言で、今はその恐怖にじっと耐えるより方法がなかった。

羽田空港到着ロビー、午後三時半過ぎ。
そこには雪見の友人、香織の姿があった。
北海道の故郷から香織に会いに上京してくる母を、出迎えに来たところだった。

「なにこれ?ずいぶんな報道陣じゃない?それに出迎えてる若いコがやたら多いのはなんで?誰を待ってるんだろ…。」
あまりにも人が多くて、母が自分を見つけられるか心配だった。

隣りにいた女子高生とおぼしき二人連れに聞いてみる。
「すいませーん!誰か芸能人でも来るの?みんな、誰を待ってるの?」
二人組は顔を見合わせ一瞬、『なに?このおばさん!』って顔をしたのを、
香織は見逃さなかった。

「斎藤健人と三ツ橋当麻!沖縄からの便に乗ってるんだって!」

「えっ！健人と当麻！？」

確か雪見も一緒なはず。真由子からメールがきてた。

『今、雪見んちで健人が拾った猫の世話をしてる。』って。

雪見が健人達との仕事で、一緒に沖縄に行ってるから、とも…。

香織が二人を名前だけで呼んだのを聞いて、またしても女子高生らは少し眉間にシワを寄せてお互いの顔を見たが、それでもお構いなしに香織は聞いた。

「なんで二人が沖縄から帰ってくるって知ってるの？」

「ツィッターで見た！三角関係のカメラマンも一緒だって。」

「そうそう！私は動画で三人を見たけど、なんかめちゃ仲良しな三人組なんだよね。なに？この女！って感じ。こんなおばさんのどこがいいのか、一目見てやろうと思って…。」

あんた達もいずれ三十代のおばさんになるんだよ！覚えておきなさい！

と言ってやりたかったが、香織はそんな度胸を持ち合わせてはいない。

真由子だったら、確実に食ってかかったことだろう。

三十代の、どこがおばさんなのよ！三十代が若い男を好きになって何が悪い！と…。

香織は急に心臓がバクバクし出す。ただ母を迎えに来ただけだったのに

思いがけない緊急事態に遭遇してうろたえた。
『なんて事なの！ツィッターに、動画まで流出してるなんて！どうしよう！どうしたらいい？真由子に連絡？いや、それよりも先に、
なんとか雪見に知らせなくちゃ！』
次の便で帰ってくるとしたら、まだ今は機内にいて携帯は使えない。ロビーに出てきてみんなに捕まる前に、何とかして雪見に伝えないと。
その頃、まだ何も知らない健人と当麻は、ぐっすりと夢の中にいた。一晩中三人で語り合い一睡もしなかった二人は、座席に着くと同時に深い眠りに落ち、それにつられるようにして横の今野も目を閉じる。あと少しの時間で、大変な騒ぎに巻き込まれるとはつゆ知らず…。
「間もなく当機は羽田空港に着陸します。」
機内アナウンスに目を覚ました今野が、慌てて健人と当麻を起こす。
「うーん、よく寝た！」と健人はさっぱりした顔で伸びをした。
「今野さん、このあとのスケジュールは？」
今野は、真っ直ぐみんなで吉川の編集部に寄って、これからの予定を打ち合わせした後に解散だと伝える。明日からはまた忙しくなるから覚悟しておけ！とも。
「大丈夫！すっかりリフレッシュしたから、当分は頑張れます！」と元気よく答えたが、そんな爽やかな顔も今のうちである。
那覇からの便が到着したことを掲示板が告げると、香織は急いで雪見に

電話をかけた。だがまだ通じない。切っては掛け、切っては掛け…。
そうこうするうちに札幌からの便も到着し、母が到着ロビーに出てきた。
「香織！久しぶり！元気そうで良かった。でも、さすが東京は凄い人だね！あんたを探せないかと思った！」
お正月ぶりに会った娘に嬉しさ一杯の母であったが、香織はそれどころじゃなかった。

「ごめん、母さん！悪いけど大至急電話しなきゃならない所があるの。
電話終わるまでここにいてね！絶対いてよ！」
そう母に告げると香織は、リダイヤルしながら報道陣とは離れた場所に
移動した。
『早く繋がって！お願い！雪見、早く！……あっ！繋がった！』

「雪見？！」　香織は思わず大きな声を出してしまい、辺りを見回す。
それから周りに人がいない場所に小走りで行き、今の到着ロビーの状況
と、先ほど女子高生から聞いた話を早口で伝えた。

「嘘でしょ！」雪見は絶句した。一瞬、愛穂の姿が目に浮かぶ。
「どういうこと？動画が流出って！一体誰が…。」
いくつか思い当たる事はある。カイジ浜で、西桟橋で、高速船の中で。
ケータイを向けられてるような気配はしたが、いずれも愛穂ではない。
すれ違った人にケータイを向けられるなんて、東京じゃしょっちゅうな

事なので、沖縄の開放感も手伝ってあまり気にも留めなかった。

「このまま出てきたら、報道陣に確実に囲まれちゃうよ！どうする？」

香織が心配そうな声で、コソコソと話した。

「とにかくみんなに伝える！ありがとね！教えてくれて。また電話するから。」

それだけ言って雪見は香織からの電話を切る。

大変！早く健人くんたちに伝えなきゃ！

仕掛けられた罠

「健人くん、待って！」
一番先を歩く健人を、雪見が大声で呼び止める。
その後ろのスタッフたちも何事か！と一斉に振り返った。

「大変よ！到着ロビーは報道陣が詰めかけてるって！私たちの動画がインターネットに流出したらしいの！」
集まった八人に雪見は、周りの人に聞こえないように伝えた。

「えっ！」　全員が言葉を失う。
だがすぐさま今野が情報収集のため、あちこちに電話を掛け始めた。
「わかりました。そうします。」
そう言って最後の電話を切り、外部からの指示をみんなに伝えた。

「吉川さんがすでに車を三台回してくれたそうだ。一言も口を開かずに
急いで外に出ろ！健人と当麻、雪見さんは一台ずつ分かれて車に乗れ。
あとのメンバーは二人ずつ健人達をガードして車に乗り、別々のコース
を通って編集部集合だ！よろしく頼みます！」
全員黙ってうなずいた。

「じゃ、俺から出るよ！」
健人はぐいっと帽子のつばを引き下げ、サングラスをかけ直す。
健人の前後を今野とカメラマンの阿部が、がっちりとガードした。
続いて当麻を、マネージャーの豊田と編集部の藤原が、
雪見の周りをスタイリストの牧田とヘアメイクの進藤が囲む。

九人はそのまま足早に、到着ロビーへと出て行った。

想像以上の人と報道陣の多さ、たかれるフラッシュの数に一瞬雪見の足がすくんで止まった。が、すぐに進藤が腕を引っ張り、当麻たちの後ろに付いて人混みをかき分けた。

歩く速度に合わせて両側から、何本ものマイクが差し出される。

「斎藤さん！竹富島の休日はいかがでしたか？三人でのんびりされました？親戚である浅香さんとの交際は本当ですか？」

「三ツ橋さん！浅香さんを巡っての三角関係と報じられてますが、事実ですか？答えて下さい！」

「浅香さーん！斎藤さんと三ツ橋さん、年が一回り以上違いますが、お付き合いしてて年の差を感じる事ってありますかぁ？」

どの質問も、すでに交際中を前提にした質問であった。

健人たちは言われた通り、一切を無視して無言のまま外に出て、三台の車に分かれ、やっとの思いで乗り込んだ。

バタン！とスモークガラスの入ったドアが閉められ、すーっと車は動き出す。

「ふぅぅっ。」雪見が深く息を吐き出した。膝は心なしか震えている。

「大丈夫？」雪見の両脇に座る進藤と牧田が、心配そうに声を掛けた。

「うん、大丈夫。」本当はちっとも大丈夫ではなかったが、二人にこれ以上迷惑は掛けたくなかったので、少しだけ微笑んでそう言った。

健人も当麻も、それぞれの車内で事の重大さを感じていた。
楽しい旅行から戻り、明日からまた仕事を頑張るぞと意気込んだのもつかの間、一転して大変な問題に直面してしまった健人たち。
皆がそれぞれの思いを巡らし考え込んで、車内は無言のまま編集部のあるビル前に到着する。

最初に着いたのは当麻が乗った車であった。
外に報道陣がいないことを確かめ、素早く車を降りてビル内に駆け込む
当麻とマネージャー、それと藤原。
あとの二台も程なく到着し、全員が『ヴィーナス』編集部の会議室に集合する。
すでに待ちかまえていた吉川の表情は硬い。
重苦しい空気の中、健人が真っ先に吉川に頭を下げた。

「申し訳ありませんでしたっ！僕らがうかつでした。写真集の仕事をしてるんだと言う意識があったから、あまり周りを気にしなかった。」
健人の言葉を当麻が引き継ぐ。
「せっかく吉川さんに頂いた仕事だったのに、こんな事になってしまい
本当に申し訳ありません！責任はすべて僕らにあります。」
当麻も深々と頭を下げた。
雪見も詫びを入れようと立ち上がった時、残りの人達がパタパタと全員
立ち上がる。
そして口々に、私にも責任があります！いや僕にも責任が！俺がもっと
しっかりガードしておけば…などと、皆が自分の責任を主張した。

「いい！もうわかった！今回は全員の不注意という事にしておこう。今は、責任の在りかをはっきりさせるために集まっているのではない！
済んでしまったことは仕方ないんだ！重要なのは、この先事態はどう進んでいくか、どのように対処すべきか見極める事だ。まぁ、座れ。」

吉川は運ばれてきたお茶を一口、ずずっとすする。
それからいつも通り冷静に手元のノートパソコンを開き、問題となった
動画を再生してみんなで食い入るように見た。
吉川によると、何者かが竹富島に健人たち三人がいる事をツィッターで
流し、動画を投稿してくれるよう依頼したと言うのだ。
パソコン上に健人達三人の姿が映し出される。
場面は三つあるのだが、どれも三人が楽しそうにじゃれ合い笑ってる、
正真正銘本人たちの動画であった。

「だけど、これって別におかしな場面じゃないよね。いつもの三人って
こんな感じでしょ？こんなの、私たちならしょっちゅう見てるもん。」
牧田が想像してたものとは全く違ったらしい。
進藤に至っては「なーんだ！心配して損した！」と拍子抜けした様子。
健人たち三人も一様にホッと胸をなで下ろした。

「まて！まだ安心するのは早すぎる。問題はこのあとの画像だ！」

再びみんなで頭を突き合わせ、パソコンを覗く。
するとそこに、お揃いのTシャツを着て布団の上に寝ころぶ三人の姿が
いきなり飛び込んできた。

「な、なによ、これっ！民宿の部屋の中じゃない！」雪見が絶叫する。

「部屋にカメラが仕掛けられてる！誰がこんな事を…。」
そう言いながら健人の頭には、民宿のおじさんの顔が描かれた。
当麻も一瞬同じ人が頭に浮かんだが、すぐに自分を否定する。
「いや、あのおじさんはそんなことが出来る人じゃない！
これはきっと、誰かが仕掛けた罠だっ！」

健人も雪見も、出来ることならそう思いたかった。
だが、他に一体誰がそんな物を仕掛けられるだろう…。

「ねぇ！この画像をよく見て！カメラの周りに写ってるのって、何かの
お花じゃない？赤い南国系の。この中にカメラが仕掛けられてる！」
食い入るように見ていた牧田が言った。

「そう言えば、部屋の棚の上にお花が飾ってあった！普段おじさんはお花なんて飾ってるの見たことなかったから、あれっ？って思ったのを
思い出した！そこから辿ると何かがわかるかも知れない！」
雪見は直ぐさま竹富島の民宿に電話をした。

「あ、おじさん？雪見です。お世話になりました！あのね、ちょっと聞きたい事があって電話したんだけど…。」

受話器の向こう側から聞こえた返事は、ある事実を伝えていた。

民宿のおじさんは、思いも寄らなかったことを雪見に話し出した。

「雪見ちゃんたちが船に乗り遅れて、うちに泊まる事になった後、晩飯
食いに出掛けただろ?その後すぐに若い女の子が尋ねてきてさぁ。斎藤健人と三ツ橋当麻のファンなんですぅ!ってね。二人がここに入るのを
見たらしくて、一目でいいから二人が泊まる部屋を見せてくれ!って。」
で、おじさんはその子が東京からわざわざ二人を追いかけて来た、と言うのでそのまま帰すのは可哀想かなと、部屋に案内したそうだ。

「その子、赤い花束持ってなかった?」

「あぁ、持ってたさぁ!こっそり部屋に飾って来たいんだけどいいか?
って言うから、花ぐらいはいいさって。棚の上に置いたら、ありがとうって
すぐに出て行ったよ。迷惑がられると悲しいから、私が来た事は内緒にしておいて、って。やっぱり迷惑だったかい?」
おじさんは気まずそうに雪見に尋ねる。

「いや、いいの。ちょっとお花の事を思い出しただけだから…。わかった、ありがとね!また行きます。じゃ!」
そう言って雪見は電話を切った。

「やっぱり、そう言うことか。若い女の子って、もしや…。」

それが判ったところでどうなるわけでもないが。

流出動画は、延々と続く三人のおしゃべりの途中で切れていた。
小型バッテリーが切れたのであろう。幸いなことに、雪見が眠った後の
健人と当麻の会話は入ってなかった。「結婚」という言葉が出て来る会話がもしも流出していたなら、確実に事態は変っていただろう。
健人は取りあえず胸をなで下ろした。

「どうします？この後の対応。」マネージャーの今野が吉川に聞く。
今は所属事務所と編集部が、車の両輪となって進んでいるので、お互い
足並みを揃えて対応していかないと、前へ進めなくなる。

「もう、すべてを蹴散らす思いでひたすら突っ走るしかないだろうな。
多分この先もモグラ叩きのように、次々と同じような事が起きるはず。
一つずつ対応してたらきりがない。テレビや雑誌に取り上げられるのも
宣伝広告のうち！ぐらいに開き直って、ガンガン飛ばした方がいいと思うがどうだろう。」吉川の意見に皆がうなずいた。

「よし！そうと決まれば、さっそく次の企画に移るぞ！」

企画会議が終わり、解散したのは夜の十時を回っていた。
さすがにみんなヘトヘトだ。早く帰って身体を休めたかった。

「じゃ、お疲れ様！健人くんも当麻くんも、今日は早く寝てね！」

雪見がそう言ってタクシーに乗ろうとすると、なぜか健人と当麻も車に
乗り込んで来るではないか！

「ち、ちょっと！なんで乗ってくんのよ！今日は真っ直ぐ帰らないとダメでしょ！私、飲みになんて行かないからね！帰るんだから。」

「俺たちだって飲みになんか行かないよな！ラッキーに会いに行くの！
真由子さんにもお礼を言わないと。三日間もうちの子をお世話してもらったんだから。」
健人が、ラッキー元気にしてるかなぁ！とニコニコしてる。

「俺も帰ったら見せてもらう約束してたから！猫飼いたいけど、家じゃどうしたって無理だし。
だからゆき姉んとこの猫で我慢する。」
当麻もラッキーに会うのが楽しみで仕方ない！って顔してる。

「もう！しょうがないなぁ、二人とも。ラッキー見たらすぐ帰ってね！
て言うか、この二人を連れ帰ったら真由子の大絶叫がまたマンションに
こだまするよ、きっと！」

案の定だった。玄関を二人が一歩入った途端響き渡る、黄色い声！
何度聞いても耳に悪い影響をあたえそうな、破壊音だ。

「ただいまぁ！ふーっ、疲れたぁ！めめとラッキーはいい子だった？」

「そ、それよりこの二人！早く私を紹介してよ！」
イケメンアイドルおたくの真由子の声が上ずるのも無理はない。

「真由子さん、お久しぶりです。三日間もラッキーを預かってくれてありがとう！お土産買ってきたからあとでゆき姉にもらってね。」
健人の言葉に真由子はうなずくのが精一杯だった。

「初めまして！三ツ橋当麻です。すいません、突然お邪魔しちゃって。
どうしても健人が拾った子猫を見たかったもんで、一緒に来ちゃいました！」
当麻の挨拶に至っては、もう真由子の耳には届いていなかった。
こんなに間近で見る、日本を代表するイケメン俳優二人組に、すでにノックダウン寸前である。
そんな真由子は構わずに、健人と当麻はさっさとラッキーの元へと駆け寄った。

「元気だったか？ラッキー！会いたかったよ！」
健人が子猫を抱き上げ、頬ずりする。ふわふわの赤ちゃんの毛だ。
当麻もラッキーの頭を撫で、「ちっちゃいねぇ！」とよしよしする。

「さぁさ！ラッキーも見たことだし、君たちは帰る時間だよ！
今度ゆっくり遊ばせてあげるから、今日はそろそろ帰らないと。
これ以上また変なもん流されたら、たまらんもんね！
マンション出る時は、よーく周りを確かめてからにしてね。。」
雪見は二人を玄関先に追いやった。

「じゃあ、また明日！」雪見に別れを告げ、二人はエレベーターを降りる。

「可愛かっただろ?ラッキー。」「あぁ!めちゃ可愛かった!」
「竹富島で撮った猫の写真も、早くプリントして見て見なきゃ!
一番良く撮れたやつを引き延ばして、ゆき姉にプレゼントしよう!」

そんな呑気な事を言ってられるのも今日までだ。
明日からは怒濤の勢いで写真集の企画が押し寄せる。
手始めにファンミーティングに握手会、ラジオのイベントやらが続き、
あいだにドラマや映画の撮影、雑誌の取材、テレビ出演など通常の仕事
もこなしつつ、ゴールの写真集発売日クリスマスには、写真集を買った
人限定のコンサートが予定されている。

雪見が毎日健人に付いて歩き、撮影をするのもあと二十日あまり。
十月に入ったら、いよいよ編集作業に取りかからなくてはならない。
健人と雪見が一緒にいれる日も残りわずかとなった。
写真集が出てしまったら、また雪見は猫カメラマンへと戻ってしまう。

確実に始まってしまったカウントダウン。
出来ることならその時計を止めてしまいたかった。
楽しかった日々が多ければ多いほど、別れの時の悲しみも倍増する。

健人は、その日の悲しみをひとり思い、涙の色にも似た左手首の
青いブレスレットをぎゅっと握り締めた。

明日は『ヴィーナス』発売日。

雪見と健人の初めてのグラビアが世に出る日。

グラビアデビュー！

雪見は朝から落ち着かない。
なぜなら今日はファッション誌『ヴィーナス』の発売日だから。
いよいよ、健人と二人で初めて撮したグラビアが、日本中の書店に並ぶのだ。
「どうしよう！ちゃんと健人くんとつり合って写ってるかなぁ？」
めめを相手に独り言が多い。にゃーん、と一声鳴いてめめが返事する。
雪見はそれを、大丈夫だよ！と聞こえた事にした。

朝八時。健人から届いたいつものメール「もう少しで着く」を合図に、
雪見はカメラバッグと荷物を持ち、一階まで降りる。
外に出ると、程なくして今野運転の車がマンション前に横付けされた。
「おはようございます！」どんな時でも朝の挨拶は元気よく！
するとつられるように健人と今野も元気よく「おはよう！」と返した。

「ねぇ、今日『ヴィーナス』の発売日だね。」「うん。」
「十時には本屋さんに並ぶのかなぁ。」「そうだね。」
「なんか、猫の写真集を初めて出した時より緊張する！」「そう？」
朝に弱い健人とは、まだまったく会話が弾まない。
今野がその隙を狙って今日一日のスケジュール確認をする。

「まず九時から新しいドラマの顔合わせと本読み、午後一時から場所を
移動してスチール写真撮りと取材、五時からは当麻のラジオ番組に

ゲスト出演だ。」

「それで終わり？当麻のラジオで今日の仕事は終わりなの？」
健人がいきなり目を輝かせて嬉しそうに今野に聞いた。

「あぁ、今日はな。また遊ぶことばっかり考えてんだろ！しょうがない奴だ。」

「当麻とご飯に行けるかなぁーと思って。あ、でも当麻がラジオの後に
仕事が入ってたらアウトだけど。ゆき姉も一緒に行く？」

「ううん、今日はやめとく。ラッキーが早く懐くように、少しは一緒に
いてやらないと。」
雪見がそう言うと、健人は「そうだ！ラッキーがいたんだ！」と膝をポンと叩いたので、雪見はなんだか嫌な予感がした。
「もしかして、今日もうちに来る気してる？」「えへへっ！」

午前中の新ドラマの顔合わせと本読みは、部外者立ち入り禁止なので雪見はお昼頃までどこかで時間を潰すことにした。
久しぶりの一人きりの時間。なんだかウキウキする。
断っておくが、決して健人と一緒にいるのが窮屈な訳ではない。
一緒にいると楽しいし嬉しいし、ドキドキもする。
だが十代二十代の頃のように、朝から晩まで一緒にいてベタベタしたい
とは、もう思わなくなっていた。
自分一人の時間も欲しいし、女友達だけで飲みにも行きたい。
そうやって、彼氏との時間と自分だけの時間の両方が欲しくなるのが

三十代の恋なのだろうか。
いつでもどこでも雪見と一緒にいたいと思う、まだ２１歳の健人とは、
やはり温度差が出てきてしまうのは致し方ないだろう。

雪見は書店が開くのを待っていた。
開店と同時に店内に駆け込み、雑誌コーナーで本日発売の札が付いたくさんの雑誌の中から『ヴィーナス』を探し出す。
「あった！」思わず声に出してしまい、首をすくめた。
まだ誰も買ってない本の山から中ほどの一冊を引き抜き、パラパラとめくりたくなる衝動を抑え、レジへと足早に向かう。
それを持って、その通りにあった大好きなドーナツショップに入り、いつものカフェオレとオールドファッションを受け取って席に着く。

まずはドキドキを沈めるためにカフェオレを一口。
コーヒーの香ばしい香りは、いつだってざわついた心を静めてくれる。
よし！と心を決めて、今の自分には無縁だった二十代のファッション誌
『ヴィーナス』を、一ページずつ注意深くめくった。
すると、予想に反して何枚目かで、いきなり大写しの健人と雪見が目に
飛び込んできた！
「うそぉ！こんなに？」見開きになったページの右側に雪見、左側に健人がポーズを決めて立っているではないか。
まさかこんな大写しで掲載されるとは夢にも思わなかったので、驚きと
同時にこんなポーズ取ってたっけ？と恥ずかしさに襲われて、パタンと
一度本を閉じた。またカフェオレを一口、心を静める。

今度は少し冷静な目でそれを眺めることができた。
六ページにも及ぶ、特別グラビアと冠された健人と雪見のページはファッション誌らしく、とてもスタイリッシュに構成されている。
あの時、無我夢中で撮されていた時には完成図は想像つかなかったが、
改めて落ち着いて見てみると、雪見はスタイリスト牧田とヘアメイク進藤、カメラマン阿部によって、はるかに実年齢より若々しく見えた。
「うん！これなら健人くんと結構つり合ってるんじゃないの？」
またしても言ってしまった大きな独り言に、今度は隣のテーブルの親子がチラッとこっちを見た。恥ずかしくて顔が赤らむのがわかった。
と、その時ケータイのメールが着信する。誰かと思ったら当麻だった。

ゆき姉おはよう！
『ヴィーナス』見たよ！
めちゃめちゃ二人ともお洒落でかっこよくて、うらやましくなるようなグラビアでした。
きっとね、ゆき姉ファンがこの後増えると思う。
俺も益々ファンになりました。大好きです！

ｂｙ　ＴＯＵＭＡ

ドキッとした。なに？最後の「大好きです！」って…。
どういうつもりでこんなメールを送信してきたのか、理解に苦しんだ。
ファンとして？親友の彼女として？本当の姉のような存在として？
あれこれ思いあぐねているうちに、あちらこちらからメールの嵐に！
真由子に香織、実家の母に健人の妹つぐみからもお祝いメールが届く。
つぐみに至っては、「こんな綺麗で可愛い人が私の義姉だったらなぁ。
お兄ちゃんと早くゴールインしちゃえば？」とか書いてある。
なに言ってんだろ、つぐみちゃん！と恥ずかしくなった。
返信になんて書こうか随分と悩んだ。
で、結局「ばーか！でも、ありがとう！しっかり者で可愛い妹よ。」
とだけ返事する。

当麻には、なんて返せばいいのだろう。
きっと当麻も雪見の返事を待っている。ケータイを握り締めたまま…。

健人の好きな仕事

お昼過ぎのテレビ局ロビーは意外と静かだった。
一時からのスチール写真撮りには健人に同行するため、雪見は一人でロビーの椅子に腰掛け、健人たちが降りてくるのを待っていた。
膝の上にはドーナツの箱と、さっき買ったばかりの『ヴィーナス』が乗っている。
健人と今野がお腹を空かせてるだろうと、お昼ご飯になりそうな物をチョイスしておいた。
後はロビーの自販機から飲み物を買って、車に乗り込めばいい。

所在なさげに窓の外を眺めていると、突然「あのぅ、すみません！」と
横から声を掛けられた。見てみると斜め前に座ってた受付嬢の一人だった。
「あのぅ、もしかして浅香雪見さんですか？」と聞いてくる。
見覚えの無い顔なのに私の事を知ってるなんて…。
「はい、そうですけど…。あの、ごめんなさい！どこかでお会いしました？」
「やっぱりそうだ！」と彼女はもう一人の受付嬢に向かって手を振った。

訳が解らずきょとんとしてる雪見に向かって彼女は、笑顔で答えた。
「今朝『ヴィーナス』買って見ました！健人くんと写ってるやつ。素敵なワークウーマンだなぁと思って、いっぺんにファンになりました！
私も猫が大好きなんです！
今日の帰りに浅香さんの猫の写真集、買って帰ろうと思ってたんですよ！

こんな所でお会いできるなんて、感激です。」
それだけ言うとぺこんと頭を下げ、また小走りに自分の持ち場に付いた。

雪見は、見ず知らずの人から掛けられた言葉が、耳に妙にくすぐったく
斜め向かいからの視線が気になって、顔を上げられないでいる。
『それにしても今朝買ったって…。あ、そうか、キオスクがあったか！
なーんだ！わざわざ本屋の開店を待ってなくても良かったんだ。』
変なところに雪見は感心している。もっとグラビアの反響に驚けばいいのに。

そこへ健人からのメールが届く。「今、どこ？」と一言だけ。
すぐに「一階のロビーにいる」と返信したら、「地下駐車場にいて」と
返事が。慌てて自販機で缶コーヒーを買い、すぐ階段で地下に降りた。
程なくして健人と今野がエレベーターで下りてくる。
「お疲れ様でした！」「待たせちゃったね。何してた？」
車に乗り込みながら、健人が雪見に聞いた。
「ドーナツ屋さんで『ヴィーナス』読んでた！」と、ドーナツの箱と缶コーヒーを健人に差し出す。
「やった！お腹ペコペコだったんだ。サンキュ！」
嬉しそうにドーナツを頬張る健人が、子供みたいで可愛い。
「今野さんもあとで食べて下さいね。」「いつも悪いね、ありがと！」

スチール写真撮りのスタジオまでは十分ほどの距離。
その間に健人は、ドーナツを食べつつも忙しく喋りまくる。

「ねぇ！『ヴィーナス』どうだった？見せて、見せて！
うわっ、凄いじゃん！こんな最初の方に見開きで載せてくれたんだ。
ゆき姉、めちゃ可愛い！やっぱ、思った通りだ！本職のモデルみたい。
さっすが、阿部さんは凄腕カメラマンだ！このゆき姉がこうなっちゃう
んだから。あ！次の写真もいいねーっ！俺あとで『ヴィーナス』買いに
行ってこよ！記念に取って置かなくちゃ。」

健人の機関銃のようなおしゃべりに、雪見は口を挟む隙がない。
やっとの事で、みんなからたくさんのお祝いメールをもらったこと、
さっきテレビ局の受付嬢から声を掛けられたことなどを話した。
つぐみちゃんからもメールが来たよ！とは伝えたけど、さすがに当麻の
事は言えなかった。もし万が一にもメールを見せて！と言われたら…。

「ところで顔合わせはどうだった？」と、素早く話題を切り替える。

あれこれ話し込んでいるうちに、あっという間にスタジオ到着。
ここからは雪見も仕事開始だ。
カメラマンと打ち合わせ中の真剣な横顔、撮影の合間に見せたホッと
一息ついた時の笑顔。ヘアメイクさんに髪を直してもらってる最中の
おちゃめな顔！
毎日のようにファインダーを覗いていても、二つとして同じ表情はない。
写真選びに苦労するだろうなぁ、と思いながらシャッターを切った。

スチール写真撮りもその後の取材も、時間通りに進んで無事終了。
あとは当麻のラジオにゲスト出演を残すのみとなった。

健人はこの仕事を何日も前から楽しみにしていて、なにを差し入れに持って行こうか、車の中で雪見とあれこれ考えていた。
「やっぱ、甘い物系かな？」
「うん。当麻くん、見かけに寄らずスイーツ大好き男子だもんね。ラジオ局に行く途中に美味しいケーキ屋さんがあるよ！ここのプチフール、小さくて可愛いくてめちゃ美味しくて、最近の私の手土産ランキング一位かな？」
「それにしよう、それに！俺も食いたい！」
「あのね、当麻くんやスタッフさんへの手土産だと言うことをお忘れなく！」
途中雪見が車から降り、２４個入りのプチフールを二箱買って出発。ラジオ局へと急いだ。

当麻は、毎週金曜日夕方五時半から始まる生放送『当麻的幸せの時間』というレギュラー番組を、もう丸二年担当している。
毎週一人ゲストを招き、その人なりの幸せな時間を紹介してもらったり
当麻の好きな曲やゲストの好きな曲を流したりと、三十分間思いっきり
当麻とゲストが幸せな時間を過ごす、というコンセプトで番組を制作している。
健人は多分、一番出演回数が多いゲストであろう。月に一度は出てると
思うから、ほとんど準レギュラーと言っても良いかもしれない。
なんせお互い全く気を使わなくて済むので、結構やりたい放題言いたい
放題なのだが、プロデューサーはかえってそれを面白がり、二人に好きにやらせてくれた。

と言うのも、健人がゲスト時のリスナーの反響が半端ではなく、いかに
この二人の人気が凄まじいものであるかを物語っていた。
たった二年で金曜日の看板番組になったのも、健人の功績があったから
こそと、プロデューサーは密かに思っている。
雪見も健人から面白い現場だよ！と聞いていたので、初めて目にする
当麻のＤＪ姿と仕事ぶりを楽しみにしていた。

いよいよ当麻のいる放送スタジオに到着。
「おはようございまーす！」と挨拶をしながら健人がドアを開ける。
スタッフさんが一斉に「おはようございます！よろしくお願いします」
と笑顔で頭を下げた。
当麻は大きなガラスの向こうの放送ブースで、プロデューサーと二人
真剣に打ち合わせ中である。放送開始まであと三十分。
健人も一応は打ち合わせに参加しなくてはならないので、厚いドアを
開けて当麻のいる場所へ入って行った。

雪見の到着に気が付いた当麻は、ガラスの向こうから最高の笑顔で
ピースサインを送った。

雪見は、まだ返してはいない当麻からのメールの返事を、この場所で
考えている。
でもすでに手にはカメラを構え、瞳は健人だけを追うプロのカメラ
マンになっていた。

まさかのラジオ出演！

当麻と健人がプロデューサーとの打ち合わせ最中、なぜかチラッとガラス越しに二人が雪見を見た。
カメラのファインダーから覗いた二人の顔は、何か悪巧みを企ててるいたずらっ子のような目をしてる。なんだろ？

やがて本番三分前のカウントが始まり、プロデューサーの三上が放送ブースから出てきた。雪見が慌ててカメラを下ろし、挨拶をする。
「あの、斎藤健人に同行してるカメラマンの浅香と申します。
今日はご無理を聞いて頂き、ありがとうございました！
みなさんのお邪魔にならないよう、この辺から撮させて頂きますので、
どうかよろしくお願いします！」
三上に頭を下げたあと、周りのスタッフにも頭を下げる。

すると女性スタッフが、「三上さん！美味しそうなプチフール頂きましたよ！」と伝えた。

「いやぁ、済みませんねぇ！当麻からさっき『ヴィーナス』見せられて
お会いできるのを楽しみにしてました。まぁ、あいつったら、浅香さん
のことを語る語る！相当気合い入ってますよ、今日は。
どうか、放送を楽しみながら仕事していって下さい。」

「ありがとうございます！そうさせて頂きます。」
雪見は笑顔で答えて、再びカメラを構えた。

「本番十秒前！5、4、3、2・・」
張りつめた空気の中、軽快なオープニング曲が流れ、いよいよ放送スタートだ。

「さぁ、今週もお待ちかねの金曜日がやって来ました！
『当麻的幸せの時間』この放送をお送りするのは、三ツ橋当麻です！
じゃあ、とっとと今日の相棒を呼んじゃおうかな？
先週の予告通り、本日のゲストは斎藤健人くんです！イエーィ！！」

「どうもーっ！またしても斎藤健人です！
いやぁ、悪いね！いっつも呼んでもらっちゃって。
大丈夫？リスナーさんから『もっと他のゲストを呼んで下さい！』とか
苦情来てない？」

「なに言ってんの！『毎週健人くんでもいいです！』とか、『いっそ二人の番組にしちゃえば！』とか、そんなのばっかだよ。
今にプロデューサーが『当麻と健人、交代ねっ！』とか言い出さないか
ヒヤヒヤもんです。」
そう笑いながら、当麻がガラスの向こうにいる三上を見る。

「大丈夫、大丈夫！その時は毎週当麻をゲストに呼んでやるから！」
健人の返しにプロデューサーを始めスタッフ一同、大爆笑！
雪見は、二人らしいやり取りだなぁと笑いながらシャッターを切った。

こんなテンポのいい二人の会話で、放送は順調に進んでゆく。
まるで長年連れ添った夫婦のように、阿吽の呼吸で。

間にコマーシャルを挟み、二人が一息コーヒーで喉を潤しているとき、
またしても二人一緒に雪見の方を見て笑った。
『一体さっきから私を見て何笑ってんだろ？』
雪見は小首を傾げて二人を見返す。すると今度は健人がピースした。
『どういう意味？』益々わけがわからない。

コマーシャルが終わり、また当麻が話し出す。
「じゃ、そろそろサプライズゲストをお呼びしようかな？
今日はね、もう一人特別なゲストを呼んでるんです！」

周りのスタッフがざわついてる。
「誰だよ、サプライズゲストって！そんなの台本にないぞ！」
雪見は誰が出て来るのか楽しみに、カメラを構えていた。

「どうする？健人。なんかドキドキするね！どういう展開になるのか予想もつかないけど、まっいいか！
ではお呼びします。本日のサプライズゲスト！
俺たちの友人でもあり姉貴分でもあり、そして事務所の後輩でもある動物写真家の浅香雪見さんです！どうぞお入り下さい！
って、入って来るわけないよね！プロデューサー入れちゃって下さい、その人。」

雪見は突然聞こえてきた自分の名前にビックリして、カメラを下ろす。
するとプロデューサーの三上が、「済みませんが中に入ってもらえる？
二人のたってのお願いなんで、許可しちゃったんです！お願いします！

あとは座ってればいいから！」と、半ば強引に放送ブースに押し込められた。
何が起こっているのか理解不能で立ち尽くす雪見を、健人が隣りに座らせる。

「済みませんね、リスナーさん！サプライズゲスト本人に、まったく知らされて無かったもんだから、今やっとマイクの前に座りました。で、改めて紹介します。動物写真家で…って紹介したら怒られるんだった！
えーと、猫カメラマンで、今は健人の写真集の専属カメラマンをしてる
浅香雪見さんです！ようこそ、ゆき姉！って、やっぱ、怒ってる？」

「怒ってるも何も、何これ？どういうこと？健人くんだって、朝から一緒に仕事してたのに、何にも言ってなかったじゃない！」
案の定、健人に食ってかかる。

「まぁまぁ、落ち着いて。全国に生放送なんだから頼むって！
じゃあ取りあえず、一曲挟むね。
その間にサプライズゲストさんには心を落ち着かせてもらって、と。
曲は「涙そうそう」の三線バージョンです。
この後たっぷりと俺たちの沖縄旅行の裏話をするんで、みんなもこれを
聞いて沖縄モードになって下さい。では。」
当麻が機転を利かし、曲の間に雪見をなだめることにした。
スタジオ中に、沖縄の風を感じるような三線の音色が響き渡る。

「あのね、これはさっきの打ち合わせで急遽決めた事だから、健人も来た時は知らなかったの！
ほら、見て。今そっちの部屋に入ってきた今野さんも、なんでゆき

姉が
マイクの前に座ってんの?って顔して驚いてる。
なんか美味い物おごるからさぁ、俺の番組に少しだけ付き合ってよ。
」

「でも私、何にも喋れないかもしれないよ!」

「大丈夫だって!俺と健人がいるんだから。いつも通り、酒飲みながら
三人でおしゃべりしてるみたいな感じでいいの!
それにあの流出動画の事、早いうちに俺たちの口から直接みんなに伝えた方がいいと思う。」

「俺もそれがいいと思うよ!今ならまだリカバリーできるはず。
ねっ、ゆき姉!そうでしょ?」
健人と当麻が雪見を見つめた。

その時、ハッと我に返ったように雪見が耳を澄ました。
「あ、これ『涙そうそう』の三線バージョンだ!
そう言えば民宿のおばさん、夜になって泡盛飲み出すといつも決まって
この曲を私にリクエストして歌わせるの。おじさんの三線の伴奏で。
おばさんの大好きな曲なんだ…。」
そう言いながら、雪見はこの歌を口ずさみ出した。

その途端、ガラスの向こう側にいたスタッフを始めプロデューサーも
驚いた顔をして雪見を見つめ、その歌声に聞き惚れていた。
と、突然当麻のイヤホンから三上の指示が聞こえてきた。

「当麻!この歌をオンエアしろ!早く!」

雪見の歌声と起死回生トーク！

当麻が三上からの指示に驚いてる。
「いいんですか！そんなことして！」

「大丈夫だ！責任は俺が持つ。じゃ、二番の歌詞からオンエアしろ！本人には気づかれないようにな！」
三上は、有名アーティストも手がける音楽プロデューサーでもあった。
その敏腕プロデューサーが、雪見の歌声を聞いて即座にそう決断した。
きっと何か考えがあるに違いない！
そう理解し、当麻は指示通りに動くことにする。

雪見は目をつぶったまま、すっかり自分だけの世界に浸り歌っていた。
心をこめて、まるでこの歌が雪見のために作られた歌であるかの様に。
周りの雑音など、一つも耳には届いてなさそうだ。

当麻はタイミング良く、スーッとオンエアのレバーを切り替えた。
全国に雪見の歌声が流れる。
目をつぶって聞き入ると、沖縄の風と香りを全身に感じることができた。
雪見の歌には不思議な力があると、以前から当麻は思っている。
声の質も表現力も聞く人の心に深く染み、いつの間にか癒やされた。
三上はこの後、どうするつもりなのか。

曲が終わった。目を開けた雪見はすっかり落ち着きを取り戻している。
当麻は何事も無かったかのように、話を再開させた。

「えー、『涙そうそう』の三線バージョンをお届けしました！
いいねぇ、沖縄。また行きたい！
やっとサプライズゲストの浅香雪見さんが落ち着いたので、改めて紹介
しましょう！猫カメラマンの浅香さんです！ようこそ来てくれました！
って、猫カメラマンより動物写真家って紹介した方が格好良くない？」

「いいの！猫カメラマンで。だって猫以外の動物は撮ったことないもん。
あ、お聞きの皆さん、初めまして！浅香雪見と言います。
ごめんなさいね！いきなりお邪魔して。みんな、健人くんと当麻くんの
おしゃべりを楽しみにラジオの前で待ってただろうに、余計な私が参加
しちゃって…。本当はガラスのあっち側で撮影の仕事中だったんです。
それがいきなりマイクの前に座らされたもんだから、お聞き苦しい場面
があった事をお許し下さい！」
雪見がスムーズに話し出したので、一同ホッと胸をなで下ろす。

「ごめんごめん！でも、せっかく沖縄の話をするんならゆき姉も一緒の
方が、楽しさがみんなにも伝わるかなぁーと思ってさ。

知らない人もいるだろうから改めてお話ししますと、
俺たち三人で沖縄行って来たんだよねっ！」

「当麻！そう言う言い方は誤解を招くでしょ！三人だけじゃないです。
スタッフやカメラマン合わせて総勢十名の、ちょっとした団体でした。
二泊三日の仕事だったんだよね。『ヴィーナス』のグラビアと、俺のクリスマスに出る写真集の撮影を兼ねての旅行だった。」

二人が撮影の様子や泊まった石垣島のプチホテルの話などをしていると
続々とリスナーからメールやファクスが届きだした。
そのほとんどは、「さっきの歌は誰が歌ってるのですか？」という問い合わせであった。
当麻は、もう少し雪見に喋らせてからこの事を伝えようと考える。

「でさ！竹富島でとんだハプニングが起きたんだよね、健人！」
いよいよ肝心な話に移る。三人の間に緊張した空気が漂った。
だが、さらっと話さなければ意味が無い。
ここは俳優、斎藤健人と三ツ橋当麻の本領を発揮せねばならない重要な
ポイントだ。

「そうなのそうなの！みんなに話したくてウズウズしてたんだ！
あのね、ゆき姉が…、あれ？ゆき姉が俺のはとこだって話したっけ？
言ってない気もするし、知らない人もまだいると思うから説明しますと
俺と雪見さんはおばあちゃん同士が姉妹なわけ。
で、俺が生まれた時からずっとお姉ちゃん代わりで、自転車の練習

とか
ドッジボールの練習とか、この人の鬼特訓のお陰で今日の俺がいる
って感じ？」

「なのに、本人は自転車が乗れなかった！という事実が今回の沖縄で
発覚しちゃったわけですよ！もう、あの時の健人の顔をみんなに見
せてやりたかった！
鳩が豆鉄砲を食らうって、こういう顔を言うんだ！って思ったもん、
俺。
イケメン健人の豆鉄砲顔、今度グラビアでやってもらえば？」
「おめぇ！人ごとだと思って言いたい放題言いやがって！
違うだろ！自転車の話もそうだけど、もっと凄い事をやらかしたで
しょ
ゆき姉さんは。」

「そう！俺が言っちゃってもいい？なんとゆき姉は、石垣島に戻る
船の
最終便の時間を勘違いしてて、俺たち三人石垣に戻れなくなっちゃ
ったのですよ！
ひどくない？財布とケータイとカメラしか持ってないのに。
あの時は卒倒しそうになったよ、俺。」
当麻がわざと大げさに言ってみせた。

「だって、仕方ないじゃない！わざとじゃないんだから。
私だって泣きそうになったわよ！」

「いや、本当に泣いてました、この人。
で、どうにもホテルに戻る手段が無かったんで、やむを得ずそのまま
レンタサイクル屋さんの民宿に泊まらせてもらったんだけど。
結構イカした民宿だったよね、当麻！」

「うん！俺、幼稚園の時以来だった！ああいうとこ。
トイレもシャワーも共同っていう、昔懐かしい正統派民宿っていうの？
でもって運悪く、おじさんがその日予約が一件も入ってなかったから、
って部屋のペンキ塗りをしたばっかで、一部屋しか泊まれるとこが無くて…。」

「で、仕方なく三人一緒の部屋に泊まったという、ここだけ聞くと凄い
話なんだけど、めちゃ楽しかったよねぇ～！修学旅行みたいでさ！」

「まぁ、女子と同じ部屋に泊まる修学旅行はないだろうけどね！
けど、ゆき姉は女子って俺たち根本的に思ってないから。」
と、当麻が笑いながら雪見を見る。

「えーっ！女子じゃなかったらなんなの？もしかして、おばさん？」
雪見が恨めしそうな目で二人をにらんだ。
すると当麻が、
「誰もそんなこと、言ってないでしょーが！ゆき姉は俺たちにとって、
良き姉貴と言うか気の合う仲間と言うか…ドジなお母さん？みたいな。
そんな感じ？」

「お母さん！？おばさんを通り越してお母さんなわけぇ？
まぁいいけどさ。どうせ私は君たちより一回りも年上だし…。
お母さんでいいです！こんなイケメン息子が二人もいて、お母さんは
嬉しいよ！って、そんな事言ったら本物のお母さんに叱られるでし

ょ！
ほんとにもう！」

三人が楽しげに一晩の事を語ったお陰で、リスナーからは
「流出動画を見た時はショックだったけど、今三人の仲良しぶりを聞き
いい関係の三人なんだなぁーと、微笑ましく思いました。」とか、
「今度この三人のトーク番組をやって欲しい！もっと二人のいろんな話
をゆき姉から聞きたいです！」と言ったメールが多数届いた。

どうやら当麻たちの作戦は成功したようだ。

思い出の三十分

三人への応援メッセージや質問、ファンになりました！と言うものまで
ラジオ局には多くのメールやファクス、問い合わせの電話が殺到し、パンク寸前の大騒ぎになってしまった。
プロデューサーはもちろんのこと当の本人たちも、あまりにも大きな反響に驚いている。

「いやぁ、凄い数のメールやファクスを頂いてるんですけど、俺たちが
喋りすぎたお陰で時間が無くなっちゃった！どうしようか？健人。」
当麻はもうそろそろ、雪見の歌がラジオに乗って全国に届いてしまった
と言うことを、伝えなければと考えていた。

「このメールをひとつ紹介して今日は締めるとしようか。
どうせまた来月も俺、呼んでもらえるんだよね？ね！
あ、どうせならまたゆき姉も一緒に連れて来ちゃう？まだまだ面白ネタ
たっぷりあるんだけど。」

「なによ！面白ネタって！何の話をバラそうとしてるわけ？
そっちがそう来るんなら、私だって健人くんの子供時代の笑える話、山ほど握ってるんですけど！」
雪見も負けちゃいない。

「おぉ、いいねぇ！ネタばらし合戦！次回をお楽しみにね、みんな！ってことで、健人、このメール読んでくれる？」

「ＯＫ！えーと、ラジオネーム　ジュピターさんです。
『今日発売のヴィーナス、買いました！』どうもありがとねー！
『健人くんと写ってたゆき姉がとても素敵で、どんな人なのかもっと
知りたいと思ってたところに、この突然のラジオ出演！感激しながら
聞いてました。ヴィーナスの健人くんとの対談に書いてあったので
すが
ゆき姉は歌も上手いとか。ひょっとして、さっき流れた歌声は、もし
ゆき姉の歌声ではありませんか？だとしたら、ＣＤを買いたいので
すが
どこから発売になってるのか教えて下さい。お願いします！』
だって！いかがですか？当麻くん。」

それを聞いていた雪見は、一体何の話をみんながしているのか、まるで
わからなかった。
なに？さっき流れた歌声って？ＣＤって、何の話？

「こーんなメールやファクスをたくさんもらってるんだけど、全部紹介
出来なくてごめんね！でも、凄いね！このジュピターさん。
よくぞわかりました！正解です！さっきの『涙そうそう』、途中から
歌ってたのは何を隠そう、この浅香雪見さんでした！」

「えっ？何が？えっ？まさか、さっき口ずさんでたやつ、ラジオに流れ
ちゃったのぉ？なんで？ねぇ、当麻くん！」
雪見が当麻を犯人とにらんで、詰め寄った。

「ちょっと待って、ちょっと待って！俺は指示されただけ！
本当の黒幕はプロデューサーの三上さんだから！
文句があるなら番組終わってから本人に言って！なんか考えがありそうだよ。
あらら、もうこんな時間！終了まで残り一分になっちゃった。
なんかバタバタしたまま終わりそうだけど、楽しかったね！
どう？健人は。」

「うん、すっげー楽しかった！またこれに懲りずに呼んで下さい！
ラジオの前のみんなも、またねっ！斎藤健人でした！」

「ゆき姉も最後に一言！」

「え？あぁ、あの、勝手に歌っちゃってごめんなさい！
来月号の『ヴィーナス』はこの三人の沖縄特集があります。良かったら
今日の話を思い出しながら、読んでくれたら嬉しいです。
あと、クリスマスの健人くんの写真集も楽しみにしてて下さいね！
当麻くんもたくさん載せる予定です。浅香雪見でした！バイバイ！」

「『当麻的幸せの時間』この番組は、三ツ橋当麻がお送りしました。
ではまた来週の金曜日にお会いしましょう。良い週末を。バイバイ！」

「はい！ＯＫです！お疲れ様でしたー！」
モニタールームからディレクターの声と、拍手が聞こえた。
ふぅーっ…とため息をつく三人。たったの三十分が何時間にも思えた。

ドアを開け、プロデューサーの三上が入って来る。
「お疲れ！いやぁ実に充実した三十分だった。楽しませてもらったよ。
リスナーからの反響も、番組始まって以来の凄さだったね！
今日だけで終わっちゃうのはもったいないよな、このトリオ。
どうだい。リスナーからのリクエストもあったことだし、この番組に二週間に一度、健人と雪見さんとで出てもらえないだろうか？」
三上の言葉に、健人と雪見は顔を見合わせた。

「ありがとうございます！そう言って頂けると、ゆき姉と一緒に出た甲斐がありました！けど、スケジュール的な事はマネージャーでないとわからないので…。あとで交渉してみてもらえますか？
俺はこの番組大好きだから、たくさん出れたら嬉しいな！」

「私はどうかなぁ。十月に入ったらいよいよ写真集の編集作業に入るし
発売日はクリスマスだから、ちょっと凝った創りにしたいし…。
あ！そうだ！それはそうと、さっきの『涙そうそう』全国に流れたって
どういうことですか！私はマイクが切れてると思って口ずさんだのに！
なんで流しちゃったんですか？恥ずかしくて冷や汗かきましたよ。」
雪見が少し強めの口調で抗議した。

「いやぁ、断りもなく済みませんでした！けど、聞いてからだと断ったでしょ？
直感です、長年の。俺は音楽のプロデュースの方が長いし、今まで勘が
外れたためしは無いんですよ、こう見えても。

あなたの声はちょっと独特なキーをしている。そのせいか、凄く耳に届くんです。心にも入り込んでくる。どこかで歌を歌ってたことは？」

「ありません。子供の頃合唱団にいたくらいで、その後は何も。」

「じゃあ、少し歌のレッスンをしてみませんか？多分ほんのちょっとの
レッスンでデビューできると思う。」

三上の言葉に、当麻も健人もひどく驚いた！

だが、当の雪見はいたって冷静で、淡々と三上に返事する。

「お言葉はとても有り難いです。そう言って頂けるだけで充分嬉しい。
でも、私は歌手になる気はまったくありません。
この写真集の仕事がすべて終了したら、健人くんの事務所との契約も解除してもらって、元の猫カメラマンに戻るつもりですから。
本当に今だけなんです。こうやって色々なことをやらせて頂くのは。」

雪見の決意は、いつでも揺らぐことはなかった。

健人はそれを聞かされるたび、心がぎゅんと痛くなる。

楽しい時間というものは、あっという間に終わるもので、
終わった瞬間から、寂しい気持ちへとフィードバックし始める。

またひとつ、雪見との大切な時間を終らせてしまった…。

そう思うのは健人も当麻も同じであった。

どうにかして雪見を引き留めておきたい。

それぞれが左手首の青いブレスレットに、祈りをこめた。

帰りたくない

沖縄の旅から二週間ほどが過ぎ、やっと吹き出した秋風がまもなく十月が訪れることを知らせてまわる。
九月も残すところ一週間余り。
相変わらず健人は毎日を忙しく過ごし、雪見もそれに連動して精力的に
最後の写真を撮り続けていた。
のんびりと夕日を眺めることができた沖縄時間が、もはや夢の中の出来事だった気さえする。

その日も二人は午後十一時過ぎに仕事を終え、クタクタになりながら車に身体を押し込んだ。
「はぁーっ、やっと終ったぁ！
今日は朝が早かったから、めちゃ一日が長かったよ！腹へったぁ…。」
健人が今野の車の後部座席で、シートに深く身体を沈めながらつぶやく。

沖縄から戻って以来休みなどは勿論あるはずもなく、それどころか連日
イベント続きで、さすがの健人もそろそろ充電が切れかかっている。
それは、帯同して歩く雪見も今野も同じなのだが、健人の体力的精神的
エネルギーの消費度合いを考えれば、申し訳なくて弱事など口には出せない。
この先も、まだ当分は休みなど作れないだろう。
今野はここらで一度、健人の充電池を満タンにしてやらないと
近々電池切れを起こしてしまうぞと、ルームミラーで後ろを見なが

ら思っていた。
よし！雪見にお願いするか！
目を閉じていた健人に今野が声をかける。
「健人！拾ってきた猫はどうした？少しは大きくなったか？」
「え？ラッキー？そういや沖縄から戻って来た日から一度も見てないや。
ゆき姉、ラッキーは元気にしてる？大きくなった？」
健人がシートから身体を起こし、雪見に尋ねた。
「うん、元気にしてるよ！もうすっかりめめとも仲良しになって、めめの後ろをくっついて歩いてる。めめの事、母親だと思ってるみたい！
本当はオスなのに。」　そう言って雪見は笑った。
「えーっ！めっちゃ可愛いじゃん！ラッキーに会いてぇ！」
それからしばらく、雪見と健人は猫の話で盛り上がっていた。
スーッと車が雪見のマンション前に止まる。
「あ、着いた！今野さん、ありがとうございました！また明日もよろしくお願いします。」
そう言いながら雪見が車を降りようとした時、今野が声をかけた。
「健人！お前も一緒に降りろ！」
「えっ？なに？」
「雪見ちゃん！お疲れのとこ悪いんだけど、健人に猫見せてやってくれるかな。

ついでに何か美味い物でも作って食べさせてやってよ！
明日もまた忙しいのに、このままじゃそろそろこいつ、へばりそうだから。」
突然の今野の言葉に、健人は大喜び！

「うそ！？ほんとにいいの？ラッキー見てきて。ご飯食べてきていいの？」

「あぁ！ただし雪見ちゃんがいいって言ったらの話だけど。」
今野が笑いながら雪見に頭を下げた。

「いいよ！私もお腹ペコペコだから、今なに作ろうか考えてたところ。
あ！今野さんもご一緒にどうですか？」
雪見が今野を誘ったので、健人は一瞬頬を膨らませた。
が、今野が断ったのでまた笑顔に戻る。

「明日は九時に迎えに行くからな！ちゃんとそれまでに用意しとけよ！
じゃ、雪見ちゃん、健人を頼んだわ。」
そう言って二人を降ろし、今野は愛妻の待つ自宅へと帰って行った。

健人と雪見は誰かに見つからないうちに、急いでマンションに駆け込み
エレベーターに乗ってホッとする。

「今野さん、私たちに気を使ってくれたんだね。」
「違うよ！早く奥さんのとこ、帰りたかっただけさ。」
「鈍いなぁ！ご飯の誘いを断った事じゃないよ！
ラッキーの話を突然健人くんに振った時から、今野さんは私たちを

二人きりにさせてくれようとしてたんじゃない！」
「えーっ！そうだったのぉ？ぜんぜん気が付かなかった！」
「まだまだ修行が足りんな！キミは。」

エレベーターが雪見の階に到着し、周りを気にしながら大至急玄関の鍵を開ける。
バタンとドアを閉め鍵を掛けて振り向いた瞬間、いきなり唇をふさがれ
二人は長い長いキスをした。
静かに唇を離したあと健人は、「ずっとこうしていたい…。」と雪見を
抱き締め、しばらくのあいだ玄関先で身じろぎもせずに、ただ雪見の温もりを感じて心を休めていた。

そこへ、にゃーん！と鳴きながら足元にめめとラッキーが寄って来た。
その瞬間、健人はパッと雪見から身体を離し、身を翻してしゃがみ込んだ。
「ラッキー！元気だったか？なんかしばらく会わないうちに大きくなったな！
めめもお世話をしてくれてありがとな！よしよし！」
と、二匹の頭を交互になで回す。

雪見は、「ラッキーに負けちゃった！」と笑い、少し元気になった健人を見て一安心した。
「よしっ！急いでなんか美味しい物作るねっ！こんな所で遊んでないで
中に入ってラッキーたちの相手をしてやって！」

健人が猫じゃらしやボールで猫の遊び相手をしてやると、二匹は夢

中に
なって走りまわる。
その愛らしい仕草に健人は癒やされ、どんどんエネルギーが補充されていくのがよくわかった。
それもそのはず、ラッキーは健人の実家で飼っているプリンの子供時代
にそっくりで、めめは虎太郎と性別こそ違えど全く同じ茶トラ猫であった。
ラッキーを拾ったことで、健人は実家に帰らずして実家の愛猫と遊んでいる感覚を、
ここ雪見の家で味わうことができるのだ。
雪見も健人も、これはただの偶然ではないと思っている。
きっとラッキーは、二人の元にやって来るために生まれたのだ。
そう思うだけで愛しさが倍増する、猫バカな健人と雪見であった。

「健人くーん！ご飯できたよ！」
雪見に呼ばれ手を洗ってダイニングに行くと、テーブルの上にはすでに
たくさんの料理とワインが準備されていた。

「すっげー！俺がラッキー達と遊んでるあいだに、こんなに作ったの？
しかも全部美味そう！ゆき姉ってほんと、いい奥さんに絶対なれるよね！」

「だといいんだけどねっ！さぁ、冷めないうちに食べよう！
もうお腹、ぺっこぺこ！じゃ、お仕事お疲れ、乾杯！」
久しぶりの二人だけの食事は、話もはずみお酒も美味しくて、いつまで
たっても終る気配がなかった。

ふと時計を見ると、すでに日付が変った午前二時過ぎ。

「健人くん、大変！もうこんな時間だよ！タクシー呼んであげるから急いで帰らないと！」

雪見が慌ててタクシー会社に電話しようとしたとき、健人がぽつりと「帰りたくない…。」とつぶやいた。

「今日は俺、帰りたくないから…。」

インフルエンザ？

「帰りたくない、って…。ダメだよ、帰らなきゃ！
明日も仕事だし、もし万が一ここに泊まった事が週刊誌にでもバレたら
大変な騒ぎになっちゃうよ！」

「やだ！ゆき姉と一緒にいたいんだ…。今日は帰らない。」

疲れた身体にワインが効いたのだろう。頬を赤くして目は潤み、
どこかぽわんとした今日の健人は、やけにわがままを言ってくる。
雪見だって、健人と一緒にいたいに決まってる。
だが、今はこれ以上週刊誌を騒がせる訳にはいかない。
ここまでは、なんとか一つずつ取り繕ってこれたが、この先も
上手くいくという保証はどこにもないのだ。

「健人くん。明日も一日、ずっと一緒に仕事だよ！
明日は金曜だから、また当麻くんのラジオの仕事もあるじゃない。
あ、もう日付が変ったから今日がラジオかぁ。また緊張するなぁ！
健人くんと当麻くんのフォローがないと、私無理だからねっ！ヨロシク！」

二週間前に健人と二人でゲスト出演した当麻のラジオ番組が、あまりの
大反響を受けてプロデューサー直々に二人の事務所と交渉が行なわれ、
結局健人と雪見は、隔週で当麻のラジオに出る事になってしまったのだ。
雪見は渋々だったが、健人と当麻はハイタッチをして喜び合った。

「そうだ！明日はラジオ終ったら、久しぶりに三人で飲みに行こうか！
だから今日は帰って身体休めないと。最近、相当疲れが溜まってるよ。
カメラ覗いてると、よくわかるもん。さぁ、帰ろ帰ろ！」
そう言いながら、雪見は健人と手をつなごうとした。
手を握った瞬間、しまった！と思った雪見。

「ち、ちょっと！健人くんの手、異常に熱いんだけど！もしかして熱があるの！？」
おでこに手を当てた雪見が驚いて、すぐに手で健人の頬を挟んだ。

「うそでしょ！凄い熱だよ！なんでもっと早く気が付かなかったんだろ、私。
あんなに赤い顔してたのに。ごめんね、健人くん！
帰りたくなかった訳、今頃気づくなんて…。
とにかく、ここに座って！今、体温計持ってくる。」
雪見が救急箱と毛布を持ってきた。
熱が上がり出した健人は寒気がするらしく、ガタガタと震え出す。

「いやだ！３９．４度もあるじゃない！どうしよう！ええと、まずこの解熱剤飲んで！
飲んだ？そしたら私のベッドに寝てて。今、湯たんぽ入れて来る！」
雪見がキッチンにお湯を沸かしにすっ飛んで行った。
お湯が沸くまでの間、今野に連絡を入れなくちゃ！と思いつく。

「今野さん、こんな夜中に怒るだろうなぁ。なかなか出てくれないや。
あ！今野さん？雪見です。ごめんなさい、起こしちゃって！

健人くんが大変なんです！私の家で凄い熱出しちゃって。３９．４度もあるんです！

えーっ！嘘でしょ？今野さんも３９度も熱あるんですか？

えっ？そうだったの。じゃ、インフルエンザの可能性が高いですね。私？私は予防接種受けてます。けど健人くんは受けてませんよね？

はい、はい、ええわかりました！じゃ、今野さんもお大事に！」

「今野さん、なんだって？」うとうとしながら健人が聞いた。

「どうやら今野さんからインフルエンザ、もらったっぽいよ！

今野さんの息子さんが今、インフルエンザで幼稚園休んでたんだって。

それを今野さんと健人くんが、お裾分けしてもらったみたい。

今野さん、健人に申し訳ない！って謝っておいて、って。

明日の仕事はキャンセルしておくから、病院に行ってゆっくり寝てろ！

って言ってたよ。」

「ホントに？明日休んでいいって？やった！ありがとう！今野さんの息子よ！

あ、でも当麻のラジオも出れなくなっちゃった。残念だな。

ゆき姉だけでも出てね！当麻、めちゃめちゃ楽しみにしてたから。」

「うん。それは今野さんにも言われた。最初から二人で穴をあける訳に

いかないから、って。健人くんファンには申し訳ないけど、私だけで勘弁してもらうよ、明日だけは。」

雪見は気が進まなかったが、健人や当麻、事務所の為と思って我慢だ。

「じゃあ、今晩は安心してゆっくり眠ってね！もう、帰れなんて言わないから。
私は隣の部屋で写真整理してるから、何かあったらすぐ呼んで。
じゃ、お休みなさい！」
そう言いながら、雪見がベッドサイドの電気を消そうとすると、突然健人が雪見の腕を掴んだ。

「ねぇねぇ。俺が寝るまでここにいて。」
健人は自分に掛けられた布団をめくり、雪見に隣りに来るよう、熱で潤んだ瞳でお願いした。

「えーっ！もう幼稚園児だってそんなお願いしないよ！困った子供だ。
仕方ない！お母さんが子守歌でも唄ってやるか。」
雪見は笑いながら健人のわがままを聞き入れ、ベッドの中に潜り込む。

「うわっ！まだめちゃくちゃ熱いよ、健人くん！早く薬が効くといいけど。
明日は病院行こうね！私が車に乗せて行くから。」

「ゆき姉とこうしていられるなら、熱なんて下がらなくてもいいや！」
そう言いながら、健人が素早く雪見にキスをした。

「ちょっと！私にも確実にうつるでしょ！いくら予防接種してたって、
完全にうつらないって訳じゃないんだから！
健人くんが治った頃に、私が熱出したらどうすんのよ！」

「そしたら今度は俺が看病してあげる。一晩中ゆき姉の髪を撫でて、子守歌を唄ってあげるから。
俺、今思い出した！ずーっと子供の頃の夏休みに、一人でゆき姉んちに泊まりに行って、夜中に熱出したこと。母さんもいなくて心細くて布団の中で泣いてた時、ゆき姉がそっと隣りに寝てくれて、子守歌を唄ってくれたんだ。もう子守歌って年でもなかったけど、妙に安心していつの間にか眠った
記憶がある。
もしかしたら、あの時から俺はゆき姉を好きだったのかも知れない。」

健人が熱い唇で、何か言おうとした雪見の唇をふさいだ。
もうインフルエンザがうつってもいいや！と、雪見が健人を抱き締める。
と、その時！二人の布団の上にドスン！と、めめとラッキーが飛び乗った。

「重っ！重いって！お前達、なんでいいとこで邪魔しに来んだよ！腹の上じゃなくて、足元に寝てくれよ！」
健人が、めめの重しをお腹に乗せてるあいだに、雪見がぴょんとベッドから飛び降りた。

「はい！じゃあ後はめめとラッキーに添い寝してもらってねっ！私は仕事の続きがあるから。じゃ、本当にお休みっ！また明日。」

雪見はパチンと部屋の明かりを消し、ドアを閉める。
おやすみなさい、かわいい人よ…。

不安と安堵

朝六時。結局雪見は一時間ほどソファーで仮眠を取っただけで、あとは
写真の整理と健人の様子見で夜を明かした。
そっと健人のおでこに手を当ててみる。どうやら高熱は下がったようだ。
だが、まだ完全には下がりきってないので、目を覚ますまで寝かせておくことにする。

顔を洗って身支度を調え、静かにフロアモップでフローリングの床を掃除する。
それから家の中にたくさん置いてある観葉植物に水をやった。
健人には、食欲が無くても少しは口に出来そうな物を何品か用意する。
他にすることが無くなったので、健人のベッドサイドにそっと座り、その美しい寝顔をとくと鑑賞してみた。
ベッドの上の足元には、めめとラッキーが二匹寄り添い丸くなってる。
健人も幸せそうな顔をして、まだ熟睡しているようだ。
朝の光がカーテンの隙間から健人の顔に降り注ぎ、まるでグラビア撮影の
ワンシーンかと錯覚してしまいそうな、絵になる風景だった。

「そうだ！写真に撮っちゃえ！」
小さくつぶやいて、そっとカメラを取りに行く。

『イケメンって、ほんとにどんな時でもイケメンなんだなぁ。
まさかこの写真が３９．４度熱を出した後とは、誰も思わないだろ

うね。』
そう思いながら、シャッター音で健人が目を覚ますことを想定し、ワンチャンスで完璧な構図を狙う。
「カシャッ！」あれ？起きないや。
「カシャッ、カシャッ！」
まったく目を覚ます気配がないので、少々心配になる。
カメラを置き、またベッドサイドに腰を下ろして健人の頬に触れてみた。
すると突然、ガバッと健人が雪見を抱き締めるではないか！

「やっと捕まえた！なかなかゆき姉、罠にかかってくれないんだもん。」

「罠ぁ？もしかして、ずっと起きてたのぉ？」
雪見がビックリした顔で、目の前の健人に聞いた。

「『そうだ！写真に撮っちゃえ！』で起こされた。
ゆき姉にかかったら、おちおち熱出して寝てもいられないや！
ちゃんとギャラ、もらわないと！」
そう言いながら、健人は雪見にキスをした。

「キスする元気があるなら大丈夫だね！良かった！
でもまだ熱は下がりきってないよ。朝イチで病院に行かなきゃね。
何か食べられる？健人くんの好きそうな物、作ってみたけど。」

「うん！腹減った！けどその前にシャワーしていい？汗かいた。」
健人は雪見から手を離し、猫たちを起こさないよう静かにベッドを降りた。
シャワーを浴びているうちに雪見は、こんな日のために密かに用意しておいた

着替えを脱衣所に置き、野菜スープを温め直す。
さっぱりして気分の良くなった健人は、その食べるスープを美味い！美味い！と言いながら平らげた。
コーヒーを飲みながら雪見は、健人と一緒に暮らしたら毎日が楽しいだろうな、と思う。
健人もまた、雪見とのこんな日々を夢見ていた。

昨夜今野から教えてもらった、事務所のタレント行きつけの個人病院に
朝イチで電話すると、診療開始前に見てあげると言われ、雪見は健人を
乗せて病院へ向かった。
検査の結果、やはりインフルエンザだったので、すぐさま今野に電話を入れる。

「あーあぁ、やっぱりかぁ！けど今野さん公認でゆき姉んちに泊まれるんだから、ラッキー！」
健人はメチャメチャ嬉しそう。

「そんなに元気なら、仕事に行ってもいいんじゃない？」
雪見がわざと意地悪言うと、健人は
「ダメ！先生も周りにうつすから、まだダメだって言ったもん！」
とムキになった。そんな子供みたいな健人が大好きだ。

雪見のマンションに二人で戻り、健人は病院からもらった薬を飲んで猫と遊び出す。
雪見はその間にベッドのシーツ類一式を取り替え、健人の服や下着と一緒に

洗濯機に放り込み、窓を開けて新鮮な空気を部屋の中に取り込んだ。

「うーん、気持ちいいっ！なんか俺たち、新婚さんみたいだねっ！」

ベランダで伸びをひとつして振り返った健人が、はにかみながら雪見に言った。

雪見もそう思っていたが、なんだか恥ずかしくていつもの口調で

「なに言ってんの！まだ熱があるんだから大人しく寝てなさいっ！」

と、笑いながらつれない返事をする。

思いがけず神様からもらった、幸せな幸せな休日だ。

午後三時。雪見はラジオ局に行くための準備を始める。

健人の夕食にカレーライスを作り、サラダは冷蔵庫に入れた。

着ていく服を迷っていると横で健人が、

「ラジオなんて服は見えないんだから、何でもいいじゃん！」と言う。

「えーっ！健人くんは彼女がどんな格好で出掛けても平気なわけ？

自分は人一倍、着る物にこだわりがあるのに。」

雪見が少しブーたれた口調で健人に抗議する。

「違うよ！当麻のためだけにおしゃれしないで欲しい！」

健人の口から予想外の返事が飛び出し、雪見は驚いて健人の顔を見た。

「えっ？そんなこと考えてたの！？本気でそんなこと言ってんの？」

健人の顔は本気とも冗談ともつかぬ顔をしている。

だが最近、健人の心がさざ波立っていることは、毎日接している雪見が
一番よく知っていた。
理由は多分、あと少しで写真集の撮影を終了するため。
撮影が終れば健人の仕事場に雪見が付いて行く事もなくなる。
二ヶ月間、大好きな雪見が自分のそばで、自分だけを見つめてくれていた。
そんな幸せな日々が、十月に入ると同時に消え去ってしまう恐怖。
ただ二ヶ月前までの生活に戻るだけなのに、健人は雪見のいない仕事場を
想像しただけで気が滅入っていた。

雪見は背中からギュッと健人を抱き締め、穏やかな声で健人に話しかける。
「大丈夫！私はどこへも行かないし、これからもずっと健人くんのそばだけにいる。
他の誰も見つめたりはしないし、第一健人くん以外の人に興味はないから。
毎日は会えなくなっても、心は繋がってるよね？私たち。」

「うん、繋がってる。俺もゆき姉以外は考えられないから。
会いたくなったらまたここに来てもいい？」
健人が振り向いて雪見に聞いた。

「もちろん！そのために合い鍵、作ってあげたでしょ？
今度、健人くんがいつも使ってるシャンプーとか歯磨き粉、買っておかなきゃね。」
雪見の言葉に、やっと健人が笑顔になった。

「じゃ、用意して仕事にいくね！カレーは温め直して食べてよ。

冷蔵庫にサラダも入ってるから。
ラジオ、そこにあるからちゃんと聞いててね！」

雪見は玄関先で健人とハグをし、めめとラッキーの見送りも受けて
当麻の待つラジオ局へと一人で向かった。

「今日は私一人で行かなきゃならないのか…。ふぅぅっ、緊張するな。
でも当麻くんがいるから何とかなるよね。よし！乗り込むとするか！」
雪見はラジオ局の入る高層ビルを見上げ、一人自分に気合いを入れてから歩き出す。

「おはようございます！今日は斎藤健人がキャンセルで申し訳ありません！」
放送室のドアを開け、まずは真っ先に健人の急病を詫び頭を下げる。
本来ならマネージャーである今野の仕事だが、今日はその今野さえもインフルエンザで休みなのだから、雪見が詫びるよりほかなかった。
局には事務所から朝一番に連絡済みなので、雪見は今野の指示通りに買ってきた、かなり奮発した手土産をスタッフに渡す。

「いやぁ、健人くんもマネージャーさんもインフルエンザだって？浅香さんは大丈夫だったの？」とか、
「うちの局でも先月流行って大変だったんだから！」などとスタッフは皆、気を使って優しい言葉を掛けてくれる。
雪見は取りあえずはホッと一安心した。
あとは中にいるプロデューサーとディレクター、それに当麻に挨拶して
打ち合わせに参加しなくてはならない。
急いでブースのドアを開け、中に入る。

「おはようございます！済みません、遅くなりました。
今日は本当に申し訳ありません！私一人になってしまって。」

「おはよう！ゆき姉！待ってたよ。健人は大丈夫？」
マイクの前で台本に目を通していた当麻が、すぐに声をかけてきた。

「うん、大丈夫！今朝病院に連れてったから。まだ熱は下がりきってはいないけど、猫と遊ぶ元気があるんだから、大丈夫でしょう！」

「なに？健人、ゆき姉んちにいるの？」

しまった！と雪見は自分の無防備な発言を悔やんだが、後の祭り。
プロデューサーもディレクターも、一斉に雪見を見る。
どうしよう！今野に叱られる！

「なになに！健人は雪見さんちで熱出しちゃったわけ？そんでそのまま雪見さんちにお泊まりしてんの？あいつもなかなかやるねぇ！」
健人と仲の良いディレクターが、真っ先に食いついた。
当麻も、まずいぞ！これは…という顔をして雪見を見た。
そしてすぐに何かいい考えを思いついたらしく、大きな瞳をさらに大きくして
雪見とディレクターに提案する。

「ねぇ！健人が元気なら、電話でラジオに参加させるってのはどう？先週告知しちゃったから、健人にいっぱい葉書やメール届いてるんだよね。
健人が出るのを楽しみに、ラジオの前で待ってる人が大勢いると思うし
インフルエンザで休みだって言ったら、みんな心配するだろうし。
だから電話でワンコーナーだけでも繋いで、元気な声を聞かせた方が

騒ぎが少なくて済むんじゃない？」
当麻の機転を利かせた意見に、健人が雪見の家に泊まってるという話題
から、パッと話の方向が切り替わった。

「いいねいいね！それで行こう！当麻、健人に電話して説明しておけ！
俺はどのコーナーを健人に繋ぐか、大至急話し合うから。」
ディレクターとプロデューサーがブースを出て、スタッフと相談してる間に、
当麻は健人のケータイに電話を入れる。

「あ、健人？俺！インフルエンザだって？大丈夫か？
まぁ、ゆき姉から話を聞く限りは大丈夫そうだけどね。
でさ、今、急に決まった話なんだけど…。」
そう切り出して当麻は、健人に電話でのラジオ出演を交渉。
健人は即答で了承したらしく、雪見に向かって当麻がＯＫサインを出した。

「あいつ、本当に熱あんの？電話でラジオに出られる？って聞いたら、
めちゃくちゃハイテンションで騒ぎまくってたけど。
あんだけ元気あるなら心配ないわ。」当麻が安堵の表情を見せる。

「昨日の夜なんて、３９．４度も熱出たんだよ！もう、どうしようかと思ったんだから！
今日のラジオ、すっごく楽しみにしてたのに出られなくなった、って落ち込んでたから、電話ででも出れる事になって嬉しいんだと思う。」
雪見が健人の気持ちを代弁したが、そう言う雪見自信も嬉しかった。

無名に近い雪見だけがラジオに出て、一体誰が喜ぶと言うのだろう。
そんな申し訳なさで一杯だったから…。

その時、当麻が「あっ！それ！」と、雪見の耳を指差し微笑んだ。
雪見の耳には、石垣空港で当麻からもらった青いピアスが揺れていた。
まだ一度も付けていなかった、沖縄ブルーのガラスのピアス。
当麻が、健人には内緒だよ！と言いながらくれたので、どうしても健人
の前では付ける気になれなかった。
だが、人からもらった物は、一度はその人の前で付けて見せるのが大人の礼儀だと雪見は思っているので、そのタイミングを探していた。
それが今日突然やってきたので、スタジオに入る前にトイレでピアスを付け替えたのである。
そんなにコソコソとするのは、自分の中にもどこか後ろめたい気持ちが
あるからか。内緒だよ！なんて当麻が言うから…。

雪見はあえてさらっと流すように言った。
「あぁ、これ？当麻くんがくれたやつだっけ？
今日の服に合うかな？と思って。それにこれとお揃いだし。」
そう言いながら雪見は、左手首の青いブレスレットを当麻の前に突きだした。
すると当麻も左手首を雪見の前に差し出す。
健人と三人でラジオをやる日には、このお揃いのブレスレットを付けて
集合しよう！と、当麻が提案したのだった。

「思った通り、ゆき姉に似合ってるよ、そのピアス。

ぜんぜん付けてくれないから、無くしちゃったのかと思った。」
当麻が嬉しそうに言ったので、やっぱり気にしてたんだと雪見は思う。

「さぁ、今日の相棒は頼りにならない上にしゃべりも苦手なんだから、
当麻くんがしっかりリードしてくれないと、とんでもない三十分になりかねないよ！
自分の番組ぶち壊されたくなかったら、私のコントロールちゃんとお願いね！」

「任せておけって！俺は健人の次にゆき姉のこと、よく知ってるつもりだから。
俺のこと信じて付いてきて。」

「うん！わかった。」

その日の当麻は、いつになくたくましく自信に満ち溢れ、落ち着いた態度が
雪見に安心感を与える。

健人よりもひとつ年下なのに、大人の男を感じさせる瞬間に度々遭遇し
雪見は自分が少しドキドキしていることに気が付いた。

二人のＤＪ

「じゃ、本番行きます！十秒前！８、７、６…」
カウントダウンが始まり、雪見の緊張は極限にまで達していた。
それをどうにかしてほぐそうと、当麻が二秒前までヘン顔をして笑わせようとする。
オープニング曲の最中、堪えきれなくなってクスクス笑い出した雪見を
当麻は「良かった！そのまま笑ってて。」と微笑んだ。

「さぁ、今週もお待ちかねの金曜日がやって来ました！
『当麻的幸せの時間』、この放送をお送りするのは、あなたの三ツ橋当麻です！
ってことで、始まっちゃいましたよ、今週も！
なんか一週間って、めちゃ早くない？
あ、みんなの中にはこの日が待ち遠しくて、一週間がめちゃ長かった！って人もいるだろうね。
それは今日の相棒くんのせいでもあるかな？
先週お伝えした通り、今週から十二月まで隔週でこの二人が僕の相棒に
なってくれます！
ご紹介しましょう。斎藤健人と浅香雪見さんです！」

「こんばんは！猫カメラマンの浅香雪見です！今日から二週間に一度、
この番組のお手伝いをさせて頂くことになりました。
あんまりお喋りは得意分野じゃないんですけど、当麻くんの足を引っ張りながら
みなさんと一緒にこの番組を楽しみたいと思いますので、どうぞよ

ろしく！」

「おいおい！『足を引っ張らないように』じゃなくて、『足を引っ張りながら』なわけ？
先が思いやられるなぁー！まぁ、ゆき姉には多くを期待してないから、
リスナーさんと一緒に番組を楽しむってスタンス、いいと思うよ！」

「ちょっと！『多くを期待してない』って、それもあんまりだと思うけど。」

当麻のリードによって、オープニングは順調な滑り出しだ。
緊張の中で見守っていたスタッフ達にも安堵の表情が広がった。
あとは、健人の事をリスナーに上手く伝えなければならない。
当麻の腕の見せ所である。

「ところで、肝心の健人がいないけど、トイレにでも行っちゃった？
おーい！けんとーっ！」

「もしもーし！斎藤健人でーす！当麻、聞こえる？」

「うわっ！健人がここにいないのに声だけ聞こえる！」

「なに、くさい芝居してんの！すみませーん、みなさん！
実は俺、インフルエンザにかかっちゃって、今日はスタジオに行けなかったんです！
今、自宅から電話で繋いでもらって話に参加してるとこ。
この次には絶対治ってまたスタジオからお送りするんで、今日の所は電話で勘弁して下さい！
あ、俺ならこの通り元気だから安心して！

ただ、まだうつしちゃう時期だからそっちに行けないだけで、本当は黙ってりゃバレないかな?とか思ったんだけど…。」
健人は、今から行ってもいい?と真面目な声で当麻に聞いた。
いいと言われりゃ今すぐ飛んできそうなほど、スタジオに来たがった。

「なに言ってんの!来なくていいから。今日は大人しく家に居なさい!
その代り、ガンガン話に入ってきていいから。
あ!ケータイの充電だけは切れないようにしといてよ!
じゃ、本日はこんな感じでスタートです。
では最初の一曲。斎藤健人が大好きなミスチルの『花火』です!
これ、俺からのお見舞いだよ。受け取ってね!」

何とか上手くいったようだ。
当麻が初めて、ふぅーっ!と一息つく。
そして、まだ緊張した面持ちで向かいに座る雪見ににっこりと微笑み、「ファイト!」と励ました。
当麻に笑顔でそう言われると、なんだかとても勇気が湧いてくる。
当麻のためにも頑張らなくちゃ!と雪見は自分を奮い立たせた。

すべてが当麻のリードによってスタジオと健人、リスナーとが上手に結ばれ、
曲やおしゃべり、リスナーからのメッセージの紹介などが予定通りに進んで行く。
雪見もいつの間にかすっかり当麻のペースに巻き込まれ、会話を楽しむ
余裕さえ生まれてきた。

「じゃ、そろそろ俺の『今月の発表会』に行っちゃおうかな?

ゆき姉の前で、メチャ緊張するんだけど！」
そう言いながらおもむろに立ち上がり、用意されたスタンドマイクの前に移動する。

『今月の発表会』とは、毎月最後の放送日にプロデューサーの三上から
課題曲が発表され、それを次の一ヶ月間当麻が一生懸命練習して、また
月末の放送でみんなに披露する、という企画だった。
ほぼ一年前から始まったこのコーナーは、今やこの番組の看板企画となり、
なんとこの十二月には、今まで当麻が歌った全曲を収録したＣＤを制作し、
視聴者にクリスマスプレゼントとするというビッグな話になっていた。

「えーと、先月の課題曲は福山雅治さんの『桜坂』だったんだけど、これは俺の大好きな曲で、元々カラオケでもよく歌ってたから今までで
一番自信あるかな？ゆき姉も聞いたことあるよね、俺の『桜坂』。」

「うん！当麻くんの十八番だ！これが課題曲だったから、こればっかり
歌ってたんだ！なんで他の歌歌わないのか不思議だった。
けど、確実に上手くなったと思うよ。耳にタコ出来るほど聴かされた私が言うんだから間違いない！自信持って歌ってね。
これ、一発勝負なんでしょ？私の方が緊張してきた。頑張れ、当麻！」

静まりかえったスタジオにイントロが流れ、当麻は目を閉じて歌の

世界に
集中する。左手の青いブレスレットを右手でギュッと握り締めた。
そして心を込めて歌い出す。目の前の雪見に捧げるように…。

元々歌は上手い方なので、最近はミュージカルの仕事も多い当麻。
その当麻が、大好きな曲を大好きな人のためだけに歌う。
今までで一番感情がこもって聴く者の心を揺さぶる歌声に、モニター室
で聴いていた音楽プロデューサーでもある三上が唸った。

「凄いな！今日の当麻は。これ、リスナープレゼント用にだけ録音するのは
どう考えてももったいない出来だ。事務所に交渉だな、早速。」
三上は、商業ベースでのＣＤ発売を考えていた。
と同時に、あるいい考えも思いつき、急遽来月の課題曲を変更する。
当麻が上気した頬で雪見に感想を求めた。「どうだった？俺。」

「すっごい良かったよ！今まで聴いた当麻くんの歌の中で、一番感動した！
泣きそうになったもん、私。」

「なんだ！泣いてくれなかったの？ゆき姉のためだけに歌ったのに。」
そう言ってすぐに、しまった！また失言しちゃった！と内心焦る当麻。

「さぁ！じゃ三上プロデューサー、来月の課題曲をお願いします！」
と、すぐに話をそらした。

「えー、来月の課題曲はこれ！絢香×コブクロの『ＷＩＮＤＩＮＧ　ＲＯＡＤ』です！
これを、雪見さんと当麻、健人の三人に歌ってもらう！」

「えーっ！嘘でしょ！私も歌うのぉ？」
雪見も驚いたが、ラジオの向こうの健人も同時に驚いていた！

三人の課題曲

「うそっ！俺たち三人で歌うの？しかも、こんなに難しい曲を？」
当麻が言う通り、絢香×コブクロの『ＷＩＮＤＩＮＧ　ＲＯＡＤ』は、綺麗にハモれば
格好良く決まるが、三人の息がピッタリ合わなければ全てが台無しになるような、
とても難しい曲でもあった。

「十月は健人くんも当麻くんも、新しいドラマがスタートするんだよ！
どう考えたって忙しいのに、三人集まって練習する時間なんてある？」
雪見が無理じゃない？と、当麻に聞いた。

「無理でも何とか頑張るのが、このコーナーの意義なの！
俺はやれると思うよ。今までも忙しい中、どうにかしてきたんだから。
健人！健人はどう？多分俺と同じようなスケジュールだろうから
忙しいに決まってるけど、どうする？
もし二人が無理だって言うなら、元々は俺だけの企画なんだから課題曲を
変更してもらって、また俺一人で歌ってもいいんだけど…。」
ラジオの向こうの健人に話しかける。

「やるに決まってんでしょ！こんな面白そうなチャレンジ、当麻だけに
楽しまれたら悔しいもん！歌の練習が、仕事の丁度良い気分転換になりそうだし。

ゆき姉！もちろんゆき姉もチャレンジするよね？俺たちと一緒に。」
顔こそ見えないが、健人の声は嬉しそうにウキウキと弾んで聞こえた。

「健人くんと当麻くんがやるって言ってんのに、私がやらないなんて、
言えると思う？やります。やらせていただきます！」
雪見の力強い宣言に、当麻とラジオの向こうの健人が同時に「やった！」と叫んだ。

「じゃ、決まりだね！来月の課題曲は『ＷＩＮＤＩＮＧ　ＲＯＡＤ』に決定！
みなさん、一ヶ月後をお楽しみに。
では、今日最後の一曲、この『ＷＩＮＤＩＮＧ　ＲＯＡＤ』を聴きながらお別れです。
この歌、凄く元気が出る曲で、俺も大好き！
一ヶ月間一生懸命練習して、みんなにも元気があげられるように頑張るからね。
では、また来週をお楽しみに。
『当麻的幸せの時間』この番組は三ツ橋当麻と、」

「浅香雪見がお送りしました。」

「みなさん、良い週末を。バイバイ！」

『♪曲がりくねった道の先に　待っている幾つもの小さな光
まだ遠くて見えなくても　一歩ずつ　ただそれだけを信じてゆこう♪』

絶妙なタイミングで曲がかかり、当麻たちの出番はこれで終了。

雪見も取りあえずは大きなミスもせず、何とか最後までこぎ着けた事を
心から安堵した。
だが今度は、今かかってる曲に耳が釘付けになり、果たして本当にこの歌を
自分が歌えるのかが心配になってくる。

「歌うって宣言しちゃったけど、マジで相当練習しないとヤバイよ！キーも、原曲のままだと当麻くん達がきついから、少し下げた方がいいね。」そう言いながら雪見が、流れる曲と一緒に歌い出した。

「さっすが、ゆき姉！すでにほぼ完璧じゃないの？
こりゃ、俺と健人が必死に練習しないと、追いつけないや！
健人、まだ電話繋がってる？」

「おぅ！お疲れ！ゆき姉はまた自分の世界に入って歌ってるな？
俺のインフルエンザが治るまでは当麻に近づくな！って今野さんに言われてるから、
しばらくはお互い自主練だね。治ったら三人でカラオケ行って特訓だ！
なんか俺、すっげーワクワクしてる。だって、この三人の歌がＣＤになるんだよ？
メチャ嬉しいんだけど！」
健人の熱も、とうに下がったようだ。
この勢いで今カラオケ行きたかったなぁー！と残念そうに言う。

「健人は明日も仕事休まなきゃならないんでしょ？いいなぁー！
俺もうつしてもらおっかな？」

「何言ってんの！この後が大変なんだぞ！仕事に穴開けたんだから

…。

とにかく俺治ったら、一度カラオケ行こうね！じゃ、電話切るよ。
みんなによろしく言っといて！
あ！ゆき姉に、寄り道しないで帰ってこい！って伝えて。じゃ！」
そう言って健人は電話を切った。

「寄り道しないで帰ってこい！って…。まるで夫婦じゃないか…。」
まだ歌ってる目の前の雪見を見つめながら、当麻がつぶやいた。

「あーあぁ、やっぱり難しいわ、この曲！一人一人が完璧に自分の歌
仕上げた後、相当三人で歌合わせしないと…。
あれ？健人くんは電話、切っちゃった？」
最後まで歌い終わった雪見が当麻に聞く。

「あ、うん。みんなによろしく！って。それより、これ終ったら飯
でも
食いに行かない？二人で反省会しよう！俺おごるから。」
健人からの伝言は伝えたくなかった。
いつもはそんな意地悪絶対にしないのに、なぜか今は、このまま雪
見を
健人の元に帰すのが嫌だった。

二人きりで話したいことが山ほどある。二人でご飯を食べながらお
酒を
飲んで、いろんな事を語り合いたい。
今までも健人と三人で、たくさんおしゃべりはしてきたけれど、今
日は
どうしても雪見と二人になりたかった。こんなチャンスはもう無い
かも知れない。だが…。

「ごめん！やっぱ今日は真っ直ぐ帰るわ。
カレー作って置いてきたけど、なんか健人くん一人で食べさせるのは可哀想で。
それにあの人、家事がまったく出来ない人だから、もしかしてカレーも
冷たいまま食べちゃうかも！なんか心配になってきた。」

「そんな、子供じゃないんだから！適当にやってるから大丈夫だって。
俺、ゆき姉を連れて行きたい、めっちゃお洒落な店見つけたんだ！
そこ行こ、そこ！」
当麻がどんなに誘っても、雪見がうん、と返事をする事はなかった。
どうやっても、ゆき姉は健人だけのものなのか…。
心に冷たい氷を抱かされたまま当麻は、健人の元へ帰ってゆく雪見の後ろ姿を見送った。

「ただいまぁ！健人くん、カレー食べたぁ？
ちょっと！なんで三時間位しか家空けてないのに、こんなに散らかってるわけ？」
居間のありさまを一目見て、雪見が案の定だった！と嘆く。

「お帰り！だってゆき姉、遅いんだもん。一人で飯食うのは寂しいから
ラッキー達と遊んで待ってたんだよ！こいつ、チラシ丸めて投げたら犬みたいにくわえて持ってくんの！凄いと思わない？」
健人はすっかりラッキー、めめと仲良くなったようで、まるで自分の実家の猫とくつろいでいるかのように、穏やかな目をしてラッキーの頭を撫でた。

「良かった！もうすっかり元気になったね！安心したよ。会いたかった！」
そう言いながら雪見は健人に抱きついた。

「おーっと！珍しいこともあるもんだ！ゆき姉から抱きついてくるなんて。
今日のラジオ、良かったよ！頑張ったね。一生懸命が伝わってきた。
益々ゆき姉のこと、大好きになった！」
健人がそっと雪見に唇を重ねる。

「さー、腹減った！カレー食べよう、カレー！」
また一瞬で賑やかな声が広がり、チラシが散乱した部屋にはカレーの美味しそうな匂いが漂う。

その頃、外には雪見のマンションを見上げる一人の男が立っていた。

突然の元カレ登場

♪ピンポーン

健人と楽しくおしゃべりしながらカレーライスを食べていると、インターホンのチャイムが鳴った。

「誰だろう?あ、当麻くんかな?この後、仕事なさそうだったから。はーい!」

インターホンの受話器を取りモニターを覗いた雪見は、そこに立つ人物を見て息が止まりそうになった。

「学?もしかして学なの?」

当麻ではない男の名前を、雪見は小さな声で呼んだ。

その声を聞き、カレーを口に運ぶスプーンが止まる健人。

一瞬にして部屋から音が消え去った。

「よう!しばらく。元気だった?昨日デンマークから戻ったんだ。たまたまこの前を通りがかったら雪見の顔思い出して、どうしてるかなと思って。驚いた?」

「驚くに決まってるじゃない!」

雪見の大声に健人も驚き、胸騒ぎがして「誰?」と聞いた。

慌てて首を横に振る雪見。その様子は、ただの知人ではないことを物語る。

健人の顔に不安げな表情が浮かび、うつむいてしまった。

雪見はどうしようかと思い悩んだが、少しの間を置いてインターホ

ンの相手に
「上がってきて。今、鍵開けるから。」と告げる。
振り向いた雪見は健人に、「元カレなの。」と正直に伝えた。

「えっ！」思いも寄らない雪見の言葉に絶句して、ただ雪見を見つめる健人。

「ごめんね。別に彼がここに来なかったら、わざわざ言う話でもなかったんだけど、
来ちゃった以上、健人くんに嘘ついて取り繕うのは嫌だから。
私、健人くんには何も隠し事をしたくないんだ。健人くんの不安そうな
顔は見たくないの。だからきちんと紹介するから。
でも、健人くんが会いたくないなら無理にとは言わない。
この部屋にいていいから。」
その時、玄関のチャイムが鳴った。

「はい！」ドアを開けると、長身でイケメンの三十代男が立っていた。
雪見が大学時代から五年間も付き合った男、梨弩（なしど）学である。

「よぅ！」学が軽く手を上げた。
「久しぶり！何年会ってないだろう。何にも変らないね。」
「お互いにね。」
雪見と学が何年振りかの再会を静かに喜び合っていると、部屋から
健人が出て来て
雪見の後ろにそっと立った。
そして雪見の肩越しから顔だけ出して「どぉも！」と頭をちょっと
だけ下げる。

「あ！ごめん。お客さんだったんだ。じゃ、俺帰るわ。元気な顔見れたし。」
そう言いながら学が玄関を出て行こうとした時、「ちょっと待って！」
と雪見が学を引き留めた。

「斎藤健人くん。私の彼氏。」彼氏と紹介されて健人は嬉しくなった。
雪見の後ろから横に並んで、改めて「斎藤です。」と頭を下げる。
学は不躾にも健人の顔をマジマジと見た後、「あっ！」と大きな声を出した。

「さっきテレビ局のロビーに、この人のポスターがいっぱい貼ってあった！」
学は、こいつは何者？という顔をして健人を凝視。
すると健人も負けないぐらいの大声で、「あっ！」と叫ぶではないか。

「なになに！健人くんまでなんなのよ！」
突然耳元で大声を出された雪見の方がびっくりしている。

「この人、さっきテレビのニュースに出てた！」
健人が雪見の顔を見て言った。

「あぁ、そう。なんとか賞を受賞したからでしょ？
この人、科学者なの。その世界じゃ結構な有名人らしいけど。」

「なし…なし…？」
「なしど　まなぶ　です！」
「そう！その人！凄い賞を受賞したって、さっきインタビュー受け

てた！」

玄関先で立ち話も何だからと居間に通したまでは良かったが、
健人がめめ達と遊んだチラシのボールが、あっちこっちに転がっていて
雪見と健人は慌てて一個ずつ、拾って集めた。

「ごめんごめん！そこに座って！
ご飯まだでしょ？良かったら一緒にカレーライス食べてかない？」
雪見が学の返事を待たずに、キッチンで準備を始める。
その間健人は、学とダイニングテーブルを挟んで向かい合わせに座り、
雪見のいない時間をどう繋ごうかと必死に考えていた。

「あ、あのぅ…。デンマークにいらしたんですか？もう何年も？」
健人が取りあえずの質問を思いつき、聞いてみる。

「あぁ、大学院を出てからだから、八年ぐらいになるかな。」
話は何も広がらず、それで終ってしまった。

焦った健人は、手当たり次第に思いついた事を口に出した。
「あの、梨芽って名字、俺初めて聞きました。テレビで振り仮名振ってなかったら
絶対に読めなかった！」「あぁ、そう。」

「あ、ゆき姉のカレーライスって、めっちゃ美味いんですよ！
多分、お店が出せるくらいに美味いと思う！」「知ってるよ。」

「そ、そうですよね…。」健人はそれきり黙ってしまった。

そこへやっと雪見が、温め直したカレーライスとサラダ、赤ワインとグラスを三つ持って戻ってきた。
「お待たせ！カレーにワインってのも何だけど、久々の再会に乾杯も無しじゃあんまりだから。
じゃ、なんとか賞の受賞おめでとう！乾杯！」
三人はチン！と軽くグラスを合わせ、喉にワインを流し込む。

「それにしても相変わらずだな、雪見は。
俺が何の賞を取ろうが、まったく興味が無いんだから。」
学が笑いながらワインを飲み干し、カレーライスを一口食べた。
「うん！うまい！懐かしい味だ。料理の腕も相変わらずだよ。」

「そう？それはありがとう。で、なに？今日ここに来た訳は。」
雪見も一気にワインを飲み干し、真顔で学に質問する。
健人は何も言葉を発する事が出来ず、ただカレーライスを食べワインを
流し込み、黙って二人の会話を聞いているよりほかなかった。

「四年ぶりに会って、それはないんじゃない？
ただ懐かしくなって顔見に来たって理由じゃダメなわけ。」

「そんな根拠に乏しい理由で、行動するような人じゃなかったはずよ。
そうでしょ？」
雪見は、何もかも学の事を知り尽くしてるようで、健人は内心穏やかでは
いられなかった。

学は、下を向きうつむいたままでいる健人に向かって、突然声をか

けた。
「ねぇ、キミ。もしかしてキミって、芸能界の人？
僕は日本にずっといなかったからキミの事、何も知らないけど、
さっきテレビ局のロビーで、キミのポスターと一緒に写真撮ってる
女の子が
たくさんいたから。
雪見とはどこで知り合ったの？いつからの付き合い？
どういう気持ちで付き合ってるの？」
矢継ぎ早の質問に戸惑う健人。だが雪見は、いきなり声を荒げて怒
り出した。

「ちょっと！どういうつもり？私の質問に答えなさいよ！
今、健人くんはまったく関係ないでしょ！」

「雪見の彼氏なら、大いに関係あるよ。」
そう言って学は、また自分でワインを注ぎ一気に飲み干した。

何を言い出すのか解らない学の不敵な微笑みが、健人と雪見の心の
中を
ぐちゃぐちゃにかき混ぜて、収拾のつかない状態にまで追い込んだ。

元カレとの過去

「ねぇ、お願いだから、私の幸せな毎日を台無しにするような事だけは言わないで。」

雪見は、学が何を言いにここに来たのか、何となく気づき始めた。
だがそれを今ここで、健人のいる前では絶対に言って欲しくはない。
やはり玄関先で追い返すべきだった、と後悔の念でいっぱいだった。

健人もまた本能的に、学が何か二人の関係を揺るがすような大きな事を
言おうとしている、と学の目をジッと見ながら感じ取っていた。
心臓のドキドキが止まらない。指先が冷たくなってくる。
どうすればいいんだろう…。
もしかして、ゆき姉が盗られちゃう？そんなの、絶対にいやだ！

実は雪見は二十六歳の時、一度学からプロポーズされたことがあったのだ。
「デンマークに一緒に付いて来て欲しい。」
それはイコール結婚を意味していた。

当時雪見は、やっとカメラマンへの第一歩を踏み出したばかり。
無我夢中になって仕事をこなし、毎日が充実していた。
一方同い年の学は、優秀な成績で大学院を卒業し、
デンマークの研究所への招聘が決まったところ。
大学四年の時に知り合い、五年間を共に過ごした雪見と新天地で
新しい人生をスタートさせたいと考えるのは、ごく自然な流れである。

が、雪見は「一緒には行けない。」と、悩み抜いた末に返事した。

「ごめん…。私は私でいたいから…。
学の人生に乗っかって生きていくのは、私じゃなくなる。」

嫌いになって別れた訳ではない。
もし学がデンマークに行かずに日本に居たら、素直にプロポーズを受け入れていたかもしれない。年齢的にもそういう年頃だった。
だが、好きだけど自分の全てを捧げるほどの愛ではなかった…。
あとで振り返ってみると、そんな気がした。

しかし学は、ずっと今まで雪見の事だけを思い続けていたのだ。

勉強にしか興味の無かった大学四年の夏。
１８３？の長身で大人びた顔立ちのイケメン。しかも学内一の優秀な成績とくれば、周りに女子が集まらないはずはない。
だが学にとってそれらは、勉強を邪魔するうっとうしい奴らでしかなかった。
そう思いながらも口に出せずに毎日を送っていたある日。
見るに見かねた同じゼミの雪見が、学を取り巻いていた女子の真ん中に
仁王立ちになり、周りの誰もが振り向くほどの大きな声で啖呵を切った。

「あんた達！いい加減にしなさいよ！
こいつは、これからの日本を背負って立つ男になる奴だ！
そんな日本の財産を、あんたらは潰すつもりなのっ！」

この時の雪見の言葉が、学の人生を変えた。

雷に打たれたような衝撃が身体中を駆け抜け、一瞬で恋に落ちた。
学の遅い初恋が、この時やって来たのだ。

それからの学は雪見に猛アタックを仕掛けたが、雪見はまったく学に恋愛感情を示さない。
元々、他の女子のように学の事をイケメンだとか、かっこいいだとかそんな風に意識したことは無かった。
ただ、学は将来必ず凄い科学者になる！その確信だけは揺るがなかった。

前にも増して淡々と、研究の手伝いをするだけの雪見。
そんな二人の関係に、ある日転機が訪れる。
教授の学会発表の手伝いに雪見と学が駆り出され、車で遠出をした帰り。
近道をしようと通った夜の田舎道で学の車が突然故障し、動かなくなってしまったのだ。
色々手を尽くしてはみたものの、どうにもこうにも動かない。
その上、携帯の電波も届かない場所で、あとは通りすがりの車に電波の届く所まで
乗せてもらい、ＪＡＦを呼ぶより方法がなかった。
が、その肝心の車さえも通らない。
二人は半ば諦めて、車に積んであった缶コーヒーを飲み、途中に寄った
可愛いパン屋さんの美味しいパンをかじりながら、初めて二人きりで研究以外の色々な話をした。
子供の頃の事や飼っていた猫の話、飲み会のお互いの武勇伝に教授の噂話まで。
それまで、勉強一筋に生きてきた、ただのガリ勉くんとしか思っていなかった学の
いろんな人間性が見えてきて、少しだけ男として意識するようにな

り始めた出来事だった。

それから一ヶ月後、二人は密かに付き合いだした。
みんなの前であんな啖呵を切った以上、恥ずかしくて大っぴらには出来ないと
雪見は思っているのに、嬉しくて嬉しくて仕方のない学は常に雪見の側に寄りそう。

「ねぇ！私のせいで成績落ちたなんて言われたくないんだから、今まで通りに頑張ってよ！
日本一の科学者を目指しなさい！」

雪見の言葉通り、学は日本どころか世界でも名の知れた科学者になって
今、雪見の目の前に座っている。

「あのぅ…。」
健人が沈黙を破るように口を開いた。
雪見は健人が何を言い出すのか心配で、ただ隣りに座る健人を見つめるしかない。

健人が目を閉じてふぅーっっ、と大きく息を吐く。
それは、いつも芝居に入る前に無意識に健人がやる儀式の様なものだと
雪見はここ二ヶ月間、カメラを覗いていて気が付いた。
それを今やっている。

目を見開いた健人は、さっきまでのビクビクとした子鹿のような健

人ではなく、
明らかにイケメン俳優、斎藤健人の顔になっていた。
自信に満ち溢れ、向かうところ敵無し！といった余裕の笑顔で学を見据える。
学も、一瞬で変化した健人の表情に只者ではない気配を察し、思わず身構えて
健人を見返していた。

「梨弩さん。俺とゆき姉とは遠い親戚同士で、俺が生まれた時からゆき姉は
俺のことを見ててくれてます。
だからもう、二十一年間も付き合ってるんです。」

「へぇ。そういう関係。知らなかった。
あんなポスターになるぐらいだから、日本じゃ相当の有名人なんだろうね、キミは。
男の俺から見てもいい男に見えるんだから、さぞかしモテてモテて仕方ないだろうね。
で、そんな男がなんで雪見と付き合ってるわけ？
他にも選り取り見取り、いい女はたくさんいるだろう。」
学が挑戦的な態度で健人を挑発した。

「学！いい加減にして！あんた、いつからそんな嫌な男に成り下がったの！
健人を侮辱するような態度は、私が許さない！」

健人は、初めて雪見が自分の事を「健人くん」ではなく「健人」と呼び捨てにしてくれたことが、なぜか今とても嬉しくて仕方なかった。

誰にも渡さないよ！

勇気百倍になって健人は、余裕の態度で雪見への思いを語り出す。

自分のありったけの気持ちを、雪見一人に告白するように…。

健人は瞬きもせず、ジッと学の目を見つめて自分の気持ちをぶつけた。

「梨弩さん。俺は、ゆき姉に出会うためにこの世に生まれてきたと思ってます。
どうしてもっと早く生まれて来なかったんだろうって、神様を恨んだこともあったけど、
でも最近、十二年遅く生まれたのにも訳があると、やっとそう思えるようになりました。
もし俺がゆき姉と近い年に生まれてたら、あなたが恋のライバルだったかも知れませんね。」

「今はライバルじゃない、とでも言いたいのかい？」
学が苦笑いをした後、キッと健人を真顔でにらんだ。

「俺、ゆき姉をあなたに返す気は更々ありませんよ。
あなたは俺のこと、こんな若造が雪見を幸せに出来るはずはない！とでもお思いでしょうが、
今のゆき姉を幸せに出来るのは、世界中で俺一人しかいないと確信してますから。」

そう言って雪見を見つめ、にっこりと微笑む健人の瞳には一点の曇りも迷いもなく、
ただこうして二人並んでいるだけで、この上ない幸せ！という顔をしている。

健人の自信に満ち溢れた態度と、雪見と互いを見つめ合う熱い視線

は、
この二人の間になんぴとたりとも介入は許さず！といった、目には見えない
結界が張られているようにも感じられた。

一体どれほどの時間が経ったのだろう。
かなりの間ジッと健人と雪見を観察していた学は、おもむろに立ち上がり、
「ご馳走様。美味かったよ、カレーもワインも。二人の時間を邪魔して
悪かったね。じゃ、また。」
と、それだけ言うとさっさと玄関から出て行った。

急に夢から覚めたように健人と雪見は、はぁーっと深くため息をつき、
嵐のようにやって来て、嵐のように過ぎ去った学を思い起こしてみた。

「怒っちゃったかな？梨弩さん。俺、強く言いすぎた？」
健人が俳優の顔からいつの間にか素の健人の顔に戻り、少し心配そうに
雪見の顔をのぞき見る。

すると雪見はやっと笑顔になって、
「健人くん、サイコー！」と言いながら、隣の健人の首に手を回しグッと引き寄せ頬にキスをした。

「これから内緒でカラオケ行っちゃう？なんか、メチャクチャ歌い

たい気分！」

それから二人は見つからないように、雪見の車で遠くのカラオケボックスまで出掛け
朝方まで歌いに歌いまくった。
もちろん三人の課題曲、『ＷＩＮＤＩＮＧ　ＲＯＡＤ』もたっぷりと…。
健人を家まで送って帰る頃には、もう学の事など頭から消え去った。

「えーっ！なに、そいつ！いきなりゆき姉んちに乗り込んで来たわけ？
で、健人はどうしたのさ？」

インフルエンザも全快し、久しぶりの仕事帰りに当麻の家へ立ち寄った健人。
話は勢い数日前の、学が来た時の話題になる。

「え？俺？そりゃ、バシッと言ってやったさ！」
二つ目の缶ビールをプシュッと開け、ゴクリと喉に流し込み熱く語る健人。

「なんて？なんて言ったの？」
当麻が興味津々、身を乗り出して健人に詰め寄る。

「えっとね…。やっぱ、教えない！
っつーか、今となっては恥ずかしくて言えない！」
珍しく健人が頬を赤くして、照れ隠しにビールを一気飲みした。

「なんだよ、それぇー！ますます聞きたくなるじゃん！
ほらほら、もっと飲んじゃって！で、なんて言ったの？」
どうしても聞かないと気が済まない当麻。

「えーっ！言うのぉ？
…ゆき姉をあなたに返す気は更々ない、って…。」

「それだけ？じゃないでしょ。あとは？」

「あとは？って…。
ゆき姉を幸せに出来るのは、世界中で俺一人しかいない、って…。」
健人が、消え入るような小さな声で言ったあと、当麻が大笑いをした。

「マジでぇ？マジでそんな、ドラマのセリフでもなかなか言わないような
クサイこと言ったのぉ？すっげー！さすが健人！男だねぇ！」
当麻の笑いは当分収まりそうもない。

「だ・か・らぁ！お前には言いたくなかったの！
けど、あの時はそれが勝手に口から出てきた言葉だから…。
俺が本当に心から思ってる事だと思う。」
健人が真面目な顔をして言うので、当麻も笑えなくなった。

「健人は本当にゆき姉を愛してるんだ…。」
きっと寂しげな笑顔を当麻が浮かべたのだろう。
健人の心の中に、その笑顔がいつまでもちらついた。

「ねぇ！ゆき姉、呼ぼうか！十二時半でしょ？まだ起きてると思うから。電話してみる！」

健人が、なぜか当麻に雪見を会わせてあげたいと思いついた。
さっきの寂しげな笑顔のせいだ。当麻があんな顔をするから…。
そう思いながら、健人が雪見に電話する。

「あ！ゆき姉？俺だけど。まだ起きてた？仕事中なの？
今さ、当麻んちで飲んでるんだけど、当麻がどうしてもゆき姉に会いたいって！
これから来れる？あ、ほんと？じゃ、待ってるね！気をつけて来て！」

健人が嬉しそうに、ゆき姉これから来るって！と当麻に伝えた。
当麻の顔もパッと明るくなり、「ズルイよな！本当は健人が会いたかったんだろ？」
と、笑いながら健人を小突く。

しばらく二人でおしゃべりしていると、インターホンが鳴って雪見が到着。
当麻が玄関の鍵を開けドアを押しながら、「いらっしゃい、ゆき姉！」
…と、目の前に立っていたのは雪見ではなく、なんと霧島愛穂だった！

「な、なんで…。」当麻が目を見開いて驚いていると、横から雪見がひょこっと顔を出し、
「驚いた？ようだね、その顔は。私も驚いたもん。タクシー降りた所に

愛穂さんが立ってたんだから。」

愛穂が「しばらくぶり！元気だった？」と当麻に笑顔で挨拶する。
「ゆき姉、遅いよ！」と玄関に出てきた健人も、愛穂の存在にびっくり！
「どういう事？ゆき姉！」健人が険しい顔で雪見を問いただす。

「いや、愛穂さんがマンション見上げて立ってたから…。
雨もポツポツ振ってきてたし、風邪でも引いたら困ると思って…。」

やはり愛穂は招かれざる客に違いないのだ。
それをわざわざ連れてきてしまう雪見。

雪見の人の良さに、健人と当麻は顔を見合わせてため息をついた。

二人の芝居

雪見を呼び、久しぶりに三人でワイワイ楽しくやろう！と思っていたのに
なぜかここに愛穂も座ってる。

沖縄ロケ以来久しぶりに会い、女同士、同業者同士で話が弾む雪見と愛穂。
その横で、複雑な表情をしてビールをちびちび飲む健人と当麻。
まったくワイワイどころか、シーン…としてしまった二人に雪見が気付いた。

「ちょっとぉ！人をこんな時間に呼び出しといて、二人してその辛気くさい顔はなに？
愛穂さんにだって久しぶりに会ったんだから、少しはイケメンスマイルで
持てなしなさいよ！」相変わらず雪見は容赦ない。

顔を見合わせた健人と当麻は、明らかに作り笑いをして愛穂に聞いた。
「ねぇ、なんでここに来たの？」

健人のあまりにもストレート過ぎる質問に雪見が慌てた。
「健人くん！失礼でしょ？愛穂さんに！」

「いや、いいの。ごめんね、邪魔しちゃって。
まさか雪見さんと健人くんもいるなんて、思ってなかったから…。
ちょっとだけ当麻くんの顔が見たくなって、偶然にでも会わないかなぁ

なんて思って。迷惑だったよね、ごめん。」

愛穂の思いもよらない言葉に、三人は驚いて固まった。
もちろん当麻は、愛穂が自分に対してそんな感情を抱いていたなど初耳だ。
石垣島の夜には、確か健人にアプローチしていたはずなのに…。

当麻は、なんて返したらいいのか迷っていた。
愛穂の言った言葉が、本心なのかどうかもわからない。
ましてや、この三人の中で愛穂の立場というのは、半ば敵に近い立ち位置にある。
沖縄ロケ以来、一度も三人の前に姿を現さなかった愛穂が、なぜ今、当麻に対してそんな言葉を投げかけるのか…。
当麻は勿論のこと健人と雪見も、嘘と真実が見極められずに困惑していた。

「まぁ、久しぶりに再会したんだから、乾杯でもしようよ！
当麻くん、前にあげた真由子のワイン、もう全部飲んじゃった？」
少しでも考える時間を与えるため、雪見が当麻にワインを探させる。

「どうだったかな？一本ぐらい残ってるかも。ちょっと見てくる。」
そう言って当麻が席を立ち、そそくさとキッチンに入って行く。

「俺も、なんかつまみになりそうな物、探してくるわ！」
健人も当麻の後を追ってキッチンに逃げ込んだ。

「おいおい！一体どういうつもりだろ？本心で言ってると思うか？」
健人が小声で当麻に聞く。

「そんなこと、こっちが聞きたいよ！しかも、なんで今なんだよ！せっかく三人が集まったんだから、課題曲の練習をしようと思ったのに…。」
当麻が少し腹立たしげに言った。手にはすでに真由子プロデュースの、
カリフォルニア白ワインが用意されている。

「まぁ今日のところは相手の出方を見て、本心を探るしかないな。けど、さっき言った事が本心だった場合はどうする？当麻。」
健人が当麻の顔を伺う。

「どうするって…。今の時点でそんな感情は一つも湧いたこと無いし、
第一彼女からそんな気配を感じたことも無いんだよ！
それがなんで突然、こういう展開になるわけ？おかしいと思わない？」

「まぁ、おかしいっちゃおかしいんだけど…。ここにいてもらちが明かないから、
そのワインでもう少し彼女を喋らせよう！」

そう言ってからも二人は、あーでもないこーでもないとキッチンでしばらくの間、立ち話をしていた。

健人がワインとグラスを持ち、当麻がチーズやナッツ、チョコレートなどの
つまみを皿に盛り合わせて、「お待たせ！ワインあったよ！」と、
やっとキッチンから出て来る。

「おそーい！待ちくたびれてここにあったお酒、全部飲んじゃったよ！」
雪見の言葉に当麻と健人は、「ええっ！？」と驚いた。

「うそ！？二人でこれ全部飲んじゃったのぉ？」
テーブルの上には、雪見が手土産にコンビニから買ってきたビール六缶と、
チューハイ六缶の潰れた空き缶だけが転がっている。
しかも二人ともすっかりいい気分で意気投合し、仲の良い友達同士にさえ見えた。

「愛穂さんって、あんまりお酒飲めない人じゃなかったっけ？」
健人が、石垣島の夕食時を思い出して愛穂に聞いてみる。

「あぁ、私？飲めないんじゃなくて、飲まないようにしてるだけ。多分、本気を出したら結構行けると思う。雪見さんほど強くはないけどね。」
上機嫌で愛穂が雪見を見た。
雪見も嬉しそうにニコニコしながら愛穂を見る。

「今度、二人で飲みに行こうよ！私、いいお店いっぱい知ってる！お酒の事なら任せといて！
それに沖縄行った時から思ってたんだけど、私と愛穂さんって似たとこ
たくさんあるんだよね。いいお友達になれそう！って、ずっと思ってたんだ。」
雪見は、こんな所で愛穂に会えたのはキセキだぁ！と酔って叫ぶ。

「おいおい、ゆき姉！大丈夫かよ？短時間に一気に飲むから、すっ

かり
酔っぱらってるだろ？しょうがねーなぁ、まったく！」
健人が雪見の隣りに座るとすぐに、雪見が健人に抱きついた。

「けんとぉ！だーい好きっ！」
みんなの前でいきなり頬にキスされ、健人は慌てふためく。

「ち、ちょっとぉ！どんだけ酔ってんのさ！もう帰って寝た方がいいよ。
疲れてんだよ、きっと。悪い！当麻。俺、ゆき姉送って帰るわ。」

「えーっ！帰っちゃうの？せっかくワイン飲もうと思ったのに！」
当麻も慌てている。

「悪いな！けどこの人、明日写真集の編集会議が朝からあるって言ってたから。
俺もドラマの撮影が入ってるし、そのワインは愛穂さんと二人で飲んじゃって！
当麻はどうせ明日、久々に午後からの仕事だろ？」

「まぁ、そうだけど…。」
当麻が、マジで二人で飲めって言うの？的な顔をして健人を見た。

「愛穂さん、ごめんね！せっかく四人で乾杯しようと思ったのに。
今度さ、みんなでカラオケでも行こう！俺たち、当麻のラジオ番組の企画で
今月中にマスターしなきゃならない歌があるんだけど、その感想を聞かせて欲しいんだ。
今、それぞれ自主練の真っ最中だから、もう少し後に…。」

「へーっ！そうなんだ。それは楽しみ！じゃ、誘ってくれるの待ってるね！。」
愛穂が待ち遠しそうに笑って言った。

「じゃ愛穂さん、ごゆっくり！当麻、またな！」と健人が当麻に言ったあと、
雪見を抱きかかえるようにして玄関まで出る。

そして見送る当麻の耳元で「うまくやれよ！」と素早くささやき、
ドアを閉めた。

『しまった！そういう事か！やられたな、健人に。』
当麻と雪見が帰ったあとの玄関先で、一人苦笑いをする当麻。

マンションの外でタクシーを待つ間、雪見はいきなりシャキッ！として
「やるじゃん、健人くん！」と、にやっと笑ってみせた。

当麻と愛穂

「もしかしてゆき姉、ぜんぜん酔ってない、とか？
まさか、さっきまでのは全部演技だったりするわけ？」
外に出た途端シャキッとした雪見を見て、健人はやっと気が付いた。

「当り前でしょ！あれごときのお酒で酔っぱらう私だと思ってる？
めっちゃ恥ずかしかったよ！みんなの前で健人くんにキスするの。
でも、リアルに酔ってる感じがしたでしょ？」

「役者の俺が太鼓判押すよ！今すぐ転職して女優になれば？
けど、あのキスのお陰で愛穂さんには、俺の彼女がゆき姉だってバレたと思うけど。」

「あっ！！」

その頃、当麻と愛穂はワインを開けて乾杯していた。

「もう遅いから、これ一杯飲んだら帰るね。
けど、やっぱり健人くんの彼女って、雪見さんだったんだ。」
クスッと笑いながら愛穂が言うと、それに反応して当麻がめちゃくちゃ
慌てたのも可笑しかった。

「ええっ？そう見えた？アメリカじゃ仲の良い親戚同士って、ほっぺたにキスしない？」
焦って当麻はシラを切ったが、誰がどう見てもさっきの雪見の態度

は、
ただの親戚が取る態度ではない。
「大好き！」と言いながら頬にキスする親戚が、日本にはどれほどいるだろう。

「いいよ、もう隠さなくても。誰かに話したりなんてしないから。ハリウッドじゃスキャンダルなんて普通に見たり聞いたりするけど、それを一々誰かに話してなんかいたら、すぐに仕事を無くしちゃう！石垣島で健人くんから彼女の話を聞いた時は、ちょっと嫉妬したけど相手が雪見さんだと解ったら、スッと納得できた。雪見さんとなら応援できる。」

「そう。ならいいんだけど…。」
当麻が胸をなで下ろし、ワインのグラスを一気に空ける。
そして酒の勢いを借りて、『霧島可恋がツィッターを流したり、動画を
流出させた犯人なのか？』という、ずっと健人たち三人の心に溜まって
いた疑問をぶつけてみようかどうしようか、しばらく考え込んだ。

「あのさ…。いや、やっぱやめとく。ごめん…。」
当麻には聞けなかった。
もし万が一にも違っていたら、妹をそんな風に言われた愛穂は傷ついてしまう。
愛穂を傷つけるのは本意ではなかった。

「いいんだよ、何でも言ってくれて。私、当麻くんに少しでも近づきたくて
ここに来たんだから…。」
愛穂が大きな瞳で当麻をじっと見つめる。

けれど当麻は、その瞳に何の興味も湧いてこなかった。

「あのさ。俺たち三人って、愛穂さんから見たらどう見える？」

さっき聞こうとした事とは違うことを口にする。

でも、当麻にとっては大事な質問だった。

「えっ？当麻くんたち三人？

健人くんと当麻くんは本当に仲良しの親友って感じだし、健人くんと雪見さんは恋人同士に見えなくもないけど、年の離れた仲良し姉弟にも見えるし…。」

「俺とゆき姉は？どう見える？」

これこそが当麻の聞いてみたい事だったのだが、愛穂はそれを察知し本心とは違うことを口にした。

「当麻くんと雪見さん？そりゃ親友の彼女もしくは親友のお姉さんって

感じ？

そうじゃなかったら、どう見られたいわけ？」

当麻は愛穂に心の中を見透かされた気がして、グッと言葉に詰まった。

ワインを飲み干した後も気まずい沈黙が流れる。

それに耐えきれなくなったのは愛穂が先だった。

「あー、やだ！当麻くんって若いから、もっと恋愛に対してガツガツしてるのかと思ったのに、お酒を飲んだって指一本触れてこない。

そんなに雪見さんの事が好きなら、健人くんから奪えばいいでしょ！

好きな人より男の友情を取るってことは、その人への思いもその程度ってことね！」

当麻は愛穂に、こてんぱんにやられた。
いかに自分が臆病者で、傷つくのも傷つけられるのも嫌いな平和主義者か。
そのくせ中途半端に愛を表現するから、相手を困惑させる最悪な男！
とまで言われ、相当へこんだ。全てが図星で、ぐうの音も出なかった。

「だけど私は…。そんな当麻くんを好きになっちゃった。」

突然の愛の告白！
ストレートに気持ちをぶつけてきた愛穂に、当麻はドキドキが止まらない。

今までどれほどの恋のアプローチを受けてきたことだろう。
ファンからのブログへのコメントも、真剣な愛の告白ばかり。
だが愛穂ほど、自分の弱さもかっこ悪い所も全部引っくるめて好きだ！
と言ってくれた人は他にはいない。
当麻自身も愛穂になら、すべてをさらけ出して素の自分でいられるような気がした。

少しずつ、雪見と一緒に居るときのような居心地の良さを感じ始めた当麻。
徐々に、愛穂の事をもっと知りたいと思うようになっていた。
当麻の、新しい恋が始まった瞬間である。

それから二日後の九月最終日の朝。

その日は、雪見が健人専属カメラマンとして現場について歩く最後の日でもあった。
健人が、来て欲しくはないとずっと願ってた日が、ついにやって来てしまったのだ。

少し情緒不安定気味になってた健人を見かねて今野が、雪見に少しでも
そばにいてくれるよう頼んで、前夜から健人の家に泊まっていた。

「大丈夫。私はどこにも行かないって約束したでしょ？
身体は別々の場所に立っててても、心はいつも健人くんの隣りにいるよ。
そうだ！これを健人くんにあげる。
私がカメラマンになってから、肌身離さず付けてたお守り代わりのペンダント。
今日からこれが健人くんを守ってくれるから。」
そう言いながら雪見はベッドの上で身体を起こし、ペンダントを外して
隣りに横たわる健人の首に付け替える。

「これで大丈夫！健人くんは、もう私から離れられなくなりました！
離して！って頼まれたって離さないから、覚悟しといて！」
雪見が健人をギュッと抱き締め、優しいキスをした。

そして側らにあるカメラを持ち出し、最後の写真を撮り出す雪見。
健人の胸には、雪見の身体から乗り移ったペンダントが、朝の光を反射して
いつまでもキラキラと輝いている。

カメラを見つめる潤んだ健人の瞳は、生まれたてで無防備な子鹿の怯える瞳そのものだった。

そんな目をしてこっちを見ないで…。

雪見の心も、風で揺れるカーテンと一緒に揺れていた。

専属カメラマン最後の一日

写真集撮影最後の一日は、朝八時からドラマの撮影でスタートする。
都内での撮影だが、七時過ぎには今野が迎えに来た。

「おはようございます。」先に雪見が急いで乗り込むが、気恥ずかしくて
今野の目をまともに見ずに笑顔だけで挨拶をする。
それに続いて健人も「おはようございます。」と素早く乗り込みはしたが、
目深にかぶった帽子の下の瞳は、少しの輝きも持ち合わせてはいなかった。

今野が健人の様子を伺うように、チラッと後ろを振り向く。
ただジッと膝の上に目を落とす健人を見て、雪見でもダメだったか…と言う風に
小さくため息をつき、「よし！出発するぞ！」とだけ言って車を出した。

いつになく静まりかえる車内。
雪見は、このままではドラマの撮影に差し支えるのではと心配になり、
なんとか健人に元気を出してもらいたいと、明るく話しかけてみる。

「ねぇ。あの後、当麻くんと愛穂さん、どうなったかな？
せっかく私達がチャンス作ってあげたんだから、うまくいけばいいんだけど。
私はあの二人、すっごくお似合いだと思うな！
愛穂さん美人だし、当麻くんはイケメンだし、めちゃめちゃ目立つ

カップルだけど。
二人が付き合い出したらさ、どっかにダブルデートなんてしたいよね！
ディズニーランドなんて四人で行ったら、絶対楽しいよね！
まぁ、目立ち過ぎてどう考えても無理だけど…。」

いつもなら車の中が騒がしくなるほど盛り上がる、憧れのダブルデート話に、
ひとつも健人は乗っかってこない。
と言うか、人の話を聞いてんだか聞いてないんだかさえも判らない。
しょうがない。次の手でいくか！

「ねぇ、当麻くんからなんか連絡あった？」
ぐっと近づき、健人の弱点でもある耳元でささやいた。
いつもなら耳元で話すと、「くすぐったいからヤメテ！」と身をよじり
肩をすくめる健人であったが、今日は何の反応もない。
それどころか、「別に。」の一言でこの話題は呆気なく終ってしまった。

相当重症だ。雪見と一晩過ごしたあとの、不自然なハイテンションさも全く無い。
二人のやり取りを聞いていた今野も、ルームミラーで後ろの健人を見ながら、
今日の仕事は大変かもしれないぞ！と覚悟を決める。

撮影現場の河川敷は、まだ空気が肌寒い。
健人のメイク中からカメラを構える雪見の指も、微かに震える。

だが、寒さのせいだけで震えているわけでもなかった。

一枚また一枚と、シャッターを切るたびに終わりが近づいてゆく。
ついこの前までは、雪見自体この日が来ることに何の感慨も無かった。
それどころか、早く編集作業に入りたくてウズウズしていた。
二ヶ月間撮り貯めてきた健人の写真を、あれこれ皆で悩み選び抜いて
一ページずつ仕上げていく喜び。
それを早く味わいたくて、最後の写真を撮る日の思いなど、深くは考えてもいなかった。

それが今、その時を迎えてみると指が震える自分がいる。
健人と過ごした丸二ヶ月間が、いかに楽しく充実した毎日であったことか。
明日からは朝、今野の車のドアを開けた途　端に聞こえる
「おはよう！ゆき姉！」という、健人の弾んだ声も聞けなければ、
現場でカメラを向けた時に一瞬雪見だけにする、特別な笑顔も見られない。
すべてが長い長い時間に見ていた夢のようにも思えて、急に寂しさがこみ上げた。

『健人くんはこんな気持ちになることを、ずっと前から恐れて暮らしてたんだ…。
それなのに私ったら、大丈夫だよ！って言うばかりで、少しも健人くんの気持ちを
理解しようとしてなかったのでは…。』

雪見は後悔していた。
もう少し自分が健人の心に寄り添って、毎日を過ごしていたなら…。

そしたら健人を、あんな悲しそうな瞳にさせないで済んだかも知れないのに。
ファインダーの奥の健人を見つめるうちに段々と視界がぼやけ始め、
いつの間にか頬を涙が伝っていった。

髪を直してもらってた健人が、涙をこぼしながらもカメラを覗き続ける
雪見に気が付き、慌てて駆け寄る。
「どうしたの？なんか嫌なことでもあった？なんで泣いてるの？」

健人がそっと肩に置いた手の温もりが心に染みて、ますます涙が止まらなくなる。
そのうち堪えきれなくなって、「ごめんね、健人くん！」と、雪見はカメラを手にしたまま、健人の胸に顔を埋めて泣きじゃくってしまった。

健人はもちろん、そのいきなりの光景にびっくりしたのは、周りにいた
共演者をはじめ大勢のスタッフだった。
そこにいたほぼ全員が、健人と雪見の方を凝視する。
が、次の瞬間、見なかったことにしよう！という感じで、またそれぞれの作　業を再開した。

「大丈夫？落ち着いた？」
健人の言葉にハッと我に返り、慌てて健人から離れる雪見。

「ご、ごめん…。なにやってんだろ、私。本当にごめん。」
そう言いながら雪見はその場をそっと立ち去り、ロケ現場から離れた所で川茂を眺めていた。

川を眺めていて思い出した風景がある。
初めて二人で健人の実家へ泊まった翌朝。
前日出会った子供達にもらった蟹を、川に返しに行こうと健人と二人、
朝早くにバケツを片手に河川敷を歩いたっけ。
あの時初めて撮ったツーショット写真は、今でも一番大事な思い出の写真だ。

ふと右手にずっしりとした重さを感じ、カメラの存在に気が付いた。

『このカメラのお陰で私は今、健人くんのそばにいられるんだ。
誰にも負けない写真集を私が作ってあげるって、健人くんに約束してたんだ！』
こんなとこにいる場合じゃない！と雪見は走り出した。
健人の写真を、今日という日が終るまで、最後の一枚まで魂を込めて撮すために。

ロケ現場に戻ってきた雪見は、監督に一礼してから遠くでカメラを構える。
雪見が心配で演技に集中出来ないでいた健人が、雪見の姿を見つけた途端
パッと表情が明るくなり、いつもの健人らしい堂々とした演技を見せるようになった。

『良かった！元の健人くんの顔に戻ってる。
イケメン俳優　斎藤健人は、いつもそうでなくっちゃね！』

ファインダーの奥の健人が、「カット！」の声と同時にこっちに駆けてくる。

「ゆきねぇ！今の演技、どうだった？俺　、めっちゃ頑張ったんだけど。」

「うん！頑張った、頑張った！今日は仕事がぜーんぶ終ったら、二人の打ち上げに『どんべい』にでも行こうか。
健人くんの頑張りのご褒美に、私がおごってあげる！」

「やった！じゃ早めに電話して、食べたい物先に注文しておこうっと！」

「そこまでする？どんだけ楽しみなの！」

やっと二人に笑い声が戻って来た。
どうやらお互いが知らず知らずのうちに、相手の心の傷を癒やしていたようだ。

大丈夫！私はもう、泣いたりしない。
健人くんが毎日笑顔でいられるように、私もずっと笑顔でいるから。
目尻のシワがたとえ増えても、嫌いになったりしないでねっ！

ラストショット

健人専属カメラマン最後の仕事場は、ＣＭ撮影スタジオであった。
午後三時半から、健人がＣＭキャラクターを務めるビール会社の
新製品のコマーシャル撮りが行なわれる。
女子五人と健人が、友人の結婚式パーティー会場で出会い乾杯をする、
という設定のＣＭ撮影だ。

健人がヘアメイクを完了し、衣装のタキシードに着替えてスタジオに入ると
期せずして歓声と拍手が起こった。
カメラを構えて待っていた雪見も、思わずカメラを下ろし見入ってしまうほど、
健人のタキシード姿は格好良くセクシーで、男の色気が漂っていた。

「よろしくお願いします！」
頭をぴょこんと下げる仕草は子供っぽいのだが、衣装に合わせて雰囲気を作ると、
途端に大人のいい男に変　身する辺りは、さすが若手俳優？１と言われる
健人ならではの仕事ぶりである。

共演の女の子は、今人気のモデル五人が勢揃いした。
健人から遅れること二十分。
やっとパーティーメイクが完成し、スタジオに入ってくる。
みんな綺麗で可愛く、華やかな衣装の五人にも拍手が起こる。
だが最後に入ってきた一人を見て、雪見と健人の表情が固まった。
なんと、霧島可恋だった！

後ろにいた今野が、慌てて雪見の側に駆け寄る。
「霧島可恋が共演者だなんて、台本に無かったぞ！どういう事だ！」
雪見にだけ聞こえるような小さな声で、今野がささやく。
どうやら予定していたモデルの一人が急病で来られなくなり、急遽、最近ブログで人気が急上昇中のカレンに声が掛った　らしい。
雪見は突然のカレンとの遭遇にうろたえたが、何とか冷静さを保ち、最後の仕事を全うしなければと思い直し、深呼吸をしてカメラを構えた。

この五人は色んな現場で顔を合わせるらしく、すでに本当の友人同士のような雰囲気だ。
それぞれが頬を染めたりはにかんだりしながら健人に挨拶したが、カレンだけは
健人を無視するように何も声をかけてこなかった。
それがかえって不気味さを増し、この先何を仕掛けてくるのかと健人の心は身構えた。

モデル五人と健人が、パーティー会場を模したセットに勢揃いする。
それはそれは六人とも華やかで、たった六人しかそこにはいないのにみんなの目には、百人以上の招待客がいる結婚式会場にも見えていた。

「じゃ　、始めます！よろしくお願いしまーす！」

シャンパングラスに新製品のスパークリングワインが注がれ、新郎新婦の幸せと
ここで出会った六人に乾杯！というシチュエーションで撮影がスタートする。

「カンパーイ！」カチンとグラスを六個合わせ、グッとワインを飲む健人。
「カット！」の声がかかると、「これ、本物だぁ！」と健人が驚いた。

「びっくりしたぁ！ジュースかと思ったのに！」
大人を気取った演技の後にいきなり子供っぽい顔に戻り、そのギャップに
共演者も女性スタッフも、ドキドキと胸をときめかせる。

『健人くんの魅力って、そこが大きいよね。大人と子供が同居してて、
きっとみんなそのギャップにやられちゃうんだろうな。』
カメラを覗きながら　雪見は冷静に分析してみたが、内心穏やかではいられない。
なんせ五人の美女達が、しのぎを削って健人に自分をアピールしているのが
カメラを通してありありと判るのだから。ましてや霧島可恋が健人の右隣にいる。
まさか最後の仕事でカレンと一緒になろうとは…。

結構この二ヶ月間、辛いことも多かった。
どの現場でも健人は人気者で、健人を嫌いな女子にはお目にかかった事がない。
雪見が健人の遠い親戚であると言うことは、後半広く知れ渡っていて、
雪見に健人のアドレスを聞いてくる女子がどれほどいたことか。
そのたびに「ごめんなさい！マネージャーさんに口止めされてるの。」

と断るのだが、『あぁ、この人も健人くんを狙ってるんだ…。』と思うと
いつ自分が　彼女の座から引きずり下ろされるのか、不安と恐怖で仕事に
身が入らない日も多くあった。

だがそんな日々とも今日でお別れだと、ある意味ホッとしていたのに。
なぜ今、カレンに会わなければならないのか。
怖さと言うよりも、無性に腹が立ってくる。
最後の仕事を、お願いだから全うさせて！邪魔しないで！
祈るような気持ちでカメラを構える雪見。
その反面、もう健人を撮ることもないんだ、という思いが寂しさを募らせる。
いろんな思いでシャッターを切るうち、とうとうＣＭ撮影が終了した。
何事も起こらずに安堵の表情を見せる健人。
最後の最後までシャッターを切り続ける雪見。

「お疲れ様でした！ありがとうございますっ！」
健人が共演者やスタッフに挨拶　して、雪見の方に歩いてくる。
カメラの中のその姿が、またしても涙で段々とぼやけてきた。

「ゆき姉、お疲れ様！本当に良く頑張ったね。
二ヶ月間ありがとう！凄く楽しかったよ。
ゆき姉と一緒に仕事が出来て、毎日が幸せだった！」
健人は、泣きながらもカメラを下ろさない雪見を、「頑張った頑張った！」
と言いながらよしよし！と頭を撫でてあげた。

雪見はカメラを下ろしたくはなかった。
下ろした瞬間に、幸せまでが終ってしまうような気がした。

「最後は泣かないって決めてたのに…。
健人くんの前では笑顔でいようって決めてたのに…。」
泣きながら笑顔を作る雪見を見て健人は胸がキュンときしみ、思わず雪見を抱き寄せた。
「大丈夫！俺がカレンから守　ってやるよ。」
雪見の耳元でささやいて、健人は素早く身体を離す。

それを見ていた共演のモデル達は口々に、
「なにあれ！なんで私達よりあんな人なわけ？あいつ最近当麻のラジオや
『ヴィーナス』にも出てる健人のカメラマンでしょ？
ちょっと健人のそばにいるからって、調子に乗ってんじゃないの？」
と、腕組みをして雪見をにらんだ。

「ほーんと、懲りない人達よねぇ。ばっかみたい！精々恋愛ごっこを二人で楽しんでればいいわ！」不敵な笑みを浮かべてカレンがつぶやく。

後ろで二人を見ていた今野が近づき、雪見の肩をポンと叩く。
「雪見さん、二ヶ月間お疲れ様でした。俺から見ても、良く頑張ってたよ。
明日からは編集の方で忙しくなるけど、健人が喜　ぶような写真集を頼んだからね。
あ、その前に、明日は午後二時から『ヴィーナス』十二月号のグラビア撮影だ。
他にもこれからキャンペーンとかが入ってきて、編集の合間にも雪

見さんの出番が
多くあるから、これからもヨロシク！
じゃ健人、早く着替えて来い！『どんべい』まで乗っけて行くから。
」
そう言って今野は、一足先にスタジオを出て行った。

「あー、腹減った！俺、めちゃめちゃ食うから覚悟しといてねっ！」
健人が雪見の肩を叩いて控え室へと足早に消え去る。

やっと、長い長い雪見の二ヶ月間が終わりを迎えた。

カレンの静かなる攻撃

雪見がカメラバッグを担いでスタッフにお礼を言い、スタジオを出ようとした時、
後ろから「ちょっと待ってよ！」と声がした。
まだモデル五人でおしゃべりしていたカレンが、一人その輪から抜け出して
雪見の元にツカツカと歩み寄る。

「お久しぶり。お元気そうで何よりだわ。
最近は随分と派手にご活躍のようだけど、あなたって結構根性あるのね。見直したわ。
健人も相変わらずのイケメンなのに、台無しよねぇ！こんなおばさんが彼女なんじゃ。
せいぜいファンを減らさないように頑張ってね。じゃ。」

カレンは一方的にそれだけ雪見に告げると、他の四人のモデル仲間と一緒に
楽しそうにおしゃべりの続きをしながら、スタジオを出て行った。

それぐらいの　事を言われる覚悟は出来ていた。
だが、最後にカレンが言った言葉がいつまでも耳の中でこだまする。
『せいぜいファンを減らさないように頑張ってね…。』

今野に送ってもらって、『どんべい』前で下ろしてもらう。
雪見が降りる間際、「今野さんも良かったら一緒にどうですか？ここ、

何食べてもすっごく美味しいんですよ！お世話になったお礼に私がおごりますから！」
そう言うと、健人がジロッと雪見を見た。

「あははっ！心配するな、健人！行くなんて言わないから。
雪見さん、今日は健人と二人で打ち上げなよ。また今度一緒に飲もう。
二人とも明日はグラビア撮影があるって事をお忘れなく！」
今野は軽く手を上げ「じゃ、お疲れ！」と言い、車を発進させた　。

「今野さんって、いいマネージャーさんだよね！
健人くんは今野さんのあとをついて行けば、何の心配もいらないよ。」
雪見は今野の車のテールランプを見送りながら、健人の顔を見る。

「そうだね。俺たちの仲を邪魔しないんだから、いいマネージャーに違いない！
さっ、腹減った！マスター、注文しておいたもん作ってくれたかな？早く入ろ！」
健人は帽子のつばをグッと下げて、店の暖簾をくぐって行った。

「マスター、久しぶり！元気だった？」
雪見が笑顔で、カウンターの中にいるマスターに声をかける。

「おぅ！元気よ！ほんと、しばらくご無沙汰だったな、二人とも。
ま、あれだけ忙しいんじゃ、しゃーないわ。
頼まれた料理はすぐ運ぶから、いつもの　部屋に入ってな！
あ、取りあえずはビール二丁ね。」

店の奥に進み、マスターが二人のためにいつでも空けてくれてる小上がりに入る。

「あー、やっぱり落ち着くね、ここは！
でも、いつから来てないんだろ？あ、しまった！
沖縄から買ってきた泡盛、まだマスターにあげてないんだった！
今日もここ来ること、突然決めたからなぁー。まぁ、いいや。腐るもんじゃないから。」
そんな話をしていると、マスターが「入るよ！」と、料理やビールを運んできた。
ここで一息付いていこうと、自分のビールまで持ってきたらしい。

「じゃ、お疲れ！乾杯！うんめーっ！仕事中のビールは旨いわ！
さぁさ、暖かいうちに食いな。健人に食わせようと思って、新作も作ってみたから。
どうだい？美味いか？」マスターが健人の顔を覗き込む。

「マジ、うめぇ！なにこれっ！マスター天才だよ、ほんとに！」
健人は本当に幸せそうな顔をして物を食べる人なので、作る者にとってはそれが何よりの労いの言葉代わりであった。

「じゃ、ゆっくりして行きなよ！」そう言ってマスターはまた仕事に戻る。

やっと二人きりになって、改めて健人と雪見は乾杯をした。
「本当にゆき姉は二ヶ月間、よく頑張ったよね。
だってその前までの生活とは、１８０度違う暮しになったわけでしょ？どうだった？」

「うーん、やっぱ想像以上に大変な世界だなぁと思った！
そんなとこで活躍してる健人くんは凄いよ！今回一番の収穫は、
健人くんを尊敬の眼差しで見れるようになっ　たことかな。」
雪見がビールをグイッとあおりながら、頬杖ついて健人を見た。

「その目が尊敬のまなざし？俺には、『こんなに料理注文して、誰
が食べんのよ！』
って眼差しに見えるんだけど…。」

「それもある！」

二人は久しぶりに心から笑いながらおしゃべりをし、食事とお酒を
楽しんだ。
だがお互いに、先ほどカレンに言われた言葉だけは話題にするまい
と、
自分自身に言い聞かせる。
雪見と同様、健人もカレンから声を掛けられていたのだ。

健人らが何テイク目かの撮影のあと、メイク直しに小休憩を挟んだ。
カレンがそれとなく健人の後ろに立ち、一言ささやいて離れる。
「あんな彼女でいいわけ？斎藤健人も大したことない男ね。」
健人は素早く振り向き　カレンの顔を見たが、カレンは小首を傾げ
てにっこり微笑み、
メイクさんのもとへ歩いて行った。

またカレンが行動を開始する！直感的にそう健人は感じてしまった。

「ねぇ！当麻くんたち、どうしてるかな？」

「当麻くんたち、って、まだ当麻と愛穂さんが付き合ってるかどうかもわからないんだよ？」

「だったら当麻くんに聞いてみれば？ね、電話して！メールでもいいや！
あの後どうなったのか、早く知りたいっ！」

雪見は興味津々で早く早く！とせっついたが、健人はまったく乗り気ではない。
愛穂といいカレンといい、同じような時期に二人続いて現れたことに、
健人は違和感を覚えていた。

「あのさぁ、当麻なら、もし付き合い出したら必ず俺に言ってくるって！
それに、あれからまだ二日しか経ってないんだよ？
いくらなんでも、付き合うには早過ぎるでしょ！」

「へーっ！健人くんって意外と恋愛に関しては慎重派なんだ。
恋愛だけじゃないよね。割と何事に置いても慎重派かな？
当麻くんは反対に、直感で動くタイプに見えるけど…。」

「まぁ、当たってなくもないけど。それにしたって、出会ってすぐには
付き合わんでしょ！さすがの当麻くんでも。」
そう言いながらビールを飲み干し、ジョッキをテーブルに置いたところでメールを受信した。

「あれ？誰からだろ。え？当麻からだ！噂してたのがバレたかな。
えーっとぉ…。え？愛穂さんと付き合うことにしたぁ？！マジでぇ？」

当麻からのメールは、『愛穂と付き　合うことになったから、今度ダブルデートしよう！』
という内容だった。
健人は、当麻のメールに久々のハートマークを見てビックリ！

前の年上彼女に振られて以来こなかった春は、こんな秋の初めにやって来た。

寂しい一人の仕事先

今日は十月一日（金）、健人と二人『どんべい』で打ち上げをした翌日。

「明日はグラビア撮影があるから軽く飲もう！」と健人と約束して飲み出したのに、
突然送られてきた当麻からのハートメールのお陰で、やたら二人ともテンションが上がり
結局のところ、また飲み過ぎてしまった。

「あー、またやっちゃった！お風呂でむくみを取ってからじゃないと、
恥ずかしくて写真なんて撮られたくないや。
健人くんはちゃんと起きて仕事に行ったかなぁ…。」
めめとラッキーに餌をやりながらの独り言。

今日からは健人と別々の仕事場だ。
健人は今まで通り今野の車に乗り、その日の仕事先へ。
雪見は今日から当分の間、『ヴィーナス』編集部が仕事場だった。
い　よいよ写真集の編集作業が開始されるのだ。

昨日までの生活パターンと、朝一番に健人の顔を見られない寂しさに慣れるのは
まだしばらく先のことになりそう。
だけど今日は午後から、健人と一緒のグラビア撮影がある。
以前はあんなに気乗りしない仕事だったのに、今日は違った。

健人と共に仕事が出来ると思うと、嬉しくて仕方ない。
少々の頭痛なんて吹き飛ぶ嬉しさだ。
さぁ、お風呂に入って編集会議に出る準備をしなくちゃ！

その頃健人は今野の車の後部座席で、隣の席がぽっかり空いてる寂しさと
昨夜の酒のせいで、虚ろな腫れぼったい目をして沈んでた。
朝から午前中いっぱい、新ドラマの番宣があるというのに…。

「おいおい、健人！大丈夫かよ？目が死ん　でるぞ！」

「ゆき姉だったらこんな日は、目に当てるアイシング用の氷を持って来てくれたのに…。
あと、野菜ジュースも…。」

「わかってんなら、自分で用意してくればよかっただろ？
いつまでもゆき姉を頼ってたんじゃダメだって！
二ヶ月前の生活に戻っただけなんだから、しっかりしてくれよ。
グラビア撮影までにシャキッとしとかないと、またゆき姉に怒られるからな！
ま、その前に、そんな顔で番宣でたのぉ？！って怒られると思うけど。」
今野の口調があまりにも雪見そっくりで、健人は思わず吹き出した。

「絶対言うね！言う言う！怒られんのヤダから、どっかコンビニ寄って
氷買って行きたいんだけど…。あと野菜ジュースも。」

「ＯＫ！もうちょっと行　ったとこで買ってくるよ。」

今野は、やっと元気になり出した健人にホッとして、車をコンビニへと走らせた。

午後二時。雪見は『ヴィーナス』編集部にいる。
午前中から健人の写真集の編集会議に出席し、そのまま作業に移った。
午後三時からは『ヴィーナス』十二月号のグラビア撮影があるので、そろそろスタジオに移動し衣装に着替え、ヘアメイクをセットしてもらわねばならない。

「済みません！じゃ私、撮影の準備があるんで一旦抜けます。終ったら大至急戻りますので、後はよろしくお願いします。」
雪見が申し訳なさそうに編集部員に告げ、頭を下げた。

するとみんなはニコニコして
「なに言ってんですか！雪見さんがうちの雑誌に出てから、めちゃくちゃ＞　ＢＲ売り上げ伸びたんですよ！
問い合わせも殺到してるし、雪見さんが着た服なんて、あっという間に
在庫切れだって！稼ぎ頭なんだから、こちらこそよろしくお願いします！です。」

「そうそう！こっちは任せて早く行って。また格好いいの頼むよ！」
そう言って笑顔で送り出してくれた。
みんないい人ばかりで、これからの編集作業も楽しみながらできそう、
と心を明るくしながら十二階の撮影スタジオへと向かう。

メイク室にはすでにスタイリストの牧田と、ヘアメイクの進藤がスタンバイしていた。

「おはようございます！またお世話になります。」

雪見が笑顔で二人に挨拶する。

この二人と一緒にいると、とても安心して自分を出せると雪見は思っていた。

何回体験　してもドキドキするグラビア撮影だが、すべてを任せておけば

みんなが喜んでくれる姿に変身させてくれるので、徐々にそれも楽しむ

余裕が生まれてきた。

「今日のイメージはね、山ガールって感じにしたいの。

これが発売になるのが十一月の中だから、冬仕様の山ガール。

きっとこんな格好で雪見さんは猫を写しに行くんだ！ってみんなが思うような格好。」

「多分そんな可愛い格好じゃ、一度も撮影行ったことないと思うけど。」

そう言って雪見は可笑しそうに笑った。

雪見が着替え終りメイクをしてもらってると、ドアがノックされスタッフが顔を出す。

「斎藤健人さん到着です！お願いします！」

「了解！今行く。じゃ、健人くんの方やってくるね。

雪見ちゃん、　またしても可愛いよ！って言っとくから。」

牧田がポンと雪見の肩を叩いて、隣のメイク室へと走って行った。

雪見のメイクとヘアセットが完成し、進藤も慌てて健人のメイク室に飛び込む。
一人残された雪見は椅子から降りて、全身を鏡でマジマジと見つめながら、
「ふーん。こんな私もいるんだぁ…。なんか凄いな、あの二人って。」
と、魔法に掛けられ綺麗になったシンデレラの気分で、クルッと一回転して自分を観察した。

「でも、こーんなカラフルな格好で猫の撮影に行ったら、猫がみんなびっくりして逃げてっちゃうよね！」
大きな独り言を言って一人で笑った。
そしたらなんだか肩の力が抜けてきて、撮影が楽しみになってくる。

「健人くん、どんな衣装かなぁ。　まさか二日酔いの顔なんてして来てないだろうね。」
健人と会える瞬間が楽しみでならない雪見。
たった半日会ってないだけなのに、何週間ぶりかの再会のような気持ちになって
ドキドキとその時を待っていた。

「雪見さん、準備ができたのでスタジオにスタンバイお願いします！」
スタッフから声がかかり、メイク室から移動する。
スタジオで挨拶していると、後ろから「おはようございます！」と健人の声がした！
振り向く雪見に、健人は嬉しそうに「おはよう！ゆき姉！」と、いつもの挨拶をする。

「おはよう！元気だった？二日酔いじゃない？
おっ！目は調子良さげだね、腫れてないや。どうしてるか心配だった。」
そう言ったあと、小さな声で「会いたかった。」と雪　見がつぶやいた。

健人はにっこり笑って「今日も可愛くなってるよ！俺も会いたかった。」
と言いながら、帽子を被った雪見の頭をよしよし！と撫でてあげた。

その時、二人の後ろから声がかかる。
「もう感動のご対面は終了したかな？じゃあ、お二人とも今日はよろしくねっ！」

その声に驚いて振り向くと、なんとそこには、カメラを手にした愛穂が
笑顔で立っていたのだ！

「今日カメラマンを務めさせていただきます、霧島愛穂です。よろしく！」

読めない愛穂の心

「愛穂さん！愛穂さんが撮ってくれるの？阿部さんは？」
てっきり今日のカメラマンは、阿部だとばかり思ってた二人。
突然の愛穂の登場に驚かないわけはない。
なんせ昨夜『どんべい』で、当麻との噂話を散々したとこなのだから。
雪見と健人は顔を見合わせ、にやっと笑った。

「なによ、二人とも！カメラマンが阿部さんじゃなくてがっかりした？
私は今日二人を撮せるのが、すっごく楽しみだったんだけどな。
あ！当麻くんが、よろしく言ってたよ。
今日のラジオもちゃんと聞くように！って、伝言頼まれてたんだ。」
雪見たちが何も聞かないうちから、愛穂は嬉しそうに当麻の話をする。

「後から色々、聞き出さなくっちゃねっ！」
雪見が健人の耳元でさ　さやいてから、二人でセットの前に立った。

「なんだか益々仲良しな二人ね。カメラマンとしてやる気をそそられるわ！
じゃ、始めましょう！みなさん、よろしくお願いします！」
愛穂の声で、『ヴィーナス』一月号の撮影がスタート。
一気にスタジオが熱気に包まれる。

当初の予定では、雪見と健人のグラビアは最初の号だけのはずだった。
あとは健人のグラビアのワンコーナーに、雪見の撮影風景やオフシ

ヨットを
十二月発売号まで載せて終了、となるはずであった。
ところがふたを開けてみると、グラビアが発売と同時に大反響を呼び、
雪見に対する質問や感想が多数寄せられて、編集部がちょっとしたパニックに
陥る騒ぎになったのである。
それで急遽編集長の吉川は、　雪見と健人二人のグラビアを、十二月発売号まで
毎月載せる事に決めたのだ。

カメラマンの愛穂はと言うと、沖縄で健人と雪見、そして当麻の三人を撮した写真が
編集部内で高く評価され、すっかり『ヴィーナス』の人気カメラマンとして
阿部と仕事を二分していた。

雪見は同業者として、つい愛穂の仕事ぶりに見入ってしまう時がある。
そんな時、愛穂はすぐに気が付いて雪見に声を掛けた。
「雪見さーん！カメラマンの顔になってるよ！
今はカメラマン雪見じゃなくて、モデルの雪見になりきって！」

「ごめんなさいっ！どうも愛穂さんの動きに目が行っちゃって…。」

「せっかく健人くんと一緒にいるんだから、もっと楽しまないと！
じゃ、衣装替えようか。セット　のチェンジもお願いしまーす！」

次の衣装はなんと着物であった！

「えーっ！この振り袖着るのぉ？
私、三十三ですよ！ちょっと振り袖はまずいと思うんだけど…。」
牧田にすがるような目で訴える雪見。

「だって一月号の撮影なんだから仕方ないよ！
一月号はいつも健人くんには着物を着てもらってるの。
まさか着物姿の健人くんに、隣の雪見ちゃんが洋服って訳にはいかないでしょ。
振り袖だって、二十代のファッション誌なんだから大丈夫！雪見ちゃん未婚なんだし。」
渋々髪を着物用にセットし直し、牧田に着物を着付けてもらう。
振り袖なんて、成人式以来着たことがない。それがまさか今日着ることになろうとは…。

準備が出来て雪見がスタジオに戻ると、　すでに健人はセットの前にいた。
さすが毎年着ているだけあって、背筋も正しく堂々と着こなし、いつも見ている健人とはまた違った、大人の色気を感じさせる。
イケメンというジャンルの人達は、どうしてこう何でもかんでも似合ってしまうのだろうか。
一歩ずつ健人に近づくたびに、ドキドキとさせられる。

だが、今みんなの視線を釘付けにしているのは雪見の方だ。
スタジオに静々と入ってきた雪見の艶やかな振り袖姿は、誰もが感嘆の声を上げる。
もちろん健人も、雪見が着物を着ている姿など、生まれて初めて見た。

「驚いた！メッチャ綺麗だ…。

ゆき姉の着物姿なんて想像も付かなかったけど、良く似合ってる。
凄く綺麗だよ！」
健人の瞳には、もう目の前の雪見しか　映っていなかった。
雪見は、振り袖をまとっている自分自身がどうしても恥ずかしく、
横に下ろした長い巻き髪をいじっては、その恥ずかしさを紛らわせ
ている。

「やだなぁ！そんなに見ないでよ！この格好が今までで一番恥ずか
しいんだから。
グラビア見てうちの母さん、なんて言うだろ…。」
三十三まで嫁にも行かずに猫ばっかり追っかけてたかと思ったら、
今度は健人の後を追っかけ出して、その上振り袖姿で二十代向け雑
誌に
載ってる娘を、母はどう思って見るのだろうか。
そう思うと、雪見は段々ナーバスになってきた。

「ほら！そんな顔すんなって！俺が綺麗だって言ってんだから間違
いないの！
ねぇ、愛穂さん。ゆき姉、綺麗だよね！」

「うん！すっごく綺麗　！やっぱ日本の伝統美っていいなぁー。
よし！雪見さんのグラビアを見て、日本の着物人口が増えるような
写真を撮るからねっ！
じゃ、撮影再開します！よろしく！」

無事今回もグラビア撮影をこなし、着物を脱いでメイクルームでホ
ッと
安堵する雪見に、ノックして入ってきた愛穂が後ろから声をかけた。
「雪見さん、お疲れ様！すっごく素敵な写真を撮らせてもらったよ！

なんかカメラ覗いてたら、私も着物着てみたくなっちゃった。
成人式も出てないから、着物なんて七五三以来着てないもん。」

「私も似たようなものだよ！これがなかったらきっと、もう一生振り袖なんて着ないで終ってたと思う。
最初はどうなることかと思ったけど、いい経験させてもらいました。
あ、愛穂さんも今度着物借りて着てみれば？私が写真、撮ってあげる。
こう見えても私、結婚式場でのバイトが長いから、着物撮影はお手の物だよ！」
雪見がちょっと得意げに言う。それから思い付いたように小声で、
「そうだ！来年のお正月は当麻くんと、着物で初詣なんて素敵じゃない？
当麻くん、絶対に着物似合うと思う！そしたら私がツーショット撮ってあげるよ。」
なんて反応するか興味津々で愛穂の顔を見る。

「うーん、それまで付き合ってるかどうか、わかんない。」

「えっ？」
愛穂の予想外の返答に、雪見は困惑した。
あんなに当麻は浮かれてるのに、愛穂はたった二ヶ月先の愛も保証できないと言う。
今さっき始まったばかりの愛なのに…。

雪見は　、心の中を駆け抜けた言いようのない不安を隠しながら、次の言葉を探していた。

四人のパーティー

「愛穂さん。今日の夜、もし良かったらうちで飲まない？」

「え？雪見さんの家で？」

雪見はこの場で当麻のことを、あれこれ聞き出すのも気が引けたので、
この際お酒の力を少々借りて、愛穂の真意を確かめようと思っていた。

「私このあと編集部に戻って、健人くんの写真集の続きをやらなきゃならないんだけど、
今日は九時には終らせようって話だから、もし予定が無かったらどうかなと思って。」

「そうだなぁ…。」

「あ！当麻くんのラジオ、生で五時から聞くのは無理だと思ったから、
予約録音してきたんだ！一緒に聴きながらお酒飲もうよ！」

この一言で、愛穂は「うん！」と返事した。
二ヶ月後の当麻への愛はどうだか判らないが、取りあえず　今日の愛は大丈夫そうだ。
もう次の仕事先へと向かった健人に、メールでこの事を伝えてから編集部へと戻る。

「じゃ、お疲れ様でした！お先に。」
雪見が今日の編集作業を終え、ホッとしながら誰もいない一階ロビーに降りると
愛穂がベンチに座って待っていた。

「愛穂さん！待っててくれたの？」

「うん。雪見さんちは教えてもらったけど、やっぱり迷ったら困るから
一緒に行きたいかな、って。こう見えても私、方向音痴で…。
ロケ先になかなかたどり着けなくて、遅刻寸前！ってことを結構やらかすの。」
笑いながら肩をすくめる。

「ほんとに？やっぱり私と似てる！
私もこないだ竹富島で、健人くんと当麻くんに案内は任しといて！とか
言っときながら、大きな顔して道に迷った！
ここから自分ちは迷わないから安心してね。じゃ、行こう！」

愛穂が、近くのコンビニで買ったワインを持参してきたので、
二人はそのまま雪見のマンションへと向かう。

「ただいまぁ！めめとラッキーは仲良くお留守番してたかな？
愛穂さん、上がって！」
パチッ！と居間の電気をつけた途端、雪見はビックリして卒倒しそうになった！

「お帰りぃ！遅かったね、ゆき姉！待ちくたびれたよ。」

なんと、暗闇の中に健人と当麻がソファーに座ってるではないか！
雪見より早く仕事が終った二人が、健人の持ってる合い鍵で先に入って、
雪見と愛穂を驚かせようと待ちかまえていたのだ。

「ちょっとぉ！驚かせないでよ！もう心臓が止　まるかと思った！
通りでめめ達がお出迎えに来ないわけだ。あー、びっくりした！」

「イェーイ！やったねっ！」
健人と当麻はハイタッチをして、いたずらの成功を喜んだ。

当麻が雪見の後ろに立つ愛穂を見て、「お疲れ！」とにっこり微笑む。
愛穂も当麻を見つめて「ラジオ、お疲れ様！」と笑顔を見せた。
なんか、いい感じじゃない？という風に、雪見は健人に目配せしてから
「よーし！宴会の準備、開始！」と号令をかける。

「当麻くん、おつまみ作るの手伝ってくれる？」「ＯＫ！」
「健人くんと愛穂さんは、お酒とグラスの準備をお願いねっ！」
「了解！」

当麻は器用に料理する人で、反対に健人は何も出来ない人。
愛穂も「お料理はあまり得意じゃなくて　…。」と、前に言ってたことがあったので、
当麻の前で恥をかかせてはならないと、健人と一緒に酒の用意をしてもらう。

久しぶりに雪見とキッチンに立つ当麻は、心なしか嬉しそうだった。

「ねぇねぇ、ラジオ聞いてくれた？」

「残念ながら、それどころじゃなかったの！
振り袖着せられて、苦しくて撮影大変だったんだから！」
雪見があり合わせの物で、簡単なマリネを作りながら当麻に返事する。

「えっ！ゆき姉、着物きたの？あっ、そうか！もう一月号の撮影だもんね。
ゆき姉の着物姿って、どんなんだろ？すっげー興味ある！」

「今、『ゆき姉が振り袖かよ？大丈夫かぁ？』とか思ったでしょ？絶対に思った！」
隣りに立つ当麻をジロリと下から覗き込む。
その　顔が可愛くて、一瞬当麻はドキッとさせられた。

「そ、そんなこと思うわけないでしょーが！相変わらず被害妄想大きい人だね、
ゆき姉は。なんで自分に自信が持てないの？そんなに可愛いのに。」
当麻の言葉に、今度は雪見がドキッとする。
なんで愛穂さんと付き合ってるのに、そんなこと言うの…。

そこに健人が、「おつまみ、まだぁ？俺、喉乾いてんだけど。先に愛穂さんと
飲んじゃうよ！」とキッチンに顔を出した。

雪見は慌てて、「ごめんごめん！出来た物から運ぶね。当麻くん、お願い！」

と、当麻にトレーを渡す。
作りかけのおつまみも急いで仕上げて、雪見も席に着いた。

「じゃ、乾杯しよう！何に乾杯する？」健人がニヤッと笑って雪見を見る。
「もち　ろん！でしょ？」
「そうだよねぇー！じゃ、当麻と愛穂さんにカンパーイ！」

当麻と愛穂は、顔を見合わせて笑ってた。
そして雪見や健人とグラスを合わせたあと、見つめ合って二人でチン！
とグラスを鳴らし、ワインを口に含んだ。

「うめぇーっ！仕事の後のワインは最高！俺、腹減ってたんだ！食べてもいい？」
健人がどれに手を付けようか、子供のように迷いながら料理を皿に取る。

「いっただっきまーす！これ、今作ったの？マジうめぇ！さすが、ゆき姉だね！」

「それ、当麻くんだよ！作ったの。めちゃ手際いいの！
男の料理なんだけど、繊細な味付けするよね、当麻くんって。
いいなぁー、愛穂さん！きっといっつも美味しい物、食べさせてもらえるよ！」
雪見は当麻を褒めて、愛穂にも「よかったね、料理の得意な彼氏で！」
と言うことを素直に伝えたつもりだったが、三人の受け取り方は違ったようだ。

「悪かったね！何にも出来ない彼氏で！」と、まず健人がむくれる。
次に愛穂が「私、お料理下手くそで…。」と下を向き、当麻までもが気まずいのか
シラーッとしていた。

「ち、ちょっと！そんな意味で言ったんじゃないって！
ごめん！私の言い方が悪かったね！機嫌直して食べようよ。
あとは全部私が作ったんだから！遠慮しないで食べて！」

「ゆき姉！それも嫌みに聞こえるんだけど。」
当麻が笑いながら言うと、雪見は「もう、しゃべらないっ！」とワインを一気飲みした。

にぎやかなホームパーティーの始まりだ　。

カミングアウト

「まさか今日、みんながうちに集まるなんてねぇ！驚きの展開だわ。まだ二人とも仕事かと思った。」
雪見がグラスを手に取りながら、健人と当麻を見て言った。

「ゆき姉から、『今日愛穂さんがうちに飲みに来る。』ってメール来て
こりゃ当麻と行かなきゃイカンでしょ！と思ってさ。
ラジオも終ってたから当麻にメールしたら、ディレクターさんの誘いを蹴って
こっちに来たんだって！こいつ。」
と、健人はニヤニヤしながら当麻を見る。
が、当の当麻は素知らぬ顔をして、自分が作った三種の茸のガーリック炒めを頬張り、
ワインをゴクリと喉に流し込んで「これ、めっちゃワインに合う！」
とご満悦な様子だ。

雪見も健人も、二人の口から色々聞き出したいのに　、さっぱりそんな話にはならない。
それどころか、当麻と愛穂の会話や表情を観察してみると、もう何年も付き合って
お互いが空気のような存在になってるカップルを、なぜか頭に思い浮かべてしまう。

『付き合ってすぐって、普通もっとラブラブなんじゃないのかなぁ？
それとも、私達に冷やかされるのを警戒して、ベタベタしたいのを押さえてる？
いや、そんな風にも見えないし…。

まぁ、元々当麻くんは、健人くんに比べて恥ずかしがり屋さんだから、
どの恋愛でもみんなの前ではこんな感じなのかな？』
雪見は、当麻と愛穂を交互に見ながら、どこか心に引っかかるものを感じていた。
恋愛なんて人それぞれなのだから、別に気にしなきゃいいことなんだけど。

「そうだ　！今日の当麻くんのラジオ、録音してあったんだ！
まだうちら聞いてないから、ＢＧＭ代わりに流しちゃお！」
そう言いながら雪見が、今日放送の『当麻的幸せの時間』を流し始めた。

つい三人とも聞き入って、場がシーンとしてしまう。
だが当麻は、無我夢中でしゃべる生放送の三十分間を改めて聞き返すのは、
どうにも恥ずかしくて仕方ないらしい。

「おーい！そんなに真剣に聞かなくてもいいから！
俺今日は一人だったし、大したこと話してないって。
あ！先週の放送の反響は、プロデューサーもビックリするほど凄かったよ！
『当麻くん一人の放送より三人の時の方が断然面白いから、どうか三人の番組に
変えちゃって下さい！』って葉書にはガッカリしたけどね。」
当麻の話にみんなで大笑いしたら、一気に場の空気がリラックスした。
よし！今が聞き出すチャンス！と読んで、雪見が口火を切る。

「ねぇねぇ。愛穂さんって、当麻くんみたいな人がずっとタイプだったの？」
最初の質問にしてはその微妙な言い回しに、言った本人が『しまったかな？』
と少々後悔したが、口から出てしまったものは仕方ない。

「うーん、タイプでもないかな？今まで付き合ってきた人は、グイグイ
引っ張ってくれて頼れる人が多かった。
当麻くんみたいな優柔不断で平和主義な人とは、初めて付き合ったよ。
だから、結構まだ戸惑ってる。」
愛穂のはっきりしたものの言い方に、こっちの方が戸惑った。
当麻と健人の顔も、明らかに複雑な表情をしている。

「そ、そうなんだ…。けど当麻くんって優しいし格好いいし家事も得意だし、
それに世間のイメージよりも、意外と男らしいとこあるよ！」

「意外にって何よ、意外にって！」
雪見のフォローに当麻がツッコミを入れたが、その顔に笑顔はない。
やっぱりこの二人に、熱い思いが感じられない気がするのは、
ただの思い過ごしではなかったのか。
何時間か前に感じた言いようのない不安が、徐々に姿を現し始めた。

「そう言えば昨日、梨弩さんって人のグラビア撮影したよ。
あの人、雪見さんの前の彼氏なんでしょ？『浅香雪見ってカメラマン知ってる？』
って声をかけられたんだ。凄い人と付き合ってたんだね、雪見さんって！」

突然の愛穂の発言に、健人たちは一瞬で固まった　。雪見は慌てふためく。

「えっ！『ヴィーナス』のグラビアに出るの？なんで？愛穂さんが撮ったの？学を。」

「そう！次の特別グラビアは、梨弩さんに急遽変更になったらしい。この前すっごい賞を取ったんでしょ？国際的科学者なのに、超イケメンってことでオファーしたみたい。実際会ったら背は高いし、モデルさん並みの体型だった。大人の色気ある格好いい男！って感じ。その上、優秀な頭脳を持ってるんだから、もうパーフェクト！だよね。なんであんな素敵な人と別れちゃったの？」

いきなり饒舌になった愛穂のストレートな質問に、雪見は焦る。健人と当麻の視線がこっちを向いてるのを感じた。

「なんで、って…。」

雪見は、健人と当麻に本当の事を話　す勇気がなかった。二十六歳の時にプロポーズされたことや、嫌いになって別れた訳ではないことを…。

健人には、何も隠し事をしたくないと言っておきながら、やっぱり言えないことがある。

雪見が言い訳を探していると、当麻が先に口を挟んだ。

「ゆき姉にだって色々あるよね！俺や健人にだって、他人には言えないことたくさんあるんだから。言いたくないことは、無理に言わなくてもいいんだよ。」

かばってくれる当麻の優しさが、雪見の心にじわっと染み込んでくる。

だが、健人の不安げな表情は、そのままにしておくわけにはいかないと、とっさに思った。

「デンマークに一緒に来て欲しい、っていうプロポーズを断ったの、昔。」

雪見の覚悟を決めたカミングアウトに、三人が驚いて雪見を見る。
健人は、以前学と話した時に覚えた胸騒ぎはそういう事だったのかと、
今やっと合点がいき、一瞬驚きはしたが少し気持ちが落ち着いた。

「そう。そうだったんだ…。ありがとう!話してくれて。」
健人が雪見の顔を見て、にっこりと微笑んだ。
その瞳から先程までの不安げな影は消え去り、反対に、雪見が自分に大事な事を
打ち明けてくれた!という嬉しさが読み取れる。

「ごめんね、健人くん。今まで黙ってて…。
あの時ちゃんと話せば良かったって、後悔してたんだ、私。
今みんなに話せてスッキリした!あー、喉乾いちゃった!」
そう言いながら雪見は、ビールの缶をプシュッと開け一気に飲んだ。

そのあとは四人で、昔の恋人の話をお互いに披露し合って盛り上がり、
また近々、今度はカラオケに行く約束をして解散した。
帰る当麻と愛穂を玄関先で見送る二人。
「じゃ、またねっ!当麻くん、ちゃんと愛穂さんを部屋まで送り届けてよ!
送り狼にはならないでねっ!」

「古っ！ゆき姉！今どき送り狼なんて言葉は使わんでしょ！すんげー久々に聞いた！」
健人のツッコミに当麻と愛穂の笑い声が響く。

二人が玄関を出て行ったあと、健人は雪見を抱き締め
「ゆき姉、だーい好きっ！」と言ったあと優しいキスをした。

二人だけの夜はまだ明けない。

予想外の仕事

雪見の家で四人の飲み会をしてから早一週間。
相変わらず健人も当麻も忙しい毎日を過ごし、まだ一度も三人揃って歌の練習が出来ぬまま、十月二週目の『当麻的幸せの時間』放送日を迎えてしまった。
今日は健人と雪見も番組に加わる日。夕方四時にラジオスタジオ集合だ。

この日も雪見は朝から『ヴィーナス』編集部にて、写真集の編集作業をこなし、
お昼過ぎからは、同じ出版社の三十代向けファッション誌『シャロン』
のグラビア撮影が待っていた。

以前『ヴィーナス』編集長吉川に紹介された『シャロン』編集長北村が
「是非ウチにも出て欲しい！」と、雪見の所属事務所に頭を下げて決まった仕事ではあったが、雪見はどうにも気が重い。
もっと編集作業に没頭したいのに、ちょこちょこ違う仕事が間に入り、
その度に編集部を抜け出さなければならないことに、段々とストレスを感じ始めた。
しかしこれは致し方ないことだと、頭の中では解ってる。
写真集の出版を『ヴィーナス』とのコラボでと契約した時点で、色々な
企画を仕掛けると言うことは、吉川との取り決めだったのだから。

午前十一時前。『シャロン』編集部から迎えの人が『ヴィーナス』

編集部にやって来た。
今日の撮影は、都内の大学キャンパスで行なわれるらしい。
しかも今話題の有名人との対談が急遽用意されたと聞かされて、雪見は慌てだした。

「えーっ！そんなぁ！グラビア撮影だけでも一杯一杯なのに、この私が
対談なんて絶対に無理です！お断りします！」

「断るって言われても！私は浅香さんを連れて来るようにって、編集長に
言われただけだから…。お願いします！私も困るんです！」

二人のやり取りを聞いていた写真集編集スタッフは、笑いながら
「雪見さん、行ってやりなよ！その子泣いちゃうよ！
『シャロン』の北村編集長は怖い人なんだから。
こっちは順調に進んでるんだし、それに有名人との対談なんてワクワクするじゃん！
一体誰との対談なんだろ？ねぇ、誰が来るの？」
と聞いたのだが、その迎えに来た新人らしい『シャロン』編集部員は、
誰との対談かは本人にはシークレットなのだと言う。

「なにそれ！誰との対談かも教えてもらえないの？益々行きたく無くなった！」
その子を責めるのはお門違いと解っていたが、無性に腹が立ってきた。

「まぁまぁ！これも写真集を売るための戦略なんだから、私達のため、

いや健人くんのためだと思って我慢して！北村さんの企画力って凄いんだよ！
絶対にマイナスになることはしないって。それどころか、相当な反響を狙ってると思う。
『ヴィーナス』も、うかうかしてられないわ！」
そう言って、ここのリーダーの加藤さんが雪見をなだめる。

雪見は、これ以上何を言っても、どうにかなるわけでもないと観念し、
渋々出掛ける準備をした。
「済みません！撮影のあとは真っ直ぐラジオ局に行くことになりそうです。
えーと、五時半には放送終るんで、六時過ぎには戻って来ますから！」

いってらっしゃい！と送り出され、『シャロン』のカメラマンやメイクさんらと共にワゴン車に乗り込み、撮影現場へと移動した。

車の中では、初対面となる撮影スタッフと自己紹介を交わしたあと、今日の衣装の打ち合わせをする。
やはり三十代向けファッション誌だけあって、『ヴィーナス』で着る衣装とはまるで違う。
が、二十代向け『ヴィーナス』では気恥ずかしさが先に立ったが、『シャロン』は自分の年代の雑誌なので、少しは堂々としていられる気がした。

「もう少しで到着です！」
運転していたカメラマンの声で窓の外を見ると、見覚えのある懐か

しい風景が目に映った。
「あれっ？ここは…。」
車を降りて驚いた。そこは雪見が卒業した大学のキャンパスだったのだ！

「うそ！ここで撮影するんですか　？」
「そう！ここ、雪見さんの出たとこでしょ？凄い大学出てるんだね、雪見さんって。」
「いや、そんなことはないけど…。」
五十代ぐらいに見えるカメラマンを見ながら、雪見はなんとなく嫌な予感がしてきた。『まさかね…。』

「じゃ雪見さん、着替えて準備お願いします！」
もう一度ワゴン車に乗り込み、着替えてヘアメイクを整える。
いよいよグラビア撮影のスタートだ。

「母校のキャンパスを懐かしい思いで歩いてる！ってシチュエーションでお願いします！」
確かに懐かしいは懐かしい。卒業以来何年ぶりであろう、ここを訪れるのは…。
次第に昔を思い出し、演技ではなく本当に懐かしくリラックスした表情で撮影は進んだ。

「バッチリです！雪見さん。　いい写真が撮れてますよ！
じゃ次の衣装に着替えて、いよいよ対談相手とご対面シーンから撮影を
再開します！」
再び車の中で着替えながら、雪見は心臓が尋常じゃないほどドキドキしてきた。

「私、何にも話せなかったらどうしよう！対談なんてしたことないし…。
もしも上手くいかなかったら…。」

「ほらほら、そんな顔しないで！大丈夫！雪見さんなら大丈夫よ。
私、撮影見てて思ったもの。この人、本当にカメラマンなの？って。
私の目には、トップモデルか女優さんにしか見えなかった。
だから大丈夫！自信を持って堂々とお話すればいいの。
さぁ、いってらっしゃい！」
スタイリストさんに励まされ、背中を押されて車を降りる。

「じゃあ雪見さんは、ここから向こうに向かって、ゆっくり歩いてくれる？
対談相手はむこうからこっちに向かって歩いて来るから。
真ん中辺で顔を合わせた瞬間の表情から撮影開始ね。」

カメラマンの指示通りに、ゆっくり一歩ずつ歩く。
普段履き慣れないヒールと緊張感で、果たして足が正しく前へ出ているのかさえ判らない。
足元ばかり見て歩く雪見に、前方に立っているカメラマンから
「雪見さーん！もっと顔を上げて！」と注意が飛ぶ。

「ごめんなさいっ！」足元を気にしてる場合ではないと開き直り、顔を上げた。

キャンパスを行き交う学生の間から見え隠れして、徐々にこちらに近づいて来るスーツ姿の長身の男性。

それが誰だか判った瞬間、雪見の足は一歩も前へは進まなくなった。

『学！対談相手って学なの…？』

広いキャンパスの中で、二人の間の時間だけが止まってしまったかのように見える。

向こうから歩いてくるのは、十二年前の若くて一途だった恋人の姿に雪見の瞳には映っていた。

学の思い

「どうして？どうして学がここにいるの？」
立ち止まったまま動かない雪見の元に、学がゆっくりやって来た。
「よぉ！また会ったな。」
「また会ったなじゃないでしょ！どうしてここにいるのか聞いてるの！
偶然？それとも大学に呼ばれて来たの？」
「だとしたら、偶然ここでこの時間に雪見に会える確率はどれぐらい？
お前なら解るよな？偶然なんかじゃないって。」
学は、写真を撮られていることなどまるで気にも留めず、昔と変らぬ熱い瞳で
雪見の目をじっと見つめた。
「じゃあどうして？なぜあなたが私と対談なんかすることになったの？
今日はグラビアの撮影としか聞いてなかったのに…。」
雪見はいつまでも解けない問題を、学にぶつけてみる。
「俺だよ。俺が対談させてくれって頼んだの。
今度、ここの出版社から本を出すことになったんだ。
で、この前打ち合わせで出版社に行った時、偶然雪見が載ってた雑誌を目にして、
編集長に昔話をしたら、食いついてきてさぁ。
それじゃあ対談なんてどうですか？って言ったら二つ返事で『お願いします！』って。」

「昔話って、いったい何を話したの！ねぇ、なに言ったの！」
雪見がニコリともせずに学に詰め寄るものだから、カメラマンからダメ出しされる。

「雪見さんも梨弩さんも、何年振りかのご対面っぽい笑顔でお願いしますよ！
じゃ、二人並んで握手して下さい！顔はこっちです！
はい、もうワンショット！今度は雪見さんが梨弩さんを見上げて微笑んで！
はい、ＯＫです！じゃ、場所を学食に移して対談シーンの撮影をします。」

学の案内で、撮影スタッフがぞろぞろと学食まで行進した。
目立つ学と雪見には、学食までの道のりであちこちから声が掛かる。
学には、「おめでとうございます！一緒に撮ってもらえますか？」と女子学生からケータイを向けられ、一方の雪見には「『ヴィーナス』
見ました！写真集必ず買いますから！」と、握手を求められた。

「やっぱ、学はこの大学の誇りだよね。すっかり日本の有名人になっちゃった！」

「そう言う雪見だって、人気雑誌のグラビアを飾るんだから有名人だろ？
しかも超人気アイドルの写真集まで出すんだから、大したカメラマンに
なったじゃないか。」

「お互い、昔の夢を叶えたってわけね。」
雪見が、並んで歩く学を見上げて微笑むと、学はいきなり雪見の肩

を抱き寄せ
「そのお陰で、俺はお前を失ったけどね。」と小声で言った。

「ちょっと！こんなとこでやめてよ！みんなが見てる！」
慌てて雪見が学の隣りから離れ、スタスタと先に行ってしまった。
後ろからその様子を目にした撮影スタッフはビックリ！
大学時代の同級生としか聞かされてないので、先程からの会話も何かおかしいと思って聞いていた。

「なになに！あの二人、どういう関係？」　「さぁ…。」

対談場所は大学側の好意で、中庭が見渡せる窓側の一角が確保されている。
「うわぁ！ここ、懐かしい！みんなが特等席って呼んでたとこだ！ここに座れたらその日一日ラッキー！みたいな、滅多に座れなかった場所。
いいのかな？私達が座っちゃって。みんなも座りたいだろうに…。」

「相変わらず雪見は優しいね。いいんじゃない？大学から俺への受賞祝いだと思えば。
さ！じゃあ始めましょう。俺もまだこのあと仕事が残ってるもので。」

雪見と学の対談は、『今話題の人に大接近！』という人気コーナーに掲載されるもので、
毎月旬の人を取り上げて、みんなにもっと深く知ってもらおう！というコンセプトで構成されている。

ライターさんが二人の前に座り基本の質問はしていくが、あとは二人の話の流れに任せた。
話が途切れたら話題を振る役割なのだが、まったくその出番もなく、対談は流れるように進んでゆく。
「ほんと、久しぶりだね！」という会話から始まり、二人の出会った時の第一印象や
大学時代のゼミの話、今現在の仕事の話に至っては二人とも熱く語り過ぎ、
予定時間を大幅にオーバーしたが無事対談は終了した。

「お疲れ様でした！ありがとうございます！
凄くいいお話を聞かせて頂きました。だけど、このままでは字数をオーバーしちゃうんで、
結構削ることになると思います。ごめんなさい！」
ライターさんが二人に頭を下げて先に詫びる。

「いや、僕らの方こそ雑誌の対談と言うことを忘れて、話し込んでしまいました。
雪見がゼミの女の子達に、仁王立ちになって僕をかばう啖呵を切った話だけは
切らないで下さいね！あ、あとは今の仕事の話も。
これがなくちゃ僕なんて、『一体誰？この人。』って事になっちゃいますから。」
そう言って学がライターさんに笑いかけると、まだ二十代とおぼしき彼女は
頬を染めて嬉しそうに微笑み返した。

雪見は乗ってきたワゴン車まで戻り、衣装から私服に着替えて撮影スタッフを見送る。

「うーん、終ったぁ～！」と清々しい気持ちで伸びをしてたら、後ろから学が
「まだ時間ある？」と声を掛けてきた。

「うん。あと二十分ぐらいなら大丈夫だけど…。」
「じゃ、少しそこで話そう。」と、近くのベンチを指差す。

二人は昔みたいに並んで腰掛け、空を仰いだ。
「あー、なんかここからの景色が変ってなくてホッとする。」
雪見は平静を装っていたが、内心は学が何を言い出すのかと怯えていた。

「俺、雪見が昔の　彼女だったとか、一言も言ってないからね。
健人くんって言ったっけ？彼氏。
本当はこの前雪見んちに行ったのは、俺の今の気持ちを伝えたくなったからなんだけど、
あいつの雪見に対する真っ直ぐな思いを聞かされたら、すっかりそんな気も失せちゃったよ。
まぁ、あんな若造に負けたかと思うと悔しい気もするけど、あいつなら
雪見を任せてもいいかなって思った。
あれだけの人気者を彼氏に持ったらさぞかし大変だろうけど、
俺はいつでもお前の味方だから。
あいつに泣かされたら俺んとこに来い！あいつを説教してやる！」
そう言って学は笑っていた。

雪見はその言葉がとても嬉しく、いつまでも心の中が温かかった。
「ありがとう！私も学の幸せを祈ってる。
まぁ、これだけ有名人になったんだから、若いコがほっとかないでしょう！

私なんかより素敵な彼女を見つけて、早く結婚しちゃいなさい！」

二人はまたの再会を約束して握手を交わし、雪見はタクシーに乗り込んで
ラジオ局へと急いだ。

学は、車が見えなくなるまで立ち尽くし、「ずっと好きだから…。」
と一人つぶやいた。

初歌合わせ

思いの外ラジオ局までの道のりが渋滞していて、集合時間の四時ギリギリに
雪見はスタジオに飛び込んだ。

「セーフ！なんとか間に合ったぁ！
あ、おはようございます！済みません、ギリギリになっちゃって。」
雪見は、ドアを開けてすぐにいたディレクターに焦って挨拶をする。

「相変わらず忙しそうだね。お待ちかねだよ！二人とも。」
指差された方を見ると、中のブースから健人と当麻が『早く！』と手招きしてる。

「ごめーん！待たせちゃった？でも集合は四時だよね。なんかあったっけ？」
雪見がブースのドアを開けるのと同時に、なにやら健人がリモコンを操作した。
部屋の隅に目をやると、なんとそこにあるのはカラオケセットではないか！

「早く！早く！」
当麻に引っ張られて訳の解らぬまま、三人でカラオケのモニター前に立つ。

「『ワインディング　ロード』って！今歌うのぉ？」

「一回合わせてみるだけ！始まるよ！」
と健人が言ってすぐに歌い出しになったのだが、さすがにこれは失

敗した。
なんせこの曲は、前奏無しでいきなり歌い出さなければならない。
しかも、一番の聞かせどころが曲の頭であって、三人が息をピッタリ合わせて
タイミングよく入らないと、曲のすべてが台無しになるという難度の高い曲なのだ。

「ストーップ！今のはいくら何でも無理だって！
心の準備無しには歌えないでしょ、この歌は！それならそうと言ってくれなきゃ！」
雪見がもっともな事を言う。

「ゴメンゴメン！いや、なかなか三人で合わせる時間が無いから、
打ち合わせ前に一回でも、どんな感じか歌ってみたかったわけ。
せっかくスタッフさんがカラオケ用意してくれたんだから、ちょっとだけ
練習させてもらおうよ！
あと十五分くらいなら大丈夫ですよね、水野さん！」
当麻が、ブースの外でモニタリングしているディレクターの水野に聞いてみる。

「いいよ！タイムリミットになったら声掛けるから。」
マイクで中の三人にそう伝えた。

「よし！じゃあ時間が無いから、今度こそしっかり歌おう！
準備はいい？ゆき姉。」
当麻の声に雪見は気持ちを整える。

「ＯＫ！そういう事なら本番だと思って、気合いを入れて歌うよ！
健人くん、いいよスタートして。」

雪見がそう言うと、健人がリモコンを送信した。
三人がお互いの目を見て、息を揃え歌い出す。

「♪曲がりくねった道の先に　待っている幾つもの小さな光
　まだ遠くて見えなくても　一歩ずつ　ただそれだけを信じてゆこう♪」

今度は三人の息がピッタリと合い、歌い出しは完璧だ！
モニター室の全員が、驚きの表情でこっちを見る。
「スッゲー！なにあの三人！あれで今日初めて合わせたって言うの？ほとんど完璧じゃん！」
ここさえ上手く歌えれば七八割は成功したようなもので、あとは気持ち良く
最後まで歌い切れた。

雪見が嬉しそうに、ニコニコしながら二人を見る。
「なんかいいんじゃない？初めて合わせたにしては。
健人くんも当麻くんも、結構自主練頑張ってるんだね！忙しいのに。
私ももっと頑張らなくちゃ！もう一度だけ歌う時間あるかな？」

プロデューサーの三上が、中の三人には聞こえないように素早くスタッフに指示した。
「次の歌、録音しとけ！」　「はい！」

「よし！ラスト一回、本番のつもりで歌おう！入れるよ！」

こうして初めての歌合わせが終り、急いで今日の放送の打ち合わせに取りかかる。
あっという間に放送直前になり、三人は慌てて椅子に座り直した。

カウントダウンが始まり午後五時、今日の放送スタートだ。

「みなさーん！一週間元気でしたか？今週も始まりました！『当麻的幸せの時間』。
今週は一ヶ月ぶりにこの三人が揃いましたよ！
斎藤健人と、ゆき姉です！やったねっ！
もう、みんなが首を長くして待ってたんだから。」

「いやぁ、この前の出番は電話で失礼しましたねぇ！
インフルエンザ、まだ流行ってるみたいだからみんなも気をつけてね！」
健人が二週間前のことを詫びる。

「私は、やっと健人くんの写真集の撮影が終了して、今は毎日編集作業で残業続きだよ。
忙しいＯＬのみんな！お互い今週も良く頑張ったよね！
一週間の疲労回復に、健人くんと当麻くんの甘～い声をお楽しみ下さい！」
雪見はすっかりこの空気に慣れ、もういっぱしのパーソナリティーだ。

「はい！今日はこんな三人でお届けして行きたいと思います。
じゃ、今日の一曲目。
健人の復帰祝いに、ミスターチルドレンの『名もなき詩』をどうぞ。」

「サンキュ！俺の大好きな歌！」

曲に入りホッと一息つく当麻たち。
「ねぇ、今日このあとカラオケ行って練習しない？せっかく集まってんだから。」
「ごめん！私は今日も残業だから、これ終ったらすぐに戻らなきゃなんない。
二人で行って来たら？健人くんは仕事？」
「うん、俺もダメ。このあと取材入ってる。」
「なーんだ、つまんないの！」当麻が頬を膨らませた。

「じゃ、愛穂さん誘って行けば？多分今日は夕方で仕事終わりなはず。」
「いや、いいや。今日はやめとく。」
当麻の表情が気に掛った雪見。『なんだろ？ケンカでもしたのかな。』

「はい！歌終りまーす！」
その声を合図に姿勢を正す三人。でも、どことなく当麻の元気が足りない。
それに健人も気づき、さり気なく当麻をフォローする。
そうこうするうちに、今日もあっという間に三十分間が終ってしまった。

「お疲れ様でしたー！悪い！俺もう次の仕事行くね！またな。
あ！ゆき姉は仕事終ったらメールしてよ！じゃ！」
健人がマネージャーと急いでスタジオを出て行った。

雪見も、早く編集部に戻らなくてはと思うのだが、当麻の事が気になって
なかなか足がスタジオを出て行かない。

『うーん、どうしよう…。ええぃ、仕方ない！少し遅れて行くか！』

「当麻くん！一時間ならカラオケ付き合ってあげる。絶対一時間だけね。」

雪見がそう言った時の、当麻の嬉しそうな顔！

「ほんとに！？やった！じゃ、急いで準備するね！」

当麻のあまりの笑顔に雪見は、『さっきのは自分の勘違いだったのかな？』といぶかしんだ。

編集部に少し遅れる旨を連絡し、当麻と二人で街へ出かけて行った雪見。

街はまだまだ人混みの続く時間帯であった。

当麻の衝動

変装したにしたって当麻は目立ちすぎた。
後ろ姿だけでラジオ局周辺をたむろしていたファンに見破られ、ぞろぞろ付いて来られて
行く予定だった近くのカラオケボックスにさえ、たどり着ける気はしなかった。
当麻はあきらめて雪見にメールする。

近くは無理だ！
タクシーに乗って、
秘密の猫かふぇ行こ！
巻いてから行くんで
先に店入っててて。
じゃ、あとで。

ｂｙ　ＴＯＵＭＡ

雪見は、離れた所を歩きながら当麻の様子を見ていたので、それが妥当だと
すぐに当麻に返信し、タクシーを拾って乗り込んだ。
『秘密の猫かふぇ』なら、一般の人は入れない。
しかも、周りを気にせずにいれるのが二人には好都合だった。
だが、健人も一緒だったらよかったのに…と思うと、ちょっと寂しくなる。

猫かふぇ行ってきたよ、って言ったらきっと悔しがるだろうな。
前から行きたがってたから…。

でも、今日はどうやったって無理だよね。私も七時前にはここを出なくちゃ！
そんなことを考えているうちに、猫かふぇの入っている本屋のビルに到着。
秘密のエレベーターに乗り店内へ。

金曜日の夕方はみんなここではない所へ行くのか、思ってたほど混んではいない。
しかしカラオケブースは人気があるので、果たして空いてるものなのか心配になり、
雪見は先に行って見てくることにした。

薄暗いトンネルを二つくぐると、三人の大好きなウォーターベッドのあるスペースへと出る。
そこから更に一つトンネルを抜けると、やっとカラオケブースに到着だ。
「よかったぁ！空いてた。当麻くんにメールしておこ。」
さっそく足元にやって来た子猫を膝に乗せ、カラオケブースで待ってる事を伝える。

膝に大人しく乗ってる白い子猫は、尻尾の長さこそ違うが雪見の家のラッキーにそっくりだ。
『ラッキー、いい子にしてるかなぁ。』
最近のラッキーはイタズラ盛りで、子守役のめめも結構手を焼いてる様子。
雪見が帰ると、『やっと帰って来てくれたぁ！』とでも言いたげな目をして
玄関先に走ってくる。
ちょっと可哀想になって、ついついおやつをあげてしまうのと、
仕事が忙しくなり、あまり運動になりそうな遊びに時間が取れない

事もあって、
近頃のめめは少々メタボ気味。飼い主としては反省しなきゃ。

もう一匹、三毛猫が静かに近づいてきた。
人懐っこく足元にすり寄りゴロゴロと喉を鳴らすので、雪見は鞄からデジカメを取り出し、久しぶりに猫の撮影会をして当麻を待つことにする。

ついつい夢中になり、はっ！と時計を見るともう六時五十分。
『いっけない！もう編集部に戻らなくちゃ！当麻くん、一体どうしちゃったの？』
雪見はもうタイムリミットであることを当麻にメールし、急いで来た通路を戻ることに。

二つめの長いトンネルに入ると、向こうの方から誰かが走って来る。
薄暗いので近くまで来て、やっとそれが当麻であることが判った。
「当麻くん！ずいぶん遅かったじゃない！悪いけど、また今度に…。」
そこまで言った時、当麻が雪見の前に走り寄って何も言わずに、突然雪見を引き寄せ抱き締めた。

「ち、ちょっと、当麻くん！悪い冗談やめてよ！なんなの！？」
当麻は何も答えようとはしない。
それどころか、さらに強く雪見を抱き締める。
雪見は、心臓がちぎれるかと思うほど鼓動が激しくなり、頭がボーッとして
思考回路が麻痺した。『どうしたら離してくれるの？』

しばらく思うままに抱かせておくと、少しだけ当麻が身体を緩めた。

極めて冷静を装って、落ち着いた声で当麻に話しかける。
「愛穂さんと、なんかあったの？」
一瞬ビクンとした気がしたが、まだ当麻は言葉を発しない。
『完璧に遅刻だぁ！』と心の中は焦るが、当麻が雪見を離してくれる呪文の言葉が思いつかないので、開き直ってじっくり考える。
「ケンカでもしちゃった？愛穂さん、私と同じで少し気の強いとこあるから。」
笑いながら聞いてみたが、答えそうもない。
少しして、当麻がやっと小さく何かをつぶやいた。
「えっ？なぁに？」
「どうして…。どうしてみんな健人なんだろう…。」
消え入りそうな声で言った当麻の言葉に、雪見は衝撃を受けた。
「なに？なんの事を言ってるの？どういう意味？」
「どうして俺の好きになる人はみんな、健人を好きなんだろう…。」
そう言うと当麻は、身体をやっと離して雪見を見つめた。
そのあまりにも真剣な目つきに雪見は、恐怖さえ感じ始める。
次の瞬間、当麻の顔が接近してきて、キスしようとしてるのがわかった。
「やめて！嫌いになっちゃう！」
トンネル内に雪見の声が、大きく大きく響き渡る。
そしてドンッ！と当麻を壁に突き放し、雪見はトンネルの出口まで走り続けた。

最後のトンネルをくぐり抜け店を出て外に立つと、すでにそこはネオンの明かりで照らされた街に、変貌を遂げていた。
雪見は、とにかく編集部に戻らなくちゃとだけ考えてタクシーに乗る。
他のことは一切考えたくはなかった。
と言うか、考えてしまったら、自分がこの街からすぐにいなくなってしまう気がして
そうならないように心に蓋をした。

「済みませんでした！こんなに遅くなって。
これ、みなさんで食べて下さい！今、お茶入れますね。」
雪見は、近くのコンビニで買った色んなスイーツを机に並べ、
何事も無かったかのようにお茶を入れる。
そしてみんなと一緒にロールケーキを食べながら、
「私って、まだ何にも仕事してないのに、おやつの時間だけは外さないんだなぁ、これが！」
と言いつつみんなで大笑いをし、嫌なことから気持ちを遠ざけた。

その日の夜、雪見は一人で編集部に残り、明け方まで仕事に没頭した。

健人が別れ際、「仕事が終ったらメールしてよ！」と言っていたから、
仕事を終らせたくはなかったのだ。
健人にメールなんて、今はする気にはなれない。

完全に朝が来て、昨日のことがリセットされるなら…。

微かな希望は何一つ、叶えられはしなかった。

少しの隠し事

「ねぇ！なんで昨日メールくれなかったのさ！ずっと待ってたのに。」

早朝六時。徹夜仕事を終え、帰宅してシャワーを浴び仮眠を取ろうとベッドに入ったところで、健人から電話がかかってきた。

健人は、今起きたらしい声をしている。

昨日、「明日は十一時からの仕事だから、久しぶりに寝坊ができる！」

と大喜びしてたのに、雪見が心配でこんな時間に起きて電話をかけてきたらしい。

朝には滅法弱い健人なのに…。

「ごめんね！徹夜で残業してて、さっき帰って来たとこなの。メールしてなかったことに気づいたのが夜中だったから、もう健人くん寝てるだろうなーと思って。疲れてるのに、起こしちゃ悪いでしょ？」

雪見は、取りあえずの言い訳をして、早々に電話を切りたかった。

いつもなら、会えない時や疲れてる時ほど、切りたくはない健人からの電話であったが、今日は違う。

長く健人と話すうちに、きっと昨日のことを思い出すだろう。

それが嫌で、今はあまり話したくはなかった。

本当は昨日の出来事を、当麻が言ってた言葉の意味を、

一刻も早くに思い起こして解決しなければならない事ぐらい雪見にだってわかってた。

だが心が拒否反応を示し、それらを勝手に遠くへ遠くへと追いやっている。
まるで今日やらなくてはならない宿題を、見て見ぬ振りして先延ばしにし、
公園へ遊びに出掛ける子供のように…。

「私なら元気だから安心して！これから一眠りして、また仕事に行かなくちゃ。
健人くんも、まだ時間あるんだからもう一度寝なよ。二度寝は気持ちいいぞー！」
何とかこれで、じゃお休み！となって電話を切りたい。
ところが！「これからそっちに行ってもいい？」と聞くではないか！

「ごめん！今は勘弁して！ほんと、あと二時間ぐらいしか寝れないの。
今日はさすがに残業しないで帰ってくるから、夜は家にいるよ。
健人くんが来たいなら、来てもいいから。じゃ、今日も仕事頑張ってね！おやすみ！」

もう、最後は半ば強引に切ったようなもの。
健人が機嫌を悪くしてない事だけを祈って、ベッドに頭まで潜り込んだ。

その日の夜、十時過ぎ。
お風呂上がりにビールを飲みながら髪を乾かしていると、インターホンが鳴った気がした。
「あれっ？今、玄関のインターホン鳴った？」
ドライヤーの音で聞こえなかったが、ドアを開けると健人が立って

いた。

「えーっ！健人くん？やだ！こんな格好なのに。」
「ヤダはないでしょ！今朝、夜なら来てもいいって言ったじゃん！」
「うそ！そんなこと、私言ったぁ？」
雪見は徹夜明けだったせいか、自分で言った言葉を最後の方は覚えていなかった。
健人が来るとわかっていたら、ちゃんと着替えて化粧もしておいたのに。

「別にいいじゃん。ゆき姉のすっぴんなんて、もう何回も見てるんだから。
それより腹減ったぁ！なんか作って！」靴を脱ぎながら雪見に訴える。
健人は、仕事先から真っ直ぐ今野に送ってもらったらしい。

「パスタならすぐに作れるけど、それでいい？」
「やった！ゆき姉のパスタ、食べたかったんだ。ワインもお願いしまーす！」
「了解！じゃ、猫のお父さん、よろしく！」

健人がめめとラッキーの相手をしてるうちに、雪見は手早くナスとベーコンの
トマトソースを作り、茹でたてパスタにからめてたっぷり粉チーズを振ってから
ワインと共に健人の前に並べた。
「めっちゃ美味そう！いただきまーす！ヤバッ！これ、美味過ぎでしょ！
ワインも旨いし、最高の晩ご飯だ！目の前にゆき姉もいるし。」

健人はいつも言葉の最後に、雪見と一緒にいられて幸せ的な事を言ってくれる。
料理も本当に美味しそうに食べてくれるし、お酒も美味しそうに飲む。
何よりその笑顔に癒やされる。
雪見の方こそ、健人からいつもたくさんの幸せをもらっているのだ。

「ありがと！よくよく考えたら私って凄くない？
あの、今をときめく斎藤健人に料理を作って、美味い！って言わせるんだから！」

「俺、ここにいる時は斎藤健人じゃないよ。
昔ゆき姉に自転車の特訓受けた、ただの健人だから。」

「じゃあ、ただの健人くん。今日はうちに泊まってく？」

「もちろん！そのつもりで着替え持って来たもん！」

久しぶりに健人と二人お酒を飲んで、笑った気がする。
その頃にはもう、昨日の当麻のことなど思い出さなくなっていた。
いつまでも思い出さなくていい訳ではないけれど、せめて今日ぐらいはすっかり忘れて、
健人とだけ向き合っていたい。
だけど反対に、今日必ず話しておきたいこともある。

「あのね、昨日ラジオの前にね、『シャロン』の撮影があったんだけど…。」
「えっ！『シャロン』にも出るの？凄いじゃん！すっかりモデルさんになっちゃったね！」
「でね。生まれて初めて対談までやっちゃった！それがビックリだ

ったの！
対談相手がなんと学だったんだよ！笑えるでしょ？」
「えっ！？ぜんぜん笑えないんだけど…。」

ベッドの上に、コタとプリンの写真集を拡げて眺めてた健人に雪見は、
さらっとその経緯を話して聞かせた。
決して心配をさせないように、別にどうって事ないよと言うように…。
それから一呼吸置いて、もう一つの今言っておかなければならない事を話し出す。

「それからね。ラジオが終ったあと、当麻くんと『秘密の猫かふぇ』行って来ちゃった！」
「えーっ！なにそれ！俺も行きたかったのにぃ！なんでそんな話になったわけ？
だってゆき姉、あのあと仕事だったじゃん！」
「そうなんだけど、当麻くんが一時間でいいから歌の練習したいって。
で、近くのカラオケ行こうとしたら、当麻くんがファンに囲まれちゃってさぁ！」

タイムリミットで、歌わずに帰って来たという笑い話に仕立てて健人には話しておいた。
この二つは必ずあとからバレる事なので、時間を置かずに話しておきたかったのだ。
どうやら健人は、雪見の話をそのまま受け取ってくれたようで、特に疑う気配もなく
当麻の話しに関しては、お腹を抱えて笑っていた。
その話の続きはどうしても言えないけれど…。

健人に対する後ろめたさを笑いで隠し通してしまった　。

『良かった…。取りあえず、健人くんの悲しい顔を見ないで済んだ。』

雪見は少しだけ安堵して、また健人と頭を突き合わせて写真集を覗き込む。

幸せな時間の続きを二人楽しむように…。

明日こそ、きちんと宿題をやらなくちゃ。

そう思いながら部屋の明かりを消して寝た。

カレンの集中攻撃

あれから一週間。
写真集の編集作業は順調に進んでいたが、あの時の宿題にはまだ一つも
手を付けてはいなかった。
自分自身で忙しさを理由にして、先延ばしにしている。
そのうち、あれは無かった事になるんじゃないか…と、心のどこかで
思っているのかも知れない。

その後、当麻には一度も会ってないしメールも来ない。
本当は会って直接、あの時当麻が言った言葉の意味を問いただすべき
なんだとは思う。
だが、きっと当麻だって私に会うのは嫌だろう、と勝手に当麻のせいにして
現実から逃げ回る自分に嫌気が差してきた。

『どうして俺の好きになる人はみんな、健人を好きなんだろう…。』

答えを確かめなくても当麻と愛穂の様子を見ていれば、すでに頭の中に
浮かんでる答えで多分正解だ。

もうすぐ五時。今週も『当麻的幸せの時間』が始まる。
当麻は今、どんな思いでマイクの前に座ってるのだろうか…。

明日の土曜日は久しぶりの完全休暇であるために、金曜の夕方だというのに
みんなはかなり張り切って仕事している。
ここまで半月、飛ばし気味に編集作業にあたってきたので、
少し余裕のあるうちに一息ついて、エネルギーを充電しておこうと
健人写真集編集スタッフ全員で、休みを取ることになっていた。

が、雪見だけは完全休暇とまではいかなかった。
健人へのインタビューページも、自分にやらせて欲しいと志願してたので、
健人の仕事の合間をみて、インタビューさせてもらうことになっている。
『あーあぁ。やっぱりライターさんにお願いしとけば良かったかなぁ。
なんか、自分で忙しさを作っちゃった感じ。
けど、写真は素の健人くんなんだから、話しもやっぱり素の健人くんから聞きたいよね。
いや、ファンにとっては絶対その方が嬉しいはず。
よし！どうせやるならファンの人達の間で、伝説になるような写真集に仕上げるぞ！』
自分自身に気合いを入れて、今日の仕事にラストスパートをかけた。

しばらくするとスタッフの一人が、「あっ！忘れてた！」と大声を出し
机の引き出しから小型ラジオを取り出す。
チューニングを合わせて机の上に置いたラジオから、当麻の声が聞こえてきた。
「今日のゲスト、カレンちゃんなんだって！
聞いて下さいね！って言われてたのに、忘れるとこだった。ふぅぅ、危ない危ない！」

雪見は、一週間ぶりに聞く当麻の声に、ドキッとした。
しかも今日のゲストがカレンだなんて！
どういう事だろう。もしかして、カレンがまた次の一手を仕掛けようとしてるのか。

「カレンちゃん、当麻くんと『ヴィーナス』に連載持つようになってから、
一気にブレイクしたもんね！今じゃ人気モデルの仲間入りだもん。」

「それに叔父さんがテレビ局の有名プロデューサーなんでしょ？なんか
今回のラジオ出演も、『叔父さんのコネ、使わせてもらっちゃった！』
とか言ってたよ。いいなぁー！当麻くんと仲良くなれて！」

「それを言うなら雪見さんでしょ！だって健人くんと親戚な上に、
当麻くんとも仲良しなんだよ！羨ましすぎる！」
編集スタッフ達は、みんな健人と当麻が好きらしい。

「羨ましいって言われても…。健人くんの親友がたまたま当麻くんだった、ってだけで…。」

ほんと、どうして当麻くんは健人くんの親友なの…。

まだ当麻の声を聞きたい心境には無かったが、当麻とカレンが何を話すのか気になったので
みんなと一緒に、ラジオに耳を傾けながら仕事を続けることにする。
それにしても、なぜカレンはコネを使ってまで当麻のラジオに？

「えーと、今日のゲストは、今、人気急上昇中のモデルさんで僕と一緒に『ヴィーナス』で連載コーナーをやってる霧島可恋さんです！
どーも。こんなとこで会うと、なんかヘンな感じだね。」

「ほんと。でも、いつまで経ってもゲストに呼んでくれないから、強引に来ちゃった。
どうしても出たかったから。」

二人の声のトーンが、どこかおかしい。声からは、全く笑顔を感じられなかった。
耳がラジオに釘付けになり、一つも仕事に集中できやしない。
当麻はどんな思いで、愛穂の妹であり私達の敵であろうカレンと向き合い座っているのか…。

「あ！お姉ちゃんも当麻くんにお世話になってるんだよね、色々と。」

「あ、あぁ。カレンちゃんのお姉さんは、ハリウッドでも活躍してたことある
カメラマンなんだよね。先月沖縄でやったグラビア撮影は、お姉さんに
撮してもらったよ。その節は大変お世話になりました。」

「それだけ？もっと他にもお世話になってるでしょ？私生活でも。
あっ！言っちゃった、生放送なのに。ごめーん、当麻くん！」

雪見は心臓が破裂しそうになった。明らかにカレンは攻撃を仕掛け

ている。
当麻がうろたえて言葉に詰まっていた。
まさかこんな攻撃を打って出るとは！頑張って、当麻くん！

「えーっとね、カレンちゃんにいっぱい質問が来てるから、多かった順番に質問するね。
一番多かったのは、『男の子の好きなタイプを教えて下さい。』っていう
王道の質問が断トツに多かった！
あと、『仲良し姉妹だそうですが、一番仲良しだなと思う所はどんなとこですか？』
だって。どうでしょう、カレンちゃん。」

「最初の質問は即答できます！斎藤健人くんみたいな人が好みです！
ねっ！わかりやすいでしょ？バンビみたいな可愛　い人、大好きです。
でもね、カレンとお姉ちゃんって男の子の好みが一緒で、いっつもお互い
かぶっちゃうの。それが一番の仲良しポイントかな？
だからどっちかって言うと、お姉ちゃんも当麻くんより健人くんの方が
好みだと思うんだけど…。」

「え、えーっ！俺ってそんなに人気無いんだぁ。泣いちゃうかも！
まぁ、親友の俺から見ても健人はかっこ可愛いからなぁー！しゃーないか！
では、次の質問…。」

当麻の精一杯の受け答えに、雪見の方が泣きそうになった。

許せない！どうにもならない状況を利用して、当麻くんを集中攻撃するなんて！

雪見は、当麻を苦しめるカレンと、当麻を振ったであろう愛穂を絶対許さない！と怒りに震えていた。

決闘！

「ごめんなさい！私、急用を思い出した！悪いけど、今日はお先に失礼します！」

「えーっ！雪見さん！今日は帰りに飲みに行って、健人くんの子供の頃の話、聞かせてくれる約束じゃないですかぁ！」

と、スタッフが最後まで言う前に、雪見はみんなの前から消え去った。

ビルを出てすぐにタクシーに飛び乗り、ラジオ局へ急いでもらう。

どうしようもない怒りだけが、雪見を突き動かしていた。

と同時に、つい一時間前には当麻の声さえ聞くのが嫌だったのに今は当麻を『助けなくちゃいけない！』と言う強い思いに変わってる。

雪見はジリジリとした気持ちで、『早く！早く！』とタクシーの到着を願った。

ラジオ局に着くと同時に雪見は駆け出し、走りながら首にラジオ局の身分証明書をぶら下げる。

受付嬢に会釈して、一気に当麻のいる放送スタジオ前まで駆け抜けた。

時計を見ると五時三十五分。

生放送が終了して五分が経過している。だが、まだ誰も出てきてはいないはず。

雪見は息を整えながら、廊下でカレンが出て来る時を待っていた。

少しも怒りなんて収まりはしない。
それどころか、今までカレンから受けた数々の仕打ちを、一つずつ思い出して行くうちに
怒りが怒りを呼んで、頂点にまで達してしまった。

『なんで今まで、あんな奴から逃げ回るだけしかしてこなかったんだろ！
バカだ、私って！もうどこへも逃げも隠れもしないから！
今日、必ず決着をつけてやる！』

普段は穏やかで、のんびりおっとり、いつも笑顔の雪見だったが
本気で怒らせた時には人格が変わる。
元々正義感が人一倍強いので、これは許せない！となると徹底的にやっつける。
どうやらその時が来たようだ。

「お疲れさまでしたぁ！また呼んでくださいねぇ！じゃ、お先に。」
カレンの甘ったるい声が聞こえ、一人でスタジオから廊下に出て来た。

「あれ？雪見さんだ！やーっぱり来てくれたんだ。必ず来ると思ったよ。」

「えっ！？」
雪見は予想外のカレンの言葉に、出鼻をくじかれた。
『必ず来ると思ったよ、って…。』

「まぁ、あの頭の悪そうな『ヴィーナス』の編集部員が、忘れずに

ラジオを
机の上に置くかが心配だったけど、そこまでお馬鹿さんじゃなかったようね。」

雪見は愕然とした。全ては計算ずくなの？またしても、まんまとはめられたって事？

「罠…だったってわけ。そう…。そこまでは気が付かなかった。
あなたって、相当なワルね。なら、私も手加減無しでいくわ。」

「どうぞ、ご自由に。私もそろそろこのゲームに飽きてきちゃったから、
もう上がりにしようと思ってたとこなの。
あなたもそう思ってここに来たんでしょ？」
カレンは、不敵な笑みをたたえて雪見の瞳を見据える。
雪見も視線を外すわけにはいかなかった。

「こんな所で立ち話もなんだから、どこか静かなところへ行かない？
また余計な邪魔が入る前にね。」

カレンが当麻の事を、「余計な邪魔」と言った。

「それ以上当麻くんを侮辱すると、ほんとに私、何しでかすかわからないわよ。
私を怒らせたら怖いんだから。」
そう言って雪見はにっこりと微笑んだ。

「そうなの？それはそれで楽しそうね。まぁ、いいわ。まずはここを出ましょ。」

カレンが先に、エレベーターホールに向かって歩き出す。
そのあとを雪見が付いていこうとした時、スタジオのドアが開いて
当麻が出てきてしまった。

「ゆき姉！なんでここにいるの！？」当麻の驚いた顔！

一足遅かった。できることなら当麻の顔を見ずに、この場を離れた
かったのに…。
当麻に見られたと言うことは、健人にも話が行くと言うこと。
健人には余計な心配をかけたくはなかった。
幸いカレンはもうエレベーターホールの方へ行ってしまい、ここに
はいない。

「あ、当麻くん！今　終ったとこなの？お疲れ様。
私は編集部に頼まれた届け物を、そこの制作部に持って行ったとこ。
今日も残業だから、大至急戻らなくちゃ！じゃあねっ！」

そう適当なことを言ってその場を立ち去ろうとした時、雪見の後ろ
から
「雪見さん！当麻くんに助けを求めて逃げ出すわけじゃないわよね。
」
と、カレンの声がした。

「カレン！！
どういう事？ゆき姉！仕事で来たんじゃなかったの？
まさかお前、ゆき姉にまでなんかしようと思ってるんじゃ…。」

「当麻くん！大丈夫だから。
私、本当は当麻くんが思ってるような、か弱いお姉さんじゃないの。
もういい加減、色んな事から逃げ回るのは止めようと思って。

当麻くんからも、もう逃げないから…。
落ち着いたら電話するね！じゃ、また！」
雪見は一番の笑顔で当麻に別れを告げ、カレンと共に歩き出す。
後ろで叫ぶ当麻の「ゆき姉！！」と言う声に、もう振り向くことはしなかった。

タクシーに乗ったカレンと雪見。
カレンが運転手に告げた行き先は、なんと『秘密の猫かふぇ』が入る本屋であった！

「ふふふっ！驚いた？あそこなら誰も邪魔しないでしょ？
なんせ他人に干渉は御法度だから。
私もコマーシャルやドラマに出させてもらって、やっとあそこの会員になれたの。
さすがにあそこだけは、叔父さんのコネも使えなかったわ。
今度、ばったり会っちゃうかもね。
まぁ、あなたがそれまで、健人くんと繋がっていれたらの話だけど。」
どこまでカレンは計算ずくなのだろう。次々に雪見が思いもしない手を打ってくる。

『さすが、ハーバード大学出だけあって頭は良さそうね。
初対面の時に、頭がからっぽそうな女！と思ったのは、この人の演技だったってわけ。
あの時から私は、まんまと騙され続けてたなんて…。』
窓の外を眺めながら雪見は、静かに闘志をかき立てられていた。

『私だって、よくよく考えればそんなバカでもないのよ。
だって、世界の科学者、梨弩学と肩を並べて研究してた時期があったんだから。
見てなさい！必ず今日で決着をつけてみせる！』

カレンと雪見はネオンの街に、それよりもさらに明るい火花を散らして
タクシーを降り立った。

今日ばかりはこの入り口が、お化け屋敷の入り口にも見えている。

カレンの涙

雪見とカレンは、『秘密の猫かふぇ』店内の一番奥にある
リラクゼーションスペースにいた。

心落ち着く環境音楽が流れ、壁一面の水槽には熱帯魚が泳ぎ水草が
揺れる。
照明が極限まで落とされ、ライトアップされた水槽の熱帯魚が
空中を自由自在に泳ぎ回っているかのような錯覚を覚えた。

二人は大きなソファーに座るのではなく、
その下に敷いてあるベージュ色の、毛足の長いムートンラグに
テーブルを挟んで向かい合わせに座っている。
そこへ注文しておいたシャンパンが二つ、運ばれてきた。

「じゃ、まずは乾杯しましょ！
あ、毒なんて盛ったりしてないから安心して。お酒くらい美味しく
飲みたいもの。
あなたと乾杯するのもおかしな話だけど、こんな事もう二度と無い
と思うから…。」

カレンはどこまでも冷静だった。
口角をキュッと上げて薄っぺらな笑みをたたえ、瞳は常に雪見の目
を見据えてる。
多分この二人を目にした人は、仲のよさそうな姉妹か年の離れた友
人同士が
悩み事の相談でも持ちかけているんだろう、ぐらいに思うはず。
が、幸いにもこの一番奥のスペースまでは、まだ誰もやって来る気
配は無い。

雪見は、カレンがグラスに口を付けるのを見届けてから、自分もグラスを手に取った。

「だからぁ！毒なんて盛ってないって。
盛ってたとしても、自分のグラスに入れるバカいないんだから、
私が飲んだの見届けて飲んだってダメでしょう？」

どこまでも人のことをお見通しで、小馬鹿にした口を利く。
こんな友人ごっこを、いつまでもしてるつもりは無いから
雪見が先に口火を切った。

「あなたよね？竹富島の民宿にビデオカメラ仕掛けたの。」

「私じゃないわよ。
私、そんな自分の手を汚すようなまね、したくないもの。
仕掛けたのも回収したのも、見ず知らずの人。
ツイッターの呼びかけに応じてくれた人達よ。
『十万円で簡単なバイトしませんか？』って呼びかけたら、
志願者が殺到しちゃって大変だったんだから！
けど、その割には大した仕事じゃなかったわね。
あんな中途半端な動画、何の役にも立たなかったわ！」

カレンが吐き捨てるように言って、シャンパンを飲み干した。
やはり黒幕は霧島可恋だった。
カレンは作戦の失敗を思い出したのか、少しイライラした口調になっている。
雪見は、少し突破口が見えた気がして、彼女をもっとイライラさせてやろうと、
次の言葉を準備した。

「ねぇ。あなたって結構詰めが甘いよね。
今まで色んなことを私達に仕掛けてきたけど、結局痛くも痒くもなかったもの。
所詮、子供の可愛いイタズラ程度にしか過ぎなかったよ。」

「なんですって！」

明らかにカレンのイライラ度が上昇した。
自ら火に油を注ぐようなものだが、いたって雪見は冷静だ。
カレンは急に立ち上がり、違う行動をして落ち着きを取り戻そうとしたのか、
壁際のインターホンでシャンパンを、ボトルで一本追加注文する。

カレンがどれほどの酒飲みなのかは知らないが、お酒に関してはこんな小娘ごときに負けるような雪見ではない。
だが、カレンが酔わないうちに決着をつけないと、お酒のせいでうやむやになり
今日の日を繰り返すことだけは避けたかった。

それに、いつまでもこんな奴に関わってる時間はない。
今は十二月に向けて全力で編集作業に取り組み、写真集の完璧な仕上がりを
目指したいんだ！
当麻と三人でカラオケに行って歌の練習もしたいし、三人でお酒も飲みに行きたい。
半日でも三人の休みが重なったら、どこかドライブに出掛けよう！
って
約束してるんだ！

もう三人の間に邪魔者はいらない。元通りの三人の関係に戻りたい。
そう思った瞬間、頭の中にもう一人、愛穂の顔が浮かんできた。
それと当麻の顔も…。

愛穂は多分あの時、当麻を振ったのだろう。
当麻と二人、ここで待ち合わせをしてた一週間前に…。
せっかく好きになり出した愛穂に振られて当麻は、自分自身を見失って
私にあんなことをしたんだと勝手に解釈した。

そして愛穂は、当麻を利用するためだけに当麻と付き合い出したはず。
健人に近づくための手っ取り早い手段として…。
だとしたら、突然に当麻の家に現れたわけにも納得が行く。

可哀想な当麻くん…。
この霧島姉妹をどうにかしない限り、私達に平穏な日々は訪れない！

そう強く思った時、雪見には再び怒りの感情が湧き上がり
早く決着をつけて健人に会いに行きたい！と最後の攻撃に出ることにした。

カレンが、店員が注いだそばからシャンパンにすぐに口をつける。
雪見も、新たに注がれたグラスを一息に飲み干して、カレンの瞳をジッと見た。

「ねぇ。あなたと愛穂さんって、さっきのラジオじゃ仲の良い姉妹を強調してたけど、本当は子供の頃から仲が悪いでしょ。」
カレンの表情がサッと変わった。

その反応を確認してから、雪見は次の言葉をつなぐ。

「あなたって、見栄の塊みたいな人よね。
なんでも人よりいい物が欲しくなるし、人の物を取りたくなる。
そのくせ誰かに寄りかかってないと、生きてはいけない。どう？違う？」

「だから何だって言うのよ！」
図星だったと見え、明らかにカレンは動揺し始める。
雪見はカレンに話す隙を与えぬよう、たたみ掛けるように話を繰り出した。

「大学だってそうでしょ？
ただハーバード大学出って言う、レッテルが欲しくて入っただけ。
でも、男が寄り付かないから今は学歴を隠してる、ってとこかな。
健人くんのことだって、本気で好きなわけじゃない。
ただ一番のアイドルを、自分の彼氏にしたかっただけ。
私なんかに負けるのはプライドが許さないのよね？

ラジオじゃ、愛穂さんと男の好みがかぶるのが仲良しの証拠、
みたいなこと言ってたけど、本当はかぶるんじゃなくてお姉さんの彼氏を
自分のものにしたくなって、奪い取るってだけの話でしょ？」
カレンは黙りこくっている。

「今までのあなたの人生って、いったい何なの？
そんな生き方してて、あなたは自分が幸せだとでも思ってるの？」
雪見はカレンを一喝した。
そのあと強い口調から一転して、うつむくカレンに声を穏やかに語りかける。

「いくらレッテルが欲しかったからって、並大抵の努力じゃハーバードには入れないよね。
いくら叔父さんのコネがあったって、毎日の自分の努力無しにはトップモデルを維持してなんて行けないよね？
本当はあなたって、人一倍の頑張り屋さんなんだよ。
ただ、子供の頃からずっとお姉さんと比べられて育ったから、いつも一番を手元に置いてないと不安で、何が何でもそれを手に入れようとする。

もっと自分自身を認めて、褒めてあげてもいいんだよ。
よく今まで頑張ってきたね、って…。」

そう雪見が優しい目をして語りかけた時、カレンの瞳から一筋の涙がこぼれ落ちた。

「おかしいな…。どうしちゃったんだろ…。」

カレンが独り言のようにつぶやく。
その大きな瞳からは真珠のような涙が、ぽろぽろと落ちては膝を濡らした。

どうやらカレンは、お酒が入って心が緩んでしまったようだ。
最初の一杯で止めておけば良かったものの、雪見の心理作戦にまんまと引っかかり
自らシャンパンを、ボトルで頼んでしまったのが間違いだった。

きっとカレンは、雪見ほどお酒に強くはないのだろう。
その証拠に、カレンをあまり酔わせると試合がドローになってしまうと思い、
ボトルの三分の二は雪見が意識して飲んだのにも関わらず、
雪見はしらふと変わらぬ平静さを保ってる。
と言うか、お酒が入ったお陰で、雪見もいい具合に心のしこりが柔らかくなっていた。
ここへ来る前には殺気立つほどの怒りだったのが、お酒を飲んだお陰で
返って冷静さを取り戻し、カレンに一番良いと思われる方法で
事態を収束へと向かわせることが出来そうだ。

カレンの一度切れてしまった緊張の糸は、そうそう簡単に繋がるものではなかった。
本人的にはまだ負けてなんかいないつもりで、精一杯の毒を吐いて

はくるが
自分の意志に反して溢れる涙は、どうにも止めようがないらしい。
拭っても拭っても新しく生まれ出る涙が、少しずつではあるがカレンの
心をも洗い流し、自分自身を客観的に見つめる瞬間を作ってくれる。
今まで自分を振り返ることなく、ここまで突っ走ってきたカレンにとって
その時間はとても大切なものであると、雪見は黙ってカレンを見守った。

「私…。なんだか疲れちゃったな…。頑張るの、疲れちゃった…。」

ぽつりぽつりとカレンが、あくまでも独り言だから、と言うように
雪見の存在を無視して話し出す。

「小さい頃から、ママがいつも私達に言ってた。
女の子は何でも一番いいものを手にしなさい、って。
そうしたら一生幸せに暮らしていけるのよ、って…。

一番人気のブランドの服を着て、一番人気の塾に通って
一番格好いい人を彼氏にする。
けど、どんなに頑張っても、お姉ちゃんには勝ったためしが無かった…。」

そう…、とだけ小さな声で雪見が相づちをうつ。
カレンは、気の抜けた残りのシャンパンを飲み干した。

「ママが言ってたことって、ホントかな…。

ちっとも幸せなんて、感じた事がない。
幸せってどんな気持ちだったっけ…。ふふっ。もう忘れちゃったな。」

かすかに寂しい笑い顔を見せるカレン。
いつの間にかもう、その瞳から涙は落ちてこなくなっていた。

その時、どこからか一匹の黒猫の子供が現れた。
雪見の膝に頭をこすり付けたあと、テーブルの下を潜って反対側に座る
カレンの膝元へと寄って行く。

ふと、子猫の存在に気付いたカレンは、雪見も見たことのなかった
優しい笑顔で子猫を抱き上げ、愛おしそうに頬ずりをした。

「かっわいい！こんな黒猫、飼いたかったんだ！
黒猫は不吉だって嫌う人もいるけど、ほんとは黒猫って、邪悪な物から
身を守ってくれる、一番パワーの強い猫なんだよ！知ってた？
あ！また一番って言っちゃった！」

子猫を大事そうに抱っこし、イタズラっぽい目をして笑いながら雪見を見た瞳には、
もう先程までの黒い影は消えていた。

「黒猫の力って、凄いんだね。知らなかった！」

この子が来た途端、カレンは別人のように色々な猫の話を話し出す。
雪見は、本当にこの黒猫の子が、カレンの中から悪を追い出したとさえ思えてきた。

「猫、飼ったことあるの？」雪見がカレンに聞いてみる。

「私は大好きだけど、ママが嫌いだから飼ったことはない。でも、こんな子が家にいたら、きっと毎日が楽しいだろうなぁ！」

「幸せな気持ちになれるよ。」

「えっ？幸せな気持ち？」

「そう、あなたが忘れたって言ってた、幸せな気持ち。今、その子を抱いてる気持ちが幸せな気持ち、じゃない？」

雪見の言った言葉を自分の心に確かめるように、もう一度ギュッと子猫を抱き締めてみる。

「これが幸せな気持ちだったんだ…。すっかり忘れてた…。」

そうつぶやくように言ったあと、カレンは再び一粒の涙を落とした。雪見にはそれが、何よりも一番綺麗な本物の真珠のように目に映り、なぜかとてもこの人が愛おしく感じ始めた。

「そうだ！あなたにこれあげる！」

雪見は鞄の中から、少し角の擦れてしまった一冊の写真集を取り出す。

それはいつも雪見が大事に鞄に持って歩く、コタとプリンの写真集であった。

「これ、健人くんちの猫の写真集。良かったらあなたにあげる。毎

日眺めてるから、なんだかくたびれちゃってるけど。
仕事で疲れた時とか、なんだか嫌な事があった時、これを眺めるだけで
全部がリセットされるの。
あ、健人くんちの猫だからって訳じゃないよ。
猫にはみんな、そんなパワーがあるって私は思ってる。」

「やっぱり、そう？」

「そう！だから私も学歴を捨てて、猫のカメラマンなんかになっちゃったんだな、きっと。
一番でいるって、思ったほど気持ちのいいもんじゃないよね。
いっつも下から上がってくる人に恐怖を感じて、クモの糸にぶら下がるようにして
さらに上に逃げようとする。どこまで登っても、もう降りられない。
私はそんな毎日が嫌になって、自分でえいっ！ってクモの糸を切って地上に降りた。
そしたら底辺にもいっぱい良いものがあるじゃない！って、初めて気が付いたの。」

「あなたが？」「ふふっ。そう、私が。」

カレンは不思議そうな目で雪見を見つめた。

「だからね、今一番天辺にいる健人くんと当麻くんを見てて、
本当に頑張ってるな、大変だろうなって思う。
一番を維持する大変さは、あなたもよーくわかるでしょ？
決して良いことばかりじゃないよね。
辛いことや苦しいことの更に上に、一番天辺が存在する。
彼らは一人でそこにいる訳じゃない。たくさんのスタッフや、彼らを

支える人達と共にそこにいる。
私みたいに勝手に一人で、クモの糸を切るわけにはいかないんだ。
どんなに辛くても、逃げ出しちゃいけないんだ。

だから…。だから私は、彼らが少しでも辛さを和らげることができるように
精一杯サポートしてあげたい、って思ってる。
今のカレンちゃんになら、私の気持ち、解ってもらえるよね？」

見つめる雪見に、彼女は一度だけコクリとうなずく。

それを見て、やっと雪見も心からの笑顔を彼女に返した。

優しい二人

『秘密の猫かふぇ』からマンションに戻った雪見は、
精根尽き果て、化粧も落とさずにベッドへと倒れ込む。

「はぁぁ…。疲れたぁ。めめ、少しだけ寝かせてね。
起きたらすぐにご飯をあげるから…。」

ベッドに飛び乗ったためめにそれだけ言うと、雪見は気を失うように
眠りに落ちた。

カレンはあのあと、
「ここの会員になれて良かった！せっかく高い会費を払ったんだから、
せっせと通って猫ちゃんに癒やしてもらわなくちゃ。」
と、笑いながらそう言って、すっきりした顔して帰って行った。

雪見もまた、この大事な場所が、嫌な思い出に染まらなくて本当に良かったと
カレンの後ろ姿を見送りながらホッとしていた。

『猫を好きな人に悪い人はいないよね。』

最後にそう言ってあげれば良かったなと、ちょっぴり後悔しながら…。

雪見が夢も見ずに深い眠りについてると、なにやら玄関先が騒がしい。
めめとラッキーが、先を争うように走って行った。

「ゆき姉、帰ってるみたい！良かったぁ！大丈夫だったのかな？
ゆきねぇ！大丈夫？ゆき…。ベッドに倒れてるんだけど！」

「まさか…、死んでるんじゃないよね？」

「なに縁起でもないこと言ってんだよ、当麻は！んなわけないだろ？
ゆき姉！ゆき姉ってば！起きて！起きてよ！」

健人に力一杯揺さぶられて、やっと雪見は目を覚ました。

「あれ？健人くん！当麻くんもいる。なに？ラッキーを見に来たの？」

「なに呑気な事言ってんのさ！
俺たちがどんだけ心配して、ゆき姉を探してたと思ってんの？
ケータイの電源も切ってあるし、連絡は来ないし！
当麻なんて、俺が仕事終るまで、ずっと一人で探し回ってたんだぞ！
もう心配かけないで…。」

健人はそれだけ言うと、涙を浮かべながらベッドの上の雪見を強く抱き締めた。
二人を見守る当麻の顔にも、安堵の表情が浮かんでる。

「ごめん…。やっぱり心配かけちゃったんだ。ごめんね。
でも、カレンとの事、ちゃんと解決したよ。
いや、私が解決したんじゃなくて、黒猫ちゃんが解決してくれたの。

」

「なにそれ？どういうこと？」

雪見から身体を離した健人が、当麻と顔を見合わせてから雪見を見る。

「あのね、放送局出てからカレンと『秘密の猫かふぇ』行ったの。で、二人で美味しいシャンパン飲んで黒猫の子供と遊んだら、すっかり仲良くなって。

あの子も猫大好きだって言うから、鞄に入ってたコタとプリンの写真集、あげちゃった！

ちょっと古っぽかったんだけど。」

健人も当麻もぽかんとした顔して雪見を見た。

「なんでそんな展開なの？カレンは俺たちの敵だったでしょ？」

今日のラジオで、散々やられた当麻が、訝しげに聞く。

「それはもう過去の話。今日からは猫友達だからね。

二人共、今度彼女に会ったらそのつもりで。」

雪見は、真剣な目をして二人を交互に見つめ、心の中で『わかってね。』と念じる。

健人と当麻も、しばらくは雪見の真意を図りかねて沈黙していたが、自分を納得させ、もうそれ以上深く聞くことはしなかった。

「まっ、いいや！なんでも。

とにかく解決したって言うし、ゆき姉もこうして無傷でいるし！」

健人が、一旦沈んでしまった空気を元に戻すため、あえて明るい声を出す。

それに賛同して当麻も、

「そうだね！最悪、河原にでも倒れてるかと思ってたんだから、元気でいるならそれでいいや！」と、笑って言った。

「なによ、それぇ？昔の不良の決闘じゃあるまいし、なんで河原になんか…。
もしかして当麻くん、マジで河原を探しに行った…とか？」
目をまん丸にして当麻の顔を覗き込む。

「だって、ゆき姉あの時、めちゃくちゃ怖い顔で作り笑いしてたから…。
絶対ヤバい事になる！って思うでしょ、普通！」

「にしたって、ほんとに河原を捜す？」雪見は笑いながら健人を見た。

「本当にこいつ、心配してたんだよ。
俺が仕事終るまで、必死になって捜し続けてくれてた…。
お願いだから、もう俺たちを心配させないでね。」

健人はニコリともせず、雪見の瞳を真っ直ぐ見つめて心からそうお願いした。
雪見は、今回の騒動を改めて振り返ってみる。
あの時ラジオスタジオ前で当麻に会ったのだから、二人が心配するのは想像できたのに
カレンとの事にエネルギーを使い果たし、連絡もしてなかった。

「ごめんなさい…。私が悪かったね。もうこんな事しないから…。
ありがとう。いっつも私の事心配してくれて。
世界一の幸せ者だよね。こんな人気のイケメンアイドルが二人して、
暗い河原を捜し回ってくれるんだから…。

あっはは！やっぱ、笑える！もうダメ！笑いを堪えたらお腹痛くなっちゃった！」

「おーい！なんにも反省してないしぃ！もういいや。
腹減った！なんか作って！俺たち、晩飯何にも食ってないんだよ！
お詫びに美味いもん、ご馳走しなさい！」

健人がこれ以上の説教は諦めて、「ビール飲んでいい？」と言いながら
冷蔵庫から缶ビールを二本取り出し、一本を当麻に手渡した。
「飯出来るまで、二人で飲んでよ！マジ、喉乾いたから！」

「ほんと、喉カラッカラ！じゃ、ゆき姉の無事を祝ってカンパーイ！
うんめー！俺、久々だ！こんなに美味いビール。」

「俺も！汗かいて走り回ったお陰だね。でも、もう御免だけど。
昼間、散々ドラマの撮影で走らされて、まさか仕事終ってからも走ることになるなんて。
今日は爆睡できそう！ゆき姉みたく。」

「あははっ！俺も同感！」

二人の笑い声をキッチンで聞きながら、雪見は幸せな気持ちでフライパンを動かしている。
長い一日の終りにやって来た、大切な二人との幸せな時間。

『こんな気持ちが、カレンにも早く訪れますように…。』

新しく出来た猫友達の幸せを、心から祈る雪見であった。

仕事でデート

一夜明け、今日は雪見たち写真集編集スタッフの休養日。
雪見だけは、午後から健人へのインタビューが仕事として入っているが、
それとて健人と二人きりでするのだから、休日デートのようなもの。
と言うか、インタビュー終了後は、そのまま本物のデートになだれ込もうという作戦で
あえて健人の一番最後の仕事後に、これを持ってきてもらった。
なので、雪見が家を出るのは午後八時半の予定。
それまではのんびりと音楽を聴きながら、洗濯や部屋の片付けをしたり、
猫の遊び相手をしたりして束の間の休日を満喫している。

昨日の夜は、本当に久しぶりに健人、当麻と三人で、笑いながらお酒を飲んだ。
一週間前の『秘密の猫かふぇ』以来気まずくて、少なくとも雪見は当麻を避けるようにして暮らしていたが、昨日のカレンとの一騒動は、結果として
当麻と雪見をポン！と一瞬で元通りに修復してくれたかのように見える。
決してあの出来事が、二人の間で消えて無くなった訳ではないのだが…。

今日のインタビューをどこでするか二人で考えて、素の斎藤健人を

引き出すには
行きつけの店がいいだろう、ってことで結局は『どんべい』に落ち着いた。
一応マスターに一言断りを入れておかなくちゃ！と二、三日前に電話で話したら、
なぜかメチャクチャ大喜び！

「…ってことは、健人の写真集にこの店の写真とか住所とか、載るんだろ？
クリスマスイブに発売だから、次の日は店にファンが押し寄せて、大変な騒ぎになるぞ、こりゃ！健人のお陰で大繁盛だ！！」

「あのさ、マスター。店を仕事に使わせてもらって、こんなこと言いにくいんだけど。
今回はお店の名前、載せられないんだよね。」

「うそだろぉ！？せっかく天下の斎藤健人写真集に載るってのに、店の名前を出せないなんて！そりゃ、あんまりだ！
ショックで立ち直れないかも…。」

「ごめん、ごめん！これはさ、事務所からもきつく言われてて…。
もしもお店の場所や名前がファンに特定されちゃうと、そのお店だけじゃなく
お店が入ってるビルにまで人が押しかけて、たくさんの人に凄い迷惑をかけちゃうの。
だから、宣伝してあげたいのは山々なんだけど、こればっかりはごめんなさい！なんだよね。
ほんとにごめんね、マスター！
それにさ、健人くんも、『どんべいはずっと通いたい、俺の大事な店だから。』って。

みんなにバレちゃうともう行けなくなるって、一度は健人くん、
そこでインタビュー受けるの反対したの。
でも私は、あの店のあの部屋だからこそ話せる話もあるだろうって、
健人くんを説得したんだ。
もしマスターが、それじゃあ御免だ！って言うなら違う店にするけ
ど…。」

「そんなこと、俺が言うわけないだろ！
健人がこの店の事を、そんな風に思ってくれてるなんて…。
嬉しくって涙が出ちまうよ。
よっしゃ！土曜の九時頃だな？美味いもん、テーブル一杯に並べて
待ってるよ！
あ、でも土曜の夜は多分満席になってるだろうから、店に入って来
る時は
他のお客にバレないように、気を付けて入ってこいって健人に伝え
て。
楽しみに待ってるから！って。」

「ありがとう、マスター！私も楽しみにしてる。
じゃ、土曜日に行くね！よろしくっ！」

電話を切ったあと、すぐに健人にメールした。
マスターからの伝言と、前の仕事が何時に終っても待ってるから、
慌てないで来てね！と伝える。

健人もとても楽しみにしている雪見のインタビュー。
そろそろ出掛ける時間となったようだ。
カメラバッグに、編集部から借りてきたマイクロレコーダー、

マスターへのお礼の手土産を持ってタクシーに乗る。

「マスター！来たよ！今日はお世話になります。
これ、部屋を使わせてもらうお礼と、すっかり持ってくるのを忘れてた
沖縄土産の泡盛！うちで熟成しといたから、美味しくなってるはず。」

「別に気を使わなくても良かったのに！でも有り難くもらっとくよ。
サンキュ！
お！泡盛かぁ！ちょうど豚の角煮が煮えたとこだ。
この組み合わせは黄金コンビだぞ！
あとで持ってくから、部屋に入ってな。あ、ビール、持ってってね。」

「ＯＫ！健人くんは少し遅れるって。撮影が押してるみたい。
じゃ、先に準備させてね！」
雪見はカメラバッグとビアジョッキを手に、そろりそろりと奥にあるいつもの部屋へと入っていった。

店内は、マスターが言ってた通りの満員である。
「誰にもバレないで健人くん、来れるといいけど…。」
独り言を言いながら重たいバッグを下ろし、まずはビールで喉を潤す。
よしっ！と自分に気合いを入れて、健人が着いたらすぐに仕事を開始出来るよう
インタビューの準備を整えた。

それから一時間ほど経った頃、健人からメールが入る。

ゆき姉、ごめん！
今やっと終った！
これから化粧落として
大至急向かうから、
俺の食いもん、頼んで
おいて。腹ぺこだぁ！
じゃ、もう少し待って
てね。飛んでくから！
アイシテル（＾３＾）－☆

ｂｙ　ｋｅｎｔｏ

あと少し。もうちょっとで健人に会える！大好きな健人に…。

健人の告白

土曜日の午後十時過ぎは、一週間の疲れをお酒で癒やそうと考える同類達で
どこの店も大入り満員だ。
世の中、こんなにも酒飲みがいるのかと思うと雪見は、
なんだか安心してグラスを傾けることが出来るのだった。

その日の『どんべい』も、マスターがてんてこ舞いするほどの大賑わい。
一人で飲みに来てたのなら、すぐに雪見もホールの手伝いに入ってあげるところだが、
なんせ今日はこれから、健人へのインタビューと言う大仕事が待っている。
忙しいのに悪いなぁと思いつつ、もうそろそろ健人が来る頃なのでホールの状況がどんな様子なのか、偵察に部屋を出た。

『えっ？なにこの満員状態！待ってるお客さんまでいるじゃない！
健人くん、大丈夫かなぁ。やっぱ、土曜日っていうのが間違いだった？
どうしよう、お客さんに気付かれたら…。』

雪見は、健人がちゃんと変装して来るのか心配で、ビルの外に出て健人の到着を待っていた。

程なくしてビルの前に今野の車が到着。
ドアが開いて、ひらりと健人が降りて来る。

健人は、グレーのキャスケットを目深にかぶり、いつもの大きな黒縁眼鏡を掛けている。
首周りには黒の大判のストールを巻き付け、口元から下を覆っていた。
メイクを落としてるせいか夜の明かりで見るせいか、それとも疲れのせいなのか、
少し顔色が悪く見える。
これならお客さんになんとかバレないで、部屋までたどり着けるかな？

「外で待っててくれたの？ありがと！ごめんね、待たせちゃって　。」
健人が、一年ぶりにでも会ったかのような、溢れる笑顔を見せる。
昨日の夜は、当麻と二人で雪見んちにいたのに。
でも最近の健人は、別れたそばからすぐに雪見に会いたくなる日が続いている。
多分、人通りさえ無ければ、確実に雪見を抱き締めていただろう。

「お疲れ様！大丈夫？疲れてない？」
雪見もまた、この時をずっと朝から待っていた。
この日一番の笑顔で、優しく健人を出迎える。

「大丈夫に決まってんだろ！
ゆき姉と一緒に『どんべい』で仕事なんて、最高じゃん！
でも、仕事の前に腹ごしらえさせてね。もう腹減って死にそう！」

「ふふっ。健人くんって、いっつもお腹空かしてるんだから！
マスターが、いっぱいご馳走用意してお待ちかねだよ。
『せめてテーブルに並んだ料理ぐらいは、健人と一緒に撮してくれ

よ！』
って言うから、お箸をつける前に写真撮らせてねっ！」

「えーっ！おあずけ喰った犬みたいに、よだれ垂らして写るかも！じゃあ、とっとと写真だけ撮しちゃお！さ、行こうか。」

健人が、早く店に入ろう！と雪見を誘うと、
今野の車の窓がスッと開いて、「雪見ちゃん！久しぶり！」と、声を掛けてきた。

「今野さん、お疲れ様です！お元気でしたか？」
雪見が車に駆け寄り、久しぶりに会った今野に、窓越しから笑顔で挨拶をする。

「俺は相変わらずだよ。どう？編集作業は順調に進んでる？」

「ええ！今のところは順調です。
今日の健人くんへのインタビューで、いいとこ取材は終了かな？
あ、当麻くんからもコメントもらうんだった。
でも、良い感じに進んでるんで、完成を楽しみにしてて下さいねっ！」

「おう！じゃ、あとは健人をよろしく頼むよ。
あいつ、朝からこの仕事が楽しみで、相当テンション高いと思うから暴走した話にならないように、雪見ちゃんがコントロールしてやってよ！」

「任せて下さい！手綱はしっかりと握ってますから。」
雪見が笑いながらそう言うと、今野は安心したように車を発進させた。

ビルの入り口で待つ健人に駆け寄り、じゃ入ろう！と手を取る雪見。
地下一階への階段を下りる途中、素早く二人はキスをした。

「今野さん、なんだって？」
「健人くんが暴走した話をしないように、監視を頼む！だって。」
「ひっどいなぁー！今野さん。」

二人が笑いながら、ごく自然に店の中へと入って行く。
『どんべい』は相変わらずの混みようで、店内はお客さんの楽しそうな話し声で賑やかだ。

健人がやっと到着したのをマスターが見届けて、無言のまま目線だけで早く部屋へ入るよう、二人を促した。
健人は、マスターの方を向いてひょこっと頭を下げ、足早に店の奥まで進んでいく。
雪見はマスターに、「勝手にビールもらっていくから！」と、慣れた手つきでジョッキ二つにビールを注ぎ、泡とビールの比率を見て
「よし！完璧！」と満足そうに部屋まで運んで行った。

「お待たせ！じゃ、ビールの泡が消えないうちに、写真を一枚撮らせて！」
テーブルには、雪見が外に出てる間に料理が並べられていた。
さっきマスターが言ってた豚の角煮も、熱々の湯気を上げながらグラスに入った二杯の泡盛と共に鎮座している。

「マジ、よだれが出そう！ヤバイよ、早く撮って！」
「ＯＫ！いいよ、食べ出して。」

「やった！いっただきまーす！うめぇ！この角煮、トロットロ！」

健人は本当に幸せそうな顔をして料理を頬張り、ビールを飲んだ。
雪見は、健人がいつでも美味しそうに食べる、その顔を見るのが大好きで、
いつまでもファインダーを覗いて、シャッターを切り続ける。

「ねぇ、もう写真はいいから一緒に食べよう！
ゆき姉のビール、泡が消えちゃったよ。角煮も食べてみて！ヤバイから。」

「よし！じゃあインタビューも同時に始めようか。
レコーダーを長回しするから、意識しないで普段通りに喋って。
ここでいつも飲みながら話すのと同じにね。」

「えっ？そんなんでいいの？全然仕事みたいじゃないや！
いいね、こういう仕事！毎日やりたい！インタビュー。
そしたらゆき姉とだって、毎日一緒にいられるのに…。」

「ストーップ！レコーダー回ってんのに、そんなこと言っちゃダメ！
これ、後からライターさんが文章に起こすんだから、
みんなが聞いてもいいことだけ話してよ！録音し直しっ！」

ほんとにもう！と言いながら、雪見が仕切り直しする。
すると健人が、待ったをかけた。

「じゃ、レコーダー回さないうちに先に話しておく。
酔ってからじゃ、ちゃんと伝わらないと困るから。」

「えっ？なに　が？」

「一緒に暮らそう！俺と。」

突然の思いも寄らない告白に、ただただ雪見は健人を見つめるだけだった。

逃亡

「なに？今の。」

しばらくボーッとしたあと、我に返って雪見が聞いた。

「なんか言った？今。」

心臓がドキドキして、うまく呼吸が出来てない気がする。

さっき口をつけた泡盛のせい？いや、まだ一口しか飲んではいない。

「聞いてなかったの？一緒に暮らそう、って言ったんだよ！」

そう言いながら健人は、照れ隠しにポテトピザを頬張った。

「うっめー！やっぱこのピザ、絶品だと思う！」

と、多分言ったと思う。モゴモゴしてて、よくは聞き取れなかったが。

「一緒に暮らそう、って…。本気で言ってるの？それとも冗談？」

雪見が真っ直ぐに健人の瞳を見つめ、真剣な顔して聞いてきた。

健人は、おちゃらけながら笑って話そうとも考えていたのだが、

雪見の真剣な瞳を見て、やっぱりきちんと話すべきだと

自分の思いを言葉に置き換えた。

「俺…。ずーっと前から思ってた。

ゆき姉と二十四時間一緒にいれたら、どんなに毎日が幸せだろう、

って…。

きっと毎日が楽しくて、仕事もゆき姉のために頑張れて。

家に帰ってゆき姉の顔見てご飯を食べたら、その日の疲れなんか一

気に吹き飛んで…。

デートして帰る寂しさも、誰もいないひとりぼっちの部屋で寝るのも、もう嫌なんだ。

朝も夜も、今日も明日もゆき姉と一緒にいたい。

さっき、車から降りてゆき姉の顔見た時に、もう離れたくないって心に決めた。

ゆき姉は…、俺と毎日一緒にいるのは嫌？」

健人の大きな瞳が、嘘偽りのない心を鏡のように映し出している　。

それは、どこまでもどこまでも透き通っていて何一つ濁りのない、

雪見に対しての愛だけで出来ているような心だった。

あまりにも突然すぎる告白に、最初は何も考えることが出来なかった雪見だが、

健人の瞳を見つめるうちに、やっと返事が見つかった。

「嫌なわけないじゃない。健人くんと一緒にいて、嫌な理由なんてあるはずがない。

私もいつも思ってたよ。

毎日健人くんにご飯作って、美味しいね！って二人で食べて、

毎日一緒にめめ達と遊んで、色んな話をして笑う。

そんな生活、楽しいだろうなって。

健人くんが辛い時や落ち込んでる時、時計を気にしないで

ずっとそばにいてあげれたら、どんなにいいだろうって…。」

「ゆき姉もそう思っててくれたんだ　！」

健人がやっと微笑んで嬉しそうに言う。

雪見はその笑顔を見て、心を固めた。

この笑顔をずっとそばで見ていたい。健人を悲しみから守ってあげたい。

「うちで暮らそ！めめとラッキーと、一緒に暮らそう。
毎日私が美味しいご飯作ってあげる。
毎日私が「お帰り！」って家で待っててあげる。
だから…。うちにおいでよ、健人くん。」

そう雪見が言うと、健人は顔をくしゃくしゃにして喜んだ。
今まで見た中で、一番の喜びようかもしれない。

「やった！ほんとに一緒に暮らせるの？
俺、ゆき姉と一緒に暮らせるの？夢じゃないよね？
スッゲー！夢って、強く願えば叶うんだ！！
めちゃめちゃ嬉しすぎる！あー、喉乾いた。」

健人が気の抜けたビールを一気飲みする。
それから泡盛をグッとあおって豚の角煮を頬張った。
分かりやすい健人の行動が微笑ましくて、クスッと雪見が笑う。
なんて幸せな光景なんだろう。

「冷たいビール、もらってくるね！」　「ＯＫ！大至急ね！」

雪見が、少し混雑の落ち着いたカウンターに行ってマスターに
「ビール二つ、もらってくね。」と声をかける。
一つ目のビールを注いでるとマスターが、「どう？順調に進んでる？」
と、話しかけてきた。

「いや、まだ健人くんのご飯タイム中！
マスターが美味しい物ばっかり並べてくれたから、食べるのに忙しくて
まだ仕事にかかれてないの。
あ！ご馳走の並んだ写真だけは最初に撮っておいたから、心配しないでねっ。」

雪見の顔を見てマスターがニヤニヤしてる。
「なによ、マスター！なに人の顔見てニヤついてんの？」

「ニヤついてんのは雪見ちゃんの方だけど？
さては、健人となんかいいことあっただろ！絶対そうだ！」

「な、なに言ってんの！そんなことないから！
もう、いいから軟骨つくね焼いて！早くねっ！」

「はいはい！ただいま大至急お焼き致します！」

笑いながら雪見が両手にジョッキを持って、部屋の方へ歩き出したその時、
後ろから突然、「ゆきねぇ！」と声をかけられた。

びっくりしたが、ビールをこぼさないようにそっと後ろを振り向くと、
そこにはなんと、当麻が立っているではないか！

「当麻くん！！」

あまりにもびっくりして、思わず大声を出してしまった。
その声に満員の客が反応しないわけがない。

一斉にみんなが当麻と雪見の方を振り向いた。

『しまった！大声出しちゃった！』

雪見がそう思った時にはすでに遅かった。

まず、カウンターに座ってたＯＬ二人組が当麻に気付く。

「ねぇ！三ツ橋当麻じゃないの？あれ！

もしかしてビール持ってるのって、ゆき姉？健人のカメラマンの！」

「うそ？ほんとだ！！絶対あれ、当麻だよ！

眼鏡掛けてるけど、絶対にそうだ！ゆき姉は『ヴィーナス』で見たもん！」

同じような話声や、小さな悲鳴までもがあちこちから聞こえてきて、

店内は騒然となってしまった！

『あのバカ！見つかってやがる！下手したら健人まで見つかっちまうぞ！』

マスターが焦って店内を静めようとするが、一度騒ぎ出した酔っぱらい達は

そう簡単におさまるはずがなかった。

当麻と雪見も、蜂の巣を突いたような騒ぎに、茫然と立ち尽くす。

と、一人の客が立ち上がり「三ツ橋当麻さんですよねぇ！」と言いながら

二人に近寄ろうとしたのを皮切りに、バタバタと何人かが立ち上がった！

それを見た当麻は、とっさに雪見の腕をつかみ「外へ出よう！」と入り口に向かって歩き出す。

両手にジョッキを持ってた雪見は
「ちょっとたんま！あ、これ、良かったら飲んで下さい！」
と、一番近くに座っていたカップルに無理矢理ビールを渡し、
急いで当麻の後ろをついて店を出た。

「とにかくここから離れよう！」と、二人でタクシーに乗り込む。
逃げ場所で思いつくのは『秘密の猫かふぇ』しかなかった。

その頃『どんべい』店内は、いきなり目の前から逃亡した
超人気イケメン俳優、三ツ橋当麻と雪見の話で店全体が揺らぐほどの
大騒ぎになっていた。

『まずいことになったぞ！健人も見つからないうちに、外に出さな
きゃ！』
マスターがこっそりと健人の部屋を開ける。

「健人！俺に付いて来い！非常口から外に出ろ！」

「ねぇ、店が騒がしいけどなんかあったの？ゆき姉もぜんぜん戻っ
てこないんだけど…。」

「当麻が来て、雪見ちゃんを連れて行った！」

「えっ！！」

昨夜の健人の胸騒ぎが本物になってしまった。

胸騒ぎの的中

「当麻がゆき姉を連れてったって、一体どういう事!?
なんで当麻がここに来たの?」

健人は何が何だか訳がわからず、マスターに詰め寄った。

「俺にもわからん!ただ、雪見ちゃんがビールを持ってここに戻ろうとした時に、
後ろから当麻が声を掛けて、ビックリした雪見ちゃんが『当麻くん!』
って、大声を出しちまったわけ!
それで二人が客にバレちゃって騒がれたもんだから、当麻が雪見ちゃんを連れて
店を出て行ったんだ。今もみんなが大騒ぎしてるよ!」

「そうだったんだ…。でも、二人でどこに行っちゃったんだろ…。」

健人が視線を落として考え込む。
でも、思い返すと昨日の夜、当麻に対してなんとなく胸騒ぎを覚える瞬間があった。
その胸騒ぎがこれだったのか…。

昨日の夜は当麻と二人、雪見の家で酒を飲んだ。
カレンと和解したことによって、久々に心から笑い合って飲んだ楽しい酒であった。

二人とも、次の日は朝からドラマの撮影が入ってたので、
三時間ほど飲んで雪見のマンションを後にした。
外へ出ると、冷たい風が火照った頬に気持ち良い。
少しこのままブラブラと歩くことにする。

「あー、なんかスッキリした！
カレンと和解した理由は腑に落ちないけど、まぁ理由はどうであれ
これでカレンにビクビクしなくて済むんだから…。」
当麻がうーん！と歩きながら伸びをした。

「ほんと、良かったよね！
ゆき姉がカレンと二人でどっかに行った！って当麻から連絡来た時には
マジで俺、心配で泣きそうになったもん。」

健人は何時間か前を思い出し、また涙ぐみそうになるのを堪えた。
そして、さっき飲んでた時から気になってたことを、当麻に聞いてみることにする。

「あのさぁ。当麻、さっきメチャクチャ嬉しそうだったよね。
ゆき姉がスタジオまで、残業途中で投げ出してすっ飛んで来てくれた！って。」

「あ、あぁ。そりゃ嬉しいに決まってんだろ！
今やゆき姉は、俺の第二の親友みたいなもんだから。
その親友がタクシー飛ばして来てくれたら、もし健人が俺の立場でも嬉しいだろ？
もちろん第一の親友は、健人に決まってるけどね。」

当麻は、健人が何かを感じ取ってそんな質問をしたのだと、内心冷

や汗をかいた。
だが、本当に嬉しかったのだから、自分でも気が付かないうちに
相当テンションが上がっていたに違いない。

事実、もしも健人が一緒にいなければ、確実に雪見を抱き締めていたことだろう。
あの日、猫かふぇのトンネルで、雪見を抱き締めたのと同じように…。
親友なんかじゃなく、大好きな人を抱き締めるように…。

当麻は、上手く自分の心をだませたと思っていたが、健人はなんとなく
感じてしまった。
それは今までに何度も何度も、考えては打ち消し、考えては打ち消ししてきた
一番健人が恐れている感情だ。

やはり当麻は雪見に対して、それを持ち合わせているのではないか…。
当麻と二人夜道を歩きながら、嫌な胸騒ぎが健人をかすめて通り過ぎた。

昨日の事を思い出しているところに、ケータイのメールが着信した。
雪見からだ！『秘密の猫かふぇ』に向かってると書いてある。
いつもは夜の十二時に一旦閉店するが、土曜の夜だけは二時間延長されて

午前二時に閉店であった。

「俺も行かなきゃ！ゆき姉を取り返さなくちゃいけない！」

健人はとっさにそう口走った。

それを聞いてたマスターは、深くを追求せずに健人を脱出させてやろうと、

いつも他の従業員とシミュレーションしている手はずを、健人に説明する。

「いいか？これからうちの若い奴が、店の入り口に立ってジャンケン大会を始める。

客の視線を集めておくから、その隙に健人は非常口から出るんだ！

非常口は店の真ん中の右奥にある。しっかり顔を隠して行けよ！

じゃ、俺は若い奴に伝えてくるから、呼びに来るまでじっとしてろ！」

小上がりを出かかったマスターに、健人が声を掛ける。

「マスター、ごめんね！俺たちが迷惑かけちゃって！

今度必ず恩返しするから…。」

「いいってことよ！気にすんな。

こんなに騒がれる大スターが、二人もウチの常連さんなんだから、

これしきの事、想定内なんだって！じゃ、待ってろよ！」

マスターがまだ騒がしい店内に戻り、一番近くにいた従業員に指示を与える。

それを聞いた若くてこれまたイケメンの従業員が、素早くマイクを

手にし
入り口をふさぐようにして、立ちはだかった。

「はーい、みなさん！本日もようこそ、『どんべい』へ！
これからちょっと早いけど、毎週土曜日恒例のどんべいじゃんけん大会を
始めたいと思いまーす！
みんな、なるべく前の方に集まってくださーい！」

俳優にもいそうなタイプのイケメン従業員が、笑顔と大きな声で客を手招きすると、
酔っぱらい達は先を争うようにして、少しでもイケメンくんのそばへと集まってきた。

「じゃあ本日の優勝賞品のご紹介！
まずは生ビール無料券五枚！か、ハイボール無料券五枚！か、
僕からのおでこにチュー券一枚です！みんな、頑張ってね！」

客が一番反応したのは、おでこにチュー券だった。
この従業員対客全員でじゃんけんをし、最後に従業員に勝ったら商品を
もらえる、ってわけだ。

「健人！出るから靴を履いて！」

「ごめん！料理、食べきれなかった。」

「いいから　、そんなこと！
最初のジャンケンが始まったら、すぐに非常口に向かえよ！
ちゃんと雪見ちゃんを取り戻してこい。離すんじゃないぞ！」

マスターが笑顔で健人の肩を、ぽん！と叩いた。

「いつもありがとね。俺たちを応援してくれて…。
じゃ、また来るわ！ご馳走様、マスター！」

健人も笑顔でマスターに礼を言う。

さぁ！ちゃんと当麻と向き合って、雪見を取り返して来よう！

健人は、客の賑やかな声を背中にして非常口を飛び出した。
雪見と暮らす明日を頭に思い描いて…。

断ち切る想い

『秘密の猫かふぇ』に向かうタクシーの中。
当麻は、さっきからずっと窓の外を眺めている。

「ねぇ。どうして『どんべい』に来たの?」雪見が聞いてみた。
「行ったらまずかった?」当麻は窓に顔を向けたまま、質問を返す。

「まずくはないけど…。来るなんて思ってなかったから、びっくりして
あんな大声出しちゃった。
ごめんね、私のせいでこんな事になっちゃって…。」

「別にゆき姉のせいじゃないよ。
俺も悪かった。二人の仕事の邪魔しちゃって。
もうそろそろインタビューは終った頃かな?って思って、行ってみたんだけど…。
昨日ゆき姉が、俺にもコメント欲しいって言ってたから、健人と一緒に
終らせちゃった方がいいのかなと思ってさ。」

「そうだったんだ…。そうだね、ちゃんと私が当麻くんを呼べば良かったんだ。ごめん。
あ、健人くんも今来るから、猫かふぇでインタビューしようか。」

「えっ?健人に連絡したの?」当麻の顔が、サッと曇った。

「え?普通連絡するでしょ?ビール入れに行ったまま、帰って来ないんだもん。

そりゃ心配してるでしょ！多分マスターがうまくやってくれたとは思うけど。
あ、もうすぐ着くよ。」

『秘密の猫かふぇ』店内は今日、割と混み合っていた。

当麻はいつもの場所に行こうとしていたが、雪見はあのトンネルを当麻と二人で通るのが怖くて、健人が来るまでここで待っていようと
手前にあるバーカウンターを指差した。

「今日は混んでそうだから、先に行って場所取りしておかないといいとこ全部、ふさがっちゃうよ。ほら、行こう！」
そう言うと、当麻は半ば強引に雪見の手を引いて、例の長いトンネルに入って行った。

雪見の足が自然とブレーキをかける。
それに気付いた当麻はクスッと笑い、「今日は何にもしないよ。」と言った。
「この前はごめん、あんなことして。俺どうかしてたんだ、あの時…。」

雪見は、ずっと気になってたあの事を聞くのは今しかないと思い、薄暗いトンネルを歩きながら当麻に聞いてみる。

「もしかして…、愛穂さんと別れたの？」

「別れたも何も、始まってもいなかったんじゃない？きっと。」

当麻は笑いながら、人ごとのようにそう言った。
だが、雪見の顔を見ようともせず、真っ直ぐトンネルの出口だけを目指し歩き続ける。

あの時の当麻が言った言葉。
「どうして俺の好きになる人はみんな、健人を好きなんだろう…。」
ずっとずっと頭から離れたことは無かった。
言葉の意味を確かめたくて、確かめたくはなかった。

どうしよう…。
聞いてしまったら、その瞬間からすべてが変わってしまう…。

「俺、ゆき姉のことが好きだよ。」

「えっ？」

雪見が聞こうかどうしようか悩んでいるうちに、先に当麻が言ってしまった。
やっぱり聞かないでおこうと、その直前に決めたのに…。

当麻は立ち止まりもせず、ただ前を向いて雪見の手を引き歩き続ける。
出口が無いのかと思うほど長く長く感じるトンネルを、二人はやっと抜け出した。
三人の大好きなウォーターベッドのスペースには、すでに団体の先客が
楽しげにパーティーをしている。

「なんだ、空いてなかった…。」

「しょうがないよ。土曜の夜だし、こんな時間だもん。
カラオケのブースに行ってみよう。もし空いてたら、課題曲の練習しなきゃ！」
二人はまた次のトンネルに向かって歩き出す。

「俺、ゆき姉のこと、好きだからね。」

トンネルに入るとすぐに、また当麻が言った。念を押すように。
そこまではっきりと言うのなら、今度こそこの場で決着をつけなければならない。
健人が到着するその前に…。

「どうして急にそんなこと言い出したの？愛穂さんに振られたから？
当麻くんは、思っててもそんなこと、言わない人だと思ってた。」

「思ってても？」当麻が足を止め、雪見の目を見て聞き返した。

「俺は健人の親友だから、ゆき姉のこと好きになっても、黙ってるって思ってた？
俺に勝ち目はないから、そんなバカなこと、言うはずがないとでも思った？」

「そんなこと…。」

否定したかったが、すべては当麻の言う通り。
雪見は当麻の気持ちに気付かぬ振りをして、自分が一番居心地のいい三人の関係を保とうとしていた。

「俺、そんなに都合のいい男じゃないよ。」「えっ？」

「もう、自分の気持ちをだまし続けるのに飽きてきた。
ねぇ。健人と別れて俺と付き合おうよ。」

「なに言ってるの？自分が言ってることの意味、わかってるの！」

「充分わかってるさ。こういうことだよ。」

そう言い終わると、当麻はいきなり雪見をトンネルの壁に押しつけ、
自分の唇で雪見の唇をふさいだ。
身動きが取れない。息が苦しくなる。

「やめてっ！」

やっと自由になった右手は、瞬間的に当麻の頬を叩いていた。

「どうして…。どうして私なんかを好きになったの…。
好きになって欲しくなかった。
好きになられるくらいなら、嫌いでいてくれた方がましだった！」
そう言って雪見はその場に泣き崩れた。

「ごめん…。」
ただ一言だけを言い残し、当麻が帰ってゆく。
雪見はいつまでもそこから立ち上がれずに、薄暗いトンネルに
もたれ掛かって座っていた。

どれほどそこにいたのだろう。

何人かの通行人が、心配そうな顔をして通り過ぎていった。
向こうの方から健人が走って来るのが見える。
「ゆき姉、大丈夫!?どうしたの?当麻は?」
目の前で心配そうに顔を覗き込む健人を見て、初めて雪見は事の重大性に気が付いた。
「壊しちゃった…。私が三人の仲を壊しちゃった…。
ずっと出会った頃のままでいたかっただけなのに…。」
健人は、抱きついて泣き続ける雪見を、ただ力強く抱き締めてやることしか
出来ないでいた。
『当麻はゆき姉に何をしたんだ!なんでこんな事になってるんだ!』
健人は怒りに震えていた。初めて覚える、親友に対する怒りの感情。
こんなことになるのなら、昨日の夜、きちんと片を付ければよかった。
泣きやまない雪見の頭を、いつまでも撫で続けては後悔をする。
一方タクシーの中の当麻は、苦しい思いをしてやっと雪見への思いに決別し、
『こうするより方法がなかったんだ。ごめん、ゆき姉…。』
と涙を流しながら、窓の外の流れるネオンを無意味に眺めた。
それから三日間、当麻のケータイはまったく通じない。

当麻の行方

あれから四日目。健人は毎日当麻のケータイに電話をし、マンションにも出掛けたが、
ケータイは着信拒否され、マンションには戻ってる気配がない。
仕方ないので当麻のマネージャーに電話して、それとなく様子を伺うことにする。

「あ、豊田さん？健人です。お疲れ様です！
あのぉ、当麻って今、仕事中ですよねぇ。え？実家に帰ったぁ？
いつですか、それ！昨日の夜？え？おばさんの具合が悪いの？
大丈夫なんですか？そう…。はい、わかりました、メールしてみます。
あ、俺ですか？今日はこれからロケで、横浜に向かってるとこです。
はい、ありがとうございます！じゃ、頑張ってきまーす！」

当麻が実家に帰った？ほんとかよ？

「どうしたんだ？当麻。実家に帰ってるって？」
車を運転してるマネージャーの今野が、心配そうに聞いてきた。

「あ、はい。なんか、お母さんが具合悪くて病院に運ばれたらしくて。
大丈夫みたいなんだけど…。」

「お前、当麻となんかあったの？」「えっ？」
突然、今野が振り向いてそんなことを言うので健人は焦った。

「今野さん！前向いて運転してくださいよ！危ないなぁ、もう！」

「すまんすまん！けどお前、二、三日前からおかしいよ。
あ、当麻とじゃなくて、雪見ちゃんとなんかあったとか？」

「な、なんにもないですよ！ただ当麻とは連絡が取れなかったから、ちょっと心配になって。おばさんが大丈夫ならそれでいいんだけど…。
あ、今日って何時終了予定でしたっけ？」
「東京到着は七時ってとこかな？あ、その後に事務所に呼ばれてるよ。
クリスマスのミニコンサートの話らしいけど。」

「そう…。じゃ、今日も帰りは十時過ぎるかな…。」
健人は、今野に聞こえないように小さくため息をつき、窓の外を見た。

ゆき姉、大丈夫かなぁ。ちゃんと仕事行ったかなぁ。
いつになったらゆき姉と一緒に暮らせるんだろ…。
そんな思いのため息だった。

あの日あの時…。
当麻さえ『どんべい』に現れなければ、お酒を飲みながら楽しく雪見のインタビューに答えていただろう。
インタビューが終った後はきっと、いつ雪見んちに移ろうか、と照れ笑いしながら話し合ったに違いない。
いや、もしかしたら、
「インタビューはまた今度にして、これから取りあえずの荷物を持って
ゆき姉んちに移ろう！」
ってことに、なってたかもしれない。

なのにあの時、当麻が来たから…。

その頃雪見は、いつも通り編集部にいた。
あれ以来ふさぎ込み、辛うじて編集部に出社はするものの、仕事が手に着くはずもない。
家に帰ってからも、健人が来ようとするのさえ拒み、
一人きりでずっと考え事をしては、涙を流す夜を過ごしていた。

当麻にキスされたことに泣くわけではない。
健人と当麻の親友関係を、自分が壊してしまった…、という
自責の念に押し潰され、もがき苦しんで流す涙であった。

今日十月二十日は『ヴィーナス』１２月号の発売日。
健人、当麻と三人で沖縄ロケを行なった、あの特別グラビアがいよいよ
発売される日なのだが、今の雪見にとってそんなことはもう、どうでもよかった。
と言うよりも、今三人で仲良く写ってる写真など見てしまったら
即、涙が溢れるに決まってる。
なのに朝からみんなが次々と、『ヴィーナス』片手に雪見のデスクを訪れて、
三人のページを開いては、賞賛の声を雪見に投げかける。

「凄いですよ、雪見さん！さっきからずっとファクスやメールが殺到してます！
みーんな、このページに対するものばかり！

初めて雪見さんが登場した先月号も凄かったけど、今月号は更に上行く
大反響です！」

「そうなんだ…。それは良かったね…。」

「なんですか！その、気のない返事は。おかしいですよ、ここんとこ。
何日か前から、一度も笑顔の雪見さんを見ていない。
どうしちゃったんですか？しっかりして下さいよ、まったく！」

何を言われても、ひとつも心に入ってこない。
ほんと、どうしちゃったんだろ、私…。
こんな事じゃダメなことぐらい、よく知ってる。ちっとも前に進んでない事も…。
だけどどうしたら良いのか、ひとかけらのヒントも見つけられずにいた。

その日の夜七時。
「済みません！これから事務所に呼ばれてるんで、今日はお先に失礼します。」
そう言って雪見は編集部を退社した。

お昼に健人の事務所、いや雪見の事務所から連絡があり、
夜七時頃、話があるので事務所に来い、との事。
何だろう？まさか健人くんとのことがバレて、写真集がご破算になったとか？
それとも、当麻くんとのキスがバレたとか…。
タクシーの中であれこれ考えて、また雪見は泣きそうになっていた。

久しぶりに訪れた所属事務所。
未だ、自分がここのタレント兼カメラマンであることに、違和感を覚える。
きっと、いつまで経っても馴染むことはないだろう。
だが、馴染めないからこそ、来年の三月一杯までという期限を一生懸命、全力で頑張ろうと心に決めていたはずだ。

「おはようございます！」
昼でも夜でも「おはよう！」と挨拶するのは、学生時代のファストフードのバイトで経験済みだ。
呼ばれている会議室へと、ドキドキしながら進んで行く。

「失礼します！」ノックをして会議室のドアを開けると、そこには見覚えのある顔がこっちを向いて、ニコニコしていた。

「えっ？当麻くんのラジオのプロデューサーさん？どうしてここに？」

訳が解らず入り口に立ち尽くしていると、後ろから誰かがやって来た。
横浜ロケから戻ったばかりの、健人と今野である。

「えっ？ゆき姉！？それに三上さんも！一体どうなってるの？」

健人が目をまん丸にして驚いている。それはこっちが聞きたいセリフだ。
なんでここに私が呼ばれたの？事務所は何を企んでるわけ？

健人と久しぶりに目を合わせると、健人が嬉しそうににっこりと微笑んだ。
その笑顔は以前と何一つ変わらずに、雪見にだけ注がれている。

健人の笑顔の魔法にかかり、雪見は少し自分を取り戻した。

この人の隣りにさえいれば、私は大丈夫だったんだ！
ちゃんと前を向いて歩いて行こう！

新たなスタートライン

「よし！みんな揃ったようだな。じゃ、始めようか。」

そう声を上げたのは、この芸能事務所の若き常務取締役、小野寺だ。
最年少で常務に昇進したやり手だが、役員になっても現場第一主義の、
頼れる兄貴のような存在だった。

「えー、今日集まってもらったのは、健人のクリスマス限定ライブの話ともう一つ、
いい話だぞ！健人、喜べ！」
小野寺は健人の方を見て、ニヤッと笑う。

「な、なんですか？いい話って…。」
健人はそのいい話に、まったく心当たりが無い。一体何だろう？
しかも、なぜ雪見までもがここに呼ばれてるのかさえ、まだ聞いてはいない。

「健人。念願のＣＤデビューが決まったぞ！
この三上さんが、全面的にプロデュースしてくれるそうだ！」
小野寺の隣りに座ってる、『当麻的幸せの時間』プロデューサーであり
凄腕音楽プロデューサーでもある三上が、にっこりと微笑んでうなずいた。

「えっ？ほんとですか！ほんとに俺がデビューできんの！？」
健人のビックリ嬉しそうな顔！

「ただし、だ。デビューの最初は三人組のユニットで、って事になった。
あとのメンバーは、今日は来れなかったが当麻と、それから雪見さん。
あなたです！」

「ええっ！？」

健人と雪見が同時に驚きの声を上げた。
雪見にとっては、まさに青天の霹靂！
タクシーの中で考えてたここに呼ばれた理由とは、まったくかけ離れていた。

「ち、ちょっと待って下さい！
私は三月一杯までしか、ここにはいないんですよ！それに今は編集作業に追われていて、そんな大変な仕事は無理です！」

「あなたの写真集の仕事は、健人へのインタビューと当麻からのコメント取りで終了です。
あとはプロの編集者に任せなさい。」

「そんな…。」

そうしなければならないことは薄々解っていた。
私はあくまでもカメラマン…。

本来は健人たちへのインタビューでさえ、雪見の仕事ではないのだが、
無理を言ってやらせてもらうのだ。
でもこの写真集だけは、最後の最後まで編集者と共に携わりたかっ

た。
雑用でも何でもいい。印刷所に回すその瞬間までを見届けたかった。
それは自分一人のわがままであると、充分解ってはいたが…。

子供の頃から歌うことが大好きで、小学校の卒業文集には将来の夢を書く欄に、
『歌手！』と迷わず書いた記憶がある。
だが、今その夢が実現したところでちっとも嬉しくはない。
それはすでに過去の夢だから。もうどうでもよい夢だから…。

雪見が視線を落とし、何かを考えている。
健人はその隣で、浮かない顔の雪見をぼんやりと見つめていた。

小野寺が、二人の様子を見ながら話を先に進める。

「三上さんからデモテープを聴かせてもらったが、雪見さんがめちゃくちゃ
上手くて驚いたよ！すでに完成されたアーティストのようだ！」

「デモテープ？デモテープなんて録ったこと無いですけど…。」
雪見が不思議そうに小野寺に聞く。

すると三上がバツ悪そうに頭をかきながら、「ごめん、俺だ。」と言って
テーブル上のＣＤプレーヤーのボタンを押した。
そこから流れてきたのは、雪見が以前当麻のラジオで無意識に歌った
『涙そうそう』だった！

「えっ！これって、もしかしてあの時の…。」

「そう。これを聞いた時から、ずっとあなたの声が頭から離れなくなった。
そう言う歌声って、あなたにも経験があるでしょ？
たった一度聞いただけなのに、『これって、誰が歌ってるんだろう？』
って、心を捉えて離さない歌声。あなたの声が、まさにそうなんです。
で、これを聞いた時に俺の決意は固まった。」

そう言ってもう一度ＣＤをかけると、今度は健人たちと三人で歌ってる
『ＷＩＮＤＩＮＧ　ＲＯＡＤ』が流れた。

「えーっ！これってもしかして、この前スタジオで本番前に練習してたやつ？
録ってたの？」今度は健人が、驚きながらも嬉しそうな声を上げる。

「これを三上さんから聴かされて、お前達のＣＤデビューを打診されたんだ。
健人も当麻も、一人ずつじゃちょっと弱いかなぁと思ってたんだけど、
三人で歌ったら凄くいい！
なんでこんなに、三人の息がぴったり合うわけ？難しい曲なのに。」

「え、えっ？」

小野寺からの問いに健人に雪見、それとマネージャーの今野が、内心ドギマギする。
が、健人が持ち前の演技力でなんとか乗り切った。

「そりゃ、俺とゆき姉は生まれた時からの付き合いだし、当麻は俺の大親友ですよ！
息が合って当り前じゃないですか！ねっ、ゆき姉！」

突然振らないでよ！と思いながら、健人をジロリと見る雪見。
しかし、ここでうろたえては怪しまれるので、努めて冷静にいつも通りの声で話す。

「健人くんはもちろん、今では当麻くんも、私の弟みたいなもんですから
仲良くさせてもらってます。でも、当麻くんはなんて言ってましたか？
断ったんじゃないですか？」
今のこの三人の関係を考えるなら、断っても当然だと思って聞いてみた。

「当麻？当麻は大喜びしてたよ！
昨日の夜、当麻からお袋さんのことで、沈んだ声で電話をもらったんだが、
その時に、『三人でＣＤ出す話が来てるけど、お前はどうしたい？』って聞いたら、いきなり声が明るくなりやがってさ。
『絶対やらせて下さい！俺、頑張りますから！』って、病院の中なのに
でっかい声出して。看護婦さんに注意されてる声がしたよ。」
そう言って小野寺は可笑しそうに笑ってる。

当麻がそんなことを…。

健人も雪見も、同じような思いでいた。

当麻は、三人の仲を元通りにしたがっている…。
あれ以来、健人からの連絡を拒絶しながらも、きっと自分一人になって
必死に心を修復しようと努力しているのだ。

そう考えると、スッと雪見の気持ちにも変化が訪れた。
全てを洗い流して、三人の関係を元に戻すチャンスは今しかないのではないか。

「やります！やらせて下さい！これって、写真集の宣伝にもなりますよね？
写真集の話題作りになるのなら、もう、何だってやっちゃいます！」

いきなり雪見が立ち上がったもんだから、みんながびっくりしている。
健人は隣で雪見を見上げながら、胸が熱くなってきた。

『またゆき姉は、俺のために頑張ろうとしてるんだね。
ありがとう、ゆき姉！愛してる。』

健人も立ち上がり、「よろしくお願いします！」と笑顔で頭を下げた。

また三人の、新たなスタートラインがここに引かれた瞬間だった。

CDデビュー決定！

「よしっ！じゃあ決まりだなっ！三上さん、あとはうちの三人を全面的に預けますので、
どうかよろしくお願いします！」
小野寺が隣の三上の方を向いて、深々と頭を下げる。

「いや、こちらこそ、こんなに凄い三人を私に任せてくれて、本当にありがとう！
この事務所において、いや日本の芸能界にとって、健人と当麻がどれほど大事な存在であるかは、重々承知しているつもりです。
もちろん雪見くんの才能も、決して潰すようなまねだけはしたくない。
だから私も、全力を注いで三人をプロデュースします。」

しかし、いかんせん時間がない。
1月5日CDデビューとなると、あと二ヶ月半後だ。
と言うことは、遅くともあと一ヶ月でレコーディングして、
発売までに一回でも多く流さないと。」

「あと一ヶ月でレコーディングぅ！？それって無理じゃないっすかぁ！？」

「無理です！絶対無理！だって健人くんと当麻くんは、いつも歌のレッスン
受けてるからいいけど、私はド素人ですよ！！無理に決まってます！」

健人と雪見が必死になって訴えたが、三上はニコニコして聞いてる

ばかり。
そして自信と確信に満ちた、落ち着いた声で二人に言って聞かす。

「大丈夫！俺がそれで行けると思ったから、デビューをそんな早くに設定したんだ。
このメンバーじゃなかったら無理だよ、もちろん。
でも、お前達なら行けるんだよ。もっと自分に自信を持て！
一体、俺様を誰だと思ってんの？」
それだけ言うと、三上はニヤッと笑って白い歯を見せた。

「けど自信を持てって言われても…。
私には、どこからもそんな自信なんて出てきません…。」
さっきの勢いはどこへやら、雪見は一気にへこんでいる。

「自信はなくても、やる気はあるんだろ？だったらそれで充分だ！
その代り、かなり厳しい一ヶ月にはなるけどな。
よし！決まったからには時間がもったいない！
まずはここのレッスンスタジオを借りて、軽く声を聞かせてもらおうか。」
三上がソファーを立ち上がった時、健人が待ったを掛けた。

「ちょっと待って下さい！あのぉ、デビュー曲って、もう決まってるんですか？」

「おぉ！肝心な事を忘れてた！すまんすまん！
曲はすでに何曲か出来上がってはいるが、まだ決定はしていない。
バラードっぽいのがいいか、アップテンポなのがいいか、もう少し考えさせてくれ。
それと歌詞がまだ付いてないから、それも急がないとならん。」

「えーっ！じゃあ本格的にデビュー曲の練習を開始するのって、まだ先じゃないですか！
ホントにそんな短期間で、上手く歌えるようになるのかなぁ…。
俺も当麻も、ドラマの撮影が毎日みたいにあるし、合間に他の仕事も入ってるし。」

健人は、この先の超人的忙しさを想像し、段々と元気がしぼんでくる。
一方雪見は、さっきから隣で何か考え事でもしてる様子だ。

「あのぅ…。」雪見が三上に小さく声をかける。
「あの…、そのデビュー曲の歌詞、私に書かせてもらえませんか？」

「ええっ！？」全員が一斉に雪見の顔を見た。
雪見は、他の誰も視界に入れずに真っ直ぐと、三上だけを真剣に見据えてる。

「時間が無いのは解ってます。でも、せっかくのデビュー曲なんだから
少しは思い入れのある曲にしたいんです！
私に三日間時間を下さい。必ず三日で書き上げます！お願いします！」

隣で健人は、『あの時と同じ瞳だ！』と思いながら雪見を見つめていた。

『俺の写真集のカメラマンを、自分にやらせてくれ！って、この場所に
直談判しに来たあの時と、まったく同じ目をしたゆき姉がここにいる…。

この人は、また俺のために突っ走ろうとしている…。』

困ったことに、雪見の姿が徐々にぼやけてきてしまった。

『ゆき姉がそんなこと言うから…。』

すると、雪見の真剣な表情をじっと見ていた小野寺が、サッと膝の向きを変え、
隣りに座る三上に突然頭を下げた。

「三上さん！僕からもお願いできますか！
僕も出来ることなら三人のうちの誰かに、歌詞か曲のどちらかでもオリジナルな曲を作らせたかったんです。
デビュー曲がまったくの他人が作った曲と、メンバーが作った曲とでは
ファンの反応が全く違う。
だが、どう考えても今回のデビューに間に合わせて、健人か当麻が曲を
作ってる時間など無いと諦めてた。
けど雪見さんが、もしデビュー曲にふさわしい良い歌詞を書けたなら、
それを使ってやって欲しいんです！」

「私に、その出来てる曲のデモテープを、貸していただけませんか？
時間がないので曲にピッタリと合う文字数で、歌詞を作っていきます。
三日後にここで聞いて判断して下さい！ダメだったら諦めます！」
雪見も必死に食らいつく。

しばらく腕組みをして考え込んでいた三上が、にっこりと微笑んで

GOサインを出した。
「いいでしょう！ただし、本当に三日間しかあげられませんよ！
こっちはこっちで、別の歌詞も用意させてもらいます。
あなたの歌詞がダメだった場合は、即、こっちの歌詞でレッスンを開始しなければならない。三日後からレッスン開始です！
ここのスタジオに、仕事の終った者から駆けつけて指導を受けてもらう。
かなりキツイ毎日になるが、どうにか一ヶ月間体調管理をしっかりして
乗り切って欲しい！じゃ、皆さんもよろしくお願いします！」

そう言って三上は立ち上がり、全員と握手をする。
雪見には両手で手を握り、「期待してるよ。頑張って下さい！」と笑顔で言った。

そのあとはすぐにスタジオに移動し、健人と雪見は一曲ずつ、一番得意な曲をみんなに歌って聴かせる。
健人はミスチルの『花火』を、雪見は少し考えてやはり歌い慣れた歌、
中島美嘉の『雪の華』を選択した。

健人の生歌は小野寺も今野も、レッスンやイベントで何度も聞いているが、
雪見の生の歌は今初めて耳にする。
カラオケのイントロが鳴り出した時、三上が二人に「感動的ですよ。」
と、小さくささやいた。

雪見が歌い終わった時、健人は勿論のこと、雪見の歌に対して無防備だった
三上、小野寺、今野の三人は、ただの涙もろいオッサンになって必死に涙をこらえている。

雪見の声が、また魔法をかけた瞬間だった。

元通り

「じゃ、お疲れ様でした！今日から頑張って、良い詞を書きますね。三日後にまた！」

雪見はバタバタと慌ただしく、だが笑顔で事務所を後にした。
雪見の歌を聴いた小野寺たちが、とても褒めてくれたからだ。

「素晴らしいじゃないか！危うく泣くとこだったよ！
まさか君の歌に、ここまで心を揺さぶられるとは…。
健人も知ってたんなら、もっと早くに教えろよな！
そしたらデビューも早くにさせたのに。」
小野寺が冗談で、教えなかった健人が悪い！と笑って言った。

「いや、だって、まさかこんな展開になるなんて、考えてもいなかったから…。
それに前にゆき姉、津山泰三に歌手にならないか？って声かけられてもキッパリと断ってたし…。」

「健人くん、だめっ！」雪見が慌てて健人を制した。
『秘密の猫かふぇ』で会った人の話題など、外で漏らすと大変な罰則が待っている。
健人が、ヤバイ！って顔をした時にはすでに遅かった。

「おい！あの津山泰三に、そんなこと言われたのか！？
いつだ！いつ、あんな大物俳優に会ったんだ？しかも歌を聴かせたのか？どこで？」

小野寺が、矢継ぎ早に健人に聞いてくる。
三上も色めき立って、雪見を少々あきれ顔で見た。

「あの津山さんのスカウトを断るとは、何ともまた勇気ある…。
そんな人の話、今まで聞いたことがない！で、どこで歌を聴いてもらったんだい？」

雪見が何とかこの話題を早く終らせようと、適当なことを言う。
「あー、えーと、その辺のカラオケボックス？」

「津山泰三が、その辺のカラオケボックスなんかに行くんだ！」

「い、いや、新宿のスナックだったかな？
いやぁ、私もお酒が好きで、あっちこっち飲み歩いてはこの歌、歌うから
もうどこで会ったのかも記憶に無いです！
あ！もうこんな時間！早く帰って作詞しないと、間に合わなくなっちゃう！
じゃ、お疲れ様でした！」

健人、今野と一緒に、地下駐車場までのエレベーターに乗る。

「すっかり遅くなっちゃったね。なんか慌ただしい一日だった！」
健人が、ふうぅ…とため息をつきながら、エレベーターの壁に寄りかかる。

「最後に慌ただしくしたのは健人くんだよ！」
前に立つ今野に聞こえないように、雪見が健人の耳元でささやくと、

耳が弱点の健人は思わず大きな声で、「やめっ！」と身をよじった。

「なーに、俺の後ろでゴチャゴチャと、二人でいちゃついてんだよ！
今日から三日間は、雪見ちゃん忙しいんだから、健人は邪魔しないで真っ直ぐ帰れよ！」

今野は後ろを振り返らずに、頭上のエレベーターのパネルだけを見上げながら
二人に言った。「ほら、着いたぞ！」

雪見は久々に今野の車に乗り、マンションまで送ってもらった。
降りてから窓越しにお礼を言う。

「じゃ今野さん、ありがとうございました！またこれからお世話になりますね。
よろしくお願いします！
健人くんは、私なんかよりずっと忙しくて大変になるんだから、
三上さんも言ってたけど、体調管理をしっかりね！ちゃんと食べてよ　！」

「はいはい、わかってますよ！まったく母さんが言うセリフと一緒じゃん！
ゆき姉こそ、俺たちのためにいい詞を作ってよ。楽しみにしてる。」

健人と雪見は、『俺たち』と自然に出た言葉によって、当麻の存在を思い出した。
当麻と三人でデビューするんだ…。
当麻、どうしてるかな…。

「あ！俺も降りる！ちょっとゆき姉んちに、忘れ物を思い出した！」

健人がいきなり車のドアを開け、ぴょんと飛び降りた。

「おい、健人！雪見ちゃんの邪魔すんなって言っただろ！？
なーにが忘れ物だよ！下手くそだったぞ、今の芝居！
しょうがない奴め。明日も八時に迎えに行くんだから、
とっとと忘れ物とやらを捜して帰れよ！じゃあ、お疲れっ！」

健人と雪見が、今野の車に頭を下げて見送る。

「ほーんとに下手くそだった！今の芝居。大丈夫かなぁ、今度のドラマ。」
笑いながら雪見がマンションの入り口を入ると、慌てて健人もその後ろに続いてドアをくぐった。

エレベーターに二人で乗り込むと、健人はすぐに
「ほら！一つめの忘れ物を見つけた。」と言いながら、雪見にキスをした。

「これが一つめの忘れ物ってことは、まだ忘れ物があるわけ？」
健人と唇を離したあと、顔を近づけたまま雪見が聞いてみる。

「まだいっぱいあるよ！あれもこれも！
一番早くに見つけたいのは、俺の晩飯とビールかなっ？」
茶目っ気たっぷりに健人が言って、また小さくキスをした。

「やばっ！ビール、冷やしてあったっけ？」
「えーっ！冷蔵庫に入ってなかったら俺、泣いちゃう！」

シーンと静まりかえった夜のマンションのエレベーターに、二人の笑い声がこだまする。

四日ぶりに聞いた、雪見の楽しそうな笑い声だった。

「ただいまぁ！めめ！ラッキー！健人くんが来たよー！」

寝ていたらしい二匹は、伸びをしながら玄関に出迎えた。

「おーい、ラッキー！また大きくなったな！

もう赤ちゃんじゃなくて、すっかり子供になっちゃった。早いなぁ！」

健人がラッキーを抱きかかえてソファーに座ると、その隣りにめめがぴょん！と飛び乗った。

代わる代わるに頭を撫でてやると、二匹は気持ちよさそうに目を閉じて

喉をゴロゴロと鳴らし続ける。

滑らかな手触りと温かな温もりが、指先から全身に伝わってきて

健人は、徐々に身体の力が抜け、癒やされていくのがわかった。

そこへ雪見が、キッチンから料理とビールを運んで来て、ソファーの前に座る。

「お待たせ！ちゃんとビール冷えてたよ！良かったね。

さ、お腹空いたから早く食べよ！いただきまーす！」

遅い夕食を取りながら、二人は色んな事を話し合う。

突然決まったデビューは、昨日までの、健人を遠ざけるようにして暮らしていた雪見を、

元に戻してくれた。

もう、あの日のことなんかに、かまっている暇など無くなったからだ。

あと一つ、早くに元通りにしなければならないことがある。
当麻との関係だ。
三人でのデビューが決まった以上、このままでいる訳にはいかない。
健人は、雪見のいる前で当麻に電話をするために、さっきここで車を降りたのだ。

「当麻に電話、つながるかなぁ…。」

健人は、残りのビールを飲み干し深呼吸を一つして、
握り締めた手の中のケータイを開いた。

当麻への電話

「あ、当麻？俺だけど…。久しぶり。おばさんの具合はどう？
あぁ、豊田さんに聞いた。病院に運ばれたって…。
そう、何でもなくて良かった！
心配してたんだ、ずっと。携帯が繋がらないから…。

あのさぁ。小野寺さんから話を聞いただろ？デビューの話。
今日、ゆき姉と呼ばれて三上さんに会ってきた。
一ヶ月後にレコーディングだって。
で、デビュー曲の歌詞を、ゆき姉が三日間で自分に書かせてくれ、
って
また直談判しちゃった。
ほーんと、いっつもこうなんだから、この人は…。
自分で自分を忙しくする天才だね、まったく。

ゆき姉ね、俺たちの大事なデビュー曲を、他人なんかに作らせてた
まるか！
って、もうパソコンに向かって書き始めてるよ。
そう、今、ゆき姉んちにいる。

俺たち…。一緒に暮らすことに決めたんだ…。

今はまだバタバタしてるし、すぐには無理だけど
近いうちに、俺がゆき姉のマンションに移るから。
いや、俺のマンションはそのままにして、取りあえずの物だけ運ん
で。
あんなに一杯の服ゆき姉んちに持ってったら、ラッキー達の寝床が
無くなるよ！

当麻にだけは先に伝えておこうと思って…。

三人でのデビューが決まった以上、俺たち、グダグダやってる暇なんてないよね。

ラジオの課題曲だって、まだ全然練習してないし…。

明日には東京、戻って来んだろ?

あさってのラジオの後にでも、久々にカラオケ行かない?

あ、ゆき姉が、『それまでに歌詞が完成してたらね!』だって!

別に俺たち、二人で行ったっていいもんな!

あははっ!ゆき姉、怒ってる!

『あんた達の歌を書いてんだからねっ!』だって。

仕方ないから、ゆき姉が書き終わってからにしようか。

またあとで、色々文句言われそうだから。

俺…。デビューが当麻とゆき姉の三人で出来て嬉しいよ。

三人でいれば、怖いものなしだもん。どんなに大変でも頑張れる。

当麻は?そう…、良かった!三人が同じ気持ちなら大丈夫だね。

頑張ろうな!昔二人で話してた夢が叶うんだから…。

まぁ、当麻と二人でデビュー!って夢に一人加わっちゃったけど。

明日、気をつけて帰って来いよ!おばさんによろしく伝えて。

じゃ、また…。」

健人は長い電話を切って、はぁぁ…とため息をついた。

当麻は、多くを語りはしなかったが、少しだけ笑ってくれた。

何とか三人の仲を修復できそうだ。
そう思うと一気に肩に入ってた力が抜け、心地よい疲労感の中で
徐々に眠気が襲ってきた。

雪見はと言うと、健人に背を向け、デスクの前でパソコンとにらめっこ中だ。
健人が当麻に対して、何をどう伝えるのか、始めはハラハラしながら
電話に耳を傾けていた。

一緒に暮らすという事も、いつかは伝えなければならない。
ならば事後報告するよりも、早くに伝えておこう。
当麻は俺の親友だから…。
電話をかける前、健人はそう言って自分を納得させていた。

当麻がショックを受けないはずはなかったが、隠しておいて後で判るよりも
その方がよっぽど良いと、雪見も自分に言い聞かせる。
そしてどうやら上手く心を伝えられたようなので、雪見は安心して
作詞に没頭することにした。

疲れているはずなのに、なんだかやる気が湧いてくる。
よし！絶対にいい詞を付けてやる！
雪見は三上から借りたデモテープを、ヘッドフォンで聴きながらイメージを膨らませ、
聴いてくれる人に想いが届くよう、一言ずつ丁寧に言葉を選んでいった。
時が経つのも忘れて…。

「うーん！ちょっと休憩しよう。健人くん、コーヒー…。

あれ?寝ちゃってる?そうだよね、疲れたよね今日は…。
まっ、いいか。明日の朝、送ってあげる。
お休みなさい。大好きな健人くん!」

そう小さな声で言って、雪見はソファーの上で寝てしまった健人に
毛布を静かに掛けてやり、頬にお休みのキスをそっとした。
それからコーヒーを入れて再び健人の側らに座り、その綺麗な寝顔を
ジッと見つめながら、今日一日を思い起こしてみる。

編集部にいた夕方まで、私はあの出来事を引きずって四日間を過ごした。
何もかもが宙ぶらりんのまま、どこをつかんで立ち上がればよいのかも
わからずにいた。
それが、何時間か前に突然のCDデビューの話によって、すべてが清算され
健人との仲も当麻との仲も、必然的に復元せざるを得ない状況に…。

元通りの関係に戻れるのは嬉しいが、今、冷静になって考えてみると
私がCDデビューする意味はどこにあるのか。
四月にはまた猫カメラマンに戻る私が、一月にデビューしてどうしようと言うのか…。
そんなこと、あの時は深く考える時間も与えられないまま、
流されるようにしてOKしてしまった。
それで良かったのか?これから私はどうなって行くの?
考えれば考えるほど、不安は際限なく広がってゆく。

だが今、穏やかな健人の寝顔を眺めていると、健人には素直に
『夢が叶って良かったね!』と言ってあげられる。

そうか。私は大好きな人の、夢の手伝いが出来ればそれでいいんだ…。

自分がどうのこうのじゃなく、健人が夢を実現するためのサポートを近くでしてあげられれば、それだけで充分私も幸せなんだ！

やっと自分の中で理由が見つかり、雪見はさっきまでとは違った気持ちで
急いでパソコンの前に座り直した。

よーし！世界一素敵な歌をプレゼントしてあげる！

大好きな大好きなあなたと、そしてあなたの大切な親友へ…。

雪見の涙

「う、うーん。あれ？俺、また寝ちゃったのか…。ヤバっ！もう朝じゃん！
なんだ、ゆき姉もこんなとこで寝てるよ、風邪引くのに。
あ！歌詞、出来上がってる！頑張ったんだ、ゆき姉。どれどれ？
え？これって…。俺と当麻の事…？」

その歌詞は、一番に当麻のこと、二番に健人のことを書いてあるような
気がする。
今の二人に重なって、読み進めるうちに段々と胸が熱くなり、
自然と涙がこみ上げてきた。

ふと、雪見が突っ伏して眠るパソコンの横を見ると、そこには昨日発売したばかりの
『ヴィーナス』が、雪見たち三人のページを開いたまま置いてある。
それは石垣島で撮影した、あの時のグラビアだった。

健人も昨日は一日忙しかったので、まだ見てはいない。
そーっと手を伸ばし、本を手に取る。
そこには、溢れる笑顔で心の底から幸せそうな顔をした健人、雪見、
そして当麻の三人が、愛穂のカメラによって鮮やかに写し出されていた。

『そう…。この時は毎日が楽しくて仕方なかったなぁ。
三人でバカやって、笑い転げて、一晩中おしゃべりして。
竹富島の夕日を見て、当麻と二人で泣いたっけ…。
またあの時みたいに、三人でどっか行きたいな…。』

健人は、グラビアを一ページめくって眺めるごとに、自分の隣りにはこの二人の存在が必要不可欠なんだ、と改めて確信する。

『絶対、ゆき姉のこの歌でデビューしたい！』健人はそう強く願った。

翌日の金曜日。今日は当麻のラジオに健人と雪見が出演する日　。当麻に会うのはあの日以来で、お互いが朝から少し落ち着かなかった。

だが一つだけ、救われることがある。それは二週間前。次回健人たちが出る時にやって欲しい事を、リスナーに募集したところ一番多かったリクエストが『三人でお酒を飲みながら話して欲しい！』というものだった。

それに応えて今日の放送は、題して『予測不能の飲み友パーティー！』という企画になっていた。

初っぱなから、乾杯で始める予定である。

気まずい三人にとって、お酒の力を借りられると言うのは有り難い事で、

そのお陰で三十分間、どうにかやって行けそうな気がした。

放送開始一時間前の午後四時。先ずは当麻がスタジオ入りする。

いつもと違って緊張気味なのにプロデューサ　ーの三上が気付き、

当麻に声を掛けた。

「どうした?当麻。いつもより元気が無いけど、お袋さんの具合でもまた悪くなったか?」

「いや、大丈夫です。済みませんでした、家の事で心配かけちゃって。
母さんも月曜には退院出来そうなんで、もう心配ないです。」

「だったらいいけど。明日からレッスン開始だって聞いてるか?」

「あ、はい、聞きました。デビュー曲も決定するって。
三上さんにはほんと、お世話になりっぱなしで…。
また歌の方でもよろしくお願いします!」

「こっちこそ、久々の大型ユニット誕生の瞬間に立ち会えるんだから、
ワクワクしてるよ!
デビューまでかなりキツイと思うけど、みんなで一緒に頑張ろうな!」

「はい!」

当麻は、三上と話しながらもチラチラと、ドアの方を気にしてた。
次に来るのは健人か、雪見か。入ってきたら、なんて声を掛けよう…。
あれこれ頭で考えるうちに、ドアが開いた。健人だ!

「よぅ、お疲れ!お袋さん、大丈夫だった?」

最初に声を掛けたのは、健人の方が先だった。
健人も、ここへ来る車中で悩んでの第一声である。

「う、うん。月曜に退院できるって。色々…、心配かけてごめん。」

「いやいや。もう心配なんかしないから安心して！
それより、今日は酒を飲みながらって聞いたから、昨日は酒抜いといたよ。
めっちゃ楽しみ！これ、いい企画だねぇ！
けど、ゆき姉はあんまり飲ませちゃうと収拾つかなくなるから、俺たちで
うまくコントロールしないとね。」

健人は、当麻よりも多くしゃべることによって、早く自分を解放しようと思っていた。
実際、一気に話したら気持ちが楽になって、当麻への感情が落ち着いた。

しばらくして雪見がやって来る。
「おはようございます…。」みんなに挨拶するが、明らかに元気がない。
目も、泣きはらしたかのように腫れている。

「どうしたの？ゆき姉。なんかあったの？」
ただならぬ雰囲気をいち早く察知した健人が、雪見の顔を覗き込んで聞いてみた。

「いや、なんでもない…。私の事は気にしないで…。」
口ではそう言いながらも、健人と当麻の顔を見た途端、こらえていた

感情がプツリと音をたてて切れ、止めどもない涙になって溢れてしまった。

「どうしたのさ、ゆき姉！ちゃんと話して！」
当麻が雪見の肩に手を置いて、心配そうに問いただす。

「おばさんが…。竹富島のおばさんが…。死んじゃった…。」

「えっ！」

覚悟していた事とは言え、さっき届いたばかりの訃報に
雪見は、心を落ち着かせる時間もなく、ここへやって来たのだ。

「いつ…。いつ、亡くなったの？」

「今朝だって…。今日のラジオ、楽しみにしてるって…。
楽しみにしてるって昨日電話で言ってたのに…。」

それだけ言うのが精一杯で、あとは声にならなかった。
健人と当麻は、取りあえず雪見を椅子に座らせ、プロデューサーの三上と話をした。

「ゆき姉…、今日は無理じゃないですか？こんな状態じゃ…。
あと本番まで時間が無い。」
当麻が、三上と健人を交互に見ながらそう言う。

「うーん…。そうだな。これじゃ、しゃべりは無理だろう。
仕方ない、今日はお前達二人でやってくれ。少し台本を手直しするから
自分たちのとこだけ、取りあえず目を通しておけ！」

三上が慌ただしく放送ブースを出ようとしたその時、
「待って下さい！」と雪見が、うつむいたまま声を掛けた。

「やります…。やらせて下さい。
約束したんです、おばさんと。私、歌うから聞いててね、って…。

三上さん。お願いがあります。
私に、『涙そうそう』を歌わせてください、オンエアで。
一番最後でいいんです！
最後におばさんの大好きだったこの歌で、おばさんを送ってあげたい…。
お願いします！お願いします！！」
雪見はもう泣きやんで、あとはただ三上に必死に訴えるだけであった。

「わかったよ。今日のエンディング曲は、雪見ちゃんの『涙そうそう』だ！
おい！大至急用意をしてくれ！この前の、三線バージョンでいいね？」

「はい！一生懸命歌います！ありがとうございました！」

乾いた涙のあとには、決意の笑顔がのぞいていた。

鎮魂歌

「本番五秒前！四、三、二…」

「皆さん、こんばんは！今週も『当麻的幸せの時間』がやってまいりました！
一週間元気でしたか？俺はもちろん、元気に決まってるでしょ！
そんじゃ今日のゲストを紹介するね。
今週の相棒はもちろん、皆さんお待ちかねのこの二人です！」

「どうもでーす！めっちゃ今日を楽しみにやって来た、斎藤健人です！
ねぇねぇ、まだ出て来ないの？あれ！」

「私も右に同じく、今までで今日が一番楽しみな、浅香雪見です！
ほんとにいいの？ここでそんなことしちゃって！」

「なに二人で意味深なこと言ってんの、みんなが誤解するでしょ！
二週間ぶりに登場の健人とゆき姉、そして俺の三人でお送りします。
えー本日は、この前皆さんからいただいたリクエストにお答えする第一弾、
題して『予測不能の飲み友パーティー！』と言う企画でお届けします！
なんせ、リクエストで断トツに多かったのが、
『三人で飲みながらおしゃべりして欲しい！』ってリクエスト。
もうすっかり俺たちの酒好きが、みんなに浸透してるようで…。」

「だって、俺たち三人の放送の時って、いっつも酒絡みの話ばっからしいよ、

自分たちじゃ気が付かないけど。
この前飲みに行ったら、友達にそう言われた！」

「ほらほら！言ってるそばから酒絡みの話じゃん！健人の友達は正しいです！
大体、ゆき姉が話す話は９９％飲んだ時の話でしょ？」

「失礼しちゃう！それ以外の話だってしてるでしょ！
第一、猫の撮影中の話は酒絡みじゃありませんから！」

「でも、撮影終った後は必ず飲むでしょ？」

「うん、まぁ…。」

こんな感じでスムーズに放送が始まり、本人達はもちろんのこと直前まで泣いてた雪見を心配してたスタッフ一同も、ホッと胸をなで下ろした。

「よし！じゃあ酒を持って行け！三人ともお待ちかねだぞ！」
ディレクターの指示でアシスタントが、ありとあらゆる種類の酒がたくさん乗ったワゴンを、ガラガラと押しながら放送ブースに入って行った。

「わーい！やっと来たぞぉ！えー、凄くない？こんなに飲んでいいの？全部タダ？」

「なに健人がちっちゃい事言ってんの！しかもこんなに飲めるわけないでしょ！
っつーか、こんなに飲んじゃったら放送にならんわ！」

「凄いねぇ！色んな種類を用意してくれたんだ！
マッコリに紹興酒、カクテルにテキーラまである！うーん、迷っちゃう！」

「俺はやっぱ、始めはビールでスタートだな！喉乾いたもん！」

「よし、健人はビールね。じゃあグラスをどうぞ。あとは勝手に自分で注いで！
あ！二人とも言っとくけど、この放送は三十分番組だってことをお忘れなく！
二時間の宴会コースじゃありませんから。」

「そうだった！じゃあ一気に酔えるものの方がいいんじゃないの？
健人くん、ビールじゃ酔えないからあとは違うのにしてよ！
リスナーさん達は、酔っぱらった健人くんがどうなるかに興味があるんだから。
じゃ、私は…と。あ、泡盛がある！これにしよう。すぐ酔えるから。」

「大丈夫？いきなり泡盛のストレート！さすがゆき姉、貫禄が違う！」

健人と当麻は、グラス二つに雪見が注いだ泡盛を見て、そのうちの一杯は
今朝亡くなった竹富島の民宿のおばちゃん、ひさえさんに捧げる一杯なのだな、と思った。

雪見は一つのグラスを自分の前に、もう一つのグラスを隣の空いている
所にそっと置いた。

「じゃ、当麻は何飲む？俺が作ってあげる！」

「いいよ、自分でやるから！健人に作らせたら、とんでもない濃さにするもん！
俺は梅酒のロックにしよ！最近はこればっかだよね、俺って。
じゃあ、とっとと乾杯しよう。時間が無くなる！
じゃ、今日も一日お疲れぇ！カンパーイ！うんめーっ！」

「今のはダジャレ？梅酒を飲んでうんめー！って。オヤジじゃん！」

今日の放送は、合間の曲も挟まずに、おしゃべり中心でいくことになっている。
曲は、最後に雪見が生で歌う『涙そうそう』一曲のみ。
なぜ雪見がこの曲を生で歌うのかの説明は、ＭＣである当麻に一任することにした。

三人は、まるで何事もなく前回の放送から二週間経ったかのように、和気藹々と
聞いている者が、居酒屋にでも三人がいるんじゃないかと錯覚するような、
そんな楽しいおしゃべりを展開してみせた。

お酒も進み、飲み会ならばまだまだこれから！というところだが、
三十分なんて時間はあっという間で、もう早エンディング間近になってしまった。

「えーっ！もうこんな時間！？まだ十分ぐらいしか経ってないんじゃないの　？
時計、合ってる？ディレクターが言うんだから間違いないのか。」

「ねぇ！この企画、三十分じゃ足りないって！また来週もやろうよ！」

「来週はダメだよ！忘れたの？俺たちの課題曲の発表会があるんだから。
この後、行っちゃう？カラオケ。最後の練習をしないと。」

健人と当麻がおしゃべりでつないでる間、雪見はスタンドマイクの前に立ち、
エンディングのスタンバイをしている。

三十分の間に泡盛だけを三杯飲み干したが、少しも酔えなかった。
泡盛を一口、口に含むたび、民宿でおばさんと飲んでは歌った夜を思い出し、涙が滲む。
だが、泣いていては場が白けてしまうので、泡盛と共に涙を飲み込んだ。

「では、そろそろエンディングです。
今日最後にお届けするのは、ゆき姉が生で歌う『涙そうそう』です。
実は今朝、ゆき姉が竹富島のお母さんと慕っていた、民宿のおばさん、
ひさえさんが亡くなりました。
今日のこの番組をとても楽しみにしながら、息を引き取ったそうです。
この曲は、ゆき姉が民宿に滞在中、毎日のようにおばさんにリクエ

ストされて
泡盛を飲みながら歌った、大切な思い出の曲だそうです。
だから今日はゆき姉、泡盛しか飲まなかったんだね…。
大丈夫?歌える?」

「大丈夫だよ。ごめんなさいね、みなさん。
私のわがままで、今日は歌わせてもらうことになりました。
おばちゃん、聞いてる?私の最後の歌だよ!
では、『涙そうそう』です。お聞き下さい。」

雪見はイントロの間、目を閉じて何かを祈っている。

目を開け雪見が歌い出した時、健人と当麻は、沖縄の風が頬を撫でスッと通り過ぎたのを、確かに肌で感じた。

雪見も、おばさんが側らで聴いているのを感じながら、
最後の歌を心を込めて歌うのであった。

愛の歌

昨日はラジオが終った後、本当に三人でカラオケに行った。
明日からはデビュー曲の練習に忙しくなり、これが課題曲を練習する最後のチャンスだったからだ。

いくら番組の中の企画とは言え、ＣＤにしてリスナーにプレゼントする以上、
完璧近くには仕上げたい。
そう言うところは三人とも似ていて、真面目で手抜きが出来ない性格である。

すでに酒が入っているので、テンションはマックスに近い。
着いてすぐに『ＷＩＮＤＩＮＧ　ＲＯＡＤ』をガンガンかけ、何度も何度も繰り返し歌う。
歌えば歌うほど息がぴったりと合い、気持ち良くて楽しくて仕方ない。

「いいじゃん、いいじゃん！最初っから俺らの歌だったみたいじゃない？」
健人が嬉しそうに当麻に聞く。

「ほんとだね！俺たちのデビュー曲も、こんな風に歌えたらいいね！明日でしょ？歌が決まるの。どんな歌になるのかなぁー。
ねぇ、ゆき姉はもう歌詞、書き終わってるの？」

「あったり前でしょ！書き終わってなかったら、こんなとこにいませんって！」

「ねぇねぇ、どんな曲だった？良い曲？」
健人は、あの雪見が書いた詞にどんな曲が重なるのか、明日が待ち遠しかった。

「凄くいい曲だったよ！私が借りたデモテープは、バラード調の曲だったんだけど、
サビがとっても印象的でずっと頭に残ってる。」

「えーっ！ゆき姉だけ曲聴いたの？ずるーい！ちょっとさわりだけ歌ってみて！」
当麻が雪見にねだるが雪見は「だめーっ！」と言って、歌わなかった。

「あの歌は、明日、真っさらな気持ちで聴いて欲しいから…。」

そして今日。いよいよデビュー曲が決まる。
夜八時に雪見は、自分の作った歌詞を三上に見てもらい、
デビュー曲に使ってもらえるかの審判を仰ぐ。
ただし、雪見が作ったのはバラードの一曲のみ。
もし三上が違う曲を選んだのなら、その曲はデビュー曲にはなれないのだ。

雪見は、もう一曲あったアップテンポの曲も聴いてはみたが、
どうも自分たちのイメージとはかけ離れてる気がして、そっちに歌詞を
付ける気にはなれなかったのだ。

日中は当麻の現場を訪れ、健人の写真集用のコメントをもらうことに。
昨日は健人も一緒にいたので無理だった。
ドラマ撮影の合間にコメント取りをするので、何時になるのかはさっぱりわからず、
スタジオの隅で待たせてもらった。
どうやらやっと休憩になったようだ。

「お疲れ様！ごめんね、撮影で忙しいのに。」
こっちにニコニコしながら歩いてくる当麻に、声をかける。

「いや、ゆき姉が俺の現場に来るなんて初めてだから、嬉しいよ！」
当麻は、雪見が来てくれて上機嫌だった。
コメント取りを済ませたあとも二人は、まるで仲の良い姉弟のようにケラケラと笑いながら、時間いっぱいまでおしゃべりを楽しんだ。

その様子を見ていた周りの女優や女性スタッフが、いい思いをするわけがない。
当麻は、他の誰と話している時よりも、明らかにハイテンションで飛び切りの笑顔を雪見だけに見せていたからだ。

当麻はまったく気付く気配は無かったが、雪見はハッと周りの空気を感じ取った。
カレンの二の舞だけはごめん、とトラブルになる前に退散することに。
また夜に事務所で会おうね！と言うと、当麻はまたセットの中へと消えていった。

とうとう運命の時間がやって来る。
雪見は一時間も前に退社して、気持ちを落ち着かせるために
いつものドーナツショップに向かった。
昼間とは違いその時間帯は混んでいて、雪見の指定席は空いていない。
仕方なく、隅の方に空いているカウンター席に座り、カフェオレを飲みながら
鞄から出した手書きの歌詞を、もう一度じっくりと読み返してみる。

『大丈夫！強く願えば叶うんだから…。』自分を鼓舞して席を立った。
さぁ！勇気を出して、みんなに聞いてもらおう！

所属事務所の一つ上の階には、小さな歌のレッスンスタジオが五つ、
大きなスタジオが二つあり、その奥には芝居の練習場も二つあった。
常務の小野寺は、その内の大きな方のスタジオで雪見と三上を待っていた。

雪見が到着後、間を置かずに三上も到着。
「どれどれ、早速出来上がったものを拝見しようか。」
二人に、歌詞を書いた手書きのＢ４用紙を差し出す雪見。

目を通してもらってる間は、生きた心地がしなかった。
が、しばらくすると二人は揃って「これ、いいんじゃない！？」
と、笑顔で言った。

「ほんとですか！？あの、これ、歌ったらもっとよく歌詞が伝わる

と思うんです！
今歌わせてもらってもいいですか？」

「え？もう歌えるの？それは是非とも聞いてみたい！頼むよ。」

デモテープを用意していると、ガチャンとドアを開け、誰かが入って来た。
それは健人と当麻だった！今日だけ何とか早くに上がらせてもらったらしい。

「間に合った？まだデビュー曲、発表になってない？」
二人はそれが気になって気になって、仕事が手に付かないらしい。

「大丈夫だよ！これから雪見ちゃんが歌ってくれるのを聞いて、決定するとしよう。」

「えっ！ゆき姉が歌うの？」健人の言葉に、雪見は笑顔を返事代わりにした。

呼吸を整え、気持ちを集中させる。
一度だけ天井を見上げ、その後視線を真っ直ぐにした。
印象的なイントロのあと、静かに雪見は歌い出す。

はるか遠くに忘れた日々を　きみと一緒に取りに戻ろう

記憶の糸をたぐり寄せ　僕が最初に見たものは
きみの笑顔と　差し出す右手
なのにどうして僕らの右手は
あの時　空（くう）をつかんだのだろう

今なら並んで歩いてゆくのに　今ならもう離さないのに
夢に出てきた　きみのくちびる
「ゴ・メ・ン・ネ」って動いたのかな

まだ間に合う？　もう遅い？
引き返せない道なんて　この世に存在しないから
勇気を出して一緒に戻ろう　遠くに見える　あの日の始めに

夢は強く願えば叶うから　怖がらないで　目を閉じて
きみのまぶたに写った景色を　どうか忘れないでいて
いつか同じ景色が見えたなら　ためらわないで手を伸ばそう

きみの夢は　僕の夢　きっといつか叶えてあげる
記念の写真を　二人で写そう

未来は誰にもわからないけど
ひとつ確かに言えるのは　きみの隣りに僕がいること

緑の風に二人で吹かれて　今より遠くへ飛んで行けたら
きっと　つないだ手の中に　夢のかけらが入っているはず

それは、雪見が健人と当麻に捧げる、愛の歌であった。

雪見が歌い終わったというのに、誰一人として言葉を発する者はいない。
それどころか、背中の停止ボタンでも押されたかのようにみな、身動きさえも出来ずにいる。

雪見の書いた詞が、雪見が歌うことによって命を吹き込まれ印象的なメロディーラインに乗せて、そこにいた全ての者の心にダイレクトに届いた。
それは、すでに完成された永遠の名曲を、生ででも聴いたかのように感動的で、
心の震えが止まらない歌声であった。

それ以前に健人と当麻は、この歌が雪見から自分たちへのメッセージであると気が付き、
雪見の想いが胸に染みて、自然と涙が滲んでいた。

歌の世界から現実に戻り、辺りを見回して急に不安になった雪見は、恐る恐る三上に聞いてみる。

「あのぉ…。私の歌、ダメだったでしょうか…。」

「いや…。」

たったそれだけの返事しか戻ってこない。
隣りに立ち尽くす小野寺にも聞いてみるが、首を横に一度振るだけ。
何も語りはしなかった。

雪見は、やっぱり自分の書いた歌詞ではダメなのか…、と落胆し悲しくなってくる。

その時、健人と当麻のマネージャーが「素晴らしい！」と言いながら、
夢から覚めたようにいち早く拍手をした。
すると、その拍手によって催眠術から解かれたかのように、
三上、小野寺も口々にしゃべり始める。

「いやぁ、ビックリしたよ！
ただのデモテープを渡しただけなのに、こんなに凄い歌になって戻ってくるとは…。
やはりきみは、僕が思ってた通りの人だ　！」

「うちの事務所にあるきみのプロフィールには、音楽関係の事はひとつも書かれていなかったが、何もやってなかったってことはないだろう？」

「いえ、小学中学と児童放送合唱団にいただけで…。
あとはピアノを七年間習ったって事ぐらいです。」

「きみのことを、健人の親戚のカメラマンとしか認識してなかった、俺がバカだった。
三上さんに言われた通りだ！
きみはすでに実力と話題性を兼ね備えた、一人の完成されたアーティストなんだよ！」

雪見は、自分の事を言われれば言われるほど、無性に腹が立ってきた。

歌詞をわかりやすく伝えるために歌っただけなのに、少しも歌詞に対する
評価はなく、ただ雪見の歌を褒めるばかり。
そんなことはどうだっていいのに…。
三人のために書いたこの歌詞が、採用されるかどうかを知りたいだけ。
側らにたたずむ健人と当麻が、気になって仕方なかった。

「あの…。それで、この歌は三人のデビュー曲になれるんでしょうか？」

「いや、それは無理だ。」

三上が、さっきとはうって変わって、冷たく言い放つ。
歌う前には小野寺と二人で、「これ、いいんじゃない！」って笑顔で言っていたのに…。

「だめ…ですか…。」

雪見は、精一杯書いた想いが届かなくて、失恋にも似た悲しみを覚えた。
だが、こうなる可能性もあると言うことは、充分承知の上で無理を言って
書かせてもらったのだ。
ただ単純に、自分の力不足だと諦めるよりほかなかった。
健人と当麻の、沈んだ顔だけが心に痛かったが…。

「わかりました。大事な健人くんと当麻くんのデビュー曲ですもん

ね。
やっぱり、素人がたった三日ばかりで書いた歌詞なんて、今をときめく
アイドル二人組に歌わせることなんて、出来ませんよね！
済みませんでした、貴重な三日間を無駄にして。

健人くんも当麻くんも、ごめんね。
やっぱ一晩で書き上げて、カラオケなんかに行ったのが悪かったかな？
もっと、よーく考えて悩んで書けばよかった。
なんか、溢れるようにスラスラと書けちゃったから…。」

雪見が二人に向かって笑って言うと、健人と当麻は慌てて作り笑いをした。

「なに言ってんだよ！俺はめちゃめちゃ感動したよ！
すっごい、いい歌だった！見て見て！当麻が泣いてるから！」

「そう言う健人だって、今にも号泣しそうな顔で聞いてたくせに！
ゆき姉、マジでいい歌だったよ。俺にとっては世界一の歌。ありがとね。」

当麻はあの歌詞を聴いて、雪見が何も言わずして自分を許してくれたんだ、
と感謝した。
そして健人は、雪見がいつまでも自分の隣りにいてくれると歌ってくれた
そのことだけで、充分嬉しかった。

二人の落胆だけが気がかりだった雪見は、健人と当麻が喜んでくれ

てたことを知り、
やっと笑顔になってさっぱりした気持ちで三上に聞いた。

「じゃあ、早くデビュー曲を聴かせて下さい！
すぐにレッスンを始めないと！なんせ私達、俳優とカメラマンですから。
素人がデビューするようなもんだもの、一生懸命練習しなくちゃ！
健人くんも当麻くんも、当分の間は飲みに行ってる場合じゃないからね！」

「それはこっちのセリフだよ！お酒に関しては、ゆき姉が一番誘惑に弱いんだから！」

三人はすでにテンションいっぱいに、ワクワクしながら本物のデビュー曲の
登場を待っていた。

「よし！じゃあ、もったいぶらずに聞かせるとするか！」
三上がそう言いながら、用意されたデビュー曲をみんなに聴かせる。

それは、もう一曲あったアップテンポな方の曲で、ダンスナンバーのような
アレンジがされていた。

「うわぁっ！メッチャかっこいい！なんか踊りたくなるね！」
高校生の時に、ダンススクールに通っていたほどダンスが得意な健人は、
そう言いながら身体でリズムをとる。

当麻も、「こんなかっこいい歌、スッゲー嬉しいけど上手く歌える

かなぁ？
もしかして、振り付けとか難しかったりする？」と、はしゃいでいる。

「私、歌うのはいいけど踊りは無理！振りを付けながら歌うなんて、どう考えても無理ですから！」
雪見が三上に向かって訴えた時、三上はよく理解出来ない事を口にした。

「この曲は、雪見ちゃんのデビュー曲じゃないよ。」

「えっ？私のデビュー曲じゃない、って…。どういう事でしょうか。」

雪見はもちろんのこと、身体を揺らして曲にのってた健人と当麻もハッと真顔になり、三上の次の言葉を言いしれぬ胸騒ぎと共に待った。

「この曲は、健人と当麻二人のデビュー曲に決めた。
きみのデビュー曲は、さっき自分で歌った曲がそうだよ。」

「おっしゃってる意味が、よくわかりません！
私は、三人一緒にというお話だったからこそ、デビューを承知したのであって、
私一人でのデビューなんて、ただの一度も望んでませんから！」

突然、訳の解らぬ事を言い出した三上に対して、雪見はキレる一歩手前であった！

落とし穴

三上の突然の発言は、そこにいた者すべてに衝撃を与えた。
いや、すべてでは無い。ただ一人、小野寺をのぞいては…。

「どういう事なのか、納得のいくように説明して下さい！
私の聞き間違えでなければ、三人のユニットではなく、
健人くんと当麻くんがデュオで、私はソロのデビューでというように
聞こえましたが？
それって、まったく始めと、お話が違うと思うんですが！」

雪見が語気を強め、三上を睨み付けるような鋭い目つきで言った。
普段は穏やかだが、こんな目つきになった時は大抵人格が変わり
『よくも私を怒らせたわね！』という場合が大半である。
雪見は、理不尽なことを言う人間が大嫌いであった。

健人と当麻も雪見の周りに集まり、三上に疑問を投げかける。

「三上さん。俺もデビューは三人でと思っていました。
それがどうしてこうなったのか、教えて下さい。
昨日のラジオの時だって、一言もそんな事は言ってなかったですよね。」

当麻は、自分が大変お世話になっているプロデューサーであろうとも、
自分たちに対しての、いや雪見に対しての横暴な発言は、断じて
聞き流すことは出来なかった。
それは健人にしたって同じなのだが、今回ばかりは当麻の方が雪見の盾にと、

三上の前に毅然とした態度で立ちはだかる。

雪見は当麻の横顔を眺めながら、こんな時にこんな事を思うのもなんだが、
当麻って十三も年下なのに大人だよなぁ、と感心した。
いやいや、今はそんな事に感心している場合じゃない　！
一刻も早くに白黒はっきりさせなくては…。

「三上さん。私の書いた歌詞に問題があるのなら、プロの方が書いた歌詞を付けて頂いてかまいません。
さっき聞いたアップテンポの曲を、振り付きで歌えとおっしゃるならこれから一生懸命練習します。

私は、三人でなら、歌に挑戦してみようと思いましたが、
一人でデビューせよとおっしゃるならば、このお話はお断りせざるをえません。
なぜなら、それは私が望んでいる事ではないからです！」

雪見はそれだけ言うと、あとは三上の返事を待った。
だが、先に口を開いたのは、三上の隣りにいる小野寺だった。

「雪見さん。きみは自分では、気が付いていないのかも知れないが、素晴らしい才能の持ち主なんだよ。

僕もこの会社に入ってから、多くの歌手志望の子たちを見てきたがいくらなりたいと望んでも、デビューさえ出来ない子が大勢いる。
たとえデビューしたとしても、中央に出て行けるのなんてほんの一握りにしか過ぎないんだ。
どんなに事務所がバックアップしたとしても、だよ。
それはなぜか。すべては天性の才能の有る無しで決まる、シビアな

世界だからだ。
才能だけは、どう事務所がお金をつぎ込んでも、身に付けさせてやることは出来ないからね。

一昔前なら多少歌が下手くそでも、顔さえ良ければそこそこ売れた時代もあった。
だが今は違う。本物の才能と、整った容姿を手にして生まれた者にだけ
道は開けるんだ。
どんなに欲しい！と望んでも、努力をしても手に入れられないものって
世の中にはたくさんあるんだよ。

きみは、誰もが欲しいと望んでいるものを、手の中に握っているんだよ！」

小野寺は、雪見の瞳だけを真っ直ぐに見据えて、そう力説した。
雪見は小野寺の瞳を見て、なんとなく事の輪郭がわかってしまった気がした。

小野寺はもしかして、最初から雪見のソロデビューを計画していたのではないのか。
それを始めから伝えると、即座に断られるのが目に見えているのでまずは健人たちと三人でと安心させ、音楽の方に気持ちを向けておいてから、
三上と説得しようと思ったのではないか。

だったとしたら、健人と当麻は…。
あんなにデビューを喜んだ二人は、罠に仕掛けられた、ただの餌？
いや、そんなことは無いと思いたい。

二人はこの事務所にとって、大事な大事な売れっ子アイドルなのだから。

だが、次に話し始めた三上が、決定的なことを口にした。

「はっきり言うようだが、三人でデビューしたところで売れるのは物珍しい最初だけだろう。

健人と当麻のファンが飛び付くだろうが、次第に雪見ちゃんの存在が鼻についてくる。

別に、雪見ちゃんだからってわけじゃないよ。

どうしたって、自分が好きなアイドルの隣で親しげに立つ同性をファンが厳しい目で見るのは、致し方ないことだ。

反対に、雪見ちゃんに付いた男のファンだって、健人と当麻の存在がうっとうしくなってくる。

結局はどっちつかずになって失敗に終るパターンを、今まで散々見てきたんだ。

だったら始めから、別々に売り出した方が絶対にいい。

健人と当麻は踊れる俳優だから、ダンスをメインにしたデュオで、雪見ちゃんはもちろん、自分で書いたさっきの歌で勝負する！」

三上が熱く力説すればするほど、雪見は反対に冷めていった。

あんなに頼み込んで歌詞を書かせてもらったのが、バカみたいに思えた。

三人の歌だと思ったから、心を込めて書いたのに…。

三上と小野寺は、さっき聞いた雪見の歌が決定的だったと言った。

あの歌を多くの人に聴いてもらいたい、と。

健人と当麻のために作った歌が、結果として自分の首を絞めたのか

…。

雪見は、自分を笑うよりほかなかった。

「フフフッ。まーたやっちゃったんだ、あたし。
自分で掘った落とし穴に、自分で落ちちゃったって訳ね。
もう、今日は穴から這い上がる気力も残ってないから、私帰ります。」

それだけ言うと雪見はバッグを手に取り、みんなが止める声も聞かずに
スタスタとドアから出て行った。

残された健人と当麻は、ただぼんやりと雪見の去った軌跡を、目で追うばかりである。
あんなに楽しみだったデビューも、今となってはどうでもいい事のように思えた。

雪見と一緒じゃないデビューなんて…。

親友の優しさ

スタジオを飛び出した雪見は、廊下を歩きながらケータイを鞄から手に取り、
誰かに電話をかけ始める。

「あ、もしもし、真由子？　私。
今、忙しい？　そう…、残業中なんだ…。
わかった、ごめん！忙しいのに電話して。ううん、いいの。
ちょっと頭にきた事あったから、聞いてもらおうかと思っただけ。
また今度聞いてもらうわ。いいのいいの！仕事、頑張ってね。
私？これから真っ直ぐ帰るよ。今日は寄り道する気分じゃないから。
うん、わかった。じゃ、またねっ！」

真由子がダメなら香織に、と思ってアドレスを開いたが、すぐにパタンと
ケータイを閉じた。

『やっぱ今日は一人でいいや…。』

どこへも寄り道せずに真っ直ぐマンションへと帰ったが、エレベーターの中で
ちょっと後悔した。
ビールとワイン、家にある分じゃ足りなかったな、と…。

「ただいまぁ！帰って来たよ！」

めめとラッキーは寝ているらしく、ウンともスンとも返事がない。
こんな日は、誰かに「お帰り！」なんて優しく言われて出迎えられたら
きっと泣いちゃうんだろうな…。
そう思ったら急に寂しくなって、健人に会いたくなった。

『健人くんと当麻くんに、何にも言わないで飛び出して来ちゃった…。
きっと今頃、みんなに説得されてるんだろうな。
なんであの場で、もっと議論しなかったんだろ、私。
いつもの私なら、徹底的にやっつけてから出て来るのに…。
なんか、二人を見捨てて来ちゃったみたいだよね、これじゃ　。
あの時は頭に血が上って、自分の事しか考えられなくなってた。
でも今、少しだけ冷静に考えてみると、健人くんと当麻くんの夢さえも
なんだか私がぶち壊してしまったような気がする…。』

私は、取り返しのつかない事をしてしまったのか？
自分はいいとしても、健人たちのデビューはどうなるのか？
まさか、私がごねたばかりにあの二人のデビューも、無くなりはしないよね？
次から次へと悪い事ばかりが頭に浮かんで、どんどん落ちてゆく。

『いかんいかん！負のスパイラルにはまってる！
こんな時には違う事に集中して、一旦頭を切り替えないと。
そうだ！冷蔵庫の中身を全部使って久しぶりに、料理何品作れるか大会をしよう！』

それは昔、専門学校を卒業し、カメラマンのアシスタントをしていた時代によくやった一人遊び。
仕事が上手くいかなかったり嫌なことがあったりした時、家にある食材を
全部使い切るまで、ただひたすら料理に没頭するのだ。
冷蔵庫が空っぽになる頃には気分がスッキリして、また次の日から頑張る事ができた。
まぁ、その後何日かは、それを食べ続けることになるのだが。

雪見はビール片手にキッチンにこもり、冷蔵庫の食材を全部並べて昔の事を思い出しながら、料理を開始した。
元々、健人のお母さんみたいに、料理の得意な女性になりたくて、調理師免許まで取ってしまったほどの腕前。
ビールも進んで鼻歌交じりに、次々と皿を埋めていく。

テーブル一杯に並んだ料理を見たら、また健人を思い出した。

『健人くんが一緒にいたら、きっと「めっちゃ美味そう！」って、嬉しそうに平らげてくれただろうな…。』

そう思うと、なんだかまた気分が落ちてしまった。
よし！じゃあ、ワインでも開けるか！と、ワインオープナーをコルクに突き刺した時、
ピンポーン♪とインターホンが鳴った。

「健人くん！？」

走って玄関へ行き鍵を開けると、「お助けマン、参上！」と立っていたのは

なんと、真由子と香織であった！

「真由子！残業じゃなかったの？香織まで一緒に…。」
それだけ言うと、突然涙が勝手に溢れてくる。

「やっぱりね…。あんたからの何年振りかのＳＯＳだと思ったから、残業なんてぶん投げて、香織にも招集かけて飛んで来たんだよ！あれ？その割にはいい匂いがするけど…。」

部屋に上がった真由子と香織が、テーブルの上を見て驚いてる。
「あんた、一人でやけ食いでもしようっての？
なに、このパーティーみたいに並んだ料理は！
ま、ちょうど良かった！持ってきたワインに合いそうな料理ばっかり。
これ、私が輸入する第二弾のワイン！早く二人に飲ませたかったんだ！
さ、食べよ食べよ！」

真由子と香織は、雪見に何があったのか一言も聞かず、他愛もないおしゃべりをいつも通りにして、いつも通りにお酒を飲んだ。
こんな時二人は、根掘り葉掘り涙の訳を聞いたりせずに、
雪見が自分から言い出すまで、そっとしておいてくれる。
その優しさが雪見には一番の、心の絆創膏であった。

ワインを二本空けたところで雪見が「あのね…。」と、その日の出来事を
ぽつりぽつりと話し出す。

「健人くんと当麻くんと三人で、ＣＤデビューする話があってね…。」

そこまでしか話してないのに、真由子がいきなり「なんだとぉ～！？」
と叫んで立ち上がった！

「まぁまぁ、落ち着いて！座りなさいよ、真由子。まずは雪見の話を、
最後まで聞いてあげよう。」
香織はいつも穏やかで冷静で、すぐに熱くなる真由子や雪見を上手くコントロールしてくれる。
男っぽい性格の真由子とは正反対で、雪見はいつも香織の事を
「マシュマロみたいな女の子」と表現しては真由子に叱られてた。
「３３にもなった女を、女の子と呼ぶんじゃないっ！」と。
でも香織はきっと永遠に女の子だと、密かに雪見は思ってる。

「それで？デビューする話がどうしたの？」
真由子と違って、芸能人に何の興味もない香織はいたって冷静に、
真剣に雪見の話を聞いてくれた。
それに引き替え真由子は、案の定ギャーギャー騒ぎながら聞いている。

「ねぇ。その雪見が書いた歌、聴いてみたい。
雪見の事だから、もうピアノの弾き語りができるんでしょ？聴かせてよ！私達に。」
香織が瞳を輝かせて、雪見にリクエストした。

「うーん、なんだか恥ずかしいけど、曲は本当に素敵な曲なの！
だから歌詞も、スラスラ頭に浮かんできたんだ。
じゃ、ちょっと弾いてみるね。」

そう言って雪見は、部屋の隅にある電子ピアノの前に座り、鍵盤に指を置く。
まるで自分の持ち　歌であるかのように前奏を弾き、静かに歌い出した。

健人と当麻に捧げる、愛の歌を…。

説得

♪　はるか遠くに忘れた日々を　　きみと一緒に取りに戻ろう
記憶の糸をたぐり寄せ　僕が最初に見たものは
きみの笑顔と差し出す右手　なのにどうして僕らの右手は
あの時　空(くう)をつかんだのだろう
今なら並んで歩いてゆくのに　今ならもう離さないのに
夢に出てきたきみのくちびる　「ゴ・メ・ン・ネ」って動いたのかな
まだ間に合う？　もう遅い？
引き返せない道なんて　この世に存在しないから
勇気を出して一緒に戻ろう　遠くに見えるあの日の始めに

夢は強く願えば叶うから　怖がらないで目を閉じて
きみのまぶたに写った景色を　どうか忘れないでいて
いつか同じ景色が見えたなら　ためらわないで手を伸ばそう
きみの夢は僕の夢　きっといつか叶えてあげる
記念の写真を二人で写そう
未来は誰にもわからないけど　ひとつ確かに言えるのは
きみの隣りに僕がいること
緑の風に二人で吹かれて　今より遠くへ飛んで行けたら
きっとつないだ手の中に　夢のかけらが入っているはず　♪

「こーんな感じの曲なんだけど…。メロディーが凄く綺麗でしょ？」
雪見が電子ピアノのスイッチを切りながら、後ろを振り向く。
香織が微笑んでいる。真由子は…泣いていた。

「もう！真由子って、ほんとお酒が入ると涙もろくなるんだから！普段は鉄の女！って感じなのにね。」
雪見は笑いながら、冷蔵庫から冷たいビールを三缶取り出し、二人に手渡した。

「雪見。この歌、マジでいい歌だよ！あんたの歌って、なんでいっつも泣けるんだろ。」

「それはね、真由子がいっつも酔っぱらって、私の歌を聴くから！」

「違うよ、雪見。雪見の歌って、本当に心の奥まで届く歌なの。曲はもちろんだけど、歌詞も一言一言が心に入ってくる。だから泣けるんだと思うよ。
ねぇ。どうして一人じゃデビューしたくないの？
前に見せてもらった卒業文集に、確か将来の夢は歌手って書いてあったよね？」

「香織、よくそんな事覚えてたね！子供の頃の夢だよ、子供の頃の。」
雪見が笑いながら言うと、香織は急に真顔になって雪見を見つめた。

「夢を叶える前に死んじゃう子供が、世の中にはたくさんいるんだよ…。」

「香織…。」

香織は、国立がんセンターの院内学級で、保母さんをしている。
主に5、6歳児を受け持っていた。
以前飲みに行った時、酔って香織が泣きながらこんな話をした事がある。

「抗ガン剤治療で吐いて苦しくて、普段はベッドから起きられない子も、
院内学級のある日は、這うようにしてでもやって来るの。
『先生！来たよ。ピアノを教えて。』って。
震える手で、一生懸命絵を描いて持ってくる子もいる。
どうしてそんなに頑張れると思う？
夢なの。夢があるから苦しくても頑張れるの。
そんなに小さな子供でも、大きくなったらピアニストになりたい！
とか、
漫画家になりたい！とかって、はっきり夢を語るんだよ。
そこまで生きられないで、死んじゃうのにね…。」

香織は、受け持ちの子供が死を迎えるたびに、自分ではどうしてやることも出来ない
無力さに打ちひしがれ、何度も病院を辞めようと思ったと言う。

だが反対に、病を克服した子供達は退院する時、一様に目をキラキラと
輝かせて夢を語るらしい。
「香織先生！学校に行ったらいっぱい勉強して、山本先生みたいな優しい
お医者さんになるからね！
そしたら香織先生が病気になった時、僕が痛くないようにお注射をしてあげる。」

夢ってね、生きる力になるんだって、子供達から教わったよ…。
そう言って香織が、その時うっすらと微笑んだのを覚えている。

「ねぇ！別にさぁ、あんた来年の三月までしか健人の事務所と、
契約してないんでしょ？
だったら、あとたったの五ヶ月間しかないんだから、ごちゃごちゃ
考えないで
やってみればいいじゃん！長い人生のたった五ヶ月だよ！
私にそんな才能があったら、喜んで体験してみるけどな。
それとも、歌うのが嫌いになったとか？
それは無いよね、あんなにカラオケ好きなんだから。」

チャレンジ精神旺盛でミーハーな真由子なら、１００％そうするだ
ろう。
だけど私は…。

「先が見えないから怖い。そうじゃないの？
けど、健人くんたちだって、まったく新しい事にチャレンジしよう
としてるんだよ。
一緒には歌えなくても、スタートは同じ新人なんだから、お互い励
まし合って
昔の夢を体験してみればいいんじゃない？」

昔の夢…。子供の時に見た夢…。
手が届く所にある、本当は実現したかったもう一つの私の夢…。

「あんた、自分で書いた歌詞を忘れたの？
夢と同じ景色が見えたら、ためらわないで手を伸ばそう！って書い
たんだよ。
それって健人だけじゃなく、自分に対しての言葉でもあるんじゃな
いの？」

ためらわないで手を伸ばそう、か…。

その時だった！ガチャンというドアが開いた音の後に、ガラガラと音が聞こえた。

「ゆきねぇ！いるんでしょ？ちょっと手伝ってぇ！
当麻、サンキュ！それ、取りあえず廊下に置いといて。」
健人の声であった！

雪見が慌てて玄関に行くと、旅行用の大きなスーツケース四つと共に、
健人と当麻が立っているではないか！

「どうしたの、健人くん！明日から海外ロケにでも行くの？」
その声を聞きつけて、真由子と香織もバタバタと居間から飛んで来る。

「なに言ってん！ゆき姉が心配だったから、当麻に手伝ってもらって荷物をまとめて来たんでしょうが！
大体、なんでケータイに出てくれないのさ！何回も電話してんのに。
ゆき姉がスタジオ飛び出してから、どんだけ当麻と心配してたと思ってんの！」

普段あまり怒らない健人が、珍しく強い口調で雪見を叱った。
健人が、心から雪見を心配してたのが伝わってきたので、
雪見はいい訳をせず、すぐに「ごめんなさい…。」と謝った。

「まぁ、良かったじゃん！ゆき姉が元気そうで。
こいつ、本当に心配してたよ、ゆき姉のこと。

まだ帰ってなくても、荷物は運んでおきたいから手伝って、って。
あ！荷物出したら俺のトランク、返してね。
近々ドラマの海外ロケ、ほんとにあるから。」

当麻のトランク？

「ねぇ。その荷物はなに？」

「今日から俺がここに住むための、当面の荷物に決まってんでしょ！」

「健人くん…。」

静かな夜のマンションに、またしても真由子の大絶叫が響き渡った。

健人の引っ越し

真由子の大絶叫は、確実にそのフロアに響き渡ったはず。
健人はまたかよ！って顔をし、当麻はビックリして唾を飲み込んだ。

「あ、あんた達…、まさか同棲するんじゃ…。」

「同棲だって！なんか久々に聞いた言葉じゃね？」
健人が笑いながら小声で言って、隣の当麻と顔を見合わせる。

「真由子、勘弁してよ！ほんとに私、マンション追い出されちゃうでしょ！
とにかく二人とも中に入って！中で話そう。」

健人と当麻は、海外旅行用の大きなスーツケースを、両手でよいしょ！と持ち上げ
健人の部屋になるであろう、一番手前の空いてる部屋へとスーツケースを運び入れる。

「あー、重かった！当麻が手伝ってくれなかったら、今日は無理だったわ！
助かったよ、ありがとね！」

「いいんだって！俺も、今日はゆき姉に誰かが一緒に付いててやった方がいいな、と思ったから。
まさか、このタイミングで健人が引っ越すとまでは、さすがに思わなかったけどね。」
当麻が笑いながら言った。

「うん。自分でも不思議なんだけど、絶対に今日だ！って思っちゃったわけ。」

「普段は優柔不断な健人だけど、今日の決断は男らしくて見直したわ！
俺だったらやっぱ、躊躇すると思う。」

健人の愛にはどうしたって勝てないや…と、当麻はこの時初めてきっぱりと
雪見を諦める踏ん切りがついた。
これからは二人の幸せを祈って、一番のサポーターになろうと決意した。

「ねぇ、そう言えばさっき、真由子さんの他にもう一人、見たことない人いたよね？誰？」
当麻が健人に聞いてみる。

「あぁ、俺も初めて会う人だけど、多分香織さんって人だと思う。
ゆき姉の親友があの二人だと思うよ。ゆき姉が撮影旅行で家を空けた時は、
あの二人が交代でめめの面倒を見に来てくれるって、前に言ってたから。」

「なんかさ、香織さんって、ちょっと可愛くない？女の子っぽいって言うか…。」

「おっ！久々に食いついたんじゃね？当麻くん！
いいよいいよー！俺、全力で応援しちゃうよ！」

健人と当麻がスーツケースにまたがりながら、香織の話で盛り上がっていると、
居間から真由子の呼ぶ声が聞こえた。

「ちょっと！そこのイケメンアイドルお二人さん！
いつまでも井戸端会議してないで、早くこっちに来なよ！」

「井戸端会議だって！母さん以外から初めて聞いた！真由子さんって、一体いくつ？」

「あの三人は多分同い年だと思うよ。」

「ふーん、そうなの。ま、いいや。じゃ、行きますか！」

突然のアイドル二人の登場に、真由子のテンションはヘンなことになっている。
それに引き替え香織は、芸能人にはまったく興味を持ったことがないので、
ただ雪見の彼氏とその友達が来た、ぐらいにしか思っていなかった。

「あ、香織は二人に会うの初めてだよね。
紹介するまでもないと思うけど、斎藤健人くんと三ツ橋当麻くん。
もちろん知ってるよね？」

「それはもちろん！子供たちにも大人気の二人だもの。
初めまして、中村香織です。いつも雪見がお世話になってます。」
そう言いながら香織は、三十代には見えない愛くるしい笑顔で、にっこりと微笑んだ。

そのたった一度の笑顔は、当麻の心臓をキュン！と鳴らすに充分な分量で、
隣りにいた健人は密かに『よしよし！』と、にやついたのであった。

「こちらこそ、いつもゆき姉がお世話になって！
今日も来てくれてて安心しました。話は聞いたと思うけど、この人、すごい顔してスタジオ飛び出して行ったから、心配で心配で。
すぐに追いかけて行ければ良かったんですけど、そうもいかない状況で…。」
健人が、いつもと変わらぬ表情でキッチンに立つ雪見の方を見ながら、
安堵して香織に話しかける。

「私も今、初めて安心しました。雪見から、あなたと付き合い出したと聞かされて以来
失礼ですけど、ずっと心配してたんです。
あなたみたいな人と付き合って、雪見は本当に大丈夫なのかな？って。
ごめんなさいね、こんな言い方して。
でも今こうやって直接お話してみて、あなたなら雪見をお任せできるとホッとしました。これからも雪見を、よろしくお願いします。」
香織が深々と頭を下げたので、健人も慌てて頭を下げる。
そこへ、面白くなさそうな顔の真由子が割って入った。

「ちょっとぉ！なによそれ！
それじゃ雪見をもらいに来た彼氏と、雪見の母の会話でしょーが！
香織！こんなイケメンアイドルを目の前にして、少しはドキドキとかしなさいよ！
私なんて、何回会ってもこの状況が信じられないのに。」

健人が、隣でニコニコとみんなの会話を聞いている当麻に気が付き、慌てて香織に紹介した。

「あ、当麻は俺の一番の親友なんです。俺とゆき姉の一番の理解者。だから今日も、真っ先に俺の背中を押してくれました。めちゃめちゃいい奴ですよ、こいつ！料理も出来るし部屋も綺麗！何にも言わなくてもスーツケース持ってきてくれたし、男の俺から見てもかっこいい男です！」

健人の強引な押しに苦笑いをした当麻は、少し照れながら初めて香織に話しかける。

「あの…。さっき俺らが子供たちに大人気って言ってたけど、香織さんって結婚してるんですか？」

そこへ雪見が、冷えたワインとチーズやサラミ、ナッツなどの乾き物のおつまみを運んできた。

「なーにぃ？当麻くん、そんなことが気になるわけ？大丈夫だよ！香織の言ってる子供たちって、自分の受け持ちの子供のこと。香織は、病院の中にある院内学級の保母さんなの。子供が大好きなんだよ！そんなことはいいから、せっかくだしみんなで飲もう！冷蔵庫の中を空っぽにしちゃったから、料理の追加は作れないけど。」

「すでにご馳走が並んでるじゃん！俺、めっちゃ腹減ってたんだ！食べよう食べよう！」

「じゃ、健人の引っ越し祝いに、カンパーイ！」

当麻の音頭で乾杯し、ちょっとした合コンのような飲み会がスタートした。

雪見の決断

三十過ぎの女三人と、二十歳そこそこのイケメンアイドルが二人。
もしもここが居酒屋だったら、この絵図はどうなんだろ？
健人と当麻が、仮にただの大学生だったとしても、だ。

だが真由子にとってはそんなこと、どうでも良かった。
なんせ、大好きなアイドル二人に囲まれて酒が飲めるんだから、
まさしくここは、夢のようなパラダイスに違いなかった。

「もう、今日は雪見に感謝だわ！
あんたが、『一人じゃ歌いたくな～い！』ってごねて、飛び出して来てくれたお陰で
ここでこの二人と、美味しいワインが飲めるんだから！」
真由子は凄いピッチでグラスを空けたせいで、もうすでに第一ラウンド
終了間近である。

「真由子！ちょっと飲み過ぎだよ。少し私のベッドで一眠りしたら？」

「そんなぁ！今日から健人と一緒に寝るベッドに、まさか私が先に寝る
わけにはいかんでしょう！
あ！もしかして、早く帰ればいいのにぃ！とか密かに思ってたりして？」

「変なこと言わないでよ！もう、酔っぱらいなんだから！
じゃ、いいからソファーに横になりなさい！今、毛布持って来てあ

げる。」
雪見が立ち上がり、寝室に毛布を取りに行く。
雪見が席を外してすぐに、真由子は健人に向かって、本気とも冗談とも
つかぬ事を言った。

「雪見を泣かせたら、この私が承知しないから！
一緒に住むって決めた以上、最後まで責任持ちなさいよ！」

「大丈夫、安心して。俺って世間のイメージほど、チャラくはないから。
ゆき姉を幸せに出来るのは、世界中で俺しかいないと思ってる。」

瞳を見つめて健人が、ドラマのセリフ張りに真顔で言ったので、
真由子はそこでテクニカルノックアウト！
「私、もう死んでもいい！」そう叫びながらソファーにダイブして、
そのまま気を失ったかのように眠りに落ちた。

「ちょっと、真由子！なんて格好して寝てんのよ。風邪引くでしょ！」
そう言いながら、雪見がそっと毛布を掛けてやる。

「少し真由子を眠らせたら、起こして私も一緒に帰るからね。」
香織が、真由子の幸せそうな寝顔を見つめながら微笑んで言った。

「いいよ、しばらく寝かしてやって！残業続きで疲れてるのに、
私のために飛んで来てくれたんだもの。ほんと有り難いよね、親友って…。」
雪見も、なぜ真由子はこんなに幸せそうな顔で寝てるんだろう…と

不思議に思いながらも、心の中で彼女に感謝した。

「そうだ！健人くん、明日から今野さんの迎えの車、どうするの？まさか毎朝迎えの時間に合わせて、自分のマンションに戻るわけ？」雪見がハッと我に返ったように、心配そうに健人に聞いた。

「大丈夫だよ。今野さんにだけは正直に話してきたから。」

「えっ！今野さんに話したの？私と一緒に住むことを？今野さん、なんて言ってた？」

「しばらく考えた後、了承してくれたよ。但し条件がある、って。」

「なに？その条件って…。」　雪見は緊張しながら健人の言葉を待った。

「事務所にバレないようにする代りに…、ゆき姉を説得して来いって。
ゆき姉をどうしてもソロデビューさせたい！って…。」

「その条件を呑んで、健人くんはここに来たわけ…。」
その時すでに、雪見の顔から笑顔は消えていた。

「違うよ。そんな条件出される前から、俺はゆき姉を説得するつもりだった。
俺は…。俺はゆき姉のあの歌を、日本中の人達に聴いてもらいたいんだ。
あの歌は、ゆき姉が歌うべき歌なんだ！」
健人は真っ直ぐに雪見と向き合い、目を見て真剣に気持ちを伝えた。

「俺も、ゆき姉のあの歌、大好きだよ！ずーっと聴いていたい。」
当麻が微笑んで言う。
「ゆき姉さぁ、忘れちゃったの？
ゆき姉にはこんなイケメンの最強ナイトが、二人もそばにいるってこと。
俺たち、どんなことがあっても、ゆき姉を守り抜くって誓ったよね。
あの約束は永遠に有効だよ。
だから勇気を出して、俺たちと一緒に新しい事にチャレンジしてみようよ。
絶対に楽しいって！三人での全国ツアー！」

「全国ツアー！？どういうこと？」びっくりして雪見が健人に聞き返す。

「俺と当麻は毎年別々に東京と大阪で、ファンミーティングをやってきたんだけど、
それを今年は五大都市で、合同でやろうってことになったらしくて。
そのツアーにゆき姉も参加させて、三人のライブとおしゃべりを中心の
ステージを計画してるらしい。」

「そっ！『当麻的幸せの時間』と『ヴィーナス』のコラボツアーだって！
もちろん健人の写真集もね、ホールのロビーで写真展をやるって言ってたよ！
ゆき姉が沖縄で写した俺たちの写真の、未公開ショットを展示するみたい。
ねっ！楽しそうでしょ？だからやろうよ、俺たちと一緒にツアー！」
当麻は、すでに決まったかのようにワクワクしているのが、すぐに

わかった。

健人も、ジッと雪見を見つめて、良い返事を待っている。
雪見は、健人と当麻の写真展をやるというところに、気持ちがグラッと揺れた。

「雪見。こんなに雪見のこと思ってくれる人たち、他にはいないよ。そろそろ誠意を持って、その気持ちに答えるべきじゃないのかな。」
香織も穏やかに微笑んでいた。

三人が雪見を見守ってくれている。
もちろん、そこのソファーですやすやと眠る真由子も…。

「やってみようかな…。
こうなったら浅香雪見って人間が、どれほどのもんなのか、
自分自身を徹底的に、お手並み拝見と行こうか。」

雪見の言葉に、三人はハイタッチをして喜んだ。

「良かった！ゆき姉のその言葉を待ってたよ！
必ず俺たちがサポートするから。だから何も心配しないで。」
当麻が本当に嬉しそうに、雪見に言う。

「私も応援するよ。ツアー中のめめ達のお世話は、任せておいて！」
香織も、いつもの穏やかな優しい笑顔で、雪見を見つめた。

健人は、自分の思いを受け止めてくれた雪見を、早く抱き締めてあげたいと思った。

今日から二人の新しい生活が、ここから始まる。
これからは毎日一緒にいられるんだ。
雪見を説得する事ができてやっと今、健人は喜びを噛み締めることができた。

側らのソファーでは、何も知らない真由子がまだ寝息をたてていた。

二人の新生活

「真由子、起きて！もう帰るよ！」

香織の声に起こされた真由子は、「あれ？私、いつから寝てたの？」と
ボーッとした冴えない顔で、雪見に聞いた。

「うーん、かれこれ二時間前かな？幸せそうな顔して熟睡してたよ。相当疲れてたんでしょ？今日はゴメンネ。来てくれてありがとう！」

「えっ！私、二時間も寝ちゃったのぉ！？
なんでもっと早くに、起こしてくれなかったのよ！せっかくの合コンだったのに！
私が寝てる間に、まさか四人でイチャイチャしてたんじゃないでしょうね？」
真由子は、端から見ていて笑えるほど、一人だけ寝てしまった事を後悔していた。

「また来ればいいでしょ。今日からは、いつ来たって健人くんに会えるんだから。」
そう言いながら雪見は、隣りに寄り添う健人と見つめ合い微笑んだ。

「信じられない！本当にあの斎藤健人が、今日から雪見と一緒にここで暮らすの！？
私、もしかして、まだ夢の続きを見てたりする？」

「夢だったら私が困る！せっかく叶った夢なのに…。」

雪見は急に不安になってきた。朝目覚めて隣りに健人がいなかったら…。
雪見の曇った表情を見て、健人が笑いながら「どこへも行かないよ。」
と頭を撫でた。

「はいはい！いつまでも二人でやってなさい！香織、帰るよ！」
真由子はまだ少しふらつく足で立ち上がり、さっさと玄関へと歩き出す。

それを見て、慌てて香織も自分のバッグと真由子が忘れて行ったバッグを手に取り、
「ごちそうさま！また来るね。雪見なら必ずやれるから、自信をもって
進んで行くんだよ。健人くん、雪見をよろしくお願いします。じゃ！」
と挨拶してから居間を出た。

「あ、俺も帰る！香織さんちって、どこら辺？
俺、タクシーチケット持ってるから送るよ。一緒に帰ろう！」
当麻の言葉に、健人と雪見は顔を見合わせて二ヤッとする。

「じゃ、またな！っつーか、これから毎日歌のレッスンで会うもんね。
頑張ろうな、お互いに。香織さんとお似合いだよ！ファイト！」
健人が、最後に小声で当麻を励ました。隣で雪見も笑ってる。

幸せそうな二人の笑顔を見て、当麻は安心して雪見宅のドアを閉めた。

「当麻くん、香織のことが相当気になってるみたいだね。
あの二人はお似合いだと思うけどな。うまく香織のアドレス、聞き出せればいいけど…。」
当麻達を見送った玄関先で、雪見がつぶやく。

「なんで?香織さんのアドレスなんて、ゆき姉が当麻に教えてやればいいじゃん。」

「それじゃ意味ないでしょ!自分で聞くから道が開けるんだよ。
キミはまだまだ修行が足りんな!」

「じゃあ、今日からしっかり勉強させてもらいます!」
そう言って健人が笑ったあと、雪見を引き寄せギュッと抱き締めた。

「今日から毎日一緒にいれるんだね。明日もあさっても、ずーっと…。
俺…、もう離さないよ、ゆき姉のこと…。」

「私だって離れないから…。
毎日美味しいご飯作って、健人くんの帰りをここで待ってる。」

「ゆき姉…。」健人が雪見にキスしようとした、その時だった!
かぷっ!「痛ったーっ!」
足音も無く忍び寄ったためめが、健人の足に噛みついた。

「なんでだよぉ!俺、なんかしたぁ?」

「あ!まだめめ達に、ご飯あげてなかった!
ごめんごめん、お腹空いたよね。今すぐあげるからねっ!」
雪見はそのまま健人を残し、めめとラッキーにご飯をあげに居間へ

と行ってしまった。

記念すべき同居第一回目のキスは、邪魔が入ってあえなくおあずけとなり
仕方がないので健人は、スーツケース四個分の私服や帽子、靴などを取り出して
雪見が用意してくれたハンガーに掛けた。

ファッションリーダーでもある健人の、私服の枚数は半端ではなく、とてもじゃないが、一度に全部を持ち出すことは不可能であった。
靴やブーツも相当の数があり、何日かに一回は自宅に戻って
私服を入れ替えることにする。

雪見が居間の片付けをしている間、整理整頓が大の苦手な健人は
四苦八苦しながら荷物の整理をし、その日二人が眠りについたのは
夜中の二時過ぎであった。

翌朝六時。雪見は、隣りに健人が本当に眠っていることに安堵しながら
そっとベッドを降りる。
顔を洗い身支度を調えて、朝八時に仕事に出掛ける健人のために、
美味しい朝食を作ってから起こそうと、冷蔵庫を空けた。
が！そこには何一つ食材など入っていなかった！

『しまったぁ！昨日のヤケ料理で、全部使い果たしたんだった！
一日目の朝ご飯は、絶対におしゃれな洋食にしようと、前から決めてたのに！
仕方ない。コンビニでなんとか食材を調達して来るか…。』
雪見は財布とケータイを持ち、そっと玄関を出て鍵を閉めた。

マンションから最寄りのコンビニまでは、徒歩五分。
普段はこんな朝っぱらからすっぴんで、コンビニになど出掛ける用事はない。
食材にしたってきちんとスーパーで、丸ごとの野菜を吟味して買うのが雪見だ。
だが今日は緊急事態。そんなこと言ってはいられない。

エレベーターが一階に着くのと同時に飛び出し、マンションを出る。
日曜の朝とあって、人通りは確実に少ない。
すっぴんであることを後悔していたが、これならあまり気にすることもないだろう。

外を歩き出してすぐに、遠くの方で「パシャパシャパシャ！」と聞き覚えのある音が、微かに聞こえた気がした。
振り返って辺りを見回しても、誰もいない。

『おかしいな…。確かにさっきの音はカメラのシャッター音。
この私が聞き間違えるはずがない。
近くの公園ででも、誰かが撮影してるのかな？
最近は密かにカメラブームらしいから…。
そういや昨日当麻くんも、またカメラを持ち歩いて、色んなものを写し出した
って言ってたなぁ。暇をみてアドバイスしてあげよう…。』

そんな事を考えながら、コンビニのドアを押し開ける。
急いで卵やベーコン、キャベツなどを買い込み、またマンションまで早歩きで戻った。

「パシャパシャパシャ！」

今度は確かに聞こえた！誰かが私を写してる！
目に見えない正体に怯えながら、雪見はマンションに飛び込んだ。
どうしよう！健人くんとのことがバレた！？

思い出せない人

後ろから誰か付けて来るのではないかと、ドキドキしながらエレベーターを待つ時間のなんて長いこと！
『早く来てよ！』とひたすら祈り、ドアが開くと同時に素早く乗り込んで
閉ボタンを連打した。

『どうしよう…。絶対に私に向けてシャッターを切ってた…。
でも、どこにいたんだろう？音の方向はわかったけど、姿が見えない。
多分、相当な望遠レンズで狙ったはず…。』

エレベーターのドアが開いたので、考え事の続きをしながら降りる。
しかし！はたと周りをよく見ると、そこはなぜかさっき乗ったのと同じ一階であった！
慌てて飛び乗り、閉ボタンを連打したまではよかったが、何階かを押し忘れてたのだ。

『バッカだなぁ！なにやってんのよ、雪見！
でも…。これって神様が、確かめに行きなさいって言ってるのかな…。』

なぜか雪見はこういうピンチに直面した時、どこからか訳の解らない、
場にそぐわない好奇心のようなものが湧いてきて、よく考えもせずにふらふらと直感だけで行動してしまうことがある。

まさしく今がその状態で、雪見を写していたのが誰か？という一番

重要な事よりも
どこに身を隠して撮っていたのか?という、どうでもいい事を確かめたくて
キャベツや卵の入った袋を手にぶら下げながら、またマンションの外に出てしまった。

シャッター音がしたと思われる方向に歩き出す。
なぜか、さっきのような恐怖感は影を潜め、代りに、絶対尻尾をつかんでやる!
という反撃精神がメラメラと燃えてきた。

こういう場合、雪見は自分のことを『双子座の二面性が出てきたんだから仕方ない』
と、変ない訳を自身にして行動する。
まるで、『私が悪いんじゃないのよ。双子座に生まれたせいよ。』と責任転嫁でもするように。
こんな事、世の双子座仲間がみんなでしてたら、下手すると凶悪事件にでも巻き込まれ
そのうち日本の人口は減りかねない。
と言うか、こんな解釈をして行動するのは雪見だけだと思うのだが…。

その時!ハザードランプをつけて止まっていた無人の車の影から、
大きな望遠レンズ付きカメラを手にした一人の男が、ひょこっと立ち上がった!

一瞬ドキッとしたが、雪見はすぐにその男をキッと睨み付け、
「ちょっと、あんた!さっき私のこと、写してなかった!?」と、

大声で怒鳴った。
が、怒鳴ったすぐそのあとに、
『もしも自分を狙って写したんじゃなかったら、超かっこ悪い展開になっちゃうぞ！』
と後悔して、今度はにっこりと微笑みをたたえながら、穏やかに言った。

「あのぉ、私の勘違いだったらごめんなさい。
あなたの手にしてるキャノンの最新カメラ、一体なにを被写体にしてたのかしら？」

雪見はそう優しく言いながら、『またしても双子座だ！』と密かに自分に突っ込んだ。
だからぁ！双子座って、そんなんじゃないっつーの！

車を挟んで目の前に立つ男は、オドオドしている。
最初の、雪見に入れられた渇が相当効いたらしい。
年の頃は四十代前半か？いや、もしかするともう少し若いのかも知れない。
髪はボサボサで、着ている服もイケテない。
どう見ても、写真週刊誌や女性誌のカメラマンではなさそうだが、こんなプロ仕様の、マニアックなカメラを持ってるとこ見ると芸能人狙いか何かのカメラ小僧…いや、カメラおっさんか？
もしかして、雪見のマンションに出入りする、当麻や健人を狙っていたとしたら…。
下手なことは聞けないが、それとなく探りを入れてみる。

「あのぉ、何を写してたんですか？この辺りに面白いものでもありました？」

雪見は、数少ないグラビアの仕事で体得した、これ以上ないというくらいの
モデルスマイルで、穏やかーに小首を傾げて聞いてみた。

するとその男は、聞こえるか聞こえないかの小さな声で、あろう事か
「浅香雪見さん、ですよね？」と聞いてくるではないか！

「はぁ？そ、そうですけど、なにか？」

「俺のこと…、覚えてない？」

「えーっ？」　そう言われてマジマジと見つめるが、どこかで会った事
あるような、ないような…。
「ごめんなさい、どこでお会いしたんだろう…。」
雪見は、いくら考えても思い出せなかった。

「むかーし夏休みに、埼玉の健人の実家で…。毎年会ってたよね。」

「えっ！健人くんの実家で、毎年会ってた？あなたと？」

思ってもみなかった言葉に、雪見の思考回路は一瞬停止した。
その後、一つずつ記憶をさかのぼって行くと、確かに昔の夏休み、
お盆の前後に
健人の実家には親戚がたくさん集まってた時期があった。
あの時にいた誰かだという事はわかったが、なんせ当時の斎藤家というのは
健人に近い親戚から雪見のように遠い親戚まで、ちいばあちゃんの
周りに
実に多くの人達が集まって来ていた。

大人は大人同士、ひとかたまりになって酒を酌み交わし、一年ぶりの再会を喜び合う。
子供は子供だけでテーブルを囲み、ワイワイご馳走を食べては近くのあの河原に出掛け、虫採りをしたり蟹を捕まえたり、缶蹴りをして遊んだ。

今思えば、誰がどういう繋がりの親戚かなんて、まったく気にも留めていなかった。
この人物の名前さえも思いつかないが、雪見と健人の親戚であることだけは間違いない。

それにしても、なぜ雪見を隠れてまで写していたのか…。
赤の他人よりもたちが悪い予感がして、身震いがした。

その時、手の中のケータイが鳴った。健人からだ！

「もしもし、ゆき姉？今どこにいるの？
目が覚めたらゆき姉がいないんだもん、心配したんだよ！どうしたの？」

「あ、ごめん…。朝ご飯作ろうと思ったら、冷蔵庫が空っぽで…。
コンビニに買い物に出たんだけど、マンションの前で写真を撮られちゃって…。」

「えっ！嘘でしょ！？どこの雑誌に？」

「それが…。雑誌じゃなくて、私達の親戚らしき人に…。」

「誰だよ、それ！」

美味しい朝ご飯を作って健人を起こすという、夢に見てた同居初日の朝は、
この突然現れた冴えない男によって、無惨にも打ち砕かれてしまった。

二人のはとこ

「もしかしてその電話、健人から？」

雪見の目の前の、名前も思い出せない親戚らしきボサボサ男が、馴れ馴れしく「健人から？」と聞く。

どうしよう…。なんだか嫌な予感がする。

「違います！」って答えようか。仕事前に健人くんを巻き込みたくない。

それに早く帰って、健人くんに朝ご飯を作ってあげないと…。

取りあえず、「今は急いでるから。」と言おうとしたその時だった！

その男は、いきなり雪見の手からケータイを奪い取り、

「もしもし、健人？」と勝手に話しかけやがった！

「ちょ、ちょっと、アンタ！何すんのよ！

返しなさいよ、人のケータイ！いい加減にしないと、警察呼ぶわよ！」

さすがの雪見も、ブチ切れた！

しかし、元々声が大きい上に、「警察呼ぶわよ！」に反応した通行人が

「どうしましたか？」と集まって来てしまった。

まずい！騒ぎになるのだけはまずい！

「あ、あの、なんでもないです！ごめんなさい！

私、口が悪くって…。あの、この人、親戚なんです。

ちょっとした口げんかで…。ほんと、お騒がせしました！」
雪見が深々と頭を下げるうちに、集まった人々は散ってくれた。

「はぁぁ…。とにかくケータイ、返してくれる？」

「あぁ、ごめん。」
騒ぎになったのを反省してか、素直に雪見に手渡した。

「もしもし、健人くん？悪いけど、今外に出て来れる？
うん、ラッキー拾った公園に行ってるから、急いで来て。
そうだよね、出掛ける準備があるのにね。
でもこの人、このままじゃ帰ってくれなさそうだから…。
取りあえず会うだけ会って、今日は帰ってもらおう。じゃ、待ってる。」

電話を切った雪見は、再び男にきつい眼差しを向け、健人のマネージャーでも
あるかのように、事務的な声で要件だけを伝える。

「健人くんが今降りて来るから、そこの公園に移動しましょ。
こんなとこで話してたら、また人が集まる。
八時にはマネージャーが迎えに来るんで、支度もあるし時間は少ししか
取れません。いいですね。」

本当は、こんな明るい時間帯に健人を公園になど、連れて行きたくはない。
日曜の朝は、早朝散歩を楽しむ人達で、結構賑わう公園なのだ。
けれど、かと言ってこんな男を部屋に上げるのだけは、絶対に御免だ。

親戚だか何だか知らないが、出来ることなら関わりたくない匂いがプンプン漂う。

一体、この男の目的はなに？
私の写真を撮って、どうしようっていうの？
健人に会って、何を言うつもり？

公園への僅かな道のりを、スタスタと先頭を切って歩きながら雪見は不測の事態に備えて、頭の中で色々とシミュレーションしてみる。

一番に守るべきものは、もちろん健人の命！
まぁ、いくら何でも朝っぱらの人通りがある公園で、親戚ともあろう人物が
健人の命を狙う、なんて事は無いだろうな。
じゃあ、小さなナイフでも隠し持ってて、それで健人をゆするとか…。

雪見の頭の中でこの男は、可哀想に段々と凶悪犯並みに仕立て上げられていく。
そして雪見は、ついには命を張って健人を守る、ＳＰへと変身するのであった！
もちろん妄想の世界で…。

なるべく人目につかない所で健人を待つ。
あまり人目につかなさすぎても、もし事件が起こった場合には困るので
程ほどの場所で。

「あ！健人くん！こっちこっち！」
健人は寝てた時と同じ、杢グレーのスウェットパンツにTシャツ、
黒のコンバース姿。
上に黒のロングガウンを羽織り、フードを被って眼鏡を掛けて来た。

「よっ！健人。久しぶり。すっかり大人になったな！」
その男は健人を一目見るなり、馴れ馴れしく言った。
誰だろう？という顔の健人に、「俺だよ、俺！義人兄ちゃん！」

「えーっ！？義人兄ちゃん！？うっそ！マジでぇ？」

雪見は名前を聞いても、あまりピンとはこなかったのだが、
確かに昔、健人が大人の席で酒を飲んでるこの男に、
「義人兄ちゃん、川に魚釣りに行こう！」と、腕を引っ張ってせがむ
景色が思い出された。

「悪いけど、全然わかんなかった！だって激変したでしょ？あの頃
と。
昔はもっと…。」

「イケメンだったって言いたいんだろ？あれから十四、五年も経てば
こんなもんだって！お前なんか、俺に一番似てるって言われてたん
だから
気を付けないと、こうなっちまうぞ！
しっかし、あのチビ助が、よくもこんな人気者になったもんだ！」

雪見は健人が「こうなっちまう」のはヤダ！とゾッとした。

「あのさぁ、健人くん。私も一応親戚のつもりではいるんだけど、
多分私とは遠い関係の方だよね？こちらさん　。」

「あれ?俺と義人兄ちゃんが従兄弟なんだから、ゆき姉とは俺と同じはとこなんじゃないの?
あ、ゆき姉覚えてない?俺が幼稚園ぐらいのお盆に、従兄弟とかと川に蟹捕りに行って、足滑らせて流されかかった時、義人兄ちゃんが川に飛び込んで俺を助けてくれたの。あんとき、ゆき姉も一緒に居なかったっけ?」

「おうおう、あったな!そんな事。びしょ濡れのお前をおんぶして帰ったら、
ちいばあちゃん達が一斉に仏壇の前に座って、「ご先祖様のお陰です!」
って拝み出したんだよな!
『俺のお陰なんだけど…。』って突っ込みたかったけど。」

二人は楽しそうに、昔話に花を咲かせている。
が、雪見はこの男も自分のはとこだと知って、ショックを受けていた。
「子供の頃はさぁ、『いとこ』だとか『はとこ』だとか、意味わかんなかったもんね。
『はとこ』って、鳩の子かぁ?みたいな。
ぜーんぶまとめて親戚って呼んでたから。でも、あの頃の夏が一番楽しかったなぁ!」

健人は、しばしのタイムスリップを、頭の中で楽しんでいる様子。
だが雪見は、この『はとこ』が何をしに、突然二人に近づいてきたのか
早く知りたかった。

「健人くん。あんまりのんびりとしてる時間も無いよ。

まだシャワーも浴びてないでしょ？」

「あ、そうだった！で、なんか用事があって来たんでしょ？義人兄ちゃん。
よく俺がここにいるって、わかったね。」

「毎日跡を付けてたからな、ここんとこ。俺、今こういう仕事してんの。」

そう言いながらポケットから出した名刺には、有名写真週刊誌の名前と
『専属カメラマン　斎藤義人』と書いてあった。

従兄弟の裏切り

「嘘だろっ！俺をつけてたって…。まさか義人兄ちゃんが…。」

ショックを受ける健人の隣で雪見は、自分でも不思議なほど落ち着いて
嫌な予感が的中してしまった、とだけ思った。

だが、それだけで終らせるわけにはいかない。
健人にとっては、思い出一杯の従兄弟かもしれないが、私にとっては幸いにして
何の思い入れもない、赤の他人に程近い親戚だ。
いや、健人は私のはとこでかまわないが、こんな男を健人と同様に
私のはとこ、だとは呼びたくもない。

一旦、この人には別に嫌われようが何しようが構わない、と思ってしまうと
雪見はひどく冷静に冷酷に、相手に対峙してゆく。

「あなた、健人くんと私を売るつもり？一体どういう神経の持ち主かしら。」

「こっちも生活が懸かってるもんでね。
なんせカミさんが、子供二人置いて出てっちゃったばかりだから。
二人の話を嗅ぎつけた時、やっと俺にもビッグチャンスが巡ってきたと小躍りしたよ。
健人んちに電話したらつぐみちゃんが出て、探りを入れたら案外簡単にここを教えてくれてさ。

まさか俺がこんな仕事してるなんて思ってないから、懐かしがって色々
お喋りしたよ、二人の事。」

健人と雪見は、つぐみの名前が出てきたことに驚愕した。
すでに健人の実家にまで手を回したとは…。

「義人兄ちゃん。俺たちのことは実家には何一つ関係無い。
もう二度と、つぐみに接触するのは止めてくれ。お願いだから…。」
健人の声は、明らかに震えていた。

その悲しげな健人の声を聞き、雪見は許せない！と思った。
健人を悲しませる者は誰であろうと、この私が許さない！

「健人くんはもう時間だから、戻って仕事の準備をして。
ごめんね、せっかく美味しい朝ご飯を作ってあげようと思ってたのに。
私のお昼用に買ったサンドイッチ食べてから行ってね。
あと、野菜ジュースも買ってあるから飲んでよ。
それと、卵なんかは冷蔵庫に入れておいて。忘れないでね！
じゃ、あとは私に任せて行った、行った！」

雪見は飛びっきりの笑顔を見せ、強引に健人の手にコンビニのレジ袋を握らせて、
なかなか立ち去ろうとしない、健人の背中を押した。

「私なら大丈夫。健人くんが思ってるほど、か弱くないの。」
自分で言いながら、可笑しくなって雪見は笑った。

「か弱いなんて、思っちゃいないよ。
けど、ゆき姉は俺のこととなると、すぐ暴走しちゃうから心配なんだ。
絶対に連絡ちょうだいよ！わかった？」

「わかってるって！行ってらっしゃい。夜にスタジオで待ってるよ。」

こんな状況にも関わらず雪見は、新妻がダンナ様を見送る気分に浸って
健人を見つめる。

健人は後ろ髪を引かれながらも、どうしても穴を開けられないドラマ撮影のために
雪見を残し、マンションに戻ることにした。

「ゆき姉に何かあったら、この俺が許さないから！」そう男に言い残して…。

健人の姿を見えなくなるまで見届けて、雪見はこれから挑む難交渉に向けて
自分の気合いを入れ直す。

「こんなとこに立ってるのもなんだから、そこのベンチに座りましょ。
お化粧しないで出て来たから、少しでも日陰にいないと…。」

雪見は、こんなことになるのなら、きちんと化粧してからコンビニに行けば良かった！と、今更ながら後悔した。
こんなすっぴんに眼鏡で、この公園にあと何時間いるはめになるも

のやら…。
今日が仕事休みの日曜日だったから、まだこうしていられるけれど
これが平日だったら、とんでもない話だ。

っつーか、このしょーもない、健人とは似ても似つかない（と思いたい）
『はとこ』のお陰で私は、夢にまで見た大事な大事な同居初日の朝食を、
すっかり作り損ねたじゃないか！
初日ってのは、もう二度とやって来ないんだぞ！一体どうしてくれよう！

再びそれを思い出した雪見は、無性に腹の虫が収まらない。
が、同時に腹の虫が鳴き止まないことにも、今気が付いた。

「ねぇ、お腹空きません？あなたも朝早くから、あそこで私たちが出て来るのを
待ってたんでしょ？私もお腹ペコペコだから、ちょっとそこのコンビニ行って
朝ご飯買って来ます。あ、逃げも隠れもしないから安心して。
腹が減っては戦は出来ぬ、でしょ？じゃ、待ってて下さいね。」

そう言って雪見は、公園沿いにあるさっき買い物したばかりのコンビニに
再び入り、サンドイッチやおにぎり、飲み物を素早く買って、また
公園へと戻ってきた。

「お待たせしました。サンドイッチとおにぎり、どっちがいいです？
あ、両方でもいいですよ。多めに買ってきたから。飲み物もお好きなのをどうぞ。」

男はおにぎりと緑茶をチョイスし、雪見はサンドイッチとカフェオレを選んだ。
それを口に運びながら、公園の木々を眺める。

ふと、『まさか私達、夫婦になんか見られてないでしょうね。』とか思うと、周りの視線が急に気になって仕方なくなった。
とっとと話をつけて、家に帰ろう！

「いつからカメラマンを？ずっと今の仕事をしてた訳じゃないですよね？」

「以前は新聞社の報道カメラマンだった。この仕事は離婚してから。大体都内の現場が多いから、子供たちのそばにいてやれると思って。」

「そう。お子さんはいくつ？」「五歳と七歳。二人とも男。」

「ヤンチャ盛りだ、大変そう！」「いや、親思いのいい子　だよ。」

一瞬、目を細めて父親の顔になったのを、雪見は見逃さなかった。

「じゃあ、健人くんが戦隊ヒーローやってた時、夢中になって見てたでしょ？」

「そりゃもちろん！『パパはこの人のいとこなんだぞ！』って言ったらいとこの意味を保育園の先生に聞いてきて、『パパ、すごいね！』

って。
しばらくは俺、保育園の先生方の人気者だった！」
そう言いながら男は、嬉しそうに笑っていた。

「ねぇ。じゃ子供たち、健人くんに会わせてあげれば？きっと大喜びするんじゃない？」

「えっ？」　思いもよらない雪見の言葉に、男は目を丸くした。

「今日の夜八時に、健人くんの事務所に子供を連れて来れる？
私達、歌のレッスンがあってスタジオに集まるの。
話を通しておくから、プロとして一番いいカメラを持って来て。
レッスン前に健人くんと子供たちの、記念写真を写してあげよう！
はい、これ私の名刺。なんかあったら、ケータイに電話して。
じゃあ、夜に待ってるからね！絶対来てよ！」

それだけ言うと雪見は、残りのサンドイッチやおにぎりの入った袋を
「お昼に食べて！」と男に強引に手渡し、風のように去って行った。

雪見がいなくなった公園のベンチには、爽やかな緑の風の匂いが残っている。

優しい作戦

雪見が急いでマンションに戻ると、すでに健人は出掛けた後だった。
『ちゃんとお見送りしたかったな…。朝ご飯も作りたかったし…。』
朝ご飯の恨みは、きっと一生消えそうもない。

でも元をたどると、私が昨日冷蔵庫を空っぽにしなければ、予定通りに朝ご飯を作れたわけで。
なんで冷蔵庫を空っぽにしたかと言うと、私が一人デビューをごねてスタジオを飛び出して来たからであって。
ヤケになって料理に走ってしまったばかりに、冷蔵庫が空になって…。
で、冷蔵庫が空だったからコンビニに出掛けて、写真を撮られたという…。
なーんだ、結局は自分のせいじゃん！という所に落ち着いた。

今日は早めに事務所に行って、常務に謝らないと…。
あ、その前に健人くんに連絡しないと、心配してるだろうな…。

なんて考えながら居間に入ってビックリ！自分ちとは思えない、この散らかりよう！

テーブルの上には、サンドイッチの袋と野菜ジュースのパックが散乱してるし、
床の上にはまたしても、猫と遊んだ後と思われる丸めたチラシが多数転がってるし。
寝室に行けば、雪見がいなくて慌ててガバッと飛び起きたままに、ベッドから掛け布団が落ちる寸前であった。

『あっちゃー！整理整頓や片付けが苦手だとは、よくインタビュー記事で読んでたけど
まさかここまでとは！
こりゃ毎日健人くんが出掛けた後は、掃除からスタートだな！』

よし！と腕まくりをし、手際よく部屋を片付けてゆく。
洗濯だって、今日からは二人分。料理の下ごしらえも二人分。
何だって二人分かと思うと、ひとりでに顔がにやけてしまう。

今日の晩ご飯は何にしよう。健人くんの好きなチーズハンバーグがいいかな？
もしかして当麻くんも食べに来るかもしれないから、お鍋にしようか。
あとで買い出しに行ってこなきゃ。ビールも忘れずに…と。

あ！健人くんに連絡するの、すっかり忘れてたぁ！
まずい！あんなに心配してたのに！

それから雪見は慌てて健人にメールを入れた。

お疲れ様。頑張ってる？
私は無事家に帰ったから
安心してね。
話があるから休憩時間に
電話下さい。

ｂｙ　ＹＵＫＩＭＩ

それから三十分ほどで、健人から電話がきた。

「もしもし、健人くん？ごめんね、仕事中に。
あ、私なら無傷だから大丈夫！安心して。
それより、今日は八時のレッスンに間に合うんだよね？あのね…。」
詳しい事の経緯を説明して、今野さんにも協力してもらうことにした。
あとは当麻にも。

「私、色紙持って行くから、子供達にサインしてやってね。
斎藤健人のサインじゃなく、変身前のジュピターレッドのサインだよ！
子供達はジュピターレッドに会いに来るんだから。
当麻くんは戦隊もの、やってなかったっけ？じゃ、三ツ橋当麻のサインでいいや。
うん、当麻くんには私が頼んでおく。今野さんにはお願いね。
大丈夫！きっと上手くいく。だって、健人くんの好きだった義人兄ちゃんでしょ？
元々、悪い人じゃないんだから…。うん、わかった。じゃ、スタジオでね。」
健人はまだ不安げであったが、雪見は必ず上手くいくと自分を信じた。

さて、あとは当麻くんにメールして、買い出しに出掛けよう！
色紙とマジックも買ってこなくちゃ！

夜七時半。みんなより三十分早く事務所へ行き、常務に昨日の非礼をまず詫びる。

「申し訳ありませんでしたっ！私、とっても失礼なことをしてしまったと後悔してます。
あんなに常務と三上さんが私の歌を買って下さったのに、少しも心を開けなくて…。
私にまだチャンスは残ってるでしょうか？
今度は私からお願いします。どうか私をデビューさせてくださいっ！」

雪見は、もしこれで許してもらえなかったら、土下座してもいいと思いながら
小野寺に深く頭を下げ、微動だにしなかった。
だが、雪見の覚悟は無意味で…、あっさりと小野寺はデビューを許可した。

「ありがとうございます！私、本当に頑張ります！
三月に燃え尽きて終われるよう、全力でお仕事しますから！」

「こちらこそ、よろしく頼むよ。
今日からきみの名前は、『ＹＵＫＩＭＩ＆』だ！
最後の『＆』は発音しないが、健人と当麻につながってるという意味でつけた。
三人で、デビューまで切磋琢磨して頑張って欲しい。」

雪見は、その『＆』が何より気に入った。
私は一人じゃない！そう思える事ができて、心強かった。

常務にお礼を言ってからスタジオに移動すると、すでに健人と当麻は来ていて
雪見を温かく迎えてくれる。
「よかったね！ゆき姉。これからよろしく！」当麻が嬉しそう。

「今日から一緒に頑張ろうね、俺たちと。」健人が優しく微笑んだ。

三人で固い握手を交わしていると、スタジオのドアが控えめに開いて一人の男の子が顔だけのぞかせる。

「あっ！ジュピターレッドだ！本物なの！？」パタパタと健人に駆け寄った。

続いて弟も駆けてくる。「本物だよ、兄ちゃん！パパが言ってたもん！」

突然の兄弟の登場に、心の準備がまだだった健人は少し慌てたが、さすがは俳優、

一瞬にしてレッドになりきり、子供達のリクエストに応えて変身ポーズを決めてみせる。

父親である義人も、今野に連れられてスタジオに入ってきた。

「ようこそ。」健人が義人に右手を差し出し、二人は握手する。

それを見て子供達は、「パパって凄いんだね！ほんとにレッドのいとこなんだ！」と、はしゃぎ回った。

健人を真ん中にして子供達が手をつなぎ、義人がプロの顔つきで写真を写す。

子供達の顔は実に嬉しそうに輝いていて、それを写す義人の顔もほころんだ。

最後に雪見が自分のカメラを取り出し、当麻、義人も三人の中に加わって

五人の記念写真を撮ってやる。

「ああ見えてもあのおばちゃん、パパに負けないくらいのカメラマンなんだよ。」
健人が笑いながら子供達にささやいた。

「だーれがおばちゃんよ！まっいいか。じゃ、みんな、おばちゃんのカメラを見てね！はい、チーズ！」
いい写真が撮れた自信がある。みんなが心から笑っていたから…。

別れ際、雪見は鞄からコタとプリンの写真集を取り出し、健人に渡して
今度は『斎藤健人』のサインを入れ、子供達に手渡した。
「今度、埼玉の家にこの猫たちを見においで。待ってるから。」
そう言って健人は、最後の握手を力強くする。

雪見は、「子供達の夢、壊さないでやってね。」とだけ義人にささやいて
手をつないだ三人が、スタジオを出て行くのをそっと見送った。

それ以来、義人が雪見たちの前に現れることは、二度となかった。

初めてのレッスン

「さぁ！じゃレッスンを始めるぞ！」
事務所専属のヴォイストレーナー柴田の掛け声で、雪見たち三人はグランドピアノの周りに集まる。
発声練習から始まり、声を良く出すための練習曲、はたまた腹式呼吸のための腹筋運動まで、
時間のあまり取れない健人と当麻の為に、様々な要素が効率よくトレーニングできるよう、
工夫がされたメニューだった。

「こんな本格的なレッスンは何年ぶりだろう。中学卒業以来だから…、
え？十八年振り？うそだぁ！あれからもうそんなに経つのぉ！？」

小学校中学校と、九年間所属した児童放送合唱団を、退団してからの年数を
指折り数えてみた雪見は、十八年という歳月の経過に気が遠くなりそうだった。
十八年前と言えば、健人達はまだ二、三歳！
そんな赤ん坊のような時期に、雪見はすでに中学を卒業してたなんて！
いまさらながらこの二人との年の差を、目の前に叩き付けられたような気がした。

「健人と当麻は久々のレッスンだけど、割と声が安定してるから大丈夫そうだな。
雪見ちゃんも、合唱団にいた頃のレッスンを思い出したでしょ？
基礎っていうのは、何十年経っても変わらないもんだから。」

柴田の言った『何十年』が、心に再びパンチを入れてきたが、事実なんだから仕方ない！と開き直るよりほかなかった。

「あのぉ、私こんなんで、なんとかなるでしょうか…。」

不安で仕方のない雪見が、柴田に感想を求める。

「大丈夫！三上さんに聞いてた通りだったよ。

凄く魅力的な歌声だ！話し声とはまったく違うね。

基礎が身体に染みついているから、ちょっとのレッスンですぐいけると思う。

デビュー曲、もう歌えるんだって？一度聞かせてもらえる？」

「歌えるって言っても、自分の解釈で歌ってるだけですから…。」

「それでいいんだよ。歌っていうのは、自分の中できちんと消化してから声にしないと

相手には伝わらないものなんだ。

まだスタートの段階なんだから、気にしないで歌ってみて。」

「わかりました。」

スタンドマイクの前に立ち、雪見が目をつぶる。

すでに完成されてる練習用カラオケの前奏が始まり、見開いた雪見の瞳に

健人は見覚えがあった。

それは、カメラを構えた時に雪見が見せる、プロの鋭い眼差しと同じ瞳だっ　た。

真剣で鋭くて、優雅で優しくて、自信に満ち溢れた瞳で写真を写す時と同じ雪見が、

今マイクの前に立っている。

『自分じゃ気が付いてないのかも知れないけど、ゆき姉の中でこの曲は
すでに自分の曲なんだ。だからあんな瞳で…。』

歌い終わって雪見が、『ふぅぅ…。』とため息をつく。
いつも雪見は前奏が始まると、意識が異次元に飛んでいくように歌の世界に入り込み、
一切の雑音が聞こえなくなる。
歌っている最中に緊張などしたことがなく、曲が終ると同時に異次元から
また引き戻される感覚があるのだ。
だから一曲歌い終わると、かなりの体力を消耗してしまうらしい。

聴いていた柴田が言葉を失っている。
初めて雪見の歌を聴いた者は、誰しもがそうなった。

「いや、これは…。驚いたとしか言いようが無い…。
もうきみに教えなきゃならない事なんて、何一つないよ。
とんでもない新人を見つけたもんだ！三上さんは。」

雪見は、柴田の感想があまりにも大雑把で、歌う前より不安になった。

「あのぉ…。もっと具体的な言葉で、ビシバシおっしゃって頂きたいんですけど…。」

「じゃあ、一つだけアドバイスしよう。

もう誰のアドバイスも聞かない方がいい。
今のきみの歌い方を、誰かに壊してもらいたくない。
いいね？今のまま歌い続けていいんだ。もっと自分を信じなさい。
僕のレッスンはこれでおしまい！」

「え？そんなぁ！これでおしまい、って…。」
雪見は困って後ろを振り返り、小野寺に助けを求める。
小野寺は微笑みながら、黙って一度だけうなずいた。

「ヤバクね？これじゃ俺と当麻、完璧に負けるっしょ！」
健人が嬉しそうに当麻を見た。

「っつーか、これ、ゆき姉との競争じゃないっすよね？
競争だとしたら俺たち、可哀想すぎる！」

「おいおい、お前たち！切磋琢磨するんじゃなかったの？
昨日の勢いはどうした！
『俺たち、この事務所の最強コンビだよ？ゆき姉一人に負けるわけないじゃん！』
とか言ってなかったか？」　小野寺は二人を見て笑ってる。

それから一時間ほど、健人と当麻は指導を受けながら自分たちのデビュー曲を歌い込み、
雪見はその間一人で、スタジオの隅にもう一台あるアップライトピアノを弾きながら
自分の歌を自主練していた。

歌えば歌うほどこの曲が大好きになり、自分が書いた歌詞も、より深い所まで

思いが染み込んでいく。
歌えば歌うほど二人への思いが更に強まり、愛おしくてどうしようもなくなる。

『この歌、毎日歌ってたら、どんどん体力消耗しそう！
今日は帰ったら、疲労回復になるご飯を食べようっと。
あの二人も結構バテてきてるみたいだし…。』

「有り難うございました！」健人と当麻が、柴田に挨拶をしている。
どうやら今日のレッスンが終ったようだ。
雪見も慌てて柴田に駆け寄り、挨拶をする。

「雪見ちゃん。きみのデビュー、楽しみにしてるよ。
きっとね、もっと歌うことが好きになると思う。だけど、周りに流されちゃダメだよ。
いつまでも、きみらしさを失わずに歌い続けていきなさい。」

「有り難うございます。私も柴田先生のお陰で、少し自信がつきました。
これからは、迷わないで歌っていけそうです。」

雪見は柴田と握手を交わし、健人、当麻と共にスタジオを後にする。

「さーてと。お腹空いちゃったね！うちでキムチ鍋食べたい人！」
「食べたい、食べたい！」「俺も！」
「よし！じゃあ二人とも手伝ってよ！」

三人は、ワイワイ騒ぎながら今野の車に乗り込む。

雪見のマンションまで送ってもらい、車を降りる直前、雪見が今野に向かって言った。

「今野さんも一緒にキムチ鍋、どうですか？」

健人と当麻が一斉に雪見をにらんだのは、もちろん言うまでもない。

夢の叶え方

「やっぱ、戦隊ヒーローの人気って絶大だよね！
だってもう番組終ってから何年？健人が高三の時でしょ？てことは三年前だ。
それなのに、まだあの子たち信じてたもんね。俺もヒーロー物、やってみたかったなぁ！」
汗を滲ませキムチ鍋を頬張る当麻が、うらやましそうに健人に言った。

「まあね。あの時は学校との両立でしんどかったけど、あれが無かったら
今の俺の人気はないからね。やらせてもらえて感謝してる。
戦隊物ってさ、大体親子で見るじゃん。
だから、一家でファンになってくれる確率が高い！」
健人がビールを飲みながら笑ってる。

「そうか！だから健人のファン層は厚いんだ。納得！
でも、まさか健人のいとこが写真誌のカメラマンだなんてね。
ゆき姉からメールもらって、ビックリしたよ。もう現れないといいけど…。」

「きっと目をつぶっててくれるよ。俺の事、可愛がってくれてた人だから…。」
健人は願いを込めて、そうつぶやく。そしてキッチンに立った雪見に、礼を言った。

「ゆき姉、ありがとね。俺だったらこんな作戦、思いつかなかった。
もしかしたら、お金で解決しようとか思ったかも知れない。

だったら俺って、最低だよね。ゆき姉一人も守れないなんて…。」
そう言って健人はビールを飲み干し、手の中の缶をグシャッと握り潰した。

雪見が冷えたビールを持って戻り、健人の隣りに座る。
「健人くん、それは違うよ。今回は私が健人くんを守りたかっただけ。
健人くんと思い出を守ってあげたかったの。
だって、健人くんにとっては大切な人でしょ?あの人。
私も血が繋がってるわけだし、悪い結果にだけはしたくなかったから。
健人くんが、いつも私を守ってくれようとしてるのは、ちゃんとわかってるよ。
だから危険を承知で、私と一緒に暮らそうと思ったんでしょ?」

「ゆき姉…。俺、本当に何があってもゆき姉を離さないから。
ゆき姉がいない毎日なんて、もう考えられない。」

「健人くん…。」

二人は、ただお互いの瞳を熱く見つめ合った。
雪見が健人の頬に手を伸ばし、ゆっくりと顔を近づける。

と、その時!
「ストーップ!間違っても俺の前で、キスとかしないでよ!」
慌てて当麻が止めにかかる。

「フフフッ…。もうダメッ!
アーッハッハ!見た?今の当麻の顔!最高だったよ!」

「やだ、おかしすぎてお腹が痛いっ！当麻くん、やっぱ可愛いっ！」
健人と雪見が、お腹を抱えて笑い転げてる。

「うそっ！？もしかして、今の芝居だったの？ゆき姉まで？なんだよ、それ！？」
当麻が、バツ悪そうに顔を赤らめる。

「ゆき姉、完璧っ！役者の当麻をだませちゃうんだから。
歌手の次は女優になりなさい！そんでこの三人でドラマに出よう！」
健人が嬉しそうに言う。

「うーん、それはない。三月まで思いっきり歌ったら、早く猫カメラマンに戻らなきゃ。」
雪見は笑いながら言ったが、健人はおろか当麻までもが、急にしゅんとした。

「ねぇ…。なんでそんなに三月にこだわるの？
別に猫カメラマンに戻るのに、約束の期限なんてないじゃん。」
健人が、ずっと気になってたことを、思い切って雪見に聞いてみる。

「そう、期限なんてないよ。だから自分で期限を決めてるの。
じゃないと、いつまでたっても戻れない…。」

当麻もこの際だからと、思ってる事を口にした。
「もし、ゆき姉のデビュー曲がヒットして、事務所が契約の延長を申し入れたら？」

「あははっ！そりゃない！ヒットだなんて、あり得ないから心配ご無用！
あ、もう一つ理由があった。三月は健人くんの誕生日があるから。」

「えっ？俺の誕生日？それと何の関係があるのさ。」

「２１日の誕生日に、ファンとのバースディイベントがあるでしょ？それを最後の仕事にしたいんだ。健人くんの専属カメラマンとして、２２歳のパーティーを最後に写して終るなんて、すっごく素敵じゃない？

絶対に、一生忘れられない仕事になると思う。」

雪見は一瞬、カメラマンの顔になった。

「やだよ！俺は。悲しくて一生忘れられない誕生日になる。」

そう言って健人は、悲しげに目を伏せる。

「ねぇ、健人くん。ごめんね、今日ははっきり言っとく。

この世界は、やっぱり私のいるべき場所じゃない。

なんだか、私の夢からどんどん遠ざかってる気がするの。

だから早くに軌道修正しないと。

健人くん達より私は、十二年も夢を実現する時間が短いんだから…。

それにさ、こうやって一緒に住み始めたんだし、離ればなれになるわけじゃないんだから

今の生活と何にも変わらないって！

あー、やめやめっ！また年の話で暗くなっちゃう！

やだ！お鍋も煮詰まってるじゃない！少しお湯を足さないと…。」

雪見はキッチンへお湯を沸かしに立った。

残された健人と当麻は、すっかり考え込んでいる。

「夢を実現する時間、か…。当麻はそんなの、考えたことある？」

「無い。健人は？」

「俺も無い。っつーか、夢自体ぼんやりしてて、よくわかんないや。けどゆき姉には、はっきりと夢が見えてるんだよね。ある意味うらやましいな…。」

そこに雪見が戻ってきて、健人と当麻に聞いた。

「ねぇ。夢の実現の方法って知ってる？急がば回れで、一番小さな夢から一つずつ叶えていくの。一つ夢が叶うと、『あぁ、夢が叶うってこんなに嬉しいものなのか！』って思って、もう一つ夢を何か叶えたくなる。で、一歩ずつ大きな夢に近づいていくんだ私は、わらしべ長者方式って思ってるんだけどね。健人くんの一番小さな夢ってなに？」

「一番小さな夢？なんだろ。最初に頭に浮かんだのは、お休みもらって一週間ぐらい、のんびり旅行がしたいかな？」

「じゃ、当麻くんは？」

「俺？そうだなぁ。あ！ダブルデート！彼女を連れて健人たちとダブルデートがしたい！」

「いいねぇ、それ！楽しそうじゃん！ディズニーランドとか行けたら最高だねっ！」

「よしっ、決まり！まずは当麻くんの夢、叶えよう！で、昨日は香織のアドレス、聞き出せたのかな？当麻くん。」

「いや、それが…。真由子さんの邪魔が入って　…。」

「ほんとに真由子ったらもう！
当麻くんが自分で聞き出すことに、意義があるんだけど…。
仕方ない！教えてあげるから、あとは作戦考えてどうにかしよう！
きっと叶えるぞ！ダブルデート！」

いやに雪見が盛り上がってる。
それにつられて健人と当麻も、俄然夢の実現が楽しみになってきた！

今夜の飲み会も、まだまだ終わりは遠いに違いない。

エンジェルとキューピッド

健人と雪見が同居を始めてから一週間。
今日１０月２９日（金）は、いよいよラジオで課題曲を発表する日。
そう、『当麻的幸せの時間』の中で三人に出された課題曲『ＷＩＮＤＩＮＧ　ＲＯＡＤ』を
初めてラジオで披露する日なのだ。

ここ一週間、健人と当麻はなんせ仕事が忙しく、デビュー曲のレッスンさえもままならない。
よって課題曲の練習も、三人で合わせたのはいつだったっけ？と言う状態だった。

その日の朝。
昨夜も遅くまでドラマの撮影が続いていた健人を、七時過ぎまでは寝かしておいてやろうと、雪見はそっとベッドを降りる。
今日は八時に今野が迎えに来る予定。
健人は、「美味しそうな匂いに起こされるのが夢だった！」らしいから
毎日雪見は早起きして朝食を用意する。

準備が整ったところで健人を起こしに寝室へ。
毎朝のお楽しみは、起こす前に健人の寝顔をじっくりと鑑賞すること。

翼の折れた天使が飛び立てずに疲れ果て、ここで寝てしまったのか？
そんな錯覚を覚えるほどに、綺麗で可愛い寝顔を独り占めできるのは、

『神様、ありがとう！』と、天に感謝しなければ罰が当たる。
一時間でも二時間でも眺めていたいのは山々だが、いい加減にして起こさなければ！

「健人くん、朝ご飯出来たよ！起きて！」
「うーん…。もう朝なの？」　天使のお目覚めだ。

だが、この天使は少々寝起きが悪い。
別に低血圧って訳でも無さそうだが、パッと飛び起きたためしがない。
しばしベッドの上でゴロゴロし、自然と覚醒するのを待つ。
その間、雪見もベッドに上がり、一緒に隣でゴロゴロするのは至福のひとときと言わずして、なんと言おう。

「今日はいよいよ、課題曲発表する日だよ！
後半、あんまり三人で合わせる時間無かったから、なんか心配。」

雪見は、朝のこの時間に大体のスケジュールを確認したり、意志の疎通を図ったりする。
健人の仕事が忙しい為、思いの外、二人でゆっくりと語らう時間が持てない。
だから毎朝のこの『ベッドごろごろタイム』は、二人がすれ違いにならない為にも、
貴重で大切な時間なのだ。

「大丈夫だよ。俺とゆき姉はここんとこ毎日ハモってるし、当麻だって
ちゃんと練習してるから。うまく合わせられるって。」

「三人で出す初めてのＣＤだもんね！出来上がりが楽しみ！」

「まぁ俺達の歌は、当麻のＣＤのおまけみたいなもんだけどね。
こんな豪華なファンプレゼント、聞いたことないよ！」

「三上さん、太っ腹！」

こんな他愛もない話をしてるうちに、健人はシャキッと目覚める。
今日も忙しい一日のスタートだ！

健人を「じゃ、夕方ね！」と見送り、窓を開けて部屋を掃除する。
今日は出版社に出社予定はないので、ラジオ局へ出向く四時までは家にいられるのだが、
今日一日は歌のレッスンに費やすつもりでいた。

まずは今日が一発勝負の『ＷＩＮＤＩＮＧ　ＲＯＡＤ』を、これでもか！と言うぐらいに歌い込む。
まぁ、この歌は、雪見一人がいくら練習したところで三人の息が合わなければ、
どうもこうもないのだが。
最近益々強まった三人の絆で、なんとかなるでしょう！と思うことにする。

次に一番時間を費やしたのは、勿論デビュー曲。
レコーディングまでは、あと三週間ほどしかない。
今日みたいに三人で、お遊び的に吹き込むレコーディングとは訳が違い
誰を頼ることもできない、自分との孤独な戦いだ。
レッスン初日に、トレーナーの柴田からもらった、ただ一つのアド

バイス。
『誰のアドバイスも聞かない方がいい。』その言葉も、一層雪見を孤独にした。

はぁぁ…。なんか、大好きな歌を歌ってるのに、ちっとも楽しくなら　ないってどういうこと?
こんな気持ちでいくら歌っても、聞いてる人に伝わらない気がする…。
もう今日はこれでおしまいにしようかな…。
そうだ!今日香織、仕事が休みだって言ってたっけ。
ちょっと、メールしてみよう!

雪見は香織に「今、何してる?」とメールする。
するとすぐに「部屋の模様替え」と返信が来たので、「うちに来ない?」と誘ってみた。
「いいよ!」の返事にやった!と雪見は小さくガッツポーズ。
どうやら当麻のダブルデートのお膳立てを、密かに企んでいる様子。
急いでランチの支度に取りかかる。

三十分後、香織がケーキを手土産にやって来た。
「いらっしゃい!会いたかったよ!」「なによ、それ?気持ち悪いなぁ。」

雪見は時間がもったいないと思い、パスタを食べながら早速本題に移る。
「ねぇねぇ。当麻くんからメール来た?」

「え?あぁ、来たよ。雪見が教えたんでしょ?私のアドレス。」

「だってこの前は、真由子に邪魔されて聞けなかったって、当麻くん、
悲しそうだったから。で、なんて書いてあったの？」

「今度みんなでどっか行きませんか？って。
みんなでって、健人くんや雪見、真由子とって事でしょ？」

「真由子はどうかなぁ？私的には四人でって意味かなぁと思うんだけど。四人じゃイヤ？」

「別に雪見もいるし嫌じゃないけど、真由子が聞いたらどうなると思う？」
一番の難関は、香織を誘い出すことではなく真由子だった！と、この時初めて
気が付いた雪見であった。

バレた時の事を考えると身も縮む思いだが、当麻のためだ！仕方ない。
真由子抜きに多少の難色を示した香織を説き伏せ、何とかダブルデートの約束を取り付けた！
後は健人と当麻のスケジュール次第なのだが、これまた忙しすぎる二人のこと、
休みがぶつかる日なんて、いつ来るのだろう…。
と言うか、この先レコーディングに写真集出版イベント、限定コンサート、
デビュー前キャンペーンと、年内のスケジュールはドラマ以外にも目白押し。
ほとんど絶望的だったが、取りあえずは当麻に喜んでもらえるかな？
ラジオ局に行くのが楽しみになってきた。

午後三時半。香織と一緒に車で家を出て、途中買い物をして帰ると言う香織を降ろし、
雪見はラジオ局へと向かう。

少し早くに着いたが、家でじっともしていられず、スタジオのドアを開ける。
「おはようございまーす！」　目の前に当麻が立っていた。
思わずニヤッとしたのだろう。当麻が怪訝な顔をして雪見を見た。

「当麻くん、おはよう！いよいよ今日だね！調子はバッチリ？」

「うーん、ところがそうでもない。なんかここんとこ、疲れが溜まってきて…。」

「あれぇ？こんな大事な日に、テンション低いんじゃない？いかんなぁ！
どれ！お姉さんが元気の出る魔法をかけてあげる！耳貸して。」

雪見がささやいた、ダブルデートの約束交渉成立！の知らせは、
当麻に栄養ドリンク百本飲ませるよりも、確かな効き目があった！

さぁ！あとは健人の到着を待って、最後の音合わせをしよう！
なんだか楽しい歌が歌えそうだ！

緊急告知

「おっはよーございまーす！」

健人がやっと到着した。入ってくるなり、テンションが高い。
何か良いことでもあったのか？

「お疲れ様！ずいぶんとご機嫌じゃない？健人くん、なんかあった？」

雪見がすかさず健人に聞いてみる。

「１１月のスケジュールもらったんだけど、一日だけ休みがあったから
もう、メッチャ嬉しくて！ゆき姉も、１５日は休みを取ってよね！」

「えーっ！健人、休みもらえたの？俺、また一日も休み無かった…。」

当麻ががっかりした顔して言う。

「良かったね！年内はお休みもらえないと思ってた。」

「俺も！でも、その後はしばらく休めなさそうだから、覚悟しとかなきゃ。
あれ？当麻は？なんでマネージャーんとこ行ったんだ？」

ガラスの向こうで当麻が、マネージャーの豊田に両手を合わせて、何かをお願いしている。
その姿を見て、雪見はすぐにピンときた。
必死にお願いする当麻の姿が、なんともいじらしい。

「なにやってんだろ?当麻。」
健人が不思議そうな顔をしたので、香織の話を教えてやった。

「え?そうなの?じゃ、あとは当麻が１５日に休みをもらえれば、ダブルデートが実現できるってわけ?そう!それであんなに必死なんだ。
けど、当麻は俺よりスケジュール詰まってるからなぁ…。
豊田さんにお願いしたって、無理なんじゃね?」

「まぁね。けど取りあえずは全力でお願いしてみるとこが、当麻くんらしいじゃん。」

そこへ三上が入ってきて、本日の打ち合わせがスタート。

「今日は大事な事が二つある。一つめはもちろん課題曲の録音だ。
課題曲は番組のエンディングで歌ってもらう。
一発録りだから、みんな準備だけはしっかり頼むぞ。
打ち合わせが終ったら、すぐに最後の音合わせをしてくれ。

もう一つ、こっちの方が今日は重要だ。
さっき、健人たちの事務所と打ち合わせた結果、今日の放送内で急遽、
三人の来年1月5日ＣＤデビューを、発表することに決まった!」

「ええーっ!?今日、いきなり発表しちゃうんですかぁ!?」

三人が驚くのも無理はない。
報道各機関にも、まだどこにも発表していないのに、いきなりラジ

オで告知するなんて！
来月２０日のレコーディング後に発表と聞いてた三人は、まだしばらくは
のんびり生活できると考えていたのだが、今日発表となると明日から、
いや放送直後から生活は一転するだろう。
きっと蜂の巣を突いたような騒ぎになることは、間違いない。

三上が言葉を続ける。。
「今日の放送は、当麻と健人のファンのみならず、今までこの放送を聞いたことの
なかった層にまで口コミで広がって、三人の歌は今、相当な注目を集めている。
だから今日、本人たちの口から直接発表するということは、マスコミが
事務所の公式文書をそのまま発表するよりも、はるかに衝撃的だろう。
もちろん明日にはマスコミ各社に正式発表をするがな。

『誰よりも先に、ファンのみんなに自分たちの口から直接知らせたかった。』
そう伝えるんだ。きっとさら　に一生懸命応援してくれることだろう。」

「えーっ！てことは、課題曲が上手く歌えなかったらすべてが台無しと言うか、
下手したら前評判ガタ落ちで、デビュー後の人気にも影響が大きいじゃないですか！
こんなことしてる場合じゃない！早く音合わせしないと！」

当麻たちは焦っていた。
こんなことになるのなら、もっと真剣に三人で歌い込めば良かった！と。
いつも思うのだが、どうもタレントというのは、会社の中の一つの駒に過ぎないらしい。
現場の都合で駒をあっちに動かされたり、こっちに動かされたり。
そこに駒の都合などは、まったく関係ないのだ。

健人は、『あぁ、これで休みは無くなった…。』とぼんやり思った。
いつものことだと諦めようとする自分に、ずいぶん大人になったもんだと苦笑いをする。

「よし！そうと決まったら、やるっきゃないでしょ！
絶対に完璧に歌うからね！健人くんも当麻くんも、気合い入れて歌ってよ！」
雪見は、健人が何を感じているのかを読み取れた。
だから自分が二人の気持ちを盛り上げていかないと、モチベーションが下がって
いい歌など歌えないと思った。

「そうだね。みんなが俺たちのデビューを、ワクワクして待っててくれるような
そんな『ＷＩＮＤＩＮＧ　ＲＯＡＤ』を歌おう！じゃ、ギリギリまで練習、練習！」
当麻も気持ちを切り替えて、その場の空気を盛り上げる。
健人はやっと微笑んで、「よっしゃ！やりますか！」と椅子から立ち上がった。

♪　曲がりくねった道の先に　待っている幾つもの小さな光

まだ遠くて見えなくても一歩ずつ　ただそれだけを信じてゆこう

三人は、出だしだけを何度も何度も繰り返し歌う。
ここさえ完璧に歌えれば、あとは問題ない。

「もうここまで来たら、お互いを信頼して楽しく歌おうよ。
自分たちが楽しんで歌えば、多少コケたってみんなに伝わるさ！」
当麻の意見に二人とも賛成だった。

「そうだよね。それにさ俺たち、元々は俳優とカメラマンなわけだし、
みんなだってそのつもりで聞いてるよ、きっと。
だから失敗しても、『まぁ良くやった！』と思ってくれるだろうし、
成功したら、『凄い凄い！』って褒めてくれるだけさ。」
健人が笑って言った。

雪見は、二人がそう言ってくれて、少し気が楽になる。
健人と当麻の人気に傷を付けてはいけないと、いつの間にか肩に力が入っていた。

「良かった！そう思っててくれるなら、私も失敗を恐れずに、力一杯歌うことが出来る。
そうそう！私はなんたって猫カメラマンですから！
もし失敗したら、『誰よ？猫カメラマンなんかに歌わせたのは！』って、
三上さんのせいにしちゃおうっと！」
雪見が笑いながら三上に視線を向けると、ガラスの向こうで三上が首をすくめた。

「よーし！じゃあそろそろスタンバイして！
デビューの告知は、こっちで流れを見て指示出しするから。
リスナーの反響を知りたいんで、わりと早めのタイミングで告知になると思う。
伝えなきゃならない事は、そこに書いてある通り。
それだけきちんと告知したら、あとはそれについて、三人で自由に喋ってかまわないよ。
当麻、頼んだぞ！上手くリスナーを盛り上げてくれ！」

「ＯＫ！まかせて下さい、三上さん。絶対にみんなの記憶に残る放送にしてみせるから！
じゃ、よろしくお願いしまーす！」

いよいよ、運命の時間がやって来た！

初歌！

「みなさーん！元気でしたか？今週も金曜日がやって来ましたよ！
『当麻的幸せの時間』お相手の三ツ橋当麻です。
今日は何の日か知ってる人！そうです！毎月最後の金曜日は、課題曲の発表会の日です！
と言うことで、先週に引き続きこの二人も一緒だよ！」

「どーもー！斎藤健人です！いやぁ、今日の緊張感は身体に悪いわ！俺、腹痛くなってきたもん。」

「おいおい！初っぱなから、それはないでしょ、健人くん。
今日は大事な日なんだから頼むよ！
あれ？隣の人もビミョーな顔してるし！大丈夫？ゆき姉！」

「ぜんぜん大丈夫じゃない。どうしよう、私もお腹痛くなってきた。」

「な、なんでこの一族は、すぐお腹が痛くなるの？
やめてよ！歌ってる途中で、二人してトイレに抜けるのだけは。
今日は三人揃っての課題曲なんだからねっ！」

「わかってるって！どうでもいいから、早く進行して。」
健人のドキドキ感が、隣りに座る雪見にも伝わってくる。

「よし！ホントはもっと引っ張ってから、告知しようかと思ったんだけど、
多分リスナーさんからの反響が凄いと思うから、もう、さっさと発表しちゃいましょう！」

「えーっ！もう早、言っちゃうのぉ？当麻、もうちょっとじらすとか何とかすれば？もったいなくね？」

「だってさ、俺らがゴチャゴチャ言ってても、聞いてる人は何の話かさっぱり見当も付かないで聞いてるんだよ？面白くないでしょ、それじゃ。それよりとっとと発表して、みんなで盛り上がりたいじゃん！」

「それもそうだね。じゃ、代表して年長者のゆき姉、お願いします！」

健人にいきなり振られて、雪見はびっくり！

「うそっ！？私が言うのぉ？やだ、当麻くんが言ってよ！」

「じゃ、こうしよう。自分の事は自分で言う。これならいいでしょ？」

「うん、わかった。では、お先に発表させて頂きます。えーと、わたくし浅香雪見は来年1月5日、CDデビューさせて頂くことになりました！ふぅぅ…。では次、当麻くん、どうぞ！」

「ええーっ！？それだけで終わり？」

「いや、詳しい話は後でいいでしょ。私一人がデビューすると思われても困るから。いいから、早く当麻くんたちも発表しちゃって！」

「よし！じゃあ発表します！俺、三ツ橋当麻と斎藤健人は…。

結婚することになりましたっ！」

「違うだろっ！何いきなり、訳わからんこと言ってんだよ！
どうすんの？明日のスポーツ紙一面トップ記事が、それだったら！
早く訂正しないと、ツィッターで流されちゃうよ！」
ガラスの向こうのスタッフ達も、みんなで大受けしてる。

「ごめんごめん！じゃ、改めて発表します！
俺と健人もユニットを組んで、ゆき姉と同じ1月5日、念願のCD
デビューを
果たす事が決まりました！イェーイ！どう？これでいい？」

「OK！取りあえずはいいでしょう！あー、疲れた。やっとお腹痛
いの治ってきた。」
健人がホッとした表情を見せた。

「じゃあ、もっと詳しく伝えた方がいいんじゃない？
これだけの情報だと、二人のファンは混乱するよ、きっと。」

「そうだね。じゃあ今度は俺から話させて。
俺と当麻は、踊りに力を入れたツインボーカルのユニットになる予
定。
俺、高校ん時ずっとダンス習ってたから、ほんとに念願の！なんだ
よね。
歌はまぁ普通だとは思うけど大好きだし、何より当麻とユニットを
組めるって言うのが
今回は一番嬉しい！当麻は？」

「俺もね、実はCD出せる事よりも、健人と一緒にやれるのが一番
嬉しいんだよね。

こんなことをプロデュースしてくれた、この番組のプロデューサー、三上さんに感謝感謝の日々です。頑張ろうな！健人。」

「はいはい！そのまんま、本当に結婚しちゃいなさい！まったく、どこまで好き合ってんのよ、この二人。」

「あー、妬いてんだ、ゆき姉！ごめんね、しばらく健人を借りるから。」

「ちょ、ちょっと！変なこと言わないでよね、当麻くん！もういいでしょ？二人の告知は。じゃ、次は私の番！えーと、私はアーティスト名がローマ字表記で『ＹＵＫＩＭＩ＆』と言います。最後につく『＆』は発音しないんだけど、健人くんと当麻くんにつながってる、って意味があるんだよね。めっちゃ気に入ってます！で、デビュー曲はとっても素敵なバラードで、歌詞は私が書かせてもらいました。『君のとなりに』って言う題名をつけたの。どう？」

「えーっ、そうなの？いいじゃん、いいじゃん！あのね、みなさん。ゆき姉の歌は泣けます！あ、悲しい歌って意味じゃないよ！心に染み込んできて、自然と涙が溢れるって言うのかな？知らないうちに涙が出てるの。俺と当麻は泣きました！もちろんです。」

「あっれー？あんな所になぜかキーボードが置いてある！あ！きっと神様が、一足早くみんなに聞かせてあげなさい！って置いてったんだ！」

当麻がわざとらしい演技で、誰に言うともなくニヤニヤと言った。

「んなわけないでしょ！どーりでさっき、ＡＤさんがキーボードだけ片付けないで行ったからおかしいと思ったんだ！ダメでしょ？レコーディング前に歌っちゃ！」

「プロデューサーが向こうでＯＫサインを出してるんだから、いいんだって！」

当麻が強引に押し切ろうとする。

「もし事務所に怒られたら、みんなのせいにするからね！知らないよ！」

雪見は健人に笑顔で背中を押され、渋々キーボードの前に座る。

「はぁぁ…。まさかここで歌うことになるとは…。仕方ない！猫カメラマンが歌う歌だから、期待しないで聞いて下さいね。では『君のとなりに』、聞いて下さい。」

雪見は少し目を閉じた後、静かにキーボードを奏で始める。すでに自分だけの世界に入り込み、何かが乗り移ったかのように先ほどまでとは明らかに違う瞳をしていた。

雪見が歌い終わったあと、とんでもない騒ぎになるとはこの時まだ誰も気がつかなかった。

大反響

「はぁぁ…。」

歌い終わって雪見は、またしても大きく息を吐いた。
息を吐ききる事は、自らを現実に戻す作業のようにも見える。

しかし、この静けさは一体なんだ?
ラジオ番組なのに、しばしの沈黙が続くのはいかがなものか。

「ちょっと!歌い終わったんだから、なんか言ってよ!
人をムチャ振りで歌わせといて、この沈黙はあんまりじゃない?
これ聞いてる人が、ラジオ壊れたかと思うでしょ!
ごめんなさいね、みなさん!決してあなたのラジオ、壊れてませんから。」
雪見が、ボーッとしてる健人と当麻に向かって、渇を入れる。

「ご、ごめん!なんか初めて聞いた時よりも、胸が詰まっちゃって…。
うまく説明できないけど、細胞の一つ一つにゆき姉の言葉が入っていった気がした。」
健人がやっと我に返って、慌ててコメントする。

「俺も危うく、また泣くとこだった!やっぱゆき姉って、ただの猫カメラマンじゃないね。
こっちが本職で、カメラマンは世を忍ぶ借りの姿じゃないの?」

「失礼だね、当麻くん!なんてこと言うの!れっきとした猫カメラマンですけど、なにか?」

ふとガラスの向こう側に目をやると、なぜかスタッフが全員で、あたふたと
右往左往しているのが目に飛び込んできた。

「はぁ？みんな、どうしちゃったんだろ？なんかあったのかな？
ま、まさか、私がまだレコーディングもしてない歌を、公共の電波に乗せちゃったから
なんか問題になっちゃってるとか…。
やだぁ、だから言ったでしょ！事務所に怒られる！」
雪見は、完璧に自分の歌のせいで、苦情でも殺到しているのだと思い込んでいた。

健人と当麻も理由は解らないが、何か大変な事態が起きていることだけは間違いないと、
スタッフたちの様子を見ながら内心ビビッていた。

ディレクターからの指示も、もらえる状況じゃなさそうだし、
とにかく三人でこの場をつなぐしかない。

「ね、ねぇ、健人は俺たちのデビュー曲、どう思う？
俺、あんなかっこいい曲もらえて、メチャ嬉しいんだけど。」
当麻の視線は健人ではなく、ガラスの向こうに行っている。

「あ、あぁ。俺も大好きだよ、あの曲。きっとみんなにも気に入ってもらえると思う。
ダンスもまだ練習中ではあるけど、ほぼ完璧に近づいてきてるよね。
これまた、ダンスもカッコイイんだな！みんなにも覚えて踊って欲しい。」

「これ、忘年会なんかで完璧に歌って踊れたら、一気に人気者になれるよ絶対！
今年の忘年会、女子はゆき姉の歌、男子は俺たちの歌で決まりだねっ！」

「当麻ぁ！だからＣＤ発売は来年の１月５日だって、さっきから何回告知してんの？
今年の忘年会は間に合わないの！」健人が呆れたように当麻を見た。

「そうだった！おっしいねぇ！てことは紅白も無理だって事？」

「あったりめーだ！どこ狙ってんのよ、当麻は。びっくりするわ！」

その時だった！ディレクターからやっと当麻に指示が来た。
曲を一曲挟め、との事。ガラスの向こうにＯＫサインを出す。

「では、ここで一曲お届けします。尾崎豊で『Ｉ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵ』。
健人ぉ、愛してるよ！」

「だからぁ！新聞に載るっつーの！」

「はい！曲に入りましたぁ！」の声と同時に、三上が重たいドアを開け
当麻の元に飛んできた。

「おいっ！大変な事になってるぞ！
雪見ちゃんの歌が大反響で、問い合わせの電話やファクス、メール

がパンク状態だ！
それに、すでに外には報道陣が集まり出したらしい！」

「ええっ！うそっ！？」三人が驚きの声を上げた。

「取りあえず、ここにある分のメールを紹介しとけ！もう少しでエンディングだから、
あまり時間は割けない。残りはまた来週紹介します、とでも説明して課題曲に移る。じゃ、あとは頼んだぞ！」
それだけを早口でまくし立てると、小走りにブースを出て行った。

「なんか、大変な事になっちゃってるよ…。」
健人が、まだ収まる気配のないスタッフの慌てぶりを横目に、茫然としている。

「どうすればいいの？私。絶対に怒られるよ、常務に…。」
ガラスの向こうで今野が、ずっと誰かと電話してるのが気になった。

「とにかく落ち着こう！俺がメールを読んでる間に落ち着いて！
課題曲を失敗するわけにはいかなくなったから…。
これを失敗したら、きっと一生後悔するよね？」
当麻の言葉に二人がうなずく。

「曲、あと十五秒で明けます！」

「よし！最後まで頑張るよ！」当麻が自分にも言い聞かせるように、二人に言った。

「ちょっと、みんな！今スタジオは大変な事態になってます！

ゆき姉の歌に対しての反響がもの凄くて、電話、ファクス、メール共に
パンク状態になってしまいました！
せっかく感想をお寄せ頂いても、今は繋がらない状態なので、
もうしばらく待ってから感想をお寄せ下さい。

って事で、いやぁここまで反響が凄いとは！びっくりだね！
ゆき姉はどう？これ、みんなゆき姉に来たメールやファクスだよ！
時間がないから、ほんの一部しか紹介出来ないんだけど…。
じゃ、これにするかな？

えーっと。『当麻くんを始め健人くん、ゆき姉、いつも楽しく聞かせてもらってます。』
どうもありがとね！『まずはデビュー決定、本当におめでとうございます！
嬉しくて嬉しくて、飛び上がって喜びました！
特にゆき姉の歌！こんなに心に響いた歌声は、生まれて初めてです！
ちっとも悲しくなんかないのに号泣してしまいました。
これってラブソング…ですよね…。
ゆき姉にこんな素敵な歌をプレゼントされた人は、究極の幸せ者ですね！
もしかして、そこの二人だとか？
どうか、いつまでも仲良しな三人でいて下さい。
今日の課題曲も楽しみにしています！がんばれぇ～！！』
横浜にお住まいのラジオネーム、松ぼっくりさんからのメールをご紹介しました。

なんか、ゆき姉のことなんだけど、自分が褒められたみたいで嬉しいよね！
他にもたくさんのメッセージ、ありがとうございました！

今日は時間が無くなっちゃったから、また次回にご紹介したいと思います。
じゃ、いよいよ課題曲の発表会といきますか！あー、ドキドキする！」

三人は椅子を立ち上がり、それぞれのスタンドマイクの前にたった。
深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。

「楽しく歌おう！私達、やればできるよね！」
雪見がニコニコしながら、健人と当麻の瞳を見つめた。

「うん！大丈夫！」「絶対いけるよ！」

三人の歌う『ＷＩＮＤＩＮＧ　ＲＯＡＤ』も、このあと大反響を呼ぶのであった。

嬉しい悲鳴

「はぁぁ～、終ったぁ…。」

三人が課題曲の『ＷＩＮＤＩＮＧ　ＲＯＡＤ』を歌い終わり、今日の放送は終了した。
たった三十分の放送なのに、人生で一番長い三十分であった。
いつもなら、すぐに『お疲れ様でしたぁ！』とブースを出る三人だが、
今日は精も根も尽き果てて、再び椅子に座り直す。

「どうだったんだろ？俺たちの歌。上手く歌えてたのかな…。」
健人が心配そうに当麻と雪見を見る。

「私は、歌ってて楽しかったから、良かったと思うよ！
健人くんたちも、綺麗にハモれてたから大丈夫！自信持って。」
雪見は、やっと重圧から解放されて、いつもの笑顔に戻っていた。

「三上さん！お忙しいとこすみませんが、今の俺たちの歌、聞かせてもらってもいいですか？」
当麻がマイクを通して、ガラスの向こうでまだ忙しそうな三上に話しかける。

「あぁ、いいよ！今準備させる。
安心しろ！お前達の課題曲に対する反響も相当だから。
今日は俺たち、いつ帰れるかわかったもんじゃない。
良かったな！これでお前達のデビューも、きっと上手くいく！」
ガラスの向こう側から三上が、三人に笑顔でガッツポーズを贈った。

それを聞いて健人たちは、やっと安心することができた。
凄腕プロデューサーからもらった言葉は、突然のデビュー決定から今まで、
足元の見えない不安感に怯えながら、雲の上をふわふわ歩いていた三人を
しっかりと地上に降ろしてくれた気がした。

「良かったねっ！三上さんのお墨付きをもらったよ！」
雪見がそう言うと、二人は嬉しそうに微笑んだ。

と突然、♪曲がりくねった道の先に～　と、雪見たちの歌声が聞こえてくる。
三人は神経を集中させて自分の声や音程、ハモりのバランスなどに注意しながら聞いてみた。

ついさっき、歌い終わったばかりの歌を聴き終え、またしても三人は
「はぁぁ…。」とため息。

「ねぇ。なんかいい感じじゃね？」健人がニヤッと笑いを浮かべて当麻を見る。

「うん。もしかして完璧ってやつ？っつーか、マジ完璧でしょ、これ！
すっごくない？俺たち！」
当麻の弾けるような笑顔に、健人と雪見も笑って「凄い凄い！」と相づちを打った。

「あとは心おきなく、デビュー曲の練習に没頭出来るね。
けどさ、課題曲の練習って大変だったけど、もう三人で歌う事が無

くなると思うと、
ちょっと寂しいかな　。」
雪見が名残惜しそうにそう言うと、いきなり当麻が「あっ！」と大声を上げた。

「ゆき姉の騒ぎで三上さん、来月の課題曲発表を忘れてる！
まぁ、今日は仕方ないか。聞いてから帰らなくちゃ。
健人も今日はこれでおしまいでしょ？
久々に『どんべい』行って、三人で打ち上げしない？」

「それいい！賛成！行こ行こ！」健人たちがワイワイ言いながらブースを出る。

「お疲れ様でしたぁ！なんか、まだまだ忙しそうですね。
三上さん！俺、今気付いたんだけど、来月の課題曲、発表し忘れてますよ！」

「あぁ、いいの。しばらく休止にするわ。お前もデビューの準備で忙しくなるし。
帰るのか？外は報道陣が詰めかけてるって、一階の受付から連絡入ってたから
気を付けて帰れよ！俺らはお前達のお陰で残業だ！」
そうは言いながらも、三上はニコニコと上機嫌である。
予想以上の大反響に、これは勝算有り！とにらんだのであろう。
忙しさも嬉しい悲鳴と言ったところか。

だが、三人が出て来るのを待っていた、健人と当麻のマネージャーは、
嬉しい悲鳴どころか本物の悲鳴を上げていた。

「今日はここから出るのが、至難の技になるぞ！
三上さんが言った通り、外は報道陣とファンでごった返してる。
明日は三人で記者会見することが決まったから、詳しくは明日の会見で話します、と答えろ。
今日はこのまま事務所に直行して、常務と打ち合わせだ！」
今野の話に三人は、『どんべい』がぁ…とがっくりきた。

「しゃーないね。打ち上げはまた今度にしよう。じゃ、行きますか！」

当麻たちは、まだリスナーからのファクスやメールの整理に追われているスタッフに
労いの言葉をかけ、恐縮しながらスタジオを後にする。
当麻のマネージャー豊田が、外に出てマスコミ対応をしている間に
健人たち三人は、今野の車で事務所へ向かうことにした。

地下駐車場までエレベーターで下りる。
今野のワゴン車に乗り込み地上に出た途端、車の周りを報道陣やらファンに、
一瞬にして取り囲まれてしまった。どうやっても前に進めない。
豊田が、「危ないですから退いて下さーい！」と、車の横で声を張り上げているが
誰もそんな事、聞いちゃいない。

「しょうがない、当麻。窓を半分開けて、明日会見場で待ってます！とでも笑顔で言っとけ。
あいつら、写真の一枚でも撮らないと社に戻れないんだろうから。」

「了解です！ゆき姉、写真用のいい顔しといてよ！」

「写真用のって、どんな顔してればいいのよ！」「普通でいいから！」
初めての出来事に焦りまくっている雪見を、真ん中に座る健人がなだめた。

「じゃ、開けるよ！」
当麻が窓を開け始めた瞬間から、もの凄い数のフラッシュがたかれ雪見は目が眩み、いい顔どころではなくなった。

「せっかく集まっていただいたのに、すみません！
明日の会見でご質問にはお答しますから。みなさんのお越しをお待ちしてます！
あと、ファンのみんなぁ！1月5日、CD買ってねぇ！」

当麻と健人は、余裕の笑顔でピースサインを、多くのカメラに向かってサービスした。
二人の奥に座った雪見に、そんな恥ずかしい事が出来る訳はない。
しかも写真用のいい顔なんて…。

「よし！窓を閉めて車を出すぞ！」今野が静かに車を発進させる。
ホッと一安心してるところで、当麻のケータイにメールが届く。

「あっ！香織さんからだっ！」当麻の嬉しそうな顔！

「何だって？早く教えて！」雪見が健人を乗り越えるようにして身を乗り出す。

「ラジオ聞いてたよ！だって。三人の歌が凄く良かったって書いてある。
ゆき姉のデビュー曲も良かったと伝えてくれ、って。」

「えーっ！当麻くんへのメールだけで済まそうとしてるな！さては。で、そんだけじゃないでしょ？他にも書いてあるでしょ？なに、そのニヤついた顔は！早く教えなさいよ！」

「今度、デビューの前祝いしなきゃねっ！だって…。俺と、って事？そうだよね、健人！俺と二人でって意味でしょ？」

「うん、まぁそうなんじゃない？良かったね、当麻！」

香織の性格からして、二人きりって意味じゃないだろうなぁ…とは思ったが、
当麻があまりにも一人で盛り上がってるので、ほっとくことにする。

さぁ、もうすぐ事務所に到着だ！雪見は顔と心をキリッと引き締めた。

マネージャー交代

事務所の入ったビルの前にも報道陣はいたが、守衛さんががっちりガードしていて
セキュリティーも厳しいので、混乱になることはなかった。

真っ直ぐ会議室に行くとまだ誰もいないので、今野が小野寺を呼びに会議室を出て行った。
しばし三人だけでおしゃべりを楽しむ。

「ねぇ。常務、俺たちのユニット名、なんて付けてくれたかな。」
健人が当麻に聞いてみる。

「かっこいい名前だといいね。なんかドキドキしてきた、俺。」
雪見はすでにアーティスト名を付けてもらったが、健人と当麻は今日、
名前をもらうことになっていた。

「私は明日の会見の方がドキドキだよ！一体私に何を話せって言うの？」

「それをこれから打ち合わせするんじゃん！大丈夫だよ。俺も当麻も一緒なんだから。」

そこへ「待たせたな！」と言いながら、常務の小野寺が入って来た。
三人とも背筋がピンと伸びる。
小野寺の後に続いて今野…ともう一人、雪見の知らない女性が入って来た。

誰？と思っていると、健人と当麻が同時に「夏美さん！」と声を上げた。

「お疲れ様！二人とも頑張ってるようね。」
その、美夏さん！と呼ばれた女性は、健人たちに向かって柔らかな微笑みを見せる。
誰なんだろう、この人…。

「紹介しよう、小林夏美くんだ。
彼女には今日から、雪見ちゃんのマネージャーを務めてもらう。」

「えっ！私のマネージャーさん、今野さんじゃなくなるんですか？」
雪見が驚いた顔をして、小野寺を見た。

「今日の反響からすると、明日の記者会見以降、取材申し込みなど仕事が殺到するのは間違いない。
この先、今野一人で二組のアーティストを担当するのは不可能だ。
だから小林に急遽、雪見ちゃんのマネジメントをお願いした。
彼女はここ何年か、タレントのマネジメントからは遠のいて、俺の片腕として
サポートしてもらってたんだが、こんな緊急事態だ。
来年三月まで、マネージャーに復帰してもらう。」

「よろしくね、雪見さん。けど明日からは雪見、と呼び捨てにさせてもらうけど。
常務も、いつまでもちゃん付けで呼んでちゃダメですよ。
彼女はもう立派な、うちのアーティストなんですから。」

雪見は一瞬で、彼女が只者ではないことを察知した。
年齢は雪見より少し上の３５、６か？

美人でグラマー、口元のホクロがセクシーだが、冷酷なやり手ビジネス
ウーマンといった印象を受ける。
常務に意見できるのだから、かなりの人物と見た。
が、困ったことに、雪見の一番苦手とするタイプでもある。
本当にこの人が、私のマネージャーに？

「マネジメントは、彼女に任せておけば完璧だ。
年も近いし、公私に渡って力を貸してくれることだろう。」
小野寺の話に、また彼女が意見する。

「公のマネジメントは完璧だとは思いますけど、私生活に関しては私、
常務や今野さんみたいに甘いこと、一切言いませんから。
特に男関係の乱れてる新人には、容赦なく指導入れるんで、そのつもりで。」
そう言いながら、最後に雪見を見て意味ありげに微笑んだ。

絶対に健人との付き合いを指していると思った。当麻との関係も…。
だが彼女は雪見の反応を確かめるかのように、視線を外さない。
雪見は、猫ににらまれたねずみのように、身動き一つ出来なくなっていた。

「相変わらず手厳しいなぁー、夏美さんは。
雪見ちゃんは俺がここまで面倒見てきたんだから、この後もよろしく頼みますよ。
お手柔らかにねっ。」
今野が、雪見を猫から逃がしてやろうと助け船を出す。
だが夏美は、豊かな胸の前で細い腕をしなやかに組み、

「相変わらず甘いなぁ！今野さんは。」と一瞬だけニコリとしたがそのあとの瞳は、一つも笑ってはいなかった。

雪見も健人も、当麻や今野さえも大変な事になってしまった…と思い、息を潜める　。

「さあ、時間が無い！明日の打ち合わせに移ろう。」
小野寺の一声で、話題は明日の記者会見になる。

健人と当麻のドラマ撮影の都合で、会見は夜九時から行なわれることに決まった。
場所は『ヴィーナス』編集長吉川の口添えで、健人の写真集記者会見が行なわれた
出版社の大ホール。かなりの報道陣の数が見込まれていた事もあるが、
三人がデビュー後に行なわれる、五大都市ツアーのスポンサーが『ヴィーナス』でもあるので、その告知も兼ねていた。

「会見は小林の司会で行なう。彼女ならどんな不測の事態にも対応出来るからな。
基本、外からの質問は受け付けないことにして、こっちで用意した質問を小林がして、
お前達三人が答えると言う型式で進めたい。」

「常務！肝心な事、まだ聞いてませんけど。
俺たちのユニット名と、デビュー曲の題名、早く教えて下さい！」
当麻が、早く聞きたくて待ちきれない、と言った様子で小野寺に催促する。

「おぉ、そうだった！小林、あれを配ってやってくれ。」「わかりました。」

それは明日の記者会見で来場者に配る、三人のプロフィールやデビュー曲の題名、
アーティスト名などがまとめられた資料であった。

「俺たちのユニット名は…『ＳＰＥＣＩＡＬ　ＪＵＮＣＴＩＯＮ』（スペシャルジャンクション）
デビュー曲は…『キ・ズ・ナ』だって！
ユニット名、メチャかっこいい！」
当麻が大声を出して喜んだ。

「スペシャルジャンクションって直訳すると、特別な接合点って意味ですよね。
なんか、ユニット名もデビュー曲の題名も、俺と当麻の関係を表したい名前だなぁ。
ありがとうございます！素敵な名前を付けて頂いて。」
健人が小野寺に向かって頭を下げる。

「でな。三人の全国ツアー名は、二つの名前が合体して
『ＹＵＫＩＭＩ＆ＳＰＥＣＩＡＬ　ＪＵＮＣＴＩＯＮ　絆　２０１１』に決定した。
『ＹＵＫＩＭＩ＆』の『＆』は、ここで健人たちにつながったわけ。」
小野寺が、「ナイスだろ？」と自慢げに言うと、健人たちは「すっげー！」と驚いた。

「これ、明日予定している質問だから、しっかり目を通しておいて。」

男たちの無邪気な戯れを横目に、夏美は表情一つかえずに淡々と打ち合わせを進める。

「いい？いきなり最初から、スキャンダル発覚！なんて事にはならないように、
くれぐれも頼んだわよ。」
夏美の言葉が、健人と雪見の胸を貫いた。

どうなっちゃうの、私たち…。

救われた二人

記者会見の打ち合わせを終え、小野寺が「じゃ、明日頼んだぞ！」と言いながら、会議室を出て行った。

今野や当麻たちも、夏美に何か言われる前にそっと帰ろうと、ドアに近づいたところで
「ちょっと待って！」と後ろから声を掛けられてしまった。

「会見の前に、あなた達に確認しておきたい事があるんだけど。」
夏美の言葉に全員がドキッとする。

「まずは雪見…さん。契約上、明日からは私がマネージャーです。マネージャーとタレントって言うのは、お互いの信頼関係の上に成り立つ
間柄だってことは、あなたにも理解できるでしょ？
私はあなたをこれから、全面的に信頼しようと思ってるんだけど、あなたはその思いに答えてくれるのよね？」
夏美は、またさっきと同じ目をして雪見をじっと見つめる。

巧みな誘導だと思った。
夏美の言う信頼とは、ここでは無論「健人や当麻とは、仲を清算してくれるのよね？」
という事を指し、イエスとしか返答しようのない言い方をして雪見を追い込んだ。

どうしよう。今の三人の関係を自分で壊すなんて、考えられない。
この関係が成り立っているからこそ、私は今ここにいるのだ。
それを自ら壊してまでデビューする意味など、どこにも存在しない。

大体、この人さえ登場しなければ、すべては上手くいってたのに…。
この人とは、どこまで行っても仲良くなれそうもない。
どうしたらいいんだろう…。

その時だった。途中で廊下に出て行った今野が戻って来て、夏美の前に立った。

「夏美さん。やっぱ俺が雪見ちゃんのマネージャー、続投することになったから！」

「なんですって！？どういう事よ！」夏美が目を剥いて今野に食ってかかる。

「健人には、サブマネージャーの及川を付けることにした。
今、小野寺さんに許可をもらってきたよ。」

「何を勝手なことを！」今野の話に夏美が唖然としている。

「そろそろあいつを、チーフマネージャーに上げてやらなきゃな、と思ってたとこなんだ。
けど、まだあいつも一人前とまではいかないから、来年三月までは俺が雪見ちゃんのマネージャーをやりながら、健人のサブに付いて、手の空いてる時には及川の指導をする。
まぁ、健人のスケジュールに比べりゃ、雪見ちゃんのスケジュールなんて知れてるからね。
及川さえ健人のチーフとして付いててくれれば、雪見ちゃんのマネジメントとの
両立くらいわけないさ。」
今野が雪見に向かって微笑んだ。

「いいんですか？本当に私のマネージャーさんで！？
私は嬉しいけど、でも健人くんが困るんじゃ…。」
複雑な思いで健人の顔を見る。

「俺？俺だったら平気だよ。及川さんとは年が近いから話が合うし、好きな漫画も食い物も同じだし、今までだって一緒に仕事してきたんだから
今野さんがいなくても、全然平気さ！」

「なにぃ！？お前はお世辞でも、『ちょっと寂しいけど…。』とか言えないのかよ！」
今野の言葉に当麻が大受けした。

「ゆき姉、俺なら大丈夫だよ。安心して今野さんに付いてもらいなよ！
今野さんが付いててくれたら、これから先、何にも心配いらないだろ？」
健人が雪見の肩に手を置き、優しい笑顔で雪見を見る。
雪見は、今野の心遣いと健人の優しさ、安堵感から緊張が解け、思わず涙が滲んできた。

「あれ？またなに泣きそうになってんのさ！しょーがねーなぁ！」
健人が雪見の頭を、よしよしと撫でてやる。
その周りで当麻と今野が、二人の様子をほんわかした気持ちで眺めていた。
しかし、それを見ていた夏美が黙っているわけはない。

「ちょっと、アンタ達！私を怒らせるのもいい加減にしなさいよ！
それに今野さん！一体あなたに何の権限があって、そんな出しゃばった

真似をしてるのかしら！」
夏美の怒りは相当なものだ。

だが、今野は余裕の表情で夏美を見た。
「悪いが、部長権限ってやつでね。
俺、昨日付けでマネジメント部長を兼任する事になってさ。
君には申し訳ないが、部長の初仕事として、君のマネージャー解任を発動させてもらったよ。あ、でも安心したまえ。
君は明日付けで、雪見くんのマネージャーになる契約だったから、その契約を無かったことにしただけで、経歴には一切傷など残らないから。
今まで通り、常務の片腕として頑張ってくれたまえ。
あぁ、明日の司会進行だけは、しっかりと頼むよ。」

夏美はワナワナと震え、「覚えてらっしゃい！」と捨てぜりふを残して
会議室をバタン！と出て行った。

「相変わらず、こえー女だ！と言うことで、これからもよろしく！」
そう言って今野は雪見に右手を差し出し、がっちり握手を交わす。
やっと雪見に笑顔が溢れ、健人と当麻もそれを祝福した。

「でもさ。どうして今野さんは常務に、ゆき姉のマネージャーを続投させてくれ！
って、頼み込んだの？」当麻が不思議そうに今野に聞く。

「だって、どう考えても雪見ちゃんと小林じゃ、馬が合わないと思わなかったか？
タレントとマネージャーが信頼関係の上に成り立っている、とは彼

女の言った通りだ。
だが、どうしたって信頼関係なんて結べるはずがない！って顔してたからな、雪見ちゃん。
分かりやすい性格だから、マネージャーとしては非常にやりやすい！」

「さすが、今野さん！」健人が笑った。
すると今野は穏やかな顔で、「お前のためでもあるんだよ。」と言う。

「えっ？俺のため？」

「雪見ちゃんがお前のそばにいるようになって、お前はずいぶん変わったんだ。
俺がお前を見てきてから、今が一番いい状態だと思うよ。
精神的にも安定してるし、仕事に対する意欲がまるで違う。
俺はお前に、もっともっと上を目指してもらいたいから、今の状態を崩させたくなかった。
雪見ちゃんと今まで通りでいたいだろ？」

「今野さん…。ありがとう。そんなに俺たちの事、考えててくれて…。」

「よしっ！じゃあ明日の記者会見の無事を祈って、これから四人で飲みながら
打ち合わせでもするか！」

「やった！もちろん今野部長のおごりですよね？」
当麻がニコニコしながら聞いた。

「さては、都合のいい時ばっかり、俺を部長呼ばわりする気だな？
お前達の作戦にみすみす引っかかってたまるか！」

男達三人は、楽しげに笑いながら会議室を出て行く。
だが後に続く雪見は、夏美が残した捨てぜりふがどうしても気になり、
先ほどまでの笑顔が半減した。

明日の記者会見、何事もなく無事に終ればいいのだけれど…。

今野の心情

健人たちは今野を『どんべい』に連れてってやろう！と意見がまとまりタクシーへ。

「はぁぁ…。それにしても忙しい日だったね。けど、課題曲が上手く歌えたから一つはクリアしたって感じ。」

健人が、疲れたけれど満足！と車のシートに身体を預ける。

「三上さんたち、もう帰れたかなぁ？なんせゆき姉の歌が反響凄すぎ！

俺たち今日歌わなくて良かったよね！」

当麻が健人に同意を求めると、健人は「ホントホント！」とうなずいた。

「お前達が今日デビュー曲を歌ってたら、それこそ三上さん、朝まで帰れなかったぞ！

課題曲であの反応だ。明日の会見以降、お前達のデビューは相当な話題になることは間違いない。

一気に取材が殺到するから覚悟しとけよ。」

「今野さん、脅かさないで下さいよ！デビューは嬉しいんだけど、これ以上スケジュールがきつくなるのだけは勘弁して欲しいなぁ。」

「なに贅沢なこと言ってんだよ！

世の中には、どんなに努力したって売れない奴の方が、絶対に多いんだぞ！

お前達二人は成功組なんだから、多少の事は我慢しないと。」

「はぁーい…。あれ?この人、また一人でなんか考え込んでる。」
健人が、隣りに座る雪見の顔を覗き込む。

「だって…。健人くんは心配じゃないの?さっき夏美さんが言った言葉…。」
雪見はそれだけが気がかりで、本当は酒を飲むような気分ではなかった。

「はい、わかりました。」と返事だけしておいて、苦手なタイプでも我慢して
マネージャーになってもらった方が、後々良かったのではないか?
彼女を怒らせた事によってこの四人が、同じ事務所の中に敵を作ってしまったのではないか?
だとしたら、自分は当事者だから仕方ないにしても、あとの三人にはなんの落ち度もないのに、また迷惑をかけてしまう…。

「雪見ちゃん、大丈夫だよ。そんなこと、タレントが心配する事じゃない。
マネージャー交代は、俺が勝手にしたことであって、雪見ちゃんは一切
関わってないんだから。何も心配しなくていい。」
タクシーの助手席に座った今野が、前を向いたままそう言った。

「あ!運転手さん、その角曲がってすぐでいいです!」

タクシーを降り立った四人は人目に付かぬよう、サッとビルの地下へ。

「居酒屋『どんべい』？また、随分と渋い好みだなぁ！
三上さんにでも連れて来てもらったのか？」
店の暖簾の前で、今野が健人に聞いてみる。
すると、健人と当麻が同時に雪見を指差し、「ゆき姉！」と答えた。

「あー、なるほどね！」

「なるほどね！って、なに納得してるんですか！失礼しちゃう！
ここは今野さんが思ってるような、オヤジっぽいお店じゃありませんよーだ！
ほんと、なんでマスター、こんな店名にしたんだろ？
私の趣味まで疑われちゃう！」
ぶつぶつと独り言を言いながら、雪見を先頭に暖簾をくぐる。

「いらっしゃい！よう！久しぶりだね。三人とも元気そうで何よりだ！
新しいお客さんも、ようこそ！最初はビールでいいだろ？
すぐに持ってくから、部屋に入りな！」
マスターは相変わらず威勢が良い。
金曜の夜とあってほぼ満席状態だが、マスターの前のカウンター席だけは
客が帰ってすぐらしく、まだジョッキや皿が片付いていなかった。

小上がりに続く通路を歩きながら今野が、「随分おしゃれな店じゃないか！」と驚いてる。
だから言ったでしょ！と、雪見が得意顔をした。

マスターがいつも通り、ビールとおまかせ料理をテーブル一杯に運

んで来る。
まずは今日の課題曲大成功と、明日の記者会見が無事終了することを祈って乾杯！

「うめーっ！今日のビールは特別旨いわ！」健人が一気にジョッキ半分を喉に流し込む。

「ホント、生き返ったぁ！俺、課題曲が緊張して喉カラッカラだった！」
さすがの当麻も、今日の課題曲はいつもの月なんかと比べものにならないほど緊張したらしい。

しばらくはお腹と喉が落ち着くまで飲み食いし、それから明日の打ち合わせに入る。

「多分、一通りの形式的なやり取りが終った後、どっかの記者から必ず三人の関係について、声が上がるだろう。
事務所は、外部からの質問は一切受け付けない方針だが、俺は、上がった声を
すべて無視するのも、どうかと思うんだよね。」
今野が、ビールのあとの芋焼酎をロックで飲みながら話を続ける。

「俺はね、今は昔と違うんだから、アイドルだって恋愛したって大いに結構！と思うわけ。
でもな、会社としてはそんなこと、大っぴらにされちゃ売り上げに大きく響くから、
もちろん面と向かって許せるわけはないんだよ。
けどな！じゃあなんで常務がお前達に、あんな名前を付けてくれたと思う？
『ＹＵＫＩＭＩ』のあとに読みもしない『＆』を付けたんだぜ！

ツアータイトルも『絆』だよ？俺は初めて聞いた時、感動したよ！
さすがは若き次世代の常務！頭の堅いお偉いさんどもとは別格だ！
ってね。」

「ま、まさか今野さん、健人たちに明日の記者会見で、付き合いを
公表しろ！
とか言うんじゃないよね？んなわけ、ないか！あははっ！ごめん。」
当麻が笑いながらビールを飲み干す。

「いや、そう言う展開も有りなんじゃないか、って事。」
「嘘でしょ！？」健人たち三人は、一様に驚きの声を上げた。

「今野さん！酒のピッチ早いですって！いくら何でも明日の会見で、
そりゃないでしょ！」
当麻が、隣りに座る今野の背中をぺしっと叩く。

「痛ってぇ！あれぇ？俺が思ってる以上にお前らって常識人っつー
か、根性無しなわけぇ？
もっとさ、若いんだから今までの芸能界の常識を
ぶっ壊してやる！ぐらいの勢いはないの？」

「どうしちゃったのさ、今野さん！今日はなんか変だよ？
なんでそんなに俺たちのこと、気にしてくれてるの？」
健人は急に今野の事が気がかりになってきた。

「いや、別に…。ただ健人と雪見ちゃんには、ずっと幸せでいて欲
しいから。
誰かに引き裂かれる前に、しっかり絆を結んで欲しいから…。」
今野はそう言いながら酔い潰れ、テーブルの上に突っ伏して寝てし
まった。

「絶対変だよね、今野さん…。ねぇ、今日は家に泊めてあげよう。私、今野さんの奥さんに電話入れておくから。」
だが、いくら雪見が今野の自宅へ電話をしても、誰も出ることはなかった。

この時は、なぜ今野がそんな話をしたのか不思議に思ったが、家に誰もいないのは、
奥さんが子供を連れて実家にでも遊びに行ったのかな?ぐらいにしか思わなかった。

後に及川から、今野が奥さんと別居した、と聞かされたのはレコーディング前日の事だった。

今野のお泊まり

健人たち三人は酔うタイミングを逃したので、取りあえず今日は今野を連れて
もう帰ろう、とタクシーに乗り雪見のマンションへ。

健人と当麻が両側から今野を支え雪見が靴を脱がし、やっとソファーにゴロンと寝かす。
時計を見ると、針はすでに十二時を回っていた。

「当麻くん、今日は仕事何時から？もし良かったら、当麻くんも泊まってけば？」

「いや、遠慮しとく。朝六時に迎えが来るからこのまま帰るわ。
今野さんをよろしく。じゃ、夜にね！」
そう言い残し当麻は帰って行った。

雪見は今野に毛布を掛けてやり、それからお風呂にお湯を張りに行く。
その間健人は猫たちの相手をして遊ばせ、雪見は冷蔵庫の中を覗いて朝食の献立を考えた。

「健人くーん、お風呂湧いたよー！」

「よしっ、じゃあ風呂入って来るから、めめとラッキーはこれで遊んでて！」
そう言って健人が、ねずみのおもちゃをポーンと放り投げた。

健人がお風呂を出た後、続いて雪見も入り、湯上がりは二人が一番

大切にしている
一杯飲みながらのお喋りタイム。
この時間が一日の疲れを癒やし、穏やかな睡眠へと繋げるのだ。
にしても、今日は外で飲んできたと言うのに、本当に酒好きな二人。

「ねぇ。今野さん、どうしちゃったんだろうね。絶対いつもと違ってた。」
雪見と健人は、手に缶ビールを持ってベッドの上で壁に寄りかかり、足を投げ出して座ってる。

「俺もそう思うんだけど、理由が解らない。」

「じゃ、夏美さん…てどんな人？会社じゃどんな存在？」

「俺も周りから聞いた話しか知らないけど、女の子の大型新人はみんな
夏美さんが担当して、育てた時期があったみたいだよ。
前に今野さんが言ってた。夏美さんはマネジメントをしながら営業職もこなす、
スーパーマネージャーだ、って。」

「そんなにやり手なの…。」雪見の不安は募る一方だ。

「でもね、二年前だったかな？夏美さんに悪い噂が立って…。
それでマネージャーから外されたらしいんだけど…。」
健人が言葉を濁そうとしたのがわかった。

「ねぇ、それってどんな噂？」

「う、うん、あのね…。女の武器を使って仕事を取ってくる…みた

いな…。」

「そうだったんだ…。ごめんね！嫌なこと聞いちゃって。」
健人が言いずらそうにしてたので、雪見はそれ以上聞くのは止めにした。

「さてと、もう寝よっか。明日は健人くん、何時だっけ？」

「明日じゃなくて今日ね。八時に及川さんが迎えに来る。
ここに迎えに来てもらうの初めてだから、なんか照れるなぁー。」

「今野さんに私達のこと聞いて、きっとビックリしただろうね、及川さん。」

「うん、多分ね。でも明日目覚めた今野さんこそ、ビックリすると思うよ！
ここはどこだ！？ってね。」

「ほんとだね！えへっ、楽しみ。じゃ、歯磨きして寝よ！」

寝相のいい二人は、一つの布団にくるまって寝ても、ずっと同じ体勢で寝ていた。
健人の左腕に雪見が抱きつくようにして…。幸せそうな寝顔である。

朝六時。健人より一時間早くに起きるのが雪見の日課だ。
今野もまだ眠っているので、起こさないように静かに顔を洗い、化粧をしてキッチンに立つ。

朝ご飯の準備が終る頃、居間から「ここはどこだっ!?」と、大声がした。
「ふふっ!やっぱりだ!」雪見が冷たいお水をトレーに乗せて、今野に運ぶ。

「おはようございます!ソファーじゃ身体が痛かったでしょ?はい、お水!」

「ええっ!?雪見ちゃん!?ここもしかして、雪見ちゃんち?」
今野の驚き方が予想通りだったので、雪見は可笑しくて仕方ない。

「そうですよ!昨日はここまで今野さん運ぶの、大変だったんですから!
まぁ、大変だったのは健人くんと当麻くんなんだけど。
あ!奥さんに電話して、この事伝えようと思ったんですけど、誰もおうちに
いらっしゃらなくて。週末だからお子さん連れて、ご実家にでも?」

「え?あ、あぁ!そうなんだ!子供がおばぁちゃんっ子でね。
それより健人は?まだ寝てるの?」
今野が慌てて話題を替えた。

「あ、まだ起こさないで下さいね。下手に起こすと機嫌が悪いから。」

「じゃ、どうやって起こすの?」「卵焼きの匂いで!」

贅沢な目覚まし時計だ!と今野が笑ってる所へ、健人があくびをしながら
珍しく自分で起きて来た。

「おふぁようございます…。今野さん、早起きですね。」

「よう！おはよう。昨日は済まんかったな！みんなに迷惑かけて。」

「ほんとですよ！今野さん、いきなりわけわかんない話したかと思ったら、
バタンキューで寝ちゃうんだもの。お陰で二日酔いにはならなかったけど。」

「ほんと、すまん！なんか新婚家庭にお邪魔したみたいで、バツ悪いな。
車も取りに行かなきゃならんし、すぐ帰るわ！」

「何言ってんですか！朝ご飯食べてってからにしてくださいよ！
もう用意が出来てるから、健人くんは顔を洗ってきて！」
雪見の言葉に、健人がまたあくびをしながら、「ふぁ～い！」と返事する。

三人で食卓を囲みながら、話は今日の記者会見の話題に。
「小林が司会を務めるが、１００％の信頼はしない方が賢明だ。
なんせ彼女は手負いの狼だからな。」
今野の言葉に健人たちはびびっている。

「脅かさないで下さいよ！記者会見、さぼりたくなっちゃう。」
雪見は冗談なんかじゃなく、一瞬本気でそう思った。

「大丈夫だよ。ゆき姉の隣りには、いつだって俺と当麻がいるじゃない！」
健人がにっこり笑って雪見を見る。
その笑顔に答えるように、こくりとうなずく雪見を見て今野は、

やはり二人の仲を壊される前に世間に公表した方が、良いのではないか？
と言う思いを強くした。

八時少し前。健人と今野が玄関にいた。
「じゃ、行ってきます！今日はまたゆき姉がデビュー曲を披露しなきゃ
ならないんだから、夜までしっかり練習しといてよ！」

「またぁ！わざと私を緊張させようとしてるわけ？
健人くんこそ、夏美さんが急にデビュー曲をアカペラで歌え！とか言ってくるかもよ！」
健人の言葉に雪見が反撃する。

「その辺にして行かないと、及川が下で待ってるぞ！
じゃ雪見ちゃん、お世話になったね。朝飯も旨かったよ！
今日は一日健人に付いてるけど、会見場では雪見ちゃんのマネージャーだからね。
健人が言った通り、なんにも心配しないで会見場においで。
じゃ、行ってきます！」

いよいよ新人アーティストとしての生活が始まる！
期待と不安を心の中で丸め込んで、雪見は静かにピアノの前に座った。

『YUKIMI&』完成！

午前中はずっとピアノの練習をしていた雪見。
今日の記者会見で、デビュー曲『君のとなりに』を弾き語りすることになってたので、
とにかく何度も何度も繰り返し練習し、不安をひとつでも減らしておきたかった。

時間を忘れるほどピアノに集中し、気が付いたらすでに午後一時を回ってる。
『なんかお昼ご飯って気分でもないな…。そうだ！久しぶりにドーナツ食べたい！』
ぶらぶら歩いていつものドーナツショップへ。

土曜日の昼下がりだけあって、店内は混み合っている。
いつもの席も空いているはずはなく、店員が真ん前に見えるカウンター席に座った。
大好きなカフェオレとオールドファッション。
店内の甘い香りを嗅ぐだけで、雪見は疲れが癒やされ心が幸せを感じ始める。

するとそこへ店員が、ささっと雪見の前にやって来た。
「あのぉ…。雪見さん…ですよね？」
「え？あ、はい。そうですけど…。」
顔なじみの店員ではあったが、注文以外で言葉を交わしたことなどない。なぜ私の名前を？

「私、斎藤健人くんのファンなんです！健人くんのブログに出てた雪見さんを見て、

『あっ！うちのお客様だ！』って、もう嬉しくって！」

「え？私、健人くんのブログになんて出てるんですかぁ！？」
そう言えば、しばらく健人のブログなんてチェックしてなかった。
『一体どんな顔の私をアップしたのよ、健人くん！』
知らないって恐ろしい！

「今度ＣＤデビューするんですよね？おめでとうございます！
健人くんのブログのコメント欄にも、雪見さんファンが大勢書き込んでますよ。
これからもお店に来て下さいねっ！待ってます。」
そう言うと彼女はペコンと頭を下げ、また忙しそうにお客の元へ飛んでいった。

雪見さんファン？そんな人、いるの？
帰ったら健人くんのブログ、久々に覗いてみよう。
そんなことを考えていると、ケータイにメールが着信した。真由子からだ。
どうやら、またしても父親に頼み込んで、マスコミ以外来場不可の記者会見に来るらしい。

え？香織と一緒に？あらまぁ！なかなか気が利くじゃないの、真由子さん！
多分、深くは考えずに香織を誘ったとは思うけど、当麻の喜ぶ顔を想像すると、
でかした、真由子！と褒めてあげたくなった。

家に帰り、パソコンで健人のブログを開く。
さかのぼって見てみると、かなり以前から雪見は、健人のブログに

登場していた。
『知らなかった！最初のうちは毎日チェックしてたんだけど…。』
なぜ、雪見はブログを見なくなったのか。
ファンからのラブレターとも言えるコメントを、読むのがつらくなったから。
健人の文章だけ読めればいいのだが、どうしてもファンのコメントにも目が行ってしまう。
それらを読むにつけ、健人と付き合っているという事実に、罪悪感さえ覚えてしまうのだ。

だが健人は、あらゆる言葉を使って、雪見の事をアピールしてくれていた。
良い所も悪い所も、賢い所もドジな所も、丸ごとの雪見が伝わるように。
決して、暗に雪見が彼女だと匂わせている文章ではない。
健人ファンのみんなにも、人間としての雪見を好きになってもらいたい。
そんな健人の想いが感じられる言葉が並んでいた。

結果、昨日のブログコメントには大勢の健人ファンや、純粋に雪見だけのファンから、
雪見宛のたくさんの応援メッセージが寄せられていた。
みなラジオを聴いて雪見たちのデビューを知り、それに対して温かい声を寄せている。
なんと有り難く嬉しいことか。
だが、そのメッセージが温かければ温かいほど、雪見にはみんなを騙している
と言う想いが一層つのり、居たたまれなくなってパソコンを閉じた。

みんな、私が健人くんの親戚だと思って、応援してくれてるんだよね。
ごめんね、みんな…。

夜八時。雪見はすでに、会見が行なわれる出版社ビルのメイク室にいる。
健人と当麻は、仕事で到着がギリギリになりそうだが、雪見は予定が入ってないので
会見一時間前には来るように、と呼ばれていた。
久しぶりに進藤と牧田が、笑顔一杯で雪見を出迎えてくれる。

「おめでとう、雪見ちゃん！
まさかここのメイクルームで、アーティストになった雪見ちゃんをメイクするなんて、
夢にも思わなかったよ！ほんと、牧田さんとひっくり返りそうになるほど驚いた！」
雪見に会見用の、たくさんのフラッシュを浴びる場合のメイクを施しながら
雑誌『ヴィーナス』ヘアメイクの進藤が、嬉しそうに雪見に話しかける。

「ひどいなぁ！ひっくり返りそうになるって、どんだけ驚いたんですか！
って、実は私が一番驚いてるんですけどね。」
そう言いながら雪見はカラカラと笑った。

「けど良かった！進藤さんと牧田さんに会って、少し落ち着いた。
知らない場所での会見だったら、緊張してきっと何にも話せなかっ

たと思う。
ここなら健人くんの写真集の会見で一度来てるから、気持ちがぜんぜん楽！」

「だって、もうツアーも決まってるんでしょ？三人で。『ヴィーナス』がスポンサーなら私達の出番、また有るといいな！」
スタイリストの牧田が、後でやって来る健人たちの衣装を準備しながらそう話す。

「よしっ、完成！アーティスト『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ；』の出来上がり！」
進藤の声に雪見が椅子から立ち上がり、全身を鏡で見てみる。
昨日、ラジオ放送終了後に急遽、今日の会見用のスタイリングを頼まれ
売り出したいイメージを、事務所側から伝えられてた進藤らは、
今日の朝からお披露目にふさわしい衣装とメイクを話し合い、
今までの雪見のイメージも壊さぬよう、スタイリングを決めたのだった。

「これがアーティストの『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ；』なの？」　自分の姿を不思議な気持ちで眺めてる。
大人のような、少女のような、年齢不詳という言葉が頭に浮かぶほど透明感のある、
ふんわりと優しい雪見がそこに立っていた。

「けど、話したらこのイメージ、ぶち壊しちゃうと思うんだけど…。」
雪見が心配そうに振り向いて、牧田に意見を求める。

するとその時、ノックの音と共に誰かが入って来た。
それは、マネージャーを下ろされた夏美であった！

「あら、いいじゃない！さすが『ヴィーナス』の腕利きスタイリストさんたちね。
昨日の今日なのに、私が伝えた通りのイメージに仕上がったわ！」

「えっ！？」　夏美の言葉に雪見が驚いた。

「私、マネージャーは下ろされたけど、キャラクタープロデュースからは降りてないから。
『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ；』は、私のイメージでプロデュースされていくの。
ってことで、改めてよろしくね！雪見。」

妖しく微笑みながら差し出した夏美の右手に、雪見は恐る恐る手を伸ばす。
手と手が触れた瞬間、後戻りの出来ない暗闇に引きずり込まれた錯覚を覚えた。

「キャラクタープロデュースって…。
一体どういう事ですか?私は私でいちゃ、ダメって事ですか?」
雪見は、魔術にでも掛けられたかのように、ふらふらと握手してしまったが、
手を離した瞬間はっと我に返り、夏美から聞かされた言葉に突然、
強い違和感を感じた。

「あら、このスタイリングに何かご不満でも?
あなたを売り出す戦略に、寸分の狂いもない見事なスタイリングかと思うけど?」
夏美は、またしても豊かな胸を誇示するように腕組みをし、わざと
雪見の質問を
はぐらかしてニコリとした。

「そんな事聞いてるんじゃありません!
私に、作られたキャラクターを演じろ、ってことですか?
だったら、まったく納得なんてできませんけど!」
雪見の凄い剣幕に、理由の解らない進藤と牧田は驚いている。

「雪見ちゃん!ちょっと落ち着いて!
よく事情はわからないけど、私達のスタイリング、あんまり気に入ってもらえなかった?
私達は少なくとも雪見ちゃんのこと、よく知ってるつもりで仕事させてもらったんだけど…。」
牧田が少し寂しげに雪見に聞いた。

「違うの!牧田さん、誤解しないで!私、そんなつもりで言ったん

じゃないから！
ごめんなさい…。緊張しててちょっとカリカリしてた…。」
そう牧田に言い訳したが、本当は夏美に対して怒っている。

その時だった。ノックの音と共にドアの向こうから「入ってもいい？」
と声が聞こえた。健人の声だ！
だが、メイク室の中は声を発するような空気ではなく、間の悪い健人のタイミングに
誰一人として返事をする者はいなかった。

少しして夏美が「入りなさい！」とドアを開け、廊下に突っ立っていた
健人を中に招き入れる。
そして背中を向けて立っている雪見を指差し、「どう思う？感想聞かせて。」
と腕組みし直し、健人に聞いた。

「ゆき姉？だよね？」
健人の声に渋々振り返る雪見。顔はふてくされた子供のように下を向いている。
しかし健人には、うつむいている雪見の表情など、全く目に入らなかった。
そこに立っているのがすでに雪見ではなく、健人が思い描いていた通りの
アーティスト『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ；』であることに、目が釘付けになったからだ。
胸まである長い髪をふわふわの巻き髪にし、生成り色がかった白い

木綿のワンピースは
ゆったりとしたシルエットで、胸元に淡いピンクの大きなコサージュを付けている。
だが、上半身の少女っぽさとは裏腹に、足元だけはハードな黒のエンジニアブーツを履いていた。

「スッゲーや！俺の頭ん中で妄想してた『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ；』が、ここにいるみたい！
俺のイメージ通りだよ！夏美さん！」
健人は一目見るなりテンション高く、ニコニコしながらそう言う。

「も、妄想って！何を妄想してたわけ？健人くん！」
進藤がお腹を抱えて笑った。

「そっ！それは良かった。どう？雪見。健人はこう言ってるわよ。
あなた、キャラクタープロデュースの意味、随分と誤解してるようだけど？」

「えっ！ゆき姉のキャラクタープロデュースって、夏美さんがやるんですか！？」
健人がびっくりして、大声で聞いた。

「そうよ。マネージャーは下ろされたけど、かえってその方がプロデュースに専念できて
好都合だったわ。
最初は兼任で引き受けた話だったけど、よく考えたら大変だもの。」

「あの…。私、女優じゃないから、仕立てられたキャラクターを演じるなんて無理です。」
雪見は、もうどうしたら良いのか、まるで方向を見失っていた。

話す声にも力がない。

「ゆき姉、それは違うよ。ゆき姉の方が誤解してる。
夏美さんも、最初にちゃんと説明してやって下さいよ！
ゆき姉はこの業界の人じゃないんだから！」
健人は、この部屋に入って来た時に、なぜ場の空気がおかしかったのか
なんとなくわかった気がした。

「ゆき姉、ごめん。俺ももっと色んな事、教えてあげればよかったね。
そしたらこんなにゆき姉が、戸惑うことも無かったのに…。ごめんね。
だけど大丈夫だよ。夏美さんは、新人のプロデュースに関してはプロだから。
俺も方向性は全然間違ってないと思う。」
雪見に話したあと健人は、夏美の方を見た。

「新人ってね、デビューの時はまったく無の状態にあるでしょ？
誰もその人のことを良く知らない。
だから有る程度の方向性を決めて、その人をイメージしやすいようにまずはビジュアルで表現する。
あなたの場合、歌声からのイメージを表現するのが一番いいと思った。
大人なんだけど少女のような、透明なんだけど力強く心に響いてくる歌声。
凄く難しい宿題を、このお二人は完璧に解いてくれたわ。」
そう言って夏美は、進藤と牧田をにこやかに褒め称える。

「私達ね、昨日仕事の移動中に車の中で、偶然雪見ちゃんのデビュ

ー曲を耳にしたの。
二人とも、気が付いたらボロボロ泣いてた。
その後今日のスタイリングの依頼があって、すぐに頭に浮かんだのがこの組み合わせ。
私が歌声から受けたイメージと、夏美さんから依頼されたイメージはまったく同じだと思った。
素の雪見ちゃんも、充分表現できたと思ってるよ。」
牧田は、今度は自信を持って雪見に伝えることができた。

「でも…。記者会見で喋ったらきっとぶち壊しちゃう。
普通に話したら私って、こんなピュアなイメージじゃないと思うし…。
ずっと喋らないで、黙っていようかな…。」
雪見は困惑していた。

「ほんとにあなたって人は、思った以上に世話が焼けそうね。
誰もスタイリングだけであなたを印象付けようなんて、思っちゃいないわ！
普段のあなたと、歌を歌い出した時のあなたとのギャップが狙いなんじゃない！
あとは、猫カメラマンなのに！？と、三月までの限定アーティスト！？
ってとこも、おいしい売りよね！」
夏美は、早く雪見の生の歌声をお披露目して、みんなの驚く顔が見たかった。
健人と当麻が話題を呼ぶのは当然だが、この無名のアーティストの出現も
下手すると、健人たちを喰ってしまうほどの騒ぎになる予感がしている。

「私に任せなさい！会社にとっての大事な金の卵を、この私が潰すわけないでしょ？」
夏美はにっこりと雪見に向かって微笑んだ。

今はまだ、ね…。

その時、スタッフが当麻の到着を知らせに来た。
「じゃあ、あとは健人と当麻をお願い！時間が迫ってるから急いでね！」

それだけ言い残して夏美は、一足早く会場へと移動する。
これから巻き起こるセンセーショナルな風に、胸を高鳴らせて…。

予測不能のデビュー記者会見！

会見十五分前。
健人と当麻も準備が整い、雪見と三人で大ホールステージ横へと移動する。

「ゆき姉、メッチャ可愛い！俺のイメージ通りの『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ；』だ！
で、どう？俺たちは。ＳＪっぽい？カッコいいでしょ！」
当麻はこのビルに着いた時点から、すでにハイテンションだったらしく、
移動しながらも大声で喋りまくるので、スタッフから「シーッ！」と注意を受けるありさまだ。

「ＳＪって略するんだ！『スペシャルジャンクション』じゃ、ちょっと長いもんね。
でもかっこいいよ！二人も私のイメージ通り！当麻くんもダンスが上手そうに見えるし。
さすが牧田さんと進藤さんのコンビは最強だわ！」

「上手そうに見えるって、どういうことよ！失敬な。
俺のデビュー曲の振り付け、まだ見た事ないでしょ！ゆき姉は。」

「見なくても大体想像つくもん！健人くんはダンスが特技だから勿論上手いけど、
当麻くんはなんか身体が硬そうで…。」

「そんな理由かよっ！」

雪見も、さっきまでの情緒不安定さはどこへやら。
緊張感のカケラも見えず、当麻との掛け合い漫才を楽しんだかと思ったら、
どうやら控え室で、ワインを一杯飲んできたらしい。

緊張し過ぎて一言も喋らなくなった雪見を、見るに見かねたマネージャーの今野が
近くのコンビニまで全速力で走って、ワインを買って来たのだ。

「まぁ、もう夜の九時だし、記者会見の景気付けに一杯ずつ飲め！特別に俺が許可する！」
控え室に顔を出した常務の小野寺も、雪見が歌えなくなったら元も子もない！
と、とにかく緊張をほぐしてもらうため、自ら三人にワインを注ぐ。

「じゃ、会見の成功を祈って乾杯！」

結局、健人は一杯、当麻と雪見は二杯ずつ一気に飲み干し、控え室をあとにした。

酒の力は偉大だった！
しかもつまみ無しで一気飲みした赤ワインは、酒に弱い人ならばあっという間に酔いが回り
会見どころではなくなると思うのだが、日頃酒の鍛錬を怠らないこの三人は、
この程度の酒では酔うに及ばず、文字通り潤滑油となって口も滑らかだ。

「よっしゃ！明日の一面トップ記事は、全社俺たちが独占しようぜ！

ゆき姉も、歌で会場にいる全員を泣かしちゃえば？話題になるよ！」
当麻が、ステージ横で気合いを入れる。
「なんでみんな、泣くかなぁ？あの歌は泣き歌じゃないと思うんだけど。」
雪見が小首を傾げて不思議がる。

その時、今日の司会を務める夏美の声で、記者会見の開会を告げるアナウンスが入った。
「本日はお忙しい所を当会場に足をお運び頂きまして、誠に有り難うございます。
只今より、斎藤健人、三ツ橋当麻、並びに浅香雪見のＣＤデビュー発表
記者会見を開催させて頂きます！」

「始まった！こうなったらいつも通り、楽しくやろうぜ！」
「ＯＫ！任せといて！」

三人はお互いに握手を交わし、夏美のアナウンス順にステージ上へと出て行った。
その瞬間、健人と当麻に女性記者たちから、思わず仕事を忘れた黄色い悲鳴が上がる。
三人が勢揃いしたステージ中央めがけ、会場全体が白くなるほどの無数の
フラッシュが一斉にたかれた。

「すっごいね！俺、今までで一番の記者の数だと思う。」
健人が横に立つ当麻に話しかける。

「俺、鳥肌立った！なに？このフラッシュの数！」

「私、やっぱ帰りた～い！」

続いて夏美からデビューの概要が発表される。

「斎藤健人と三ツ橋当麻のユニット名…『ＳＰＥＣＩＡＬ　ＪＵＮＣＴＩＯＮ』（スペシャルジャンクション）

デビュー曲…『キ・ズ・ナ』

浅香雪見のアーティスト名…『ＹＵＫＩＭＩ＆amp;』（ユキミ）

デビュー曲…『君のとなりに』

ＣＤ発売日は共に２０１１年1月5日予定でございます。

なお、すでにこの二組による、全国五大都市ツアーが決定致しておりますので、

合わせてご報告させて頂きます。

『ＹＵＫＩＭＩ＆ＳＰＥＣＩＡＬ　ＪＵＮＣＴＩＯＮ　絆　２０１１』と題しまして、1月２５日の札幌を皮切りに、

東京、大阪、名古屋、福岡でコンサートを開催致します。

これは例年、斎藤健人と三ツ橋当麻がそれぞれに東京、大阪で行なっていた

ファンミーティングを、形を変えて五大都市に拡大し、浅香雪見と合同で

開催するものでございます。

浅香雪見に関しましては今回のツアー会場で、写真展『斎藤健人キズナ三ツ橋当麻』展も

同時開催されますので、合わせてご覧頂ければ幸いです。

では皆様、これより先はトークショー型式でお送り致します。

デビューに対しての熱い想いと、三人の素顔に迫ってまいりたいと思いますので

どうぞご期待下さい！
ただいま準備を致します。今しばらくお待ち願います。」

そつなく司会をこなす夏美に対して、ワインの効果も薄れ始めた雪見は
徐々に襲ってくる緊張の波に、飲み込まれる寸前だった。

ステージ上に背の高い椅子四脚とテーブルが一つ用意され、健人たち三人と夏美とが着席する。
そこへスタッフが、それぞれの胸元にピンマイクを付けてゆく。
別のスタッフは、見覚えのあるワゴンをカラカラ押しながら、なにやら飲み物を運んで来た。
見るとそれは、先週放送の『当麻的幸せの時間』で使った、ありとあらゆる種類の
酒が乗っているワゴンであった。

「えっ？これってラジオの飲み友企画で使った酒ワゴン？
わざわざ持って来たの？っつーか、これからここで飲むのぉ！？」
当麻がひどく驚いている。無論、他の二人もだ。

「なんで？一言も聞いて無かった！けど、ちょっと嬉しい！」
健人がニコニコしながら、ワゴンを早々と覗き込む。

「サプライズって嬉しいでしょ？
あのラジオの企画が大好評だったから、三上プロデューサーが第二弾として
会見場でやったらどうか？って。
ツアーのスポンサーでもある『当麻的幸せの時間』及び『ヴィーナ

ス』様より、
会場にお集まりの皆様にも、後ろのテーブルにお飲み物をご用意させて頂きました。
但しお車でご来場の方のご飲酒は、固くお断り致します。
アルコール以外のお飲み物も多数ご用意致しておりますので、どうぞここからは
お飲み物片手に、リラックスした会見をお楽しみ下さい。」

夏美のアナウンスにどよめきが起こり、一人が立ち上がると皆が次々と
飲み物を求めて後ろのテーブルに集まった。

『予測不能の飲み友パーティー！』第二弾の幕開けだ。

飲み友パーティー第二弾

三人の中で、真っ先にワゴンに手を伸ばしたのは雪見だ。
控え室で飲んだワインの効き目は、このとんでもない記者の数を目にした途端、
アルコールが一気に身体の中で蒸発して、しらふに逆戻り。
緊張で顔がこわばり、一つも笑顔など作れる状況にはなかった。
そこへ三上が、救いの手を差し伸べるかのように、このワゴンを送り込んでくれたのだから、
雪見は思わず、神様、仏様、三上様！と叫びそうになった。

「私、シャンパン！誰か栓抜いて！先に飲んでもいい？」

「まだっ！俺たちまだ選んでないでしょ！
あ、でもせっかくシャンパン開けるなら、まずはみんなで乾杯しよっか。」

健人の提案に当麻も賛成し、さっそく栓を抜くことに。
ポンッ！という乾いた音がステージ上に響き、上手く開ける事が出来た当麻は
にっこりと微笑みながら、真っ先に雪見のグラスに黄金色の液体を注いだ。
夏美にも注いで四人がグラスを手にした時、おもむろに夏美が立ち上がった。

「では皆様。グラスのご準備はよろしいでしょうか。
ここにいる三人の、ＣＤデビュー決定を祝して、乾杯！」

会場中が夏美のアナウンスにつられ、思わずグラスを高く掲げて「乾杯！」と発声してしまう。
一体ここは何の会場なのか、自分は何をしにここへ来たのか、多分記者達は
一瞬自分の立ち位置を見失ったかと思う。
が、それこそが事務所の狙いでもあった。
酒というのは、良くも悪くも物事の輪郭を薄ぼんやりとさせてしまう。

「うまいっ！最高だねっ、今日の酒は！」
健人が、本当に幸せそうに笑ってる。

三人とも、ほぼ同時に最初のグラスを飲み干したので、夏美が慌てて小声で言った。
「ちょっと、あんたたちっ！飲み屋に来たんじゃないんだからねっ！まだ一言も肝心な話、してないんだから！」
小声で三人にだけ話したつもりだったが、悲しいことにピンマイクが付いていては
内緒話など不可能である。
会場からどっ！と笑いが起こり、さすがの夏美も冷静さを失った。

「え、えーと、じゃあまずは健人くん、お願いっ！」

「え？え？いきなり俺？しかも、お願い！って、何をお願いされればいいわけ？」

またしても笑い声が巻き起こり、予測不能の記者会見がスタートした。

「ま、いいや！じゃ、せっかくの飲み友企画第二弾なんだから、堅苦しいインタビューとか無しにして、俺たち勝手に喋ってもいい？会場の皆さんも、居酒屋で喋ってる俺たちの隣で、聞き耳立ててるつもりで聞いてて下さい。
あ、スポンサーさんのおごりだから、遠慮しないで飲んでね！」
健人の提案に、会場からは「いいぞー！」と声が上がるが、夏美の目は吊り上がっていた。

『なに勝手なこと言ってんのよ！こっちで質問、用意してるって言ったでしょ！』
そんな心の声を目で表現したつもりだったが、すでに健人たちは三人だけの世界に入り込み、誰も夏美の方を振り向く者はいなかった。

「まぁまぁ、お次はビールでしょ？じゃ、改めてカンパーイ！
なんか、いよいよ今日から活動開始な気分だけど、よく考えたらレコーディングってまだ二十日ぐらいも先の話なんだよね？
1月5日デビューって、二ヶ月も先だよ！なんか遅くね？」

「しょうがないじゃん！俺も当麻も、年内はドラマと映画で一杯一杯なんだから。
俺ね、レコーディングも楽しみなんだけど、もっと楽しみなのがＰＶ撮影！
ゆき姉のＰＶに俺と当麻が出演して、俺たちのＰＶにゆき姉が出てくれるんだよねっ！」

「私、無理だって断ったんだよ！だって、本職の俳優二人のプロモ

ーションビデオで、
私にどんな演技しろってーの？私、猫カメラマンなんですけど。」
雪見はシャンパンとビールのお陰で、いつもの調子が戻ってる。
が、やはり、木綿のワンピースにコサージュ付けてる人の言葉遣い
としては、いかがなものか？

「あのね、誰もゆき姉の演技に期待なんてしてないから安心して！」

「それまた失礼な話じゃない？健人くん。」

「そうそう！けど俺と健人は思いっきり本気の演技で、ゆき姉のＰＶ
盛り上げてやるからねっ！期待しといて！」

「けどさぁ。これって事務所の戦略だよね、きっと。
私のＰＶに二人が出たら、絶対二人のファンの人達、私のＣＤ買っ
てくれるでしょ？
私としては有り難い話だけど、申し訳ない！って気持ちもある。」
そう言いながら雪見は、三杯目のビールを飲み干した。

「なに言ってんの！俺たちのファンは、そんな心の狭い人達じゃな
いから！
それに、結構俺のブログに『ゆき姉ファンになりました！』って書
き込み、最近多いんだよね　。
なんかね、『ヴィーナス』のグラビアで見る可愛い系のゆき姉と、
当麻のラジオで話す、姉貴っぽいゆき姉とのギャップがいいらしい。
あと断トツなのは、猫カメラマンなのに歌がメチャ上手い！ってと
こ。
ギャップってさ、なんでみんな惹かれるんだろ？
俺もそーいうの、欲しい！」
健人が羨ましそうに雪見を見る。

すると雪見は、
「えーっ！健人くんだってギャップあるよ！
見た目は完璧そうなのに、部屋が汚い！整理整頓ができない！鞄の中がグチャグチャ！」

「なにその汚いシリーズ三連発のギャップは！マイナスでしょ、完全に！
まぁ、嘘ですから！って否定出来ないのが悲しい…。」
健人がふざけてうなだれる。

「当麻くんのギャップはね…。あれ？思いつかないや。
きれい好きだし料理も得意だし…。ほんとに見た目通り完璧ってこと？
あ、ひとつ見つけた！彼女がいそうでいない！ってこと。
結構振られるよね、当麻くん。
多分世の中の人は、振られる当麻くんを想像できないと思う。
ある意味、凄いギャップだよ。」

「ひっでーなぁ！ゆき姉のギャップ、もひとつ見つけた！
可愛い顔して毒舌を吐くこと！」

「俺も当麻に賛成！」

記者会見の前半は、何度も笑いが巻き起こりながらも和やかに、スムーズに進行していった。

後半にはいよいよ、雪見の生歌が披露されるのだが、そんなこと忘れたかのように

雪見の酒のピッチは勢いを増している。

誰かそろそろ、止めてやった方がいいんじゃない？

雪見の目には、もはやここが記者会見場とは映っていないようだった。
たくさんの人で賑わってる、週末の居酒屋にでもいるかのような気分で辺りを見回す。

「おじさんたちぃー！飲んでるぅ？
あとで私がとっておきの歌、歌ってあげるから、まだ帰らないでねー！」

雪見の呼びかけに、いい感じに酔っぱらったおじさん記者の間から「まだまだ帰らんよー！」と返事が来る。
だが、酒を飲んでいない記者達の中には、この状況を冷ややかな目で見る者も、もちろんいた。

「なんなの？この記者会見。夜の九時に呼び出したのは、ただお酒が飲みたかっただけ？
こっちの質問は一切シャットアウトだし、公式発表以外に大した情報はくれないし。」

「いいじゃん。酔った健人と当麻が見れただけでも。
あの二人って、ほんっと仲いいよね！もう、めっちゃ可愛い！
けど、あの雪見ってのは少々目障り。すっかり二人の姉さん気取りだし。」
同年代の女性記者達は、嫉妬心を剥き出しにして雪見を見ていた。

「健人くんも当麻くんも、よく家に泊まってくんだよねっ！
外で飲むと落ち着いて飲めないからって、家に飲みに来るんですよ！

行きつけの居酒屋みたいに。
で、次の日の仕事が午後からだったりすると、そのまんま寝ちゃうの。
でね、しょうがないなぁーまったく！とか言いながら私、こっそり二人の寝顔を撮って、
コレクションしてるんです。
カメラマンに戻ったら、健人くんと当麻くんの寝顔だけ集めた写真集でも作ろうかなと思って。
今までにないでしょ？そんな写真集。」

「うそっ！いつから撮ってんの？そんな写真！全然知らなかった！
当麻知ってた？」

「まったく気付かなかった！大体が仕事の疲れと酒のせいで、爆睡してるもん。
ゆき姉に叩き起こされるまで。」

「えへへっ！知らなかったでしょ！
めっちゃいい写真ばっかなんだよ！健人くんの寝顔なんて天使みたいなの。
あ、でも出す時は事務所通さないとまずいか！写真集は。
あとで常務に交渉してこよーっと。
と、その前に、ビール飲み過ぎてトイレ行きたくなっちゃった！
あとはよろしく！お二人さん。」

「え？えーっ？ゆき姉、ちょっと！」

雪見は、健人たちが驚いてる隙に、あっという間にステージ上から消え去った。

だが、その様子を会場の隅で見ていた真由子と香織は、雪見の様子が何となくおかしい気がして、雪見を探しに会場を飛び出した。

会場横にあるトイレに雪見の姿は見当たらない。
「おっかしいな、どこ行ったんだろ、雪見…。」

ずっと通路を小走りにたどって行くと、『浅香雪見様控え室』と張り紙がしてある部屋があった。
トントン！　ノックをしてみるが返事はない。
真由子がそーっとドアを開けてみる。
すると…。見覚えのある後ろ姿があった。雪見だ！

「雪…見？」　真由子が声を掛けた背中が、微かに震えている。
「どうしたの？雪見？」　香織が前へ回ると、雪見は…泣いていた。

たった一人で窓の前に立ち尽くし、ビルの最上階から東京の煌めく夜景を眺めている。
しかしその夜景の映った瞳からは、キラキラと光る涙が次から次へと溢れては落ちた。

「綺麗な夜景だねぇ。パパの会社からこんな綺麗な夜景がタダで見れるなら、
今度ここで彼氏とデートしよっかな？
ねぇ…。なんかあった？嫌なことでも。」
真由子が窓の外だけを見つめながら、隣りに立つ雪見に話しかける。
香織は、そっと雪見にハンカチを差し出した。

「思い出してた…。健人くんがアイドルの斎藤健人だって判った日、初めて二人で行ったレストランで見た夜景…。
健人くんが、私に見せてやりたかった、って…。」

「そうなの。で、懐かしくなっちゃった？出会った頃が。」
香織が穏やかな微笑みをたたえて雪見を見る。

「どうなって行くのかな、私達　…。
一緒に暮らしてるのに不安で怖くて、急に現実から逃げ出したくなる。
健人くんとの事も、これからの仕事の事も、全部全部先が見えない…。
怖いよ、香織…。」

「今も？今も逃げ出したくなっちゃったんだ…。
けど、健人くんも当麻くんも雪見の後ろ姿、心配そうに目で追ってたよ。
健人くんね、本当に雪見の事大切に思ってると思う。
当麻くんだって、『健人とゆき姉には、心から幸せになってほしいと願ってる。』
って、私にメールくれたよ、昨日。」
香織の声はいつでも温かで、雪見の心をまあるく包み込む。
が、真由子の声は…。

「ちょっと、香織っ！あんた、いつ当麻とアドレス交換したわけ？
信じらんない！
なんであたしが知らない当麻のアドレスを、香織が知ってんのよ！
っつーか、私にメールくれたよ、ってあんたたち、まさか付き合ってるの！？」

「そんなんじゃないよ。たまに当麻くんの相談に乗ってあげるだけで…。」
真由子のまくし立てるような攻撃に、いつも香織はマイペースで答

える。

「当麻からの相談事ぉ！？あんたとあたしって、雪見の友達としては対等なはずなのに、
なんであたしはアドレスも知らないで、あんたは当麻の人生相談に乗ったりしてるわけ！？」
雪見は、いつもよりさらに強い口調で香織を問いつめる真由子に慌てた。

「ちょっと、真由子！少し落ち着きなさいよ！香織は何にも悪くないでしょ！
当麻くんだって、誰かに話を聞いて欲しい時ぐらいあるんだから！」
香織をかばうように間に割って入ると、なぜか真由子が微笑んだ。

「ふふっ。やっといつもの雪見に戻った。やっぱ雪見はそうでなくっちゃ！」

「えっ！？」

真由子の言葉にふと我に返ると、いつの間にか、さっきまでのグチャグチャな気持ちは
どこかへ飛んで行き、いつもの自分に戻ってる。

「私達の関係、昔も今も、なーんにも変わってないでしょ？
私が真由子に怒られて、それを雪見が仲裁に入る。
人間ね、一度しっかり結ばれた関係って、そうやすやすと変わるものではないと思うよ。
大丈夫！雪見と健人くんの絆は、しっかりと結んであるでしょ？」
香織の言葉が胸に染み込む。

「そうそう！私がぶち切ろうとしたって絶対切れそうもないんだから！
もうちょっとさ、健人を信用してやんないと可哀想だよ。
さ！みんな待ってるから会場に戻ろう！
酔っぱらいのおっさん達にとっととデビュー曲聞かせて、家帰って健人と
イチャイチャしなさい！不安なんて吹き飛ばすようにね！」

「真由子。相当おっさん化が進んできたけど…。」
そう言いながら雪見が大笑いした。

この二人がいてくれるから、私は大丈夫！
長い通路を戻りながら、もう少し頑張ってみようと自分自身と話し合う。
そう！私には、かけがえのないあの人が待っている！

地上に降りたマリア

突然、トーク中のステージから雪見が消え去り、後に残された健人と当麻は
雪見が戻るまでの間、必死に場を取り繕っていた。
夏美も、雪見がなかなか戻って来ないので、ステージ横でイライラし始める。

「ねぇ、全国ツアーって楽しみじゃない？
この三人でコンサートができるなんて、夢みたいな話だよね！」
当麻が、ツアーの話で何とか時間稼ぎをしようと、健人に話を振る。

「ほんとだね。ついこの前までそんなこと、思いもしなかったな。
でもさ、ＣＤデビューしたらいつかはきっと！ってみんなが夢見る全国ツアーを、
デビューから二十日後には実現しちゃうって、なんか怖い気がする。
ほんとに俺たち、大丈夫なの？って。」
実は健人も、雪見と同じような気持ちで揺れ動いていた。
自分には、そこまでの実力があるのだろうか、と…。

「俺はさ、一人なら無理かもしれないけど、健人とゆき姉が一緒ならなんとかなると思ってるよ。絶対楽しいでしょ！めっちゃワクワクする！」
そう思えるのが当麻のいいところだった。

見た目、健人はあまり物事を深くは考えないように見られがちだが、
実は何事においても慎重派で、よく考えてからでないと行動には移さない。
反対に当麻は、まず行動に移してから考えるタイプで、健人に比べ

ると楽天的とも言える。
だから今回のツアーに関しても、デビュー出来ること自体は嬉しいが、
まだそんな時期ではないのではないか、と言うのが健人の正直な気持ちで、
いやいや、三人力を合わせれば何とかなるさ！と言うのが当麻の考えであった。

「だって、これが最初で最後だよ！三人でツアー出来るの。
ゆき姉は、三月一杯しかアーティスト活動しないんだから、幻のコンサートツアーでしょ！
あ！記者さんたち、ここ強調しといて下さいねっ！
今回限りの三人でのツアーだから、皆さんお見逃しなく！って。」
当麻がそう言って会場を見渡し、念を押した。

するとそこへ、「みなさん、ただいまぁー！」と雪見が元気良くステージに戻って来た！
夏美が止める間もなく、手で何やらコロコロと押しながら…。

「遅いよ、ゆき姉！家のトイレまで行っちゃったのかと思った！」
当麻が、やっと戻った雪見に胸をなで下ろした。

「ホント、もう帰って来ないのかと思って心配したんだから！」
健人の本心でもあった。

「ごめんごめん！ちょっと良いこと思いついちゃって。」
雪見が手を合わせて二人に謝る。

「あれ？何持ってきたの？まさかそれって…。」

「ピンポーン！当麻くん、正解です！カラオケ借りて来た！
歌お！私達の課題曲！なんか急に歌いたくなってさ、『ヴィーナス』
の
吉川編集長にお願いして、違う部署にあったの借りてもらっちゃっ
た！
だって、私の歌はこれから披露するけど、二人の歌は今日はまだ発
表出来ないでしょ？
それじゃ、せっかく集まってもらったこんなに大勢の記者さん達に、
申し訳ないじゃない。
だからあの歌で今日の所は、勘弁してもらおうと思ってさ。」

雪見は、ニコニコしながら二人を交互に見つめる。
さっきまで泣いていた事など、おくびにも出さずに…。
健人と当麻は顔を見合わせて笑ってた。ゆき姉らしいや！と思いな
がら。

「よっしゃ！そんじゃ歌っちゃいますか！俺ね、この後カラオケ行
きたいと思ってたのよ！
さっすが、ゆき姉！俺の事、わかってるぅ！」
当麻のテンションが上がってきた。

「そう言う理由で借りてきたんじゃないんだけど…。まっいいか！
健人くんも歌ってくれるでしょ？」

「もちろん！ありがとね、ゆき姉。みんなのこと考えてくれて。
ゆき姉は…、もう大丈夫だよね？」
健人が雪見の目を真っ直ぐに見つめ、瞳で会話する。

「大丈夫！ちゃんと歌えるよ。でもその前に…。

ビール一杯だけ飲ませて！走り回って準備したから、喉がカラカラ！」

雪見が美味しそうにビールを一気に飲み干し、「うまいっ！」と叫ぶと、

その飲みっぷりに会場からは「いいぞーっ！」と拍手が起こる。

雪見がその声援に応えるかのように、ステージの前方ギリギリに立ち、

会場に集まった記者達に話しかけた。

「えっと、皆さん！今日は本当にお忙しい所、私達の為にお集まり頂き有り難うございました！」

突然雪見が挨拶を始めたので、健人と当麻も慌てて雪見の横に勢揃いする。

「私達はなにぶん俳優と猫カメラマンです。

そんな三人が歌う歌ですから、下手くそ！と思われるかも知れません。

ですが、心から楽しんで歌う事に関しては、誰にも負けてないつもりです。

これから三人で歌わせてもらうのは、絢香×コブクロの『ＷＩＮＤ　ＩＮＧ　ＲＯＡＤ』です。

当麻くんのラジオ番組向けに練習した曲ですが、今の私達を表現するのにピッタリな

一曲だと思います。

その後に歌う私のデビュー曲『君のとなりに』と、二曲続けてお聞き下さい。」

そう言って頭を下げたあと、三人は胸元のピンマイクを外し、ステージ中央に置かれた

カラオケの前に移動して、雪見を真ん中にマイクを握る。

曲をセットしてから三人、目と目を合わせにっこりと笑った。

♪曲がりくねった道の先に　待っている幾つもの小さな光
　まだ遠くて見えなくても　一歩ずつ　ただそれだけを信じてゆこう

出だしのフレーズの息がピッタリと合い、三人がホッとした瞬間
会場からは地鳴りのようなどよめきと共に、割れんばかりの拍手が
湧き起こる。
予想もしてなかった反応に一瞬ビビッた三人だったが、みんなが受
けてくれたと嬉しくなり、
今までで一番楽しんで歌う事が出来た。

歌い終わった時の喝采は、たった一曲のカラオケの後とは思えない
ほどで、
いつまでたっても拍手と声援が鳴りやまず、ステージ横で見ていた
常務の小野寺を始め
プロデューサーの三上、夏美、今野らも、この三人の成功を改めて
確信した。

拍手の渦の中、雪見がステージ左に用意されたグランドピアノの前
に静かに座る。
健人と当麻も、雪見を見守るようにピアノを取り囲んだ。

ふぅぅぅ…。いつもと同じに雪見は目を閉じて、大きく息を吐く。
パッと瞳を開けた時、雪見は『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ;』に変身を
遂げていた。
大勢の人を前に、初めて歌うとは思えないほどの落ち着きを見せて
いるのは、
もはや周りの景色など目に映らないからで、ゆっくりと鍵盤に指を

下ろし、
穏やかな顔で前奏を弾き始める。

♪はるか遠くに忘れた日々を　君と一緒に取りに戻ろう

たったのワンフレーズで、ざわついた会場は水を打ったかのように静まり返えった。
そこにいるすべての人が雪見の声に心奪われ放心し、やがて涙をこぼす。
それはまるでマリア様に偶然出会い、今までの罪を懺悔して流す涙にも似ている。

地上に降りた聖母マリアが、そこにいた。

衝撃見出し！

クスクスッ！「おっこるだろうなぁ、ゆき姉！」

あれっ？なんか健人くんの笑い声がしたような…。
夢の中で聞こえたのかなぁ？
なんか飲み疲れて、目が開かないや。うわぁ、頭も痛ーい！
お寝坊さんの健人くんが、私より先に起きるわけないし…。
まだ目覚まし鳴らないから、もうちょっと寝てようっと。

デビュー記者会見の翌朝。
雪見は昨夜の飲み過ぎがたたって、まだベッドの中にいる。

昨夜の記者会見は雪見がデビュー曲を歌い終わったあと、大変な騒ぎとなってしまった。
ただの酒飲みのお姉ちゃん！ぐらいに雪見を見ていた記者達は、まず『ＷＩＮＤＩＮＧ　ＲＯＡＤ』の声量あるパンチの効いた歌声に聴き惚れ、次に
『君のとなりに』のささやくようなウィスパーヴォイスに驚く。
誰もが聞いたこともないのに、なぜかマリア様のささやきが頭に思い浮かび、
自然と涙が頬を伝った。
おじさん記者も、雪見を煙たがっていた女性記者も、健人も当麻も…。

会見が全て終了した時、記者達は少々ふらつく足で先を争うように出口へ向かい、
それぞれの社へと大慌てで戻って行った。

「何としてでも明日の朝刊に間に合わせなければ！久々の大発見だぞ、これは！」

一気に会場から人が居なくなり、残された健人たち三人と小野寺や三上らは
呆気にとられたあと、なぜか可笑しくなってみんなで大笑い。

「よしっ！残った酒で打ち上げだ！」
三上の音頭でお疲れ様の乾杯をし、『ヴィーナス』編集長の吉川を始め
進藤、牧田らスタッフも含めて全員が、三人のデビューに向けて全力で
サポートすることを誓い合う。
雪見たちも、「悔いが残らないように頑張ろうねっ！」とお互い心を一つにした。

笑い声の絶えない、楽しい打ち上げのあとには…二日酔いが待っていた。
最悪だぁ…と思いながら、雪見はベッドの中でうつらうつらとしている。
半分寝てるような、起きてるような…。
だがさっきから、どうも健人の気配を頭の辺りで感じる。
クスクス笑ったり独り言を言ったり…。
え？えっ？まさか…！？

「うっそぉ！？健人くん、もう起きてるの！？やだ、寝坊しちゃった！
なんで起こしてくんないの！早く朝ご飯作らなきゃ、仕事遅れちゃう！

あ痛たたっ！最悪だ…。頭は痛いし寝坊はするし…。」
雪見が一人で慌てふためいているというのに、なぜか健人は余裕の表情で
ベッドに腰掛け、新聞を読み散らかしている。

「おはよ！ゆき姉。なに一人で慌ててんの？
今日の仕事は夕方からだって、昨日常務が言ってたじゃん。」

「うそ！？そうだっけ？今何時？」

「今？六時だよ。」

「なんで健人くんがそんな時間に、私より先に起きてんの？」

「これだよ、これ！朝刊が楽しみで寝てなんていられないから！
朝っぱらから走ってコンビニ行っちゃった！
あ、いっぱいサンドイッチ買ってきたから、朝ご飯はそれでいいよ。
ゆき姉はまだ寝てていいけど、これだけ見てから寝て！」
そう言いって健人は、ニコニコしながらベッドの上に散らかしたスポーツ紙を集めて、
眼鏡と共に雪見に手渡した。
ボーッとしてズキズキと痛む頭に手をやりながら、見出しに目をやる。

「『健人&当麻＋変幻自在化け猫カメラマン、デビュー決定！』って、ちょっと何よこれ！
こっちは『猫を被った歌姫ＹＵＫＩＭＩ&』って、ひどすぎない？
なんでどこも猫扱いなわけっ！？」
雪見は一気に寝ぼけ眼が覚めた。

怒りまくる雪見を見て、健人がお腹を抱えてベッドの上を笑い転げる。

「やっぱ怒った！思った通り！」

「あったりまえでしょ！これ、怒らない人いる？」

「まぁまぁ！ちゃんと中の記事読んでみなよ。どの新聞もゆき姉のこと、大絶賛してるから。
俺と当麻のことも、褒めてくれてた！『見た目だけじゃなく、実力も充分な二人』だって！
スポーツ紙の見出しなんてインパクト第一なんだから、その点から言えば
満点のインパクトでしょ！
大体ゆき姉が自分の事、猫カメラマンって呼ぶからだよ。
俺のことだって写してんだから、ただカメラマンでいいのに。」

「それにしたって、あんまりだぁ！」

雪見は嘆きながらも新聞記事に目を通す。
読んでみると、確かにどの記事にも雪見の事を「奇蹟の歌声」とか「久々の超大型新人現る！」
とか、褒め言葉が並んでいた。
が、スポーツ紙が褒めて終る訳はなく、その他にも酒豪だの、話し言葉と歌声、
見た目のギャップが激しいだの、好き放題書かれている。
まぁ、完全否定できないのが悔しいが…。

しかしただ一つ胸をなで下ろしたのは、どこにも健人と雪見の関係を疑う記事が

載っていなかったこと。
どの新聞も、健人と雪見は仲の良い姉弟のような親戚同士と伝えていた。

「良かったぁ！私達のこと、どこにも書かれてなかった！
どうにかお芝居がバレないで済んだ。」
ホッとしたら、また眠気が襲ってきた。
雪見がベッドにバタンと寝転がって目を閉じると、健人がその隣りに転がって、
チュッとほっぺたにキスをした。

「ねぇ！せっかく夕方まで仕事ないんだから、久しぶりに二人でどっか出掛けようよ！
この先はびっしり仕事が詰まってるから、半日も休めるのは今日だけだって、
今野さん言ってたよ！」
健人が雪見を寝かさないようにと、何度もキスをする。

「うーん。どこ行きたいの？健人くん。」雪見がベッドに寝ころんだまま伸びをした。

「コタとプリンに会いたい！実家に取りに行きたい物がある。」

「えっ？取りに行きたい物って？」雪見が上半身を起こし、健人に聞いた。

「秘密ぅ！ねっ、これから出発すれば仕事に間に合うよね？高速飛ばして行けばさ！」

「うん、まぁ…。よっしゃ！じゃあ久々に埼玉までドライブでもし

てきますか！
その代り、そんなにものんびりしてられないからね。
日曜だから道路混んでるだろうし…。」

「わかった！じゃ早く準備して！いや、準備なんていいや。そのまま出掛けよう！」
健人が今にも玄関を飛び出しそうな勢いだったので、雪見は慌てた。

「たんま！私に十五分だけ時間を頂戴！大至急準備するから、健人くんはその間、
ラッキーたちに餌をあげて！」

「ＯＫ！任せて！」

雪見は大急ぎで着替えて顔を洗い、化粧をする。
冷蔵庫から野菜ジュースを取り出し、健人が買ってきたサンドイッチと共に鞄に入れた。

さぁ！少々痛い頭は気にせずに、二人だけのドライブに出発だ！

つかの間の休息

今朝の朝刊に大々的に三人が取り上げられ、いよいよ慎重に行動しなければならなくなった健人と雪見。
マンションの地下駐車場を出る時が要注意と、雪見が辺りを見回しながらアクセルを踏み込み、
黒縁眼鏡にキャップを被った健人は、助手席のシートを倒して身体を低くした。

「もう起きても大丈夫だよ、健人くん。見つからないで出れたから。」

「ほんとに？あー、ドキドキした！週刊誌のカメラマンが大勢いたらどうしようかと思った！」

「誰も私になんか興味ないって！それよりお腹空いた！朝ご飯にしよう。」
助手席に座ってる健人が、サンドイッチを包みから一つ取り出して、運転中の雪見の口に入れてやる。

「うーん、美味しい！飲んだ次の日の朝ご飯が美味しいなんて、健康的だなぁー！
そう言えば、前に健人くんちに泊まりに行った時も、車ん中でサンドイッチ食べたよね？」

「あぁ、家で真夏のチゲ鍋パーティーやった時ね。
あの帰り道にゆき姉が、俺に告ったんだよねっ！」
健人がサンドイッチを頬張りながら雪見の顔を見て、にやっ！と笑った。

「それ、一生言おうとしてるでしょ！
私からすれば、まんまと健人くんの誘導尋問に引っかかったと思ってるんですけど。」
雪見が口を尖らせて言ったが、健人は真剣な目をして雪見を見てる。

「あの日があったから、今一緒に暮らしてるんだよね、俺たち。
なんか夢見てるみたいだな。ゆき姉と毎日一緒にいれるなんて。」
最後はちょっと照れて、健人は窓の外を見た。
そんな健人が可愛くていとしくて胸がキュンとした雪見は、何か気の利いた返事を捜したが、
口から出てきた言葉は照れ隠しに素っ気なかった。

「なに言ってんの！夢だったらこまるでしょ！
それより、おばさんに電話入れた？これから行くって。」

「あ！まだしてない！まぁ留守でも鍵あるし…。」

「だめっ！ちゃんと電話入れないと。つぐみちゃんもいるかなぁ？
日曜だから朝からデートにでも出掛けてるかな。」

「ないない！あいつに彼氏なんているわけないから！」
健人は妹の話となると、途端にお兄ちゃんの顔になる。

「つぐみちゃんだって、いつまでも子供じゃないんだよ！
春には大学生かぁ！早いなぁ。ほら！いいから電話、電話！」

残念ながらおばさんはいなかった。
昨日から、おじさんの単身赴任先に出掛けてるらしい。
つぐみがいて、「待ってるよ！」と言っていた。

途中、通りがかったケーキ屋さんに寄り、美味しそうなケーキを買って健人の自宅へ。

「ただいまぁ！つぐみぃ！ケーキ買ってきたぞー！」

「お帰りー！」パタパタとつぐみが二階から降りてくる。
久しぶりに会う妹に健人は、嬉しいくせにそんな顔は見せない。
相変わらず、お互い憎まれ口を叩き合う。

「お前も暇だねぇ！日曜だってのに家にいるんだから！」

「受験生に日曜は関係ないの！それより、なんで急に帰って来たの？お母さんだって、もっと早くに電話くれてたらお父さんの所行かなかったのに、って言ってたよ！」
おばさんのがっかりした顔を思い浮かべ、可哀想な事をしたと雪見は思った。

「仕方ないだろ！今朝突然思いついたんだから。」

「今朝思いついて、ゆき姉に迎えに来てもらったわけ？
随分と偉そうな芸能人になったもんね、お兄ちゃんも。」
まさか二人が一緒に暮らしてるなど、夢にも思っていないつぐみは、朝っぱらから健人が雪見を呼びつけたと思い、兄のわがままを雪見に詫びる。

「ごめんねぇ！ゆき姉。いっつもお兄ちゃんが迷惑かけてるんでしょ？
ゆき姉だって暇じゃないのにね！

ラジオでゆき姉の歌、聞いたよ！デビュー決定おめでとう！
もう、みんなに自慢しまくっちゃった！私の親戚なんだよ！って。
サインいっぱい頼まれちゃったから、今度お願いねっ！」

「おいっ！お前の兄ちゃんもデビューするのに、おめでとうの一言もないわけ？冷たい妹だ！」

「だって、お兄ちゃんの歌はたかが知れてるもん！
まぁ、当麻くんと二人でやれて良かったね！ぐらい？当麻くんのお陰でそこそこは売れるかな？」

「てっめー、言いたい放題言いやがって！とっとと二階上がって勉強しろってーの！」

「はいはい！ケーキ頂いて邪魔者は消えるわ！ゆき姉、ゆっくりしてってね！」
つぐみはお皿を三枚出し、その内の一枚に大好きなミルフィーユを乗せ、
牛乳をグラスに注いで自分の部屋へと上がって行った。

「ふふっ！つぐみちゃんもケーキには牛乳なんだ。健人くんと同じ！」
雪見はつぐみが可愛くて仕方ない。
つぐみと話してるお兄ちゃんぶった健人の顔も、大好きだった。

「いいよなぁー、妹！私も妹が欲しかった！」

「あんなんでいいなら、ゆき姉にやるよ！そのうちね。」

「えっ？どういうこと？」

「い、いや別に…。あ！それより俺たちもケーキ喰お！
今、コーヒー入れて来てあげる！ほんっと、あいつは気が利かないんだから！
ゆき姉にコーヒーぐらい、入れてから行けっつーの！」
そうブツブツ言いながら、健人はキッチンに消えて行った。

雪見が座るソファーの隣りに、虎太郎とプリンが先を争うように飛び乗る。
よしよし！と二匹の頭を交互に撫でながら、さっき健人が言った言葉の意味を何となく考えた。

『別に深い意味はないか！そうだよね、あるはずはない！』

お待たせ！と言いながら、健人が雪見にコーヒーを運んで来る。
自分には牛乳を、大きなグラスに入れて持って来た。

「ありがと！なんか、健人くんにコーヒー入れてもらうの初めてかも？
料理は無理でも、コーヒーは入れられるんだ。味わって飲まなくちゃ！」

「大袈裟な！俺だって、コーヒーぐらい落とせるさ！
だって、水とコーヒー豆セットするだけじゃん！
ねぇ。ゆき姉は俺が当麻みたいに、料理が出来た方が嬉しい？」
健人がケーキを口に運びながら、雪見の顔を伺う。

「え？料理？料理は私が好きだから、出来なくても全然何とも思わないよ。
それより部屋の片付けを、もう少し頑張って欲しい！自分の部屋だ

けでもいいから。」

「うーん、それは厳しい！生まれ変わらないと無理かも？
でも嫌いにならないでね、俺のこと。」

「あははっ！そんなことぐらいで、嫌いになんかならないって！変
なの！健人くん。」

健人は安心したように、コタとプリンを二匹膝に乗せる。
二匹も久々の健人の温もりに、安心しきって目を閉じた。

幸せな光景は、写メして永久に保存しておこう。

アルバムの中の健人

「ねぇ、ここに何を取りに来たの？」

コタとプリンと遊んでる健人に、雪見が久しぶりにカメラを向けながら聞いてみる。

猫と戯れる健人は自然体で、どの角度から狙ってもやっぱりフォトジェニックだった。

「そうそう！肝心な事を忘れてた！コタ、プリン、今度はこれで遊んでて！」

健人が部屋の隅に、ぽーん！と魚の形のおもちゃを放り投げると、二匹は先を争うようにして

健人のそばを離れて行った。

その隙に健人は二階へ駆け上がり、自分の部屋を物色し始める。

部屋は健人が高校を卒業し上京した時のまま、手付かずにそこに存在した。

まるでこの部屋だけ時間が止まっているかのように、勉強机の上には辞書やら教科書、

筆記用具などが整頓されて置かれている。

健人のあとを付いて二階に上った雪見は、その部屋を一目見て、母親の深い愛を身体に感じた。

「おばさんの中で健人くんは、ここにいた時のまんまなんだよね、きっと。」

「俺さ、高校の教科書とかいらない物、もう全部捨ててくれって言ってあるんだよ！

なのにそのまんまなんだから。
そういや二年ぐらい前までは、壁に学ランまでぶら下がってた！
それじゃ俺、死んじゃった可哀想な息子みたいでしょ？
さすがに、それだけはやめてくれ！って言ったら押し入れに仕舞っちゃった。どうすんだろ？あれ。」

「母親ってさ、きっとどこの親もそんなもんだよ。
いくつになっても、どこにいても子供の事を思ってる。
たとえ百歳になったって、母親という事実は変化しないんだ。」

「そんなもんかなぁー。」
健人は押し入れを開けて、何やら捜し物をしている。
そして「あった！」と叫んでアルバムを取り出した。
それは小学、中学、高校の卒業アルバム三冊と、母親が作ったであろう
赤ちゃんの頃からのアルバムが五冊だった。

「重っ！ゆき姉、こっち持って！」と卒業アルバムを手渡され、部屋を出る。
階段を降りながら雪見は、「でも健人くんがいた時の部屋は、あんなに綺麗なわけないよねーっ！」
と言ったら健人に怒られた。

二人でソファーに座り、アルバムを開く。
雪見にとっては懐かしい十歳頃までの健人や、全く知らないそれ以降の健人が、
ページをめくるたびに次々と飛び出した。

「へぇーっ。高校時代はもう今の健人くんなんだ。

そうだよね、まだ卒業して四年も経ってないんだもんね。
こんなイケメンが学校にいたら、みんな毎日が楽しくって仕方ないよなぁ！」
雪見は、自分が健人のクラスメイトだった場合を想像する。

「それって、どこから目線なわけ？目の前に実物がいるでしょ！」
健人が顔をぐっと雪見に近づけた。
頭の中で女子高生になってる雪見は、ドキドキして思わず視線をそらしてしまう。

「そーゆーの、高校ん時もよくやってたの？」

「なに？そーゆーのって。え？俺、そんな軟派な高校生活を送ってたと思ってる？」

「だってモテないわけはないでしょ！この健人くんが学校の中にいるんだよ！
隣のクラスにいてもドキドキでしょ！」

「だーかーらぁ！ゆき姉の想像してるような高校生じゃなかったって！
結構地味な存在だったと思うよ、俺って。
あ！そうだ！なんでアルバムを捜したかと言うとね…。
確か二組だったと思うんだけど…、あ、いた！こいつだ！」
健人が高校の卒業アルバムを開いて、誰かを指差した。

「誰？クラスメイト？」
雪見が健人の指先を覗き込むと、そこには黒髪を二つに縛り、焦げ茶の眼鏡を掛けた
明らかに今どきの女子高生とは違う、地味めな女の子が写っている。

「この子がどうかしたの？」

「今度のドラマで俺の同僚役に決まった、うちの事務所の新人なんだけど、
俺んとこ挨拶に来た時に、俺と同じ高校で隣のクラスだったって言うのよ。
名前を聞いても全然ピンとこなかったんだけど、アルバム見たら思い出した！
あのガリ勉くんが、なんでうちの事務所に入ったんだろ？」
健人が首を傾げて不思議がる。

「凄いね！新人の女優さんなのに、健人くんの同僚役なんて。」

「バーターってやつ？俺を使う代りにこいつもよろしく！みたいな。
新人を売り込む時に事務所が使う手さ。
けど、この写真とは別人になってたから、まったく判らなかった！
高校ん時はガリ勉くんって呼ばれてたのは知ってるけど、多分一度も話した事なかったと思う。
来週のオンエアかな？出て来るから見てやって。」

「うん、見てみる。」
そう言いながらも雪見は、根拠のない不安を感じてしまった。

『いかんいかん！いちいち健人くんの共演者をそんな目で見てたら、身体がもたないぞ！
健人くんは人気があって当り前なんだから。
その人気者が私を彼女にしてくれてるなんて、よく考えたら奇蹟みたいな話だよね！
しかも私達、一緒に住んじゃってるんだよ？今更ながらビックリな

話。
でも、つぐみちゃんやおばさんが知ったら、悲しむだろうな…。』
母が注ぐ愛は、残された健人の部屋を見ると一目瞭然であった。
健人とは一緒にいたい。けどおばさんを悲しませたくはない。
雪見の心は、健人と付き合い出してから常に、葛藤と共にある。

「あっ！」　いきなり健人が大声を出したので、雪見はドキッとした。

「なによ！ビックリするでしょ！また何を思い出したの？」
「ねぇ、今日は何月何日？」
「今日？１０月３１日だけど、それがどうかした？」

「『秘密の猫かふぇ』行って、会員証の更新してこないと！
せっかくの会員なのに、更新して会費払ってこないと無効になっちゃうよ！」

「やだ！じゃ東京戻ろう！今から手続に行けば、仕事にも間に合うから。」

二人はバタバタと帰り支度をし、階段の下から二階のつぐみに声を掛ける。
「つぐみぃ！用事を思い出したから帰るからぁ！」

「えーっ！もう帰っちゃうのぉ！？」二階からつぐみが慌てて降りてきた。
「もっとゆっくりして行けばいいのに！」

「そうしたいのは山々なんだけど、どうしても夕方の仕事前に行かなきゃならないとこ、思い出したの。また今度、ゆっくりお邪魔するね！おばさんにも、よろしく伝えて。」

「ねぇ！今度友達と東京に買い物に行くんだけど、ゆき姉んちにも寄っていい？」

つぐみが雪見に笑顔で聞いてくる。

「だめっ！お前は受験生なんだから、大人しく部屋で勉強してろ！」

健人が大慌てで、力一杯阻止しようとする。

「なんでお兄ちゃんがだめ！とか言うわけ？お兄ちゃんには関係ないでしょ！」

「ゆき姉だって一躍有名人になったんだから、これから忙しくなるのっ！」

なんとかつぐみをはぐらかし、健人と雪見は東京に戻って来た。

真っ直ぐに『秘密の猫かふぇ』へと向かった二人が見たものは…。

「都合により当分の間、休業致します」の張り紙だった。

雪見の役目

「うそっ！当分の間休業します、って一体どういう事！？」

健人と雪見は、たった紙切れ一枚張られた店の前に、茫然と立ち尽くしていた。

ここに来たいと思いつつも忙しくて来れなかった間に、一体何があったと言うのか。

「改装工事でもするのかな？」

「いや、だったら詳しく何月何日リニューアルオープンとか、普通書くでしょ。

黒服の執事さんがいた事務所の方にも行ってみよう。」

『ＨＮＫ』と書かれたドアの前にも、まったく同じ張り紙がしてあり、入り口には鍵が掛っている。

何の説明も無いたった一行だけの張り紙に、二人は言いようのない不安を感じた。

「当麻も多分知らないだろうね。きっとびっくりするよな…。

今日はここにいてもどうしようもないから、取りあえず帰って仕事の準備をしよう。」

「そうだね。」

午後六時からの仕事は健人、当麻、雪見の三人で、音楽雑誌と芸能月刊誌二誌の

合わせて三つの取材が入っている。
アーティストとして受ける初めての取材なので、普段は取材慣れしている健人であっても
珍しく少々緊張気味であった。

「だってさ、まだレコーディングもしてないのに取材だなんて、一体何を話せっちゅーの？
話の材料が少ない取材って、俺の一番苦手な仕事だよ。」
雪見が作ったおにぎりを食卓で頬張りながら、健人は仕事を受けた事務所に対して不満を漏らす。

「健人くんにも苦手な仕事ってあるんだ！なんか意外！
俳優の斎藤健人って、何でもそつなくこなすイメージなんだけど。」
着替え終った雪見が、ピアスを付け替えながら健人の方を見た。

「ゆき姉まで俺のこと、そんな風に見てんの？
俺、みんなが思うほど万能じゃないよ。出来ないって思う事だって、ほんとはたくさんあるのに…。」
少し口を尖らせ、視線を下げる健人。。
雪見までもが自分のことを理解してくれないのか…。
そんな寂しさがにじんだ横顔だった。

雪見は、椅子に座ってうつむく健人におんぶするように、後ろからギュッと抱き締めた。
「知ってるよ。俳優の斎藤健人になってる時って、苦手な事も普通の顔して出来ちゃうでしょ？
別に無理してるわけでもないけど、頑張れちゃうんだよね？
だったら、それはそれでいいじゃない！
仕事が終って素の自分に戻った時は、なーんにも出来ない健人くんでいいよ。

もっと私に甘えてくれてもいいのに。」

「じゃ、キスして！」

「え？」

「今日の苦手な取材も頑張れるようなキスをして！」

「そうきたか！仕方ない。チュッ！これで頑張れる？」

雪見は健人の後ろから右のほっぺたにキスをした。

「えーっ！そんなんじゃ無理！頑張れない！」

健人が笑いながら子供みたいに駄々をこねる。

いつもクールで冷静沈着、Ｓキャラで理系頭、と世間が思い描いているイケメンアイドル
斎藤健人が、雪見だけに見せる子供みたいにちょっとすねて甘えた表情。

こんな素顔が見られた時、雪見は改めて、自分はまだ健人の中で特別な存在なんだ！

と嬉しくてたまらなくなる。

が、悲しいかな雪見の性格上、いや、年齢のせいも多分にあるのかもしれない。

素直に嬉しいを表現出来なくて、口を突いて出て来るのはいつもこんな可愛げのない言葉だ。

「しょーがないなぁー、もう！」

そう言ってしまった後、以前真由子に言われたことが頭をよぎりハッとする。

『あんたも少しは健人に、恋人らしく甘えた顔を見せなさい！じゃないと、ただのお姉さんになっちゃうよ！』

お姉さんじゃヤダ！と思いながら、雪見が健人の前に回りキスをしようとした時、
いきなり健人が雪見を抱きすくめた。

「ずっと俺のそばにいてね。ゆき姉がいないと俺、頑張れないから。」

健人の言葉が嬉しくて、感じられる温もりが暖かくて、思わず涙が溢れてきて困った。
今日も健人は私のそばにいてくれる…。そんな安堵感から溢れた涙であった。

「えっ！どうして泣いてんの！？なんか嫌な事でも誰かに言われたりした？」
慌てた健人が雪見を問いただす。

「違う違う！そんなんじゃない。健人くんが泣かせるセリフを言うから…。」
毎日一緒にいても不安だとは、健人には言えなかった。
だが少なからず健人も、雪見と同じ不安を抱えて暮らしていると思った時、
本心を打ち明けて思いを共有すべきなのか迷った。

が、健人の優しいキスが、雪見を思い留まらせる。
『毎日が不安だなんて言ったら、健人くんが余計不安になる。
そんなこと、今の忙しい健人くんに言っちゃいけない。
精神的に健人くんを支えて行くのが、私の役目なんだから…。』

「大好きだからねっ！ずっと一緒にいるから。
私がいて健人くんが頑張れるなら、ずっとそばにいるよ。」
ギュッと抱き締めたあと、もう一度健人のほっぺたにキスをした。
自分の役目をきちんと果たすように…。

「今日から健人くんと当麻くんと、三人での仕事がスタートするんだね！
明日は三人で『ヴィーナス』のグラビア撮影だし、レコーディングもＰＶ撮影もこれからあるし、
きっと楽しい毎日が待ってるよ！」

「そうだね。ゆき姉と当麻と三人で仕事するなんて、夢みたいな話だもんね。
俺、ほんとは不安だったんだ。
ドラマも映画もあるのに、その上アーティスト活動なんて無理なんじゃないかって。
俺にそんな能力なんて、ないんじゃないかって。
でも、今やっと大丈夫なような気がしてきた。だって、ゆき姉と一緒だもん！」

「そうそう、その調子！私も負けないように頑張らなくちゃ！」

その時、健人のケータイに今野からの連絡が入った。
「今野さん、着いたって！じゃ、行こうか。」
二人はめめとラッキーの頭を撫でて、「行ってきます！」と玄関を出る。

注意深く急いで今野の車に乗り込み、「おはようございます！」と揃って挨拶したら

今野が後ろを振り返り、ニヤッと笑って言った。
「おはよう！お二人さん。久しぶりにゆっくり休めたか？
健人！ほっぺたに口紅付いてるぞ！」

「うそっ！？」
慌てて健人がほっぺたを拭い、雪見は健人の右頬を確認する。

「あははっ！お前ら、前にも引っ掛らなかったっけ？単純だねぇ！
この先、ほんとに忙しくなるから、二人で頑張って乗り越えろよ。
じゃ、行くぞ！」

今野は二人にとって、最高のマネージャーに違いない。

アーティスト初仕事

「よっ！お疲れ！当麻、早かったじゃん！もう終ったの？ＣＭ撮影。」
スタジオに到着した健人が、すでに来ていた当麻を見つけ嬉しそうに歩み寄る。

「うん！この仕事が楽しみだったから、ＮＧなしで頑張った！あれ？ゆき姉は？」

「メイク室で変身してるよ、『ＹＵＫＩＭＩ&ａｍｐ;』にね。そうだ！当麻、知ってた？『秘密の猫かふぇ』休業中だって！」

「うそっ！？マジで？いつまでの休業？俺、来週にでも三人で行きたかったのに！」
初耳だった当麻は、信じられない！という顔をして驚いた。

「張り紙はしてあったけど、詳しい事はなんにも書いてなかった。どうしたんだろ、いったい…。」
三人にとって大事な大事な場所だったのに。
健人は何事も無く、また開店の日が来ることを祈っていた。

「そうだ！今度、俺のドラマのゲストにみずきが来るんだ！今週の木曜あたりの撮影だったと思うから、会ったら聞いてみる！あいつならなんか知ってるだろうから。」

当麻が言ってる『みずき』とは、今は海外でも活躍してる女優の華浦みずきの事。
以前『秘密の猫かふぇ』で、祖父であり大俳優でもある津山泰三と

一緒にいる所に出会い、
雪見、健人と三人でドンペリをご馳走になったことがある。
そのみずきの祖父は、『秘密の猫かふぇ』オーナーの大親友で、みずきにとっては
オーナーが第二のおじいちゃん！と言っていた。
だが、確かあの時オーナーは入院中で、あまり思わしくない状態にみずきが涙してたはず…。

健人も当麻も、みずきの名前によってあの日の事が蘇り、二人同時に最悪の事態を
思い浮かべてしまった。

まさか…ね。

その時だった。
ガチャッ！という音の後にドアが開き、メイクをして衣装に着替え終った雪見が入って来た。
三月一杯まで『ヴィーナス』の吉川編集長が、進藤と牧田を雪見専属ヘアメイクと
スタイリストに付けてくれたのだ。
『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ；』のキャラクタープロデュースを担当する夏美と、何度も打ち合わせをした二人は、
今日の雪見も完璧に仕上げてくれた。

一瞬、ざわついていたスタジオに静寂が訪れる。
その場にいた雑誌記者や撮影スタッフが、初めて会った『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ；』に
目を奪われていた。

「ヒュ～ッ！さっすが進牧ペア！ゆき姉を知り尽くしてるもんね。まご…。」

「馬子にも衣装！って言いたいんでしょ！当麻くん。」

雪見がじろっと当麻をにらむ。

「ち、違うって！まごまごしてられないから、俺たちも着替えようって、

健人に言おうとしたの！健人、俺たちも早く準備してこよう！」

そそくさとスタジオを出てメイクルームに向かおうとする当麻の後を、

健人が笑いながら付いて行く。

雪見とすれ違いざま、「めっちゃ可愛いよ！今すぐチューしたいくらい！」

と健人が耳元でささやいたので、

雪見は誰かに聞かれはしなかったかと、ドキドキしながら辺りを見回した。

健人と当麻の準備も終わり、いよいよアーティストとして初めてのグラビア撮影開始！

今日はこのスタジオで、音楽雑誌一誌と芸能月刊誌二誌の取材と撮影を、順番にこなす。

まずは音楽雑誌のグラビア撮影。巻頭見開きで三人が載るそうだ。

本当は雪見と健人たちは、まったく違った活動をする予定なのだが、

なぜかどこの取材も、三人セットでの依頼だったらしい。

まぁ、事務所的にもその方が、無名の雪見を売るには都合がいいし、

雪見たちにしたって三人一緒だと、心強いし楽しかった。

この音楽雑誌には雪見はもちろんの事、健人と当麻も初登場なので、カメラマンを始めその場にいたライターやスタッフ一同、全視線が三人に注がれる。
だが、三人でのグラビア撮影は石垣島で経験済みだし、雪見も今では『ヴィーナス』のモデル並みに仕事をこなせるまでになっていたので、
次々と息の合ったポーズを決め、グラビア撮影に関しては何の問題もなく終了。
撮影が終った後も、誰もが三人の格好良さに見とれたままだった。

その後はスタジオ隅にある応接コーナーに移動し、インタビューに突入する。
インタビュアーは二十代後半の女性。
健人と当麻に会うために、思いっきりキメて来ましたぁ！という印象だ。
案の定、二人の方ばかりを見て、少しも雪見とは目を合わせようとはしない。
だがこんな状況にも、近頃雪見は慣れっこだ。
いちいち憤慨していたのでは身が持たないと悟ってからは、随分と気が楽になった。

「まずはＣＤデビュー決定、おめでとうございます！今のお気持ちを聞かせて頂けますか？」

当麻　ありがとうございます！今はもうワクワクしてますね。
早くレコーディングしちゃいたい！
健人　俺は正直言って、つい何時間か前までは不安だらけだった。
ドラマも映画の撮影も詰まっているのに、その上アーティ

スト活動なんて無理じゃないか、って。自分にそんな能力があるとも思えなかったし…。
けど、ここに来る前にある人に助言されて、気持ちが切り替わった。今は早くツアーに行きたい！

当麻　え？そこまで変わる？（笑）

「誰ですか？そこまで健人くんの気持ちを変えたのは？」

健人　秘密！教えてあげない。俺の人生において、重要な鍵を握ってる人である事は確かです。

当麻　お母さんかなぁ？お父さんかなぁ？（笑）

雪見　……。（無言）

「じゃ、デビュー曲について教えて下さい。」

当麻　待った！その前に、まだゆき姉の感想聞いてないでしょ！俺たち三人でツアーするんだから、ゆき姉の存在は重要ですよ！

「し、失礼しました。雪見さんの今のお気持ちは？」

雪見　んー、私にあんまりかまってくれなくていいです！どうせ大した事、話せないし…。

当麻　ダメダメ！『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ；』がそんなキャラじゃ！

健人　そうだよ！一緒に頑張るって、さっき約束したじゃないか！

雪見　だって…。

どうにも雪見のテンションが上がらぬまま、一本目の仕事は終了してしまった。
あと二本の取材が待っている。
ため息をつく雪見に、健人と当麻は何か秘策を思いついたようだった。

いつだって優しい二人

二本目の取材は、健人と当麻が毎月出ているアイドル月刊誌である。
カメラマンもライターさんも、すでに何年もの付き合いで気心が知れている。
だから二人が一番リラックスして受けられる仕事であり、多少のわがままも
聞いてもらえる仕事だった。

「お待たせしましたぁ！済みませんね、前の取材が押しちゃって。
紹介します！
今度うちの事務所からデビューすることになった『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ;』です！
今日は健人、当麻と共にお世話になります！」
マネージャーの今野が、次の衣装に着替え終った雪見を、取材スタッフやカメラマンに紹介する。

「あ、あの、よろしくお願いします！浅香雪見です！」

「本名で挨拶してどうすんだよ！アーティストとしての仕事なんだから
今は『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ;』だろ！」

「ご、ごめんなさい…。」
今野から本日二度目の注意を受け、益々雪見は落ち込んだ。

一本目のインタビュー前、健人と当麻の会話を聞いていた雪見は、

『秘密の猫かふぇ』の事がどうにも気がかりで頭から離れなくなり、しかも緊張感も手伝って、グラビア撮影以外は散々な仕事ぶりだった。

「健人と当麻がうまくフォローしたからどうにかなったものの、あの対談はあんまりだぞ！
いつも三人の対談はもっと話が弾んで楽しそうなのに、今日はどうした？」
今野に初めて叱られ、自分でもこれではいけないと思いながらも、どうしても気持ちを切り替える事が出来ずにいる。

そんな彼女を見ていた健人と当麻は、なんとか次の対談を成功させるべく
ある作戦を思い付き、気心の知れたカメラマンに声をかけた。

「山口さーん！お願いがあるんだけど。今日の設定って変更できるかなぁ？
あのね、当麻がドラマのスタッフさんたちから、デビュー決定のお祝いにって
シャンパンもらってきたのね。
で、それを開けて三人でお祝いのパーティーをやってる、っていう設定でやりたいんだけど無理かな？
三人のスタートを、どうしても山口さんの写真に残しておきたくて。」
健人の思いっきりアイドル視線のお願いビームは、五十近くのベテラン
おやじカメラマンでさえも、百発百中で撃ち落とす。

「あ、あぁ、いいよ！今準備させるから、少し待ってて。」
にこにこ顔のカメラマン氏は、すでに準備途中だったスタッフに変

更を指示し、
自らも率先して小道具室から、シャンパングラスやテーブルクロスをスタジオに運び入れた。

丸テーブルにゴールド色の豪華なテーブルクロスが敷かれ、その上にグラスが三つと
当麻がスタジオの給湯室の冷蔵庫に入れて置いた、冷えたシャンパン。
セットの準備が整い、スタジオの隅で待機していた三人に声が掛る。

「うわぁ！ありがとう、山口さん！」
セットに足を踏み入れた健人は、少し大袈裟に喜んでみせた。
当麻も『やったねっ！』という顔をして健人を見る。

「シャンパン飲めば、少しはリラックスできるでしょ？」
健人が小声で雪見にささやいた。

健人と当麻はいつだって雪見に優しい。
そんな二人に迷惑を掛けるような、評判を落とすような仕事だけはしてはいけないと、
雪見は自分自身を戒めた。

「そんじゃ、お互いにＣＤデビューおめでとう！カンパーイ！」
当麻の音頭で、グラビア上でのパーティーが始まった。
二本目の仕事は、グラビア撮影と対談が同時進行で行なわれるのでシャンパンの栓を抜く瞬間から、カメラのシャッター音がスタジオ内に響き渡る。

当麻　うーん、うまいっ！って、毎日言ってるよね、俺たち。

健人　だって、マジうまいんだもん！
デビューが決まってから、ほんとにたくさんの人にお祝いして
もらったよね！こんなにみんなが喜んでくれるとは思わなかっ
たから、旨さも倍増って感じ？
雪見　けどさぁ、これで完璧に私のイメージって、酒飲みになっちゃ
ったよね、きっと。今後が心配…。
当麻　事実なんだからしょうがない！もしかしたら、三人でお酒のコ
マーシャルに出れるかもよ。
健人　おいおい！アーティストとしての初仕事なんだから、酒以外の
話はないのかい！

健人と当麻の作戦が功を奏し、いつもの雪見らしさも回復。
テンポ良く前半の対談が終了したので、スタジオの後ろで見守る今野も
ホッと胸をなで下ろす。

三人が衣装を着替え、後半に向けて撮影セットをチェンジしている
待ち時間のあいだ、
雪見は側らに置いてあった、試し撮り用のポラロイドカメラを手に取る。
「あのぅ。これ少し借りてもいいですか？」

カメラマンの許可をもらい雪見は、セットの横で雑談している健人と当麻にカメラを向ける。

一眼レフやデジカメと違い、ポラロイドで動く物を写す場合はプロであっても、
シャッターを押すタイミングが非常に難しい。
だが雪見は、カメラを全く意識せずに楽しげに、身振り手振り話す二人を難なく写した。
表情を先回りしてベストショットを狙えるので、写し出された写真には
他の誰も見たことのないような一瞬が、うまく切り取られていた。

「見て見て、この写真！実物の当麻くんより格好良くない？」

「なんで、実物よりなのさ！そんなわけ…あるね！
へぇーっ！やっぱゆき姉って、ただの酒飲みじゃないや！
山口さん、見て！ゆき姉が撮ったポラ。俺、格好いいと思わない？」
当麻がカメラマンの山口に、雪見の撮ったポラロイド写真を五枚見せる。

「えっ！？うそっ？これ、今雪見ちゃんが写してたやつ？
もしかして、凄く腕のいいカメラマンなんじゃ…。」

「ぜんぜん腕なんか良くないです！猫なら少しは自信あるけど、基本的に
ポートレートは苦手分野で…。
でもこの二人だけは健人くんの写真集で、かなりの枚数シャッターを切ったから。」

「ねぇ！このポラ、読者プレゼント用にもらってもいいかな？
『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ；』が写した健人と当麻、いや、ＳＪだよ！？
こんなレアな読プレ、絶対他にはないでしょう！」

山口は、自分がカメラマンであることを忘れたかのように、興奮気味に言った。

お遊びで撮った写真だからと雪見は恐縮したが、健人と当麻がサインを入れて
豪華な読者プレゼントに。
後にこの号は、創刊以来のプレゼント応募者数だったと、スタッフから聞いた。

デビューを前にしての初仕事は、三本目の取材が終る頃にはすっかり『ＹＵＫＩＭＩ＆ＳＪ』の構図が出来上がり、この日以降加速度を増して三人への取材が殺到する。

そんな忙しい最中、次々と新たな心配事が雪見を襲って来ようとは…。

健人を癒すバスタイム

十一月に入り、レコーディングの日が段々と近づいて来る。
最近はほぼ毎日、それぞれが仕事の合間にヴォイストレーニングへ通い、
最後の調整を三人はしていた。

その日も健人が雪見の元へ帰って来たのは、夜十一時過ぎ。
天気の悪い日が続き、ドラマの撮影が思うように進んでいないらしい。
かなりくたくたになって帰って来るので、健人の身体が心配だった。

「お帰り！今日も疲れたでしょ。お風呂湧いてるよ。
ご飯の準備しておくから、先に入って来てね。」

「一緒に入ろ！ご飯は後でいいから。」

「えーっ！今日も？」

健人はこの頃、雪見に聞いてもらいたい話があると、帰ってきてすぐに
雪見をお風呂に誘う。
別に重大な相談が毎回あるわけでもなく、ちょっとした愚痴だったり
悩みだったりすることの方が多いのだが、広い居間で話を聞いてもらうよりも、
狭いお風呂の中で肌を寄せ合いながら聞いてもらった方が、心が早く平安を取り戻せる気がした。

雪見は二人でお風呂に入る時、ぬるめのお湯にして外国映画のよう

にバブルバスにする。
大きなバスタブなので、二人が一緒に入っても少しも狭くはない。
泡だらけになると少しは気恥ずかしさも紛れ、健人の話にじっくり耳を傾ける事ができた。

「ねぇ。俺って歌うまい？下手？」
雪見に背中を向けてバスタブの中で膝を抱えた健人が、ボソッと聞いてくる。

「えっ？どうしてそんな事、気になるの？」
雪見は、真っ白な泡を両手ですくって健人の背中に乗せながら、肩越しに聞いてみる。

「ゆき姉も当麻も、めちゃ歌うまいけど、俺ってＣＤ出すほど上手くはないよなぁと思って…。
当麻の足を引っ張る気がして、ちょっと気が滅入ってる。」

初めてのレコーディングを前にして、健人の気持ちが揺れ動いている。
本来の健人はポジティブなのに、最近の健人はネガティブ気味だ。
きっと、目の回るような仕事の忙しさに、心まで疲れてきてるのだろう。

こんな時雪見は、カウンセリングの女医さんになったつもりで、とことん健人の話を聞いてあげる。
手のひらを揉みほぐしてやったり、髪を洗ってあげたり、背中をマッサージしたり…。
「手当て」と言う言葉があるけれど、その言葉通り人間の手のひらは、心と身体を癒やす

ハンドパワーに溢れているのだ。
最後に雪見は健人の背中をぎゅっと抱き締め、必ずこう言う。

「大丈夫！健人くんが今歩いてる道は、間違ってなんかないから。
心配しないでそのまま進んで大丈夫だよ。
どんな時でも、私が必ず後ろで見守っててあげる。」

そう言われることで、やっと健人は心の平安を取り戻し、次の日も
仕事場へ
出掛けて行くことが出来るのだった。

お風呂から上がった後は、雪見の美味しい料理とよく冷えたビール
で、
さらに心をリラックスさせる。
「今日も一日お疲れ様！この豚キムチ、疲労回復にはいいんだよ。
ビールにも合うし、いっぱい食べてねっ！」

「やばっ！めちゃうまっ！ビール、飲み過ぎるかも。
ゆき姉が料理得意で、ほんと良かった！」
健人が美味しそうに食べるのを見るのが、雪見にとっての癒やしだ
った。

「俺、ゆき姉に救われてるよね、毎日。
一人で暮らしてたら今頃、どうなってたんだろ。心が壊れてたかも
…。
ほんとはゆき姉を救いに来たのに、今は俺が救われてる。」

「もし健人くんが家に来てなかったら、私が健人くんちに行ってた
よ。

健人くんからのSOS、私が見逃す訳がない。
私がどれくらい健人くんのこと想ってるか、想像もつかないでしょ？」
お酒が入ると雪見は、ストレートに自分の心を健人に伝えられる。

「どれくらい、俺のこと好き？」
「毎日十個ずつ好きになって、多分いつまでたっても満タンにはならないと思う。」
「たった十個ずつ？俺なんか毎日百個ずつ、ゆき姉を好きになってるよ！」
「ありがと！今の言葉でプラス十個また好きになった！」
「たったの十個かよっ！」

一日の最後に、二人で笑ってキスして抱き合って眠る。
今、テレビや雑誌で毎日のように見かけるイケメン俳優斎藤健人は、こうしておのれを保って明日も働く。

十一月初めの木曜日。今日は健人のドラマのオンエア日。
先日健人の卒業アルバムで見た、「ガリ勉くん」と呼ばれていた人が、
健人の同僚役で出て来る日だった。

「今日のドラマ、録画しておいてね。オンエアには間に合わないけど、
そんなに遅くならないで帰れると思うから、帰ったら一緒に見よう。
じゃ、行って来ます！」
そう言って健人は、サングラスにキャップを目深にかぶり、玄関を出て行った。

オンエアまであと１３時間。
あの「ガリ勉くん」のことは、ずっと頭の片隅から消えてはいなかった。
出会った頃には少しも気にならなかった健人のファンや共演者が、今は１００％ライバルに思えて仕方ない。
どんなに健人と愛し合った翌日でも、健人が仕事に出掛けたあとは、雪見の元に戻ってくるまで、言いしれぬ不安に襲われ続けた。

そんな気持ちを紛らわすため、雪見はひたすら歌のレッスンをしたり、
めめとラッキーを被写体にカメラを構えたり。
近頃増えてきたグラビアの撮影は、プロの手によってヘアメイクを整え衣装に着替えると、
簡単に気持ちまで別人に変身できて、最近では好きな仕事のひとつになった。

「ただいまぁ！あー、お腹減った！今日のご飯はなに？
あ、録画したやつ見ながらご飯食べよう。」
今日も健人は、無事に雪見の所へ帰って来てくれた。
ホッと胸をなで下ろし、健人がお風呂に入ってるあいだに食卓を整える。

「お疲れー！あぁ、風呂上がりのビールは最高っ！」
健人の笑顔が弾けた。今日はどうやらいい一日だったらしい。

「さ、今日のドラマ見ようよ。結構話が展開してきたよ。」
そう言いながら、健人が再生ボタンを押した時だった。
健人のケータイに電話が入った。

「もしもし?え?大沢?なんで俺の番号知ってんの?
オンエア?今から録画したやつ見るとこだけど…。
そんなの別に明日でもいいじゃん。明日も俺と一緒の出番だろ?
これから飯食いながら見るとこなんだから、まだお前の感想なんてわかんないよ。
見たら明日、ちゃんとアドバイスするから!じゃーなっ!バイバイ!

なんだよ、こいつ!いきなり馴れ馴れしいんだから!
しかも勝手に俺の番号、聞き出しやがって!誰だよ、教えたやつは!」
健人が電話の主に憤慨している。

「誰?大沢って…。」

「あぁ、ガリ勉くん!今日初めてドラマに出て来るやつ。」

雪見は今の電話で、これから再生される画面を凝視出来なくなってしまった。

眠れぬ夜

「あれ？ゆき姉、どうかした？」
健人にかかってきた電話の後、ビールがそのまま雪見の前に放置されてるのを見て、
健人が顔を覗き込む。

「え？あ、あぁ、なんでもない。大沢さんって言うんだ。
一応私も三月までは同じ事務所だから、いつか会う事があるかな？」
ほんとはそんな事、聞きたいわけじゃないのに、どうしても本心は言えなかった。
『彼女とは、仲良しなの？』って…。

画面の中の「ガリ勉くん」は、少しも「ガリ勉くん」ではなかった。
卒業アルバムの中の彼女は、黒髪を二つに縛り眼鏡をかけた、ニックネーム通りの人に見えたが、
今、画面の中で健人に寄り添い微笑む彼女は、男子なら誰もが好きになりそうな
可愛いくて優しげな人だった。

これ以上彼女を見てはいけない気がして、席を立つ。
「ビール取ってくるね。」と…。
あとはテレビの隅に視線を移し、見ているふりをして時をやり過ごす。

夜中の二時。
すでに雪見の隣で寝息を立ててる健人の横顔は、いつもと何も変わらず

薄明かりの中にも綺麗なシルエットを描いている。
いつまでも眠れずに、じっとその顔をのぞき込んでいると、『秘密の猫かふぇ』に
健人と二人で初めて行った時のことを、ふと思い出した。

『あの時もこんなふうに、健人くんの寝顔をずっと飽きずに眺めていたっけ。
写真集用にこっそり寝顔を撮影したり、ほくろの数を数えたりしたんだよね。
そう言えば今日あたり、みずきさんと仕事だって当麻くんが言ってた。
猫かふぇの事、なんか聞けたかなぁ。あそこの猫たちは、今頃どうしてるんだろう…。』
健人の足元で二匹寄り添い、安心しきって眠るめめとラッキーを見ていると、
猫かふぇの猫たちが不憫で心配で仕方なかった。

『明日必ず当麻くんに聞いてみよう。いや、みずきさんに直接会って、話が聞きたい！』

これまで、周りに流されるようにして、本業以外のことに時間を費やしてきたことを、
少なからず後悔し始めた。

『どうしてもっとあの猫たちと、積極的に関わってこなかったのだろう。
私は野良猫を写して歩く、猫カメラマンだったはず。
私の夢は何だった？
無人島で、捨て猫たちのお母さんになりたいんじゃなかったの？
だったらまずは身近な猫たちに、手を差し伸べてもよかったんじゃ

ないの？』

今まで何度も何度も、思っては打ち消し、思っては打ち消ししてきた心の叫びが、
また耳の奥で聞こえた気がした。

『早く、元の自分に戻りなさい。』と…。

いよいよ眠れなくなった雪見は、健人を起こさぬようにそっとベッドを抜け出し、
隣りの仕事部屋のドアを開け、間接照明をつける。
すると、壁一面に張られた猫の写真が、ほんわりと浮かび上がった。
今までに雪見が出会った野良猫たちだ。
それらの猫たちに一通り目をやった後、雪見は書棚から数冊の写真集を手に取り、
デスクの前に座った。

『この写真集は京都で写したやつ。こっちは北海道で、これは沖縄。
ほんと、北から南まで、色んな所に行ったよなぁ。
お金が無くて貧乏旅行だったけど、猫のお尻を追っかけているだけで、
毎日が単純に幸せだった。』

じゃ、今は？と、もう一人の自分が聞いてくる。

『今は…。
健人くんと一緒にいれるんだから、幸せなんだよね、きっと…。』

雪見は、一ページずつ写真集をめくって眺めるうちに、いつの間にかデスクの上に突っ伏して眠ってしまったらしい。
早朝、健人の声にびっくりして椅子から転げ落ちそうになった。

「ゆき姉！なんでこんなとこで寝てんのさ！風邪ひくよ！」
「え？うそっ！私寝ちゃってた？今何時？」
「七時だけど。」
「ええっ！？七時って、あと三十分で健人くん仕事じゃない！」

健人が自分で起きてくれたから良かったものの、すっかり寝過ごしてしまった雪見は、
顔も洗わずに大至急、野菜ジュースとホットドッグの簡単朝食を用意し、
健人に車の中で食べてもらうことにした。

「今日はこんな朝ご飯でごめん！及川さんの分も入ってるから、二人で食べて。
私は歌のレッスンのあとにスタジオ行くから、また後でね。いってらっしゃい！」
めめとラッキーと一緒に、玄関先で健人を見送った。

今日は午後から、健人、当麻と三人で『ヴィーナス』のグラビア撮影が入っている。
本当は今日撮影する１２月２０日発売の２月号で、健人の写真集のためのグラビア連載は終了予定だったが、
三人のＣＤデビューが決まり、全国ツアーのスポンサーに『ヴィーナス』が決まったので、
３月２０日発売号までは、毎月三人のグラビア登場が決定していた。

午後三時。事務所でレッスンを終えた雪見が、一番乗りで撮影スタジオ入りする。
「おはようございまーす！今日もよろしくお願いします！」

「おはよう！こっちこそよろしく！あとの二人が来ないうちに、早速準備を頼むよ。」
カメラマンの阿部が、撮影の段取りをしながら雪見に言った。

メイク室で牧田と進藤の顔を見ると、いつもホッとする。
雪見は二人の事を、今や姉のように思って慕い、二人も雪見の事を妹のように
心配したり可愛がってくれたりした。

「元気だった？デビューを発表してから、すっかり忙しくなったでしょ？
まだ時間がちょっとあるから、メイク前に顔のマッサージしてあげる。」

「ありがとう！進藤さん。ねぇ、目の下の隈を解消するマッサージも教えて！」

「え？雪見ちゃん、隈なんてめったに出来ないでしょ？」

「あ、私じゃなくて、毎日隈を作って頑張ってる人がいるから…。」
そう言いながら雪見は、鏡の中の進藤に向かって微笑んだ。

「あー、なるほどね！確かに隈の出来やすい人だわ、彼は。
じゃ、即効性のあるツボを教えてあげる！」

おしゃべりしながら準備を終える頃には、雪見の元気はすっかりチ

ャージされ、
気合いも撮影モードに切り替わっている。
二人にお礼を言いながらメイク室を出て、再びスタジオに戻ると丁度健人が到着したところだった。

「お疲れ様！良かった！時間通りに来れたんだね。」
元気そうな健人を見て、雪見は一安心した。
健人も、雪見と一緒の仕事が楽しみで上機嫌だ。

「もうすぐ当麻も上がってくるよ。駐車場で会ったから。多分、お客さんを連れて来ると思う。」

「お客さん？」

「あ！ほらね。お客連れだ！」

健人が指差したので後ろを振り向くと、そこには当麻と、なんとみずきが立っていた！

みずきのお願い

「みずきさん！どうしてここに？」
突然現れたみずきに、雪見は凄くびっくりした。
雪見どころか、スタジオで準備をしていたスタッフ全員が騒然となる。
そりゃそうだ。予告もなしに、超人気国際派女優　華浦みずきが現れたのだから。

「お久しぶり！元気そうで何よりだわ。
健人たちとＣＤデビューするんですってね！おめでとう！
やっぱり雪見さんは、私が思った通りの人になってた！
初めて会った時から私、雪見さんは絶対そうなるって、おじいちゃんに予言してたのよ。」
みずきは、スタジオの騒ぎなど意に介さず、ニコニコしながら歩み寄り
雪見に祝福のハグをした。

「ゆき姉が、みずきに会いたいんじゃないかなぁーと思ってさ。
この後は仕事入ってないって言うから、一緒に連れてきた。」
当麻が雪見に小さくウインクする。
『秘密の猫かふぇ』休業の情報を、雪見が直接みずきに聞きたいかと、
どうやら健人が当麻に頼んで連れて来てもらったらしい。

「じゃ、俺らは着替えて来るから、二人でおしゃべりでもしてて。」
健人はそう言い残し、当麻と並んでメイク室へと消えて行った。

「ごめんね、お仕事の邪魔はしないから。」

「邪魔だなんて、とんでもない！
ここでみずきさんに会えるなんて、思ってもみなかったから嬉しい！
こっちには、いつまでいれるの？」

「あさってまで。本当はもっと居たいんだけど、来週からハリウッドで
新作映画の撮影が始まるから…。
雪見さん、今日はこの仕事で終り？良かったらこの後、一緒にご飯行かない？」

「ほんと！？私も今、誘おうと思ってたとこ！」
雪見は、たった一度飲んだだけのこの大女優が、ほとんど無名に近い自分の事を、
久しぶりに会った親友のように食事に誘ってくれたのが、嬉しくて仕方なかった。
二人はお互いの今日までの近況に始まって、ファッションや料理の話に至るまで、
時間を惜しんでおしゃべりする。
だが…。

「実はね…。私、ドラマのお仕事もそうなんだけど、今回は雪見さんに
お願いもあって日本に帰ってきたの。」
みずきは急に真剣な目をして雪見を見つめる。

「えっ？みずきさんが、私にお願い？」
思いもしなかった言葉に雪見はうろたえた。一体、この私に何を…。

「私にお願いって、なに?私に出来る事?」

今日で会うのが二度目の人に、真剣な目をしてされる頼みとは何だろう。

その瞳があまりにも力強くて、ただ事ではないことだけは理解できた。

もしかして、猫かふぇに関する頼みなのかも…と、ぼんやりと考えてもみる。

みずきが雪見への返答に困っていると、いきなり二人の後ろから話しかける者がいた。

「お話中すみません!華浦みずきさん…ですよね。」

振り返って声の主を見ると、そこにいたのは編集長の吉川だった。

「編集長!びっくりしたぁ!お疲れ様です。

どうしたんですか?スタジオに顔を出すなんて珍しい。」

雪見が驚いた顔をして、真由子パパを見る。

「いや、阿部がすっ飛んで来たから何事かと思ったら、華浦さんがスタジオに

来てるって言うんで、俺もすっ飛んで来たんだよ!

あぁ、大変失礼致しました!私、『ヴィーナス』編集長の吉川と申します。」

そう言いながら吉川は、みずきに名刺を差し出した。

「あの、マネージャーさんはどちらに?」

「ごめんなさい。もう今日の仕事は終ったので、帰ってもらったんです。

何かご用でしたか？」

「いや、もしよろしければ雪見ちゃんや健人たちと、これから撮影する
うちのグラビアに、一緒に出てもらえないものかと…。
あなたの日本滞在中のスケジュールを押さえるのは、至難の技ですからね。
こんなチャンスは二度と無いような気がしまして。
でも事務所を通さない仕事なんて、無理に決まってますよね…。
済みませんでした。せっかくのプライベートを邪魔しちゃって。
じゃ、どうぞごゆっくり。」
そう言って吉川がみずきの前から立ち去ろうとしたとき、準備を終えた健人と当麻が、
入れ替わるようにみずきの元へとやって来る。

「みずきぃ！ワンショットだけ俺たちと写して行かない？来日記念に。
吉川編集長も、それを望んでるんでしょ？」
当麻がニコッと微笑みながら、みずきの右肩に手を置いた。

「えっ？私が三人と？」

「こんなこと、もうないかもよ！大体ゆき姉は期間限定アーティストなんだから。」
健人もみずきの横に立つ。

「雪見さんが期間限定アーティストって？」
みずきが不思議そうに雪見に聞いた。

「私…来年三月一杯までしか活動しないの。

四月になったら、また猫カメラマンに戻るつもりだから…。」

「雪見さん、本当に猫が好きなんだ…。
やっぱり、私のお願いを聞いてもらえるのは、雪見さんしかいない！
いいよ、ワンショットだけなら友情出演ってことで、ギャラはいらない。
その代り、私のお願いを聞いて欲しいの。」

「なに？私にお願いって…。」雪見は恐る恐る、もう一度聞いてみる。

「ごめん、ここじゃ話せないの。撮影が終ったら、どこか誰にも聞かれない場所で
ちゃんと説明するから。」

「あ、それならゆき姉んちがいいんじゃない？」

「当麻！」「当麻くん！」
健人と雪見が同時に当麻を制したが、時すでに遅かった。

「行きたい！雪見さんち！そう、雪見さんちがいい！
猫ちゃんもいるんでしょ？会いたい！猫ちゃんに。
よし、そうしよう！じゃ編集長さん、そう言うことで、私に衣装ってなんかありますか？
撮影が押しちゃうと悪いから、大至急準備させて下さい。」

急転直下の展開に、スタジオ中が慌てふためいた。
うろたえる撮影スタッフを横目に、みずきは上機嫌でメイク室へと案内されて行く。

「ちょっとぉ！もしもみずきさんのお願いが、聞けないお願いだったらどうすんのよ！」
みずきがメイク室に入ったのを見届けて、雪見が当麻に抗議した。
「しかも家に来たら健人くんのこと、どうしたってバレちゃうでしょ！
どうしよう、すっかりみずきさん、その気になってるしぃ！」
雪見はもはや、これから始まるグラビア撮影の事など、頭の中から吹き飛んでしまってる　。
健人と当麻も、さてどうしたものかと思案顔だ。
「じゃあさ、俺んちに場所変更したからって言おう！
ゆき姉んち、部屋がグチャグチャで汚いから、とか適当に理由つけて。」
当麻の提案に雪見は反撃する。
「ヤダ！私んち、健人くんの部屋以外は綺麗だもん！汚いとか、思われたくない！」
「なに変なとこで見栄張ってんの！バレたら困るって言ったの、ゆき姉だろーが！」
「だってぇ～！」
スタッフに聞かれないようにコソコソ話す三人組は、端から見るととても怪しげだった。

みずきの秘密

三人が小声であーだこーだと話してる間に、どうやらみずきの準備が整ったようだ。

「お待たせしちゃって、ごめんなさい！」

その声に振り向いたスタッフたちから、思わず拍手と歓声が上がる。
みずきは、一際輝くオーラをまとってスタジオに戻って来た。
旧知の仲の健人と当麻は、「あれが女優　華浦みずきだよなぁ！」と、
カメラマンと打ち合わせ中のみずきを、腕組みしながら眺めていたが隣りに立つ雪見の反応は、まるでただの一般人だった。

「みずきさん、綺麗！凄い！一緒に写真撮りたい！でも今日に限ってカメラ忘れて来たぁ！
あー、私ってバカだ！なにやってんだろ！」
バタバタと地団駄踏む雪見を見て、呆れたように当麻が言う。

「ちょっとちょっと、雪見さん？
一緒に写真撮りたいって、これからそう言うお仕事するんじゃないの？
そのためにみずきの着替えを待ってたんでしょ？」
当麻の声に雪見がハッと我に返り、うろたえ出してしまった。

「やだ！無理！あんな綺麗な女優さんと一緒にグラビア撮影なんて、あり得ない！
私、今日はやめとく！健人くんと当麻くんで仕事して。」

「おーい！なに言い出すの！少し落ち着いて。ほら、深呼吸！」
健人が雪見と向き合って両肩に手を乗せ、ポンポンと二度叩いたあと、
いきなり雪見を引き寄せ耳元でささやいた。

「大丈夫！絶対ゆき姉の方が可愛いからっ！」

健人の急な動作に、当麻が後ずさりまでして驚いている。
「びっくりしたぁ！みんなの前でキスするのかと思っただろっ、健人ぉ！

「ほーんと！私もキスすると思ったのに。相変わらずラブラブなのねっ、お二人さん！」
みずきがカメラマンとの打ち合わせを終え、三人の元へとやって来た。

「雪見さん！私、この撮影が楽しみで、ワクワクしながら着替えてきたんだからね！
健人が言うんだから、雪見さんの方が可愛いのよ！だからもっと自信を持って！」

「ゲッ！地獄耳！」

みずきに背中を押され撮影セットの真ん中に立った雪見は、初めのうちは気後れしていたものの
撮影が進むに連れて、みずきに引けを取らないぐらいの、堂々としたモデルぶりを発揮した。
みずきも、よほど四人での仕事が楽しかったらしく終始ご機嫌で、
結局はワンショットどころか、全カットの撮影に参加。

本日の行程は無事終了となった。

「お疲れ様でした！とっても楽しかったです。ありがとうございました！」

みずきが、カメラマンを始めスタッフ全員に向かって、深々と頭を下げる。

すると、みずきの飛び入り参加をねぎらうような、大きな拍手に包まれた。

そこへ、スタジオの後ろで撮影の様子を見守っていた吉川が、みずきの元へ駆け寄って来た。

「いやぁ、お疲れ様でした！まさか最後までお付き合い頂けるとは。この号は売り切れ間違いなしです！本当にありがとうございました。」

「いいえ、こちらこそ！本当に皆さんに良くして頂いて、素敵な現場でした。

事務所の方には私からきちんと話をしておきますので、どうかご心配なさらないで下さいね。

あ、ひとつだけお願いしてもいいですか？

この号が出来上がったら一冊、ロスの自宅に送っていただきたいの。」

「もちろん喜んで！クリスマスに間に合うようにお送りします。」

「嬉しい！何よりのクリスマスプレゼントだわ！

じゃ、今日はこれで失礼します。お疲れ様でした。」

四人が着替え終って、雪見の車が止めてある地下駐車場までのエレベーターの中。

「あー腹減った！なんか美味いもん、みんなで喰いに行こう！」
当麻はこのあとの手はずを、すっかり忘れていた。
みずきを家に誘って、「お好み焼きパーティーしよう！」と言うのが当麻の一行目のセリフだったのに…。

「だーめっ！雪見さんちに行く約束でしょ？
ねぇ、途中のスーパーに寄って買い物して行こう！
お鍋がいい！やっぱ、この季節の日本っていったらお鍋でしょう！
みんなで買い物、楽しそう！」
みずきのテンションは相当だった。
しかも、本気で買い物に行きそうな勢いだったので、雪見の方が慌てて墓穴を掘ることになり…。

「みずきさん、それは無理でしょ！
私はいいとして、みずきさん達三人がスーパーなんかに現れたら、お店が大パニックになっちゃう！
お鍋の材料なら家にあるから！」
と言ったところで『しまった！』と思ったが、すでに遅かった。

「ほんと！？じゃ、真っ直ぐ雪見さんちに行ってもいいのね？
嬉しい！猫ちゃんもいるんでしょ？お部屋も素敵なんだろうなぁー！
早く行こう、早く！」
みずきはエレベーターを降りた途端、車がどこにあるかも知らないのに急ぎ足で歩き出す。
その後ろで雪見と当麻が、声を潜めてもめていた。

「ちょっとぉ！当麻くんが最初のセリフを間違えたから、修正がき

かなくなったでしょ！」

「ゆき姉こそ、自分からみずきを誘ったようなもんだろ？」

もめてる二人の間に健人が入る。

「まぁまぁ！別にいいよ、俺。

みずきは、俺とゆき姉が付き合ってるって始めから知ってるんだし、

みずきにだったら話してもいいや、一緒に住んでるって事。」

「健人くん…。健人くんがそれでいいならいいけど…。」

その時、みずきが後ろを振り返って、ゴチャゴチャやってる三人に

声をかけた。

「ねぇ！早く行こうよ、雪見さんと健人んちに！」

「はぁ！？みずき、知ってたのぉ！？」

しかも、みずきは雪見の車の在りかを知らずに歩いていたはずなの

に、

なぜかすでに雪見の車の前に立っている。

車の中は大層賑やかだった。

まるで幼稚園バス並みの騒々しさで、その声が道行く人にまで届い

てはいないかと、

運転しながら雪見は、気が気ではなかった。

「でも、どうしてわかったの？私と健人くんが一緒に住んでるって。

」

助手席に座るみずきにチラッと目をやって聞いてみる。

「言ったでしょ？私の勘は鋭いって。勘って言うより霊感ってやつ？結構、見たくないものまで見えちゃうのがツライんだけど…。」

「え、えええっ！？」

蜂の巣を突いたような騒ぎの車が、夜の街を駆け抜けて行く。

めめとラッキーが待つ、雪見と健人の愛の巣はもうすぐそこだ。

「ただいまぁ！めめ！ラッキー！いい子にしてたぁ？」

健人との同居を隠し通す場合、まずは玄関先にたくさん並んだ健人の靴を
大至急隠すつもりだったが、みずきが全てお見通しとあらばそんな必要もなく、気が楽になった。

「どうぞ！上がって。あ！健人くんの部屋は見て見ぬ振りしてね。」

「うわっ、健人ぉ！ちょっとは片付ければ？
この部屋、引っ越して来た時はあんなに広かったのに！」
きれい好きな当麻が呆れ顔で言う。

「ゆき姉が、見て見ぬ振りしてね！って言っただろ？見なきゃ、どーってことないのっ！」

「開き直りかよっ！」

みずきには、健人の部屋がどんな状況かがわかっていたようで、
チラッと確認しただけでリビングへと直行した。
「うわぁ！思った通り、素敵なお部屋！凄く雪見さんらしいインテリアね！
けど、健人と住んでてこの状態を維持するのは至難の技だわ。」
みずきが同情するように雪見に言う。

「もう健人くんはそういう人だと思ってるから、片付けも苦じゃないの。

それに、アイドル的にはこんなに完璧なのに、苦手な事があるって言うのが
なんだか普通の人っぽくて、私はホッとするんだ。
だから今のまんまの健人くんでいいの。」
雪見がにっこり笑って健人を見ると、本当に嬉しそうに健人が微笑み返した。

「はいはい！結局はそうなるわけだ。ごちそうさまでした！」

「あ、当麻がごちそうさまだって！じゃ、鍋の材料は三人分でいいね！」

「健人ぉ～！！」

リビングに広がった笑い声を合図に、鍋パーティーの準備がスタートする。
みんなで手分けして用意をすれば、あっという間にパーティー会場の出来上がり。
お鍋も良い具合に煮えてきて、まずは当麻の音頭で乾杯をする。

「じゃ、みずきの来日と俺たちの前途を祝して、カンパーイ！」

「うめーっ！熱い鍋には冷たいビールが最高っ！いっただきまーす！」
健人が真っ先に鍋に箸を突っ込む。

「みずきさんも遠慮しないで食べてね！材料はまだまだあるから。」

「ありがと！いただきます。
うーん！やっぱお鍋は日本の秋！って感じね。美味しい！」

「良かった！でも嘘みたい。あの華浦みずきが、私んちでお鍋をつついてるなんて。
あ！お鍋の中が減らないうちに、写真を撮ってもいい？
こんな事、二度と無いかも知れないから。」
雪見は急いでカメラを取り出し、三人を被写体にシャッターを切る。

「雪見さんも一緒に写ろうよ！
当麻！あんた高校生の頃、カメラいじってた事ある？よね。
私と雪見さんを写して！綺麗にねっ。」
みずきには、過去の様子も見えてるようだ。

「こわっ！怖すぎるんですけど！
一体いつから、そんなのが見えるようになったわけ？」
当麻が雪見からカメラを受け取りながら、みずきに質問する。

「うーん、いつからだろう…。物心ついた頃には見えてたかな。
子供の頃は何でもかんでも見えちゃって、それを口に出しては、おじいちゃんによく叱られた。
友達を無くすから、そんなこと絶対言っちゃダメだ！って。
今はね、自分をコントロールできるようになったから、見たくないものには心に蓋ができるの。
だって、当麻の下半身とか、見たくないもん！」

「ゲッ！てことは、見ようと思ったら見れるって事ぉ！？」
とっさに当麻が股間を押さえた。

「あははっ！心配しないで。死んでも見たくないからっ！
あ、でもこの事は黙っててね。
三人なら私の話を聞いても、お友達のままでいてくれると思ったか

ら…。」
みずきが初めて少し寂しげにうつむいた。
そんなみずきを見て雪見は、今までに何度も悲しい思いをしてきたのだろうな、と可哀想に思う。
だから、あえて笑顔で明るく、おちゃらけてみずきに言った。
「じゃ、お互いに秘密を握り合ったってわけだ！
みずきさんも、私と健人くんが一緒に暮らしてるってこと、内緒にしてねっ！
てゆーか、付き合ってること自体がシークレットなんだけどさ。
今をときめくイケメンアイドル斎藤健人が、こんな一回りも年上のおばさんと同棲中！
なんてマスコミに知れたら、きっと日本中がひっくり返るよねーっ。」
雪見はふざけ半分で言ったつもりだったが、それを聞いたみずきは真顔で雪見を諭した。
「そんなこと言ったらだめっ！健人が悲しむよ。
本当は健人、世間に公表して雪見さんとの事、認めてもらいたいとさえ思ってるんだから！
あ…、ごめん、健人…。
ほんとは読むつもりじゃなかったのに、凄く強い思いが伝わってきちゃって…。
ごめん…。私を嫌いにならないで…。」
みずきは今にも泣き出しそうな表情だった。
雪見が隣のみずきの肩をそっと抱いて優しく言う。
「健人くんはそんなちっちゃな男じゃないよ。心配しないで。
ありがとね、健人くん。私のこと、そんなに思ってくれて。

きっとね、私の気持ちがみずきさんに伝わっちゃったんだと思うんだ。
だから健人くんの気持ちを私に伝えてくれた。
ねっ？そうでしょ、みずきさん。」
みずきはコクリとうなずいたが、健人と当麻には何の事だかさっぱり解らなかった。

「私ね…。実はここんとこ、毎日が不安で仕方なかったの。
健人くんと一緒に暮らしてるのに、健人くんの人気を知れば知るほど不安がつのって…。
私なんかより、もっと綺麗で可愛い人を好きになって、もうこの家には
帰ってこないんじゃないか、　って…。
毎日健人くんが帰って来るまで、不安で泣きそうになってた。
ひとつも自信なんてないから…。
健人くんの彼女にふさわしい自信なんて、私ひとつもないから…。」
今まで、健人に言ってはいけないと、胸の奥にずっとしまっておいた本心を吐き出し、
雪見の瞳からは堰を切ったように涙が溢れては落ちた。

「ゆき姉…。」

向かい側に座っていた健人が席を立ち、「ちょっとごめん！」とみずきと当麻に断ってから
雪見を抱きかかえるようにして、二人で寝室の方へと消えて行く。

健人と雪見がいなくなった食卓では、鍋がグツグツと煮立つ音だけが聞こえていた。

すれ違う二人

「当麻ぁ…。なんで私、こんなふうに生まれちゃったんだろ。普通に生まれてきたかった…。」

健人と雪見がいなくなった食卓で、みずきは当麻と二人、静かにぬるいビールを飲んでいる。

「私、今日ここに来たのは間違いだったかな…。健人と雪見さんにも、きっと嫌われちゃったよね…。」

「なんで？なんでそんなふうに思うの？俺は健人とゆき姉にとって、お互いの気持ちを確認する良い機会だったと思うけど。あの二人が付き合い出してからずーっと見てるけど、やっぱ基本的に俺らの恋愛って難しいなって思う。だってさ、ファンを惚れさせてなんぼの商売なわけじゃん、アイドルって。いっつも、彼女なんていませーん！って顔してなくちゃならないし。もしも彼女の存在がバレてファンが離れていったら、事務所的にはかなりの損害でしょ？俺らの肩に、大勢のスタッフの生活がかかってるかと思うと、自分の感情は二の次にしなきゃ駄目なのかな、と思う時もある。」

当麻がゴクゴクッとぬるいビールを飲み干して、冷蔵庫から冷えたビールを二本持ってきた。

「そうだね。私達の仕事って、半分は嘘つくことで成り立ってるのかもしれないね。

自分とはまったく違う人物になり切って、見てる人に嘘ついて、また私生活を嘘で固める。
それが仕事だって言われればそれまでだけど、時々、それじゃ本当の自分は
どこで出せばいいの？って思う。」
そう言ってみずきは、当麻から受け取った冷たいビールをプシュッと開ける。

「だからさ、結婚とか同棲とか、したくなっちゃうんじゃないの？
家に帰ったら大好きな人が待ってて、素の自分に戻れるんだよ？
人の目を気にして外でデートしなくても、家で好きなだけイチャイチャできるって、
超うらやまし過ぎでしょ！健人くん。」

「けど、あの二人の心の中は、そんな単純なものじゃないのっ！
ちゃんとお互いの気持ちが、噛み合ってくれるといいんだけど…。」
健人と雪見の心が、手に取るようにわかるみずきにしても、これ以上は
黙って見守るしかないのだ。

その頃、寝室にこもった二人は…ベッドに並んで腰掛けていた。

「少し落ち着いた？」
雪見の涙を手でぬぐってやった健人は、頭をよしよしと撫でてから
穏やかな顔で微笑んだ。

「ごめんね…。せっかくみんな来てくれたのにね。
楽しいはずの鍋パーティーを、私がぶち壊しちゃった。はぁぁ…。」
雪見がうつむいてため息をつく。

「あの二人はそんなこと、気にするような奴らじゃないから心配いらないよ。
ねぇ、それより俺の目を見て。」
健人は雪見の両肩を掴み、自分の方を向かせた。

「さっき、みずきが読んだ俺の心は本心だから。
ずーっと考えてる。いつ俺たちの事を公表するのがいいか。」

「だめっ！そんなことしたら、ファンが離れて行っちゃう！」

「いいから、最後まで聞いて！
俺、もう嫌なんだよ。インタビューで、彼女はいませんって口に出すの。
そう答えるたびに、ゆき姉ごめんね…って心が痛くなる。」

「仕事なんだから仕方ないじゃない！それぐらい、私だって解ってる。
とにかく私は、健人くんの名前と今の人気を汚すような事だけはしたくないの！
健人くんが…健人くんがそれを傷つけてまで、私との事を公表する価値は、今の私には…ない。」
そう言って雪見は、健人の大きな瞳から目をそらした。

「なんで？誰がゆき姉の価値を決めるの？
俺が今のゆき姉を好きだって言ってるんだから、それでいいじゃん！
ゆき姉は俺のこと…あんまり信じてないんだね…。」

「そんなことないっ！絶対ないっ！」

「じゃ、どうして？どうして俺が他の人を好きになるなんて思うの？
俺は毎日、一秒でも早く帰ってゆき姉に会うために、頑張って仕事
をこなしてるのに。
できることならゆき姉と、２４時間一緒に居たいと思ってるのに…。
何にも伝わってなかったわけだ、俺の気持ち。
俺が一方的に思ってただけなんだね、きっと…。」
健人がスッと立ち上がり、雪見の方を見もせずに言った。

「ちょっと出掛けてくる…。」

「健人くん！！」

一人で寝室から出てきた健人は、ソファーに脱ぎ捨ててあったジャ
ケットを手にして、
無言のまま当麻とみずきの前を立ち去る。

「おいっ、健人！どこ行くんだよっ！ゆき姉は？」
当麻の声にも返事せず、健人はガチャン！と玄関のドアを閉めて出
て行ってしまった。

ただ事ではない事を察知したみずきが、急いで寝室に向かいドアを
ノックする。
「雪見さん？入るよ！」　雪見はベッドに座ったまま…泣いていた。

みずきが雪見の隣りに静かに座り、そっと肩を抱き寄せる。
当麻は開いたドアの向こうに立って、心配そうに雪見を見ていたが
みずきは首を横に振り、二人きりにしてくれと目で訴えた。

当麻がドアを閉め、足音が遠ざかる。みずきが少しの沈黙のあと、

口を開いた。
「難しいね、恋愛って…。私もこの世界に入ってから、上手く行ったためしがない！」
そう言ってみずきは、クスッと小さく苦笑いをした。

「私の場合は、相手の気持ちが読めちゃうせいもあるけどねっ。
少し売れ出した頃から、どうも私をステイタスにしたい奴ばっかが近寄って来てさ。
純粋に私を好きになってくれる人は、あの華浦みずきが自分を相手にするわけがない！
って、勝手に引いて行っちゃうの。
私がその人の事をどんなに大好きか、いっぱい言葉を並べてもね。」

「えっ？みずきさんが？」
やっと雪見が顔を上げて、驚いたようにみずきを見た。

「そう！この華浦みずきさんでも！だから、健人も仕方ないかなぁ。
あ！ごめん。この部屋に入った時、すべてが読めちゃった…。
でもね、お節介かも知れないけど、これだけは伝えさせて。
健人は本当に本当に、雪見さんのことしか見てないよ！
確かに、言い寄ってる人気アイドルや女優の姿がたくさん見えてくるけど、
健人はまったく相手にしてないから安心して。
うーん、それどころかしつこい相手には、はっきりと雪見さんの名前を出しちゃってるなぁ。
芸能活動をしてるあいだは、少し気をつけてた方がいいかも。」

「健人くんは？今、健人くんはどうしてるか見える？」
雪見は、悲しそうに部屋を出て行った健人が心配でならない。

みずきは窓の外を見て目を閉じ、何かを感じ取ってにっこりと目を開いた。

「大丈夫！多分あと二時間もすれば、見つけて戻って来るから！」

「見つけて？」

「いいから、あっちでビールでも飲んで待ってよう！当麻も心配してるよ！

あ！私が健人を読んだ事、絶対内緒ねっ！絶交されたら困るから。

ゆき姉とも会うな！なんて言われたら、私泣いちゃう！」

笑いながら寝室から出て来た二人を、当麻がホッとした表情で迎え入れる。

テーブルには、当麻が作り直した鍋が、美味しそうに湯気を上げていた。

初めてのプレゼント

「ほーんと、当麻って惚れっぽいでしょ？
なんだけど、あんまり長続きはしたためしが無さそうね。健人とは正反対だわ。」

「さっすが、みずき先生！何でもお見通しで！
どうしたら俺の恋愛は、上手くいくんでしょうか？」

「まぁ、当麻が当麻である限り、ぶっちゃけ難しいかなっ？」

「そりゃないよ！どうにかしてぇ！」

お腹が一杯になり、ビールからワインに切り替えた当麻は、良い感じに酔いが回ってる。
健人が心配であまりグラスの空かない雪見を気遣い、少しでも気が紛れるようにと
バカばっかり言ってるのが、みずきにはよくわかった。

雪見も二人に申し訳なく思い、出来るだけ笑顔を見せて頑張ってる。
だが、目はチラチラと時計を見たり、玄関先の物音に耳を澄ませたりしていた。
健人の帰りを、ただひたすら待っているのだ。

しばらくして、みずきが突然「あっ！帰って来た！」と叫ぶ。
が、まだ当麻たちには何の音も聞こえない。
雪見が時計に目をやると、みずきが言ってた丁度二時間後だった。

それから程なくしてガチャッ！と玄関のドアが開く音がし、「ただいまぁ。」と
小さく健人の声がした。

「帰って来たっ！」

三人がバタバタと玄関先に集まって来たので、腰掛けてブーツを脱いでいた健人が
一瞬ギョッとした顔で振り向いた。

「お帰りなさい。」
雪見が、あえて何事も無かったかを装って、いつもと変わらぬ調子で出迎える。

「よう！お帰り！腹減っただろ？
俺の作った鍋、健人の分をみずきに喰われる前に、ちゃんとキープしといたぞ！」

「失礼ね！私、そんなに大食いじゃないからっ！」

ゴチャゴチャやってる当麻とみずきを横目に、健人は雪見の手を引っ張って
「話がある。」と寝室に連れて行き、ドアを閉めた。

「健人、頑張れっ！」みずきが微笑みながら呟く。
「何を頑張るの？」
当麻がニヤニヤしながら言ったので、みずきはペシッ！と頭を叩いた。
「変なこと、想像するなっ！」

「そこに座って。」健人が雪見を再びベッドに座らせる。
「なに？」
「いいから、目をつぶって。絶対開けないでよ！」

雪見が目を閉じたのを確認して健人は足元にひざまずき、ポケットから何やら小箱を取り出した。
その中から小さなひとつをつまみ上げ、膝の上にある雪見の左手を取る。

「目を開けてもいいよ。」「なんなの？」
その瞬間、健人が雪見の左手薬指にスーッとシルバーのリングをはめた。

「えっ！健人くん！これ…。」

「俺の今の気持ち。
どうしたらゆき姉に伝わるかなって一生懸命考えたけど、これ以外、思い付かなかった。
俺さ、プレゼントとかサプライズとかって、どうも苦手で…。
本当はビックリするくらい喜ぶ物をあげたいって、いつも思うんだけど
あれこれ考え過ぎて、結局は何にも買えなくて。
ゆき姉は指が細いから、6号サイズでおしゃれなデザイン見つけるの、
めっちゃ大変だったんだぜ！」
健人が照れ隠しに頭をかきながら、一気にまくし立てた。

みずきが二時間前、「見つけて戻って来るから！」と言ったのはこ

の事だったのか。
健人からもらった初めてのプレゼントを、雪見は不思議な気持ちでただじっと眺めている。

「ゆき姉。これ、俺の指にもはめて。」
小箱の中にはもうひとつ、デザイン違いの大きなリングが入っていた。

「指輪の内側読んでみて。」
大きなリングの内側には、『ＹＵＫＩＭＩ　ＬＯＶＥ』と彫られている。
雪見が自分のリングを外し内側を見てみると、『ＫＥＮＴＯ　ＬＯＶＥ』と彫ってあった。

照れ屋の健人が、誰もが知ってるイケメン俳優斎藤健人が、どんな顔してブティックに入りこれを注文したかを想像すると、可笑しくて嬉しくて泣けてきた。

「なに、泣き笑いしてんの！ほら！早く俺にもはめて！」
健人が差し出す左手を手に取り、雪見がそっとリングを薬指に通す。

「指輪貸して。もう絶対に外しちゃ駄目だからね！」
雪見のリングを再び受け取り改めて薬指に通すと、健人は「愛してる！」
と雪見を抱き寄せ、熱い口づけをした。

もう何も迷わない。ただひたすら健人の愛を信じて、ついて行こう！

二人が照れくさそうに、当麻とみずきの待つリビングへと戻って来た。
「ごめんねっ！大層ご心配かけました。もう私達、大丈夫だから！」
「ねぇねぇ！なんで二人とも照れてんの？なんかいいこと、した？」
当麻のにやけた質問に、みずきからひじ鉄がお見舞いされる。
みずきはすぐに、二人の薬指に輝くリングを目で確かめ、心から安堵した。
「良かった！ねぇ、お祝いにもう一度乾杯しよう！カンパーイ！」
健人と合わせたグラスで、やっと薬指に気付いた当麻。
「え？うそっ！？健人たち、結婚しちゃったのぉ！？」
「んなわけ、ないだろっ！誓いの指輪だよ。二人の愛を誓う指輪！なんでお前の話は、いつも飛躍しちゃうわけ？」
「けどさ、薬指はまずいんじゃない？絶対マスコミに突っ込まれるって！」
当麻が自分の事のように心配する。だが健人の表情に迷いは無かった。
「別にいいよ、突っ込まれたって。
さすがに、まだゆき姉の名前を出せる時期ではないけど…。
でも、大切な指輪だって事は、堂々と伝えるよ。」
健人は雪見の瞳を真っ直ぐに見つめて、ニコッと微笑んだ。
「そう！さっすが健人！あんたは見た目と違って男らしいわ！
良かったね！雪見さん。健人は私が太鼓判を押すから、安心して付いて行ってねっ！

それに引き替え、当麻はもうっ！」

みずきが、「しょーがない奴！」と言いながら当麻を見る目が、雪見には何だか違って見えた。
当麻も、みずきと話す時のテンションが、ここへ来た時とは明らかに違う気がする。

『もしかして、もしかする？だったら全力で応援しちゃうけど！』

その時、はっ！と思い出した。みずきが今日ここへ来た理由を…。
こんなにも親身に応援してくれたみずきの願いを、そろそろ聞いてやらなければ。

「みずきさん！今日は私に何かお願い事があって来たんだよね。
ごめんね、私達の事でドタバタしちゃって。
本当は聞くのが怖かったんだけど、もう何があって　も大丈夫！
私には、健人くんが付いててくれるから！お話、聞かせてもらえる？」

雪見が少し緊張した面持ちで、みずきの向かいに座る。
みずきの隣りにごく自然に当麻が座り、雪見の隣りは勿論健人が座った。

「あのね…。」みずきがおずおずと話し出す。

雪見の緊張感が隣の健人にも伝わってきた。
そっと手を伸ばし、雪見の左手をギュッと握り締める。

この指輪がゆき姉のことを、全力で守ってくれるから…。

衝撃の頼み事

「あのね…。」と言ってから、みずきはしばらく考え込んだ。
このお願いを頼めるのは雪見さんしかいない！と、あの時は思ったけれど…。
そう思い込んで日本に来たけれど、本当にそれでいいのだろうか？
私が雪見さんの人生を、変えてしまう事になったとしても…。

みずきの迷いを感じて、雪見が声をかける。
「みずきさん。お願いを聞いてあげられるかどうかはわからないけど、
とにかくお話を聞かせて。じゃないと、何も進んで行かないよ。
私も一生懸命、考えてみるから。」
そう言われてやっとみずきは、思いを伝える決心がついたようだ。

「じゃ、単刀直入に言うね。
『秘密の猫かふぇ』を……雪見さんにお願いしたいの！」

「お願いしたい…って、どういう意味？」

雪見は、考えてもみなかったみずきの言葉に、頭の中が真っ白になった。
隣で健人も絶句している。が、みずきの隣りに座っている当麻だけは、
なぜか表情が動かなかった。

「お願いしたい、ってなんだよ。」今度は雪見に代わって健人が聞

く。

「次のオーナーになって欲しい！って意味…。」

「嘘だろっ！？なに言い出すんだよ、みずき！頭がおかしくなったんじゃないの？」

みずきの思った通り、真っ先に反対したのは健人だった。

だが当麻は、平然とみずきをかばい擁護する。

「まずはみずきの話を聞いてやれよ！あーだこーだ言うのは、それからにすれば？」

当麻のきつい口調に、健人がムッとして言い返す。

「当麻、お前…。始めから話の内容を知ってて、みずきを連れて来ただろ！」

当麻は何も返事をしなかった。

「健人くん！いいから。まだ何も詳しい事、みずきさんは話してない。

全部聞いた上で判断したいの。

だからみずきさんの話を、ちゃんと聞いてあげよう。」

健人が荒げた声によって、雪見は我を取り戻した。

「みずきさん。聞く心構えができたから、話してくれる？」

「わかったわ。じゃ、詳しく話す。

初めて猫かふぇで雪見さん達に会った時、オーナーが入院してるって言ったでしょ？

あの時は言わなかったけど…末期癌なの…。

先月余命宣告を受けたって、おじいちゃんが言ってた。」

ひざの上に視線を落としたみずきに対して、次の質問をするのは酷だとはわかっている。
だが、これを聞かずして判断は出来ない、と雪見は冷徹に話を進めた。

「あと…、どれくらい？」

「早くて二ヶ月…。春まではもたないだろう、って…。」

「二ヶ月!?年が明けたらってことか…。早すぎるな…。
それで次のオーナーを捜してる。そう言うことだろ？
でも、なんでそれがゆき姉なんだよ！
誰なのかは知らないけど、芸能界の大物なら他にいっぱい人脈があるだろ！」

明らかに健人はいらついている。
やっと雪見との愛が固まり、これからお互いを励まし合って、デビューまで突っ走っていこう！
そう晴れ晴れした気持ちでいた矢先だけに、二人の間に突如割って入ったみずきに対して、
たとえ友人と言えども腹立たしさを感じていた。

「健人くん。私もそう思う。けど、みずきさんがこんな私に話を持ってくるなんて、
きっとよっぽどの理由があるんだよ。話を最後まで聞いてあげよう。」
健人をなだめるように、雪見は静かに微笑んだ。

「オーナーが最後に望んでいることはただ一つ。

自分の人生を捧げられるくらい猫を愛してる人に、次のオーナーを託して死んで行きたい…。
だけど、オーナーやうちのおじいちゃんの知人は、みんなもう高齢だから
またすぐ次に交代するようでは駄目だって…。
それで、若い世代で捜して欲しいって、私が頼まれちゃった…。」

「断れなかったわけ？それでゆき姉に話を持ってくるなんて、安易すぎるんじゃないの？」
健人の苛立ちは修まりそうもない。

「だって、死んで行くってわかってる人が、『最後の願いを聞いてくれ。』って、
私の手を握って涙を流すんだよ！
もう全然力の入らないシワシワの手で、私にすがるんだよ！
どうしてその手を振り払えると思う？」

みずきはそれだけ言うと泣き崩れてしまった。
当麻が隣りから、そっと背中を撫でる。

「ごめん、みずき…。俺、言い過ぎた…。」
健人も、強く当たってしまった事を後悔してる。
しばらくのあいだ四人の空間に、重苦しい沈黙が続いていった。

ふと雪見が、思い出したようにみずきに質問する。
「そうだ！ずっと気になってたんだけど、中にいた猫ちゃん達は今どうしてるの？
猫かふぇが休業してるのは、次のオーナーがみつからないから？」

涙を拭いたみずきは、誠心誠意雪見を説得しようと心に決めた。
「休業してるのは中を改装してるせいもある。
オーナーが、次の人に引き渡す前に、自分の影を消しておきたいって。
気が付かなかったと思うけど、お店の至る所にオーナーが誰か？っていうヒントが隠されてたのよ。
自分からは決して名乗らない。だけどほんのちょっぴり気付いて欲しい。
そんなおちゃめな人なの、オーナーって。
中にいた猫たちは一時里親に預けてるだけだから、新しいオーナーが決まって
新装オープンする時に、みんな戻って来るから安心して。」

「そう！良かった！それだけがずっと心配だったの。」
雪見がホッと胸をなで下ろした。

「雪見さんと初めて会った時、私とおじいちゃんに夢の話をしてくれたよね？
お金を貯めて無人島を買って、猫の島を造りたい。
不幸な猫たちのお母さんになりたい！って。
猫かふぇのオーナーとまったく同じ発想だったから、おじいちゃんと凄く驚いたのを覚えてる。
無人島じゃないけど、その夢、『秘密の猫かふぇ』で叶えてみない？」

「えっ？」

「オーナーが、雪見さんに会いたがってる…。」

「みずき、お前っ！まさか勝手に話を進めてるんじゃ…。」

健人の言葉を途中で遮ってみずきは立ち上がり、身体を二つに折って雪見に深く頭を垂れた。

「時間が無いの！お願い、雪見さん！私、二週間後に戻って来るから、その時に一緒に病院へ行って面会して欲しい！オーナーを安心させて、あの世に送ってあげたいの！お願いします！」

みずきはいつまでも、その頭を上げようとはしなかった。雪見と健人は言葉もなく、ただ茫然とみずきの頭のてっぺんを見つめるしかない。

その横を、めめが「にゃ～ん」と一声鳴いて通り過ぎた。

大きな宿題

結局みずきは、雪見に大きな宿題を残してアメリカへと帰って行った。

二週間後、みずきが日本へ戻って来るまでに、心を決めておかなければならない。
しかも二週間後の１１月２０日と言えば、あろう事か雪見のデビュー曲レコーディング当日だった。

「どうしよう…。どうしよう…。」

みずきから、人生を左右するような頼まれ事をされた夜。
雪見はいつまでも寝付くことが出来ず、ワイン片手に一人でソファーの上にいた。
呪文のように、うわごとのように「どうしよう」を繰り返しながら…。
そこへ、やはり眠れない健人がやって来た。

「健人くん！健人くんは明日も仕事なんだから、ちゃんとベッドで寝なくちゃだめっ！」

「眠れるわけないじゃん！こんな夜に、一人で寝れるわけないよ…。」

「そうだね…、ごめん。じゃ、ここに居ていいから身体だけは休めて。
特別に膝枕してあげる。」

「じゃ、その前に俺も少し飲みたい。多分いくら飲んでも寝れないとは思うけど…。」

雪見はソファーを立ち、キッチンへ行って健人のグラスとチーズを持って来る。

チン！と小さくグラスを合わせたあと、「これ、ありがとね。」と健人に向かって左手のリングを突き出した。

「すーっごく嬉しかったよ！涙が出るほど嬉しかった。」

「けどあの時、半分は笑ってたよね？」

「だって、健人くんがどんな顔して私のリングを選んで、店員さんにネーム入れを頼んだのか想像したら、可笑しかったんだもん！」

「めっちゃ恥ずかしかったから！全然顔上げられなかったもん。帽子もかぶんないで家飛び出しちゃったから、ずーっとジャケットのフードかぶってて…。絶対怪しかったと思う、俺！」

二人で大笑いしたあと、ふと雪見があの時の感情を思い出し、ポロッと一粒涙を落とした。

「健人くんが部屋を飛び出して行った時…、もう帰ってこないかもって悲しくなった。」

その顔を見て健人は、「ごめん！」と雪見を抱き締めた。

「ごめん！もうあんな事しないから！ゆき姉を悲しませる事はもうしない。

ずっと愛してる。この指輪に誓って…。」

「ありがとう…。私もずっと健人くんのそばにいるよ。
健人くんが悲しむことはしないから。
みずきさんの言ったことも、どうするのが一番いいのか、二週間じっくり考えてみる。」

健人が抱き締めた手をほどいて、雪見の瞳をじっと見つめながら言った。
「絶対一人で決めたりしないでよ!必ず俺にも相談して。
ゆき姉の問題は俺の問題でもあるんだから…。」

「わかってる。心配しないで…。さっ、今日はもう寝よっか!
まだ二週間もあるんだし、この宿題は明日からじっくり考えるとして、
今夜は健人くんが、このリングを選んでる時の顔を想像しながら寝よーっと!」

「そんなんで寝れるかっ!」

二人はじゃれ合いながら、寝室へと消えて行く。
今は何もかも忘れて、二人の絆を固く結んでおきたい。
この先に待ち受ける、荒波にも解けない絆を…。

あれから一週間。

毎日レコーディングに向けての、歌の最終レッスンに明け暮れる雪見だったが、

まだみずきからの宿題には答えを出せぬまま、期限まで残り半分となってしまった。

考えても考えても、答えが堂々巡りしてしまう。
オーナーの思いと雪見の思い、健人の思いまでを合わせると、どうしても
答えが一巡してしまうのだ。

しかも運悪く、ここ一週間の睡眠不足と心労、緊張感に急激な気温の変化も重なり、
あと一週間でレコーディングと言うこの時期に、雪見はどうやら風邪を引いてしまったらしい。

心配するので健人には話してないが、朝から喉が痛くて微熱がある。
今日は健人と二人、当麻のラジオに出演する日。
薬を飲んで、なんとしてでも夕方までには回復しておかなくては。

「健人くんはラジオの後も仕事でしょ？帰りは何時頃になりそう？」
健人が出掛ける玄関先で、めめ、ラッキーと共に見送る雪見が聞いた。

「六時からの取材が二本だから、八時には帰って来れると思う。
今日の晩ご飯はなに？」

「今の予定はチーズハンバーグかな？夜までに気が変わるかもしれないけど。」

「絶対チーズハンバーグ！変更しないでね、急いで帰ってくるから！」

「わかったわかった。じゃ、四時半にラジオ局でねっ！いってらっしゃい！」

いつもと変わらぬ様子で見送った後、雪見はリビングのソファーにバタン！と倒れ込んだ。

「やっぱいなぁ…。身体がだるくて言うこと聞かないや。
今日は健人くんの写真集の見本が出来上がる日だから、編集部に行って
その後レッスン行って、ラジオ局行って…。薬飲んで、なんとか乗り切らなくちゃ。」

午前十時。いつものドーナツ屋さんで、差し入れのドーナツをたくさん買い込み、
だるい身体に気合いを入れて編集部へ出向くと、みんなが笑顔で迎えてくれる。

「久しぶり！元気だった？デビュー前って、何かと忙しいんでしょ？お待ちかねの物、ちゃんと出来上がってるよ！」
そう言って、刷り上がったばかりの写真集を手渡された。

「やっと出来たんだ…。健人くんと私の写真集…。」

表紙をマジマジと眺める。
そのうちに、ただの猫カメラマンだった私が、突然「健人くんの写真集を私が作る！」
と思い立った最初の頃を思い出し、感無量になって視界がぼやけてきた。

「やっぱりこの表紙にして良かったね！
景色も健人くんも、めちゃめちゃ綺麗だしインパクト抜群だよ。
本屋さんに並んでも、すごく目を引くと思う。」
編集リーダーの加藤さんが、にっこり笑ってそう言ってくれる。

表紙には、沖縄竹富島の夕日をバックに、感動の涙を流す健人の写真をあえて採用した。
編集部の中では、海辺で遊んでる笑顔の健人の写真とで意見が割れたが
雪見は、自分だけにしか撮れない表情にこだわりたかったのだ。

一ページずつ、大事に大事にめくっていく。
すべての写真に思い出があって、涙が止めどなく流れてきて困った。
健人との絆は、この写真集がスタートなのだから…。

「おめでとう！いい写真集に仕上がったね！」
雪見が最後のページを閉じ涙を拭いていると、後ろから声を掛けられた。

「吉川編集長！本当にお世話になりました。
健人くんも、きっと喜んでくれると思います！ありがとうございました！」

「君たちにはクリスマスイブの発売日まで、もうひと仕事もふた仕事もしてもらわないと！
完成記者会見もあるし、発売翌日には限定コンサートもある。
ＣＤデビュー前で何かと忙しさが重なるだろうけど、体調管理だけはしっかり頼むよ！」

雪見は、熱があることなどおくびにも出さず、「はいっ！」と返事して編集部を後にした。

感謝の気持ち

雪見のバッグの中で、ずっしりとその存在をアピールする健人の写真集。
その重みは二人の愛の重みにも思えてきて、大事に抱え込むようにして
歌のレッスン前に事務所へ寄った。

「お疲れ様です。小野寺常務はいらっしゃいますか？」
解熱剤が効いてきて、少し楽になった身体で受付嬢に聞いてみる。

「常務は明日まで大阪出張です。あ、今野部長なら戻られてますけど。」

雪見にとっての今野はマネージャーであるのだが、事務所での肩書きは
マネジメント部長なのだ。
そんな偉い人が、健人から私のマネージャーになってくれたなんて、
今更ながら二人には申し訳ない気がした。
それと同時に心遣いに感謝して、何が何でもこの写真集とＣＤデビューの成功を、
お世話になった今野にプレゼントしなくては！と気を引き締める。

雪見は今野のデスクへ飛んで行き、目の前に写真集を差し出した。
「お疲れ様です！今野さん、やっと出来ましたよ写真集！
あとは少しだけ手直しして完成です。見てもらえますか？」

「とうとう出来たか！どれどれ…。」

今野が真剣な顔をして、ゆっくりとページをめくってゆく。
雪見は緊張の面持ちで、今野の表情の変化を伺った。

「いいねぇ！俺の見てきた素の健人だ。
いや、俺でさえ見たことない健人の方が多いかも。
これはファンにとっては、たまらん写真集だぞ！」
今野がニコニコしながら見入っているのを見て、雪見はホッと一安心した。

「あいつは幸せな奴だよ。こんな腕のいいカメラマンに写してもらったんだから。
ありがとな！雪見ちゃんのお陰で、今までで一番の写真集に仕上がったよ。」

「とんでもないです！私の方こそ、ただの猫カメラマンだった私にこんな素敵な仕事を任せていただいて、今野さんには心から感謝しています。
本当にありがとうございました！」

雪見は頭を下げながら、初めて今野に会った日の事を思い出していた。
真由子の家で健人の写真集を目にし、突然思い立って何かに引き寄せられるように事務所に来た。
アポも取ってなかったのに、タイミング良く今野と健人が帰ってきて、
「私に健人の写真集のカメラマンをやらせて欲しい！」と直訴したっけ。
あの日が無ければ、今の私と健人もいなかった…。

今野が最後のページをめくると、そこには各人に宛てたお礼の言葉が
健人自身の字で書かれており、デビューからずっとマネジメントを
してくれてる
今野に対する感謝の気持ちも、健人らしい言葉で綴られていた。

「あいつめ！泣かせるようなこと書きやがって！健人の策略か？」
顔は笑っていたが、瞳には涙が光っている。
その涙は気付かぬ振りをしてあげよう。

「あ！健人くんには写真集が仕上がったこと、まだ内緒にしといて
下さいね！
いきなり見せて、ビックリさせたいから。」

「了解！もうそろそろレッスンだろ？今日も頑張っておいで！」

「はいっ！頑張ります！」

雪見は、今野が喜んでくれた事が嬉しくて、上へ行くエレベーター
を待つ間、
勝手に顔がにやけていたのだと思う。
「チン！」という音と共に開いた空間の中には、驚いた顔の当麻が
立っていた。

「当麻くん！」
驚いたのは雪見も同じだ。事務所に来たのかと思って横によけたが、
降りる気配が無いのでエレベーターに乗り込んだ。
見ると、雪見が押そうと思っていた階のボタンが、すでに押してあ
る。

「もしかして、当麻くんもレッスン？」

「うん、まぁ。今しか時間が取れないから…。」
とだけ会話して、あとは気まずい沈黙が流れた。

一週間前の「みずき事件」以来、健人と当麻の仲はギクシャクしているらしい。
当事者の雪見は、当麻がみずきを気にかけ出したのが判っていたので、
みずきの肩を持つのも当然か…と案外冷静だったのだが、健人は雪見を思うあまり
まだ当麻を許せずにいる。
今日のラジオ出演も、どんな風に二人を取り持とう…と頭を悩ませていただけに、
雪見は予定外の当麻との遭遇に戸惑っていた。

「あのさぁ…。」
当麻が何かを言いかけたところでエレベーターは到着。
ドアが開くと、レッスンを終えたばかりらしい当麻の後輩達が「お疲れ様です!」と
二人に進路を空けた。

「お疲れ!」
当麻がそのままスタスタ歩き出すので、雪見も慌てて「お疲れ様です!」と
若き先輩達に頭を下げながら、当麻の背中を追いかける。
と、急に当麻が立ち止まったので、危なく衝突寸前であった。

「なんなの!?」

「みずきを…、許してやってね。」

当麻は振り向きもせず後ろを向いたまま、ぼそっと言った。

「私は別に何とも思ってないよ、みずきさんの事。」

そう告げると当麻はクルッと回れ右をし、「本当に?」と聞く。
きっと当麻も一週間、彼なりに色々考えていたのだろう。
その瞳があまりにも真剣過ぎて、中途半端な言い方はできないぞと思った。

「だけど、頼みを聞くか聞けないかは別問題だから。」

「もう…結果は出したの?」

「まだ。そう簡単に解けるような宿題じゃない。私の今後の生き方に関わる問題だから。
多分、最後の最後まで悩み続けると思う。」

「そうだね…。じゃ、また後で。」

当麻はそう言って、自分のレッスン室へと消えて行く。
横顔に、少し落胆の色を滲ませながら…。

その日雪見のレッスンは、風邪のせいも半分はあるが、心も身体も喉の調子も悪くて、
一週間後が憂鬱になるほど散々な内容であった。

午後三時半。レッスンを終え、ラジオ局へ向かう前に考え事がしたくて
事務所近くにある大きな公園へと歩き出した。

途中で温かな缶コーヒーを買い、ポケットに忍ばせる。
誰も座っていないベンチを見つけ、ふぅ！と座り込むと同時に視線の先に、
タイミング良くなのか悪くなのか、よもぎ色の猫を発見してしまった。

野良猫を目にしたら最後、黙って眺めていられる雪見ではない。
その時点で、なぜここに来たのかは頭の中から削除され、反射的に鞄の中から
カメラを取り出し猫に近づいていた。

「いい子だねぇ！少しだけ撮らせてね。」

その猫はこの公園で餌をもらって生活しているらしく、人慣れしてて
雪見がカメラを構えても逃げようともしない。
嬉しくなって夢中でシャッターを切り続け、危うく時間を忘れるところだった。

「やばっ！もうこんな時間！遅刻しちゃう！」
慌ててタクシーを拾い、ラジオ局へと駆け込んだ。すでに健人も到着している。

「ギリギリセーフ！間に合ったぁ！」
ところがみんな、ギョッとした顔してこっちを見てる。

「どうしたの！？ゆき姉、その格好！」
健人が目を丸くして指をさすので、変なコーディネイトだったか？と
自分の格好を改めて見直すと、お気に入りのコートが泥だらけでビックリ！

どうやら雪見は無意識の内に、いつもと同じく寝転がりながら撮影をしていたらしい。
大勢の人がくつろぐ都心の公園で…。

小さな約束

「どこで何して来たわけ!?転んじゃったの?」
健人が駆け寄り、雪見のコートの泥をパタパタと払ってくれる。

「やだぁ!私、こんな格好でここまで来たのぉ?
ロビーでみんなが私のこと見てるから、ちょっとは有名人になったんだ!
って思ったのに。恥ずかしいっ!」

「で、どうしたのさ?この泥。」当麻が笑いながら聞いてきた。

「レッスン終った後、少し時間があったから公園で猫撮ってたんだけど…。
多分夢中になって、いつもの仕事みたいに寝転がっちゃったんだと思う。」

「思う、って自分じゃ覚えてないの?しっかりしてよ!ゆき姉。」

健人は半ば呆れながら言ったのだが、改めてよく判ったことがある。
雪見は本当に猫が好きなんだ、根っからの猫カメラマンなんだ、と言うことを…。

雪見は、お気に入りのコートを汚してしまい悲しかったが、そのお陰で
健人と当麻の間に笑いが生まれ、ギクシャクしていた二人の関係に少し
和んだ空気が流れてくれたので、それで良しとした。

「放送一分前です！」スタジオの中がいつも通りの緊張感に包まれる。

「ゆき姉？なんか顔が赤いけど、そんなにスタジオ暑い？」
向かい側に座る当麻が、雪見をふと見て聞いた。

「え？あぁ、なんかバタバタしちゃったからかな？大丈夫だよ、気にしないで。
さぁ！今日も気合い入れて行こう！」
そうは言ったものの、雪見は解熱剤が切れかかり、徐々に寒気に襲われ出した。
本当に気合いで乗り切らなくちゃ…。

「めっきり空気が冷たくなった今日この頃だけど、みんなは風邪なんか
引いてないかな？三ツ橋当麻です。
今日も健人とゆき姉を迎えて、３０分たっぷりとおしゃべりや音楽をお届けします。
では、『当麻的幸せの時間』、今週もスタート！」

当麻のタイトルコールによって、３０分の生放送が始まる。
体調が次第に悪くなってきた雪見にとって、ゴールは遙か彼方に思えた。

健人と当麻は何事も無かったかのように、相変わらず息のあったトークで盛り上がるが、
雪見は頭がボーッとして、最小限相づちを打つのが精一杯。

寒気はどんどん増すばかりで、かなりの高熱が予想できゾッとする。

『ヤバイよ、ヤバイ！寄りによってこの時期に熱出すなんて、タイミング悪すぎ。
みんなにバレないように、早く治さなきゃ！明日病院行く暇あるかな…。』

そんなことを考えてて、雪見は二人の会話が上の空だった。

「…だろぅ？で、ゆき姉はどう思う？」
「へ？何が？」
「何が？って…。さては俺の話を聞かないで、晩飯の事でも考えてたでしょ！まったく。」
「えへへっ！ばれちゃった？」

どうにかこうにか乗り切って、やっと本日の放送もエンディングを迎える。

「では、また来週金曜日にお会いしましょう！お相手は三ツ橋当麻と…。」
「斎藤健人。」「浅香雪見でした。バイバーイ！」

「はい！オーケーです！お疲れ様でしたぁ！」
の声を合図に、雪見は大きく「ふぅぅ…。」と息を吐く。
そして、一刻も早く家に帰らなくちゃ！と誰よりも先に放送ブースを飛び出した。

「お疲れ様でした！お先に失礼しまーす！」
スタッフに挨拶して出て行こうとしたとき、後ろから当麻に呼び止められる。

「えっ？もう帰っちゃうの？ゆき姉、反省会は？」

「すべて反省してます！ごめんなさい！ってことで、よろしく。またね、当麻くん！」

どうにか今日一番の笑顔を作って、スタジオを後にした。

酔ってもないのに足元がフワフワしてる。

なんとかタクシーを拾い、マンションに到着。

真っ先にキッチンに直行したのは、健人との約束を守るため。

最後のエネルギーと気力を全部使って、大好物のチーズハンバーグをなんとか作り終えた。

あとはサラダと卵スープで、今日の晩ご飯は勘弁してもらおう。

テーブルの上に料理を並べてホッとした途端、雪見は電池の切れた人形のように

身体の自由が利かなくなり、カクンとソファーに座り込んでしまった。

「もうだめ…。動けないや…。」

そのまま気を失うかのように、スーッと眠りに落ちてゆく。

それから二時間ほどが経った頃、予定通りに仕事を終えた健人が帰って来た。

「ただいまー！やった！ハンバーグのいい匂い！」

玄関先で健人の声が聞こえた気がして、雪見は虚ろに目を開く。

頭では、ソファーから立ち上がり、玄関へ「お帰り！」と出迎えに行こうとしてるのだが、

身体が鉛のように重たくて言うことをきかない。
そうこうしてるうちに健人がリビングに入って来た。

「ただいま！腹減ったぁ！ゆき姉のハンバーグ、楽しみに…。
ゆき姉？どうしたの？コート着たままで。めっちゃ顔赤いけど…。」
明らかに雪見の様子がおかしい事に気付いた健人が、雪見の頬に触れて驚いた。

「嘘だろっ！？凄い熱だよ！もしかして、ラジオ局に居たときから？
なんであの時言わなかったのさ！早くベッドで寝なきゃ駄目だ！立ち上がれる？」

「私なら大丈夫だから、ご飯食べて。あ、でも冷めちゃったね…。
ごめん、作りたてを食べさせたかったけど、今日は無理だった。
お風呂もまだ沸かしてないや…。」

「そんなこと、どうでもいいって！今、薬持ってくる！」
健人は救急箱から解熱剤を取り出し、水と共に雪見に手渡した。

「ありがとう。一晩寝れば熱は下がると思うから…。
こんな時に風邪引くなんて、アーティストになる自覚無さ過ぎだよね。
健人くんに移すわけにいかないから、私はここで寝る。」

「何言ってんの！病人をこんなとこに寝かしておけるわけないだろっ！
ちゃんとベッドで寝なきゃダメだって。ほら、着替えて大人しく寝なさい！」
健人が雪見の手を引いて寝室に連れて行こうとするが、雪見はその場を離れようとはしなかった。

「わかった。でも健人くんがご飯食べてる間だけ、ここにいさせて。」

「しょうがないなぁ！ゆき姉はそういうとこ、頑固なんだから。少し元気になったみたいで良かった。じゃ、急いで着替えて来るね。」

健人が、「めちゃめちゃ美味いっ！」と言いながらハンバーグを頬張るのを、雪見は嬉しそうに眺めている。
そのうち安心したように瞳を閉じて、すやすやと眠ってしまった。

食事を終えた健人が、そっと雪見をソファーから抱き上げる。
『こんなに熱があるのに、俺とのこんなちっぽけな約束を守ろうとして…。
ありがとね、ゆき姉。』

愛しくて愛しくて胸が熱くなる。
腕の中にいる雪見は、少しだけ土の匂いがした。

突然の訪問者

「ピンポーン♪」

朝八時。インターホンが鳴った。
だが一晩中雪見を看病し、明け方やっとソファーに横になった健人は、起きる気配もない。

「ピンポーン♪ピンポーン♪」

「はぁ？誰？こんな朝っぱらに…って、もう八時かよ！
やっば！あと一時間で迎えが来るじゃん！
えーっ！誰だよ。ゆき姉を起こすわけにもいかないし…。」
健人は渋々、寝ぼけ眼でインターホンを見た。

「はい…。うぅえーっ！？なんでやねん！嘘だろぉ？
しかも、なんでここの暗証番号知ってんの？っつーか、もうそこに立ってるし！」
健人は眠気もぶっ飛び、一人で慌てふためいた。
寝室の雪見はチャイムにも気付かず、まだ寝ている様子。

「やばいぞ！大丈夫か？俺。
そう！ゆき姉を看病しに、昨日の夜からここに居ることにしよう！
落ち着け、健人！」
深呼吸を二度してから、玄関の扉をそーっと開ける。

「よぅ！」

「お兄ちゃん！！なんでゆき姉んちにいるのぉ！？」

扉の向こう側に立ってたのは、なんと健人の妹のつぐみであった！

「ねぇ！なんでここにいるの？ゆき姉は？」

「あぁ、ゆき姉ね！昨日の夕方から凄い熱出しちゃってさ。
心配だから、俺が看病しに来たってわけ。
って、お前こそ、こんな朝っぱらから何しに東京来たんだよ！」
健人は、自分が突っ込まれる前に、つぐみに突っ込む作戦に出た。

「私？友達と買い物に来たの。ゆき姉が、こっちに来たら寄りなさい、って。
友達はそこのマックで朝マックしてる。ねぇ、それよりいつまでここに立たされてるわけ？玄関にも入れてもらえないの？」

「あ、ごめん。いいよ、入って。」
健人は意を決してつぐみを迎え入れる。が、速攻で窮地に陥った。

「お兄ちゃん、ブーツを五足も持って看病しに来たんだ。へぇーっ。」
しまった！と思ったところでもう遅い。
自分の部屋のドアを締めることしか頭に無くて、玄関に並べてあった靴にまで気が回らなかった。

「あっ、あぁこれね…。俺のマンションの靴箱、狭くてさぁ！
入りきらないから、ここに置かせてもらってんの。
今度引っ越す時は、もっと靴箱のでっかいとこ捜さなきゃ。」

「ふーん…。」

心臓が止まるかと思った。よくぞ咄嗟に満点の言い訳ができたと、

自分に感心する　。
しかし、そんな子供だましの言い訳が通用するほど、いつまでも妹は子供ではなかった。

「お前さぁ、人んちに来る時はちゃんと連絡してから来いよ。」
冷蔵庫から取り出したオレンジジュースをグラスに注ぎながら、健人は兄の顔して言う。

「人んち、って、ここお兄ちゃんちなわけ？」

「違うッ！そうじゃなくて、よそんちに行く時は、って意味だっ！」
つぐみがリビングの中をキョロキョロ見回すので、健人は気が気ではない。
まぁ、昨夜から泊まり込みで看病してる事になってるので、多少健人の私物があったとしても、
どうにか誤魔化すことは出来るだろう。

「ばっかじゃないの！？小学生じゃあるまいし。私だって、それくらいの常識はあるわよ！
ゆき姉に何回メールしても返事が無いから、心配になって来たのに。
ゆき姉は？どこで寝てるの？」

「あぁ、こっち。まだ熱は下がり切ってない。
今日はゆき姉レッスンだけだから、一日寝かせておく。
ゆき姉、入るよ。つぐみが来たんだけど…。」
そーっとドアを開けると、雪見は目を覚まして驚いた。

「つぐみちゃん！ビックリした。どうしたの？」

「私の方がビックリしたよ！ゆき姉。
近くまで来たからメールしたけど返事が無いし、なのに下の郵便受けには
部屋にいるって合図が出てるし。
倒れてるかと思って上がって来たら、お兄ちゃんが居るし！
まぁ、本当に倒れてたけど…。」

「はぁ？部屋にいる合図って何？
しかも、なんでオートロックの暗証番号、お前が知ってんの？」

「私が前に教えてあげたの。
郵便受けに猫のマグネットが付いてたら、部屋に居るよって。
ありがとね、気にしてくれて。でも、せっかく来てくれたのにごめん。
身体がだるくて、まだ起き上がれないや。」
つぐみが雪見の額に手を当てて驚いた。

「ゆき姉！まだ、めっちゃ熱があるけど！
もうすぐレコーディングなんでしょ？今日は病院行った方がいいよ。
私が一緒に行ってあげる！お兄ちゃんはこれから仕事だよね？」

「うん、まぁ…。けど、友達が待ってるんだろ？」

「大丈夫。四人で来たから、私一人がいなくても。
そうだ！今日は私が泊まって、ゆき姉の看病をする！
だからお兄ちゃんは、仕事終ったら安心して自分んちに帰っていいよ。」

「ええっ！？帰っていいって…。」
戸惑う健人を見て、雪見がクスクス笑いをこらえてる。

「つぐみちゃん、ありがとう。
じゃ、健人くんが仕事に出掛けたら、病院まで付き合ってくれる？
けど夜は、もう私一人で大丈夫だから。
せっかく受験勉強の息抜きに来たんだし、お友達とのショッピング
を楽しんでおいで。」

「本当に大丈夫？」

「大丈夫だよ。つぐみちゃんの顔見たら、元気が出てきた。
けど、病院だけは付き合ってね。私、どうも昔から病院が苦手で…。
」

「ゆき姉にも苦手な事ってあるんだ！いいよ、わかった。
友達とは、午後からどっかで合流することにする。
お兄ちゃんはもうすぐ仕事でしょ？早く準備しなさいよ！」

「そうだった！じゃ、あとはゆき姉のこと頼んだぞ。」

「任せなさい！」

そう言ってつぐみはドンッ！と胸を叩く。
いつの間にか大人になったもんだと、健人が感慨深げだ。

健人が九時に仕事に出たあと、雪見も病院へ出掛ける準備をする。
昨日は確か、着替えも化粧落としもせずに寝ちゃったはずだが、い
つの間にか
ルームウェアに着替えてあるし、化粧も落としてあった。
『まったく記憶に無いけど、健人くんだ。ふふっ、大変だったろう

なぁ…。』

雪見は鏡を見ながら、悪戦苦闘している健人を思い浮かべ、ぼんやりとそう思う。

タクシーを拾い、つぐみと共に病院へ。

以前健人がインフルエンザにかかった時に行った、事務所の芸能人御用達、

人目に付かなく空いてる病院へ、今野が電話を入れてくれていた。

「過労からきた発熱でしょう。喉の痛みは声帯の急激な使い過ぎによるものかと思われます。

薬を飲んで安静にしてると、何日かで治まるでしょう。

じゃ、今日は点滴しますね。」

「えーっ！点滴ですかぁ！？」

雪見は注射が大ッ嫌いであった。

可愛い妹

「やだぁ！点滴するって判ってたら来なかったのに！」

「なに小学生みたいな事言ってるの！
いや、今時の小学生だって、そんなことは言いませんよ。
ほら、ちゃんと腕を伸ばして！
あら！あなた、あんまり血管が見えない人なんだ。
さては今まで、結構痛い目に合ってきたようね。でも安心して。
私、注射だけは得意だから！」

年配の貫禄ある看護師さんが、雪見を安心させるためかニコニコしながら言った。
が、雪見の目は点滴の針に釘付けで、いくら看護師さんがニコニコしようが
鬼の形相であろうが、一切視界には入らない。
しかも、注射「だけは」得意って、ある意味怖い！

「ゆき姉！今日一日で治すつもりで来たんでしょ？
だったら少しぐらいは我慢しなさいっ！」
隣りに付添うつぐみに叱られた。
何だか昔も、同じようなセリフで母に叱られたっけ。

「妹さんの方が、よっぽどしっかりしてるじゃない！」

「そうなんです！よく言われます。うちのお姉ちゃんったら、恐がりで困っちゃう！
だから、痛くないように一回でお願いしますねっ！」
つぐみは、看護師さんに微笑んでから雪見の方を見て、茶目っ気た

っぷりに肩をすくめた。

つぐみの可愛い嘘に、緊張でこわばった顔が少しだけ解ける。
私にこんな妹が本当にいたら、一緒にショッピングに行ったり、おしゃれなカフェで
恋の悩みを聞いてあげたり…。

「痛っ！」

「はい、終ったよ！約束通り一回でねっ。」

雪見があれこれ想像してる間に、点滴の針は見事に突き刺さっていた。
良かった！注射だけは得意な看護師さんで。
もう他は、なに苦手でもいいです！注射さえ得意なら。

「点滴終るまでに一時間半ぐらいかかるから、寝てもいいですよ。妹さんはどうする？どこか出掛けて来てもいいのよ。」
看護師さんが、薬の落ちる速度を調整しながらつぐみに聞いた。

つぐみはすっかり妹になり切って、「いや、お姉ちゃんのそばにいます。」と返事する。

「じゃ、何かあったらナースコールを押して下さいね。」
看護師さんは、点滴室の間仕切りカーテンをシャーッと閉めて、その場を後にした。

点滴室にベッドは六つあるのだが、今の時間の患者は雪見だけだった。
シーンと静まり返った部屋。狭い空間の中には雪見とつぐみが二人

きり。

「なんか…照れちゃうねっ。」
そう言いながらつぐみは、看護師さんが出してくれたパイプ椅子に、ことんと座る。

「なんか…ね。」
ベッドに横になる雪見も、つぐみを見ながら照れ笑いを浮かべた。

二人きりで色々お喋りしたかったはずなのに、なってみたら妙に照れくさくて
なかなか会話が続かない。
これじゃまるで、初デート中の中学生カップルではないか。

でも、お互い照れくさい理由は解ってる。

健人と雪見が付き合ってるという事を、しかもすでに一緒に暮らしているという事実を、
まだつぐみに直接伝えてはいない。
だが、気付いているだろうなと雪見は思ってる。
反対につぐみも、兄と雪見は付き合ってるとは思うけど、なんだか恥ずかしくて
確かめられずにいた。

『つぐみちゃんには、きちんと伝えなきゃ。今がチャンスだよね。』
『お兄ちゃんに聞いたって、どうせ誤魔化されるだけだから、聞くならゆき姉だよね。』

「あのね…。」
「あのさぁ…。なんかハモっちゃったね。なに?ゆき姉から先に言

って。」
突然つぐみに振られては、言おうと思ってた事もなんだか言い出しにくくなってしまった。

「あ！進路は決まったんでしょ？理系？文系？」
まずは違う事から話し始めよう。

「え？あ、うん。もう決めた。医療系の大学。看護師になる！」
つぐみも、予想してた話と違う話題を雪見に振られたので、少し面食らった。

「へぇーっ、そうなんだ！看護師かぁ！凄いなぁ。
そっか、ちぃばあちゃんの影響？若い時は看護師さんだったもんね。」

「それもある。小さい時から色んな話をしてくれたから…。
でも一番は、子供の頃の担当看護師さんかな。あの時からずっと心の中で思ってた。
大人になったら、こんな看護師さんになりたい！って。」
つぐみは小学三年生頃まで身体の弱い子で、よく入退院を繰り返していた。

「そう！子供の頃からの夢を叶えるなんて、凄いね！尊敬しちゃう。
私なんて、子供の頃に夢なんて無かったなぁー。
だから、ただなんとなく大学行って、なんとなく就職して…。
結局は専門学校入り直してまでカメラマンになったのに、嫁にも行かないで
今はこんな事やってんだから、そりゃ親も泣くよね…。」
ベッドの中で雪見は、真っ白な天井を見つめている。

「そんなことないよ！ゆき姉だって夢を見つけたんでしょ？
どんなに遠回りしたって自分さえ夢を見失わなければ、いつからだって
スタートはできるんだよ！」
つぐみの力説に驚いた。本当に大人になったなぁ、と嬉しく思う。

「ありがとね。つぐみちゃんの言う通りだよ！
よし！私もつぐみちゃんに負けないように、頑張らなくちゃ！
それで、進路の事は健人くんには話したの？」

「お兄ちゃんには、まだ話してない。なんか忙しそうだから…。」

「ダメだよ！私なんかより、真っ先に話してあげなくちゃ。大事な話だよ！」

「だって…。お兄ちゃんだって私に大事なこと、まだ話してくれないし…。」
つぐみが少しふくれっ面で横を向く。雪見にはそれが何を意味してるのか、すぐに判った。

「あのね…つぐみちゃん。実は私と健人くん…。」
と言いかけた途中で、つぐみがいきなりダンッ！と立ち上がり
「付き合ってるんでしょ！？てゆーか、同棲してるんでしょ！？」
と真剣な目をして聞いてきた。

「ど、同棲って…やっぱ、バレてたよね。
ごめんね、今まで黙ってて。健人くんは悪くないから！
つぐみちゃんの悲しむ顔を想像したら、私が言えなかった。
ごめん…。本当にごめん！大事なお兄ちゃんの彼女が私だなんて…。
」

雪見は謝ることしかできなかった。
許してもらえるとは思わなかったが、それしか今はできなかった。
点滴につながれたベッドの上では…。
しかし、つぐみの反応は予想外であった。

「なんで?なんで謝るの?私、めっちゃ嬉しいんだけど!
ゆき姉がお兄ちゃんの彼女だなんて、超サイコー!!うれしーっ!」
そう言いながら抱き付いて来たので、雪見は茫然とする。

「えっ?嫌じゃないの?私、つぐみちゃんや健人くんと親戚なんだよ?
親戚がお兄ちゃんの彼女って、嫌じゃない?」
雪見は、ずっと心を痛めてきたことを、恐る恐る聞いてみた。

「ぜーんぜん!どこの馬の骨ともわからん人が彼女になる方が、よっぽど嫌っ!
ゆき姉が私のお姉さんだったらって、ずっと思ってたんだ。
あー、これで安心して受験勉強に専念できる!」

つぐみの心からの笑顔に、雪見は元気が湧いてきた。
ありがとう!未来の看護師さん。

思わぬ出会い

「ねぇねぇ！その指輪、お兄ちゃんからのプレゼントでしょ！
もしかして、ペアリング？もしかして…婚約指輪だ！」

「なに言ってんの！そんなわけ無いでしょ。ペアリングは当たりだけどねっ！」
雪見は嬉しそうに左手の薬指を眺めた。

「良かった！お兄ちゃん、ゆき姉のこと大切にしてるんだね。
本当はちょっとだけ心配だったの。
自分の兄ながら、お兄ちゃんの人気は相当だと思うから、ゆき姉の周りは
ライバルだらけだろうな、って。だから…。」

「大丈夫！私は健人くんを信じてる。このリングが私を強くしてくれたの。」
そう言って雪見は指輪を頬に押し当てた。

「なんか、私まで胸がいっぱいになっちゃう。
あ、そうだ！写メしてお兄ちゃんに送ってあげよう！
きっとゆき姉が心配で、ドラマの撮影も上の空だよ。
元気が出てきたゆき姉を見せて、いーっぱい稼いでもらわないと！」

「じゃ、つぐみちゃんも一緒に写って！」
二人はまるで本当の姉妹のように仲良く寄り添い、満面の笑顔でピースサインをした。

「よし、送信！っと。あ、買い物中の友達にも送っていい？

私の友達、みんなゆき姉のファンなんだよ！今度会わせてってうるさいんだから。」

「えーっ！じゃあもっと綺麗にしてくれれば良かった！」

雪見とつぐみは、心にかかっていた霧がすっかり晴れたことで、より一層親しさを増した。
姉妹のように親友のように、ファッションに恋愛、受験や猫の話など、
気が付けば一時間も喋りっぱなしである。

二人しか点滴室にいないことをいいことにワイワイ騒いでいると、
コホンと咳払いが聞こえた。
どうやら患者さんがもう一人、点滴にやって来たようだ。
さっきの看護師さんの声がして、雪見に告げたのと同じことを伝えている。

「じゃ、何かあったらナースコールを押して下さいね。」
シャーッとカーテンを引く音がして、足音がこちらに近付いてくる。
看護師さんが雪見のカーテンに首だけ突っ込んで、点滴の減り具合を見た。

「気分は悪くない？まぁ、それだけ元気になったんなら心配ないわね。
それとも、もう一本追加しとく？」
看護師さんがニヤリと笑った。

「いや、今日は遠慮しときます！」

雪見が全力で拒否するのを見て、つぐみが「どうせ次回も遠慮する

んでしょ！」と大笑い。
看護師さんも笑いながら、「じゃ、あと三十分頑張ってね。」と言って出て行った。

他の患者さんが来たからには、もう静かにしなくてはならない。
だが、いくら話しても話し足りない二人は、性懲りもなく声をひそめてまでお喋りした。

「ねぇ、ゆき姉はお兄ちゃんのどこが好きなの？」

「えーっ！健人くんの好きなとこ？そんな、真剣に聞かれると照れるじゃない！
一言じゃ表せないよ。丸ごと全部の健人くんが好きなんだと思う。
ほら、世間一般から見た健人くんって多分、今どきのイケメン俳優で弟的存在で、
綺麗で可愛くてダンスが上手くておしゃれ、みたいな軽いイメージだよね。
でも本当の健人くんは、そんな浅い人じゃない。
努力家だし頭がいいし、どんな事にも全力投球する気配りの人。
反面、優柔不断で寂しがり屋、整理整頓ができない甘えん坊。
どれか一つ欠けても健人くんじゃなくなる。」

「ちゃんとお兄ちゃんの事、見ててくれたんだね。嬉しいな。
けど、甘えん坊のお兄ちゃんって想像できなーい！私には威張ってばっかなのに！
ねぇねぇ、どうやってゆき姉に甘えるの？ベタベタしてくんの？」

「やだぁ！そんなことバラしたら健人くんに怒られる！」

「絶対内緒にするから教えてよぉ！」

知らず知らずにまた声が大きくなり、お互いに「シーッ！」と注意し合う。
その時だった！

「つぐみ？どこだ？」

「え？うそ？お兄ちゃんの声がした！？」
つぐみがそっとカーテンを開けて見ると、なんと健人が立ってるではないか！

「どうしたの、お兄ちゃん！ドラマの撮影中じゃなかったのぉ！？」
思わずつぐみが大声で叫んでしまった。

「シーッ！ゆき姉は？大丈夫？」
健人が静かにカーテンの中に入ると、雪見の顔がパッと明るくなった。

「健人くん！どうしたの？撮影は？」

「近くの公園で撮影してたんだけど、急に雨が降ってきて止みそうもないから中止になった。
この後は午後からスタジオ撮影。で、大丈夫なの？ゆき姉。」
健人は、点滴をしてベッドに横たわる雪見を見て、心配そうな顔をした。

「ごめんね、心配かけて。私なら、つぐみちゃんのお陰ですっかり元気になったから。
点滴ももうすぐ終るよ。」
雪見は、思いもしなかった健人の突然の登場に、顔がほころんで仕方ない。

「お兄ちゃん！私の二回目のメール、見てないでしょ！
『ゆき姉は元気になったから安心してね！』って、写メして送ったのにぃ！」
つぐみが健人を睨み付けた。

「うそっ！？あれ？ホントだ！慌てて来たから、メール読んでなかった。
この写メの二人、仲良し姉妹みたいじゃん！」
健人が嬉しそうにケータイをながめながら、ニコニコしてる。

「だって私とゆき姉、本当の姉妹になるんだもん！」
つぐみの発言に雪見は驚き、健人は訳が解らずポカンとしている。

「つぐみちゃん！話が飛び過ぎ！
ごめん、健人くん。つぐみちゃんに私達のこと、話しちゃった…。」

「そ、そうなのぉ？まぁ、そのうちバレる事だけど…。そう言うことだから、よろしく！」
健人は照れくさくて、ぶっきらぼうにつぐみに言った。

「私がゆき姉んちの玄関にあったお兄ちゃんのブーツを見て指摘した時、
うまく私を誤魔化せたと思って、ホッとしてたでしょ？
ばーっかみたい！あんな言い訳信じるのは、幼稚園児ぐらいなもんよ！」

「なにぃ！？」

完璧につぐみに負けてる健人を、クスクス笑いながら見てた時、看

護師さんが
「入りますよ！」と言いながらカーテンを開けた。

「点滴終了！お疲れ様。気分は良くなったでしょ？
熱も下がったけど、まだまだ無理は禁物よ。お大事にね。」

「ありがとうございました！」

点滴からやっと解放された雪見は、うーん！と大きく伸びをしたあと
「あー、お腹空いたぁ！みんなでご飯食べに行こ！心配かけたお詫びに私がおごるから。」
と、二人を誘った。

「わーい！うんと美味しい物、ご馳走になっちゃお！」
つぐみは、三人で食事に行けるのが嬉しくて、子供のようにはしゃいでる。

「よし！俺が美味いラーメン屋に連れてってやるか！」

「やだ！なんで東京来てまで、ラーメン食べなきゃなんないのよっ！」
つぐみと健人が、相変わらずもめながら点滴室を出ようとしたその時。

「健人くん？斎藤健人くんだよね？」
廊下に近いベッドの、閉じられたカーテンの向こうから声がした。

「え？誰？」
健人がそっとカーテンの中をのぞいて思わず叫ぶ。

「大沢ぁ！？」　そこにいたのは「ガリ勉くん」だった！

危険な香りの共演者

「なんでお前も点滴してるわけぇ？」
健人は驚きのあまり、声が裏返ってた。

「悪いけど、カーテン開けてくれる？どうも狭い所が苦手なの。」
健人を呼び止めた『ガリ勉くん』は、随分と親しげに話しかけ、カーテンを開けさせる。
パッとひらけた視界の先には、戸惑い気味の雪見とつぐみが立っていた。

「あ、こんにちは！私、健人くんと同じ事務所の大沢真麻です！」
その色白で綺麗な人は、点滴をしたままベッドに腰掛け、二人に向かって
にっこりと意味ありげに微笑んだ。

一瞬で凍り付く雪見とつぐみ。『私達の話を聞かれてた！？』
頭の中が真っ白になり、雪見の心臓がドックンドックンと大きな音を立てる。
『どの話から聞かれてた？何の話してた時に、この人来たっけ？
どうしよう！健人くんとの事がバレた！』
つぐみも、この人物が健人のドラマの共演者だとすぐに気付く。
『この人…なんか危険…。よしっ！』

「こんにちは！私、斎藤つぐみって言います。いつもお兄ちゃんがお世話になってます！」
雪見よりも先に反応したのはつぐみだった。モデル張りの作り笑顔といつもよりワントーン高い声で、イケメン俳優の妹を演じて見せる。

「えっ？健人くんの妹さんなの？カッワイイ！高校生でしょ？」
つぐみは、朝から悩みに悩んで、精一杯大人びた格好で出掛けて来たつもりなのに、
一目で高校生と見破られたのが悔しくて燃えてきた。

「お兄ちゃんと一緒にドラマに出てる方ですよね？密かにお兄ちゃんに思いを寄せてる同僚役で…。
綺麗な女優さんだなぁーと思って見てました。」

「ありがとう！嬉しいわ。健人くんとは高校が一緒だったんだけど、まさか女優になってすぐに健人くんと共演できるなんて、夢にも思わなかったの。
だって、健人くんの人気って凄いんですもの！私もみんなに羨ましがられて大変な…。」
初対面なのに馴れ馴れしいのも気に入らず、つぐみは相当な勢いで話の途中をぶった切る。

「けど、うちのお兄ちゃんの事、本気で好きにはならないで下さいね！
お兄ちゃんには、ちゃんと彼女がいますからっ！」

「つぐみっ！！」

突然のつぐみの爆弾発言に、健人と雪見は心臓が止まりそうだった。
『ガリ勉くん』も、つぐみの豹変ぶりに目を見開いたままである。
「いいからお前は先に行ってろ！ゆき姉も会計してきていいよ。俺もすぐ行く。」

つぐみは「ゆき姉行こう！」と言いながら、雪見の腕を引っ張って廊下へ出る。

雪見も、後ろ髪を引かれる思いで会計へと歩き出そうとしたが、つぐみに
「待って！」と呼び止められた。

その頃健人は、なぜつぐみが突然そんなことを言い出したのか、訳が解らず困ってる。
『一体この場を、どう収めろってんだよ！つぐみの奴！
取りあえず、当たり障りのない話でごまかすか…。』

「あ、風邪でも引いたの？午後から出番あるよね、大丈夫？」
健人は小首を傾げて顔を覗き込む。

「お兄ちゃんめ！なんで誰にでも優しくすんのよ！あんたにはゆき姉がいるでしょっ！」
なんとつぐみは、点滴室を出てすぐの廊下で聞き耳を立てていた。

「つぐみちゃん、やめようよ、こんな事。」
小声で雪見が撤退を促すが、つぐみは「シーッ！」と無言で人差し指を立て息を潜める。
一方、まさかつぐみ達がすぐ近くにいるとは思いもしない『ガリ勉くん』は、
二人きりになったこのチャンスに、少しでも健人との距離を縮めておこうと打って出た。

「私の事、心配してくれるんだ！嬉しいっ！
ねぇねぇ、ここに座って少しお喋りに付き合って。
あと一時間も一人だなんて、つまんなーい！高校ん時の話でもしよう！
私、ずっと健人くんと、ゆっくり話がしたいと思ってたんだ。ねぇ、

座って！」
甘えた声でそう言いながら、ベッドに腰掛けるよう健人を誘う。
だが健人は、突っ立ったままつれない返事をした。

「いや、二人が待ってるから…。あのさ、さっきは妹が変なこと言って悪かったな。
きっと受験勉強のストレスで、カリカリしてたんだと思う。気にしなくていいから。」

「気にしてくれなきゃ困るのっ！お兄ちゃん、この人に狙われてるって
気付いてないわけ？」つぐみがイライラし始める。
「つぐみちゃん、バレたらまずいって！もう行こうよ！」
雪見がつぐみの手を引いたが、つぐみは意地でも動こうとしない。

「ねぇ。さっき妹さんが言ってた事ってほんとなの？健人くんに彼女がいるって。」
ついに核心に迫る言葉が健人を追いつめる。
雪見もつぐみも息を殺して、健人の口から次に出る言葉を待った。

しばらくの沈黙のあと…。
「いるよ。もちろんいる。大体彼女のいない奴なんているか？この業界で。
俺の周りには、そんな寂しい奴はいないけど。お前だって彼氏ぐらいいるだろ？」
健人は、わざと突き放すような言い方をした。だが…。

「私はいない！だって、高校の時からずーっと健人くんだけを見つ

めて来たんだから！」

「えっ？」

思いもしない突然の告白に、健人はもちろん廊下の二人も衝撃を受けた。

「健人くんしか見えなかった…。一生懸命綺麗になって、どんな事してでも

健人くんの近くに行こうと努力したのに…。やっと願いが叶ったのに…。」

そう言って彼女は泣き出してしまった。

「ごめん、全然知らなかった…。だけど、俺の気持ちはもう変わらない。

一生変わらないんだ。だから…ごめん。」

健人の言葉を廊下で聞いていた雪見は、胸がいっぱいになった。

つぐみも、初めて耳にする兄の男らしい言葉を誇りに思う。

「じゃあ…たったひとつ、最後に私のお願い聞いて。」

「なに？」

「一度だけキスして。それでもう諦めるから…。お願い。」

廊下のつぐみが、「あんなこと言われたら、お兄ちゃんならしかねないよ！どうしよう！」と焦る。

雪見は、もうここにはいられない、と歩き出そうとした。が、その時！

つぐみが突然、ドンッ！と雪見を点滴室の中に突き飛ばしたのだ！

「いったぁーい！」もちろん雪見は、前のめりに転んでしまった。
「ご、ごめん。健人くん遅いから迎えに来たんだけど、そこでつまずいちゃった…。」
まさか、つぐみに突き飛ばされたとは言えやしない。

「紹介するわ。俺の彼女、浅香雪見。同じ事務所だからよろしく。」
健人は雪見を抱き起こしながら、大沢真麻に紹介する。

「俺のこと、随分誤解してたんだね。残念ながら、俺ってそんな軽い男じゃないから。
んじゃ、あとでスタジオでなっ！行こ、ゆき姉！俺、めっちゃ腹減った！」
そう言いながら健人は、雪見と共に点滴室を後にした。

その日の午後。「ガリ勉くん」はスタジオには現れなかった。

泣き虫健人

「ただいまぁ！ゆき姉、気分はどう？大丈夫？あ、やった！カレーの匂い！」
健人が急いでブーツを脱ぎ、バタバタとリビングにやって来る。
まるで子供が外遊びから帰って来たかのように、一気に部屋が賑やかになった。

「お帰り！もう大丈夫だよ。けど、買い物しないで真っ直ぐ帰って来たから、
カレーぐらいしか作れなかった。
つぐみちゃんからも、『無事、家に到着！』って六時頃メールが来たよ。」

「またどっかに寄り道でもしてんじゃないかと思って、心配だったんだ。
そっか、良かった！じゃ着替えて、コンタクト外してくるわ。」
健人は足元に寄ってきためめの頭をなでてから、またバタバタとリビングを出て行った。
雪見は、まるで小学生の妹を心配するかのような健人に苦笑しながら、
カレーの鍋を温め直す。

遅い夕食を終え、健人はソファーに座ってくつろぎながら、明日のドラマ撮影の台本を開く。
隣では、健人が帰って来て安心した顔のめめとラッキーが、仲良く居眠りを始めていた。

「ふぅぅ…。取りあえずはこんなとこかな?ゆき姉、終ったからお風呂入ってくる。」
健人が台本を暗記してる間、雪見は静かに写真を整理したりお風呂に入ったりして、
健人の邪魔にならないように気を配る。
そして健人の声を合図に寝酒とつまみの準備をして、お風呂から上がってくる
健人を待つのが最近のパターンだ。

「あー、さっぱりした!じゃ、今日も一日お疲れ!」
チン!と軽くグラスを合わせ、冷えた白ワインを喉に流し込む。

「うめぇーっ!身体に染み込むわぁ!
あ!ゆき姉は一杯だけだよ!まだ病み上がりなんだから。」

「わかってるよっ!今日だけね。けど風邪じゃなくて良かった!
健人くんに移したら、どうしようかと思ったもん。」
雪見が健人のグラスに、二杯目のワインを注ぎながら安堵する。

「俺だって心配したよ!一人置いて仕事行ってるあいだに、ゆき姉がどうにかなったら
どうしよう!って。タイミング良くつぐみが来てくれて助かった!」

「心配し過ぎ!けど、ほんと、つぐみちゃんが来てくれて私も助かったよ。
お陰で大っ嫌いな点滴も、どうにか頑張れたし。」
雪見はすぐにでも、大沢真麻のその後を聞きたかった。
だが健人に気を揉ませたくはなかったので、もっと後にさり気なく聞いてみることにする。

「点滴してる間、ずっと二人でお喋りしてたわけ？一時間半も、なに話す事あったのさ。」
健人が不思議な顔して聞いてくる。

「えーっ！まだまだ話し足りなかったよ。だってお昼は健人くんも一緒だったから、
ガールズトークなんて出来なかったもん！」

「ガールズトークぅ？つぐみと？まさか男の話とか…。」
健人が、あまりにも真剣な顔をしてるのが可笑しかった。

「健人くん！つぐみちゃんが何歳になったか、知ってるよね？
彼氏の一人や二人、いたっておかしくないでしょ！」

「二人もいたら困るだろ！ねぇ、どんな奴か聞いた？写メとか見なかったの？」
世の中の兄と言う人物は、こんなにも妹の事が心配なのだろうか。
普段はつぐみの「つ」の字も言わないし、会えばお互い憎まれ口ばかりなのに、
本当はいつも気に掛けてるのだろう。
からかうのは止めにして、ちゃんとした情報を教えてあげよう。

「残念ながら、今は彼氏いないんだって。でも、その方が受験勉強に専念できるから、
ってさばさばしてたよ。どう？少しは安心した？お兄ちゃん！」

「マジで？ほんとにいないの？それもどうかと思うけど。」
口ではそうは言うものの、明らかに健人の顔はホッとしてる。

「それにしても、あいつが看護師になりたいなんてね…。全然知らなかった。
大変な仕事だろうけど、まぁ、あいつなら頑張れるかもな…。」
健人はきっとつぐみの成長が、嬉しいような寂しいような、複雑な心境なのであろう。
グイッとワインを飲み干して、「もう寝よっか。」と言った。

ベッドに入ってから、雪見は大切な事を思い出した。
「そーだ!熱騒ぎで大事なこと忘れてた!ちょっと待っててねっ!」
雪見はぴょん!とベッドを飛び降り、鞄の中から何かを取り出す。
そして、「はい!これ。やっと出来上がったよ!」と言いながら、健人の目の前に差し出した。

「俺の写真集だ!出来上がったの?見ていい?」
健人はガバッ!と身体を起こし、ベッドの上に足を投げ出して座る。

「もちろん!あとちょっとだけ手直しがあるけど、ほぼこれが完成形だから。
早く見て、感想を教えて!」
雪見も健人の隣りに座って膝を抱えた。

今までの健人の写真集は、健人も写真の選定作業に参加し、大部分が自分の気に入った写真で構成されていた。
だが今回は、カメラマン浅香雪見の目から見た、『素顔の斎藤健人』が
第一のコンセプトであったので、雪見を始め編集スタッフにその殆どを任せてみたのだ。

この日初めて目にする自分の写真集を、健人は感慨深げに眺める。

「この写真を表紙に選んでくれたんだ…。
俺ね、今回の写真の中で、これが一番好きかも知れない。」

竹富島のオレンジ色の夕日が優しく身体を包み込み、胸がいっぱいになった健人が涙を流す。
それは撮影用の演技でも目薬を差した偽物の涙でもなく、心を許した人の前だからこそ流れた
本物の涙であった。

「私もこの写真が大好きなの。だから編集部の中では意見が割れたんだけど、
これだけは譲れない！って押し切っちゃった。
健人くんも気に入ってくれて良かった！
ねぇねぇ、早く中も見て！自分で言うのも何だけど、いいショットばっかりだから！
めっちゃ選ぶのには苦労したけどねっ。」
表紙を眺めたまま、中々ページをめくろうとしない健人を促した。

一ページ、また一ページとゆっくりめくる。
そこに写し出された数々の写真は、全てが生身の斎藤健人であり、
魂を持ち合わせていた。

「やっぱりゆき姉だけだよ、本当の俺を撮せるのは…。
ゆき姉に出会えて良かった…。」
雪見と再会してから今日までの事が、走馬燈のように頭の中を駆け巡り、
またしても胸がいっぱいになった健人が、出来上がったばかりの写真集の上に
ポタポタと涙を落とした。

「あーあぁ！濡れちゃったぁ！普段は絶対泣かないくせに、なんで私といる時は
泣き虫になっちゃうの？しょーがないなぁ。」
そう言いながら雪見は、手で濡れた写真の上を拭く。
その指に光る指輪を見た時、健人は自分でも訳が解らぬほど、幼子のように涙が溢れた。

「よしよし、もう泣かないの。」そっと健人を両腕で包んで頭を撫でる。
腕の中の無防備な健人は、やはり生まれたてのバンビのように思えた。

私があなたを守ってあげるから…。

やっとみずきの宿題に答えが見つかった。

＜
＜
＜
＜

秘密のデート

雪見のレコーディングまで、あと三日。
あれから大人しく過ごしたお陰で喉の調子も元に戻り、ホッと一安心と言ったところだ。

だが、健人は一安心どころか、昨夜から眠れぬまま朝を迎えた。
それもそのはず、今日は健人と当麻のユニット『ＳＰＥＣＩＡＬ ＪＵＮＣＴＩＯＮ』のレコーディングが、雪見より一足先に行なわれるのだ。

「健人くん、全然寝れなかったでしょ。一晩中寝返り打ってたもんね。
体調は大丈夫？朝ご飯、何か食べたい物ある？」

「ごめん、今日は野菜ジュースだけでいいや。
あー、ヤバいっ！心臓が壊れるかも知れない。どうしよう！」

俳優業に関しては常に堂々としていて、決して弱音を吐かない健人だったが、
歌う事に対してだけは未だ自分の中で自信を持ちきれず、イケメン俳優
斎藤健人とは別の人物になってしまってる。
どうしたものかと雪見も思案中。そうだ！いいこと考えた！

「ねぇ、今日の集合って一時だよね？真っ直ぐ車でスタジオ送るから、
これからちょっと出掛けない？」

「え？こんな朝っぱらから、どこ行くの？」

「秘密のデート！」

雪見は半ば強引に健人に身支度させ、自分も準備を整えて車で家を出発した。

「ねぇ、デートったって、どこ行く気してんのさ？まだ七時半でしょ？ヘタな所へ行っちゃうと、通学途中のファンに見つかるよ！」

「大丈夫！絶対見つからないとこだから！」

しばらく車を走らせてるうちに、健人は静かに寝息を立て始める。無理もない。仕事で疲れてたはずなのに、一睡も出来ないで朝を迎えたのだから。

『ちょっとだけ寝ててね。着いたらビックリさせてあげる。レコーディングまでの間、少し気分転換した方がいいよ。』

雪見は街中の、ある地下駐車場へと車を滑り込ませた。

「健人くん、起きて！着いたよ　。」

「うーん…。ここって、どこ？」

まるでどこにでもある、普通の地下駐車場だ。

「確かこっちだったような…。あ、ここだ！健人くん、このエレベーターに乗って！」

雪見に背中を押され、訳も解らずに乗り込む。

すると雪見が手の中の何かをボタンの下にかざし、Ｂ２を押した。

たった一階上っただけでエレベーターのドアが開く。

「着いたよ！」

「え？うそ…。ここ！」

健人の目の前に、薄暗いながらも見覚えのある光景が広がった。

なぜ？と思いながらゆっくり足を進めて降りる。

「だから秘密のデートって言ったでしょ？絶対見つからないって。ねっ！」

なんとそこは、閉店中の『秘密の猫かふぇ』であった！

「えーっと、この辺りに照明のスイッチがあるはずなんだけど…。あ、あった！」

パチッ！と全部のスイッチを入れると、ぱぁーっと空間に明かりが広がった。

「どういう事？なんで閉店中なのに入れるの？」

健人の頭の中は疑問だらけで混乱してる。

そりゃそうだ。雪見に珍しくデートに誘われて、慌ただしく家を出て来たと思ったら、

予想もしてなかった場所に自分が居るのだから…。

「二日前にみずきさんから手紙が届いたの。

改装工事が終ったから、一度お店を見てじっくり考えて、って。

オーナー専用カードキーも入ってた。会った時に返してくれればいいって。

このカードキー以外では、閉店中は直結エレベーターが動かないらしい。

だから、今日は私達だけが入れるの。
ほんとは、来ないでカードを返すつもりだったんだけど…。」

「それって…もう決めたって事？」

「いや、最終的にはこれから見て決める。あと三日だもん、もう心を固めなきゃ。
早く決めて、レコーディングに集中したいの。健人くんもそうでしょ？
さ、時間がもったいないから見て回ろう！
猫ちゃんがいないのは残念だけど、二人の貸し切りデートだよ！」
そう言いながら雪見は健人の手を取って、店の奥へと歩き出した。

「あ、ここ雰囲気変わったね！前はもっと渋い感じだったけど、私の好きな
ナチュラルインテリアに変わってる！
見て見て！こっちには大きなキャットタワーが出来たよ！」

健人たちのお気に入りのコーナーは、壁紙を替えただけでそのまま残されていた。
「あー良かったぁ！ウォーターベッドのスペースはそのままだ！
ここが無くなってたら、どうしようかと思った！」
健人が嬉しそうに、ベッドにダイブする。
「気持ちいいっ！サイコー！！やっぱ、このベッド欲しい！
ねっ、今度の給料出たら二人で買おうよ！これさえあれば、絶対毎日熟睡できるって！」

雪見も健人の隣りにごろごろ転がってゆく。
「そうだね。健人くんって割と眠りが浅いから、このベッドだった

らいいかも。
けど、これいくらすんの？めちゃ高そうだけど。
斎藤健人のお給料と浅香雪見のお給料じゃ、社長と平社員ほどの違いがあるんだからねっ！」
ベッドの上に頬杖を付いた雪見が、健人を覗き込みながら真面目な顔して言う。

「じゃあ俺がプレゼントするよ！っつーか、自分の為に買う！
やっぱ、睡眠不足はイカンわ。頭は回らないし顔もボロボロ！
プロとしてこれじゃダメだなって思った。もっと自分に投資しないとって。」

「えらいっ！さすが斎藤健人！
じゃ私も健人くんに投資したげる！ベッド代一万円！」

「えーっ！一万じゃベッドカバーも買えないよ！まっいいか！」

二人は笑いながらじゃれ合いながら、ベッドの上でいっぱいお喋りをした。
めめとラッキーの事。つぐみの進学の事。しばらく顔を出してない『どんべい』の事ｅｔｃ
このあと控えているレコーディングの話題には、あえて一切触れずに…。

そのうち健人がまたすやすやと眠り出す。
雪見は「おやすみ。一時間経ったら起こしに来るからね。」とささやきながら
そっと頬にキスをした。

健人を起こさぬよう静かにベッドを降り、身体にジャケットを掛け

てあげる。
それから雪見は一人で、店の奥へ向かってゆっくりと歩き出した。
見て歩くと言うよりも、歩きながら自分の気持ちと対話したかったのだ。

自分の中で、大まかな答えが出ている事はわかってる。
ただ、それが正しい答えなのかを知りたくて、ここへ来た。
雪見は途中にある革張りの大きなソファーに腰掛け、長い時間考え事をしてから
ポン！と膝を叩いて立ち上がる。

「よし！決めたっ！」

健人が眠るベッドまで、誰もいない店内を思いっきり走った。

「健人くん、起きて！お腹空いたからご飯食べに行こうよ！」
中々起きない健人をキスの嵐で起こす。

私の「今」は、この人のために！と思いながら…。

約束

「ごめーん！定休日だった！せっかく健人くんに、私のイチ押しパスタ
ご馳走しようと思ったのにぃ！」

『秘密の猫かふぇ』を出た二人は、健人のレコーディング前に腹ごしらえしようと、
雪見の行きつけカフェにやって来た。
が、月に一度しかない定休日が、運悪く今日だったのだ。

「いいよ、ドライブスルーのハンバーガーで。今はあんまり騒がれたくない気分。
スタジオの近くに、公園の駐車場があったよね？
そこに車止めて、時間までゆき姉と二人でいたい。」

レコーディングスタジオ集合まであと二時間。
またナーバスになってきた健人を、少しでもリラックスさせて送り出すのが私の使命！
今日はなんでも健人の言う事を聞いてあげよう。

「よし！じゃあ私はベーコンレタスバーガーにしよーっと！」
ドライブスルーで昼食を買い込み、スタジオ近くの公園駐車場に車を止める。

「たまにはこんなデートもいいね。一緒に暮らし出してから、どっかに出掛けるってめったに無くなったもん。二人で旅行とか、行きたいなぁー！」
雪見がハンバーガーを頬張りながら、あれこれ健人に話しかける。

だが健人は口数も少なく、スモークガラス越しのグレーの景色を眺めるばかり。

『そっとしておいた方が良さそうかな…。』

そう思いながら雪見はコーヒーを飲み、外に目をやる。

と突然、「あ、猫！」と健人が一言。

「うそっ！どこどこ！？」

「あそこ。」健人の指差す方には、確かに白い猫がいた。

しかし、猫と言う言葉はこんな時、言ってはいけないＮＧワードだ。

雪見のカメラマンスイッチをＯＮにしてしまい、健人の事など忘れ去られるに決まってる。

案の定、次の瞬間にはすでに鞄からカメラを取り出し、ドアを開けて飛び出して行った。

雪見が真剣な顔でシャッターを切る様子を、車の窓越しに眺める健人。

今にもまた寝転がりそうな勢いで、見てる方がヒヤヒヤしてくる。

すると猫の前にしゃがみ込んだ雪見が、健人に向かって手招きをした。

キャップを目深に被り、辺りをうかがって車の外に出る。

「見て！この子、もうすぐお母さんになるんだよ！」

見ると白猫のお腹は、はち切れんばかりに膨らんでる。

「ほんとだ！全然逃げない人懐っこい猫だね。」

「子供が出来てから捨てられた猫だよ、きっと。可哀想に…。」

よく見ると確かに、ずっと野良猫だったという毛並みではない。

「元気な赤ちゃんを産むんだよ。」

雪見は涙を浮かべ、いつまでも白猫の頭を撫で続ける。

気持ち良さそうに撫でられた後、その猫は満足したように歩き出した。

「連れて帰りたかったでしょ。」健人が猫を見送りながら雪見に聞く。

「仕方ないよ。うちのマンション、動物は二匹までの決まりだから…。」

撮影旅行中も、こんな猫には時々出会う。

その度に人間の身勝手さに怒り悲しみ、それと同時に何も出来ぬ自分が嫌になる。

「はぁぁ…。」雪見がしゃがんだままため息をついた時、健人がぽつりと背中から言った。

「やりなよ。」

「えっ？」

雪見には健人が何を言っているのか、すぐには解らなかった。

「猫かふぇのオーナー、やってみれば？」

健人の言葉に驚いて雪見は立ち上がり、振り向いて顔を見つめる。

眼鏡の奥の瞳はいつも通りに優しかった。

が雪見には、その瞳が嘘をついてるようにも思えた。

「だって店の資金は全部、今のオーナーが出してくれるんでしょ？基本方針さえ守れば、あとはゆき姉の好きなようにやっていい、って言ってくれてるんだから。
自分の思うようにやってみればいいじゃん。」

「だめ…。今はまだできない…。」

「なんで？ゆき姉の夢がすぐに実現するんだよ？こんなチャンスないだろ！」
健人は少しいらついたように大きな声を出してしまい、何人かの人が振り向いた。

「ごめん。とにかく車に乗って話そう。」

車に乗ってはみたものの、健人は黙り込んでいる。
雪見は、レコーディング前に健人の精神状態を悪くしてしまった事を後悔した。
時間も無い。きちんと自分の気持ちを話して、健人を落ち着かせなくては…。

「健人くん。私の正直な気持ちを聞いて。確かに、こんなチャンスは二度と無いと思う。
私の夢を実現するのに、一番大変なのは資金の調達だから。
今この話を受けたら、そんな苦労も無く夢が実現する。
でもね…。こんな話を今するのは不謹慎だけど、現実問題として赤の他人の遺産で
私の夢を実現するって事でしょ？
私が孫であるとか親族なら、有り難く遺志を継ぐ。
だけど私は、みずきさんのただの知人。オーナーとは縁もゆかりもない。

そんな私が後を継いで、自分の夢を実現するって言うのは違うと思うの。」

しばらくの沈黙の後、健人がやっと口を開いた。
「でも…。オーナーに残された時間は少ないんだよ。みずきが他の人を捜してる時間なんて、あるかな…。」

「そうだね…。難しいかも知れないし、反対に思いっきり簡単かも知れない。
猫好きなんていくらでもいるし、あなたをオーナーにしてあげます！なんて言ったら、二つ返事で引き受ける人は大勢いるのかも…。」

「そうだよね。そんな夢みたいな話、そうそう無いもんね。
じゃあ、ゆき姉が断ったって、そんなに困らないか！
良かった…。本当は引き受けるんじゃないかと思ってた。
そしたらゆき姉とは、すれ違いの生活になっちゃうのかな、って…。」
健人の顔に、少しずつ笑顔が戻ってきたようだ。

「私、やるなんて一度でも言ったっけ？最初から心は決まってたよ。
今の私は、健人くんのためだけに生きる、って…。
健人くんが毎日仕事を頑張れるように、美味しい料理を作って疲れを癒やしてあげるのが
私の仕事だなって。ちゃーんとそばに居るから、安心して。」
そう言って雪見はにっこり微笑んだ。

「ほんとだね？俺のそばにずっといてよ！」

「うん！約束！あ、でも、まずは今日のレコーディング、頑張ってよねっ！

私が大好きなイケメン俳優斎藤健人は、仕事に関してはいつも完璧にこなすんだから。」

「よっしゃ！任せといて！なんか、今ならめちゃめちゃ上手く歌える気がしてきた！
じゃ、最後まで頑張れるおまじないして！」
また雪見にだけ見せる甘えた顔で、子供みたいにおねだりをした。

「しょーがないなぁ！」
そんな顔してこっちを見られたら、キスするしかないじゃない。
雪見は健人の耳元で「だーい好きっ！」とささやいたあと、長い長いキスをした。

大丈夫。どんな時でも自分の力を信じて。

さぁ、新しい世界の扉を開けに、行ってらっしゃい！

ＳＪ誕生！

「今日の夜は遅くなると思うから、晩飯はいらないよ。久しぶりにゆき姉も、のんびりしなよ。じゃ、行って来るね。」

「ほんとに送らなくていいの？」

「そこの信号一個渡るだけだよ？歩いて行くから大丈夫！」

集合時間よりも三十分早く、気合い充分の健人が車を降りて歩き出す。

信号の手前でチラッと後ろを振り返り、笑顔で小さく雪見に手を振った。

雪見も手を振り返したが、スモークガラスの向こうからでは、見えはしなかっただろう。

『ゆき姉のおまじないは良く効くんだから！頑張れ、健人！』

心の中でエールを送り、成功を祈る。

「さてと。私もちょっと早いけど、最後のレッスンに行きますか！」

車のエンジンを掛けようとした時だった。

またさっきの白猫が、どこからともなく現れた。

きっとお腹を空かしているのだろう。ウロウロと辺りを物色し始める。

可哀想に思った雪見は、近くのコンビニから猫缶を買って来て、人目の付かない木陰にそっと置く。

「少しでも栄養つけて、元気な赤ちゃん生まなくっちゃね。」

そう言いながらも、このまま置いて行かなければならない事に、罪悪感を覚えた。

「どうしよう…。うちの母さんに頼み込んでみようかな…。」
実家には、すでに五匹の拾われて来た猫がいた。もちろん全て雪見が拾った猫である。
『一匹プラス四、五匹だもんなぁ…。怒られるに決まってるけど、泣き落としに出るか！』

ケータイを握り締め、意を決して実家の母に電話しようと思ったその時だった。
手の中のケータイが突然、着信を伝えて鳴り出した。

「えっ？健人くんからだ！」
何かアクシデントでもあったのかと、ドキドキしながら電話に出る。
「もしもし、健人くん？どうしたの？何かあったの？」
「ゆき姉、今どこ？もうレッスン行っちゃった？」
「え？いや、まださっきの駐車場だけど…。でも、もう出ようと思ったとこ。何なの？」
「良かったぁ！今、今野さんに代わるね！今野さん、ゆき姉まだそこにいるって！」

「もしもし、雪見ちゃん？今野だけど。
悪いけど、大至急カメラ持ってスタジオに来てもらえないか？
全国ツアーでやる写真展に、急遽健人たちのレコーディング風景も入れようって話になってさ。
これから雪見ちゃんに、写してもらいたいんだけど。
あ、レッスンの方は俺から電話入れておくからさ、なんとか頼むよ！」
「えぇ、まぁいいですけど…。機材は一式車に積んでありますから。わかりました。じゃあ、これからそっちに伺います。」

「助かったぁ！待ってるよ！じゃ！」

電話を切ってから足元を見ると、すでに白猫の姿は消えていた。

『ごめんね、猫ちゃん。この次会う時まで、どこかで元気にしててね…。

よし、気持ちを切り替えなくちゃ！健人くんと当麻くんのために仕事、仕事！』

雪見は後ろ髪を引かれながらも車に乗り込み、気持ちを立て直す。

他の事に気を取られていては、良い仕事など出来るはずもない。

自分に葉っぱをかけてから、アクセルを踏み込んだ。

その録音スタジオは、閑静な高級住宅街の一角にある。

三階建ての大きな住宅といった外観だ。

一階部分の駐車場に車を止め、機材を担いで階段を上る。

厚い防音ドアを押し開けると、大きな音で健人たちの歌が流れていた。

「あのぅ…。お疲れ様です！浅香ですけど！」

大音響に阻まれて、誰も雪見に気が付いてくれない。

今野の後ろ姿が見えたので肩をトンッ！と叩いたら、とんでもなく驚かれた。

「びっくりしたぁ！いや、悪かったね！急に呼び出して。

でも助かったよ！健人に聞いたら、ちょっと前まで一緒にいたって言うから…。」

今野が雪見の耳元で大声で話す。

「私も良かったです！まだ近くにいて。それで写真は…。」
と、雪見も大声で話しかけたところで、ぱったりと大音響が鳴りやんだ。
するとガラスの向こうのレコーディングブースから、健人と当麻がドアを開けて出て来た。

「よっ！ゆき姉！元気だった？」
当麻が手を上げながら雪見に近寄ってくる。
その隣で健人は、思いがけない再会が嬉しくて仕方ない、というように微笑んでいた。

「うん、元気だったよ！いよいよだね、おめでとう！
今日は記念になる、いい写真撮ってあげるからねっ！期待してて。」
雪見も三日後にはここでレコーディングするのだが、今はカメラマンモードに入ってるので、
そんな事は一つも気にならなかった。

「雪見ちゃん！みんなに紹介するから、こっちに来て！」
今野からお呼びが掛かり、雪見は緊張の面持ちでレコーディングスタッフの前に立つ。
当麻のラジオ番組のプロデューサーであり、今回のプロデューサーでもある三上が
こっちを見ながらニコニコしてたので、雪見はぺこりと頭を下げた。

「さっき話した、三日後にお世話になる、うちの事務所の浅香雪見です。
今日は健人たちのカメラマンとして、ここで仕事させてもらいますんで
どうかよろしく！」
今野に紹介されて、雪見はみんなにお辞儀する。

「浅香雪見と言います。今日はみなさんのお邪魔にならないよう、気を付けますので
どうかよろしくお願いします！」

すると三上が、他のスタッフに向かって大声で言った。
「お前ら、雪見ちゃんをただのカメラマンだと思ったら大間違いだぞ！
歌を聴いたらびっくりするから！来年の俺の一押しアーティストだ！」

三上の大賛辞に雪見は「三上さん！ハードル上げないで下さいよ、もう！」と恐縮し、
当麻と健人は「えーっ！俺らは押してくれないんすかぁ？」と笑いながら慌ててみせたので
みんながドッと湧き、場の空気が一気に和んだ。

「よし！じゃあ、そろそろ始めるとするか！」
三上の号令でそれぞれが配置に付く。
健人と当麻も再びブースに入り、ヘッドフォンを付けマイクの前に立った。
雪見は長い髪を手早く一つにまとめ、カメラバッグからカメラを取り出し、
ガラス越しの二人に向ける。

健人の顔はいつになく自信に満ち溢れていた。
一睡も出来なかったほどに弱気だった健人は、一体何だったのだろう。
今はいつも通り冷静で、堂々とした瞳で前を見据えている。
一方当麻に至っては、嬉しくて楽しくて仕方ない！と言った気持ち

が、
カメラのファインダー越しにビンビン伝わってくる。
雪見は、この空気感丸ごとを写し込もうと、プロの鋭い目で瞬時に構図を計算した。

アップテンポでダンサブルなイントロが流れ、二人が歌い出す。

『ＳＰＥＣＩＡＬ　ＪＵＮＣＴＩＯＮ』（スペシャル　ジャンクション）誕生の瞬間に立ち会えた事を感謝し、
雪見は心の中で拍手を送った。

昔の夢の実現

「ただいまぁ！ゆき姉、もう寝ちゃったのぉ？」
レコーディングを無事終えた健人は、上機嫌で打ち上げからご帰還だ。
時計の針は午前三時を示してる。もちろん雪見は眠ってた。

「ねぇ、聞いて聞いて！三上さんが俺のこと、めちゃめちゃ褒めてくれたよ！
忙しいのに良くここまで練習して上手くなったな！って。
当麻と対等になったって言われたのが、スッゲー嬉しかった！ねぇ、聞いてる？」

相当嬉しかったのだろう。
酔ってハイテンションな健人は、雪見の寝ているベッドサイドに腰掛けて、
一人であれこれ喋りまくってる。
が、一度眠りに落ちたら多少の事では起きない雪見には、すべてが夢の中の話に聞こえてた。

「起きてよぉ！みんな、ゆき姉の事も褒めてたよ！
美人だし仕事も出来るし歌も上手いなんて、健人の彼女にはもったいない！
とか言われちゃってさぁ。
で、料理もプロ級に美味いよ！って自慢したら、みんなにボコボコにされたし！
ゆき姉がレコーディングに来るの、楽しみだって言ってたよ！良かったねっ！」

夢うつつに聞いてた雪見だったが、これにはさすがに飛び起きた。
「今、なんて言ったの？健人の彼女がどうのこうのって、聞こえた気がしたんだけど…。」

「ゆき姉、会いたかったよぉ！」
酔っぱらいの健人が、やっと起きてくれた雪見にガシッ！と抱き付いた。

「ちょっとぉ！どんだけ飲んだのよ！ほんとに私達の事、みんなに喋っちゃったわけぇ！？」
抱き付いたまま離れない健人に、「嘘でしょ！？」と雪見が叫ぶ。

「嘘じゃないじゃん！だってみんな、ゆき姉が帰ったあと、綺麗なカメラマンだったとか、
次に会うのが楽しみとか言ってるんだよ？
『俺の彼女だから！』って言っとかないと、危なくて仕方ない！」

「はぁぁ…。どんな顔してレコーディング行けばいいのよ、まったく…。
取りあえず、今日はもう寝るよ！ほら、ジャケット脱いで！」

雪見に身体を預けた健人は、もう半ば目を閉じている。
無事レコーディングをクリアした達成感と、大好きな人の待つ家に帰って来た安堵感は、
健人に安らかな眠りを提供してくれるだろう。

雪見の隣りに身体を横たえた健人は、可愛い顔してすでに寝入ってる。
そっと頬にキスをして、今日の頑張りを褒めてあげよう。
「おやすみ、健人くん。愛してる。」

そして三日後。いよいよ雪見の番がやって来た！

「はぁぁ…、どうしよう。緊張しすぎて、今までどんな歌い方してたのか、わかんない。」

朝早くに目覚めた雪見はすでにドキドキがマックスで、健人が入れたコーヒーを
何杯もがぶ飲みした。

「ゆき姉、落ち着きなよ。レコーディングはお昼からでしょ？
今からそんなんで、どうすんのさ！」

健人は自分の時の事など綺麗さっぱり忘れた様子で、朝食のサンドイッチを頬張っている。

「健人くんはいいよねぇ！もう終ったんだもん。
レコーディングでこうなんだよ？全国ツアーなんてどうなっちゃうの？
私、心臓が爆発して、死んじゃうかもしれない。」

健人は半分、雪見の話を聞き流していた。いつも初めての時はこうなのだ。
グラビア撮影に記者会見、当麻のラジオ出演だって最初は大騒ぎだった。
しかし、一旦開き直ると雪見という人は、とてつもない力を発揮できる事を、
健人は経験上よく知っている。

「はいはい！もし心臓が破裂したら、俺が拾い集めて縫ってあげる

から。
安心して爆発させなさい！
そんな事より、今日は猫かふぇのオーナーの面会に行く日だろ？
みずきとは何時に待ち合わせてんの？」

「みずきさん、今日は仕事ないらしいから、私のレコーディングが終ったら
連絡することになってるの。
けど、あんまり遅くに病院行くわけにはいかないし…。」

「明日じゃダメなの？時間気にしながらのレコーディングって、嫌じゃない？」

「私もそう思ったんだけど…。でも、どうしても今日会いたいらしい。
特別室に入ってるから何時になっても構わない、って…。」
雪見が少し憂鬱そうな顔をして、時計をチラッと見た。

「健人くん、もうそろそろ準備しないと。今日は晩ご飯、作れそうもないからごめんね。」

「いいよ。俺の事は気にしないで。納得行くまで歌って、納得行くまでみずきと話し合ってきて。
夜は事務所で当麻とＳＪの取材があるから、終ったら一緒に晩飯喰いに行くわ。
なんかあったら必ずメールしてよ！」

健人は仕事に出掛ける間際、玄関先でブーツを履きながらもう一度念を押す。
「なんかあったら、絶対にメールしてね！約束だよ！

レコーディングも、いつも通りに歌えば大丈夫。絶対上手く行く！
じゃ、ゆき姉が頑張れるおまじない。チュッ！行って来ます。」
早朝六時半、健人はロケへと出発した。

健人が出掛けたあとの部屋はシーンとしていて、なんだか寒々しい。
いかに健人が太陽のように温かで、かけがえのない存在なのかがよくわかった。
『そう、今の私は健人くんのために生きていたい。
一生懸命頑張って全国ツアーを成功させて、健人くんに喜んでもらいたい！
今見てる夢の実現なんて、どうでもいいの。』

雪見は自分自身の気持ちを再確認するために、みずきへの答えを声に出してみる。
「ごめんなさい。今はお引き受けできません…。」
それでいい。それでいいんだ…。

気を紛らわすため、時間いっぱいまで家中をピカピカに磨き上げる。
「よしっ、片づいた！でも健人くんが帰って来るまでだなっ。」
一人きりでクスクス笑ったら、なんだかすっきりした。

「さーてとっ！準備して、いよいよ出陣と行きますか！」
レコーディングスタッフに、健人の彼女だとバレてしまったからには、
健人にふさわしいと思われるよう、綺麗にして行かなくては！
雪見は久々に気合いを入れて準備した。
だが、あくまでも自分らしくナチュラルに、『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ;』のイメージを損なわぬよう。

「これで健人くんの彼女として、恥ずかしくないかな?」
何度も玄関の鏡の前でクルクル回ってチェックをし、「ＯＫ!行って来まーす!」と
め達に声を掛けて出発する。

ドキドキはしていても、決して逃げ出したくなるようなドキドキではない。
むしろ、遠い昔に離ればなれになった幼なじみに、再会でもしに行くかのような、
嬉しさと照れくささの入り交じったドキドキ感である。

子供の頃に見てた夢。『歌手になりたい!』
それが今日、思いがけずに実現する。

さぁ!はるか遠くに忘れた夢を、勇気を出して取りに戻ろう!

YUKIMI&誕生！

「今日はどうかよろしくお願いします！」

マネージャー今野の車でスタジオに到着した雪見は、これからお世話になるスタッフ達に
真っ先に頭を下げて挨拶をした。
しかし、健人の彼女だという目で見られてるのが、空気を通して伝わってきたので、
恥ずかしさから伏し目がちになってしまう。

「こちらこそよろしく！あ、差し入れ頂いて済みませんね！後でみんなでご馳走になります。
今日はレコーディング、楽しんで下さいね。子供の頃の夢だったんでしょ？」

「えっ！？」

「こないだの打ち上げで、健人が力説してましたよ！『ゆき姉の夢は俺の夢だ！』って。
どんだけあなたの話を聞かされたことか！あいつがあんなに熱い奴だったとは意外でした。」
顔から火を噴くとはこの事だ。
「葉山さん」と今野が呼んだ三上の次に偉そうな人物の、着いて早々の先制攻撃に、
足元がふらつきそうになる。

「本当にごめんなさい！ご迷惑かけました！」
自分でも、何を謝っているのかよく解らなかったが、頭を下げた。

とにかくそれしか言葉が出てこなかったのだ。
隣の今野が雪見の肩をポン！と叩き、笑いをかみ殺してる。早く帰りたーい！

「じゃ、早速ウォーミングアップ代りに、さらっと歌ってみようか！」

「は、はいっ！」
ここから一刻も早く立ち去るには、とにかく完璧に歌ってＯＫをもらい
レコーディングを終了させるしかない！
出来ることなら録り直しなどせずに、一回で終らせたいくらいだ。
一生に一度しかない体験を楽しもう！などという当初の思いは、とうの昔に吹き飛んだ。
よーし！レコーディング最短記録で終らせてやる！

おかしな切っ掛けが、思わぬ集中力を生み出した。
雪見はウォーミングアップの声出しにもかかわらず、完璧な歌を披露する。
初めて雪見の歌を聴いたスタッフ一同は、思わず顔を見合わせた。

「三上さんの言ってた通りだ！こりゃ凄いＣＤになりそうだぞ！もしかして、もう本番いってもいいぐらい？」

「ええ、大丈夫だと思います。どうせ私の歌なんて、こんなもんですから。」
間違っても早く帰りたいから、なんて事は言えなかった。
だが実際、数多く歌ったからといって、いい歌になるわけでもない。
それよりも、たった一回の歌にすべての気持ちを込めて歌ったならば、

それが一番聴く人の心に響く歌になるのではなかろうか。

「じゃあ、取りあえずはいってみよう！
もし失敗したとしても、何回でも録り直すから安心して歌って。本番いきまーす！」

シーンと静まり返った一人きりの空間。
『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ；』のデビュー曲、『君のとなりに』のイントロがヘッドフォンの中に流れ出す。
目を閉じて、この曲に歌詞を付けた時の気持ちを思い出していた。
大切な二人を想って作った詩。あの時よりも今の方が、もっともっと強く想ってる。
そう！大切な健人と当麻のために、私は歌おう！

「ふぅぅ…。」
全身全霊をかけて歌い切ったら、魂が抜けたかのように身体の力も抜けた。

「ＯＫでーす！素晴らしかったよ！少し休憩挟んでもう一回録ってみよう。こっちに来て休んで！」

「あ、はい！」
何度録り直しても今以上の歌は歌えないと思ったが、もし万が一、機材のトラブルか何かがあっても困るので、一回で終らせるのは諦めて素直に歌う事にしよう。

重い扉を押し開けてブースを出ると、期せずしてスタッフの間から

拍手が起こった。
迎える今野もニコニコしてる。

「いやぁ、仕事を忘れて聞き入ったよ！久々に感動する歌に出会えた。
詞は君が書いたんだろ？特に二番の歌詞がいい！

『夢は強く願えば叶うから　こわがらないで目をとじて
君のまぶたにうつった景色を　どうか忘れないでいて
いつか同じ景色が見えたなら　ためらわないで手を伸ばそう
君の夢は僕の夢　きっといつか叶えてあげる　記念の写真を二人で写そう
未来は誰にもわからないけど　ひとつ確かに言えるのは　君のとなりに僕がいること
緑の風に二人でふかれて　今より遠くへ飛んで行けたら
きっとつないだ手の中に　夢のかけらが入っているはず』

これって、君と健人の事を歌ってるんだよね？いい歌詞だよ。」

「えっ！？あ、有り難うございます…。」

そんな、改めて歌詞をつらつらと読まれて、健人との仲を突っ込まれても
どんな顔をすればいいわけ？
しかも、仕事を忘れて聞き入ったって、だから録り直すんじゃないでしょうね？

みんなが、イケメンアイドル俳優と、一回りも年上のカメラマンとの恋愛に興味津々で、
あれこれ聞きたくてウズウズしてる感が漂ってる。

マジで早く帰ろう！いや、みずきが私の事を待ってるんだった！

「あのぅ、今の感覚を忘れないうちに、すぐ歌わせていただけますか？
あとたった一度でいいんです！それ以上は何回歌っても同じだと思いますから。」

「え？もう歌うの？そんなに慌てなくても時間はたっぷりあるんだよ？」

「いえ、結構です！早く歌いたくて仕方ないんですっ！」
雪見の考えてる事がすぐに解った今野が、またしても肩を震わせて笑ってる。

結局もう一度歌いはしたが、一回目に勝る歌には成り得なかった。
チェックの結果、全てがきちんと録音されていたのでＯＫが出され、雪見の初レコーディングは、呆気ないほど簡単に終了してしまった。

「お疲れ様でした！本当にお世話になりました！有り難うございます。
後の作業も、どうかよろしくお願いします！」
深々と頭を下げたあとは長居は無用！そそくさとスタジオを退散しよう。

「うーん！終ったぁ～！」
外に出て深呼吸をし開放感に浸ると、急にお腹が減ってきた。

「今野さん、これからご飯行きません？早く終ったことだし。」

「雪見ちゃんの集中力には恐れ入ったよ！うちの事務所の最短レコーディング記録だ。
けどそのお陰で、健人のロケに直行しろ！って常務からの指令が入っちゃった。
健人にも伝えておくよ。無事にゆき姉のレコーディングも終了したよって。
送れないけど気を付けて帰って。じゃ、お疲れ様！」

今野を見送ったあと、歩いてて見つけた可愛いカフェに入り、ひとりご飯。
エネルギー補給が完了したところで、みずきに連絡する。

「あ、もしもし、みずきさん？予定より早くレコーディング終ったよ。
もういつでも病院に行けるけど。うん、わかった。じゃ、ロビーで待ってる。」

いよいよ本日二つめの難関に立ち向かう。

今の私にブレはない。

夢を持つことの意義

みずきから送られてきたメールの病院名を告げ、タクシーに一人乗る。
途中で花屋さんに寄ってもらい、まだ正体を知らぬ大物俳優のために大きな花束を作ってもらった。
再びタクシーに乗り込み、窓の外を流れる景色を眺める。
街は、あと十日ほどで十二月が到来することを前提に彩られていた。

車が進むにしたがい、次第に不安が押し寄せて来る。
『ごめんなさい。今はお引き受けできません…。今はお引き受け出来ません…。』
心の中で呪文の練習をするかのように、何度も繰り返してみた。

『大丈夫、ちゃんと言えるから…。大丈夫、落ち着け、雪見！』
本当は自分が怖かった。命のカウントダウンが始まった人を目の前にしたら、
自分が違う事を言い出すのではないか、と…。
自分の意志を押し通せる状況に無い場合、私はどうするのが正解なのだろう。
答えは出ていたはずなのに。健人のそばにずっといるって約束したのに…。

段々と病院が近づくにつれ、雪見の心は反対に離れたがっている。
こんな事なら、もっと時間をかけてレコーディングしてくればよかった。今更ながらの後悔。

「着きましたよ！」無情な運転手の声でタクシーを降りる。

目の前には、大きな病院が立ちはだかっていた。

すでに診療時間の過ぎた、土曜日午後の病院ロビーは閑散としていて、

面会に来た家族と患者、あるいは入院中の彼女を見舞いに来た彼氏と彼女、

というような人達が数名、束の間のおしゃべりを楽しんでいる。

雪見も隅っこにあるベンチに腰掛け、みずきに『今ロビーについたよ。』とメールした。

すぐに、『今行くから。』との返事がある。

みずきは朝から、オーナーの病室にいたらしい。

程なくして、みずきがエレベーターから降りて、微笑みながら雪見の前にやって来た。

「お疲れ様！随分と早くに終ったのね！ビックリしちゃった。」

「うん！私って短期集中型なの。あ、これオーナーにお見舞い。ここの病院、お花は大丈夫だった？今、お花を持ち込めない病院も多いから…。」

不安げにおずおずと差し出したが、みずきは笑顔で受け取った。

「ありがとう！綺麗なお花！オーナーの部屋は特別室だから、何でも有りなのよ。

さっそく飾らせてもらうわね！じゃ、行こう。」

と、みずきがエレベーターに向かって歩き出そうとした時、横から声が掛かった。

「あのぅ…、華浦みずきさん…ですよね？私ファンなんです！サインもらえますか？」

見ると、さっきロビーで彼氏らしき人と楽しそうにお喋りしてた、若い女の子だった。
どうやら雪見の手渡した大きな花束が、えらくみずきを目立たせてしまったらしい。

つぐみと同年代ぐらいに見えるその子は、パジャマの襟元からのぞく肌が抜けるように白く
はかなげだが、なぜか髪が巻き髪で、パジャマ姿には不釣り合いなキャスケットを被っている。

「こんなのしかなくてごめんなさい！」
そう言いながら彼女が差し出したのは、薬の入った袋とボールペンだ。

「ここに小さくていいです。サインと一言、頑張れ！って書いてもらえれば…。
そしたらこれを見ながら、まだまだ治療を頑張っちゃいます！」
可愛くガッツポーズをした。

「いいですよ。お名前は？あ、袋の表に書いてあるよね。え？なんて読むの、これ？」

「読めないですよね！一つの夢って書いて、そのまんま『ひとむ』って読むんですけど。
田中一夢って言います。男の子の名前みたいですよね。
けど親が、一つの夢に向かって生きて行くようにって付けたらしくて、
今頃やっと自分の名前が好きになったとこです。」

「そう！素敵なお名前ね！あなたの夢はなに？」

雪見に花束を持ってもらい、近くの壁に薬袋を押し当てサインをしながら彼女に聞いた。

「優しいけど時々怒る看護師さん！ワガママばっかり言う弱気な患者を、本当のお姉ちゃんみたいに、絶妙なタイミングで叱れる看護師になりたい！

私の担当の看護師さんが、まさしくそんな人なんです。

だから私、ここまで頑張ってこられた。癌なんですけどねっ。」

彼女は笑っていた。向日葵のように輝く笑顔で。

「なれるわよ！あなたなら、きっとなれる！応援してるから頑張ってね。

あ、けどこの袋、間違って捨てちゃわないでよ！」

そう笑いながら彼女に返した袋には、『一夢さんへ　強く願えば夢は叶う！』

と書いてあり、みずきのサインと今日の日付が入れてあった。

「雪見さん、お花何本かもらってもいい？」

「もちろん！」

雪見が差し出した花束から、みずきは彼女に似合いそうな花を五、六本引き抜き、

「はい！私からのお見舞い！って、本当はこっちのお姉さんからもらったお花なんだけど。

あ、いいこと教えてあげる！このお姉さん、これからデビューするアーティストなの！

すっごく素敵な歌を歌う人だから、よく覚えておいてね！」

いきなりみずきに紹介されて、雪見は慌てた。

「えーっ！そうなんですかぁ！？どうりで綺麗な人だと思ったんだぁ！

あの、サインもらってもいいですか？」

彼女は二人ともが芸能人だと解って、えらくテンションが上がってる。

柱の陰でコソコソやってたのだが、徐々に人の集まる気配がしてきた。

雪見の事は誰も知らないが、みずきの事は誰もが知ってる。早くこの場を立ち去らなくては。

「あー、ごめんなさいっ！まだサインの練習してなくて。

浅香雪見って言います。もし良かったら応援して下さいね！じゃ、お大事に！」

最後に急いでみずきが握手をし、足早にエレベーターに飛び乗った。

「ふぅぅ…。危うく騒ぎになるとこだった！

ごめんね！雪見さんの歌の歌詞、勝手に彼女に書いちゃった。頭に浮かんできたから…。」

「いえいえ、光栄です！」

「抗癌剤で髪が抜けちゃったのね、彼女。だからかつらに帽子被って…。

一番おしゃれを楽しみたい年頃だものね。

でも、彼女の明るい前向きさがあれば、きっと乗り越えてくれると思う。

夢に向かって生きるって、大切な事だよね…。」

そう言ったあと、みずきは急に黙り込んだ。

みずきが何を言いたいのかを、その沈黙の余韻の中から雪見は感じ

取る。
上へ上へと上るエレベーターの中、二人はそれ以上何も語らなかった。

「チン！じゅうにかいです」機械的な音声が響き、扉が開く。

「着いたよ。オーナーが待ってる。行こう。」
みずきがスタスタと、病室に向かって足を進めた。
その後ろを、重い足取りの雪見が背中を見つめる。

と、鞄の中のケータイが、音の無いままブルブルと震え出した。
見るとそれは健人からのメール。
今、ここで見るわけにはいかない。心がぐらついてしまう。
雪見はケータイを開きもせずに、また鞄に押し込んだ。

この扉の向こうに待ってる人は、一体誰なの？

オーナーとの対面

「オーナー！雪見さんが来てくれましたよ！綺麗なお花を頂きました。
雪見さん、そんな所に立ってないで中に入って！どうぞ！」

ドキドキして足がなかなか前へ進まない。
一歩また一歩と恐る恐るベッドに近付き、横たわる顔を見て「あっ！」
と小さく声を上げてしまった。
そこにいたのは日本を代表する往年の名優、宇都宮勇治であった！

「し、失礼いたしました！私、フリーカメラマンの浅香雪見と申します！」
雪見は非礼を詫び、最敬礼で頭を下げる。
すると宇都宮はかすれた声で、「フリーカメラマンだと？」と弱々しく言った。

「あぁ、心配しないで下さい、オーナー。雪見さんは猫専門のカメラマンですから。
決して週刊誌なんかの、スキャンダルを追いかけるフリーカメラマンとは違いますよ！
ごめんなさいね、雪見さん。結構そういうカメラマンが、スクープ狙いにウロウロしてるの。」
みずきが申し訳なさそうに微笑んだ。

「私の方こそごめんなさい！あまりにも驚いてしまって…。
私なんかがお会い出来るような方じゃないから。もう一度、きちんとご挨拶させて下さい。

わたくし、全国の野良猫を写して歩いてる、カメラマンの浅香雪見と申します。
『秘密の猫かふぇ』には、知人の紹介で会員にならせていただきました。
本当に素晴らしいお店で、いつも利用させて頂いております。
あ、これ、今までに私が出版した猫の写真集です。
もしよろしければ、体調の良い時にでもご覧になって頂けますか？」
そう言って雪見は、鞄の中から取り出した七冊の写真集をみずきに手渡した。

「ええっ！これ全部くれるの？ありがとう！
オーナー、良かったですねっ！あとでゆっくり見ましょうね。
じゃ私、このお花がしおれないうちに花瓶に生けて来ますから。
雪見さん、立ってないでこの椅子に座って！」
みずきはベッドの横に椅子を置くと、花束を抱えて病室を出て行った。

二人きりの静まり返った部屋。

雪見は、オーナーが何か話しかけてくるのを緊張の面持ちで待ったが、
一向にその気配がない。
『私から何か話しかけなきゃ…。』
そうは思うものの、何を話せば良いのやら。早くみずきが戻ってくれる事を祈る。
と、その時、「見せてくれんか…。」と小さな声で、宇都宮がどこかを指差して言った。

「はい？　あ、もしかして写真集ですか？」
とっさに判断した雪見は、ベッドサイドに積んであった写真集を一

冊手に取り、
宇都宮の視線の先に掲げて見せる。すると彼は、コクンとゆっくりうなずいた。

少し嬉しくなった雪見は、七冊の中から大きな版の一冊を選び、たぶん
老眼であろう宇都宮が見やすそうな距離に、ページを開いて掲げてみた。
ゆっくりと一定の速度でページをめくってゆくが、宇都宮は無表情のままだ。
ところが、あるページに差し掛かったところで「あっ。」と声を漏らした。

雪見が、どの写真だろう?と覗き込むと、京都のお寺の境内で写した三毛猫の写真だった。
「あぁ、これは秋の京都で写した写真です。紅葉の落ち葉が綺麗でしょ?
お寺の境内に住み着いてた猫なんですけど、尻尾をどこかに挟んだのか
くの字に曲がってたんです。
だけど凄く元気な子で、カサカサ音がする落ち葉を、楽しそうに蹴散らして走り回ってました。」
猫の話をするとき、猫好きはみな笑顔になり饒舌になる。
雪見もすっかり心がほぐれて、その時の様子を昨日の光景のように喜んで話して聞かせた。
すると、あろう事か宇都宮がはっきりとした声で、「うちの猫。」と言うではないか!

「えっ!?うちの猫?」
雪見は自分の聞き間違えかとも思った。

だが宇都宮が言うには、寺の境内で保護して家に連れて来たが、一ヶ月ほどで
また寺に戻ってしまった猫らしい。

聞けば晩年、宇都宮は京都に終の棲家を構え、仕事のある時だけ上京していたそうだ。
京都では、毎日近所の神社仏閣を散歩して歩くのが日課となり、散歩の途中で
尻尾をくの字にケガした三毛猫を保護したそう。
それがこの写真集の中の猫だと言うのだが、真意の程は猫に聞いてみなければ解らない。
雪見自身も、この寺が何と言う名の寺なのかは、すでに記憶にはない。
だが、あんなに喋る事さえも苦痛そうにしていた宇都宮が、この猫を目にした途端、
再会を喜ぶ笑顔も見せながらしっかりと話すのだから、きっとその通りなんだと雪見には思えた。
だとしたら、なんという偶然！なんという巡り合わせ！

雪見は結構こうした偶然を、運命の導きと思うことが多い。
健人と今一緒にいられるのも、真由子の家で偶然目にした写真集のお陰であり、
そこからすべてが始まった。
だから今も…この偶然を運命と感じてしまってる。

もうそろそろ、本題に入らなくてはならないだろう。

「あの…。『秘密の猫かふぇ』のお話なんですが…。」
と言いかけたところでみずきが、花瓶に生けた花とケーキの箱らしき物を持って病室に戻って来た。

「このケーキ、お隣の病室の社長さんに頂いちゃった！
食べきれないほどお見舞いに頂いたんだって。俺を殺す気か？って
怒ってた。」
みずきは花瓶を窓際に置きながら、おかしそうに笑ってる。

「今、コーヒーを入れるねっ！」
そう言いながらコーヒーメーカーのスイッチを押した。
しばらくすると、部屋中にいい香りが漂い始める。

「オーナーはもう飲めないんだけど、コーヒーの香りが大好きでね。
ほら、病室っていかにも病院っぽい匂いがするでしょ？
それが嫌だって、コーヒーの匂いを芳香剤代りにしてるの。
あ、ちゃんと新しいのを落としてるから安心して！」
やたらとみずきが喋りまくるのが気になる。

「あのね、みずきさん。私…『秘密の猫かふぇ』の事、やってみ…。」

「失格だ…。」

「えっ？」
雪見が最後まで話し終らないうちに、宇都宮が失格を告げた。

「失格とは、どういうことでしょうか。私には務まらないと？」
断るつもりで来たはずなのに、なぜか断られて憤慨している自分がいる。

自分でも、自分の気持ちの矛先が見えなくなった…。

最期の芝居

しんとした病室に、コポコポとコーヒーが落ちる音だけが響く。
ここが病院の一室である事を忘れさせる芳しい香り。
この香りのお陰で雪見は、ひどく冷静にいられることに気が付いた。

「ブラックでいい？」　「ええ。」

本当は雪見も健人もブラックコーヒーは飲めないのだが、今はこの冷静さを保つため
あえてブラックで飲もう。気付け薬として…。

大好きな物を飲めない患者の目前で、飲み食いするのは大層気が引けたが
みずきが「気にしないで。」とケーキを頬張るのを見て、雪見もコーヒーにだけは口を付ける。
相変わらず苦い。充分、気付け薬としての役割を全うしてくれた。

「あの…。先ほどの失格とは、どのような意味でしょうか？
正直にお話します。本当は今日、すべてをお断りするつもりでここに来ました。」

「だったらそれでいい。みずきが君に頼み込んだようだが、すまんかったな。」
ベッドの柵越しに宇都宮の顔がある。
さっき雪見と猫の話をした時には、あんなに柔和な顔をしていたのに、
今は無表情に天井を見つめるだけだ。

「でも、さっき気が変わりました。私に『秘密の猫かふぇ』を手伝わせて下さい！」

「雪見さん！」みずきが驚いている。

「お話を聞いて下さい。先日、改装されたお店を拝見させて頂きました。
随所に猫の習性や気持ちを考えた改装がされていて、オーナーは心から
猫に愛情を注いでいらっしゃるのだなと感じました。
それに私とオーナーの夢はよく似てる気がします。
だからみずきさんに、『猫かふぇで夢を実現しないか？』と誘われた時は、
正直言って迷いました。
でも、どう考えてみても、私がオーナーを継ぐというのは違うと思うのです。
継ぐべき人は、他にいるはずです。」
そう言いながら雪見は、静かにみずきの方を見た。

「えっ！？」みずきが微かに動揺している。
避けたい事に対して、お鉢が回ってきそうな風向きに動揺してるのか、
それとも何か違う理由でもあるというのか。

「とにかく。オーナーを引き継ぐという選択肢は、私の中ではすでにありません。
でも、猫たちのために、私に出来ることでお店の手伝いをさせて頂きたいのです。」

「たとえば?」恐る恐るみずきが聞いてきた。

「たとえば、お店の猫たちの写真集を作って、猫のために寄付してくれた人にプレゼントするとか、
すべての猫のポートレートを店内に飾って、新しい飼い主捜しをするとか。
私に出来る事と言ったら写真を撮る事ぐらいしかないけど、それでも何か力になりたいの!」

雪見は、目の前に横たわる人の命の灯火が、あと僅かで消えてしまうことを肌で感じていた。
今日初めて会った人なのに、この人のために何かをしてあげたいと強く思った。
だが、宇都宮の返事は…。

「気持ちだけ、有り難く頂戴しておくよ…。私がこの世から去ってもなお、その思いが変わらなければ、
いつの日か店の猫たちに力を貸してやって欲しい。」

「どうして今じゃ駄目なんですか?私、写真なら仕事の合間にいくらでも写せます!」

「今の君は、猫のためにじゃなくて、この私のために何かをしようと思ってるはずだ。
私が求めている人材は、人のためにではなく、猫のためを一番に考える人材だ。
お客さんを一番に考えるのは接客係だけでいい。
死に行く老いぼれごときに、心を動かしているようでは失格ということ。」
宇都宮に心を見透かされた雪見は、返す言葉を失っていた。

自分の命よりも猫の命が大事。宇都宮の圧倒的な猫への愛に、打ちのめされた。

『私の半端な愛なんて、愛のうちに入らない。そういう事か…。』
自分は猫が大好きなんです！猫に対する愛なら誰にも負けません！
みたいな顔をして
堂々と猫カメラマンを名乗ってたのに、砂粒ほどの愛のカケラしか入ってなかった気さえしてた。

「もう一度、あの猫を見せてくれんか。」うなだれる雪見に宇都宮が声をかける。
雪見は気を取り直し、またさっきの写真集を手に取ると、宇都宮の見やすい角度や
距離を気にしながらページを開いた。

「この猫の事がずっと気になってたんだ…。まさかこんな所で会えるなんてね。
最期に会わせてくれてありがとう。嬉しかったよ…。」
尻尾の曲がった三毛猫を見つめながら、宇都宮は一筋涙を流した。

人生の終演をまもなく迎えようとしているこの名優に、雪見もみずきも
涙をこらえる事など出来なかった…。

「あれで良かったんですか、オーナー。」雪見が帰ったあと、みずきが静かに聞いた。

「二人きりで居るときに、オーナーはやめなさい。
お前こそ、本当にいいのかい？女優業との両立はなかなか大変だぞ？」

「いいんです。覚悟を決めましたから。
まぁ、ほとんどは支配人にお任せしちゃいますけど。
私は猫たちのために、資産の運用さえしっかりとすればいいんですよね？」

「あぁ。あとは支配人に頼んでおくから。
それにいつか、雪見さんはきっとお前を助けてくれるだろう。
人にも猫にも心配りの出来る、優しい彼女のことだ。その時が来たら、必ず手を貸してくれる。
それを今日、この目で確かめられて安心したよ。」

「ごめんなさい、私のわがままでこんな事になって。
もっと早くに私が決断すれば、雪見さんにも迷惑かけずに済んだのに…。」

「今からでも彼女に本当の事を打ち明けて、サポートを頼んだ方がいいんじゃないのか？」
宇都宮が心配そうに、みずきの顔を下から覗き込んだ。

「いいえ、彼女はデビューを控えて、これからが一番大変な時。
彼女の心が読めちゃった以上、甘えるわけにはいかない。
お願いすれば彼女は、自分の気持ちを誤魔化してでも私を助けようとする。
私のせいで、彼との仲を壊したくはないから…。
でも、雪見さんが全てをお見通しだったのかと思って焦ったわ。」

そう言いながら、みずきがクスッと笑った。

「あれはきっと偶然だよ。彼女になら、なんでも話して大丈夫だ。あんな人がお前のそばにいてくれるなら、お父さんは安心してあの世へ行ける…。」

「お願いだから、そんな事は言わないで。もう少し、私のお父さんでいて欲しかった…。」

やせこけた頬に手を伸ばし、泣きながら何度も何度も撫でてみる。この温もりが、一日でも長く感じられますように…。

みずきは、生涯を独身で通した宇都宮の、養子に出した隠し子だった…。

そばにいるから

病院から一歩外は、すでに夕闇に包まれていた。
泣き顔もさほど人目に付かず、雪見にとっては幸いである。

何の考えもなしに歩き出す。どっちの方向に進んでるのかさえ解らない。
今はただ、自分の気持ちを立て直すための時間が必要だった。

どれくらい歩いただろう。ひたすら真っ直ぐ歩いてるうちに、少し落ち着いてきた。
『みずきさん、大丈夫かな。相当参ってるみたいだった…。
無理もないよね。おじいちゃんみたいに慕ってる人が、もうすぐそばから消えちゃうんだもの…。』

みずきと宇都宮の血の繋がりなど知るよしもない雪見は、今日初めて宇都宮に会った自分でさえ
こんなにも悲しいのだから、第二のおじいちゃんと慕うみずきは、どれほど深い悲しみに
包まれているのだろうと、心中を思いやった。
さらに、みずきに対しても猫かふぇに対しても、何もしてやれないという自分の無力さが、
雪見の悲しみに追い打ちをかける。

二人が本当の親子だと知ったら…。

ずっとうつむきながら歩いていて、ふと顔を上げる。

すると交差点の角に突如、ライトアップされた大きな広告看板が、目に飛び込んできた。

『健人くんだ！！』

思わず声を上げそうになる。
それはカメラのＣＭキャラクターを務める健人の、大きな大きな広告塔であった。
カメラを構え、人をドキドキさせる視線でこっちを見て微笑んでいる。
自分の彼氏が、あんなに大きな写真になって街の中に立ってるなんて、
嬉しくて恥ずかしくて不思議な気がした。

『いつ立てたんだろ？こんなの交差点に立てたら、みんな脇見運転して危ないんじゃないの？』
クスッと笑って記念の写メを撮ったら、なんだか本物の健人に会いたくなった。

『今頃事務所で当麻くんと、取材を受けてる真っ最中かな…。』
その時初めて、あっ！と思い出した。
宇都宮の病室に入る前に来た、健人からのメールの事を。

『大変！読まないで鞄に入れたままだった！返信もしないなんて、絶対健人くん心配してる！』
慌てて鞄の中からケータイを取り出し、メールを開く。

ゆき姉、お疲れ！
今野さんに聞いたけど

めちゃめちゃ早業の
レコーディングだった
らしいね（＾。－）
さっすが俺の彼女！
で今頃は、みずきの所
だと思います。

自分の気持ちに正直に

ＢＹ　ＫＥＮＴＯ

健人は、揺れ動く雪見の心の内を知っていた。
本当は誰よりも寂しがり屋で、できることなら２４時間一緒にいたいとさえ思っているのに、
自分の思いよりも愛する人の決断を、受け入れようとしてくれてるのだ。

胸がギュンと音をたてた。
『大丈夫だよ。私はちゃんとそばにいるから…。』
目を見てそう伝えてあげたい。
不安な気持ちにさせてた事を、一刻も早く詫びたかった。

『健人くんに会わなくちゃ！』
そう思った瞬間、雪見はすでにタクシーに手を上げていた。
今ならまだ事務所にいるはず！

「お疲れ様です！あのー、健人くんはまだいますか？」

事務所の受付嬢に、小声で遠慮がちに聞いてみる。

「はい。今、上のレッスンスタジオで、当麻くんと一緒に取材受けてますよ。」

「そうですか！ありがとうございますっ！」雪見の顔にパッと笑顔が広がった。

ひとつ上の階にあるスタジオへと、階段を駆け上がる。
足が勝手に小走りになり、どのスタジオかとひとつずつドアの窓を覗いてまわる。
手前にある五つの小さなスタジオにはいない。
その奥の大きなスタジオには…いた！やっと見つけた！

当麻と二人、グランドピアノに寄りかかって、どうやら写真撮影の最中らしい。
声は聞こえないが、何やら楽しげに二人で笑ってる。
『良かった！いつもの健人くんの笑顔だ！』
なんだかホッとして、全身の力が抜けていくのがわかった。

『終るまで、隣で待ってよう。』
そう思ってその場を離れようとした時、誰かに後ろから肩を叩かれた。
びっくりして振り向くと、そこにはニコニコ顔の常務が立っているではないか！

「小野寺常務！驚かせないでくださいよ、もう！」

「なに、コソコソ覗いてんだ？今野から聞いたよ。
事務所始まって以来の最速で、レコーディング終らせたってな！

あさってはＰＶ撮影だ。健人と当麻は忙しいんだから、今日ぐらいの速さでよろしく！
さてと、飛び込みの仕事だ、ちょっと来い！」

「えっ、えっ！？」

小野寺はそう言ったかと思うと突然雪見の手首をつかみ、スタジオのドアをノックしてあっという間に中へと入ってしまった。

「お疲れ様でーす！あ、失礼、撮影はそのままで！記者さんにお話が…。」

「ゆき姉！」
驚いたのは健人と当麻だ。撮影中にいきなり雪見と常務が現れたのだから。
カメラの存在など一瞬忘れ、二人とも目をまん丸くして雪見を凝視した。

雪見は何が何だかさっぱり訳も解らず、健人たちを取材に来た新聞記者の前に立たされている。
常務が記者と話してるあいだ、雪見はスタジオの奥で撮影している健人と当麻に、
撮影の邪魔をした事を、取りあえず手を合わせて謝った。『ゴ・メ・ン！』

二人の撮影は、程なくして終った。
「お疲れ様でしたぁ！ありがとうございました！」
大きな声で挨拶したあと、雪見に駆け寄って来る。

「どうしたのさ、ゆき姉！オーナーんとこは…。」

「シーッ！」

健人の言葉を雪見が遮る。猫かふぇの話は人前では御法度だ。

その時、常務が雪見の背中を押した。

「よし、メイクを直して撮影だ！お前達も、雪見の取材が終るまで待っててくれ。

この後、軽くＰＶの打ち合わせをするから。」

「えっ？撮影って…。」

どうやら常務が新聞記者に頼み込み、ついでに雪見の取材もお願いしたらしい。

あれよあれよという間に涙ではげ落ちたメイクを直され、ピアノの前に座らされる。

「笑顔でピアノを弾く真似をして下さい！」

「えーっ！真似なんて無理です！本当に弾いちゃいますから！」

三十過ぎの新人アーティストは、どこまでもマイペースだった。

スタジオの隅で、腕組みしながら撮影の様子を見守ってた健人と当麻も、

可笑しくて笑いをこらえるのに必死だ。

みずきやオーナーとの話し合いが、どんな結果になったのかは解らない。

でも、とにかく今は目の前に雪見がいてくれる。

それだけが嬉しくて健人は、ただじっと大好きな人の笑顔を見つめ

続けた。

長い一日の終わりに

「やっと終ったぁ！軽く打ち合わせとか言っといて、結局二時間もかかったじゃん！
俺、腹減って死にそう！早く飯食いに行こう！」
常務やマネージャー連中が出て行った会議室のテーブルに、当麻がぐだっと突っ伏して
悲鳴に近い声を上げた。

「ほんと、今日ＰＶの打ち合わせするなんて、言ってたっけ？
明日って聞いてたけど…。」
健人が訝しげに首を傾げる。

「ごめーん！私のせい！私が突然事務所に顔出したから、常務がついでに今日やっちゃえって…。
しかも取材まで受ける事になるなんて、私も思ってなかったもん！
だって、私服にハゲハゲの化粧だったんだよ？恥ずかしかった！」
雪見の言葉に、当麻がムクッと頭を持ち上げて一言。

「で、誰が悪いの　？」

「はい、私です…。」

三人で大笑いした後、久しぶりに『どんべい』に行こう！と話がまとまりタクシーに乗った。
「めっちゃ久々じゃね？マスター、俺たちの顔忘れてるかも。」

「ほんと、三人で飲みに行くこと自体、久しぶりだよね。

けど、今日って土曜日じゃない？お店混んでそう！
私はいいとして、二人とも気を付けて入ってよ！バレないようにねっ！」

仕事帰りの開放感で、タクシーの中がウキウキしてる。
雪見にとっては、色々あった長い一日の終りに、こうして健人と当麻と一緒にいれる事が
とても嬉しかったし気が晴れた。

それは、ずっと雪見を案じていた健人にしても同じことで、とにかく雪見が
泣いたり落ち込んだりせず、笑顔で隣りにいる事に安堵していた。

当麻に気付かれぬよう、健人がそっと隣りに手を伸ばし、雪見がそこにいる事を
確かめるようにして、ギュッと左手を握り締める。
手のひらに伝わる温もりと、薬指の指輪の固い感触。
一瞬ドキッとした雪見だったが、すぐに健人の目を見てにっこりと微笑んだ。

『大丈夫！私はここにいるよ！』と…。

土曜の夜の『どんべい』は、冗談抜きに混んでいた。
キャップを不自然なくらい目深にかぶりマスクをした二人は、とんでもなく怪しかったが、
満員客たちはそれぞれのお喋りに忙しく、二人のことは幸いにして眼中に無かった。

カウンター内で焼き鳥を焼いてたマスターが、すぐに三人に気付く。
が、平静を装って「おう、いらっしゃい！久しぶりだね！」と一般客と同じ態度で迎え入れ、
『早く部屋に入んな！』と目配せした。

そそくさといつもの部屋に入り、ホッと一息。
キャップを脱いでマスクを外してると、いいタイミングでマスターがビールと焼き鳥を運んで来た。

「ちょっとちょっと！しばらくだったねぇ！三人とも元気そうで何よりだ！
まずは乾杯しよう！今日は俺のおごりだから。」

「何言ってるの、マスター！ちゃんと払うから心配しないで。」

「いや、そうじゃなくて、ＣＤデビュー祝いの前渡し！
デビューしちゃったらさ、今以上忙しくなって益々来れなくなるだろ？
だからちょっと早いけど、今日祝ってやりたいの。
俺さ、もう自分の身内の事みたいに嬉しくて嬉しくて…。」
マスターの目がみるみるうちに潤んで、今にも涙が溢れそうだった。

「やだぁ！マスター、もう相当飲んでるでしょ？まぁ、取りあえず乾杯しよう。カンパーイ！」
雪見の音頭で飲み会がスタートする。

「マスター、こっちこそごめんね。
いっつもお店混んでるのに、いつ来るか解んない俺らのために、この部屋空けといてくれて。」
健人が申し訳なさそうに謝った。

「何言ってんだよ、水くさい！前に約束しただろ？
この部屋は永久に三人の専用部屋なんだから、余計な心配すんなって！
ま、時々俺が二日酔いで仕事サボるのに、使わせてもらってはいるけどね。
じゃ、料理いっぱい用意してくるから、ごゆっくり！
雪見ちゃん、ビールはセルフでお願いな！好きなだけ飲んでいいから。」

「ありがとね、マスター！もし万が一ヒットしたら、恩返しするから！」

「じゃあ、何が何でもヒットしてもらわなくちゃな！」
マスターが高らかに笑いながら、部屋のふすまを閉めた。

「ほんと、いい人だよね、マスターって。いつか必ず恩返ししないとな…。」
健人がそう言いながら、ゴクリゴクリと喉を鳴らしてビールを飲む。

「あー、やっぱ仕事帰りの一杯って最高！
ねぇねぇ、そう言えばさ、レコーディング何回歌ってＯＫ出たの？
今野さんが、最速記録を更新した！って騒いでたから。
俺らなんて、これでもか！ってくらい歌わされたのにさ。」
焼き鳥に手を伸ばしながら、健人が雪見に聞いてきた。

「うーんとね、着いてすぐウォーミングアップに一回でしょ？
そんで本番で二回歌ったかな？それで終った。
今考えたら、人生で一回きりの体験だったのに、あんまり記憶に残

って
ないんだよね。もっと楽しめば良かったかな？
けど私って、最初の歌に全エネルギー注ぎ込んじゃうから、その後は何回歌っても
大した歌にはならないの。だから、まぁいっか！って感じで。」

「そーいうとこ凄いよね、ゆき姉って！豪快というか、何というか…。
こだわらないとこは徹底してこだわらない！みたいな？」

「なにそれ？健人くんだって同じじゃん！
洋服や髪型にはこだわるのに、部屋の片付けには、まーったくこだわらないでしょ！
この前、健人くんのマンション掃除に行ったけど、廃墟寸前だったよ！なんで、あーなるの？
あ、当麻くん、もうビール無いね。今持って来る！」
と、雪見が立ち上がろうとした時、今まで黙っていた当麻が急に口を開いた。

「ところでさ…。」

その言葉で雪見は、当麻が何を言いたいのかをすぐに理解した。
とうとう来たか…と覚悟を決めて座り直す。
きっと当麻はこのセリフのタイミングを、ずっと見計らっていたに違いない。
事務所の中でも、タクシーの中でも…。
健人にしたって、早く聞きたかったに決まってる。
『秘密の猫かふぇ』オーナーとみずきと、そして雪見の間で何が話し合われ、
どう決定が下されたのかを…。

それを充分解っていながらも雪見は、その時を延ばし延ばしにしてきてしまった。

「解ってる。みずきさんとの話し合いの事、聞きたいんでしょ？ビール持って来てからでもいい？ちょっとだけ待ってて。」

冷たいビールを一気に飲み干したら、きちんと話すことにしよう。

そのために健人に会いに来たのだから…。

結果報告飲み会

「お待たせー！焼き鳥だけじゃ、腹の足しにもなんなかったろ。すまんすまん！
お祝いだから、どっさり作って来たぞ！全部喰ってから帰ってくれよ。」
マスターが料理を、雪見がビールを持って戻ってきた。

「どっひゃー！こんなにいっぱい喰わせて、俺らを太らせる気してる？
けど育ち盛りだから、そんなこと気にしないもんねー！
マスター、ありがとう！いっただきまーす！
うっめー！！これ最高！ビールにめちゃ合う！健人も喰ってみ！」

「どれどれ、一口ちょーだい！
ホントだ！マジでヤバイ！ビールがガンガン進んじゃう！
あ、ゆき姉は程々にね。あさってのＰＶ衣装、着れなくなったら困るでしょ？」

「なに、ＰＶって、もしかしてプロモーションビデオのことぉ！？
この雪見ちゃんが、そんなの撮るの？信じらんねぇ！
だってつい何ヶ月か前まで、猫の撮影旅行帰りにすっぴんのボロボロ肌で、
カウンターで飲んでた人だよ？そんな奴がＰＶに出るなんて…。」
マスターはまたしても、ウルウルした瞳で雪見を見てる。

「俺、浅香雪見のファンクラブ会長になっていい？この店で毎日ＰＶ流してお客にＣＤ売るから！」

「はいはい、ありがとね！マスターの気持ちと、このお料理だけは有り難く頂いておくから。
ほら、お客さんが呼んでるよ！行った行った！」

マスターが部屋を出たあと、三人はふぅぅ…とため息をついた。
早く本題に入りたいのに、なかなか先に進まない。

「しばらくは、マスター来ないと思うから。じゃ、今日の話し合いの結果報告。
あのね…。うーんと…。何から話せばいいんだろう…。」
雪見は、オーナーの正体をバラしていいものか困った。
それについては口止めされるでもなく、かと言って話していいとも言われてない。
取りあえず、そこには触れずに話を進めよう。

「結論から言うと、私はオーナーを継ぎません！
て言うか、オーナーから失格宣言を受けちゃった。まぁ、よく考えれば
当り前な話なんだけどねっ！」
雪見が笑いながら、ジョッキを半分ほど一気に流し込む。

「失格宣言って…。どういうこと？なんで向こうから頼んでおきながらそんな…。」
健人が複雑な表情をしてる。何も無かった事になったのは嬉しいが、それと同時に押された失格の烙印。一体自分の彼女の何が駄目だというのか。

「あー、またまた健人くん、そんな顔しちゃって！別にどーってことないの！

健人くん達だって、役のイメージとは少し違うって、オーディションに落ちたことあるでしょ？
それと同じ。ただオーナーが希望する人物じゃなかったってだけのこと。」

雪見があまりにもサバサバとしてるので、「だったらいいけど…。」と健人は言うしかない。
が、当麻は違った。

「じゃ、誰がオーナーを継ぐのさ！みずきが必死に捜してるのに！」

雪見は、本当は自分から断ったとは言えなかった。
相手から断られた事にした方が、波風が立たないと思ったのだが…。

その時、雪見のバッグの中でケータイが鳴り出した。
「え？みずきさんからだ！電話、出てもいい？」
健人と当麻が無言でうなずく。

「もしもし、みずきさん？どうしたの？何かあった？」
雪見は、宇都宮の容体が急変でもしたかと、ドキドキしながら聞いた。

「私に頼み？今？健人くんと当麻くんとご飯食べに来てるとこだけど…。
ちょっと待ってて、聞いてみる。
みずきさんが、二人にも話したい事があるって…。これからここに来てもいいか？って。」
健人と当麻が、何事だろう？と顔を見合わせた。

「いいよ。見つからないように変装して来い！って言って。」

当麻がすぐに返事する。

「いいって！おいでよ！お客さんに見つかると大変だから、変装して来てね！
これからお店の場所、メールで送るから。今病院なの？タクシーで十五分もあれば着くと思う。
うん、待ってる。気をつけて来てねっ！じゃ！」
雪見は嬉しそうにニコニコしてた。頼みのことなど、少しも気に留めないで…。

「ゆき姉にまた頼みなの？なんなの、一体。頼んだり断ったり…。」
健人がまたイラッときてるのが判った。

「いいの、健人くん。私で出来る頼みなら、今は何でも聞いてあげたい。
きっとオーナーの事だと思うから…。」

しばらくの間、三人の空間がシーンと静まり返える。
ふすまの向こうから聞こえる、店の喧噪だけが耳に鳴り響いた。
ふと、雪見が我にかえって立ち上がる。

「みずきさんが来ること、マスターに伝えて来なくちゃ！
あの人、すぐビックリする人だから、突然会ったら絶対お店で大声上げちゃう！急げ　！」
慌ててスリッパが脱げそうになった。

「なに慌ててんの？ビールならいくらでもあるから、心配すんなって！
あ、料理全部喰われちまった？あの二人、痩せの大食いだからなぁ！
羨ましいよ、まったく。こっちはすーぐ中年太りだ！あんな若い頃

が懐かしい！」
マスターは忙しそうにつくねを焼いてるが、相変わらず喋る方も忙しい。

昔の雪見もそうだったが、一人で寂しく飲む時はマスターが話し相手で気が紛れるのだが、
誰かと一緒にカウンター席に座って、マスターのお喋りに付き合わされると、
友達との会話もままならない。
まぁ、そんな気さくなマスターが大好きで、いつも店は大盛況なのだが。

「マスター、耳貸して！あ、お客さん、中ジョッキ二つね！」
雪見がカウンターの中に入り、忙しいマスターに代わって、前の席に座るカップルにビールを注いで手渡す。

「マスター、静かに聞いてね。あのね、これから…。」
両手はつくねをひっくり返しつつ、頭だけ雪見の方へ傾けたマスターに、
ごにょごにょと耳元でささやく。と案の定、「嘘だろー！！」と大絶叫！

「シーッ！声が大きい！すみませんねぇ、お客さん！ビックリしたでしょ？何でもないですから。」
雪見が、驚いた顔のさっきのカップルに、頭を下げて微笑んだ。

「お願いだから、本人が来ても平然としててね！
お客さんにバレたらどんな騒ぎになるかは、もう体験済みだよね？
だったら、くれぐれもよろしく！」

みずきが来たら部屋に案内してと耳元に言い残し、雪見はカウンターを出る。

「ちょっとちょっと、雪見ちゃん！俺一人で待ってるわけぇ？やっべぇ！ヒゲ剃ってくればよかった！お客さん、俺の顔汚れてない？」

マスターが一人で右往左往してる頃、このビルの正面に一台のタクシーが止まった。

もちろん中から颯爽と降り立ったのは、超人気国際派女優　華浦みずき本人である。

紳士なマスター

「いらっしゃ…いましたよ！絶対あれだ！やべぇ！こっち来る！」

マスターが、入り口で店内を見回している女性客を見て、一目でみずきだと判ったのだから、
いくら変装したところで、そのオーラは別格だった。

みずきにはメールで、『カウンターにいる宇崎竜童似の人がマスターだから、声を掛けて。』
と伝えてある。

『あ！あの人だ！』という顔をしてみずきは、微笑みながらカウンターに向かって歩いて来た。
だがマスターは、恥ずかしさから顔を上げられず、気付かない振りをしてる。

「マスター…ですよね？ほんと、雪見さんに聞いてた通り、宇崎竜童っぽい！」
そう言いながらみずきがコロコロと笑った。

「え？雪見ちゃんがそんな事を？あ、いや失礼！
いらっしゃいませ、お待ちしてました！どうぞこちらへ。」
マスターは、みずきにいきなり可愛い顔で話しかけられ、本当は嬉しくて仕方ないのだが、
顔がにやけそうになるのをグッと堪えて、雪見達の待つ部屋へと案内しようとした。

ところが！

近くでみずきの顔をマジマジと眺めていた男が、隣の連れにささやいた。
「おい！あれって華浦みずきじゃね？」

「マジ！？ヤバッ！化粧してねーけど絶対本物だって！早くつぶやけ！」

それを耳にしたマスターは、しまった！と焦ったが、すぐにみずきを先に追い立て、
機転を利かせてその二人組に声を掛けた。

「お客さーん！ツィッターは勘弁してねっ！
この前も酔ったお客さんに『どんべいにレディーガガが来てる！』って
つぶやかれて、大変な目に遭ったばっかなんだから！
ただのブッ飛んだ外人客だったのに、店にあっという間に人が押し寄せてパニック状態よ！
怖い世の中になったもんだ！って事で、さっきのお客さんは、ただの綺麗なお姉さんだから！
間違ってもつぶやかないでねっ！」
最後に笑顔を作りつつ、ギロッと二人に睨みを利かせてみずきの元へ歩み寄った。

「すみませんねぇ！ご心配かけました。あれで大丈夫だと思いますので。
もし懲りないようだったら、店からつまみ出すんでご安心を！」
不安げに通路の端に立っていたみずきに、マスターは笑顔で話しかける。

「私の方こそ、ごめんなさいね。お店にご迷惑かける所だったわ。

すっぴんだから、あんまり変装しなくてもバレないかと思って…。
雪見さん達に怒られちゃうわね。」
みずきは申し訳無さそうに下を向いた。

「いやいや！綺麗なことに罪はありません！
もし万が一にバレたとしても、この私が全力でお守りしますから！
では、こちらへどうぞ。皆様がお待ちかねです。」
しまいにマスターは、みずきを守るニヒルな執事にでも成り切っていたようだ。
話し方も違えば、歩き方さえいつもと違う。
綺麗なお姉さんに弱いという事だけは、いつもと変わりないけれど…。

「お客様をお連れしましたよ！」
マスターがよそ行きの声でふすまを開けると、中の三人が「お疲れー！」と
笑顔でみずきを歓迎した。

「みずきさん、なに飲む？ワインがいい？」

「うん、冷たい白ワインがいいな！」
雪見の問いかけに、コートを脱ぎながらみずきが答える。

「だって！マスター、大至急お願いねっ！あ、私もワインにしようかな？」

「君はまだビールでいいよ！自分で注いで来なさい！
みずきさん。今、大至急お持ちしますから！」
目尻を下げたマスターが、全速力で戻って行った。

「ちょっとぉ！さっきまで私のファンクラブ会長になる！とか言ってたくせにぃ！
どこまで綺麗な人に弱いんだか！
けど、みずきさんが来てくれて嬉しいな。今日はいい日だ！」

雪見が笑顔で「今日はいい日だ！」と言ったのを聞いて、みずきは少しホッとした。
本当はここへ来るまで、不安でしょうがなかったのだ。

病院での事を、雪見は憤慨してるのではないか？
しかもその上さらに頼み事だなんて、ずうずうしいにも程がある気がしてた。
だが、このお願いはオーナーたっての希望。どうしても雪見じゃなくては駄目なのだ。
どんな顔して会えばいいのか解らなかったが、一刻も早くに伝えなくてはと、
恥も外聞もなくお願いにやって来た。

「雪見さん。今日は本当にごめんなさい！」
いきなり両手をついて頭を下げたみずきに、雪見を始め健人や当麻も驚いて顔を見合わせる。

「みずきさん、ちょっと待って！私、謝られるような事、何にもないよ！やだ、頭を上げて！」
雪見が慌ててると、「入るよー！」とマスターの声がした。

「お待たせしました。冷たーく冷えた白ワインです！
こちらは鯛のカルパッチョと、北海道富良野産チーズの盛り合わせでございます。

どちらも白ワインにピッタリな組み合わせでございますので、どうぞご賞味下さい。」
マスターがすまし顔でみずきの前に料理を並べ、グラスにワインを注ぐ。

それを見た当麻が笑って言った。
「おいおい、いつからフレンチレストランの店長になったんだぁ？焼き鳥の匂いがプンプンしてるけど。」

「当麻っ！夢を壊すようなこと言うんじゃないっ！じゃ、みずきさん、ごゆっくり！」
そそくさと退散するマスターの後ろ姿に、四人は爆笑した。

「まずは乾杯しよう。話はそれからゆっくりとねっ！じゃ、カンパーイ！
って、本当にマスター、一つしかワイングラス持ってこなかったんだね。ひっどーい！」
雪見がほっぺたを膨らませたが、みずきがマスターを擁護する。

「マスターって見た目はちょっと怖そうだけど、とってもいい人ね！さっき私を助けてくれたもの。」
と、バレそうになった一部始終を三人に教えた。

「へぇーっ！マスターらしいや。それでみずきを救った紳士になり切ってんだ！納得！
…で、ゆき姉に頼みってなに？いや、その前に聞きたい事がある。猫かふぇのオーナーって誰？」

「健人くん、ちょっと待って！みずきさんにだって、話せる事と話せない事があるでしょ！」

いきなりのストレートな健人の質問を、雪見が遮ろうとした。
だがみずきは、すべてを話すつもりで覚悟を決めてそこにいる。

「いいの、雪見さん。私、この三人にだけは本当の事を伝えようと思って、ここに来たんだから…。
オーナーは宇都宮勇治。そして私はオーナーの…。」

ワイングラスを見つめる瞳が、微かに揺らいでいた。

最期のお願い

「私はオーナーの…隠し子…。」

みずきの告白に、三人は言葉を失った。

雪見は、つい何時間か前に話していた人が、みずきの父親だったなんて…と、茫然としていた。

「あの宇都宮勇治の娘だって言うのか？みずきが？だって津山泰三の孫なんだろ？」

当麻が、訳わかんねぇ！と早口でまくし立てる。

「ごめんなさい、雪見さん。本当はさっき、きちんとお話しなきゃいけない事だったのに…。

父も後悔していたわ。随分と冷たい事を言ってしまったと…。

だから、どうしても今日中に謝って、全てを話しておきたかったの。

それと…。父からの最後のお願いも早く伝えなくちゃ、時間が無くなる…。」

みずきは淡々と冷静に、まずは自分と宇都宮、津山の関係を話して聞かせた。

「父は…５６歳の時に２３歳の母と出会い、誰にも秘密の恋に落ちたの。

今だったら、事務所の言いなりにならずに愛を貫き通したって言ってたけど、

当時の人気俳優　宇都宮勇治に、そんな年の差婚なんて事務所が許さなくて…。

母は私を産んで半年後に、交通事故で亡くなった…。」

「えっ！」

「それで私は父の親友、津山泰三の家に密かに引き取られ、津山の息子夫婦の養女になったの。
津山の家では子供が出来なかったから、実の子のように可愛がってくれたわ。」

「それで…。いつ本当のことを？」
雪見は、病室での二人の様子に少しずつ合点がいきだし、お酒を飲んでるにもかかわらず、
ひどく落ち着いてみずきの話を聞く事ができた。

「宇都宮が癌でもう助からないと判った時、おじいちゃんが教えてくれた。
ショックだったけど、親孝行する時間を与えてもらえて感謝してる。
けどね、宇都宮はずっと独身だったから、私が子供の頃からしょっちゅう家に来て、
うちの家族と一緒にご飯を食べてたんだ。
だから私にとっては、本当に第二のおじいちゃんだったの。
だって、うちのおじいちゃんと同い年なんだもん。
それがいきなり実のお父さんだって聞かされたら、『えぇーっ！？』ってなるでしょ？」
みずきはその時の様子を思い出したらしく、一人で可笑しそうにクスクスと笑っている。
聞いてる三人は笑えるはずもなく、複雑な顔でぬるいビールに口をつけた。

「…ってことで、『秘密の猫かふぇ』は私が継ぐことに決心しましたっ！

ごめんなさいっ、雪見さん！今まで散々振り回しておいて！！」
みずきはまた両手を畳に付き、深々と頭を下げて今までの非礼を謝り、事実を伝えた。

雪見に頼んだ時点では、みずきが継ぐのは仕事上不可能に近かったこと。
みずきが継ぐと決めた事を、もっと早く雪見に知らせるつもりだったが、
宇都宮がどうしても直接、雪見に会ってみたいと言い出したこと。
もしも雪見が継ぎたいと申し出たら、喜んで雪見に後を継がせるつもりだったこと…。

「そうだったの…。でも安心した！みずきさんが継ぐって聞いて。
なんか、すっごく嬉しい！これでまた、私達のオアシスが復活するんだね！
宇都宮さんも安心してるでしょ？」
雪見は、とてもすっきりした気分でみずきに聞いた。

「うん、まぁ…。でも安心半分、心配半分ってとこかな？
父は、私には女優業に専念して欲しかったみたいだから…。
自分の事で人に迷惑かけるのが、とにかく大嫌いな人なの。だから今日のことも、
早く雪見さんに謝っておいてくれ！って、それぱっかり言ってた。」

「だけど、またゆき姉になんか頼みがあるんだろ？なんだよ、それって。
結局はまた迷惑かけるんじゃん！」
健人が少し強い口調でみずきに言い放つ。

「健人くん、やめて！私のことはいいんだって！ごめんね、みずき

さん。
今度こそ、私が聞いてあげられるお願いだったらいいんだけど…。
あ、でもお願い聞く前に、ビール持って来てもいい？なんだか喉乾いちゃった！」
そう言って雪見は中座した。
残された三人の、なんだか気まずい空気をかき混ぜるように、当麻が一人でしゃべり出す。

「あー、ほら、みずきってさ、少しお嬢様的なとこあるじゃん！なんつーか、世間知らずでおっとりしてる、みたいな？
そんな奴があんな凄い店のオーナーになるなんて、俺心配で夜も眠れないかも！
あ、心配なのはみずきじゃなくて店の方ね！すぐ潰しちゃうんじゃないかと…。」

「失礼ね！これでも一応、大学の経営学部出てるんですけど！
まぁ、だからと言って、なに出来るわけでもないんだけどね。
当分は支配人にお任せして、アメリカでの仕事が一段落ついたら、しばらくは
日本だけで仕事しようと思ってる。
冗談抜きに、あのお店はお父さんの夢の塊だもの。絶対に潰すわけにはいかない…。」

みずきはワインを一気に飲み干し、ワインクーラーからボトルを取り出して自分で注ごうとした。
が、横から手を伸ばした健人がボトルを奪い、みずきのグラスに静かに注いだ。

「あんまり…ゆき姉を悩ませないでやって…。」

健人の言葉がみずきの胸に突き刺さる。
「ゴメン…。本当に最後のお願いだから…。父からの…。」
その時、ふすまの向こうから雪見の声がした。
「誰か開けてぇ！」
四つの大ジョッキを「重かったぁ！」と言いながら、みんなの前に配る。
「もう、マスターがしつこくって！みずきさんの好きな食べ物はなんだ！とか、
ワインは美味しいって言ってるか？とか…。
だから、私が食べたい物をいっぱい注文して来ちゃった！
じゃ、もう一度乾杯しよう！『秘密の猫かふぇ』新オーナーの誕生にカンパーイ！
うーん、うまいっ！おめでたいお酒って、なんでこんなに美味しいんだろ！」
「おいおい！またゆき姉が、マックスモードに入ったんじゃね？
あんまり酔わないうちに、最後のお願いとやらをした方がいいぞ、みずき。」
勢いづいた雪見が、どれほど酒を飲むのかをよく知る当麻が、みずきにささやく。
「そうね…。そろそろお話しなきゃね。雪見さんに、父からの伝言。
雪見さん…。父が…遺影の撮影を頼みたい、って…。」
「えっ！？遺影の撮影…？」
雪見はまだそんなにも酔ってはいなかったが、聞き間違えかと耳を

疑った。
なぜ宇都宮が、今日初めて会ったばかりの猫カメラマンに、そんなことを…。

雪見を始め健人や当麻でさえも、予想もつかなかった宇都宮の『最期のお願い』に
戸惑いを隠せなかった。

引き受けた大仕事

「遺影って、そんな…。まだ早すぎるでしょ！
あははっ！宇都宮さんってドラマの役と同じで、せっかちさんなんだ！」
雪見は、その急な頼みが意図しているであろう事実を受け入れられず、
心が拒否反応を示して、笑いたくもないのに笑って誤魔化した。

「昨日お医者さんに呼ばれて、余命が短くなったと言われちゃった…。」
みずきは、すでに泣くにいいだけ泣いたのだろう。
淡々と現状を三人に伝えて、またグイッとワインを飲み干した。

「おい、みずき！ワインにしては、ちょっとペースが速すぎるぞ！」
当麻が心配顔で、みずきをたしなめる。

「大丈夫だよ。多分今はいくら飲んでも酔えないから…。」

どんな慰めも通用しない気がして、三人はそれ以上掛ける言葉が見つからない。
無言のまま、みずきの悲しい酒に付き合ってやるのが精一杯だった。

しんとしてた空間に、またしても嵐がやって来た！
マスターが、ワインとたくさんの料理を持って、この場違いな場面に騒々しく入ってきたのだ。

「おいおい、なんだよ！この葬式帰りみたいにしんみりした飲み会

は！
ほら、お前達の分もワイン持ってきてやったぞ！」

「マスターっ！！」

雪見にいきなり怒鳴られ、健人と当麻には怖い顔で睨まれ、うつむいたみずきの顔を目にして
初めてマスターは、もしかして…やっちゃった？と気がついた。

「ま、まぁ、ゆっくりしてってねー！お邪魔しましたぁ！」
脱兎の如く部屋を飛び出して行くマスターの後ろ姿を見て、クスクスと笑い出したのはみずきである。

「ははははっ！あー、おっかしかったぁ！だってタイムリーに葬式帰りとか言うんだもん！
雪見さん達は凄い顔でマスターを睨んでるし、私も神妙な顔しなきゃいけないかなと思って
演技したけど、可笑しくて笑いを堪えるのに必死だったよ！
……可笑しすぎて涙が出てきちゃった…。
お父さんの時も…、笑って見送れるかな…。」

みずきの心の張りつめてた糸は、笑うことによってプツンと音を立てて切れ、
三人の前で子供のように、いつまでも泣きじゃくった。
そっと肩を抱き寄せる雪見の瞳からも、幾筋もの涙が溢れては落ちる。
健人と当麻の目にも、光るものがあった。

しばらく雪見の胸で泣いたみずきは落ち着きを取り戻し、「あー、

スッキリした！」と涙を拭く。
「ごめんね、みんな。もう泣かないから。ここからは、さっきの話の続き。
父が雪見さんに、遺影の撮影をお願いしたいって言い出したのは、雪見さんがくれた
猫の写真集を見たからなの。」

「えっ？私が昼間持って行った写真集？」
なぜ猫の写真集を見て遺影の撮影を依頼してきたのか、その繋がりがまったく理解できない。

「そう！その中に、健人んちの猫を撮した写真集があったでしょ？
あの最後のページに写ってた、健人と妹さんを見て父が言ったのよ。
『雪見さんに撮ってもらいたい。少しでも笑えるうちに。』って…。」

「どういう事？」
どうやら事務所が用意した写真が気にいらなかったのが、事の発端だったようだ。

宇都宮は、自分の死期が近いとわかってから、葬儀の手はずを自分で整え出した。
人生最後の大舞台を自分で演出したいと、葬儀のプログラムから祭壇を飾る花の種類まで、
宇都宮勇治らしいと参列者が思ってくれるような葬儀を、自らプロデュースしたのだ。

だが、遺影に使う写真だけは、どうしても気に入ったのが見つからなかった。
事務所が持って来たのは、どれも元気な頃のスチール写真で、確か

に誰もが知ってる
宇都宮勇治の顔なのだが、本人はそれが気に入らなかったらしい。

「父は、人生の締めくくりの顔はこんな顔じゃない、と言って…。
今現在の顔を遺影にしたいと言ってきかないの。で、事務所と揉めちゃって…。」
事務所にしてみれば、これぞ往年の名優　宇都宮勇治！というような写真を使いたいに決まってるが、
本人は、過去の顔ではなく今現在の、人生最後の顔でみんなとお別れがしたいと思ってるのだ。

「それで？どうして健人くんの写真を見て私に頼もうと？」

「雪見さんの写真には、内面を写し出す温かな目を感じる、と言って…。」

「それは、健人くんが被写体だったからだと思うんだけど…。」
雪見は困惑した。まだそれほどポートレートが得意になったわけではないのに…。

「私も、この人は雪見さんの彼氏なのよ、とは教えたの。あ、ごめんね、勝手に教えちゃった。
でも、絶対にそれだけじゃないって言うのよ。長年写真を撮られ続けてきたんだから、
俺の見る目は間違いない！って。
自分もこんな写真で、みんなとお別れがしたい、って…。
それと、宇都宮勇治の状態はマスコミにも内密だから、頼める人が限られて…。
ねぇ、父の最後のワガママを聞いてやってくれないかな。」

雪見はしばらく考え込んだ。
写すだけなら簡単だが、まだ一度しか会ったことのない人の本質を写す事など、
自分に出来るだろうか。
果たして、宇都宮が望むような写真を撮れるだろうか…と。

そして突然、『そうだっ！』とひらめいた。この方法でなら何とかなるかも知れない！

「わかった。私でいいならこの仕事、引き受けるよ。
宇都宮さんの望み通りのものが撮れるように、最善の努力をするから！」

「ほんとっ！？本当に撮ってくれるの！？ありがとう、雪見さん！」
みずきはこの夜、久しぶりに心の底からの笑顔を見せ、嬉しそうに隣の雪見に抱き付いた。

「できるだけ早いうちに撮りたいけど、あさっては私達のＰＶ撮影が丸一日あるし…。」

「じゃ、明日は？明日じゃだめ？父も、ここ二、三日は顔色もいいし割と元気なの。
雪見さんは忙しい？」
みずきは、善は急げ！とばかりに早口で雪見にまくし立てる。

「明日ぁ！？うーん、明日かぁ…。そうだね、なるべく早いうちがいいもんね…。
よし、わかった！午前中は仕事があるけど、午後からならなんとかなるか！
それでね、明日撮影となったら大至急午前中に、みずきさんに手配

してもらいたい物があるんだけど。
これが用意できなかったら、明日の撮影は無理かな…。
それと病院の許可を取って…。まぁ最悪、病院には内緒で決行しちゃうか！
どう？これから頼む物を、明日の午前中に準備出来る？」

「する、する！何が何でも、絶対準備するっ！」

こうして急遽、明日の午後からの撮影が決まり、雪見も機材の準備のため、
本日の飲み会はこれにてお開きとなった。

サプライズ撮影会

翌朝五時。睡眠不足ではあるが、午後からの撮影の準備を進めなくてはならない。
健人はあと一時間寝かしておくとして、そーっとベッドを降りる。

『みずきさん、午後までに間に合うかなぁ…。』
目覚めのコーヒーを飲みながら、雪見はそれだけが気がかりだった。
昨夜頼んだ物は、はたして撮影までに間に合うのか…。

一通り仕事の準備を整え、朝食に雑炊を作ってから健人を起こす。
「健人くん、起きて！朝ご飯出来たよ。」

「うーん…。朝飯はいいや…。もう少し寝てたい…。」
ドラマの撮影も終盤に入った上、ＳＪの取材やら新年号の取材が立て込み、
健人の疲労度は日に日に増していった。
もう、遅い時間まで飲んでちゃいかんなぁ。反省…。

「わかった。じゃ、あと三十分だけね。おやすみ。」
頬にキスしてベッドの上の、めめとラッキーを連れ出し、雪見は寝室のドアをそっと閉めた。

猫たちに餌をやり、身支度を調えて仕事モードに入る。
今日の午前中は、いよいよ健人の写真集が完成して出来上がってくるので、
編集部にて最終チェックが行なわれるのだ。
そのあと、１２月２４日発売日に行なわれる出版記念握手会や、翌２５日の限定ミニライブの打ち合わせがある。

来年1月5日のCDデビューに、25日から始まる全国ツアーと、これから年末年始に向かっては
健人も雪見も、目の回るような忙しさに突入する。
健人は、俳優業もこなしつつのアーティスト活動だ。
健康管理は雪見の仕事。疎かにするとみんなにも迷惑をかける、と気を引き締めた。
さぁ、そろそろ健人くんを起こさなくちゃ！

「忘れ物ない？今日一日頑張ったら、明日は三人一緒の仕事だからねっ。」
玄関先に腰を下ろし、ブーツを履く健人の後ろ姿に声を掛ける。

「うん、めっちゃ楽しみ！ゆき姉こそ、撮影頑張ってきてね。
あの宇都宮勇治直々のご指名なんだからさ…、自信持てよ！じゃ、行ってくる。」
スックと立ち上がり振り向いた健人は、今日一日雪見のエネルギーになるような、
輝くアイドルスマイルを作って笑ってくれた。
朝七時。健人は迎えの車に乗り込み、ドラマの撮影現場へと出勤だ。
今日も帰りは遅いだろう。頑張れ、健人！

午前八時半、『ヴィーナス』編集部に到着。すでに写真集がデスクの上に積んである。
朝の挨拶を交わしたあと、早速何人かで最終チェックに取りかかった。

「雪見さん、これで完成ですね！おめでとうございます！」

「どうもありがとう！本当に皆さんのお陰で、いい写真集に仕上がりました！
あとは、これが売れてくれるといいんだけど…。」

「大丈夫です！販促も私達に任せてください！て言うか、すでに予約は殺到してるんですよ。
やっぱ握手会に限定ライブの威力は凄いです！なんてったってクリスマスですからねー！
私達もお手伝い、楽しみにしてますから！」

すでにここにいるスタッフ全員が、写真集を通して健人の大ファンになっていた。
頼もしい限りだが、間違っても一緒に住んでるとは言えない。ごめんね、みんな。

その後、打ち合わせもスムーズに終了し、予定より早くに出版社を出ることができた。
駐車場の車の中から、みずきに電話を入れてみる。

「もしもし、みずきさん？今仕事が終ったとこなんだけど、準備はどう？
病院の許可はもらえた？あっそう！良かったぁ！
うん、じゃあ一時に病院行くね。あとのスタンバイはよろしく！」
どうやら準備は間に合ったようだ。一番気がかりだった病院も、特別室だと言う事で許してくれたらしい。

今日は天気も良いから明るさ的にも申し分ない。宇都宮も朝から楽しみにしていて、
久しぶりに笑顔が絶えないそうだ。

なんだかいい写真が撮れるような気がしてきた。よし！頑張るぞ！

約束の午後一時。
「こんにちはー！出張スタジオ浅香でーす！宇都宮さん、ご機嫌いかがですか？」

いつもよりワントーン高めの声で病室のドアを開け、機材を手早く運び入れる。
宇都宮はすでに、みずきが用意したお気に入りの私服に着替え、顔色がよく写るようにみずきの手によってメイクが施されていた。

「お父さん、メイクは嫌だって駄々こねたのよ！
でも、いくら今の自分を遺影にしたいからって、こんな土みたいな顔してたんじゃ
お葬式に来てくれる人に失礼よ！って叱ったの。
だから顔色修整しただけなんだけど、これでいいかしら？」

「大丈夫！今日はお天気がいいから、カーテン越しの柔らかい光で、良い感じに撮れると思う。
宇都宮さん。精一杯頑張りますので、今日はよろしくお願いします！」
ベッドに寝たままの宇都宮の顔を覗き込み、笑顔で話しかける。

雪見は今頃になって責任の重さをひしひしと感じ、機材を準備する手が微かに震えた。
だが、宇都宮に不安を与えてはいけないので、努めて自信ありげな態度を装う。

「雪見さん、昨日は本当にすまなかったね。それなのに、ずうずうしくもこんな事お願いして…。」
申し訳なさそうにしている宇都宮が、可哀想に思えた。

「何おっしゃってるんですか！私みたいな無名のカメラマンが、宇都宮さんの
こんな大切なお写真を撮らせて頂けるなんて…。身に余る光栄です！」

「そう言ってもらえると、私も気が楽になる。
どうか、かしこまった肖像画みたいな写真だけは勘弁してくれよ！」

「もちろんですとも！残念ながらそんな写真、撮りたくても私には撮れません！
と言うか、そういう写真が撮りたいなら、私になんか頼んでませんよねーっ？」
雪見が宇都宮の顔を覗き込みながら、茶目っ気たっぷりに笑って見せたら、
宇都宮も笑いながら答えた。「バレたか！」

病室の中が笑い声で包まれる。
一瞬、これから撮ろうとしてるのが『遺影』であることを、忘れてしまった。
夢だったら、どんなにか良かったのに…。

「じゃ、そろそろ始めましょうか？みずきさん、ベッドを起こして例の物、お願いね！」

「はい！」

みずきは電動ベッドのボタンを押し、宇都宮の上半身を起こした後、
部屋続きになってる家族室のドアを開け、中へと入って行く。
雪見は、キリッとしたカメラマンの顔に切り替わり、これから訪れる
シャッターチャンスを前に、カメラを身構えた。

宇都宮は『？』な表情をしていたが、次の瞬間、隣の部屋から出て
きたみずきを見て、
驚きの表情と共に顔がほころんだ。

「蘭丸！小唄！どうしたんだ、お前達！」

みずきが隣りから連れて来たのは、宇都宮が『秘密の猫かふぇ』で
一番可愛がっていた、
二匹の猫であった！

笑顔を心に焼き付けて…

カシャッ！カシャカシャカシャッ！

雪見は、宇都宮と愛猫の感動の対面を逃さず撮り切ろうと、夢中でシャッターを押す。

ファインダーの中で宇都宮は、泣き笑いをして二匹の猫に手を伸ばしていた。

「元気だったかい？もう会えないと思ってたよ…。」

みずきから手渡された二匹を胸に抱き、頬ずりする優しい瞳には、涙が光っている。

それを見守るみずきが、そっと涙を拭きながら宇都宮に説明した。

「雪見さんからの提案なの。突然の話だったから、朝から大慌てだったのよ！

一番に支配人に電話して、この子たちの里親の居場所を聞き出して…。

二匹とも都内にいてくれて助かったわ！地方に引き取られてたらアウトだった。

雪見さんがね、『お父さんが今一番会いたい人に会わせてあげよう。』って。

好きな女の人の事かと思って私、ドキドキしちゃった！」

みずきが、笑いながら雪見の方を振り向く。

「あははっ！さすがに女の人と一緒の遺影はまずいでしょ！

でも猫と一緒なら、一番宇都宮さんらしい表情が撮れるかなと思って…。」

雪見がカメラを下ろして宇都宮を見ると、穏やかな笑顔で雪見に礼

を言った。

「ありがとう。本当にありがとう。この子たちは家で飼ってた猫なんだ。
入退院を繰り返すようになってから、店に移してね。
あそこだったらスタッフが世話してくれるから、心置きなく入院してられる…。」
そう言ったあと、宇都宮は急に表情を固くして、ぽつりぽつりと心の内を吐露した。

「きっと世の中には、私みたいな老人がたくさんいるんだよ。
身体が弱って犬猫の世話もままならなくなって、引き取り手も探せないから
泣く泣く保健所に殺処分を頼む年寄りがね…。
だが、言うことをきかないからだとか、飽きたからだとか、そんな理由で動物をゴミみたいに
保健所に持って行く奴は論外だ！人間を名乗る資格も無い！」
宇都宮は声を荒げ、興奮したせいで少し咳き込んだ。

「お父さん、落ち着いて！駄目よ、また酸素ボンベに繋がれるでしょ！」
みずきが慌てて宇都宮の背中をさすり、一口だけ水を飲ませる。

「すまない…。でもこれだけは知っておいて欲しいんだ。
長年我が子のように可愛がってきた犬猫を、やむを得ず手放さなければならない者の悲しみを…。
私はね、そういう理由で飼えなくなった犬や猫を引き取って、飼い主が好きな時に会いに来れる
ホームを作りたかったんだよ。ゆくゆくはね…。」
そう言って宇都宮は、寂しげな目をして膝の上の二匹を撫でた。

雪見には、それが宇都宮の遺言のように聞こえてしまった。
みずきと雪見に託す、最期の願いのように…。

「お、お父さん。少し横になって休みましょうか？」

「いや、大丈夫だ。すみませんね、雪見さん。
こんな顔してたんじゃ、写真も撮れやしないでしょう。何か楽しくなるような話はないかね？」

確かに、明るい顔をしてたのは最初のうちだけで、今の顔では遺影にもならない。
本当は猫との対面で、ずっと笑顔の写真が撮り続けられる予定だったのに…。

『うーん、困ったな！お笑いの才能なんて持ち合わせてないし…。
ん？そう言えば…鞄の中に使えそうな物が入ってたっけ！
笑いは取れないと思うけど、ちょっとだけ違う表情を見せてくれるかな？』

雪見は鞄の中から何やら取り出し、照れ笑いしながら宇都宮に手渡した。
「これ見てもらえますか？今日出来上がったばっかりの、私が撮った写真集なんですけど…。
えへへっ、彼氏です！」

「ほーっ！あの猫の写真集の彼かい！
みずきに聞いたが、今一番人気のある俳優だっていうじゃないか！
大したもんだ。どれどれ。」

「お父さん、私にも見せて！」
そう言いながらみずきもベッドに腰掛け、親子仲睦まじく頭を寄せ合って
健人の写真集に見入ってる。
雪見は、段々表情が和らいできたぞ！と再びカメラを構え、シャッターを切り続けた。

「おや？彼と一緒に写っているのは？」
宇都宮は、沖縄で撮影したページで手を止めた。

「あぁ、これ？三ツ橋当麻って言うの。雪見さんの彼氏と仲いいのよ。
三人とも猫かふぇの常連さんで、同じ事務所にいるの。
でね、彼の人気も凄いんだから！
今の若手俳優の中では、断トツに演技が上手いわね。
歌も上手いし舞台映えもするから、ミュージカルでも活躍してるのよ！
彼はきっと、これからの日本を背負って立つ俳優になるわ！」

あまりのみずきの力説に、雪見はシャッターを切りながら吹き出しそうになる。
宇都宮も呆気にとられて、みずきの顔をマジマジと見つめ、次第に笑顔へと変わっていった。

「お前…。もしかして、こいつを好きなのか？だったら父さんは嬉しいぞ！」

「な、なに言ってるのよ！好きなわけ無いでしょ？こんな優柔不断男！

第一、顔が好みじゃないわ！私の理想は、お父さんみたいな渋めな人だもん！」
みずきが膨らませた頬は、言葉に反して赤くなっている。

「だったら、こいつはいいぞ！お父さんの若い頃に、そっくりだからなっ！」
ニヤッと笑う父に、「えーっ！？」と驚き顔の娘。
そこから笑顔と会話が広がって、病室中が温かな空気に包まれた。

端から見ると、おじいちゃんと孫に見えるだろう。
だが、そこに居るのは紛れもなく、深い愛情で結ばれた父と娘以外の何者でも無かった。

仲の良い親子と愛猫二匹。
ファインダーの中の、この幸せそうな光景を、もう二度と撮せない時がやって来るなんて…。

ひとしきり娘とのお喋りを楽しんだ後、宇都宮は疲れからかベッドに寄り掛かり、
うつらうつらとし始めた。

「もう寝かせてあげよう。写真は充分撮れたから。」
そう言って雪見は、電動ベッドのスイッチを押して元に戻し、そっと布団を掛けてやる。

みずきは雪見の手を握り、涙を浮かべながらも笑顔を作った。
「ありがとうね、雪見さん。あんなに嬉しそうな父の顔、もう一生見れないと思ってた。
本当にありがとう！最期のお願い、聞いてくれて…。」

気を緩めると、二人で抱き合って泣き崩れそうだった。
だが、宇都宮の前ではもう泣かないと、心に誓ってる。

みずきは女優にスイッチを切り替えて、笑顔のままで雪見を見送った。

緊張を解く健人の温もり

「ただいまぁー！めめー！ラッキー！帰ったよー！」

玄関に重たい機材を下ろし、はぁぁ…とため息をついてると、二匹が先を争うようにリビングから飛んで来る。

いつにも増してこの小さな命が愛おしく思え、しゃがみ込んでひとしきり頭を撫でたら、やっと高ぶる気持ちが落ち着いた。

さて、晩ご飯の準備が終ったら、急いで今日の写真を焼かなくちゃ！

ＰＶ撮影という、初体験の大仕事を明日に控えていることも忘れ、雪見は撮影して来た宇都宮の写真をパソコンで編集し、アルバムを作ることに没頭していた。

何時間ここに座っていただろう。時計を見ると、すでに十一時を回っている。

大体の目処が付きホッと一息入れてると、玄関先から「ただいまぁ！」の声。

健人が帰ってきた！

急に胸がキュンとして、仕事モードのスイッチが切れる。

「おかえりー！」

雪見は、玄関先に腰を下ろしてブーツの紐を解いている健人の背中にぴょんとおぶさり、「会いたかったよ！」と左頬にキスをした。

「うわっ！ビックリしたぁ！どうしたの？珍しい。仕事は上手くいった？猫作戦は？」
健人が笑いながら、背中越しに聞いてくる。

「うん。猫作戦より、斎藤健人写真集作戦の方が、上手くいった！」

「なにそれ？どーゆー事？まっいいや、ゆき姉の仕事が上手くいったんなら。
それよか、腹減ったぁ！めしめし！」

健人は雪見をおぶったまま、ひょいと立ち上がり、リビングへと移動する。
雪見は、この温もりをいつまでも感じていたかったが、ご飯の用意があるので諦めてストンと背中から降りた。

「今日も一日お疲れー！」ゴクッゴクッ。「うっめぇ～！生き返ったぁ！」
最初のビールを飲み干すと、毎度同じセリフが健人の口から飛び出すが、事実だから仕方ない。
雪見の元に帰って来てのこの一杯で、彼は素の自分を生き返らせるのだ。

健人はご飯を頬張りながら、ビールを飲みながら、お互いの知らない今日の時間を埋めてゆく。

「で、ゆき姉の方はどうだったの？いい写真撮れた？」

「うん。私としては頑張ったと思う。今ね、パソコンで編集してア

ルバムに仕立ててるとこ。
その中から好きな写真を、宇都宮さんに選んでもらおうと思って。
時間が無いから急がなきゃ…。」

「そう…。きっと喜んでくれるよ、宇都宮さんもみずきも。」
重たい仕事を背負って張りつめた心を、健人の優しい微笑みが解きほぐしてくれた。

「さ、もうお風呂入って寝よっか。明日は六時集合だっけ？
軽井沢で撮影なんてちょっとした旅行みたいで、俺めっちゃ楽しみ！」

「やだぁ！考えないようにしてたのに、またドキドキしてきちゃったじゃない！
あー、やだなぁ！ＮＧ連発で明日中に終らなかったらどうしよう！
そもそもＳＪのＰＶに、私なんている？」

「ゆき姉が俺たちのに出てくんないなら、俺たちもゆき姉のに出ないけど？」
健人が意地悪そうな顔をして、雪見の顔を覗き込んだ。

「だめーっ！健人くんたちが出てくれなかったら、本当に一枚も売れないかも知れない　！
全力で頑張るけど、それでも上手く行かなかったらゴメンね…。」
雪見は、自分のＰＶはいいとして、ＳＪのＰＶ撮影だけは荷が重過ぎた。
今更だけど…。

「心配すんなって！監督だってゆき姉に、難しい演技なんか期待してないから！

ゆき姉は、俺の隣りにいてくれるだけでいいんだよ。」
そう言って健人は、雪見をギュッと抱き締めキスをした。

「じゃ、一緒に風呂でも入ろっか！待ち時間短縮のために。」

「えーっ！ほんとにそんな理由？鼻が膨らんでますけど？」
クスクス笑いながらバスルームに向かう雪見に、それを追う健人。

大好きな人の温もりは、どんな時でも一番に心を落ち着かせてくれる。
今日も健人の鼓動を子守歌に、ぐっすり朝までいい夢見よう。
きっと、明日は明日の風が吹く！

が結局…。雪見は二時間眠ったところで、目が覚めてしまった。
『まだ夜中の三時だ…。けど緊張して、もう寝れそうもないや。
どうせあと二時間で起きなきゃなんないし、仕事の続きでもしよう。』

そーっと健人の隣を離れベッドを降りると、足元に寝ていたためめとラッキーも、
ピョンとベッドから飛び降りた。

「アンタ達は、健人くんと一緒に寝てなさい！」
小声で制したが、戻る気は無いらしい。
仕方ないので二匹も連れて、寝室のドアを静かに閉めた。

シーンと静まり返る午前三時のリビング。かなり冷え込んでいる。
まずは温かい飲み物を、と珍しくココアを入れてみた。
真夜中のココアも悪くはない。よし！あと二時間で完成させるぞ！

午前五時少し前。健人が自分で起きて来た。
「おはよう。もしかして、寝ないで仕事してたの？」
眼鏡を掛けながら、驚いた顔で雪見を見る。

「ううん、二時間は寝たよ。ちょうど今、終ったとこ。これで心置きなく軽井沢に行ける。
さ、出掛ける準備しなくちゃ！朝はそこのサンドイッチ食べてね。
健人くんも準備を急いで！」
カフェオレを健人のマグカップに注いでやり、雪見は着替えて化粧を始めた。

五時五十分。今野の車で、集合場所の事務所ビル前に到着。
停まってた大型ロケバスに乗り込むと、すでに当麻とマネージャー、今回のＰＶ撮影を担当する、監督の大谷を始め事務所の映像斑、それと…
常務の片腕で、雪見のキャラクタープロデュースを担当する、小林夏美が座っていた。

「お、おはようございます！今日はよろしくお願いします！」
雪見が緊張の面持ちで一人ずつに頭を下げながら、最後部座席に座る当麻の元へと、
健人の後ろを付いて足早に進んだ。

「よっ！おはよう！よく眠れた？寝不足のお肌はＰＶに大写しになっちゃうよ？二人とも。」
当麻が雪見と健人を見て、ニヤッと笑う。

「朝っぱらから、なに言ってんの！アホか、お前！」

「ほんと、変なこと言わないでよ！私なんて、仕事してて寝不足なだけなんだからねっ！」

雪見が慌てて否定しながら健人の隣りに座った。

程なくして、駐車場に車を止めてきた今野が「お待たせしました！」と乗り込み、バスは出発する。

この後、バスは『ヴィーナス』編集部の入る出版社ビル前に立ち寄り、

そこからスタイリストの牧田とヘアメイクの進藤、スチール写真担当の阿部が乗り込むのだが…

その時すでに雪見は、夢の中にいた。

大それた仕事

「おはようございます！今日はよろしくお願いします！」

『ヴィーナス』編集部の三人が大荷物を運び入れながら、先に乗っていた事務所チームに頭を下げる。
やっと明るさを増してきた穏やかな空に見送られ、いよいよロケバスは軽井沢に向けて出発した。

おおよそ八時には目的地に着くだろう。
始めの撮影は、スタジオでスタートするＳＪのＰＶだ。
その後、それに合成する分と雪見のＰＶを、外で撮影することになっていた。

十一月も後半になり、日没はあっという間にやって来る。
忙しい健人と当麻には、今日一日しか撮影時間を取れない。
その限られた時間の中で二本分の撮影をするという事は、かなりハードな仕事になることを
みんなは覚悟している。
だがバスの中は、大人の修学旅行のようにワイワイと賑やかだ。
それぞれが束の間の休息を、楽しんでいるように見えた。

「いやぁ、お天気で良かったよ！雨となったら折角の軽井沢ロケなのに
全面スタジオ撮影になっちゃうもんな。
今日の天気なら、イメージ通りの絵が撮れそうだ。」
最前列に座る映像監督の大谷が、満足そうに通路挟んで隣の夏美に話しかける。

「そうですね。私もお天気だけが心配でした。
『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ；』のイメージは、軽井沢の木立の中って思ってましたから。
まぁ、今時期あの衣装は寒いだろうけど…。」
鼻先でクスッと夏美が笑った。
今回の雪見のＰＶは、全面的に夏美がプロデュースすることになっている。言わば総監督だ。
何事もなく、スムーズに終ればいいのだけれど…。

「ねぇ。雪見ちゃんって、どこに座ってんの？」
大量の荷物と共にバス中頃に座った牧田が、斜め後ろに座った進藤にガムを手渡しながら話しかける。

「あそこあそこ！一番後ろの健人くんの横！
すでに寝てるって、どーゆーこと？どんだけ緊張してるかと思ったのに。
ひょっとして、とんでもない大物だったりする？」

「無いなー、それは。また昨日飲み過ぎて、二日酔いだとか？」

「だね！きっと。うわぁー、それじゃメイクに時間かかりそう！
初めての撮影前夜に大酒飲むんだから、ある意味大物か！」

「あははっ！言えてる！」
進藤と牧田に、二日酔いの汚名を着せられたとも知らず雪見は、隣の健人にもたれかかり、幸せそうな顔で熟睡していた。

「着いたよ！ゆき姉、起きて！」
健人に叩き起こされ慌ててバスから降りると、先に降りてた監督の大谷が笑ってる。

「いやぁ、君がどんな大化けするのか、今から楽しみだよ！まったく緊張もしてないようだから、ガンガン飛ばしていくよ！よろしく頼むね。」
それだけ言うと雪見の肩をぽん！と叩き、足早にスタジオの中へと消えて行った。

「なんか、めちゃめちゃ期待されてたりする？私。なんで？」
ボーッとした頭で考えてもよく判らない。

健人と当麻は顔を見合わせ笑いながら「気にしない！気にしない！さぁ、行くよ！」
と、雪見の背中を押してスタジオの扉を開けた。

「未知の世界だ…。どうしよう…。」

ロケーションのいい場所にひっそりと建つ撮影スタジオでは、すでに先発隊のスタッフによって、準備が着々と進められていた。
今までのグラビア撮影とは訳の違うスタッフ、機材の多さ。
メイクの前に、ちらりと覗いてしまったのがいけなかった。
早くも弱気モード全開の雪見。

「ねぇ…。本当に私が演技するの？私のこと、誰だか知ってる？猫カメラマンなんだよ？みんな忘れてない？」
鏡越しに、ヘアメイクの進藤に聞いてみる。

「そのセリフ、毎回言ってるよね、初めての仕事の時。
もうさ、三月までは自分が猫カメラマンだって事、忘れちゃえば？
猫カメラマンだと思ってるから、弱気になっちゃうんだよ！
私は女優よ！アーティスト『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ；』よ！って、
自信を持って成り切りなさいよ！」

「そんな自信、どこから絞り出すの…。ムリ…。」
二人揃って「はぁぁ…。」と、意味の違うため息をつく。前途多難
とはこの事だ。

最初は健人と当麻の、歌ってるシーンの撮影が行なわれる。
衣装に着替えてスタジオのセットに立った二人は、もはや俳優では
なく
アーティストＳＪであった。
準備の終った雪見も見ている中、リハーサルが始まる。

「さすがだなぁ！もうずっと前からＳＪって、いたんじゃね？って
感じ。
やっぱ、凄いわ！あの二人。」
スタジオのあちこちから、そんな声が聞こえてくる。
完璧なダンスに色っぽいカメラ目線。
お互いの持ち味を存分に発揮して、見る者すべてを引きつけた。

ただの男の子に戻った健人と当麻ばかりを見ていると、この二人の
凄さなど忘れがちだったが、
今、目の前で眩しく輝くオーラを見て思い出した。
この二人は、とんでもないほどの人気者だったんだ！と…。

そう気がついた途端、雪見はガタガタと震えだした。
『なんで引き受けちゃったんだろ…。私なんて、お呼びじゃないよ！』

そうこうするうちに本番もＯＫが出て、二人だけの撮影はすんなりと終ってしまった。
いよいよここからは、雪見も加わっての撮影だ。
監督に呼ばれ、映像の狙い目と演技指導を受けるが、緊張し過ぎて頭に入ってこない。
リハーサルもＮＧの連発だ。すでに雪見の顔から笑顔は消え去っていた。

「ちょっとマズイな。スタートからこれじゃ…。」
スタジオの隅で見守る今野と夏美も、段々と心配顔になってくる。

「時間も押してきてるし、仕方ない。奥の手を使うとするか…。」

「そうね。まさかこんな初っぱなから、私の出番が来るとは思わなかったわ。
じゃ、作戦通りに…。」
夏美と今野が何やら動きを見せた。

今野は足早にスタジオを出て行き、夏美は自慢の胸を強調するように、
タイトなスーツのボタンを閉める。
ふぅぅ…と深呼吸をしたあと、大きくパンパン！と手を叩いて険しい顔で前に進んだ。

「駄目じゃない！何回ＮＧ出せば気が済むの！みんなの迷惑よ！」

きつく雪見を叱る声に、スタジオ中が凍り付く。
健人と当麻もゴクッと息を呑んだ。
それから夏美は大きな胸の前で腕組みをし、おもむろに監督に近づいた。

「監督ぅ！ごめんなさいね、うちの雪見がエンジンかからなくて。少しだけ私にお時間頂けるかしら。この子の気合いを入れ直して来ますから。」
夏美のセクシーな口元のホクロと胸元に気を取られ、監督は思わず「どうぞどうぞ！」と雪見を差し出す。

「こっちへいらっしゃい！」
叱られるのを覚悟で夏美と共にスタジオを出た雪見だが、夏美はドアを閉めた途端、
ニコッと笑って「作戦成功！」と雪見を見た。

ぽかんとした顔の雪見に、作戦の意味などわかるはずもない。

変身成功っ！

夏美に連れられて控え室に戻った雪見に、待ち構えていた今野がすかさず
グラスを差し出す。中には薄黄金色の液体が…。

「えっ？これって…。」
戸惑う雪見に今野が、いいから早く飲め！と急かした。

「これ、どう見ても白ワインですよね…？
もしかして私のこと…アル中だとか思ってません？違いますからっ！」
とんでもない勘違いをされてるかと焦って、全力で否定する。
確かに、酒好きであることは否定しないし、今まで数々の緊張する大舞台を、
酒の力で乗り切って来たことも確かだ。
でも、断じてアル中なんかではないことを強調した。

「そんなこと、思っちゃいないさ。ただの気付け薬だよ。
名付けて『酔拳作戦』だ！」
今野は、自分が考えた作戦だと威張ってる。

「何ですか？酔拳作戦って？」
ピンとこない様子の雪見に、今野はがっかりした。
我ながら、グッドネーミングだと思ってたのに…。

「お前さぁ。ジャッキーチェンの、あの名作を知らないのぉ？」

「あぁ！そう言えば見た事あります！『酔拳』ね！

お酒を飲めば飲むほど強くなって、千鳥足みたいなカンフーで、次々と
敵をやっつけるやつですよね！」

「やっと判ってくれたか！そうだ！だからお前も早く飲め！」
今野は突き出したグラスを、強引に雪見の手に握らせた。

「でも…。」チラッと横目で夏美を見る。

「いい？よく聞いて。あなたは、緊張さえ解ければ凄い力を発揮出来るの。
お願いだから飲んでちょうだい。時間が無いの！当麻と健人には時間が無いのよっ！」
夏美がしまいには金切り声を上げた。

「わかりました…。そうですよね。私だけがネックなんだもん…。
みんなに迷惑はかけたくない。」
そう言うと雪見は、手にした大ぶりのグラスを少し眺めたあと、水でも飲むかのように
ゴクッゴクッとワインを一気飲みしてしまった。
その飲みっぷりの良さには、さすがの今野と夏美も唖然としてる。

「うわぁー！めっちゃ美味しいです、このワイン！
飲みやすいから、いくらでも飲めちゃいそう！もう一杯貰ってもいいですか？」

「お、おう、飲め！解禁になったばかりのボージョレ・ヌーボーだ！美味いだろ！」
いきなりスイッチの切り替わった雪見にたじろぎながらも、空いたグラスに今野が注ぐ。

が、その数秒後には、またしてもグラスが空になってしまった。
恐るべし、雪見！

「ふぅ…。あー、美味しかった！ごちそうさまでした。
なんだかすっごくやる気が出てきたぞー！よっしゃ！ＳＪのために
変身といきますか！
じゃ私、スタジオに戻りますねっ。」
雪見は、明らかに別人になって控え室を出て行った。

「なんか…上手く行きすぎて怖いんですけど…。
あ！私も早く戻って、さっきの芝居の続きをしなくちゃ！嫌われ役
も仕事のうち。
今野さんは証拠隠滅をお願いね！じゃ、先に行きます。」
夏美が雪見の後を追って、小走りにスタジオに戻ってみると…。

雪見は真剣な顔をして、監督に再び演技指導を受けている。
「セリフは『大好き！』の一言だが、声は録音されない。
口の動きだけで言葉がわかるように、はっきりと頼む。
それと、ここは三人の表情がアップになるシーンだ。
君は心を込めて、二人にセリフを言ってくれ。いいな？」

「わかりました。やってみます。皆さんよろしくお願いします！」
どうやらエンジンがかかったようなので、夏美はスタジオの後ろから、
取りあえずは様子を伺うことにした。

雪見の立ち位置である健人と当麻の間に入り、「さっきはごめんね！私、頑張るから！」
と、にっこり笑う。

夏美にきつく叱られてるだろうと心配していた二人は、雪見の豹変ぶりと
微かに漂った香りに心当たりがあり、お互い顔を見合わせた。
「もしかして、いつものパターン？」「…のような気がする。」

「じゃ、本番行きまーす！」
スタジオ中に緊張が走る。もちろん注目を集めているのは雪見だ。

「よぉーい、スタートッ！」
監督の声を合図に三人の演技が始まった。

大切な仲間との繋がりを歌ったＳＪのデビュー曲『キ・ズ・ナ』
ＰＶのメインはこの三人だが、同じ事務所の若手俳優仲間たちもワンカットずつ
「大好き！」と言ってる表情が、友情出演的に使われる。
そしてこの三人の演技はというと…。

雪見が健人と当麻の首に腕を回し、グイッと二人の顔を引き寄せながら
「大好きっ！」と言うシーンなのだが、監督からＮＧが出されてしまったのだ。
雪見は自分に出されたＮＧだと思い、「ごめんなさーい！」と謝ったが、
監督が出したのは健人と当麻に対するＮＧだった。

「おいおい！せっかく雪見ちゃんがいい演技したのに、プロの俳優二人が、その表情はないだろっ！
大好きな仲間に対して言った『大好き！』なのに、なんで愛を告白された！

みたいな顔しちゃったわけ？」

二人は『しまったぁ！』とバツが悪い。
そんなつもりはなかったのだが、雪見の演技とは思えない迫真の「大好き！」に
ついつい胸がキュンとして、顔が勝手にそうなってしまったのだ。

「ごめんなさい！私の言い方が悪かったですね！気合いが入り過ぎました。
今度は『ＮＧ出しやがって！だけど好きだよ！』バージョンでいきますねっ！」
雪見が茶目っ気たっぷりに笑いながら言うと、周りからドッと笑いが巻き起こり、
張りつめた空気が一気にまろやかになった。

それをきっかけに撮影はスムーズに進み出し、スタジオの中庭に場所を移しての撮影も、
天気に恵まれていい絵が撮れたようだ。

「よしっ！ＳＪのＰＶ、オールアップだ！お疲れっ！」
監督の終了宣言に、みんなから拍手が湧き起こる。

「よっしゃあ！お疲れ様でしたぁ！ありがとうございまーす！」
健人もスタッフに向かって、ねぎらいの拍手を送る。

当麻は、「腹減ったぁ～！メシにしよう！俺、手伝うよ。」と率先して中庭に弁当を運んだ。

小春日和の柔らかな空を見上げ雪見は、山を一つ乗り越えた心地良

い疲労感に満足していた。

さぁ、次はいよいよ私の番！気合いを入れ直して頑張るぞっ！

プロデューサー夏美の過去

昼食休憩を終えた午後一時過ぎ。
今度はロケバスで、少し離れた白樺林へと移動した。
木漏れ日差し込むこの場所が、『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ;』のＰＶのメインステージとなる。

「よし！準備を急いでくれよ！あっという間に日が傾くからな！
最初は雪見ちゃんの歌ってるシーンからだ。
その後、当麻と雪見ちゃんのシーン、健人と雪見ちゃんのシーンの順で行く！」
監督の大声が林に響き渡った。

ここからは、『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ;』のキャラクタープロデュースを担当する、
夏美も加わっての共同作業だ。
この場所もＰＶの衣装もストーリーも、すべて夏美が『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ;』のイメージにこだわり抜いて決定した。

今まで、数多くの新人をプロデュースしてきた夏美だったが、なぜか雪見には
とりわけ力が入る。
出会った頃は、三つ年下の雪見のあれもこれもが鼻につき、ただ業務命令として
仕事を淡々とこなすのみだった。
それがどうした事か、今はこのプロデュースに夢中になってる。
なぜだろう…。

その理由を、最近夏美は見つけ出した。
私は雪見を通して、はかない夢を見ているのではないか？
遥か昔に諦めた夢を、雪見の身体を通して、疑似体験しようとしているのではないのか、と…。

夏美は十代の終わりに、歌手を目指していた時期がある。
自分で作詞作曲をした、青春や淡い恋の歌を、路上でギターを弾きながら歌っていたある日。
「デビューしてみないか？」と、ある事務所にスカウトされた。
夢のような話に、親にも相談せず二つ返事で承諾。

だが…。その事務所は夏美に、セクシー路線のキャラクターを強要した。
大きな胸を強調するような、水着みたいな衣装。
きわどい歌詞に、セクシーポーズの振り付け。
何一つ、自分の思い描いてたものとはかけ離れていた。
自分の身体を憎んだ。この口元のホクロが悪い！この大きな胸が悪い！
こんな身体に産んだ親が悪い！…と。

それっきり…夢は諦めた。人目に付くのも怖くなった。
なるべく胸の目立たない地味な服を選び、口元のホクロはコンシーラーを重ねて薄くする。
目鼻立ちのはっきりした、美人顔と呼ばれた顔には眼鏡を掛けた。
これでいい。もう、ひっそりと生きて行こう…。

それから四年ほどが過ぎ、心の傷もだいぶ癒えた頃。
とある居酒屋である男性と出会い、仕事の話で意気投合した。
夏美は大学を卒業してイベント会社の事務職につき、男性は芸能事

務所にいると言う。
それが今の事務所の、小野寺常務との出会いだ。

十歳年上の小野寺は、当時マネジメント部長に就いたばかり。
始めはトラウマ的に、芸能関係者なんてと身構えていた夏美だったが、
小野寺の話に浮ついた話題はなく、仕事としてのマネジメント業務を熱く語り、
また勉強になる話もたくさんしてくれた。
何度か同じ居酒屋で顔を合わせ話をするうちに、いつしか夏美の中で
「私もやってみたい！」という思いがつのり、小野寺の紹介で転職したのだった。

あれから十三年…。
小野寺は、若きやり手の常務取締役になり、夏美はその片腕として期待されている。
夏美が入社当初から、何度か小野寺との関係を噂される事もあったが、
今も昔も二人の関係は、ビジネスパートナー以外の何者でもなく、お互い
恋愛感情など湧いたこともない。

夏美が小野寺から学んだキャラクタープロデュースの極意は、
「今備わっているものを最大限に生かせ！」というシンプルな事だ。
人間、持ち合わせていない物を後からくっつけても、結局は身体に馴染まず
ただの張りぼてになり、それさえもいつかは剥がれ落ちてしまう。
だったら、今持っているものの幅を少しずつ、最大限にまで拡げてやる事、
本人の気付いていない引き出しを開けてやる事が大切、と教わった。

だから…夏美も自分自身を覆い隠すのはやめにした。
この身体は持って生まれたもの。なにも恥ずべきことでは無いと思えてから
身も心も軽くなり、性格も前向きに変わっていったのだ。
今ではこの仕事が天職だとさえ思える。

そんな夏美が、雪見を通して夢を見ていた…。

「撮影の準備ができたから、ロケバスから雪見ちゃんを呼んで来て！」
監督の声に、スタッフが飛んでいく。
「スタンバイ出来ました！お願いします！」「は、はいっ！」
スタイリスト牧田と共に降り立った雪見の姿に、みんながどよめいた。
あちらこちらから聞こえる賞賛の声に、夏美は嬉しそうに「フフッ！」と笑ってる。

白に近いベージュの、フレアたっぷりのノースリーブワンピース。
丈は前身ごろが膝上で、後ろが少し下がっている。
足元には焦げ茶色のレースアップブーツを履いていて、背中にはなんと
大きな翼が付いていた。

「女神様みたい…。」

当麻と共に、ディレクターズチェアーに座って出番を待ってる健人が、思わず呟いた。
あまりにも美しすぎて、それ以上の言葉が出てこなかった。
しばらくボーッと見とれたあと、隣の当麻に感想を聞いてみる。

「どう思う？」

「…寒いと思う。あれじゃ、ベンチコートも着れないや。」

確かに、健人と当麻を始め周りは全員、ベンチコートを着ていた。
十一月も後半の軽井沢では、間違っても小春日和に騙されて、こんな格好をしてはいけない。

「は、はっくしゅん！あのー、寒過ぎなんですけどぉー！」

雪見の叫びが、晩秋の白樺林にこだまする。
その日の夜、雪見が熱を出したのは言うまでもない。

ＰＶ打ち上げ！

「カンパーイ！お疲れぇ～！！」

午後九時。
東京に戻ってザッと後片付けを終えてから、お洒落なイタリアンレストランを貸し切って、
ＰＶの打ち上げ立食パーティーが行なわれた。
無事予定通りに撮影が終了し、関係者一同、心から安堵してお互いをねぎらう。
あちこちで今日の撮影を酒の肴に、話が盛り上がっていた。

「いやぁー、無事今日中に終って良かった！本当に良かったよ！スタートがあんなんだったから、どうなることかとヒヤヒヤだったもんな！」
若い撮影スタッフがピザを頬張りながら、「あんなんだった」雪見の様子を振り返る。

「ホント、俺も『マジかよ、こいつぅ！？』とか思ったもん。
事務所が押してる意味がわかんなかった。
だって、猫カメラマンでしょ？はっきり言って、ド素人でしょ？」

「それが…。」
二人が声を揃えて言ったあと、店の真ん中のテーブルに健人達といる雪見を見た。

「綺麗だったよなぁ、本当に。白樺林に溶け込んで、森の妖精みたいだった。」

「うん！歌もめちゃくちゃ上手かったし！でも３３歳なんだって？惜しいよな、年が…。もうちょっと、若かったら良かったのに。」
残念そうな二人の後ろから、突然声が覆い被さった。

「３３歳の、どこがいけないわけっ？」

「な、夏美さんっ！」
振り向くと、ワイングラスを持った夏美が仁王立ちになっている。
ピューッと二人は、散り散りになって逃げ去った。

「ほんっとに近頃の若いもんは！何でも若けりゃいいと思ってんだから！
あら、常務！お疲れ様です！出張から真っ直ぐこちらへ？」
今来たばかりの小野寺が、スタッフからワイングラスを受け取り、夏美の元へ歩み寄る。

「あぁ、早くみんなの顔が見たかったんでね。で、若いもんがどうしたって？
いや、まずは乾杯しよう。お疲れ！」
二人はにこやかにグラスを合わせた。

「監督にチラッと話を聞いたよ。いいのが撮れたって。えらいご機嫌で安心した。
小林も良く頑張ったな！結構大変だっただろ？彼女。」
小野寺が、笑いながら雪見の方を振り返る。

「えぇ、まぁそれなりに。でも…彼女には楽しませてもらいました。常務にも感謝してます。私にこんな仕事をくださった事…。」
夏美は束の間に見た夢を思い出し、いつもの表情とは違う穏やかな

顔をして
小野寺に微笑み返した。

「珍しいな、お前から感謝されるなんて。今夜は雪でも降るのかな？」

「失礼な！私、入社前から常務には、感謝しかした事ありませんけど？」
そう言ってまた夏美が笑う。
小野寺は、いつになく夏美が笑顔でいることが嬉しかった。

「じゃあちょっと、今日の主役三人組に挨拶してくるかな。」
雪見たち三人のテーブル周りには、たくさんの人が集まっていたが、常務が近付いて来たとわかると、皆さっと場所を空けてくれた。

「よっ！お疲れ！無事終って良かったな！」
ワイングラスをかかげて、一人ずつと乾杯する。

「ありがとうございます！なんとかクリアしましたっ！
まぁ俺と健人は、芝居に関しては本業だから問題なかったんですけど、
この人が…ね。」
当麻がニヤニヤしながら、隣の雪見に視線を移した。

「なによっ！私なんか、本番で一度もＮＧ出してないでしょ！
アンタ達二人でしょ、いきなりＮＧ出したのはっ！
常務ぅ！聞いて下さいよ！この二人…。」
雪見が小野寺の腕にしがみつきながら、撮影中の様子を訴える。
が、その瞬間、小野寺はおやっ？と思った。

「おいおい！もう早酔っぱらってんのか？まだ始まったばかりだぞ！どんなピッチで飲んでんだか、まったく。」
呆れ顔で雪見の腕をほどきながら、健人に小声でささやいた。

「どうやら雪見は熱がありそうだ。適当な所で雪見を連れて先に帰れ。
あとは俺と当麻で繋いでおくから。ちゃんと看病してやれよ。」

「えっ！？」

雪見が熱を出していたことにも驚いたが、もっと健人が驚いたのは、小野寺が二人の同棲を、知ってるかのような口ぶりだったことだ。
事務所でその事を知っているのは、二人のマネージャーと当麻だけのはず。
いや、自分の思い過ごしか？親戚として、家まで送って看病しろって意味なのか？

まさか真意の程を直接聞くわけにもいかず、健人はモヤモヤを抱えたまま、
さりげなく雪見の手を握って熱の具合を確かめた。

「熱っ！ゆき姉っ！」
あまりの高熱に、思わず健人が大声を上げてしまう。

『まずい！熱があること、みんなにばれちゃう！』
雪見は、次に発しようとしてる健人の言葉を阻止すべく、とっさに芝居をする。

「やだなぁ、健人くん！そんなにあの時の私の演技、熱かった？
ＮＧ出さないように、私だって必死だったんだから！」

と、かなり苦しい芝居だったが…。

結局雪見は、「先に帰ろう！」と言う健人の忠告も聞かず、一次会の最後まで
笑顔で平成を装い、いつも通りに酒を飲んだ。

「よっしゃあ！じゃ、二次会はみんなでカラオケ行くぞー！
雪見ちゃんの歌を聞きたい奴は、ついてこーい！」
監督が上機嫌で場を仕切るが、健人はこれ以上雪見を連れ回す訳にはいかないと、
慌てて待ったを掛ける。

「すみませーん、監督！ゆき姉、飲み過ぎちゃって、もう駄目みたいでーす！
俺、家まで送って来るんで、みんなで先に行っちゃってて下さい！」

「あれ、ほんとだ！ずいぶん真っ赤な顔しちゃって！
かなりの酒豪って聞いてたけど、さすがに今日は飲み過ぎたか！
じゃ、当麻の歌を聴きたい奴は、ついてこーい！」
みんなが楽しそうに、ワイワイとお喋りしながら店を出る。
雪見と健人の元に、当麻と小野寺がさり気なく近づき声をかけた。

「こっちの事は心配すんな！俺たちに任せて早く帰れ。
健人も、今日はもう戻って来なくていいからな！これは業務命令だ！
それと雪見！あんまりムリすんなよ。
小林が謝っといてくれ！って。ずいぶんと寒い格好させられたんだって？
自分のせいで熱出したって、済まなそうにしてたよ。」
小野寺の言葉に雪見はびっくりした。

「夏美さんのせいなんかじゃありません！私の自己管理が悪かっただけです　！
夏美さんに伝えておいてもらえますか？
夏美さんのお陰で、『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ；』に成り切る覚悟が出来た、って。
感謝してるって、伝えて下さい。」
真剣な顔で訴える雪見に、小野寺は笑顔で答える。

「よし、わかった！伝えておくよ。これからはどんな格好でもＯＫだってね！」

「えーっ！そういう意味じゃありませんからぁ！」

四人の笑い声がキラキラ輝く星になって、夜空に溶けてゆく。
これから踏み出す新たな世界へと、ギュッと絆を一つに結んで…。

亡き父を想う時

「はぁぁ…。駄目だなぁ私って。なんでこんな時に熱出しちゃうんだろ。
打ち上げ、楽しみにしてたのに…。」
二次会を断念した帰りのタクシーの中。
隣の健人にもたれ掛かった雪見が、深いため息をつく。

「今日は仕方ないでしょ。相当熱あると思うよ。だって、めっちゃ熱いもん！」
雪見のおでこに手を当てた健人が、「寒くない？」と聞きながら自分のストールを外し、
雪見の首にクルクルッと巻いてやる。

「ありがと。健人くんは折り返し戻ってね。みんなが待ってる。
私なら心配いらないよ。帰ったら大人しく寝てるから。」
高熱のせいか、雪見は肩で息をしていた。

「こんな病人置き去りにして、自分だけ飲みに行くような、薄情な奴に見える？
いいんだよ、一次会はきっちり出たんだから。
きっと今頃当麻が、俺たちの分も盛り上げてくれてるさ。
それに常務が『業務命令だ！』って言ってただろ？業務命令違反は減給処分なのっ！」
そう言って健人が笑って見せる。
いつも、さり気ない健人の優しさに、雪見は救われるのだった。

夜が明けて朝7時。雪見はそっとベットを抜け出しシャワーを浴び

る。
一晩中汗をかいたお陰で、どうやら熱はほぼ下がったようだ。
今日の午前中は撮影の予備日だったので仕事はない。
午後二時からは三人で、ツアー告知ポスターの撮影がある。
昨夜遅くまで台本を読みながら看病してくれた健人は、ギリギリまで寝かしてやろう。

雪見はコーヒーを落とし、カフェオレを作ってからパソコン前に座る。
高熱の後で少し頭は重たいが、どうやら風邪では無かった事に安堵し、
早速仕事の続きに取りかかった。

宇都宮のためにパソコン上で作ったアルバムを、一ページずつプリントアウトする。
愛しそうに猫に頬ずりする顔。みずきのことを、父親の優しい眼差しで見つめる横顔。
二人で寄り添い、健人の写真集を覗き込みながら見せる笑顔。
そこに写し出されているのは、眼光鋭い大俳優の顔ではなく、完全に素に戻った
娘を想う父の顔であった。

それを眺めてた雪見が、ふと亡くなった父を思い出す。

死んでから、もう２３年も経つんだ。早いなぁ…。
父さんが生きてたら、今の私を見てなんて言うだろう。
ふらふらと色んな事に首を突っ込んで！って、カメラマン一筋に生きた父さんなら怒るかな。
それとも、たった一度きりの人生なんだ。好きなように、思い残す事なく生きなさい、

と励ましてくれるかな。
あ、でもその前に、３３にもなって、まだ嫁にも行ってないのか！
って
渋い顔をするかもね。
ごめんね、父さん。それはムリだわ。
だって私、あんな若いアイドルを彼氏にしちゃったんだから…。

宇都宮の写真に父の顔を重ね、久しぶりに心の中で対話していると、
寝室から『あんな若いアイドル』が起きてきた。

「おはよ！もう仕事してんの？熱は？」
びっくりしながら健人が後ろからおでこに手を回し、雪見の熱の具
合を確かめる。

「うん、まぁまぁかな？これ、この前写した写真？」
焼き上がったばかりの一枚を手に取り、ワンショットずつ眺めた。
やっぱり雪見は凄いカメラマンなんだと改めて思う。
あんな大俳優が、人生最後の時を飾る大事な写真を、この人に託す
のだから…。

「早く宇都宮さんに見せてあげたいの。仕事の前に病院へ届けよう
と思って。
そうだ！健人くんも一緒に行かない？宇都宮さん、健人くんの写真
集見て、
会ってみたいって言ってたんだよ！健人くんと当麻くんに。
これからの日本を背負って立つ二人に、伝えておきたいことがある
って…。」

「えっ？」

雲の上の存在である大先輩の言葉が、嬉しくないはずはない。
だが…。その言葉に応えられるだけの実力が、果たして自分には備わっているだろうか。
託される言葉が、自分たち若手俳優への『遺言』となる事が判っているだけに、
二つ返事で「行く！」とは言えなかった。

「もう…会えなくなる人なんだよね、一生…。
私、演技の事はよくわからないけど、もし自分と同じ職業の大先輩が、
最後に何かアドバイスをくれるとしたら、私はその言葉を聞いてみたい。」
雪見は、亡くなった父のアドバイスを聞いてみたいと思った。
大先輩のカメラマンである、父の言葉を…。

「当麻…。じゃ当麻も連れて行きたい！俺一人なら、何を話せばいいのかわからないけど、
あいつと一緒なら、色々聞いてみたいことがある。」

「ほんと!?二人が来たら、絶対宇都宮さん、喜んでくれると思う！ねぇ！当麻くんに電話してみて！車で迎えに行くからって。」

健人が「あいつ電話に出るかなぁ。」と言いながら、ケータイを取り出す。
確かに、二日酔いでダウンしてる気もする…。が、予想外にすぐ電話が繋がった。

「もしもし、当麻？俺だけど！昨日は悪かったな、一人で宴会係やらせちゃって。
もしかして二日酔いでぶっ倒れてた？え？飲んでる暇なかったって

？ゴメンゴメン！
あのさぁ、仕事前に宇都宮さんのお見舞い行くんだけど、お前も一緒に行かない？」
健人からの突然の誘いに、ケータイの向こうから叫び声が聞こえた。

「うそっ！？マジ俺も一緒に行っていいの！？やばっ！どんなカッコしてけばいいんだろ？
めっちゃ緊張する！えー！少し酒臭いかな？どーしよう！！」

「なに、テンパってんの？一人で。そりゃ大先輩に初めて会うんだから
俺も緊張はするけど、別に怒られに行く訳じゃないんだから…。
十一時頃迎えに行くって、ゆき姉言ってる。んじゃ、後でね！」

電話を切ったあと、当麻の慌てっぷりを健人から聞き、雪見は大笑いした。
「それってまさしく、彼女の親に初めて会う彼氏の、王道の反応だよねー！」

「えーっ！？そうなのぉ！？そーいうこと？当麻とみずきって、デキテんのぉ？」

「いや、これからそうなると思う。私が見る限り、まだ付き合ってはいないな！
キャー！当麻くんの反応が楽しみっ！こうしちゃいられん！早く完成させなくちゃ！」

雪見は大急ぎで最後の仕上げに取りかかる。

だが、みずきに連絡することを、出掛ける直前まですっかり忘れていた。

君に届け！

「当麻くん？雪見だけど。もう出掛ける準備出来てる？
じゃあ、これから迎えに行くから。着いたらまた電話する。後でね！
…よし！出発しますか！」
健人を助手席に乗せた雪見が、マンションの駐車場で車にエンジンをかける。
が、すぐに健人が「待った！みずきに連絡した？」と聞いてきた。

「あ！してない！忘れてたぁ！早く電話しなきゃ！」
慌てて雪見がみずきに電話する。今日も朝から病院にいるはずだ。

「あ！もしもし、みずきさん？雪見です！今、話して大丈夫？
あのね、これから写真を届けたいんだけど、宇都宮さんの体調はどう？
そう、この前写した写真。え、大丈夫？じゃ、これからそっち向かうね！
あぁ、そうだ、健人くんと当麻くんも一緒なんだけどいいかな？」
…と聞いたと同時に、「えーっ！？うそーっ！当麻も来るのぉー！？」
と、隣の健人にも聞こえるくらいの絶叫が、雪見の耳を直撃した。

「び、びっくりしたぁ！ごめん！健人くんたちはまずかった？
いや、すぐは着かないよ。今うちのマンションだから、これから当麻くんを迎えに行って、
途中でお花屋さんに寄ってから行こうと思ったんだけど…。
だったら大丈夫？あー、良かった！ごめんね！突然で。じゃ、また後で！」

電話を切ってから雪見は、みずきの慌てっぷりがおかしくて大笑いした。
「あははははっ！みずきさん、可愛いーっ！当麻くんも一緒だって言ったら
『メイクしてないのにーっ！』って慌ててた！」

「あいつ、この前まで俺たちとすっぴんで会ってたじゃん！何を今さら。」
健人が「ようわからん奴だ！」と小首を傾げる。

「だーかーらぁ！今は二人とも、そーゆー時期なのっ！案外にぶいね、健人くん。
病院着いたら二人の様子を観察してみ！楽しいから。
じゃ当麻くんを拾ったら、少しお花屋さんで時間稼ぎしようか。みずきさんのために。」

「どんだけメイクに時間掛かるんじゃ！今度からは真っ先に連絡入れてやれよ！」

「そうだね、反省反省！そんじゃ、出発！」

当麻のマンションに着くと、すでに当麻は外に立っていた。
「おはよー！」と、実に爽やかに車に乗り込んでくる。
打ち上げで朝方近くまで、飲んで騒いでたはずなのに…。

「おはよ！昨日はごめんね！二人とも先に帰っちゃって。
二次会はどうだった？楽しかった？」
雪見は、車を発進させながら当麻に聞いた。

「めっちゃ疲れた！あの人数を俺一人で盛り上げるのはムリがある！常務がいつものマジックショーをやってくれたから、まだどうにかなったけど…。」
当麻がぶーたれた顔をする。

「ごめん！本当にごめん！もう熱出さないから。
お詫びにと思って、宇都宮さんのお見舞いに誘ったんだけど、疲れてたんなら
仕事まで寝てた方が良かった？」
どう見ても当麻は、父親受けしそうな服を選んで着ていた。
それを見抜いてわざと意地悪く聞いたのだが、可笑しくて笑いを堪えるのが大変だった。

「え？い、いや別に、疲れたっちゃー疲れたけど、せっかく誘ってくれたのに、
断るのも悪いじゃん！
それに俺、若い頃の宇都宮勇治に似てるってよく言われるから、一度本人に
会ってみたいと思ってたんだ！で…みずきも居るの？」
雪見が、ルームミラー越しに目撃した、当麻の嬉しそうな顔に堪えきれず
クスクスと笑い出す。

「な、なに笑ってんのさ！あ！このカッコおかしかった？もっと地味な色が良かったかな？
えー！ちょっと着替えに戻りたいんだけど！」
当麻の慌てっぷりには健人も爆笑した。

「わかりやすっ！久々に見たわ！お前のそーいうの。

大丈夫、大丈夫！どんなカッコでも当麻くんはイケてますから！
さー、とっとと花屋寄って病院行こ！」

病院に行く途中にあるお洒落で小さなお花屋さんは、雪見の行きつけの店だ。
大好きなアンティーク雑貨でコーディネートされていて、細長い店の奥には
四人掛けテーブル一つ分の、カフェスペースが併設されている。

「こんにちはー！」
古い木戸を押し開けた雪見を、五十近くのヒゲの店主が笑顔で迎え入れた。

「あ、雪見ちゃん、いらっしゃ…い！あれ？なんか見たことある人だ！」
雪見の後から入ってきた当麻を見て、店主が驚いてる。
だが当麻も同時に驚いた。

「え？男の花屋さん？しかも、どっかで会ったことあるような…。」

「ふふふっ、そう思う？この人ね、『どんべい』のマスターの弟さん！マスターに似てるでしょ。
あれっ？ママさんはいないの？」

「今、配達に出たとこ。で、今日のご注文は？」
場所柄、よく芸能人が来るらしく、店主は当麻に一度驚いたきりで、あとは普通の顔をしてる。

花に興味の無い健人は車で待ってると言ったのに、当麻は「一緒に

行く！」
と付いて来たのだ。どうやら自分も何か買いたいらしい。誰かさんのために…。

「病院にお見舞いに持って行く、アレンジメントが欲しいの。大体一万円ぐらいで。」

「男性？女性？いくつくらいの人？雰囲気は？」

宇都宮の顔を思い浮かべ、「あ！この人をおじいちゃんにしたような人！」
と当麻を指差すと、店主は「ＯＫ！任せといてっ！」と雪見に小さくウインクした。

夫婦でやってる店なのだが、他店にはない品揃えの花が多く、また夫婦共にセンスが良いのでお任せで作ってもらうアレンジメントは、誰にプレゼントしても大層喜ばれる。いつもはその手際よい手さばきを、カフェでお茶しながらうっとりと眺めて待つのだが、
今日はそうもいかなかった。
当麻がみずきへの花を、あーでもないこーでもないと悩むのに付き合わされた。

「なにこれ？みずきさんにどーゆー目的で渡すお花？」

「も、目的ってなんだよっ！理由がなきゃ花って、やっちゃダメなわけ？ただの手土産！
人を訪問する時は、何か手土産を持って行け！って親にしつけけられたのっ！」

「じゃあ、お店にお任せでいいんじゃない？」
「それじゃ気持ちが伝わらんでしょーが！」
「だから、どーゆー気持ちよっ！もう、バレバレだからね！言っとくけど。」

宇都宮への大きなアレンジメントが完成してもなお、当麻は腕組みして真剣に悩んでる。

彼女への想い、届くといいね！
けど、健人くんがしびれ切らして待ってるから、早くしてっ！

嬉しい忠告

花屋の前に止めた車の中から、健人がじっと出入り口を凝視している。
すると、やっと雪見が、大きな花かごを両手で抱えて店を出てきた。
当麻はその後ろから、小さく可愛らしい花かごをブラブラさせて、上機嫌でついてくる。

「おそっ！めっちゃ待ったんですけど！」
雪見が車のトランクルームを開けた途端、健人が文句を言った。

「文句は当麻くんに言ってよ！もぅ、これだけの花をみずきさんに選ぶのに、
どんだけ時間かけるんだか！」

「お前、そんなちっちぇー花かご一つで、みずきを落とそうと思ってんの！？マジで？」
後部座席に乗り込んだ当麻を振り向き、健人が驚きの声を上げた。

「な、なに言ってんの！なんで俺がみずきを、落とさなきゃなんないんだよっ！
ばーっかじゃねっ！？」

色白の当麻は、耳まで赤くなるので分かりやすい。
その後も車内は、当麻ｖｓ健人の壮絶なバトルが繰り広げられ、決着のつかないうちに
病院の駐車場へと到着してしまった。

車の中からみずきに電話して、着いた事を告げる。
「うん、わかった。裏のエレベーターね。気を付けて行く！じゃ。
…一階の外来前は平日で患者さんが大勢いるから、裏玄関から入れって。
どっちにしても、見つからないようにしないと…。」

「よしっ！行きますか！」
キャップを目深に被り直し、はりきって最初に車を降りたのは当麻だった。
だが、大きな花かごを抱えた雪見だけが、あまりにも目立ちすぎるので
別々に特別室のある１２階まで行く事にする。

健人と当麻が見つかるのではないかと、雪見は内心ヒヤヒヤしていたが、
病院の中での変装マスク姿は、都合良いことにまったく目立たず、
すんなりと１２階に到達することが出来た。

ずらっと特別室が並んでいる一番右奥のフロアは、病院と言うよりも、
どこか高級ホテルを思わせる空間だった。
いかにも、特別な人達が入院してる事をうかがわせる。
その中の一室に、日本が誇る名優　宇都宮勇治が横たわっていた。

「ふぅぅ…。緊張するなぁ。俺、本当に変じゃない？」
長い廊下を歩きながら、当麻はそればっかり気にしてる。

雪見も健人も、『お嬢さんをください！とでも言うつもりかぁ？』と、

同じ事を考えながら、「はいはい！変じゃありませんよ！」と適当に返事した。
今日は、写真を届けに来ただけのはずなのになぁー。

トントン！　深呼吸を一つしてから、雪見が宇都宮の病室をノックする。
「はい！どうぞ！」とみずきの声が聞こえたので、そーっとドアを開けた。

「こんにちはー！また来ちゃいましたぁ！今日のご機嫌はいかがですかぁ？」
いきなり雪見がワントーン高い、明るさマックスの声で病室になだれ込んだので、
後ろに控えてた健人と当麻はギョッとする。

『えっ！？そんなテンションで良いわけ？』

恐れ多い大先輩、しかも最期の時を間近にした人に面会するのに、とドアの外に立ってた二人は戸惑った。
だが、病室の中の三人は、びっくりするほど明るく笑い合ってる。
しかも雪見は宇都宮の事を、自分のおじいちゃんとでも思ってるかのような振る舞いだ。

『おいおい、ゆき姉！その人は、とんでもなくすげぇ人なんだぞっ！わかってんのかぁ？』

健人と当麻はハラハラしながら、遠く雪見を眺めてる。
すると、それに気付いた宇都宮が、「突っ立ってないで、君たちも中に入りなさい。」
と二人に声を掛け、みずきには、ベッドを起こしてくれるように頼

んだ。

「は、はいっ！！」

直立不動のまま、おずおずと宇都宮のベッドまで足を進める。

横並びに整列して、まずは健人が挨拶をした。

「初めまして。斎藤健人と言います。今日は突然お伺いして申し訳ありません！」

健人が頭を下げたので、当麻もそれにならって頭を下げる。

が、頭を上げたあと、まだ健人の挨拶が続くもんだとばかり思ってた当麻は、

『次！お前の番！』と言うように、横を向いた健人に慌てた。

「え、えっと、三ツ橋当麻と言います！

いつもみずきさんには大変お世話になり、有り難く嬉しく思っておりますっ！」

カチコチになった当麻のかしこまった挨拶に、雪見と宇都宮は大笑い。

「ばっかじゃないのっ！なにその『秋の園遊会』で、天皇陛下にでもするみたいな挨拶は！」

みずきは顔を赤くして、当麻を鼻で笑う。

「まぁまぁ、そんなに硬くなることはないよ。

こちらこそ、みずきが仲良くしてもらってるそうで…。

一度君たちには会ってみたいと思ってたんだ。今日は会えて嬉しいよ。」

宇都宮は体調がいいのか、穏やかな笑みをたたえながらそう言った。

その言葉を聞いた瞬間の、二人の嬉しそうな顔！やっと少しだけ緊張が解けたようだ。

「ほら！ここに座って！今、コーヒーが入ったから。あ！綺麗なお花、ありがとね！
まぁ、どうせ雪見さんが見つくろって、あんた達はお金を出しただけだろうけど。」
みずきがいつもの通り、健人と当麻に悪態をつきながらコーヒーを運んで来ると、
すかさず当麻が反論する。。

「ひっでー！俺なんて、ちゃんと花屋の中まで入ったから！
健人だよ！車ん中で、ブーブー言いながら待ってたの！」

「おーいっ！そーいうこと言う？
お前がみずきに、あんだけの花選ぶのに、散々迷ってえらい待たせたくせに！」

「えっ！？あの小さい方のお花って…当麻が私に…くれた…の？…
どうして？」
みずきが驚いて瞬きもせずに、大きな瞳で当麻のことをジッと見つめた。

「ど、どうして？って…。そ、そう！ただの手土産だよ、手土産！
別に深い意味は何にもないから、ぜーんぜん気にしないで。
あ！それとも食い物の方が良かった？お前、可愛い顔して結構食うもんな！」
当麻のへったくそな芝居に、雪見と健人がクスクス笑ってる。
若者達のやりとりを楽しげに見ていた宇都宮が、なぜか嬉しそうに
当麻に話しかけた。

「君は性格まで、若い頃の私にそっくりだ！昔の自分を見ているよ

うだよ。
だがな、一つだけ忠告しよう。自分の気持ちには、常に正直でなければいかん。
じゃないと、将来私のように後悔することになるぞ。」
そう言って宇都宮は、当麻の目を見てにっこりと微笑んだ。

「え!?ァ…はいっ!ありがとうございますっ!」

とっさには解らなかった言葉の意味に気付いた当麻は、嬉しくて舞い上がりそうだった。
それはまるで結婚でも許されたかのように…。

父の頼み

そこは病室とは思えないほど、華やかでにぎやかな時間が流れていた。
猫こそいないが、まるで『秘密の猫かふぇ』がここに移動してきたかのように…。

大先輩である宇都宮の演劇論を、みずきを始めとする三人の若い役者が
真剣な顔で聞いてたり、かと思うといつものごとく、お互いバカ言いながら
みんなで大笑いしたり。
宇都宮は、雪見の手渡したアルバムを大事そうにめくりながらも時折、
みずきと当麻が仲良くじゃれ合っているのを、目を細めて嬉しそうに眺めてる。

それぞれが自由気ままに時を過ごしているのだが、プライベートな時間であっても
俳優や女優という人達の、生まれ持ってのオーラは消えやしない。

どこにでもありそうな、ありふれた光景なのに、部屋の隅々にまで眩しい光が
充ち満ちているようだった。

雪見はどうしてもこの贅沢な光景が撮りたくなり、みんなの許可を得てカメラを取り出す。
始めは、気軽なスナップ写真のつもりで、笑いながら写していたのだが、

いつの間にか真剣なプロカメラマンの顔つきになり、夢中でシャッターを切り続けた。

「ちょっとちょっと、ゆき姉！なんで仕事モードに入ってんの？俺たち、午後まで仕事休みなんですけど。」

当麻の声にハッと我に返る。

「ご、ごめん！あんまり素敵な光景だったから、つい集中しちゃって。

人を写したくなることって、滅多に無いんだけどな…。

あ、宇都宮さん。この前写した写真、どうでしたか？ご要望通りに写せてたか心配で。」

雪見がカメラを置いて、宇都宮の手元にあるアルバムを覗き込む。

「あぁ、とても良く撮れてるよ。どれを本番で使おうか迷うくらいだ。

本当にありがとう！忙しいのに、立派なアルバムにまで仕上げてくれて。

お礼に一つ予言しよう。君は…。君はこの先必ず人気のカメラマンになる！

この私が言うんだから間違いない。」

「えっ…？」

宇都宮の断言に、一瞬病室の中が静まり返る。

予言…？宇都宮もみずきと同じ、不思議な能力を持っているのか？

それにしても、その『予言』の持つ意味を、今は誰も理解できなかった。

「君たちも聞いてくれるか…。

みずきは…。私が死んだらすべてをマスコミに公表し、喪主を務めてくれるそうだ。」

「えぇっ！！」

今までの楽しかった時間が、一気に凍り付く。
雪見たち三人は、一斉にみずきの顔を驚きの表情で見た。
みずきほどの国際派女優が、それを公表することによって起こるであろう、
世間の大騒ぎを瞬時に想像して…。

「みずき！わかってんのか？自分が言ってること！
マスコミにとっては、とんでもないスキャンダルなんだぞっ！」
当麻が凄い勢いでみずきの腕をつかむ。
だが、当麻に向けたみずきの顔は、すでに意志が固まってる事を表し、
何の迷いも困惑も、微塵の不安感さえも見当たらなかった。

「当麻、よく聞いて。これは私にとって、スキャンダルでも何でもないの。ただの事実よ。
私が娘なんだから、喪主を務めるのも当然でしょ？」
まだ生きてる人を目の前にして、葬儀の話を堂々とする。
それは、すでに宇都宮とみずきの間で充分な話し合いがもたれ、取り決めが
行なわれた事を意味した。

「その…なんて言うか…、育ててくれたご両親は何て？」
どう聞こうか迷ったが、雪見はストレートにみずきに聞いてみる。

「父と母は、私の性格を充分知っているもの。

『思う通りにしなさい。』とだけしか言わなかったわ…。
でもね、この事を公表したからと言って、父と母との関係がどうにかなることは無い。
今までと何も変わらないのよ。」
みずきは、自分に言い聞かせるように言った。
そう、変わらない。だから大丈夫よ、という風に…。

しばらく流れた沈黙のあと、宇都宮が穏やかに雪見たち三人に向かって語りかけた。
「みずきの事を…よろしく頼むよ。
若い頃の、たった一つの決断の誤りが、こんなにも娘を苦しめてしまった。
実の父として、この子をずっと守っていかなければならなかったのに…。
私が亡き後、みずきを支えてやって欲しい。どうかお願いします…。」
そう言いながら宇都宮は、布団に額が付くほど深くこうべを垂れた。

「宇都宮さん、頭を上げて下さい。何も心配はありません。
華浦みずきは、世界中に愛されている大女優です。みんなが彼女を守っていきますよ。
僕が…、いや僕たちが必ずみずきさんを支えていきます！」
当麻の力強い宣言に、健人と雪見もうなずいた。
皆が瞳に涙をたたえている。
みずきは、涙が止めどなく溢れ胸がいっぱいになり、今はもう何も言葉にはできなかった。

「ありがとう！これでもう思い残すことは何も無い。
今日は君たちが来てくれて本当に良かった。

雪見さん。君には何から何まで、お願いばかりで申し訳ない。
みずきは一人っ子だから、少しわがままな所もあるけど、これからも妹だと思って
仲良くしてやってくれないか？」
泣きやまないみずきに目を向けてから、宇都宮は済まなそうに雪見を見る。
雪見は指先で涙を拭き取ったあと、ありったけの笑顔を作って宇都宮に返事した。

「勿論です！こんな凄い妹の姉になれたら、すっごく嬉しい！
でも、１１も私が年上だけど、絶対みずきさんの方がしっかりしてますよ。
だから私が妹になった方がいいかも。」
首をすくめて笑いながら雪見がそう言うと、すかさず当麻が口を挟む　。

「大丈夫！誰が見たってゆき姉の方が、年食ってるってわかるから！」

「ひっどーい！冗談で言っただけでしょ！
当麻くんだって、みずきさんより２コ下には見えないよ！
精神年齢は十歳くらい下かな？男として、もっとしっかりしないとねっ！」

「ガーン！気にしてること言われた！立ち直れないかも。」
当麻がふざけてうなだれると、宇都宮が肩をポンとたたいて本気で励ます。

「心配するんじゃない。みずきはどうやら、頼りない男が好みらしいから。

お似合いのカップルになれるよ。みずきを頼んだぞ！」

「は、はいっ！まかせてくださいっ、お父さん！！」

「な、なにが『お父さん！』よ！本当にお調子者なんだからっ！」

病室中が明るい笑い声で満たされる。みんなの心がほんわか温かかった。

だが…。

この日見た宇都宮の笑顔が最期になろうとは、まだ誰も想像しなかった…。

名優　死す！

あれから五日目の早朝五時。
その訃報は、マネージャーの今野によって突然もたらされた。

「雪見、落ち着いて聞いてくれ。さっき連絡が入った。
宇都宮勇治が午前二時過ぎ…亡くなったそうだ…。」

「えっ！！」

雪見は絶句した。
心臓の鼓動が大きな波を打って指先にまで伝わり、ケータイを握る力も失いかける。
ガタガタと身体中が震え出し涙が止めどなく溢れ、立って居られなくなって、
朝食の準備をしていたキッチンにへたり込んだ。

「それで…華浦みずきが、お前を呼んでくれと泣いてるそうだ。
みずきのマネージャーから頼まれた。半日お前を貸してくれ、と。
大体の話は聞いたよ。驚いた。華浦みずきが宇都宮勇治の娘だったなんて…。
お前も写真を撮ってやったり、あの親子と親しくしてたそうだな。
全然知らなかった。
みずきが取り乱して、葬儀の手配も進まないらしい。
午前中の取材はキャンセルしておくから、そばに居てやれ。
あ、あと通夜と告別式の間もキャンセルしないとな。」

今野は、あえて淡々と伝えたであろう。
だがその声には、雪見の心を察する優しさが込められ、心使いに感

謝しながらも
雪見は小さく「うん…。」と声を絞り出すだけで精一杯だった。

電話を切り、どれだけの時間を茫然としてたのだろう。
人の気配を感じて横を向くと、健人が立っている。
まな板の上の切りかけた野菜。そんな場所に座り込んでる雪見を見て、
健人は何が起こったのかを瞬時に理解した。

「もしかして…宇都宮…さん?」

こくん、とうなずいた後は、もう声を上げて泣くしかなかった。
健人にギュッと抱き締められ、温かな胸の温もりを感じれば感じるほど、
冷たくなった宇都宮の身体に、泣きながらすがりつくみずきを想像し、悲しみが倍増する。
が、ひとしきり泣いたあと、ハッと我に返った。

「行かなくちゃ…。みずきさんが私を待ってる!」

化粧もせず、バッグ一つを手に車に飛び乗ったまではいいが、宇都宮の
東京の自宅をよくは知らなかった。
今野に聞いた住所をカーナビにインプットし、とにかく走り出す。
まだ辺りは夜が明け切らずに薄暗い。車の中でも泣くにいいだけ泣いた。

宇都宮の家の近辺までたどり着き、一旦ハザードランプを付けて車

を止める。
涙の後を残さず拭いて、ルームミラーを見ながら自分自身に活を入れた。
「雪見！あんたは、みずきのお姉ちゃんになったんだよ！宇都宮さんと約束したんだから！みずきの力になるって…。よしっ！」

自分を、勝気なしっかりした姉だと思い込ませる。
ともすると泣き出してしまいそうだが、自分の役目は、今は泣く事ではない。
宇都宮が望んだ通りの葬儀を、みずきをサポートして遂行することだ。
そう確認してから、車を宇都宮家まで走らせる。

そこは遠目からもすぐに見つけられた。
塀に囲まれた大きな屋敷の前に、高い脚立に乗った報道陣が大勢いたからだ。
「もうあんなにマスコミが集まってる！どうやって中に入ればいいんだろう…。
とにかく電話を入れてみよう。」

万が一の時に備えて、宇都宮は自宅の電話番号を教えてくれてた。
電話に出たみずきのマネージャーが、外に出て来て門の鍵を開け、車を中へと誘導してくれる。
雪見の車を目がけ、たくさんのフラッシュがたかれたが、スモークガラスのお陰で
誰が乗ってるかは判らないだろう。

駐車場から奥まった玄関までの小道を、マネージャーが先に歩きな

がら
みずきの様子を早口で説明した。
「申し訳ないです、浅香さん。みずきが部屋にこもったまま出て来ないんです。
僕でも手がつけられなくて…。
大きな葬儀になる予定ですが、宇都宮さんの事務所との話し合いも進まない。
遺言書には『葬儀の一切はみずきの言う通りに』と書いてあるので、みずきが指示を出さない限り、何も準備が出来ないんです。」

「わかりました。私がなんとかしてみます。」

通された大きな部屋の真ん中で、静かに静かに宇都宮は横たわっていた。
たったの五日前…目の前で笑い語らった人が、今は物言わない亡骸となりそこにいる。
いつかこんな日が来ることは判っていた。
だがその時が今日だなんて、こんな不意打ちはないだろう。

一歩また一歩と宇都宮に近づくごとに、その姿が滲んでくる。
もう充分泣いてきたから、ここに来たら泣かないで、みずきを叱ってやろうと思ってた。
『立派に喪主を努めてみせるって、あなた、お父さんと約束したでしょ！』って…。
だけど…。やっぱり今は、私にも泣かせて欲しい。

宇都宮の顔は穏やかだった。
やっと自宅に戻れ、安心しきって熟睡してるかのようにも見えた。
横の座布団にストンと腰を落とすと同時に涙が溢れ、その涙はとど

まることを知らない。
泣きながら宇都宮に手を合わせ、心の中で最期の言葉を交わし始める。

『お帰りなさい。お疲れ様でした。
ほんのわずかな時間だったけど、宇都宮さんには多くの事を学ばせて貰いました。
いや、あなたほどの名優を、こんな無名のカメラマンが写させてもらったのだから、
それを真っ先に感謝しないとバチが当たりますよね。あ！そうだ！』

雪見は突然何かを思い出し、いつも持ち歩く大きなバッグのチャックを開ける。
そこから取り出したのは、五日前に病室で写した写真のアルバムだった。
この五日間、忙しい仕事の合間を縫ってパソコン編集し、やっと昨夜出来上がった。
それを今日にでも病室に届けようと、バッグに入れておいたのだ。
そっと宇都宮の枕元にアルバムを置き、また心の会話を続ける。

『この写真も、見て欲しかったな…。みずきさんも宇都宮さんも、本当に
幸せそうな顔して写ってるんですよ。特に当麻くんなんか、もう！
…私達、必ずみずきさんの力になって支えて行きます。
だから私は今日、みずきさんを叱咤激励する姉のつもりで、ここに来ました。
私でさえこんなに悲しいのだから、娘であるみずきさんが悲しいのは当然ですよね。
でも、ずっと泣かせておくわけにもいかないんです。あなたのお葬式の準備を進めなければ…。

あなたが望んでいた通りのお式にするには、みずきさんがしっかりしないと。
私…姉としての役割、果たしてきますね。』
最後に深々と頭を下げて合掌し、涙を拭いて顔を引き締めた。
さあ、みずきの元へと急ごう。

優しい説得

みずきは、二階の宇都宮の寝室にいるとマネージャーから聞き、雪見は階段を駆け上る。
トントン。ドアをノックしてから「みずきさん！雪見だけど。」と声を掛けた。
だが、耳を澄ましてしばらく返事を待つが、中からは物音一つしない。
「あれ？この部屋じゃないのかな。」

そっとドアノブを回してみると、スーッとドアが開く。
恐る恐る覗いた部屋にみずきは…宇都宮のベッドに入って眠っていた。

静かにベッドサイドに腰掛ける。
みずきは布団を顔半分まで掛け、父の匂いに包まれながら泣いて泣き疲れて
眠ってしまったのだろう。まだ乾ききらない涙が、頬を濡らしていた。

人気絶頂期に仕事を極限までセーブし、空白だった親子の時間を埋めていくように、
一人の娘に戻って過ごした父との最後の日々。
楽しそうに、嬉しそうにしてたけど、本当はつらかったよね。
この日が来るのを、怯えて暮らしてたんだよね。
そしてついに来てしまったんだ、別れの時が…。

雪見は、自分の父が亡くなった時の事を思い出した。
カメラを持ち世界中を飛び回ってた父が、病気になり家に戻って来

た。
まだ小学生の雪見は、父が家にずっといてくれる事が嬉しくて、その先に
別れが待っているなどという現実は、受け入れようがなかった。

あの時の私と同じだ…。
段々とそこに寝ているのがみずきではなく、幼い頃の自分の姿に見えてくる。
そう思うとみずきが可哀想で、自分も可哀想で、頭をそっと撫でながら
ポロポロと涙が転がり落ちた。
「え？雪見さん…？来てくれたんだ。ありがとう。」
みずきが不意に目を覚ましたので、慌てて涙を拭う。

「あ…、起こしちゃった？ゴメン。ね、お腹空いてない？
下にサンドイッチ、いーっぱいあったから、もらってきちゃった！
缶コーヒーも。
人間どんな状況でも、お腹って空くから不思議。あと眠くもなるしね。
私も父さん死んだ時、やたら眠かったの覚えてる。
泣くってめっちゃ疲れるよね、運動した後みたいに。あ！だからお腹も空くんだ、きっと！」
雪見は一人で喋り続けた。いつもと変わらぬ調子で。

「…少しだけ食べよっ。昨日から何にも食べてないんだって？
みずきさんが倒れるわけにはいかないんだよ。これから大仕事が待ってるんだから。
ドラマの主役を務める時は、体調管理に気を付けてしっかり食べるでしょ？
健人くんも当麻くんも、おいおい、大丈夫か？ってくらい食べるよ

ね。
それでも痩せてくんだから、主役を張るって大変なんだな、って…。
」

「…当麻に…会いたい…。」

「えっ？」

やっと聞こえるくらいの小さな声でみずきが求めたものは、父ではなく当麻であった。
一瞬驚きはしたが、雪見は少し安堵した。
みずきの心が、父の死以外にも向き出したということに。

「当麻くん、凄く心配してたよ！さっき沖縄からメールが来た。
『みずきのこと、よろしく頼む。』って。
あさってには東京に戻るって。全然当麻くんからのメール、読んでないでしょ？」

「そうだ、ケータイ！どこ？私のケータイ！」
みずきはいきなり魔法から解けたかのように、ガバッと飛び起きて、右往左往しながらケータイの在りかを探してる。

「落ち着いて！ケータイなんて、ここにないんじゃない？
私、マネージャーさんに聞いてくるから、待ってて！」
雪見はみずきにそう言い残し、階段を転げ落ちそうな早さで駆け下りて、
みずきのマネージャーに詰め寄った。

「みずきさんのケータイ、知りませんか？」

「あ、あぁ。ケータイなら僕が持ってますけど…。」
そう言ってポケットから取り出したケータイを、「もらって行きますっ！」と一瞬で奪い取り
きびすを返して、来た時並みのスピードで階段を駆け上った。

ハァハァ言いながらみずきにそれを差し出すと、「あったぁ！」と少しだけ笑顔がのぞいた。
「ありがとう。」とケータイを受け取り、受信されてた多くのメールに次々と目を通す。
と、ある所でぱったり指が止まったかと思うと、みずきの大きな瞳にみるみる涙が溜まり流れ落ちた。

「当麻…くん？」　雪見がそっと聞いてみる。
ケータイをじっと見つめたままうなずき、また涙を流すみずきが愛しかった。

なにが書いてあるかは聞かないことにしよう。
それは当麻が一生懸命みずきに伝えたかった、愛ある言葉だろうから。

「当麻くんには、健人くんから伝えてもらったの。
一番そばにいてやりたい時に居れないのが悔しい、って泣いてたそうよ。
私にきたメールにも、『親子関係をマスコミに大騒ぎされたら、みずきは喪主を
ちゃんと出来るだろうか』って心配してた。」

「……。」

「みずきさんは、日本が誇る名優　宇都宮勇治の一人娘で、日本俳

優界の大御所
津山泰三の孫で、日本一の若手イケメン俳優　三ツ橋当麻の彼女…
になったんだよね？」

うつむいたまま、みずきがこくんとうなずいた。
雪見は極力穏やかに、優しく心に届くようにと、ゆっくり言葉をつ
ないでゆく。

「そして…あなた自身は、世界に名を轟かせる若手実力派女優　華
浦みずき本人なのよ。
あなたのお父さんが、生涯愛し続けた自慢の娘なの。
宇都宮さん、本当に嬉しそうだったなぁー。みずきさんが喪主を務
めてくれる！って…。
自分の人生の花道を、あんな大女優になった娘に歩かせてもらえる
なんて、
こんな幸せな最期はないよ！　って、宇都宮さん笑ってた。」

「えっ？お父さんが？いつ？」

「当麻くんたちとお見舞いに行った日の帰り際。
みずきさんと健人くんが、先に廊下に出たでしょ？あの時、当麻く
んと私にそう言ったの。
あ！思い出した！葬儀場の右上から見てるから、とも言ってたんだ！
自分が頼んだ通りの葬式になってるか、監視してるって。」

「そんなことを？…会えるんだ…。またお父さんに会えるんだ！
準備しなきゃ…。お父さんの望んだ通りにしないと、叱られちゃう！
ゆき姉、手伝って…あ！私…。ゆき姉って言っちゃった…。」
みずきが恥ずかしげに雪見を見る。雪見は笑いながらこう言った。

「いいよ、ゆき姉で。今日から私は、みずきのお姉ちゃん！…って事は
当麻くんは妹の彼氏ってわけだ！へっへっへー！面白そうな関係になったぞ！
じゃ、そろそろ準備を始めよっか。みんなが下で待ってるよ！」

「うん！」

二人は軽やかな足音をたてて階段を下りた。
これから襲ってくるであろう荒波も、しっかり手をつないで乗り切ろう！

悲しい酒

「みずきっ！」
人の大勢集まった居間にみずきが姿を現すと、皆から一斉に声が上がった。

「良かった！心配したぞ！時間が無いんだ。すぐに葬儀の打ち合わせに入ろう！」
宇都宮の事務所サイドと思われる人が、あっという間にみずきをさらって行く。
隣室の大きなテーブル周りには、宇都宮の事務所代表と、みずきの事務所代表、
両方のマネージャー、葬儀屋、コーディネーター、写真屋等々、あらゆる立場の人達が
宇都宮勇治最後の大舞台を作り上げようと、すでに席に着いて待っていた。

それにしても凄い人の数！
時間と共に人の出入りが一層激しくなり、芸能事務所関係者と思われる人達が、
ケータイ片手にあちこちと、慌ただしく連絡を取り合っている。
遺体の安置してある居間に続いた広い和室にも、早々に訃報を聞きつけ駆けつけた
近しい人々が溢れかえり、泣いたり眉をしかめて話し込んだり騒々しい。
あれじゃ宇都宮さん、ゆっくり寝てもいられないや。可哀想に…。

みずきから引き離された雪見は、誰も知る人のいない人混みに、ぽつんと

置き去りにされた迷子のように、ただその場に立ち尽くしていた。

『取りあえず役目は果たしたし、ここにいても邪魔になるだけだから、
一旦家に帰ろっか…。
でも、みずきさん、何か食べてくれるといいんだけど…。』

遠くのみずきに目を向けると、真剣な表情でみんなと打ち合わせをしている。
葬儀の準備に関しては、どうやら心配はなさそうだ。
だが、すでに憔悴しきっているのは明白で、ノーメイクのせいか顔色も悪い。
近くにいて世話を焼いてやりたいのは山々だが、今は葬儀の段取りに皆が忙しく、
どこの誰とも判らぬ雪見が入り込む隙間など、皆無であるのは明らかだった。

『大丈夫かなぁ、みずきさん…。心配だけど仕方ない。
仕事が終ってから夜にでも、また様子を見に来よう。』
誰も雪見になど気にも留めてないので、そのまま静かに帰ろうとした。
が、その時である。
「津山泰三さんが到着しましたっ！」と大声が聞こえた。

「おじいちゃん！」
その声に反応し、みずきがガタッと椅子を揺らして立ち上がる。
「ちょっと、ごめんなさい！」と言いながら、人をかき分けて玄関へと出て行った。
やがて人の壁が二つに割れ、あいだから出て来たのは、みずきが押す車椅子に乗った

津山泰三であった。

ざわついていた部屋が、一瞬でシーンと静まり返る。
雪見も、そのやつれ果てた津山の姿に息を飲んだ。
近くにいた人達のひそひそ話によれば、津山は宇都宮の最期をみずきと共に看取った後、
その場に倒れてそのまま入院したらしい。

「津山さん、大丈夫ですか?あまりご無理をなさらずに…。」
宇都宮の事務所の幹部らしき人達が、車椅子をぐるっと取り囲み、
津山に弔問の礼を言う。
二言三言、言葉を交わして津山は、みずきに手を借りて車椅子を降りたあと、
一歩ずつ踏みしめて宇都宮の枕元へと座り、あぐらをかいた。

「ゆうちゃん、遅くなってごめんよ。一人で退屈だったろ。
舞台の準備が出来るまで、俺と一杯やって待ってよう。
家からとっておきの酒を持ってきたぞ!
ゆうちゃんが退院したら、一緒に飲もうと思ってた酒だ。おい!酒と茶碗を頼む!」
津山が、マネージャーに持って来させた日本酒の一升瓶を抱え、湯飲み茶碗二つに酒を注ぐ。
そのうちの一つを宇都宮の枕元に、もう一つを自分が持ち「お疲れ!」と言いながら、
ぐびっぐびっと中身を飲み干した。

「おじいちゃん!ダメよ、朝からそんな飲み方しちゃ!」
それを目撃したみずきが、再び打ち合わせを中座して津山に駆け寄る。

「どうだ、みずき！お前も一緒に飲まないか！」

「なに言ってるの！私は今それどころじゃないのよ！
お願いだから、大人しくしててちょうだい！」
みずきが苛立ちを隠せずに声を荒げた。
が、すぐに言い過ぎたと気付き「ごめん、おじいちゃん…。」と目
をそらして謝ったあと、
打ち合わせの席に素早く戻った。

気まずい空気が部屋に重く垂れ込める。
だが皆は、何も見なかったふりをしてお互いお喋りを再開し、誰も
津山の側に
近づく者はいなかった。
叱られて津山は、またひとり背を丸めて酒を注ぐ。
その姿に大御所俳優の威厳や光などはどこにもなく、ただの老人に
しか今は見えない。

その一部始終を片隅で見ていた雪見は、その『ただの老人』が可哀
想に思えて仕方なかった。
無二の親友を亡くし、どんなにか悲しみに打ちひしがれていること
だろう。
それを涙ではなく酒によって紛らわそうとしてるのが、痛いほど伝
わってくる。

『誰かそばにいてあげてよ！』
そう心の中で叫んで辺りを見回しても、誰もそんなことを気に留め
る者もなく、
それぞれが自分のことに忙しい。
雪見は一層『ただの老人』が哀れに思え、あろうことか次の瞬間無
意識に

フラフラと歩き出し、気が付けば津山の横に座っていた。

「あの…。もし良かったら、私もご相伴させてもらっていいですか？」

その時の津山の驚いた顔といったら！

だが一番驚いたのは、そんなセリフを吐いて津山の横にいつの間にか座ってる

当の雪見本人だった。

「あ！いや、その…私、なに言ってるんだろ！ごめんなさい！失礼致しました！」

そう言って漫画のように、ピューッと立ち去ろうと立ち上がった時、

津山がガシッと雪見の手首を掴んで笑顔で見上げた。

「わしに付き合ってくれるのか？お嬢さん！そりゃ嬉しいぞ！まずは一杯。」

津山は、丸いお盆にたくさん載ってる湯飲み茶碗から、シワシワの手で

一つを雪見に差し出し、一升瓶を抱える。

雪見はもう引っ込みが付かなくなり、腹を決めて座り直し、茶碗を両手で受けた。

「ゆうちゃん、良かったな！綺麗どころが加わってくれたぞ！

やっぱり酒の席には若い娘がいないとな。楽しい宴会になりそうだ！」

どうやら津山は、一度『秘密の猫かふぇ』で雪見と飲んだ事を忘れているようだ。

と言うか、すっぴんで着の身着のまま飛び出して来た雪見に、気付くはずはなかった。

『宴会ぃ？さすがの私でも、朝から日本酒はきっついなぁ！
一杯ぐらいならって思ったんだけど。でも…。』

本当に嬉しそうに酒を飲んでる津山を見て、まっ、いいか！と開き直った。
忙しいみずきに代わって、自分が少しでも役に立てるなら。
そこに眠ってる宇都宮も喜んでくれるなら、それでいいやと思った。

午後からは健人くんと一緒に、雑誌の対談なんだけど…。

「やだ、津山さんったら！私もう、お嬢さんなんて年じゃありませんからぁ！」
バシッ！といい音を立てて、雪見が津山の背中を叩く。
その瞬間、ギョッとしたみんなの顔が、一斉に雪見を見た。

おいおい！あの酔っぱらい女、一体何者なんだよ。誰と飲んでるのかわかってんのか？
っつーか、なんでこんな時に酒盛りなんかしてるわけ？
とか、まぁ思ってる事はその手のたぐいだろう。

だが当の二人は、周りの視線など気にも留めず、まるでそこが温泉宿かどこかの一室で、
側らに横たわる宇都宮の亡骸は、ただ酔っぱらって気持ち良さそうに、
一眠りしているかのように目に映っていた。

宇都宮家のお手伝いさんが、急いで酒のつまみを運んで来る。
ここが温泉宿なら、さしずめ旅館の仲居さんってところか。
「いやいや、すまんねぇ。」と言いながら、津山が手を伸ばす。

一升瓶の半分も飲んだ頃、良い感じに酔いが回った雪見が津山に聞いた。
「ねぇ、宇都宮さんって、飲むとどんな感じになったの？
お酒、好きだったんでしょ？」
敬語どころか、すっかりタメ口だ。

「ゆうちゃんか？酒は好きだったねぇ。そんなに強くはないんだけど、
飲むと歌い出すんだ。なんせ歌が大好きだから。人にもよく歌わせてたよ。
『酒の肴に一曲歌ってくれ！』ってね。」

「へぇーっ、そうなんだ！じゃ私も一曲、宇都宮さんに聞いてもらおっかなっ？」

「おぅ、歌ってくれるか！良かったなぁ、ゆうちゃん！」

その頃。津山と雪見の盛り上がりも知らず、みずきは二階の宇都宮の書斎にいた。
葬儀で使用する写真を、アルバムの中からピックアップしているのだ。

生前宇都宮が話していた、自分の理想の葬儀。
「坊さんの長ったらしいお経や説教はいらないよ。代りに好きな歌をガンガン流してくれ。
来てくれた人は、線香一本上げてくれるだけでいい。
それより会場に飲み物でも用意して、みんなで立ち話なんかいいんじゃないか？
俺の悪口も良し、思い出話でも良し。別に俺とは関係ない世間話だってかまわないさ。
とにかく、湿っぽく泣いて終りの別れだけは勘弁だ。
あ！ロビーで俺の、写真展なんかもいいねぇ！
生まれてから死ぬまでの、俺の一生を見てもらいたい。
で、帰り際に、『いいお式だったねぇ。』って笑顔で帰ってもらうのが理想。

結婚式帰りみたいにねっ！」

みずきは最後の親孝行として、宇都宮の希望通りの葬儀を上げてやろうと思ってる。
宇都宮の事務所は、これだけの看板俳優の葬儀なのだから、もっと正統派の大葬儀を、
と最後まで渋い顔で反対したが、なんせ遺言書には『一切はみずきの言う通りに』
と書いてある。渋々でも何でも、それに従うより他無かった。

若かりし頃の父のアルバムを手に取った瞬間、何やら下の階から歌声が聞こえて来た。
『えっ！？この歌…。』

「古いアルバムめくり　ありがとうってつぶやいた…」

それは雪見が歌う宇都宮への鎮魂歌、『涙そうそう』であった。
なんという偶然のタイミング！なんて心に染み入る歌声。
みずきは歌に引き寄せられるようにして、アルバムを抱きかかえたまま
階段の中頃に腰を下ろし、その歌にじっと耳を傾ける。
まるでそれは、雪見がみずきのために歌っているかのようで、歌詞の一語一語が
細胞の隅々にまで行き渡り、身体と同化し涙となって体外に吐き出された。

『お父さん、良かったね。ゆき姉の歌、聞きたがってたもんね…。』
賞賛の拍手が聞こえる中、みずきは涙を拭いて、また書斎へと戻って行った。

いつものように目を閉じて歌っていた雪見はと言えば、拍手の嵐に驚いて目を開け、
自分の周りの人だかりにビビりまくってる。
『宇都宮さんにだけ聞かせたつもりなのに、いつの間にか声を張っちゃったんだ！
まっずいなぁ、こんな席で…。お願いだから静かにして！』
と身を縮め、トイレにでも逃げ込もうと思ったその時！
隣室で葬儀の話し合いをしていた偉そうな人三人が、人をかき分け雪見の前に立ちはだかった。

「きみっ！一体君は誰なんだね！？」
一番貫禄あるボスみたいな人が、雪見に詰問する。やばっ！どうしよう！

「ご、ごめんなさいっ！申し訳ありませんでしたっ！」
雪見はもう、ひたすら頭を下げるしかなかった。酔いも一気に冷める。
すると津山がその場を収めるように、酒を飲みながら笑って言った。

「まぁまぁ、いいじゃないか。
歌の好きなゆうちゃんのために、わしが歌ってくれって頼んだんだ。
彼女は私とみずきの知り合いだよ。猫が大好きなカメラマンさんだ。」

「あ！思い出してくれたんですねっ！」

「今の歌声を忘れるわけがない。まぁ、顔は忘れてたけどな。」
そう言って、おちゃめに舌をぺろっと出した。

「カメラマン?歌手じゃないのかね!名刺を見せてくれないか。」
ボスみたいな人は、なぜか一層怖い顔をする。
あ!もしかして、中に潜り込んだマスコミだとでも勘違いしてるのか?
雪見は慌ててバッグをまさぐり、名刺入れを取り出した。

「失礼致しました。私、こういう者でございます。」
丁寧に差し出した名刺を見て、怖い顔が更に険しくなる。なんでぇ?

「浅香雪見…?ひょっとして君か?宇都宮の遺影を写したカメラマンは!」

ま、マズイっ!どうしよう!
あの遺影は、宇都宮が事務所と揉めて、内緒で雪見に依頼してきた遺影だったんだ!
怪しい雲行きに、雪見はもうこの場を逃げるしかないと思った。

「あ、もうこんな時間!これからどうしても外せない仕事が入ってるんです!
ごめんなさい、失礼します!津山さん、ご馳走様でした!宇都宮さん、また来ますねっ!」
永遠に眠り続ける宇都宮に慌ただしく合掌し、バッグを手にそそくさと退散する。

玄関先まで見送りに来たお手伝いさんに、車は夜に取りに来ることを約束し鍵を預けた。
「みずきさん、昨日から何にも食べてないんです。少しでも口にするよう、伝えて下さい。
本当にお騒がせしました。酒の肴のだし巻き卵、美味しかったです

！じゃ！」

外にはテレビカメラとマイクを構えた報道陣が、獲物を逃さぬようにバリケードを作ってる。雪見はマスクをかけ息を殺し、顔を伏せて足早に人混みを突破した。

酒臭さがバレないように…。

だが、この時歌った一曲が、思わぬ事態を招くことになろうとは…。

お前にしか出来ないこと

タクシーで一旦家に戻った雪見は、少しでも酒を抜こうと熱いお風呂に入り汗を流す。
あと一時間のうちに準備を整え、『ヴィーナス』の対談を行なうスタジオへと
出掛けなければならない。

風呂上がりに冷たいミネラルウォーターを飲みながら、テレビのスイッチをつける。
と、いきなり、さっきまでいた宇都宮の自宅前が写し出され、レポーターが
宇都宮の死去を熱く伝えていた。
お昼の番組はどこの局もこのニュース一色で、宇都宮勇治という俳優が
いかに大物であったかを思い知らされた。

雪見はある事が気になって、次から次へとチャンネルを切り替える。
「みずきさんが喪主だって事は、まだ発表になってないみたい。
発表したら、大変な騒ぎになるんだろうな、きっと…。」

葬儀はあさって１１月３０日の午後６時から、とレポーターが伝えている。
それまでには確実に、なんらかの形で世に知らされることだろう。
華浦みずきは、故宇都宮勇治の実の娘であることを…。

午後一時半、スタジオに到着。
メイク室に入ると、スタイリストの牧田に真っ先に指摘されてしま

う。

「えーっ！雪見ちゃん、また二日酔い？昨日、相当飲んだでしょ？目も腫れぼったいし、お酒クサ～イ！」

「え？あ、あれっ？やっぱりバレた？まずいなぁ、かなり臭う？ブレスケア、大量に飲んできたんだけど…。」

まさか、二日酔いではなく今酔ってる状態だとも言えずに、笑って誤魔化す。

やだなぁ！こんなんで健人くんと対談なんて。

まぁ、判ってて飲んだんだから自業自得なんだけど…。

その時だった。ヘアメイクの進藤が、メイク室に大慌てで飛び込んで来た。

「ねぇねぇ、知ってた？あの華浦みずきちゃんって、今朝死んだ宇都宮勇治の娘だったんだって！今、テレビで会見してるよ！」

「ええっ！！」　牧田と雪見が同時に大声を上げた。

もちろん二人の驚きの理由は同じでは無い。

初耳で驚いてる牧田と、こんな早くに会見という形で発表したんだ！という雪見の驚きだ。

雪見と進藤がすぐにケータイを取り出し、ワンセグで中継を見る。

どこかの会場で喪服を着たみずきが、生前の宇都宮に対する礼と葬儀の日取りを話している。

すでに、宇都宮の娘であるという事に関しての報告は終ったらしく、それに対しての

報道陣からの質問はシャットアウトされ、葬儀に関しての質問にだけ受け答えしていた。

その姿はいつにも増して凛としていて、冷静に堂々と、毅然とした態度を貫いている。

みずきは穏やかな笑顔で、喪主として会見の最後をこう締めくくった。

「センスが良くてお洒落で、お酒と歌と、そして猫をこよなく愛した父でした。

そんな父らしい葬儀で、最後の花道を飾ってやりたいと思います。

でも私、本当はこんな大役、舞台より緊張してるんですけど…。

宇都宮勇治の娘、華浦みずきを、陰ながら応援していて下さい。

本日はお忙しいところ、お集まり頂きまして有り難うございました！」

見ていたこっちの方が緊張した。

だが、どうやら無事一つの峠は乗り越えたようで、ホッとしたら涙が滲んだ。

「どうだった？ゆき姉！」と言いながら、健人と今野が心配そうにスタジオ入りする。

酒臭さがバレないように二人から距離を置いて、「ちゃんと任務は完了！」

と言葉短く言ったのだが、これから対談するのにバレないわけはない。

対談中に「酒くさっ！」とか健人に言われて、それを活字にされても困るので、

正直にすべてをカミングアウトした。

津山が可哀想で、朝っぱらから酒に付き合った事。

悲しみの席で、大声で歌を歌ってしまった事、等々。

「それで？津山さんはどうしたの？」健人が苦笑いをしながら雪見に聞く。

「うん、喜んでくれた。少しは気が紛れたと思うけど…。」
そう言ってる雪見自身は、後先考えないで行動してしまう自分の性格に、
ほとほと呆れて落ち込んでる。

「いいんじゃないか？お前らしくて。酒が強いのも、こういう時に役立つもんだな！
フツーの綺麗どころは、朝っぱらから日本酒には付き合えないぞ！
しかも大御所俳優二人を目の前にして、堂々と歌って聞かせるなんてな。
お前にしか出来ない役割だったわけだ。良くやった！」
今野が、大笑いしながらも雪見の肩を叩いて慰める。

「そうだよ！もしそんな津山さんを、黙って見てるだけのゆき姉だったら、
俺はがっかりするだろうな。やっぱ、俺の彼女だけある！」
健人はそう言ったあとスッと雪見に近づき、耳元で「大好きだよっ！」とささやいた。

それを見て今野が慌てる。
「おい、健人っ！！現場じゃ行動と発言には気をつけろよ！
イチャイチャは家に帰ってからにしろっ！」

「なんか、イチャイチャって言葉、久々に聞いた！」雪見が笑って健人を見ると、
健人も「ほんとー！やっぱ俺らとちょっと違うよね、今野さんって。」

と、わざと雪見に身体を寄せて見つめ合った。

「だーかーらっ！そーいうのをイチャイチャって言うんだよっ！！」

健人と今野のお陰で心が軽くなった雪見は、お酒が入ってるせいもあり
対談のスタートから飛ばす飛ばす！
デビューを前にした心境やＰＶ撮影のウラ話、クリスマスに発売される
健人の写真集についてや当麻の噂話など、自宅のソファーで健人との会話を楽しむように、
喋りまくって無事終了。
初対面のライターさんから「本当に姉弟みたい！」と言われ、恋人同士だなんて
まったく疑われる様子もなく、複雑な心境の二人であった。

「あー終ったぁ！なんか楽しかったね。
ここんとこ、お互い忙しくてあんまり話せてなかったから。ゆき姉、この後は？」
健人がキャップを被り直しながら雪見を見る。

「私はお酒が抜けたら、宇都宮さんちに車を取りに行かなくちゃ。
みずきさんと津山さんの事も心配だし、様子を見て来る。
でも夜には帰って、ご飯作って待ってるから。仕事頑張ってきてね。」

二人がしばしの別れを惜しんでいるその時、今野のケータイが鳴った。

「もしもし、今野です。あ、常務！お疲れ様です。
はい？雪見ですか？まだここにいますけど…。
えっ！？あ、はい、わかりました。大至急そっちに向かいます！」
電話を切ったあと、険しい顔で今野が雪見を見る。

「残念ながら、常務から呼び出しくらったぞ！雪見を連れて来いって。
相当慌てた様子だったけど、お前、なんか他にもやらかしたのか？」

「えっ！？」

絶句した後、宇都宮の遺影の件が頭をよぎる。
他に思い当たる事がなくて、顔が青ざめてゆくのがわかった。

大役の依頼

「今野さん、ゆき姉を頼んだよ！」
別れ際に見せた、健人の心配そうな顔が頭に浮かぶ。
健人はサブマネの及川と次の現場に向かい、雪見は今野と共に事務所へと向かった。

「心配すんな！俺がちゃんとフォローしてやっから。」
不安一杯の顔で後部座席に沈む雪見に、今野がルームミラー越しに笑顔で言う。

「ごめんなさい。健人くんの現場に行けなくなって…。」
雪見が、蚊の鳴くような声で今野に詫びを入れた。

「何言ってんの？俺はお前のマネージャーなんだぜ？
今はまだお前の仕事が少ないから、空いてる時間を健人に付いてるだけの話だよ。
それはいいとして、常務の呼び出し、お前なんか心当たりがあるんじゃないの？」

「…実は…。」
雪見は、宇都宮家で歌ったあとに、三人の偉そうな人が詰め寄ってきた話をした。

「最初は、大声で歌った事を叱られるのかと思ったんだけど。
名刺を渡したら、『宇都宮の遺影を写したカメラマンか！』って…。
私、どうしても宇都宮さんの頼みを聞いてあげたくて、独断で遺影の撮影を
引き受けちゃったから…。今はフリーのカメラマンじゃないんだか

ら、
事務所を通さないといけなかったんですよね…。
それに宇都宮さんの事務所は、私みたいな無名のカメラマンの写真じゃなくて、
有名写真家が写した遺影にしたかったはず。
だから、うちの事務所に抗議の電話でも入れてきたんだ、きっと。
どうしよう…。もしかして私、大変な事をしちゃったのかな…。」
ことの重大性に今更ながら気が付いて、雪見は泣き出したい気持ちでいっぱいだった。

「済んでしまった事はしょうがない。向こうが抗議してきたのなら、まずは素直に謝ろう。
けど遺影の撮影は、宇都宮さんもみずきも望んでのことだろう？
宇都宮さんの遺言通りに葬儀を進めるんだったら、向こうの事務所だろうと
口出しできないと思うがな…。
まっ、うちの事務所にバレちゃった以上、無許可の仕事は減給処分ぐらいは
覚悟しといた方がいいぞ！
…ってことは、俺も管理不行き届きで減給かぁ！？」

「ごめんなさ～い！！」

事務所に到着後、大急ぎで応接室に駆け込む。
が、今野と二人、ドアを開けて心臓が止まりそうになった。
あの偉そうな三人組が、ソファーにでんっ！と腰掛け、待ち構えていたからだ。

『あっちゃー！電話だけの抗議に飽き足らずに、わざわざ乗り込ん

で来たわけ？
こりゃ、俺が必死に雪見を守らないと、困った事になるぞ！』
今野は、思ったよりも厄介な状況に身を引き締めた。

「おぅ！お疲れ！まぁ早く座れ。」
おやっ？と今野は思った。常務の小野寺が、予想に反して穏やかな顔をしてたからだ。

テーブルを挟みコの字型に、三人の敵、常務、そして雪見と今野が座る。
これから何が話し合われるのかを想像すると、雪見は頭がクラクラしてきた。

「先ほどは、どうも！」
宇都宮家で雪見に詰め寄った一番偉そうな人が、不敵な笑みを浮かべ雪見を見る。
蛇に飲み込まれる寸前の、カエルになった心境だ。

「こ、こちらこそ、先ほどは大変失礼を致しましたっ！」
雪見はそれだけ言うのが精一杯で、あとは顔も上げられず、最後の審判が下されるのを
絶望的な気持ちで待つのみだった。

「話はこちらからすべて聞いたよ。俺のまったく知らない事ばかりで驚いた。」
小野寺は苦笑いをして雪見を見る。

「申し訳ありませんでしたっ！すべては私が勝手にした事です！
今野さんは何も悪くありません！だから処分は私だけに…。」
いきなり立ち上がり頭を下げた雪見に、小野寺は勿論のこと、偉そ

うな三人組も
なぜかギョッ！とした顔で雪見を見た。

「ちょ、ちょっと待て！なんだ？その『今野さんは何も悪くありません！』って？
ははぁん！またなんか早とちりしてんな？
お前は健人と違って直感で行動する奴だから、まぁ早とちりも多いわなぁ！
あ、当麻と性格的には似てるかも。」

「はぁ？」

雪見は小野寺の言いたい事が、まるでわからなかった。
そりゃ確かに健人は理性の人で、雪見や当麻は感性の人だけど。
当麻と似てるなんて、どうなの？

「宇都宮さんの事務所からお前に、凄いオファーがきたぞ！
あさっての葬儀で、お前に歌を歌って欲しいそうだ！」

「ええーっ！？」
雪見と今野が二人同時に、もの凄い声を上げた。

「ど、どういう事でしょう？ビックリしすぎて、状況がよく飲み込めないんですが…。」
まったくもって想定外の展開に、頭が混乱してる。なに？葬儀で歌って？

いきなり目の前の偉そうな人が、満面の笑みを浮かべ雪見に名刺を差し出した。
「申し遅れました。私、こういう者でございます。」

真ん中に座った人に続いて、すかさず両隣の人も名刺を差し出す。
え!?宇都宮さんの事務所の専務取締役に、みずきの事務所の社長さん?
そこまでのお偉方三人衆だったとは…。

「歌が大好きだった宇都宮さんは、葬儀でも、お経はいらないから歌で
送って欲しいと遺言したそうだ。
それで何人かの歌手をピックアップしてるそうだが、あれだけの大物俳優だろ?
交友関係が広すぎて、こっちを立てればこっちが立たずって事になって、
収拾がつかないらしい。
で、それならいっそのこと、何のしがらみも無いお前に頼みたい、って事で
わざわざ足を運んで下さった訳だ。」
小野寺の話があまりにも突拍子なくて、現実のものとして受け止められなかった。

「あの…。それなら別に私じゃなくても…。他にも大勢いらっしゃいますよね?
って言うか、そもそも私、まだ歌手になってないんです。しかも本業はカメラマンで…あっ!」
自ら遺影の話を振ってしまった事に気付き、慌てて口をつぐんだ。

「宇都宮の遺影の事をお気になさってるんですね?ご心配なく。
遺言書に事細かく指示がありましたから、その通りにさせて頂きます。
それと、あなたが最後に宇都宮を写された写真も拝見しました。
とてもいい写真ばかりで、葬儀場のロビーで開く写真展に、宇都宮

勇治最期の姿として
多数使用する事をご許可頂きたい。」

「えっ！私の写真をですか？」

「病気をしてから写真を嫌がりましてね。
あなたが初めてなんです、療養中の姿を撮らせたのは。よっぽど心を許せたのでしょう。
あなたの歌声も素晴らしかった！
きっと宇都宮も、あなたの歌に送られる事を望んでいると思いますよ。」

その時、雪見の瞳に笑顔の宇都宮が浮かんできた。
涙が一筋頬を伝わり、気がつけばこくんとうなずく雪見だった。

今野の忠告

「ご承諾して頂けるんですかっ！？」
身を乗り出して正式な返事を待つ三人に対し、雪見は小野寺の顔を見て最終的な決断を仰ぐ。
やはり自分の一存で決められる事ではない。

「いいんじゃないか？こんな大役、自分から望んで手に入るものじゃない。
きっと宇都宮さんが、お前に下さったチャンスなんだよ。凄い事じゃないか！
お前の写した写真が遺影になり、お前の歌が宇都宮さんを送るんだぞ！
俺の方が、鳥肌立ってきたよ！
皆さん、どうかうちの浅香をよろしくお願いします！」

小野寺が立ち上がり三人に頭を下げたので、慌てて雪見と今野も立ち上がり、
深々と頭を下げた。
それからお互いに契約書を交わし、大まかな打ち合わせをする。
歌う曲は今日歌ったのと同じ『涙そうそう』で、という希望らしいのでそれに従った。
明後日の葬儀最後に、プロの室内管弦楽団の生演奏をバックに歌うと言う。
あまりにもスケールの大きな話に、引き受けたはいいが正直不安で仕方ない。

「あのぅ。参列者は一体どれくらい…。」

「それは私達にも予測がつきませんので、東京で一番大きな斎場を用意しました。
僧侶を立てないでと言う遺言に従い通夜、告別式という形ではなく、お別れの会型式の
一日だけの葬儀になります。なので参列者はかなりの人数になるかと。」

もしかして私、とんでもない仕事を引き受けちゃった?
なんせ葬儀は二日後だ。準備もへったくれもなく、いきなり一発勝負の本番になる。
しかも、宇都宮ほどの大物俳優となれば、各界の著名人もやって来るだろう。
自分のステージさえまだ経験してないデビュー前の私に、こんな話を持って来るなんて、
引き受ける方も頼む方も博打が過ぎるのではないか。
万が一にも大失敗しちゃった場合は、どうすればいいわけ?

小野寺が相手方と話している間、一つずつ順を追って考えていく。
するとどう考えても無理な気がしてきて、目の前のテーブルにまだ置いてある契約書を
奪って破り捨てようかという衝動に駆られた。
手を前に伸ばした瞬間、それはスッと持って行かれ、相手方三人がバタバタと立ち上がる。

「じゃ、私達はこれで。葬儀というのは、待ったなしで準備を進めなきゃならないので、
悲しんでる暇もありませんわ!では明後日、よろしくお願いします!」
そう言って応接室を出る間際、みずきの事務所社長が思い出したように雪見に聞いてきた。

「あ、そうだ。宇都宮の枕元にあったアルバム、見せていただきました。
こちらの事務所の斎藤健人さんと三ツ橋当麻さん、うちのみずきと随分
親しそうに写ってましたけど…。」
どういう関係なんだ?お前は何か知ってるだろ?という目で雪見を見たのでドキッとした。

「え?あー、はい。みんな仲良くさせて頂いてます。
三人とも、私の事を姉のように慕ってくれてるので、よく私の家でご飯
食べたり飲んだり。四人姉弟みたいな関係ですね。
だから五日前も、私達三人で宇都宮さんのお見舞いに行ったんですけど、
まさかあれが最期になってしまうなんて…。」

「そうですか、わかりました。葬儀が終るまではみずきも気が張ってるが、
精神的に辛くなるのは葬儀が終ってからの事でしょう。
どうかその時には、みずきを支えてやって頂けますか。」

「もちろんです!それは宇都宮さんとの約束でもありますから…。」

ドアを出て行く三人の後ろ姿が消えた瞬間、雪見は全身の力が抜けてドサッ!
とソファーに座り込み、はぁぁ…とため息をつく。
なんとか当麻くんの事、誤魔化せたかな…。疲れた…。

小野寺と今野が忙しそうに打ち合わせている間、雪見はどうにも我

慢できない
睡魔に襲われて、スゥーッと気を失うように眠りに落ちてしまった。

「雪見！雪見！帰るぞっ！起きろっ！」今野に夢の途中で起こされた。
せっかく健人くんと、美味しい焼き肉屋さんで、ご飯食べてる夢見てたのに。

「こんな時に寝れるなんて、お前も小心者なのか図太いんだか、わかんない奴だね。
宇都宮さんとこに、車を取りに行くんだろ？送ってくよ。」

外はすっかり夜の街に切り替わっていた。
なんだか長い長い一日で、すべての事が今日だけに起こった事とは思えない。

「健人には連絡したの？葬儀で歌うことになったって。」

「あ！まだしてない！」
今野に言われ、初めてまだ健人に報告してない事に気付く。

「お前ねぇ。健人が可哀想だろ、あんなに心配しながら現場行ったのにさ。
いくら健人がツンデレ好きって言ったって、ツンツンばっかりされてたんじゃ、
あいつだって嫌になっちゃうよ！」

今野の言葉にドキッとした。
そんなつもりは毛頭ないのだけれど、結果としてそうなってるかも

しれない。
二十代の頃より恋愛に注ぐエネルギーの割合は、確実に低下しているのだ。
２１歳恋愛ど真ん中の健人に愛想を尽かされないためには、今野は良い忠告を
くれたと思う。

「早くメールしなきゃ！」
長ったらしい説明にならないように完結に！とか考えながら打つ時間がもどかしい。
報告事項を打ちながらも、段々とそれはどうでもいい事に思えてきた。

頭の中に、今野が言った『あいつだって嫌になっちゃうよ！』がこだまする。
あっちにぶつかり、こっちにぶつかりして、簡単には身体の中から抜けて行ってはくれなかった。

本当は今すぐ会って直接伝えたいのに。『　大好きだからねっ！』って…。

「もうすぐ着くぞ！…って、凄いマスコミの数だぞ！車なんて出せないだろ、これじゃ！」
確かに、門の前にもズラッと脚立が壁を作っていて、車を出すには皆に
退けてもらわないと出られない。どうしよう…。

「騒ぎが収まるまで、預かって貰った方がいいんじゃないのか？
今、不用意に出入りすると、また厄介な事になるかもしれんぞ。

俺がみずきのマネージャーに電話して頼んでおくから、今日はこのまま帰った方がいい。」
そう言って今野は車を発進させる。

みずきは今頃どうしているだろう。ご飯は食べただろうか…。

車の中から後ろを振り向き、遠ざかってゆく宇都宮の家を、雪見はぼんやりと
見つめるしかなかった。

伝え合う気持ち

「めめ！ラッキー！ただいまぁ。」
重い足取りでリビングにたどり着くと、足元に二匹がすり寄って来る。
しゃがんで頭を撫でてると、やっと肩の力が抜けて身体が少しだけ軽くなった。

「よし！健人くんに、何か美味しい物でも作ろうっと！
あ！でもその前に、あんた達にもご飯だね。お腹空いたでしょ。」
この二匹の魔法使いは、私に元気が出る魔法を振りかけてくれた。
まぁそうでもしないと、自分たちも空腹を満たせないと思ったからに違いないのだが。

ご飯支度を終え、時計を見ると午後八時。
まだ健人くんは仕事中だよなぁと思っていると、突然ケータイが鳴る。当麻からだ！

「もしもし、ゆき姉？みずきに会って来た？」
電話に出た途端、いきなり聞いてきた。心配の度合いがよくわかる。
そうだよね。当麻くんにだって、早く様子を伝えてあげるべきだった。
最近優しさが足りないな、私…。

「会って来たよ。しっかりしてたから安心して。
会見も途中からしか見れなかったけど、みずきさんらしく堂々としてた。
ただね、昨日から何にも食べてないらしくて。あの後、食べてれば

いいんだけど…。
多分、大まかな事は打ち合わせが終って、だいぶ落ち着いてる頃だと思うから、
後で電話して声を聞かせてあげて。」

「わかった、そうする。で、健人は？帰って来てんの？」

「まだ仕事中だと思う。当麻くんは？何してたの？」

「俺？今ね、ホテルのショップでみずきにお土産選んでるとこ。
それが中々決まらなくてさ。ゆき姉にヒントもらおうかと電話してみた訳よ。
まぁ、みずきが大変な時に、お土産でもないんだけどさ。
でも、少しでもあいつの笑顔が見たいから…。ねぇ、何がいいと思う？」

「そうだなぁ。やっぱ、お守りになるような、身に付ける物がいいんじゃない？
ペンダントとか、お揃いの指輪…とか？
って言うか、その前に私達に何か言い忘れてない？まだ何の報告も受けてないんですけど。」
雪見が意地悪そうな声で、わざと聞いてみた。

「え？えーと、何の話かな？」

「まさか、しらばっくれて済まそうなんて思ってるわけぇ！？」
雪見がびっくりするような音量で叫んだので、当麻が電話の向こうで慌ててる。

「冗談だよ、冗談！もう勘弁してよ、耳がキーンとしたわ！

ちゃんとみずきに告白して、ＯＫもらったよ。沖縄から戻ったら報告するつもりだった。
でも、まさか宇都宮さんが、こんな早くに逝っちゃうなんてね。
宇都宮さんにも伝えたかったな…。」
当麻の声は沈んでいた。

「宇都宮さん、ちゃんと解ってたじゃない、当麻くんの気持ち。
この前病院で写した写真にも、凄く穏やかな顔で写ってた。
きっと当麻くんにみずきさんを託して、安心して眠りについたんじゃないのかな。」

「俺が安心させちゃったから、早くに逝っちゃったのかな…。」
ボソッと呟くように当麻が言った。

「なに言ってんの！そんなこと、あるわけないでしょ！
それより早くお土産選ばないと、お店閉まっちゃうよ！
まー、この前のお花屋さんでもそうだったけど、優柔不断さは相変わらずだね。
お店の開店と同時に選び始めないと、間に合わないんじゃないの？」
雪見はわざと大袈裟に言ってみる。少しでも当麻の気分を変えてあげたくて…。

「失敬な！大事な人にあげるプレゼント選ぶのに、優柔不断と呼んで欲しくないわっ！
真剣に真剣に選んでるから、そうなるんでしょーが！
だってゆき姉と健人のお土産は、ソッコー決まったもん！」

「どうせ泡盛でしょ！」

「あれ？どうしてわかったの？けど、それしか頭に浮かばなかった

！」

「はいはい！いいですよっ！その分の時間を、みずきさんのお土産選びに費やしなさい！
じゃ、電話切るよ！あ、報告！私、宇都宮さんのお葬式で歌う事になったから。じゃーねー！」

電話を切る寸前、「ええーっ！？」と言う大声が向こうから聞こえた。
後で、もうちょっと詳しい話をメールで送ってあげよう。
病院で写した、宇都宮やみずきの画像と共に…。

それからすぐに、今度はみずきにメールした。
「元気？ご飯は食べた？少しでも寝ないとダメだよ！」と。
すると、すぐにケータイが鳴る。みずきからの電話だ！

「もしもし、みずきさん！？今、話してて大丈夫なの？」

「うん。さっきね、ご飯も食べたよ！
美味しいお寿司を、おじいちゃんが出前で取ってくれた。」

「そう！良かったぁー！」
みずきの元気そうな声を聞いて、ホッとしたらなんだかウルウルした。

「ごめんね、そっちに行けなくなって。本当は何かお手伝いしたかったのに。
あ、そうだ！今、沖縄の当麻くんから電話が来たよ！
みずきさんの事すごく心配してたけど、落ち着いて葬儀の準備を進

めてるよ、
って教えてあげたら安心してた。後で電話が来ると思う。」

「ほんとっ?当麻くん、何してた?元気だった?」
矢継ぎ早に質問が飛び出す。その声は、今朝の弱々しい声とは別人で、
パッと明るくなったみずきの顔が、目に浮かぶようだった。

「ねぇ!今、沖縄にいる当麻くんの姿を透視してみて!できる?」

「えっ?やろうと思ったら出来るけど…。
でも、お風呂とかトイレとか、入ってたら見たくないし…。」
みずきはあまり乗り気ではないらしい。

「あははっ!今ならまだ大丈夫な場所にいるから、見て見て!」

「ほんとに大丈夫…?」
そう言った後、みずきは精神統一して集中し出したらしく、しばらくのあいだ無言になる。

「あ…見えた…。どこだろう?お店の中?かな…。」

「そう!当たりっ!すっごいねー、みずきさん!当麻くん、何してる?」

「うーん…。なんか、お店の中をウロウロしてるみたい。何してるんだろ?
何か捜し物してるのかなぁ。」

「そうだよ!当麻くんね、一生懸命みずきさんのお土産選んでるの。

あの人ね、この前のお花もそうだったんだけど、本当にみずきさんの喜ぶ顔が見たくて、
真剣に悩みに悩んで、大事にプレゼントを選ぶの。
そのお陰で、一緒に行くとえらい待たされるんだけどねっ。
当麻くん、宇都宮さんにもお土産買ったって。」

「えっ！　？」

「泡盛！帰ったら祭壇にお供えして、一緒に飲むんだって言ってたよ。
宇都宮さんがお酒好きだったって、知ってたみたい。
本当にいい奴だから、当麻くん。私が保証する。
きっとお父さんも、安心して旅立ったんじゃないのかな…。」

「……そうだね、きっと。あさってが楽しみ。みんなで泡盛飲もう！お父さんと一緒に…。」
みずきは明るい声で電話を切った。

その直後、健人が帰って来た！
玄関先に飛んでいき、「大好きだよっ！」と抱き付くと、笑いながら「俺もだよ！」って言ってくれる。

これからは、ちゃんと気持ちを伝えるからね！

それってプロポーズ？

「ねぇねぇ、なんかあったの？
なんでさっき、いきなり『大好きだよ！』って抱き付いたの？」
ご飯を頬張りながら、健人がしつこく聞いてくる。

「えーっ？大好きだから、大好きって言っただけだよ！それじゃダメ？」
雪見がグラスのビールを飲み干し、わざと不満げな顔をして健人を見た。
本当は、今野に言われた言葉が頭から離れないのと、当麻とみずきの初々しい恋愛に刺激されての行動だったのだが。

「ダメじゃないけど、おかしいじゃん！普段、滅多に言わないのに。」
健人の口ぶりを見て、よっぽど言ってないんだなぁーと、少し反省。

気持ちの中じゃ思ってるんだよ！いっつも。
ただこの年になると、そういう類の言葉を口にするのが、少々こっぱずかしくて
躊躇しちゃう分、言う回数が減ってるだけのこと。
決して愛情まで減ってるわけじゃないんだよ！
…って言うのも、心で思ってるだけじゃ伝わらないよね、きっと…。

「まぁまぁ、飲もう！今日は二人で宇都宮さんのお通夜だよ。」
そう言って雪見は、パソコンデスクの上に宇都宮の写真を置き、グラスに注いだ
ビールをお供えする。
それから健人に、宇都宮の葬儀で歌う事になった経緯や不安、迷い

を話した。

「小野寺さんが言う通り、めっちゃスッゲー事だって！
だって、デビュー前の役者が、いきなり映画の主役に抜擢されるようなもんでしょ？
どう考えても凄いでしょ！もっと喜びなよ。なんでそんなにテンション低いの？」

「だってぇ…。」

「俺は、みんなに自慢したいくらいに嬉しいけどな。
実はあそこで歌ってんの、俺の彼女なんっす！ってね。」

「ちょっと！マジやめてよぉ！？どんだけ集まるかわかんないお葬式でそんな事言ったら、
私みんなに袋叩きにあっちゃう！」
雪見は目を三角にして全力で止めた。が、健人はその勢いに呆れ顔。

「言うわけないだろっ！あのねぇ、俺こう見えても理性の人なの。
当麻やゆき姉みたいに、その場の感情で行動することはまず無いから！
安心して歌って下さいな。」
そう言ってビールを飲み干し、冷蔵庫からワインを持ってきた。

「だよねぇ！当麻くんだったら確かにあり得るわ！
あの人、自分の感情に正直だから。頭で思った瞬間に行動しちゃうタイプ？
みずきさんもこれからが大変かも！毎日ハラハラドキドキで。
だって芸能界の超ビッグカップル誕生だよ？絵に描いたような二人でしょ！」

「ち、ちょっと待て！うそっ？あの二人、本当に付き合い出したのっ！？」

「あ、あれっ？言ってなかったっけ？」

「聞いてないっつーのっ！なんで早く教えてくんないのさ、こんな大事件！
お祝いのメールしてやんなきゃ！」

それから健人は、メールじゃめんどくせぇ！と言いながら当麻に電話をかけ、
親友の久々の恋愛成就を自分の事のように喜びながら、いつまでも楽しそうに笑ってた。

頬杖をつきながらその笑顔を、ずっとニコニコ眺めていた雪見は、一瞬
『今が一番幸せな時かも知れない。今が…。』と冷静に分析する感情に出くわし、
慌ててそれを引っ込める。
この時間が永遠であることを、切に祈った。

それから二日後の１１月３０日。
いよいよ今日午後６時、宇都宮勇治お別れの会が執り行われる。
無論雪見は朝早くに目覚め、夜明け前のカフェオレを飲んで一人、気を紛らわす。だが…。

あー、マズイっ！人生最大の危機かもっ！？

どうしよう！この緊張ハンパないっ！！過呼吸になりそうだ。
この時間からこんなんだったら、あと１２時間後は私、死んでるかも？

どうにもこうにもならなくなって、雪見はまた寝室に戻り、健人の眠るベッドへ潜り込む。
あと３０分は寝られるはずだったのに、雪見によって起こされてしまった健人。

「ちょっとぉ！そんなバタバタされたら寝れんっつーの！」
「知ってるよっ！健人くんだって、とっくに目が覚めてたでしょ。寝起きが悪い健人くんが、起こされてすぐに目が開くわけないもん！」

「あれ？バレてた？ゆき姉なんて、また三時間ぐらいしか寝てないでしょ？
眠らなくてもいいから、身体だけは休めときなよ。
身体を横にしてるだけでも、疲れって解消されるんだって。
大体俺が歌うわけでもないのに、なんでこんなにドキドキしてんだろ？
心臓の音、聞いてみ！ハンパないから！」
雪見は布団に潜り、健人の胸に耳を当てた。

「ほんとだ！凄いドキドキしてる。やだ、健人くんに落ち着かせてもらおうと思ったのに、
益々緊張してきた！どうすればいいの？私。」
すると健人は、胸に耳を当てたままの雪見をギュッと抱き締めた。

「いいよ、このまま二人でドキドキしてよ！
なんかこうしてるとさ、二人で一人になったみたいじゃない？

ゆき姉は俺の分身で、俺はゆき姉の分身で…。
これからもずーっと一生、同じ物見てドキドキしたりワクワクしたりして、
暮らして行けたらいいよね。」

「えっ？」

それは、サラッと聞き流してしまいそうな言葉だった。
それほどさりげなく、ともすると別に特別な意味など無いんじゃないか
と、自分の勘違いにしてしまいそうな言い方だった。

だけど今の言葉って…プロポーズ？

雪見は慌てて顔を上げ、健人の瞳を見つめた。
健人の鼓動がさっきにも増して強く聞こえる。それに連動して雪見の鼓動も
強く早くなり、巨大な一つの塊となってベッドを揺り動かしていた。

「えっ？あのさぁ。そんなに食いつかれても困るんだけど、俺はずっと前からそう思ってたよ。
ちょいちょいアピールしてるのに、全然本気にしないんだもん、ゆき姉。」

照れ隠しか、プイッと横を向く健人。
だけどそれがプロポーズであるとか無いとか、はっきりした言葉はいくら待っても
健人の口からは飛び出さなかった。

「ドキドキを静めなきゃならないのに、なんで今そんな事を言うの

よっ！
もう、どうしてくれるのっ！」

「こうする！」

健人は雪見のお喋りな唇を、自分の唇でふさいだ。
そんな事でドキドキが治まるはずもなく、更に加速度を増すばかりだったが
それとは裏腹に、不思議と心には平安が戻ってきた。

この人が私を見守っててくれる。
私の痛みも、喜びも悲しみも、すべてを一緒に感じてくれて一緒に生きてる。
それさえわかっていれば、怖いものなど何もない。
大衆の面前で歌う事の、何が怖いというのか。

あなたをなくす事以外に恐れる事など、何もない…。

最期の後押し

『けさ、あんなふうに思ったのは気の迷いだ！どうしよう！やっぱりこわーい！！』

葬儀開始二時間前。
雪見は葬儀場の控え室で、みずきと並んでヘアメイクを施されている。
緊張のせいで肩こりがひどく、段々と頭痛もしてきた。

「昨日はお酒抜いたのに、二日酔いじゃなくて緊張で頭が痛くなるなんて！最悪だぁ！」
雪見のわめきに、『ヴィーナス』から駆り出されたスタイリストの牧田が、
鎮痛剤と水を持ってくる。

「雪見ちゃん、少し落ち着いて！
まだ二時間あるから、メイクが終ったら肩揉んであげる。みずきさんは大丈夫？」
ヘアメイクの進藤が、鏡越しに声を掛けた。

「私なら大丈夫です！結構緊張感を楽しんじゃうタイプだから。
私のことは気にしないで、雪見さんのこと見ててあげて下さい。」

「さっすが、大女優！この年にして貫禄が違うわぁ！」
牧田が二人の後ろで腕組みをし、感心しきりにうなずいてる。

「ゆき姉、ごめんね！お父さんのお陰で大変な思いさせちゃって。」
専属の美容師さんに髪をセットしてもらってるみずきが、鏡の中の

雪見に謝った。

「なに言ってんの！宇都宮さんのせいでも、みずきさんのせいでもないから！
ただ私の肝っ玉が小さいだけ！こっちこそ、ごめんね。
もし万が一にもトチッたりした時は、許してね。」
そう言いながら雪見が、はぁぁ…とため息をつくと、後ろで牧田がぼそっと言った。

「あーあぁ。また負のオーラが充満しちゃった…。」

葬儀開始一時間半前。
会場の準備がほぼ整い、かなり気の早い参列者がチラホラ来場し始める。
雪見も、牧田の用意した『ＹＵＫＩＭＩ&ａｍｐ;』らしい喪服に着替え、ロビーが混み合わないうちに
宇都宮勇治写真展の様子を覗きに行った。

斎場の入り口に近い所から、年代を追って展示されている。
幼少の頃。学生の頃。俳優に成り立ての頃の写真は、確かに当麻に雰囲気が似ていた。
そして可愛い女の赤ちゃんを抱っこしてる写真。下に『みずき生後一ヶ月』と書かれている。
その宇都宮の笑顔は、心底我が子の誕生を喜び慈しみ、未来への希望を胸にした
新米父の思いそのものであった。

だが、どんなに身を引き裂かれる思いで、可愛い子を手放したのであろうか。

他人によって操作された我が子の運命…。
多分、命果てる瞬間まで、心の中でみずきに詫びてたことだろう。

「本当にみずきさんだけが、生きてく希望だったんですよね…。」
そう口に出して呟くと、涙がポロポロとこぼれては落ちた。

涙を拭きながら足を進めて行くと、残り三分の一ほどの所で、びっくりして足が止まる。
そこから先は、すべて雪見が写した写真が展示されていたのだ。
しかもあろう事か、カメラを手にした雪見の等身大パネル写真が置いてあり、
『カメラマン　浅香雪見』とご丁寧に名前まで書かれているではないか！
驚いたのなんのって、すべての涙が体内の奥深くに引っ込んでしまった。

「どう？びっくりした？私が写したゆき姉、結構いい仕上がりのパネルになったわね。」
後ろからみずきの声がして、雪見が振り向く。

「びっくりするでしょ、普通！いきなり自分が立ってるんだから。
しかも私の写した写真が、こんなにたくさん展示されてるなんて…。
一体どういう事？」

「お父さんの遺言の一つなの。」　「えっ？」

宇都宮は、雪見が写した写真を大層気に入り、遺影の選定も迷いに迷ったそうだ。
こんなにいい写真がたくさんあるのに、他をお蔵入りさせるのはも

ったいない。
人生締めくくりの姿こそ皆に見て欲しいから、この写真を数多く展示するように。
それが遺言の一つだったらしい。

「父が亡くなった日に、ゆき姉が枕元に置いてったアルバムからも使わせてもらったわ。
健人や当麻と一緒の写真が多いから、迷惑をかけるかも知れないって迷ったんだけど…。
でもあの時の父は、確かに役者の顔をしてたから…。
だから、どうしても俳優　宇都宮勇治最期の姿として、皆さんに見てもらいたかったの。
もちろん健人たちを載せる許可は、事務所にもらってるから安心してね。」

そう言われて、最後の写真まで足を進めて見る。
確かに、猫と写した写真はプライベートな素顔の写真だが、健人や当麻と
仕事の話を熱く語ってる時の写真は、頬こそ痩せこけてはいるが、俳優
宇都宮勇治そのものであった。

「私ね、この写真が大好きなの。」
みずきがそう言いながら、一枚のパネルを指差す。
それは宇都宮が、右手で当麻と、左手で健人と握手している写真だった。
当麻と健人はちょっぴり緊張気味の顔。
宇都宮は、これからを期待される二人に、無事バトンを手渡したような晴れやかな顔。

「これが、この世に残る宇都宮勇治最期の一枚…。
きっとね、思い残す事は何もないって思ってたと思う。いや、そう思ってて欲しい…。」
みずきはゆっくりと写真に手を伸ばし、そっと父の頬に指先を触れる。

しばらくの間、父と無言の対話をしていたみずきがフッと我に返り、
「お父さんが、『会場の最終チェックをしてこい！』だって。ちょっと行ってくるねっ！」
と笑顔でロビーを駆け出した。
どうやらみずきは、もうすっかりと自分を取り戻したようだ。
きっとそれは亡き父と対話の出来る、不思議な能力のお陰であろう。

その後ろ姿を目で追ったあと、雪見もみずきを真似して写真の宇都宮に触れてみる。
みずきのように不思議な力は持ち合わせていないから、一方通行ではあるけれど、
どうしても式の前に伝えておきたい事があった。

『宇都宮さん。本当にありがとうございました。
この写真展もきっと、私に対する優しいご配慮ですよね。
無名カメラマンの私を、最後に強力に後押ししてくださったんだと思います。
自分で撮した写真を改めて見て、一つ気付いた事がありました。
私ってポートレートが苦手だとばかり思ってたけど、実はそうでもないんだなって。
自分で自分の可能性を狭めちゃいけないんですね。
宇都宮さんを送る歌も最初は自信がなくて、お引き受けした事を少し後悔したけれど、
これは、デビュー前の私に宇都宮さんが与えてくださった、大きな

大きな
ワンステップなんじゃないかと思うことにしました。
だから、今の私が発揮出来る、最大限の力でチャレンジします。
それでもトチってしまった時は、笑って許して下さいねっ！
じゃ私、祭壇を見てきます。どんな遺影になったのか楽しみ！」

そう心の中で対話して、宇都宮の頬から指先をそっと離す。
その瞬間、身体中から不思議とエネルギーが湧き出すのを感じる事ができた。

さぁ！次のステージに進む扉を、自らの手で開けに行こう！

素敵な祭壇

「う、うそっ！なにこの大きな写真…。」

会場のドアを開けた途端、目に飛び込んできたものは、正面の壁一面を覆い尽くした
巨大な遺影であった。
想像していたものとあまりにもスケールが違いすぎて、呆気にとられるばかり。
ボーッと自分の写した遺影を眺めていると、横にみずきがやって来る。

「どう？いい写真でしょ？お父さんの一番のお気に入り。
まぁ、一番が多すぎて相当悩んでたけど、私もこの写真がいいと思った。」

「ほんと、いい写真だね！この際だから自画自賛しちゃおっと！」
雪見が首をすくめて笑って言う。

それは宇都宮が二匹の愛猫を抱きかかえ、愛しそうに嬉しそうにこっちを見て微笑んでる
素顔の宇都宮勇治であった。

病室の窓から、薄いレースのカーテン越しに差し込む陽の光。
その柔らかい光が宇都宮の身体をふんわりと包み込み、命が果てる前の痛々しさを
真綿でくるんだように、そっと隠していた。

「なんかさ、映画のスクリーンに映ったお父さんみたいじゃない？

お父さんって、気難しい頑固おやじの役も多かったけど、反対にめちゃめちゃ気の弱い、
猫だけが話し相手って言うシリーズもあったでしょ？
なんだか、あのワンシーンに見えてくる。」

「ほんとだね。じゃあこれが、俳優宇都宮勇治最期のラストシーンなんだ…。」
そう思って改めて遺影に目をやると、宇都宮が「上手いこと言うねぇ！」
と一瞬、微笑んだような気がした。

その写真から視線を下にずらすと、脚立に登ったり下から手を伸ばしたりして、
祭壇の花を慌ただしく手直ししてる、三人の花屋さんの姿が目に入る。

「うわぁ！凄いお洒落なお花！なんかお葬式とイメージが全然違う！」
雪見が感激して思わず叫ぶと、脚立に登った花屋さんがこっちを振り向いて、
何故か雪見に手を振った。

「おーい！雪見ちゃーん！」「えっ？ええーっ！マ、マスター！？」

そこに登っていたのは、なんとなんと、居酒屋『どんべい』のマスターではないか！
で、祭壇の下で花を直している二人は、雪見が行きつけにしている花屋の夫婦。

『どんべい』のマスターは、花屋の店主の兄ではあるが…。

「な、なんでマスターが、こんなとこにいるのよっ！ビックリするでしょ！」

脚立の下まで走り寄り、雪見が上を見上げた。

「こいつらに駆り出されてよっ！今朝からメシも食わずに働かされてるんだぜっ！

あ！俺がなんで花なんかって思ってんだろ？うちの実家は花屋なの！で、俺もこう見えて、草月流の看板持ってるわけよ。なに笑ってんだよっ！

あー、やっと終ったぁ！師範の看板なんて、クソも役に立たなかったぞ！」

ブツブツ言いながら脚立を降りて、マスターが大袈裟にふぅぅとため息をつく。

「なに人聞きの悪いこと言ってんの！お昼にみずきさんから差し入れ頂いて、

お腹が出るくらいに食べたでしょ！

お久しぶり、雪見ちゃん！ここんとこタイミング悪く、私が配達中で会ってなかったもんね。」

マスターの義理の妹である花屋のママさんが、雪見に近寄り笑顔で言った。

「どうりでお洒落な祭壇だと思った！お花のチョイスが私好みだなって。

こんな祭壇、見たことないもん！すっごく素敵！」

雪見が興奮気味にそう言うと、みずきも寄ってきて礼を言った。

「ゆき姉のお陰で、素敵なお花屋さんに巡り会えたわ。

お見舞いに頂いたアレンジメントを一目見て、私も父も、絶対ここだ！って思ったの。
最初っから、普通のお葬式にするつもりはなかったからね。
父も、菊で飾られた祭壇なんかまっぴらごめん！って遺言書にまで書くくらいだもん。
センスが良くてお洒落なお店を、前から探してたの。
けど、どこのお店も、そんな大きなご葬儀の祭壇は無理です！って断られて…。
ここのご夫婦にも一度は断られたんだけど、なんとかやってみます！って。
連絡もらった時は本当に嬉しかった。」
みずきがそう言いながら、ママさんの手を取りギュッと握る。

「だってねぇ！こんなに可愛い、娘みたいな年頃の女優さんにお願いされたら、
断るなんて罰が当たるでしょ！それで兄貴にも頼んで応援に来てもらったわけ。
さっきまでは、『どんべい』の若い男の子達も手伝ってたのよ。
これだけのお花をそろえるのは大変だったけど、私達も一生体験できない、
いい勉強をさせてもらいました。
本当にありがとうね、みずきさん！今度はお店にも遊びに来て。
花屋とは思えない、美味しいケーキをご馳走するから！」
すると、後片付けを終えた店主もみずきの元にやって来て、笑顔を見せた。

「自分で言う？まぁ、お世辞抜きにこいつの焼いたケーキは美味いです。
そのうち、花屋を辞めてケーキ屋になる！って言い出さないかと、内心

ドキドキしてんですけどねっ。
じゃ、祭壇はこれで完成しましたので、僕たちは帰ります。
済みませんでした、ギリギリまで掛かっちゃって。
素敵なお別れ会になる事を祈ってます。雪見ちゃんも頑張って！じゃ！」
ほらぁ、兄貴帰るよー！と言いながら、三人は荷物を手に会場を後にした。

「素敵なご夫婦ね。私、すっかりここのお花屋さんのファンになったわ。
きっと来てくださる方も、褒めてくれると思う。みんなに宣伝しておくねっ。」
みずきが言ったその時だった。

後ろから「みずきー！ゆき姉！」と呼ぶ声がする。
二人同時に振り向くと、そこには少しだけ日焼けした当麻が立っていた。

「当麻！」
みずきの嬉しそうな顔！だがそれは、すぐに泣き顔へと変化した。
きっと当麻の顔を見て、一気に緊張の糸が切れたのであろう。
みずきの元へと歩み寄り、「大丈夫か？」と当麻が一言掛ける。
すると、それまで気丈にしていたみずきが、まるで幼子のように声を上げて
泣きじゃくりだした。

「ごめんな、遅くなって…。ずっとみずきのこと、心配だったよ。
もう、しばらくはどこへも行かないから、俺がお前のそばにいてやる。」
そう言いながら当麻は、泣き止まない子供をなだめるように、「よ

しよし。」と
愛しそうに頭をいつまでも撫でていた。

その様子を微笑ましく眺めていた雪見は、二人きりにしてやらなくちゃと
そっとその場を離れ、会場から再びロビーへと出る。
が、そこにはすでに、もの凄い数の参列者がひしめいているではないか！
『うそっ！こんなにぃ！？』

時計を見ると葬儀開始４５分前。
まもなく開場をを告げるアナウンスが、静かに流れることだろう。

ドキドキなお葬式

「皆様、本日はお忙しい所を、故宇都宮勇治お別れの会にご参列賜りまして、
誠に有り難うございます。大変お待たせを致しました。只今より……」

ロビーに開場を告げるアナウンスが流れ、ホールのドアが左右に開かれると、
人の波が一斉に中へと飲み込まれて行く。
雪見はその様子を、ロビーの一番隅からボケーッと突っ立って眺めていた。

『一体どんだけの人が来るわけ…？
凄い人数が集まるとは聞いてたけど、まさかここまで凄いなんて…。
うわっ！テレビで見た事ある人がいっぱいいる！
この人、いっつも宇都宮さんの奥さん役で映画に出てる人だ！
あっちにいる人もそこの人も、見た事ある！』

テレビなど、健人と付き合うまではニュースと天気予報ぐらいしか見なかった雪見だが、
付き合い出してからはやはり気になって、割と広く見るようになっていた。
そんな画面の中でしかお目にかかれない有名人が、わんさかと一堂に会している光景は、
雪見のようなほぼ一般人が目にしても、それは夢の中の出来事にしか思えないのだった。

『私がここにいてもいいのかなぁ…。警備員さんにつまみ出された

りして。』
厳重なチェックは無さそうだが、一般の焼香客は外の別会場に設けられた祭壇での焼香となる。
そこにもすでに多くのファンが長蛇の列を成している事を、ロビーにあるモニターが告げていた。
雪見は、自分が芸能事務所に所属しているという意識があまり無いので、
自分がこの場所に居ることが場違いな気がして仕方ない。
早く健人と今野が来てくれないかなぁー、と落ち着かない気持ちで出入り口を凝視してた。

葬儀開始十分前。
喪服姿の健人と今野が、やっと向こうに見えた時のホッとした事といったら！
二人は周りに挨拶しながら、足早にこっちに向かってくる。

「間に合ったぁ！ごめん！遅くなって。当麻は？もう来てる？」

「うん、結構前に来たよ。ずっとみずきさんに付いててくれた。
私達の分、場所を確保しとくって、もう中にいる。」

「じゃ、行こうか。」

会場の中は、白いテーブルクロスが敷かれた丸いテーブルがたくさん点在し、
軽食と飲み物も用意されていて、おめでたい席の立食パーティーを思わせる。

健人と雪見は、お互い初めて見せる喪服姿がなんだか恥ずかしい。

だが健人は、同じ姿をした黒の集団の中でも一際目立ち、オーラが違うということは
こういう事をいうのか！と改めて雪見は感心する。
が、そのお陰で隣りに立ってる雪見にまで注目が集まり、熱いというか
冷たい視線が注がれ居心地は悪かった。

それが当麻と合流してからは、更にオーバーヒートした。
こうして公の場に三人が並んだのは、デビュー会見以来のこと。
あの時はマスコミだけだったが、大勢の芸能関係者前に雪見が姿を現したのはこれが初めて。
当然、今をときめくイケメン俳優二人の間に立つあの女は誰？という視線が
あっちからもこっちからも、矢のように容赦なく突き刺さる。

「やだぁ…。みんながこっち見てるんですけど、怖い顔で。
私、あっちのテーブルにいてもいい？」

「だめっ！今うちの事務所のお偉方も来るんだから、ここにいろっ！」
今野に言われて泣く泣く視線に耐え続ける。
すると喪主のみずきに挨拶に行ってた副社長と常務が、テーブルにやって来た。

「やぁ、ご苦労さん。忙しいのによく来れたな、二人とも。
小野寺くん、この子かね。今日大役を仰せ使ったうちの新人は。」
雪見とは初対面の副社長安田が、雪見の前に来て握手を求める。

「は、初めてお目にかかります！浅香雪見と申します！」
手をギュッと握られたまま、雪見は緊張しながら頭を下げた。

「ロビーの写真も見せてもらったよ。まぁ凄い人だかりでチラッとしか見れなかったが。
あの遺影も素晴らしい！その上、こんな会場で歌を披露できる新人なんて、
うちの事務所始まって以来だよ！鼻が高い！どうか失敗しないように頑張ってくれたまえ！
あっ！社長！ご無沙汰してました。お元気そうで…。」
安田は向こうから声をかけてきた、どこかの事務所社長の元へと行ってしまった。
雪見にプレッシャーだけを残して…。

「はぁぁ…、緊張した。…っていうか歌の事、気にしないでおこうと思ってたのに…。」
またしても雪見は、はぁぁ…とため息をつく。
その場にいた小野寺を筆頭に四人は、『副社長、余計な事を！』と心の中で舌打ちしてた。

「皆様、大変長らくお待たせいたしました。
只今より、故宇都宮勇治お別れの会を開式させて頂きます。まず始めに…。」
場内に女性司会者のアナウンスが流れ、それまでざわついていた会場が静まり返る。

お別れ会主催者である宇都宮事務所の社長挨拶、そうそうたる来賓の弔辞、
そして喪主であるみずきの挨拶の番がやって来た。
マイクの前に歩み寄る、初めて目にする緊張しきったみずきの顔。
それを見守る雪見達三人も、自分が挨拶するかのごとく緊張し、そ

わそわと落ち着きがない。

「やっべぇ！腹痛くなってきた…。」

小さな声で言ったつもりの当麻の声が、シーンとした会場では意外にも周りに響いた。

瞬間、みんなの注目を集めた当麻。しまった！と言う顔をしてバツ悪そうに下を向く。

が、それを目撃したみずきはクスッと笑い、一転して表情が軟らかくなった。

『ありがと！当麻。お陰で落ち着いてきたよ。私、最後まで頑張るからね。』

心の中で礼を言い、一呼吸おいて喪主の挨拶を始める。

その姿は、若くして国際派女優の名前を世に知らしめた、華浦みずきらしい堂々としたものだった。

宇都宮との親子関係の公表で世間を騒がせたお詫びに始まり、生前の父が受けた恩義へのお礼、

闘病中の様子や、このような形での葬儀が宇都宮の遺言であることなどをよどみなく、

大女優の風格さえ漂わせて話し切った。

三人がホッとしかけた挨拶の終わり…。

「皆様、本日は式の最後に、素晴らしい歌のプレゼントをご用意させて頂きました！

そちらのテーブルに、イケメン俳優に挟まれて立っている浅香雪見さんをご紹介します！

雪見さん！こちらにいらして！」

「えっ？ええーっ！！」

なんの前触れもない突然の振りに、三人同時に声を上げた！

「うそっ！みずきぃ～！！」

そのテーブルのメンバーが、顔を引きつらせたのは言うまでもない。

不思議な遺言

「ちょっと、どうしよう！どうしたらいいの！？」
みずきの突然のご指名に、雪見はだだうろたえるばかりだった。

「どうしよう！ったって、もう呼ばれちゃったんだから、行くしかないだろ！早く行けっ！」
小野寺常務が小声で雪見をせっつくが、雪見の足は中々前に出て行こうとしない。
会場がざわつき出した。
まずいぞ！と健人たちが焦っていると、コツコツとハイヒールの音を響かせて、
みずきが雪見の隣りにやって来る。

「ゆき姉、大丈夫だよ、私がついてる。それにね、これもお父さんからの遺言だから！」

「えっ？遺言？」

「そう！遺言がいっぱいで、こっちは大忙しよ！さっ、行こっ！」
そう言いながらみずきは、半ば強引に雪見の手を取りマイクの前まで連れ出した。

「皆様、お待たせ致しました！改めてご紹介申し上げます。
本日の歌のゲスト、浅香雪見さんです！」

「イェーイ！ゆきねぇーっ！」

当麻が会場を盛り上げようと声をあげ、同じテーブルのメンバーが

大きな拍手をする。
が…。盛り上がってるのは明らかにそこだけで、会場からはパラパラとみみっちい拍手。
当麻、本日二度目のやっちまった感が漂う。

だがそれはもっともな反応だ。
有名アーティストの名前でも呼ばれたのなら、当麻と一緒に「いいぞーっ！」
とでも盛り上がるだろうが、いきなり「歌のゲスト浅香雪見さんです！」
とか紹介されても、「誰？それ。」っていうのが正しい反応。
みずきはそこんところを間違えた。

この会場に、雪見を知ってるマニアックな人など一人もいない。
だって大御所俳優の葬儀に参列した、平均年齢かなり高めの人達が大半なのだから…。
これにはさすがのみずきも、しまった！と思ったが、そこは海外生活で身に付けたジョークで乗り切った。

「あれ？皆さんご存じなかったです？雪見さんのこと。
あぁ、ごめんなさい！私、けさまで父と未来を旅してたものですから。
この雪見さん、未来じゃ超有名人になって活躍してるんですよ！
だから、てっきり皆さんもご存じかと勘違いしちゃいました。
あ！本当に未来を旅するのは、もう少し後にしてくださいね！
父が先に行って、皆さんの分の特等席を場所取りしてきますから！
まだまだこっちで、のんびりしてて下さいな。
じゃあ、現代の皆さんに改めてご紹介します！
未来の有名人、浅香雪見さんです！拍手をお願いします！」

今度は笑いと共に、割れんばかりの拍手が巻き起こる。
が、健人たちは唖然とするやら、苦笑いするやら…。

「相当なブラックジョークだよね、今の…。」
健人の顔が引きつってる。

「みずきの事務所的には大丈夫なのか…？こんな大御所達を相手に、あの発言は…。」
小野寺が、よその事務所の事ながら心配そうに呟いた。

「でも、なんとか危機的状況は脱しましたよね。」
ホッとした表情の今野が、ハンカチで汗を拭う。
そんな中、一人だけニコニコ顔の当麻が言った。

「さっすが、みずき！あとで褒めてやろうっと！」
さすが恋にまっしぐらな男は、どこまでいってもめげることを知らない。

「始めに歌のゲストとご紹介申し上げましたがこの雪見さん、実は本業はカメラマンなんです。
ロビーで行なわれてる写真展は、もうご覧になって頂けましたでしょうか？
まだの方は、後からでも是非ご覧になって下さいね！
そこに等身大のパネルが立ってたんですが、彼女だってお気付きになられたかしら？
今ここに立ってる雪見さんは、アーティストの『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ；』に変身してるので、
まったく別人にも見えますが、両方共にとても才能のある人です。

私の後ろの大きな父の遺影、これも彼女が写した作品です。」
みずきの説明に、おおーっ！と会場中がどよめいた。

「素敵な遺影でしょ？父が自分で選んだ一番お気に入りの写真です。父は、たった一度だけ会った雪見さんに才能を見いだし、遺影の撮影を懇願したのです。
そして彼女は私と父の、大事な最後の残り時間を写してくれました。本当に彼女には感謝しています…。」
涙ぐむみずきに、会場がしんみりと静まり返る。

「あっ、ごめんなさい！お話が長くなり過ぎました。
彼女の歌も素晴らしいです。どうか最後をお楽しみになさってて下さいね！
では、グラスにお好きなお飲み物をお注ぎ下さい。
父、宇都宮勇治の素敵なラストセレモニーに、献杯！」

「乾杯！」
当麻が一際大きな声でそう言った瞬間、会場中からジロッと睨まれた。

「お前っ！今、『乾杯！』って言っただろ！」
小野寺が当麻に小声で詰め寄った。

「な、なんですか！言うでしょ、普通！」
当麻はなぜ怒られてるのか解らず、しどろもどろ。

「こーいうめでたくない席では、『乾杯』じゃなくて『献杯』って言うもんなのっ！」
今野が呆れたように、大人のマナーをたしなめる。

「あーあぁ！本日三回目のやっちゃった！だな。」
健人は笑いながらビールを飲み干した。

会場は和やかに、宇都宮を偲ぶ語らいの時間に入る。
皆それぞれに宇都宮の思い出話を語り合ったり、あるいは遺影の前で酒を片手に
故人と一対一の心の対話をしたりして、最後の別れを告げた。
みずきが忙しそうに、各テーブルをお酌して回ってる。
雪見も宇都宮に焼香してから、健人らの待つテーブルへトボトボ戻った。

「よっ！お疲れっ！」
小野寺がビールを飲みながら、雪見の肩を叩く。

「ほんっと、何にもしてないのに疲れました…。
もう、みずきさんったら、上げるにいいだけハードル上げてくれて、私このあと、どうすればいいんですか…。」
すっかり雪見は意気消沈してる。

「まぁまぁ、取りあえずは一杯飲め！まだ出番は先なんだから！
でも、あれだな。宇都宮さんも、よっぽどお前の事を気に入ってくれたんだな。
じゃないと自分の葬式で、こんな無名の新人をアピールしろ！なんて遺言残さないぞ、普通。」

「それはそうですけど…。ほんと、どうしてなんだろ…。」
雪見はぼんやり考えながら、小野寺が注いでくれた冷たいビールを一気に飲み干した。すると…。

「おっ！いい飲みっぷりですねぇ！わたくし、こういう者でござい

ます。
まぁ、お近づきのしるしに一献！」
知らないおじさんがいつの間にか雪見に名刺を差し出し、空いたグラスに勝手にビールを注いだ。

注がれたので「あ、ありがとうございます…。」と飲み干す。
するとまた別の人が横から名刺を差し出し、またビールを注いだ。

「はぁ？」

見るといつの間にか、雪見の後ろには名刺とビール瓶を持ったおじさんが、
列を作って順番待ちしてるではないか！

どーゆーこと！？

天国からのプレゼント

「あのぅ…。私に何か…ご用でしょうか？」

あれよあれよという間に出来た長蛇の列に、雪見は意味がわからない。

すぐに小野寺と今野が雪見より前に出て、この不測の事態に対応し始めた。

「私、浅香雪見の事務所の小野寺と申します。浅香に何かご用がございましたら、この私が対応させて頂きます。」

そう言いながら小野寺は、取りあえず前方に名刺を配る。

「これはこれは、常務さんでしたか！大変失礼致しました。私、こういう者でございます。」

先頭にいた人が、改めて小野寺に名刺を差し出した。

「えっ？渡部エンタテイメントさんですか！いつもこの二人がお世話になってます。」

蚊帳の外を決め込んで、サンドイッチをパクついてた健人と当麻が、慌てて姿勢を正し「お疲れ様です！」と挨拶をした。

渡部エンタテイメントと言えば大手芸能プロダクションで、所属するタレント、

俳優はかなりの数にのぼる。

健人と当麻が共演する事の最も多い事務所だった。

「うちのタレントの写真集を、浅香さんにお願いしたいと思いまして！」

「えっ！？」
雪見はもちろん、健人たちも驚いて顔を見合わせる。
すると、その後ろにいた人も、そのまた後ろにいる人も「うちもです！」
「私の所もお願いしたい！」と口々に言うではないか！

「ちょ、ちょっと待って下さい！
あの、私、今回はたまたま宇都宮さんと御縁があって写させて頂いただけで、
元々は猫を専門に撮すカメラマンなんです！ですから、そのようなお話を頂いても…。」
雪見が突然の仕事依頼に戸惑って、目で小野寺に助けを求めた。
その様子を、遠くのテーブルでお酌をしながらみずきが、笑顔で目で追っていた。

「お話は解りました。ですが、大変申し訳ない！
浅香は来年一月にＣＤデビューを控えておりまして、この先はカメラマン活動を
休止せざるを得ないんです。」

「でもアーティスト活動は、たしか三月一杯までの期間限定と報道されてましたよね？
それ以降でかまわないんです！是非ともお願いしたい！」
雪見を知る人などこの会場にはいないと思っていたが、やはり同業者は
幅広く情報を持ってるものだ。

雪見は困った。
三月一杯で事務所との契約が切れた後は、また一個人のフリーカメ

ラマンの立場に戻る。
そのあとの仕事は、すべて自分から売り込まないと契約には結びつかない。
だが目の前の行列は、待ってもいいから仕事を頼みたいという人達の行列だ。
仕事が向こうから歩いてやって来たのだ。しかし…。

「お話は有り難いです。でも、今はまだ三月以降の事は考えられない。
それに、猫を撮しに旅に出ようと思ってましたから、ずっと。」

結局いつまでたっても押し問答が続き、このような場所では他の参列者にも
迷惑がかかると、名刺だけを受け取りお引き取り願った。

「済みませんでした。なんだか思わぬ事になっちゃって。
みずきさんにも後から謝らなくちゃ…。」

雪見は宇都宮を偲ぶための席で、私事で騒ぎになってしまったことを、とても気にしてた。
しかも三月以降の話は、自分一人で解決しなければならない。
取りあえず名刺は預かったものの、どうしたら良いのかわからなかった。

「はぁぁ…。」

名刺の束を手にしたまま、雪見が深いため息をつく。
歌う時間がどんどん近づいてくるのに、それどころじゃない気分だ。
それに気付いて小野寺が、冷えた白ワインを二つのグラスに注いで持ってきた。

「まぁ、飲め！一躍有名カメラマンになった浅香雪見に乾杯だ！
あ、『乾杯！』は小さい声でだぞ！また当麻みたいにヒンシュク買うからなっ！」
小声で小野寺が言ったあと、健人と当麻が「俺も！」とグラスを持って寄ってきて、
結局今野も含め五人が輪になった。

「雪見。これが宇都宮さんの遺言だったんだぞ、きっと。」

「えっ？」

「みずきの不思議な前振りの意味が、これでわかった。
きっと宇都宮さんはこうなる事を狙って、みずきにお前を紹介させたんだ。
『今までありがとう。そしてこれからも、みずきをよろしく頼む。』って。
宇都宮さんからお前への、お礼のプレゼントだよ。」
そう言われた瞬間、宇都宮と最後に会った時に言われた不思議な言葉を思い出した。

『お礼に一つ予言しよう。君はこの先必ず人気のカメラマンになる！この私が言うんだから間違いない。』

あの時は『予言』と言った意味がわからなかった。
もしかして、みずきの父だから、みずきと同じ不思議な能力を持っているのかとさえ思った。
だがあの時すでに、このプレゼントを宇都宮は用意していたのだ…。
そう気付いた途端、雪見の瞳からは涙がポロポロと溢れては落ちた。

「皆さん、いつでもいいからとおっしゃって下さったじゃないか。ゆっくり考えればいい。でも俺は、せっかく宇都宮さんからの最後のプレゼント、有り難く頂戴すべきだと思うがな。まぁ取りあえずは乾杯だ！」

「乾杯！」

四人が小声で雪見を祝福する。そこへみずきがやって来た。

「どう？楽しんでます？ゆき姉、もうすぐ出番だからお願いね。」

「みずきさん、さっきはごめんなさい！お別れの会とは関係ない事で騒がせてしまって…。」

「あらっ、何のこと？私、テーブルを回って歩くのに必死で、全然周りを見渡す余裕なんてなかったわ。まるで結婚式みたいね！でもお父さん、喜んでると思う。」

そう言ってみずきは、遺影ではなく会場の右上を見上げた。

「あ！そうだった！宇都宮さん、いる？」

「いる、いる！満足そうな顔して会場を見渡してるわ！」

「そう！良かった！じゃ、私も頑張っていい歌聴かせなきゃ！」

二人の会話に、小野寺と今野がギョッとする。

さっきまで歌う意欲もなかった雪見が、いきなりやる気満々になったのがリアルに怖かった。

「ま、まぁ、最後の大トリだ！しっかり歌ってこい！」

小野寺がそう激励して雪見を送り出す。

まもなくアナウンスが流れ、室内管弦楽団が入場。音合わせを始める。
そこに雪見も加わり、簡単な打ち合わせをしてからいよいよ本番だ。
歌う前に雪見が、落ち着いた声で挨拶をした。

「皆様、今日は歌の大好きだった宇都宮さんのために、私が代表してこの歌を捧げます。
『涙そうそう』です。よろしければ皆様もご一緒にどうぞ。」

ざわつきがおさまった会場に壮大な前奏が流れ、雪見が瞳を閉じる。
歌い出してすぐに、会場内にどよめきが起こった。
聴く者の心を揺さぶる魔法のような歌声に、いつしか皆涙を流し手を合わせ、
そして宇都宮の冥福を祈る。

一足早く『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ;』がデビューした瞬間だった。

当麻がバレたっ！

「おい、雪見っ！いい加減帰るぞ！いつまでもそんなとこ座ってたら、
ここの人が後片付けできないだろっ！」
小野寺が急かすように言ったが、雪見は参列者が帰った後のだだっ広いホールに、
ただボーッと座り込んでいた。

歌い終わった後の歓声が、まだ耳に鳴り響いてる。
みんなに握手された手のぬくもりも、参列者が帰り際にかけてくれた誉め言葉も、
すべてが夢の中の出来事に思えた。

「ゆき姉、帰ろ！さぁ、立って。」
健人が雪見の腕をつかみ、立ち上がらせる。

歌い終わった後に乾杯責めにあったので酔ってるせいもあるが、今頃になって
宇都宮がくれたプレゼントの重さをずっしり感じ、歩き出した途端よろけてしまった。

「おい、大丈夫かよ！でもあんだけお酌されて全部飲んで返すんだから、恐れ入ったわ。
お前のキャッチコピー、作り直すか？
『地上に降りたマリア』じゃなくて『地上に降りた酔いどれ天使』に。」

「常務！『天使』は無理がありますよ！天使は。」

今野が真に受けて全力で否定する。

「冗談に決まってんだろ！あれっ？当麻のやつ、先に帰ったのか？」
小野寺がキョロキョロと辺りを見回して「さっきまでそこにいたのに。」と首をひねる。

「あ…。あぁ、マネージャーの豊田が迎えに来たのかなっ？」
本当はみずきのいる控え室に行ったのだが…。

「じゃ、俺も帰るぞ！宇都宮さん、ご馳走様でした！いいお式でしたよ。」
小野寺はホールを出る前にもう一度振り向き、遺影に向かって一礼した。
「お疲れっ！」とタクシーに乗り込む小野寺を見送り、今野と健人はホッとする。

「どうにかバレないで済んだな、当麻。」

「あっ、はい！良かったです！ヒヤヒヤもんだった…って！
えーっ！？今野さん、知ってたんっすかぁ？」

「アホかっ！当麻は分かりやす過ぎだわっ！ほんっと、直球しか投げないよな、あいつは。
多分常務だって気付いてるよ。みずきがこんな時だし、気付かない振りしてるだけさ。
まぁあの人は他のお偉方と違って若いだけに、恋愛に関してはある程度は寛容だよ。
お前達に対してもな。」
立ったまま寝てるのか、健人にもたれ掛かる雪見を見ながら今野が言う。

「事務所は『ＳＪ』と『ＹＵＫＩＭＩ&ａｍｐ;』を、これから全国ツアーに向けて、
ワンセットで売り込んでいくだろう。
お前達一緒の現場が増えるんだから、常にマスコミの目は気にしとけよ！
ま、お前達には親戚同士っていう隠れ蓑があるから、それほど俺も心配はしてないが
問題はあいつだ！当麻！みずきとの関係が知れたら、それこそ世界中が大騒ぎになるぞ！
お前からもよく言い聞かせておけよ！相棒なんだから。
じゃ、俺も帰るわ。お疲れっ！」
今野も、斎場入り口に停車してるタクシーに、少しふらつく足で乗り込み帰って行った。

「ゆき姉、俺らも帰ろう。あ、控え室に顔出してった方がいいか！
いや…やめとこう。へんなシーン目撃しちゃったら困るし…。」
そう独り言を言いながら健人はケータイを取り出し、当麻に「先に帰るから」と送信する。
健人と雪見がタクシーに乗り込んだ時、外はマスコミもすでに撤収し、
斎場周りは静けさを取り戻していた…かのように見えた。だが…。

「ちょっと大変！起きて健人くん！早くっ！」

翌朝５時。雪見に叩き起こされた健人が、寝ぼけ眼でパソコン前に座らされる。
何事かと目をこすりながら眼鏡を掛け、モニターに映し出された画像を見て一瞬で目覚めた！

なんとそこには、仲睦まじく見つめ合い、手をつないで斎場からタクシーに乗り込む
当麻とみずきの姿が、大写しになっているではないか！

「な、なんだよこれっ！！どこに撮られたんだよっ！スポーツ紙？」

「この距離と角度からすると、間違いなく写したのは後ろに並んでたタクシーの中ね…。
運転手側からの角度じゃないから、多分助手席側にマスコミが乗ってた可能性が高い。」
雪見がカメラマンの目線で冷静に分析した。

「どうすんだよ…。当麻に連絡したっ？」

「それが電話にもメールにも応答がないの。早く連絡ちょうだいって入れておいたけど…。」

「まずい事になったぞ…。どうしよう。事務所はどう対応するんだろ…。」
二人とも思考回路が停止して、何から先に考えたらいいのか分からない。
ほんの七時間ばかり前に今野が言ってた事が、こんなにも早く現実になるなんて…。
健人と雪見の間に、時間だけが無意味に流れていった。

その時だった。健人のケータイに電話が入る。「当麻だっ！」

「お前っ！今どこにいんだよっ！インターネット見たか！？
お前とみずきの写真、もう世界中に配信されてんだぞっ！」
健人が興奮気味に、早口でまくし立てた。

だが当麻の声はそれとは真逆に、ひどく落ち着き払ってる。

「知ってるよ。もう事務所とも話した。
俺、今みずきと一緒に斎場にいるの。昨日ここに泊まったんだ。
あ！俺だけじゃないからね。みずきのじいちゃんとか、宇都宮さんのマネージャーさんとか。」
当麻は大先輩津山泰三の事を「みずきのじいちゃん」と表現した。

「宇都宮さん、親戚一人もいないんだって。いないと言うか、縁を切ったと言うか…。
でね、今日は本当に内輪だけで最後のお別れをして、出棺するんだ。
俺もみずきと一緒に、火葬場まで行って来るから。
一晩中宇都宮さんの前でみんなで飲み明かしたから、全員二日酔いなんだけどねっ。
あの写真は、二人で買い出しに行くところ。
健人…。俺、健人や事務所に迷惑かけるけど、二人の関係、正式に発表するから。」

「ええっ！？マジで！マジでマスコミに発表すんのっ！？」
健人が雪見の顔を見た。

「うそっ！そんな事して当麻くんとみずきさん、大丈夫なのっ！？」
雪見が当麻に聞こえるように、大声で言う。

「大丈夫だよー、ゆき姉っ！ゆき姉にも迷惑かけるかも知れないから、先に謝っといて。
俺ね、バレたらすぐに発表するって決めてたから。別に隠そうとも思ってなかったし。
約束したんだ、みずきと。俺がお前をちゃんと守って行くから、って…。

なーんちゃって！ちょっと恋愛ドラマっぽかった？今の。」

「お前なぁ～！こんな時に！まぁ当麻らしいっちゃ当麻らしいか…。
そんな奴だよな、お前って。いつも真っ直ぐ、自分の思った方向に進む。
ぐちゃぐちゃ悩まないのが当麻だもんな！
時々お前の性格が羨ましくなるよ、俺と正反対で…。
ま、みずきに付いてるなら安心した。後は任せたからうまくやれよ！」

そう言って電話を切った後、健人は心配そうな雪見の頭を撫でてやった。

大丈夫！俺もゆき姉を守るから…。

お似合いの二人

案の定、その日は朝から大変な騒ぎとなった。
テレビはどのチャンネルも、当麻とみずきの話題で持ち切りで、宇都宮の葬儀の模様と共に
芸能トップニュースとして、かなりの時間を割いて報道されている。
しかも生中継で、斎場の外から宇都宮の出棺の様子が映し出され、
勿論そこには
みずきをいたわる当麻の姿も、はっきりと見て取れた。

健人が仕事に出掛けた後のリビングで、あちこちチャンネルを換えながら
ドキドキして見守っていた雪見は、どの報道も二人を祝福するものであったことに安堵する。

『良かった…。今の時点では大丈夫そうだ。でも凄いな、当麻くん。中継されるの分かってても、あんなに堂々としてるんだから…。みずきさんが羨ましい。』
すっかり冷めてしまったカフェオレを口に運びながら、ふと、そう思ってる自分に慌てた。

『人は人、自分は自分でしょっ！』そう心の中で言い聞かす。
だが、一度頭をもたげてしまった感情は、おいそれとは引っ込んではくれなかった。

公に祝福される恋人と、公に出来ない恋人と…。

『みずきさんと私とじゃ、立場が違い過ぎるんだから！
あの二人は誰も文句の付けようもない、人も羨むビッグカップルな

の！
それに引き替え私は、元々が無名のフリーカメラマンだし、健人くんの親戚だし、
それに…一回りも年上だし。つり合わなくて当然なの。』

今まで常に考え続けてきた。自分が健人にふさわしいのかどうかを。
でも、何度考えた所で答えが変わる訳ではない。
あんなアイドルの彼女が私でいいわけないのは、始めから気付いてた…。

だけど…今は別れたくない。
つい最近までは、健人のためなら身を引こうと心の隅っこで思ってた。
でも今は、一緒に暮らして健人を知れば知るほど、離れたくない気持ちが強まる。
ずっと健人を支えていきたいとも思う。
じゃ、どうすればいいんだろう。どうすればつり合いが取れるんだろう…。

そうだ！私が努力して、世間に認めてもらえる人になればいいんだ！
健人くんが堂々と、自慢できる彼女になればいいんだ！
どうやって…？

『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ；』を頑張って、人気者にすればいいんじゃない？
ついでにカメラマン浅香雪見でも、知名度を上げればいいんじゃない？
せっかく宇都宮さんがくれたプレゼント、そのまま押し入れにしまい込むのは
もったいないよね。昨日もらった名刺の束、どこやったっけ？

雪見はこの時初めて、デビューできる事を心から喜べた気がする。
これは神様と宇都宮さんが、私にくださったチャンスだ！
そう思うと、何としてでもこのチャンスを生かし、必ずや健人にふさわしい人に
なってやるぞ！と心に決めた。

その日のお昼前。雪見は事務所のスタッフ大勢と共に、会議室のテレビモニター前にいた。
今日１２月１日午後１２時、いよいよ『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ;』と『ＳＰＥＣＩＡＬ　ＪＵＮＣＴＩＯＮ』
デビュー曲のＰＶが配信スタートとなる。
本当のデビューはまだ一ヶ月先ではあるが、これが実質デビューと同じ意味合いを持つだけに、
雪見は勿論の事、それを支えてきたスタッフ一同、緊張の面持ちでその時を待っていた。

「あっ！ＳＪだっ！！」
最初に流れたのは健人と当麻のデビュー曲『キ・ズ・ナ』である。
シーンと静まり返った会議室に二人の歌が響き、モニターの中でかっこいい二人が踊る。
そこに、軽井沢ロケで撮影した雪見の映像が映し出されると、みんなが一斉に
「雪見さん、カッワイイッ！！」と大騒ぎ。
続いて始まった『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ;』のＰＶに至っては、森の女神のような雪見の姿に
「キャーッ！綺麗過ぎるぅ！」と悲鳴に近い声まで上がった。
雪見も、今日初めて映像として見る自分の姿が、不思議でならない。

そこで演技してるのは確かに自分のはずなのに、ここにいる自分とはまったく違って見えた。

「凄いねぇ！映像って。写真だとありのままが映し出されるのに、こうやって編集されると
私でも二十代に見えちゃう！ってことは、このＰＶ見た人が実物を見ると
ガッカリするってこと！？罪作りなＰＶだぁ！」
雪見が肩をすくめてそう言うと、みんなは笑って「大丈夫ですよっ！」
と言ってくれる。
本当に大丈夫になれるよう、これからは真面目にお肌の手入れをしなくっちゃ！

みんなで興奮覚めやらず盛り上がっているところに、知らせが入る。
「これから当麻くんとみずきさん、ツーショット会見するって！」
「うっそーっ！！」

慌ててチャンネルを切り替え、テレビの前にかじり付く。
すると火葬場から出てきた二人が、揃って報道陣の前に姿を現した。
みずきの腕の中には白い木箱が抱かれている。
報道陣に向かって一礼し、すべてが滞りなく終ったことを報告し、お礼の言葉を述べた。
そこから先は当麻が、みずきを気遣いながらも臆することなく、はっきりとした言葉で
二人の交際を宣言した。

「はい！僕らが付き合いだしたのは、間違いありません。
宇都宮さんが亡くなる四日前に、僕から言いました。
だから本当にスタートしたばかりなんです。これから大事に二人の

仲を育てて行きたいので、
どうか皆さん、温かく見守ってやって下さい！」
そう言って二人でお辞儀した後、「失礼します！」と当麻がみずきの肩を抱きながら、
フラッシュの海をかき分けて車に乗り込んだ。

その様子を固唾を呑んで見守った会議室のスタッフから、割れんばかりの拍手が湧き起こる。
「めっちゃ男らしかった！これで当麻くんの株が、ますます上がったんじゃない？」

「ほんと！どうなっちゃうのか心配でたまらなかったけど、爽やかで男らしくて
マイナスイメージが一つも見当たらなかった！」
一同、ホッと胸をなで下ろしながら、再びそれぞれの持ち場に戻って行った。
雪見は一人残された会議室で、今見たばかりの二人の姿をボーッと思い出す。

本当にお似合いの二人だったな…。
いつか私もあんな風に、堂々と世間の前に出られる日が来るといいな。

よーしっ！今日からさっそく、行動開始だ！

次への扉

トントン！「浅香です！入りますっ！」
雪見は、小野寺のいる取締役室のドアをノックした。

「おぅ！昨日はお疲れっ！珍しいな。呼び出してもないのに、お前から俺んとこ来るなんて。
事務所で聞いてきたか？朝からお前に仕事の依頼が殺到してるって。
カメラマンの仕事、今は無理だって言ってんのになぁ！」

「その事なんですけど…。私…受けちゃダメですか？写真の仕事！
せっかく宇都宮さんが作ってくださったチャンス、無駄にするのは
申し訳ない気がして…。
私、宇都宮さんの写真を撮らせて頂いた事で、少し自信が持てたんです。
ずっと自分の中で、ポートレートは苦手意識があったのに、それを
宇都宮さんが
取り除いてくれたんです。
だからこの感覚を忘れないうちに、一人でも多くの人を写してみたくなって！
あの…歌の活動には支障がないようにやります！事務所にはご迷惑をかけません！
どんなに忙しくても、両方きちんとこなします！
だから…どうかお願いしますっ！！」

雪見はありったけの思いを込めて、小野寺に頭を下げた。
いきなり早口でまくし立てられ、呆気にとられた小野寺だったが、
少しの間を置いて
フフッとため息混じりに笑い出す。

「お前って奴は、相変わらずだなぁ！まさに猪突猛進ってやつだ。
健人とはまるっきり正反対。当麻タイプだな。
見たか？当麻の会見！こっちが朝から、てんてこ舞いで対応に追われてんのに
あいつときたらどこ吹く風で、みずきを守る事だけにまっしぐらだ。
お前も健人のために……いや、やめとこう。」

「えっ？」

「何となく、そう言い出すような気がしてたよ。
お前の言う通り、このチャンスは宇都宮さんからのプレゼントだ。
三月過ぎまで待たずに動き出した方が、良いかもしれない。
お前が本当にやりたいって言うなら、事務所が受ける仕事としてきちんと
マネジメントしてやる。
その代り、かなりハードなスケジュールになる事は覚悟しとけ！
そうと決まれば早速打ち合わせだ！今野を呼ぼう。」
小野寺はすぐに内線電話で今野を呼び出し、スケジュールの調整や
仕事の契約など、
三人で今後についてを細かく話し合った。

一段落つき、お茶を飲んでホッとする雪見に今野が言う。
「ほんっとお前には、出会った時からずっとこんな調子で、驚かされっぱなしだな！
お前がここに乗り込んで来た日を、よーく思い出したよ。
常務。俺も忙しくなるんで、健人の方は及川に完全に任せる事にします。
あいつも独り立ちして大丈夫なくらい、育ちましたから。」

「そうだな。そうしてくれ。じゃ、あとは頼んだぞ！
雪見！どうせやるなら、とことんやってビッグになれ！わかったなっ！」

「はいっ！」

また一つ、自分自身で扉を開こうとしている。
この扉の向こうには、一体何があると言うのだろう…。

事務所で打ち合わせ後、『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ；』として三つの取材をこなし、二つの新聞社を回った。
その間、今野と共に、昨夜真っ先に名刺をくれた大手プロダクション、
渡部エンタテイメントに立ち寄り、写真集撮影の契約を取り交わす。

「いやぁ、昨日の時点で半分諦めてましたよ！常務さんがああ言うなら仕方ないかってね。
それがこんなに早くお引き受け頂けるとは、夢のようだ！」
小太りな営業部長が、営業マンらしい笑顔を作って大袈裟な事を言う。

「いえ、私たちも仕事をお受けするのなら、真っ先にお声を掛けて頂いた
こちらから順にお引き受けするのが筋だろうと…。」
今野が笑顔で応戦した。

「ありがとうございます！で、今回お願いしたいのは、こいつの写真集なんです。

今うちの事務所一押しの俳優、苅谷翔平です！」
そう言って、事務所の公式プロフィールと資料を差し出した。
拝見します、と雪見がプロフィールに目を通す。

「あ！この人！健人く…いや、うちの斎藤健人とよくご一緒する…。」

「そうです！よくご存じで！
斎藤健人さんがお宅の事務所の筆頭イケメン俳優なら、この苅谷翔平は
うちの事務所の一押しイケメン俳優でしてね。
今の波に乗って、ガンガン押して行きたい所なんです！
それで三冊目の写真集のカメラマンを選考していた所に昨日、宇都宮さんの
ご葬儀で写真展を拝見しまして。これはっ！とひらめいたわけです。
あなたの写真だけ、他のカメラマンと目線が違う気がした。」
営業部長が口角泡を飛ばしながら、熱く力説するが…。

「あぁ、それは私がきっと元々が猫カメラマンだからでしょう。
どうしても無意識のうちに、癖で猫目線になってたりするんです…。」

雪見はこの話しに、あまり乗り気ではなかった。
撮影対象が苅谷翔平だと判っていたら、ここには来なかったかも知れない。
翔平はあまりに健人と近すぎて、何故か写してはいけないような気がした。

隣の今野にも、なんとなく雪見のテンションから気持ちが伝わって来る。

だが、受けると答えてしまった以上、ここで断るわけにはいかない。
相手は、最も多くの仕事を組む大手芸能プロだ。
この仕事一つで関係をこじらせるわけには、断じていかなかった。

「わかりました！じゃあカメラマンはこの浅香雪見という事で、よろしくお願いします！」

「ありがとうございます！では早速この契約書にサインを！」

詳しい打ち合わせを終え、帰り道にスーパーで買い物をしてからマンションに戻る。
ずっと考え事をしながら夕食の支度をしていた。

『健人くんは何て言うかな…。翔平くんの写真集を私が撮るって伝えたら。
ビックリするよね、きっと。嫌な気持ちにならないかな…。
それに、健人くんのライバルに手を貸すことになるんだよね、私…。
いやダメダメっ！そんなこと思ってちゃ！もう契約は結ばれたんだ。
仲介してくれた宇都宮さんの顔に泥を塗らないように、しっかりと仕事しなくちゃ！
すべては健人くんのため！自慢の彼女になるためでしょっ！
しっかりしろ、雪見っ！』

気合いを入れ直しているところに、健人が帰って来たっ！

言えない本心

「お帰りーっ！あれっ？なんか凄い疲れた顔してるよ！一緒にお風呂、入ろっか？」
玄関先に腰を下ろしブーツの紐を解いてた健人の背中に、挙動不審な雪見が飛び付いた。

「えっ？なんで？なんかあったの？」
驚いたように健人が振り向き、雪見の顔をマジマジと見る。

「あ…いや、別にっ！じゃご飯にしよう、ご飯！ちょうど今出来上がったとこなんだ！
グッドタイミングだったよ。今日は寒いからキムチ鍋！」

うーん！どのタイミングで翔平くんのこと話せばいいのか、わかんない！

手を洗い、コンタクトを外した健人が食卓についたところで、まずはビールで乾杯！
「お疲れ様っ！今日は私もめっちゃ忙しかったよー！
『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ；』として雑誌の取材が三件に新聞社回りを二軒して、カメラマンの仕事…で…。」
最初の勢いのまま、最後までサラッと流そうかと思ったのに、途中で失速してしまった。

「なに？カメラマンの仕事って。なんか今日のゆき姉、変だよ。
自分からお風呂誘う事なんてないのに誘ってみたり、ずーっと喋ってるし…。
なんかあったの？もしかして…昨日の仕事受けることにしたの？」

「えっ…？」

「だって及川さん、帰り際に『今野さんが忙しくなるから、明日から俺が完全にチーフマネージャーだから。』って…。忙しくなるって、ゆき姉の仕事が、って意味だったんだ…。」

健人の顔が少し険しくなった気がした。

「ごめん…。ちゃんと話す…。あのね…。また突然思い立っちゃって、常務にお願いに行ったの。昨日の仕事、やらせて欲しいって…。」

「なんで？三月一杯は無理だって言ってたのに。絶対にこれから忙しくなるんだよ。もうツアーの準備も始まるし…。」

健人は、感情的にならないようかなり自分を抑えて、淡々と話そうとしてるのが雪見にはわかった。

今までならもっと語気を強めて不機嫌さを露わにしたが、少し大人になったかなと思う。

だが、翔平の写真集を写すと聞いても、同じ態度でいられるかと言ったら多分それは違うであろう。この先に話を進めるのは気が重い…。

「忙しくなるのは判ってる。でも、どうしても宇都宮さんが作ってくれたチャンスを無駄にしたくないと思ったんだ。みんな三月過ぎまで待つって言ってくれたけど、そんな先の事わか

らないじゃない。
三月には相手の気が変わって、誰か違うカメラマンに仕事を頼んでるかも知れないし、
私に意欲が無くなってるかも知れない。だから、今やらなくちゃ！って…。」

「それだけ？」

「えっ？」

「理由はそれだけ？なんか違う気がする。
あんなに猫カメラマンに戻るのを楽しみにしてたのに、なんでいきなり気が変わったの？」

「え…と、それは…。」

本心を伝えるべきか迷った。
カメラマンとして成功して、『ＹＵＫＩＭＩ＆ａｍｐ;』としても成功して、堂々と健人がみんなに自慢できる彼女になりたい。みずきのように…。

でも…言えない。
そんな事を白状したところで、優しい健人はこう言うに決まってる。
「今のままのゆき姉が好きなんだから、それでいいじゃん！」って…。
だけど、それじゃダメなの。それじゃ…。

「それは…ね。そう！健人くんの次の写真集を撮るために、もっとポートレートの

経験を積んで、勉強しておきたいなと思って！
ほら、こういうのって感覚忘れないうちに、とんとんと間を空けないでやった方が
絶対身に付くでしょ？だって、今回よりもっといい写真集作りたいもん！」
雪見はまったくの思いつきで話してた。
次の健人の写真集なんて、考えた事もなかったのに…。

「ほんとっ！？また俺の写真集、ゆき姉が撮ってくれるの！？
やったっ！俺、三月過ぎてゆき姉がうちの事務所辞めたら、もうそんなの無理かと思ってた！」

健人の顔がパッと明るくなって、いきなりテンションが上がったのがわかる。
勝手に撮るなんて言っちゃったけど、事務所で撮らせてくれるかなぁ？
また必死で頼み込まなきゃならなくなった！
でも仕方ない。じゃないと、翔平の事を言えるような雰囲気ではなかったのだから…。

「あのね、それで常務とも話し合って、仕事を引き受けるならまずは昨日真っ先に、
名刺をくれたとこから受けるのが筋だろうって。
で、今野さんと二人で渡部エンタプライズに行って来たんだ。めっちゃ大きい会社だった！」

「へぇーっ、そうだったんだ！で、誰の写真を写すの？」
健人がキムチ鍋を頬張り、ビールを飲み干してから核心に迫ってくる。
雪見も覚悟を決めて、ビールをグイッと飲み干した。

「苅谷翔平くんだって！ビックリでしょ！　？
あんな今人気のイケメンくんを、私が任されたんだよっ？驚いたのなんのって！
あ！もちろん健人くんの方が、百倍はイケてるから安心してねっ！」

努めて軽く話したつもりだった。
だが健人の表情が『苅谷翔平』という名前を耳にした途端、一瞬ですり替わったのを
雪見は見逃しはしなかった。

「えっ！？翔平の写真集をゆき姉が撮るの？うそっ？マジでぇ！
俺、一月からのドラマで翔平と一緒なんだけど！」
精一杯の作り笑顔で言ってるのが雪見には判った。
テレビの中の健人は演技が上手いのに、今の健人は中途半端な演技だな…。

「えーっ！そうなんだ！すっごい奇遇だね！
翔平くんも忙しいから、どこかで全面ロケしてって撮影は無理っぽいんだよね。
だから私が現場に出向いて、翔平くんの仕事の合間のオフショットとか
休憩時間に近くの公園かなんかで撮るとか、そんな形になるんじゃないかな。
…って事は、私も健人くんの現場について行けるって事だ！やったねっ！
そんでツアーのレッスンとかも一緒だから、忙しくてもずーっと一緒に
いれるんだねっ！めっちゃ嬉しいっ！」

雪見は最大限に喜んで見せた。本当はそんなに嬉しくもなかったけど…。

いや、嬉しいのは確かに嬉しいはずなんだが、今回に限っては健人と同じ

現場というのは、都合が悪い。仕事がやりづらい。健人の目が気になる。

すべては雪見の勝手な想像ならよいのだけれど…。

だが健人の顔を見る限り、想像ではないことは明らかだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8801q/

アイドルな彼氏に猫パンチ@

2011年11月23日10時47分発行